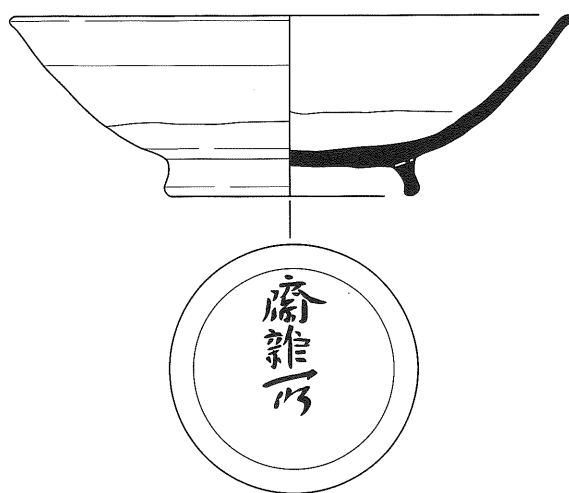


平安京右京三条二坊十五・十六町

－「齋宮」の邸宅跡－

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊



2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



園池全景（北から）



1 泉1全景（北西から）



2 泉1および池1北部（北東から）



1 池1西岸部洲浜（南から）



2 池1全景（南東から）



園池南西部（池1・溝2・池2 北東から）



第1次調査 押小路および野寺小路川（北西から）



池1出土輸入陶磁器（白磁）



池1出土土器（緑釉陶器・灰釉陶器）



「齋宮」墨書土器



「齋維所」墨書土器



「齋舍所」墨書土器



平安京右京三条二坊十五・十六町

－「齋宮」の邸宅跡－

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

京都市立西京商業高等学校では現校舎の老朽化にともない設備の充実のために、校舎の全面的改築を計画されました。それは敷地北部の運動場を校舎の新築予定地にあて、南部の現校舎は新校舎の完成後には取り壊し、その跡地を運動場に整備しようとするものでありました。同校の敷地は平安京の条坊地割りの上では、右京三条二坊十五・十六町に想定され、京内遺跡の存在が推定されますところから、これまでに発掘調査、試掘調査、立会調査など数次にわたり実施され、それぞれ注目すべき成果を挙げています。今回の改築計画で新校舎の建設予定地は上の十六町のほぼ全域と十五町の一部にあたりますところから、事前の発掘調査を実施することになり財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託されました。同校敷地内の既往の発掘調査は1981年の十五・十六町の第1次調査、1987年の十五町の第2次調査が実施されております。今回の調査は十六町の第3次調査、十五町の第4次、第5次調査として1999年7月に着手し、断続的に2001年3月まで実施しました。

本報告書は第3・4・5次調査における調査の全容について報告するものでありますが、併せて第1次、第2次調査報告を収録しています。

十六町のおよそ一町四方を敷地とし、南北に長く広がる園池とその周辺に所在する建物群からなる9世紀末から10世紀初めころの邸宅遺跡を検出することができ、出土土器の墨書から斎宮に関連した邸宅跡と推定考察されますことなど、遺構ならびに多くの出土遺物の整理・分析を通して明らかにしています。

この調査の実施ならびに本報告書の刊行に際して、関係の各方面の多くの方々からご指導、ご助力をいただきましたことに厚く感謝いたします。そしてとくに京都市教育委員会、京都市立西京商業高等学校の関係各位の深いご理解とご支援いただきましたことを記して感謝の意を表したいとおもいます。

2002年12月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市中京区西ノ京東中合町1に所在する京都市立西京商業高等学校で実施した、平安京右京三条二坊十五・十六町、西ノ京遺跡の発掘および試掘調査の報告書である。発掘調査は第1次調査が1981年7月3日から開始し、同年7月31日に終了した。第2次調査が1987年5月18日から開始し、同年6月9日に終了した。第3次調査は1999年7月3日から開始し、2000年8月30日に終了した。第4次調査は第3次調査期間中に実施している。第5次調査は2001年1月29日から開始し、同年3月14日に終了した。
- 2 図中の方位・座標値は、日本測地系(改正前)の平面直角座標系Ⅵによる。ただし、単位(m)を省略している。標高は、T.P.(東京湾平均海拔高)による。遺跡の測量基準点設置は、第1・2次調査が調査部 調査課 辻 純一、第3～5次調査が調査部 資料課 宮原健吾が行なった。
- 3 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図(1/2,500)「山ノ内」を調整して使用した。また、図1は国土地理院発行の『2万5千分1集成図 京都』を調整して使用した。
- 4 本書中の写真は、本調査を調査部 資料課 村井伸也・幸明綾子が撮影し、遺構の一部は調査担当者が撮影した。第1次調査・第2次調査の写真は、牛嶋 茂(現奈良文化財研究所)が撮影した。
- 5 本書中の土色名は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局 日本色研事業株式会社 1967年)を使用した。
- 6 本書の編集は、調査部 調査課長 鈴木久男の指導のもと、鈴木廣司、網 伸也が行ない、調査部 第4係長 辻 裕司が最終調整を行なった。本書の原稿執筆者は、以下の通りである。
川上 貢：第5章－第4節
鈴木久男：第5章－第3節
鈴木廣司：第1章－第1・3・4節 第2章－第1節1・2(2)・4・第3節 第3章－第1節3～6・第3節2～4 第5章－第2節
網 伸也：第2章－第1節2(1)・2(3)～(5)・3・第2節 第3章－第1節1・2・第2節・第3節1・第4節 第5章－第1節 第6章
清藤玲子：第1章－第2節
金原正明(第4章 株式会社古環境研究所)、新木直人(付章－第1節 賀茂御祖神社宮司)、西山良平(付章－第2節 京都大学教授)、の各氏には玉稿を賜わった。
- 7 本書の図79で使用した絵画資料は、『紫式部日記繪巻』日本絵巻全集第12巻(角川書店 昭和36年発行)から、同社の承認を得て調整して使用した。また、図85で使用した写真は、

『本派本願寺名所圖會』(博文館 明治35年発行)から転載した。

- 8 金属製品の鑑定は、久保智康氏(京都国立博物館)に依頼した。石製品の鑑定は、橋本清一氏(京都府立山城郷土資料館)に依頼した。木製品の材質鑑定は、北野信彦氏(くらしき作陽大学)に依頼した。なお、金製品の分析は、株式会社堀場製作所に依頼した。
- 9 発掘調査および報告書作成に際し、下記の方々からご指導・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表する次第である(五十音 敬称ならびに所属機関名省略)。

個人

秋山 虔、浅野次郎、尼崎博正、天野幸弘、池内克史、泉 雄二、井上満郎、猪熊兼勝、今泉隆雄、岩城清一、上田正昭、上原真人、上村安生、植山 茂、牛川喜幸、榎村寛之、大川勝宏、大橋泰夫、大脇 潔、小野健吉、尾野善裕、柿田祐司、加藤充彦、金子裕之、川北靖之、川尻秋生、河内一浩、姜 賢貞、岸本直文、京楽真帆子、高 正龍、坂井秀弥、坂本範基、白幡洋三郎、末永成清、杉本 宏、鈴木嘉吉、鈴木忠司、高島英之、高瀬要一、武田佐知子、辻 広志、角田文衛、鶴田晴徳、所 功、土橋 誠、仲 隆裕、中島恒次郎、中村 一、西宮秀紀、西山良平、韓 盛旭、坂野和信、樋口隆康、昼間孝志、藤田勝也、増淵 徹、松井 章、三宅敏之、村井康彦、本中 真、山口 博、山路直充、山田邦和、山中 章、吉田 欽、吉野秋二

機関

賀茂御祖神社(下鴨神社)、京都国立博物館、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市立西京商業高等学校、京都市文化市民局、斎宮歴史博物館、文化庁

目 次

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 既往の調査	3
1 右京三条二坊域の発掘調査	3
2 右京三条二坊域の試掘・立会調査	6
第3節 十五町・十六町の調査経過	8
1 十六町の発掘調査	8
2 十五町・十六町の発掘調査	10
3 日誌抄	11
4 発掘調査体制	15
5 遺跡の測量	15
第4節 報告書作成の経緯	18
第2章 遺 構	19
第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)	19
1 遺跡の層序	19
2 平安時代中期の遺構	20
(1) 1区の遺構	20
(2) 2・3区の遺構	23
(3) 4区の遺構	34
(4) 5区の遺構	40
(5) 6区から8区の遺構	40
3 平安時代後期の遺構	41
4 室町時代から江戸時代の遺構	47
第2節 右京三条二坊十五・十六町の調査(第1次調査)	48
1 基本層序	48
2 平安時代中期の遺構	48
3 平安時代後期の遺構	50
4 室町時代から江戸時代の遺構	51
第3節 右京三条二坊十五町の調査(第2・4・5次調査)	52
1 第2次調査	52

(1)基本層序	52
(2)平安時代の遺構	52
(3)室町時代から江戸時代の遺構	53
2 第4・5次調査	53
(1)基本層序	53
(2)平安時代の遺構	53
(3)室町時代から江戸時代の遺構	55
第3章 遺物	57
第1節 平安時代中期の遺物	57
1 瓦類	57
(1)軒丸瓦	58
(2)軒平瓦	59
(3)丸瓦・平瓦	60
2 土器類	61
(1)池1出土土器	63
(2)他の園池遺構出土土器	68
(3)井戸1・井戸3出土土器	69
(4)井戸2出土土器	70
(5)建物関係遺構出土土器	70
(6)墨書土器・転用硯	71
(7)十五町出土土器	72
3 土製品	73
4 石製品	74
5 金属製品	75
6 木製品	75
(1)池1出土木製品	75
(2)井戸1・井戸2出土木製品	77
第2節 平安時代後期の遺物	78
1 瓦類	78
2 土器類	78
第3節 室町時代から江戸時代の遺物	79
1 土器類	79
2 石製品	79
3 木製品	79

4 錢貨	81
第4節 古墳時代以前の遺物	81
第4章 自然遺物の環境考古学分析	85
第1節 花粉分析	85
1 原理	85
2 試料	86
3 方法	86
4 結果	86
5 花粉分析から推定される植生と環境	88
第2節 種実同定	90
1 原理	90
2 試料	90
3 方法	90
4 結果	90
5 種実同定から推定される植生と環境	94
第3節 樹種同定	96
1 原理	96
2 試料	96
3 方法	96
4 結果	96
5 樹種同定における所見	101
第4節 珪藻分析	104
1 原理	104
2 試料	104
3 方法	104
4 結果	104
5 珪藻分析から推定される堆積環境	106
第5節 考察	107
1 植生と環境	107
2 池の周囲の植栽	107
3 池とその周囲の環境	107
4 まとめ	108
第5章 考察	143

第1節 平安時代中期の邸宅	143
1 邸宅の規模について	143
2 邸宅の造営時期について	144
3 邸宅の変遷と存続期間について	145
4 邸宅の建物構成について	145
5 庭園史からみた十六町庭園	147
6 「齋宮」墨書土器について	148
7 邸宅外の道路	149
第2節 邸宅廃絶後の土地利用	151
1 平安時代後期の宅地	151
2 室町時代以降の耕作地	153
第3節 右京三条二坊十六町の庭園遺構について	157
1 池の水	157
2 泉について	157
3 洲浜の玉石	158
4 遺構配置	158
5 平城京左京三条二坊六坪庭園遺構との比較	158
第4節 右京三条二坊十六町の建築遺構と齋宮野宮の建築について	160
1 齋宮について	160
2 齋宮の組織と野宮の建築	160
3 発掘遺構の建築と野宮の建築	161
第6章 結 語	164
付 章	166
第1節 泉出土の人形代について	166
1 官祭の解除・御祓の祭祀について	166
2 解除御所	171
3 人形代	172
4 齋串	176
5 おわりに	178
第2節 平安京の墨書「齋宮」と齋王家・齋王御所	180
1 はじめに	180
2 墨書「齋宮」	180
3 伊勢齋王の〈御殿〉	180

4	墨書「齋雑所・齋舎所」	182
5	斎王家と「人の家」	185
6	斎王家の建築と装束	191
7	斎王家の行事	197
8	おわりに	200

図 版 目 次

原色図版 1 園池全景（北から）

原色図版 2 1 泉 1 全景（北西から）

2 泉 1 および池 1 北部（北東から）

原色図版 3 1 池 1 西岸部洲浜（南から）

2 池 1 全景（南東から）

原色図版 4 園池南西部（池 1・溝 2・池 2 北東から）

原色図版 5 第 1 次調査 押小路および野寺小路川（北西から）

原色図版 6 池 1 出土輸入陶磁器（白磁）

原色図版 7 池 1 出土土器（緑釉陶器・灰釉陶器）

原色図版 8 1 池 1 出土墨書土器

2 泉 1 出土人形代

図版 1 遺跡 調査対象地の地区割図

図版 2 遺跡 1 区～3 区・7 区 平安時代中期遺構平面実測図

図版 3 遺跡 1 区・5 区・6 区 平安時代中期遺構平面実測図

図版 4 遺跡 第 1 次調査区および第 3 次調査 4 区・5 区 平安時代中期遺構平面実測図

図版 5 遺跡 1 区・5 区・6 区 平安時代後期遺構平面実測図

図版 6 遺跡 第 1 次調査区および第 3 次調査 4 区・5 区 平安時代後期遺構平面実測図

図版 7 遺跡 2 区・3 区 池 1 平面実測図

図版 8 遺跡 1 2 区・3 区 池 1・泉 1・建物 13 平面・断面実測図

2 同 石敷遺構 1 平面・断面実測図

図版 9 遺跡 2 区・3 区 泉 1 平面・断面実測図

図版 10 遺跡 1 2 区・3 区 池 1 北岸部平面・断面実測図

2 同 池 1 東岸部景石平面・断面実測図

図版 11 遺跡 2 区・3 区 池 1 西岸部洲浜平面・断面実測図

図版 12 遺跡 第 1 次調査区 井戸 3、1 区 井戸 1、4 区 井戸 2・土壙 3 平面・断面実測図

図版 13 遺跡 1 区 地鎮遺構 1、2 区 地鎮遺構 2、4 区 地鎮遺構 3 平面・断面実測図

図版 14 遺跡 1 第 5 次調査 1 区・2 区 平面実測図

2 同2区 池4洲浜平面・断面実測図

- 図版15 遺物 軒丸瓦拓本・実測図1
- 図版16 遺物 軒丸瓦拓本・実測図2
- 図版17 遺物 軒平瓦拓本・実測図
- 図版18 遺物 軒瓦拓本・実測図
- 図版19 遺物 丸瓦・平瓦拓本・実測図1
- 図版20 遺物 丸瓦・平瓦拓本・実測図2
- 図版21 遺物 池1出土土師器実測図1
- 図版22 遺物 池1出土土師器実測図2
- 図版23 遺物 池1出土黒色土器・白色土器実測図
- 図版24 遺物 池1出土須恵器実測図
- 図版25 遺物 池1出土灰釉陶器実測図
- 図版26 遺物 池1出土緑釉陶器実測図
- 図版27 遺物 池1出土緑釉陶器・輸入陶磁器（白磁・青磁・褐釉陶器）実測図
- 図版28 遺物 園池関連遺構出土土器実測図
- 図版29 遺物 井戸および建物関連遺構出土土器実測図
- 図版30 遺物 墨書土器実測図
- 図版31 遺物 硯実測図
- 図版32 遺物 池1出土木製品実測図
- 図版33 遺物 平安時代後期遺構出土土器実測図
- 図版34 遺物 室町時代から江戸時代遺構出土土器実測図
- 図版35 遺跡 1 航空写真1 調査地上空から平安宮を望む（西から）
2 航空写真2 調査区全景（上が北）
- 図版36 遺跡 1 1区 全景（西から）
2 同 建物1（西から）
- 図版37 遺跡 1 1区 建物2（北から）
2 同 建物1柱穴および地鎮遺構1（北から）
3 同 井戸1（南西から）
- 図版38 遺跡 1 2・3区 全景（北東から）
2 同 池1北岸部（北東から）
- 図版39 遺跡 1 2・3区 泉1新段階（北から）
2 同 泉1人形代出土状況（北西から）
3 同 泉1および堰（北東から）
- 図版40 遺跡 1 2・3区 泉1旧段階（北西から）
2 同 泉1旧段階木枠組み立て状況（南東から）

- 3 同 泉1地鎮土師器出土状況（西から）
- 図版41 遺跡 1 2・3区 池1導水路土器出土状況（北東から）
2 同 池1北岸部石積み（南東から）
3 同 池1北岸部から西岸部洲浜（北東から）
- 図版42 遺跡 1 2・3区 泉1および建物3（東から）
2 同 地鎮遺構2（北から）
3 同 建物3汀部南側柱（北西から）
- 図版43 遺跡 1 2・3区 池1西岸部洲浜（南から）
2 同 池1西岸部および建物4（北東から）
- 図版44 遺跡 1 2・3区 池1東岸部（北西から）
2 同 池1東岸部景石および土壙1・土壙2（北から）
3 同 池1東岸部景石（西から）
- 図版45 遺跡 1 2・3区 池1東岸部景石（北西から）
2 同 泉2および東岸部景石（西から）
3 同 池1南岸部洲浜から溝3導水路（北から）
- 図版46 遺跡 1 2・3区 池1南岸部洲浜および溝2・池2（東から）
2 同 建物11・建物12（西から）
- 図版47 遺跡 1 2・3区 全景（南東から）
2 同 東拡張区全景（北から）
- 図版48 遺跡 1 2・3区 建物14（北から）
2 同 建物14地鎮須恵器出土状況（北から）
3 同 石敷遺構1（北から）
- 図版49 遺跡 1 2・3区 池1全景（水を張った状況 北から）
2 同 池1東岸部（水を張った状況 北西から）
- 図版50 遺跡 1 4区 全景（北西から）
2 同 東半部（手前は建物6 北から）
- 図版51 遺跡 1 4区 建物6柱穴および地鎮遺構3（西から）
2 同 地鎮遺構3（東から）
3 同 建物7（北から）
- 図版52 遺跡 1 4区 西半部全景（手前は建物9 北から）
2 同 押小路北側溝および路面（西から）
3 同 押小路路面地業（丸太痕跡 北東から）
- 図版53 遺跡 1 4区 井戸2（西から）
2 同 土壙3（南西から）
3 同 建物10・建物18・井戸2（北から）

- 図版54 遺跡 1 4区 建物101・建物102（東から）
2 同 建物102柱穴回転台成形土師器出土状況（北西から）
3 同 柵103（西から）
- 図版55 遺跡 1 1区 柵102・土壇101（北から）
2 同 溝101（西から）
3 5区 溝101と野寺小路川の合流点（北から）
- 図版56 遺跡 1 5区 全景（北から）
2 同 建物15（北から）
3 同 建物15柱穴断面（南東から）
- 図版57 遺跡 1 6区 全景（西から）
2 7区 全景（東から）
3 8区 全景（東から）
- 図版58 遺跡 1 第1次調査区 全景（北から）
2 同 押小路と野寺小路の交差点（南西から）
3 同 井戸3（北から）
- 図版59 遺跡 1 第5次調査2区 全景（東から）
2 同1区 全景（西から）
3 同3区 全景（西から）
- 図版60 遺跡 1 第5次調査4区 全景（北から）
2 第2次調査区 全景（西から）
- 図版61 遺物 軒丸瓦1
- 図版62 遺物 軒丸瓦2
- 図版63 遺物 軒平瓦1
- 図版64 遺物 軒平瓦2
- 図版65 遺物 丸瓦・平瓦
- 図版66 遺物 池1出土土師器（第1グループ）
- 図版67 遺物 池1出土土師器（第2グループ）・高杯
- 図版68 遺物 池1出土黒色土器・白色土器
- 図版69 遺物 池1出土須恵器
- 図版70 遺物 池1出土灰釉陶器
- 図版71 遺物 池1出土緑釉陶器
- 図版72 遺物 池1出土緑釉陶器・輸入陶磁器（白磁）
- 図版73 遺物 1 池1出土輸入陶磁器（白磁）
2 同 輸入陶磁器（青磁）
- 図版74 遺物 園池関連遺構出土土器

- 図版75 遺物 井戸・建物・地鎮遺構出土土器
- 図版76 遺物 1 輸入陶磁器（越州窯系青磁・褐釉陶器）
2 輸入陶磁器（長沙銅官窯系褐釉陶器）
3 井戸2出土輸入陶磁器（褐釉陶器）
- 図版77 遺物 池1出土墨書土器1
- 図版78 遺物 池1出土墨書土器2
- 図版79 遺物 硯
- 図版80 遺物 土製品・石製品・金属製品
- 図版81 遺物 池1出土木製品
- 図版82 遺物 平安時代後期土師器・瓦器
- 図版83 遺物 1 野寺小路川出土輸入陶磁器
2 室町時代輸入陶磁器
- 図版84 自然遺物 花粉・寄生虫卵1
- 図版85 自然遺物 花粉・寄生虫卵2
- 図版86 自然遺物 種実1
- 図版87 自然遺物 種実2
- 図版88 自然遺物 樹種1
- 図版89 自然遺物 樹種2
- 図版90 自然遺物 樹種3
- 図版91 自然遺物 樹種4
- 図版92 自然遺物 樹種5
- 図版93 自然遺物 珪藻1
- 図版94 自然遺物 珪藻2
- 図版95 自然遺物 珪藻3

挿 図 目 次

図1 調査地位置図	1
図2 右京三条二坊発掘調査および試掘・立会調査地点位置図	2
図3 調査区配置図	8
図4 池1調査風景	12
図5 現地説明会風景	13
図6 遺跡保存作業風景	14
図7 平面直角座標系Ⅵによる地区割図	17
図8 調査区南北断面模式柱状図	19

図9	調査区東西断面模式図	20
図10	平安時代中期遺構配置図	21
図11	建物1平面・断面実測図	22
図12	柵1・柵2平面・断面実測図	22
図13	園池遺構断面・立面図計測位置図	25
図14	池1西岸部洲浜断面実測図	26
図15	池1平面・断面実測図	28
図16	溝2導水部立面図・溝3断面実測図	29
図17	溝4断面実測図	30
図18	建物3・建物13・柵4平面・断面実測図	31
図19	建物4平面・断面実測図	32
図20	建物11・建物12平面・断面実測図	32
図21	建物2・建物14平面・断面実測図	33
図22	建物5・建物6平面・断面実測図	34
図23	建物7・建物8・柵5平面・断面実測図	35
図24	建物9・建物10平面・断面実測図	36
図25	建物17・建物18・建物19・建物20平面実測図	37
図26	押小路路面・溝1断面実測図	38
図27	建物15・柵7平面・断面実測図	39
図28	8区平面実測図	40
図29	平安時代後期遺構配置図	41
図30	建物101・建物102平面・断面実測図	42
図31	建物103・建物104・建物105・建物106・柵104・柵105・溝104平面実測図	43
図32	井戸101検出状況	45
図33	井戸101平面・断面実測図	45
図34	1区東拡張区南壁断面実測図	47
図35	第1次調査区西壁断面実測図	48
図36	第1次調査区平面実測図	49
図37	第1次調査区野寺小路川断面実測図	50
図38	第2次調査区平面実測図	52
図39	土壌4検出状況	54
図40	第5次調査3・4区平面実測図	55
図41	十六町出土文字瓦拓本	61
図42	池1出土土師器高杯	64
図43	輸入陶磁器実測図	69

図44	転用硯実測図	70
図45	墨書土器出土地点分布図	71
図46	第5次調査池4出土土器実測図	72
図47	土製品実測図	73
図48	石製品実測図	74
図49	金属製品実測図	75
図50	井戸1・井戸2出土木製品実測図	77
図51	室町時代から江戸時代木製品実測図	79
図52	硯・砥石実測図	80
図53	出土銭貨	81
図54	古墳時代以前遺物実測図	81
図55	試料採取地点位置図(1)	85
図56	試料採取地点位置図(2)	85
図57	マツ属複織管束亜属毬果の検出度数	94
図58	ヒメグルミ核の検出度数	95
図59	ウメ核の検出度数	95
図60	モモ核の検出度数	95
図61	センダン核の検出度数	95
図62	モミ属材の検出度数	102
図63	ツガ属材の検出度数	102
図64	マツ属複織管束亜属材の検出度数	102
図65	ツブラジイ属材の検出度数	102
図66	サクラ属材の検出度数	103
図67	ウメ属材の検出度数	103
図68	ヤブツバキ材の検出度数	103
図69	ムラサキシキブ属材の検出度数	103
図70	池1周辺の植栽推定復元図	108
図71	花粉ダイアグラム1	134
図72	花粉ダイアグラム2	135
図73	花粉ダイアグラム3	136
図74	種実ダイアグラム1	137
図75	種実ダイアグラム2	138
図76	主要珪藻ダイアグラム1	139
図77	主要珪藻ダイアグラム2	140
図78	主要珪藻ダイアグラム3	141

図79	庭園と釣殿	146
図80	平城京左京三条二坊の園池遺構	147
図81	右京三条二坊十一町・十四町平面実測図	150
図82	平安京右京六条一坊五・六町 平安時代から鎌倉時代遺構配置図	152
図83	室町時代から江戸時代遺構配置図	155
図84	第3次調査4区南拡張区西壁および第5次調査4区東壁断面実測図	156
図85	西本願寺滴翠園の醒眠泉	157
図86	園池遺構比較図	159

表 目 次

表1	平安京右京三条二坊発掘調査一覧表	3
表2	平安京右京三条二坊主要試掘・立会調査一覧表	4
表3	第3・4次調査 工程表	16
表4	第5次調査 工程表	16
表5	十五町・十六町の座標数値表	17
表6	遺構番号対照表	56
表7	十六町出土軒丸瓦統計表	57
表8	十六町出土軒平瓦統計表	59
表9	十六町出土平瓦最大幅統計表	60
表10	園池関連遺構出土土器破片数統計表	62
表11	井戸1出土土器破片数統計表	62
表12	井戸2出土土器破片数統計表	62
表13	池1出土土師器第1グループ径高指数分布表	63
表14	池1出土土師器第2グループ径高指数分布表	64
表15	池1出土灰釉陶器径高指数分布表	66
表16	池1出土緑釉陶器径高指数分布表	67
表17	他の園池遺構出土土師器径高指数分布表	69
表18	池4出土土器破片数統計表	72
表19	その他の遺物出土遺構一覧表	84
表20	花粉分析結果1	109
表21	花粉分析結果2	110
表22	花粉分析結果3	112
表23	種実同定結果1	114
表24	種実同定結果2	114

表25	種実同定結果 3	115
表26	種実同定結果 4	116
表27	樹種同定結果	123
表28	珪藻分析結果 1	130
表29	珪藻分析結果 2	131
表30	珪藻分析結果 3	132

遺 物 観 察 表 目 次

観察表 1	瓦類観察表	201
観察表 2	土器類観察表	206
観察表 3	その他の遺物観察表	245

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

京都市中京区西ノ京東中合町1に所在する京都市立西京商業高等学校に、現校舎の老朽化にともない施設の充実を図るため、校舎の新設計画がたてられた。新校舎建設予定地は、同校敷地北側のグラウンドで、新校舎完成後は南側の校舎跡地をグラウンドに整備する計画であった。

同校敷地は平安京条坊復元図を参考にすると、平安京右京三条二坊十五町・十六町にあたる。

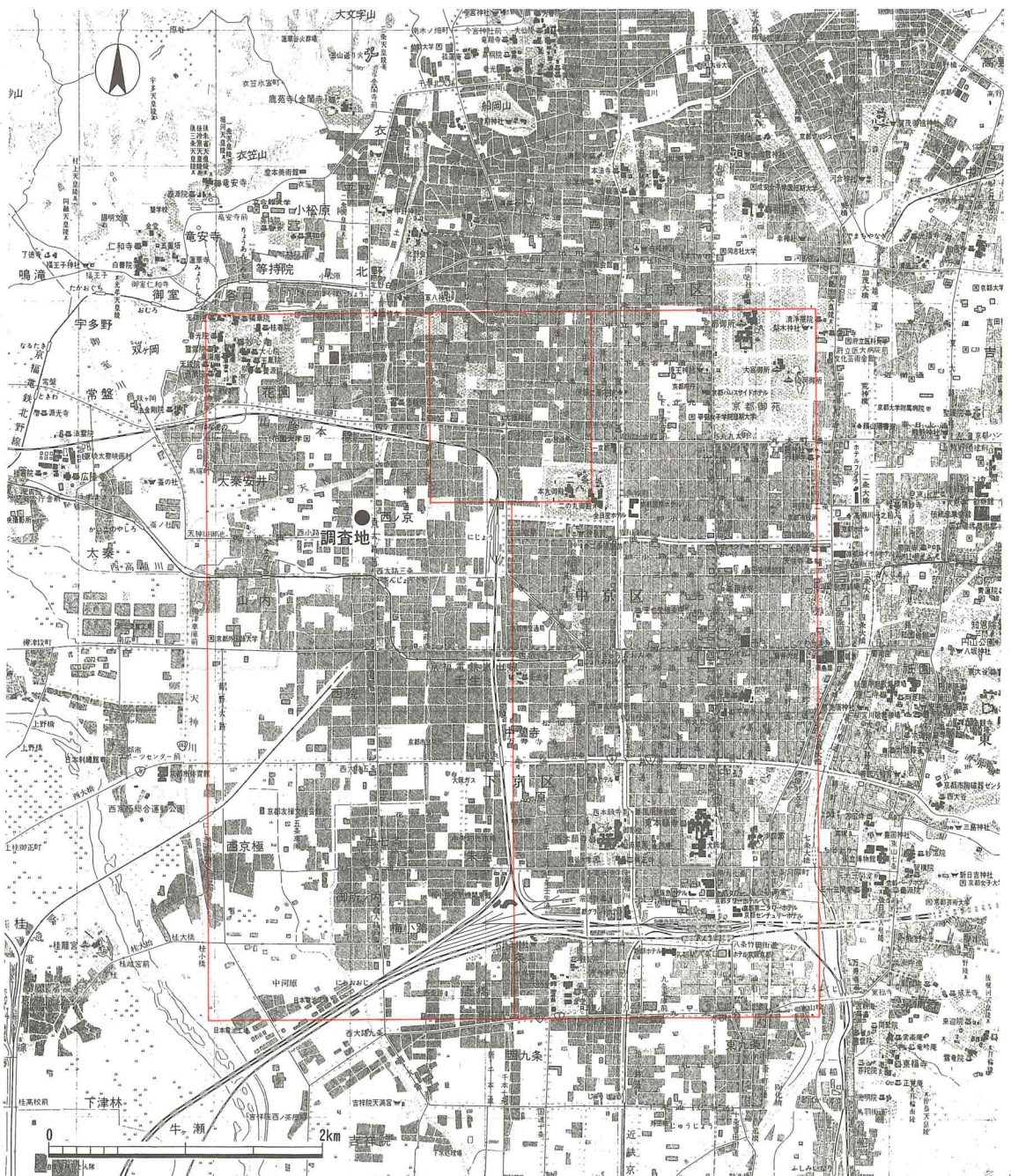


図1 調査地位置図 (1/50,000)

第1節 調査に至る経緯

同校敷地の北限は二条大路南築地想定位置に、南限を東西に延長する御池通は三条坊門小路に推定されている。東限は野寺小路想定位置にほぼ一致し、西限を南北に延長する佐井通は道祖大路に推定されていることから、同校の敷地は南北2町分を占有することになり、2町間中央には押小路が東西方向に延長することが想定できる。

なお、同校敷地は弥生時代から古墳時代の遺物散布地として知られる西ノ京遺跡の中央部に位置しており、当該期の遺構・遺物の検出も今回の調査目的の一つである。

発掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターの指導のもと、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施することとなった。調査対象面積は広く、調査期間も長期にわたることが当初から想定された。したがって、調査の作業時間が授業やクラブ活動などの時間帯と長期にわたり重なるため、発掘調査を開始するにあたり、京都市埋蔵文化財調査センター、京都市教育委員会施設課、京都市立西京商業高等学校、京都市埋蔵文化財研究所の4者間で、安全対策・学校行事・調査手順および調査時の諸影響などの対策を協議、調整した。調整の結果、発掘調査専用の通用門を設け、調査対象地の周囲はフェンスで囲い、校内諸施設と調査対象地を区分した。さらに、東接する民家側には銅板塀を設置し、騒音や塵埃の対策を図ることとした。

1999年7月初旬からこれら調査前の付帯工事を進め、7月下旬には新校舎の建設予定箇所に調査区を設定し、発掘調査を開始した。

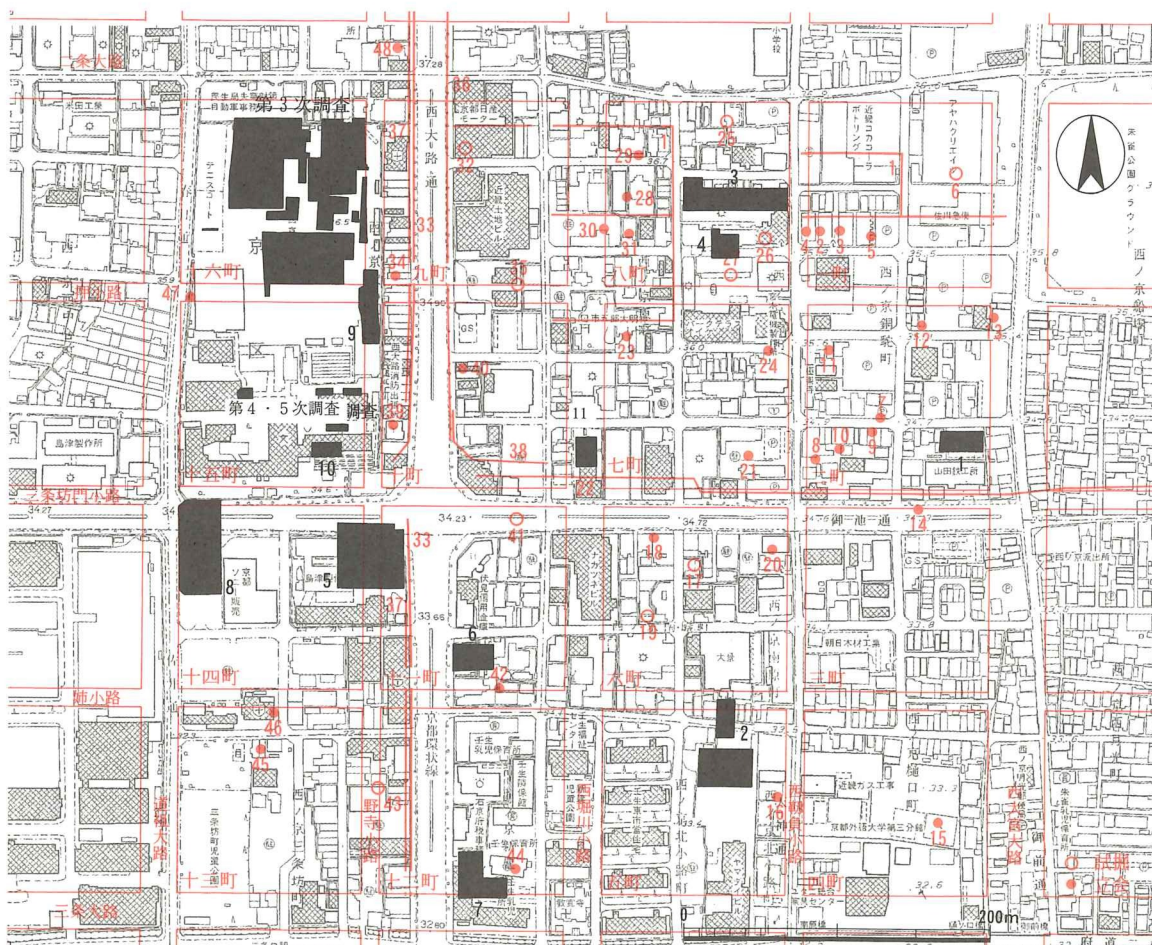


図2 右京三条二坊発掘調査(黒数字)および試掘・立会調査(赤数字)地点位置図(1/5,000)

第2節 既往の調査

これまでに右京三条二坊域で実施した発掘調査は、11件あり、今回十六町で実施した第3次調査が12件目、十五町で実施した第5次調査が13件目となる。また、右京三条二坊域で実施した試掘・立会調査件数は、110件以上に及ぶ。以下、遺構・遺物の概要を表とともに示しておく。

1 右京三条二坊域の発掘調査

当該地域の発掘調査では、各地点で調査成果が報告されており、遺跡の遺存状態は比較的良好であると言える。しかし、当該地域を含め平安京域には「聚楽土」と呼ばれる良質の黄色ないし褐色を呈する粘土層が遺跡の基盤層（無遺物層）として広く分布するため、近世以降、広い地域でこの粘土層の採掘が行なわれた。結果として、粘土採掘穴によって遺跡が破壊を受けている箇所も少なくない。

当該地域で検出した平安時代の遺構には、条坊遺構では、南北路に西堀川小路・野寺小路・道祖大路が、東西路に押小路・三条坊門小路・姉小路がある。南北路の道祖大路・野寺小路は道路幅の規模の川が形成されたことが判明している。宅地内では園池遺構・掘立柱建物・井戸が多数検出されている。中世以降に属する遺構は、耕作に関連する溝などの遺構や井戸が検出されているにとどまり、平安時代後期以降は耕作地化が進む状況が窺われる。

表1 平安京右京三条二坊発掘調査一覧表

番号	調査地区	所在地	調査期間	調査概要	備考
1	二町	中京区西ノ京銅駝町76	1981.10.21～11.20	平安時代の建物3棟、井戸1基、溝2条、柵列1条等を検出。	平安京跡発掘調査概報 昭和56年度京都市文化観光局 1982
2	五町・姉小路	中京区西ノ京北小路町4他	1985.10.21～1986.2.17	姉小路南側溝、平安時代の建物7棟、柵4条、井戸1基、溝5条を検出。	昭和60年度 京都市埋蔵文化財概要財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988
3	八町	中京区西ノ京原町97	1986.12.8～1987.3.23	平安時代の建物1棟、井戸2基、溝1条、園池の一部、川等を検出。	昭和61年度 京都市埋蔵文化財概要財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989
4	八町	中京区西ノ京原町99	1990.3.15～5.11	3の調査に連続する園池一部、柱穴等を検出。	平成元年度 京都市埋蔵文化財概要財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994
5	十一・十四町 野寺小路	中京区西ノ京下合町11	1989.11.30～1990.2.23	三条坊門小路南側溝、野寺小路東西両側溝、柵2条、川跡を検出。	平成元年度 京都市埋蔵文化財概要財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994
6	十一町	中京区西ノ京下合町41	1993.11.15～12.10	平安時代の井戸、土壇、溝、柱穴等を検出	調査主体:古代文化調査会 発掘調査終了報告書 1994
7	十二町	中京区西ノ京新建町5-14～5-30	1978.11.10～12.28	建物3棟、平安時代前期の井戸1基、平安時代以前の可能性のある溝等を検出。	昭和53年度 平安京跡発掘調査概要財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1979
8	十四町	中京区西ノ京下合町地内	1998.3.19～6.26	三条坊門小路南側溝、平安時代の建物8棟、門2棟、柵8条、井戸3基と道祖大路川等を検出。	平成10年度 京都市埋蔵文化財概要財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000
9	十五・十六町 野寺小路	中京区西ノ京東中合町1 京都市立西京商業高等学校	1981.7.3～7.31	押小路両側溝 建物1棟、井戸1基、中世の野寺小路川等を検出。	昭和56年度 京都市埋蔵文化財概要財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983
10	十五町	中京区西ノ京東中合町7 京都市立西京商業高等学校	1987.5.18～6.12	平安時代の溝4条、柱穴等を検出。他に中世の井戸がある。	昭和62年度 京都市埋蔵文化財概要財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991
11	西堀川小路	中京区西ノ京原町64	1982.6.17～7.10	西堀川小路の堀川、路面2面、西側溝等を検出。	昭和57年度 京都市埋蔵文化財概要財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984

第2節 既往の調査

表2 平安京右京三条二坊主要試掘・立会調査一覧表

番号	調査地区	所在地	調査期間	概要	備考
1	一町・八町～ 九町	中京区西ノ京東中合町56 ～ 銅駝町56	1984.2.13～ 3.23	西大宮大路西側溝、平安時代の遺物包含層、西堀川小路流路を検出。	昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985
2	一町	中京区西ノ京銅駝町26-1	1989.7.3	GL-0.9mにて平安時代の土壌。	京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度 京都市文化観光局 1990
3	一町	中京区西ノ京銅駝町26-1	1992.10.22/1 0.23	地表下0.4m以下、平安時代の包含層・落ち込み。	京都市内遺跡立会調査概報平成4年度 京都市文化観光局 1993
4	一町	中京区西ノ京銅駝町26-1	1994.11.25/1 1.28	地表下0.77mで平安時代後期の包含層。	京都市内遺跡立会調査概報平成6年度 京都市文化観光局 1995
5	一町	中京区西ノ京銅駝町27-2	1995.8.17/8.3 1/9.01	地表下0.63mで平安時代前期の包含層、灰釉陶器。	京都市内遺跡立会調査概報平成7年度 京都市文化観光局 1996
6	一町	中京区西ノ京銅駝町48・ 49・50	1996.6.21/7.2 ～5	GL-0.5mで平安時代中期の園池跡を検出する。	京都市内遺跡試掘調査概報平成8年度 京都市文化市民局 1997
7	二町	中京区西ノ京銅駝町40- 1・41-2	1981.2.20	表土下0.5m近現代層。0.5～0.7m暗褐色泥砂層は平安時代中期。下層灰黄色粘土の無遺物層で平安時代中期の土壌6基検出。	京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度 京都市埋蔵文化財センター 1981
8	二町	中京区西ノ京銅駝町46	1981.7.27/7. 28	表土下0.6mにて平安時代中期の包含層。	京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度 京都市文化観光局 1982
9	二町	中京区西ノ京銅駝町42	1982.8.1	GL-0.65m、-0.8mにて平安時代の土壌。	京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和57年度 京都市文化観光局 1983
10	二町	中京区西ノ京銅駝町41・ 45	1987.8.31/9.1	GL-0.77m以下、平安時代中期の遺物を含む流れ堆積。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度 京都市文化観光局 1988
11	二町	中京区西ノ京銅駝町37-2	1988.3.28	GL-0.8mにて、平安時代中期の包含層。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度 京都市文化観光局 1989
12	二町	中京区西ノ京銅駝町61	1988.11.15	No1.GL-0.65mにて古墳時代前期の包含層。 No2.GL-0.6mにて平安時代中期の小穴2。	同上
13	二町	中京区西ノ京銅駝町65・ 66	1997.9.1/9.2/ 9.5/9.8/9.11	GL-1.12mで灰オリーブ色粘土の無遺物層、これを切って平安時代中期の落ち込み。西大宮大路の西側溝か？	京都市内遺跡立会調査概報平成9年度 京都市文化市民局 1998
14	三町・ 三条坊門小路	中京区西ノ京樋口町35	1985.9.17	GL-0.81mにて平安時代中期の落ち込み。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度 京都市文化観光局 1986
15	四町	中京区西ノ京樋ノ口町116 -1・2、117-2	1997.7.2～4/ 7.7	No1.-0.76mで幅0.5m以上、深さ0.13mの平安の土壌。以下、オリーブ黒色粘土の無遺物層。 No2.-0.63mで平安時代前期～中期の包含層。	京都市内遺跡立会調査概報平成9年度 京都市文化市民局 1998
16	五町	中京区西ノ京北小路町9	1986.10.20/1 0.21	GL-0.85m以下で平安時代中期の包含層。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度 京都市文化観光局 1987
17	六町	中京区西ノ京南原町10	1982.9.29	表土下1.0mにて平安時代中期の遺物を含む湿地状の堆積検出。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度 京都市文化観光局 1983
18	六町	中京区西ノ京南原町	1986.7.31	GL-0.8mにて平安時代中期の池状堆積。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度 京都市文化観光局 1987
19	六町	中京区西ノ京南原町27-1 他	1987.7.20～29	GL-1.1m以下、平安時代中期の池状堆積。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度 京都市文化観光局 1988
20	六町	中京区西ノ京南原町50	1991.5.29/5. 30	GL-1.1m以下、平安時代中期の包含層、溝2。	京都市内遺跡立会調査概報平成3年度 京都市文化観光局 1992
21	七町	中京区西ノ京原町177-2	1983.5.26	GL-0.95mにて平安時代中期の池の堆積。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度 京都市文化観光局 1984
22	七町・十町 三条坊門小路	中京区西ノ京東中合町～銅 駝町	1984.7.2～ 11.29	西堀川小路西側溝、西堀川を検出。	昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987
23	七町	中京区西ノ京原町55-2	1987.6.1	GL-0.9mにて平安時代前期～中期の湿地堆積。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度 京都市文化観光局 1988
24	七町	中京区西ノ京原町102	1989.7.21	GL-1.0m以下、平安時代前期と中期の包含層。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度 京都市文化観光局 1990

第1章 発掘調査の経緯

25	八町	中京区西ノ京原町80	1983.9.16	GL-0.95mにて平安時代中期の包含層。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度 京都市文化観光局 1984
26	八町	中京区西ノ京原町97	1985.6.6/6.10	GL-0.7mにて土壌3、平安時代中期1、時期不明2。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度 京都市文化観光局 1986
27	八町・押小路	中京区西ノ京原町98・100	1985.7.4/7.5	GL-1.29mにて平安時代後期の池状堆積、-1.4mにて平安時代の柱穴、土壌各1。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度 京都市文化観光局 1986
28	八町	中京区西ノ京原町28-2	1985.11.15	GL-0.19mにて室町時代の包含層、-0.78mにて平安時代中期の包含層。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度 京都市文化観光局 1986
29	八町	中京区西ノ京原町23	1987.8.21	GL-1.23m以下、平安時代前期・平安の包含層各1。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度 京都市文化観光局 1988
30	八町	中京区西ノ京原町34	1992.4.28/5.6	地表下、1.02mにて平安時代の包含層。	京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度 京都市文化観光局 1993
31	八町	中京区西ノ京原町35	1997.10.23/10.24	GL-0.35mで東西溝2。-0.68m以下、平安時代中期以降の湿地堆積。	京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度 京都市文化市民局 1998
32	九町	中京区西ノ京東中合町55	1982.8.14	調査区東側の表土下1.2mにて平安時代の包含層検出。遺構の検出はなし。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度 京都市文化観光局 1983
33	九町～十二町 二条大路	中京区西ノ京上中合町から下合町地先。	1986.1.17/1.20/1.22/2.10	GL-0.5m以下時期不明の土壌3、平安時代前期・平安時代・時期不明の包含層各1。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度 京都市文化観光局 1987
34	九町	中京区西ノ京東中合町27-1他	1989.4.18	GL-0.7mにて平安時代中期の南北溝。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度 京都市文化観光局 1990
35	九町	中京区西大路御池上ル東入東中合町66	1992.2.3	GL-1.16mで平安時代中期の包含層。 GL-1.3mで地山。	京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度 京都市文化観光局 1993
36	九町・十町 二条大路	中京区西大路通(新二条通～御池通)地内	1997.4.16～6.12	No2.GL-0.27mで平安時代中期の包含層。 No11.-0.6mで平安時代後期の包含層。	京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度 京都市文化市民局 1998
37	九町～十二町 二条大路	中京区西大路通西側、太子道～三条通地内	1999.5.6～6.23	No4.-0.33-0.37m、路面2(推定二条大路内)。No15.-0.65mにぶい黄褐色粘土の地山を切って弥生～古墳の落ち込み。 No16.-0.49m、平安時代の包含層。 No25.-0.8m、明黄褐色砂泥の地山を切って平安時代後期の落ち込み。 No26.-1.55m平安時代中期の包含層。	京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度 京都市文化市民局 2000
38	十町	中京区西ノ京東中合町地先。	1982.1.13	表土下0.6mにて平安時代前期～中期の包含層及びピット1。	京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度 京都市文化観光局 1982
39	十町	中京区西ノ京東中合町47	1982.9.13/9.14	表土下0.62m平安時代の土壌2基検出。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度 京都市文化観光局 1983
40	十町	中京区西ノ京東中合町86	1987.6.4	GL-1.4mにて土壌6、平安時代前期1、時期不明5。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度 京都市文化観光局 1988
41	十一町	中京区西ノ京下合町29-1	1994.4.14	GL-0.9mで平安時代の溝状遺構・柱穴等を発見する。	京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度 京都市文化観光局 1995
42	十一町	中京区西ノ京新建町1	2000.6.1～8	姉小路北側溝、路面を検出。	京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度 京都市文化市民局 2001
43	十二・十三町 野寺小路	中京区西ノ京三条坊町14-1、20	1984.5.23	GL-1.2mにて平安時代中期の南北溝3。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度 京都市文化観光局 1985
44	十二町	中京区西ノ京新建町5-21	1998.4.6/4.7	GL-2.02m以下、平安時代中期の池状堆積。	京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度 京都市文化市民局 1999
45	十三町	中京区西ノ京三条坊町2	1985.11.27/1.29	GL-0.58mにて平安時代後期の包含層。-0.76mにて平安時代中期・時期不明の土壌各1。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度 京都市文化観光局 1986
46	十三町	中京区西ノ京三条坊町	1991.10.7～19	GL-0.44mにて平安時代の包含層。	京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度 京都市文化観光局 1992
47	十六町	中京区西ノ京東中合町1 京都市立西京商業高等学校	1988.3.18	GL-1.32m以下、平安時代中期の湿地堆積。	京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度 京都市文化観光局 1989
48	二条大路	中京区西ノ京東中合町9	1982.2.12/2.13	表土下0.75m～1.1mにて平安時代中期～鎌倉時代の遺物を含む流れ堆積。	京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度 京都市文化観光局 1982

第2節 既往の調査

二町 1981年度調査(1)では掘立柱建物3棟・柵1条・井戸1基・溝2条を検出している。溝と柵は、四行八門の宅地割りによると、東一・二行界、北六・七門界に位置しており、また、建物の規模や配置から二戸主分の宅地が想定できる。遺構はほぼ同時期のもので、平安時代中期である。

五町 1985年度調査(2)で平安時代前期から中期の姉小路南側溝・掘立柱建物7棟・柵4条・井戸1基・溝5条を検出した。3条の溝は五町の東西中心、東一・二行界、北二・三門界に位置し、宅地割りに関連するものと考えられる。

八町 1986年度調査(3)では池の北端部を示す石組遺構を検出した。南接する1989年度調査(4)では、(3)の池に連続する2時期にわたる洲浜状遺構を検出している。池の規模は、東西幅20m以上、南北幅30m以上に及ぶことが判明している。(3)では掘立柱建物1棟・井戸2基・溝1条・川1条も検出している。溝は南北方向に延長し、八町の東西中心に位置することから、八町の東半町分を占める邸宅が想定できる。川からは上層で平安時代後期、下層で平安時代中期の遺物が出土した。

十一町 1989年度調査(5)は十四町も含む調査で、野寺小路東西側溝・野寺小路川・三条坊門小路南側溝・掘立柱建物1棟・柵2条などを検出した。野寺小路と三条坊門小路は交差点にあたる。平安時代後期以降に野寺小路は河川化する。

1993年度調査(6)では井戸・溝・土壙・柱跡を検出した。井戸木枠は一辺が1.1mあり、平安時代の井戸ではやや大型の部類に属する。祭祀に関連する合わせ口の土師器皿が出土した。

十二町 1978年度調査(7)で掘立柱建物3棟・井戸1基・溝3条などを検出した。南北方向に延長する溝は、十二町の東西中心に位置する。溝の埋没後、さらに東側にやや規模の大きい南北溝が造られるが、両肩口が水流により深くえぐられた痕跡が明瞭である。井戸からは平安時代前期の遺物が出土している。

十四町 1998年度調査(8)では平安時代前期から中期にかけての道祖大路・三条坊門小路南側溝および内溝・門2棟・掘立柱建物8棟・柵8条・井戸3基・溝などを検出している。道祖大路は平安時代中期以降に河川化していることが判明した。

十五町・十六町 1981・87年度調査(9・10)で検出した遺構は、本調査と密接に関るため第2章第2・3節で報告する。

西堀川小路 1982年度調査(11)で、西堀川小路の道路敷2面・川1条・西側溝を検出した。川は西堀川小路の堀川で、南北方向に延長し、幅約6m、深さ約1mある。両肩口は杭で護岸を施している。川からは平安時代前期から中期の遺物が出土した。路面は固く締まっている。

2 右京三条二坊域の試掘・立会調査

試掘・立会調査で検出した平安時代の遺構には、条坊遺構では、南北路の西大宮大路・西堀川小路、東西路の姉小路がある。西堀川小路は1984年度の2箇所での立会調査で西堀川・西側溝を検出している。東西路では、三条坊門小路・押小路・姉小路などを検出している。

一町 1983年度立会調査(1)では、西大宮大路西側溝と推定される流路が検出された。また、

この調査では西堀川小路想定位置で流路も検出されている。1996年度の試掘調査(6)では、園池遺構が検出された。池跡は南に緩やかに2段の段差を有して下がる。堆積土層からは多量の土器類が出土し、9世紀後半から10世紀初頭の池跡であることが判明した。土器類の種類も豊富で、良好な資料が得られた。

二町 1997年度立会調査(13)では、西大宮大路西側溝と考えられる遺構が検出された。また、各地点で平安時代中期の土壌や遺物包含層などが検出されている。また、1984年度立会調査(22)は七町・十町も含む調査であるが、この調査では、西堀川小路西側溝、西堀川が検出された。

三町 1985年度立会調査(14)では、三条坊門小路および平安時代中期の土壌などが検出されている。

五町～八町 1985年度立会調査(27)では、押小路および平安時代後期の池状堆積土層が検出された。また、1982年度立会調査(17)・1986年度立会調査(18)・1987年度立会調査(19)では平安時代中期の池に伴うと考えられる堆積土層が検出されている。また、各地点で平安時代前期から中期の土壌・遺物包含層などが検出されている。

九町・十町 1985年度立会調査(33)や1997年度立会調査(36)では、二条大路が検出された。また、各地点で平安時代前期から中期の溝・柱穴・土壌・遺物包含層などが検出されている。

十一町～十三町 2000年度立会調査(42)では、姉小路北側溝と路面が検出された。路面は固くしまっている。1981年度立会調査(48)では、二条大路が検出された。1994年度試掘調査(41)では、東一・二行界を示す溝と周辺で柱穴が検出されている。また、各地点で平安時代前期から中期の溝・柱穴・土壌・遺物包含層などが検出されている。

この他、各調査地点で池跡ないし池跡を示す堆積土層が検出され、三条二坊域に池を伴う邸宅跡が点在していたことを示す資料と言える。

また、当該地は弥生時代から古墳時代の遺物散布地として周知されている西ノ京遺跡に含まれており、(12)では古墳時代の遺物包含層、(37)では弥生時代から古墳時代にかけての落ち込み遺構が検出された。

このように、三条二坊域では、当該地域全体の面積から比較すれば調査面積はわずかであるにもかかわらず、平安時代前期から中期に属する遺構が多数検出されている。また、平安時代後期から中世の遺物包含層なども複数の地点で検出されている。

第3節 十五町・十六町の調査経過

本調査では第3次調査から第5次調査の3件を実施した。第3次調査は今回の調査の主要な発掘調査である。第3次調査の発掘調査区は、新校舎の建築予定箇所に沿って設定することを原則とした。第4次調査は第3次調査の進展に伴って現校舎間で実施した試掘調査で、各地点で遺構の確認ができた。第5次調査はこの試掘調査を受け、遺構の遺存状況が良好な地点を主体に実施した発掘調査である。したがって、第4次調査地点は第5次調査区内に重なる(図版1の第5次調査1区・2区・4区内)。

なお、同校敷地内では、これまでに2次の発掘調査(第1・2次調査)を実施し、多くの調査成果を得ていることから、ここで併わせて掲載しておく。

1 十六町の発掘調査

十六町域で実施した発掘調査は、第3次調査と第1次調査の調査区北半部があるが、第1次調査は十五町域の占める割合が高いため次項で述べる。

第3次調査は十六町の大半を対象とする調査で、1区から8区までの調査区を設定した。

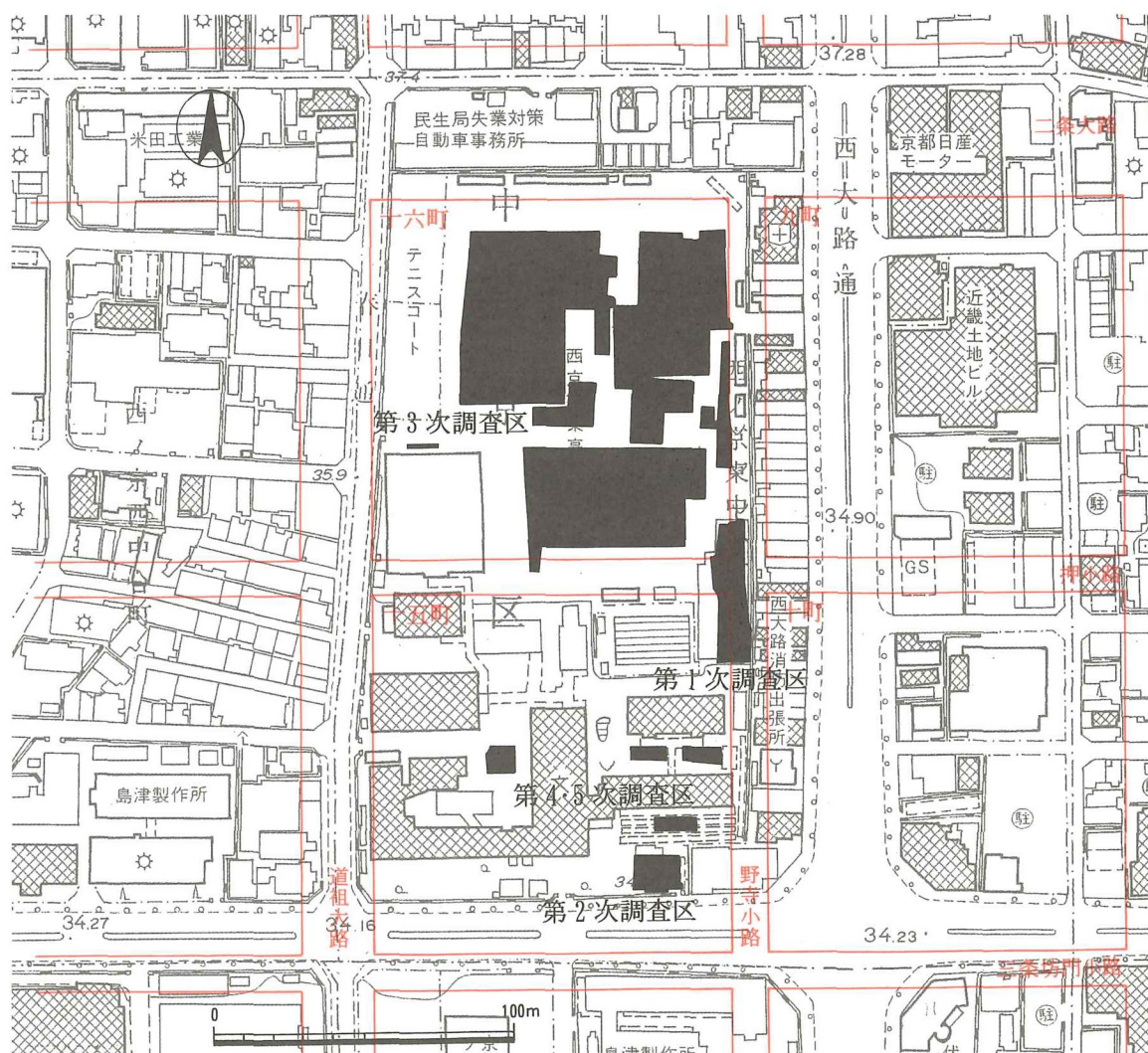


図3 調査区配置図(1/2,500)

1区 調査対象地の北東部に東西約49m、南北約50mの1区を設定した。1999年7月23日から重機掘削を開始した。排土はグラウンド南半部に盛り上げたのちブルーシートで覆い、砂埃の飛散や土砂の流失を防いだ。調査の進展に伴い、近世の粘土採掘穴によって調査区の中央部の遺構面が大規模に破壊を受けていたものの、建物・柵・井戸などを検出した。また、野寺小路や建物の広がりを確認する目的で調査区の南東部と北西部を拡張している。拡張調査の継続と実測・写真撮影などの記録後、11月29日には1区の調査を終了した。調査終了後、4区設定予定箇所の排土を1区に埋め戻し、その後のすべての調査時の排土は1区跡地に盛ることにした。

2・3区 調査対象地の北西部に東西約45m、南北約12mの細長い2区を設置し、1999年7月21日から重機掘削を開始した。調査の進展に伴い、建物と園池遺構を検出した。園池遺構は、2区の南側に予定していた3区に広がる可能性が高まり、3区の調査を同時に進める必要性が生じ、2区は上記遺構の検出段階で調査を一時中断した。

3区設定の調整後、2区に南接する箇所から東西約35m、南北約48mに設定し、9月27日から重機掘削を開始した。以後、1区と2・3区の調査を併行した。調査の進捗につれて、園池遺構の遺存状況が極めて良好であることが判明した。その成果を基に、2000年春に現地説明会の開催を新たに調査日程に取り入れ、園池遺構の調査を進めた。その間、写真撮影、実測などの記録を重ね、4月28日には大型クレーンによる池跡の写真実測および航空写真による遺跡全体の写真撮影を実施した。5月19日には最終的な全景写真撮影を行ない、遺跡の保存を前提とした確認作業に入った。6月上旬には北東部寄りで検出していた溝・石敷遺構の全容を解明する目的で東へ調査区を拡張することとし、3区の北東部を重機掘削した。拡張の結果、前述の目的は達成したものの、新たに南北に延長する廊状の柱穴列を検出し、検出位置から1区南西部で検出した建物と密接な関係にあることが判明した。拡張区の調査は7月末日で終了した。これらの調査と併行して、3区南端から埋め戻しに取りかかった。埋め戻しに際しては、測量交点およびその中間に土嚢袋を並べ、さらに各建物の柱穴には土嚢袋を敷き詰め、遺構の保存を図った。池跡は最も重要な遺構の一つであるため、池跡全体に土嚢袋を2・3段積み重ねて敷き詰めた。

4区 1区の埋め戻し終了後、東西約62m、南北約35mの範囲に4区を設定し、1999年12月14日から重機掘削を開始した。以後、2・3区ならびに4区の調査を併行して行なった。4区では、建物・井戸・溝などを多数検出することができた。建物は1～3区で検出した建物と比較するとやや小規模である。また、4区南端に押小路北築地心想定線が位置することから、南西端に拡張区を設定し、押小路・井戸などを検出した。実測・写真撮影などの記録を取り、2000年5月上旬には終了を迎え、6月上旬には埋め戻した。埋め戻しに際しては、3区と同様に測量交点およびその中間に山砂を詰め込んだ土嚢袋を並べ表示し、さらに各建物の柱穴には土嚢を敷き詰め、遺構の保存を図った。

調査の進捗にともない、文化庁から遺跡保存についての指導を受けた。遺跡保存の前提として、園池はもとより園池周囲に展開する建物配置や、庭園を中心とする北半と4区との関係を明らかにし、1町規模の邸宅となるかどうかの確認調査が必要ということであった。この指導に基づき、

第3節 十五町・十六町の調査経過

5区から8区までの調査区を設定することになった。

5区 4区の埋め戻しと併行して1区と4区の間で想定していた野寺小路西半想定位置に東西4m、南北約25mの5区を設定した。2000年5月15日から重機掘削を開始し、調査を進めたところ、北五門・北六門界付近で門と推定できる柱穴列を検出し、1町規模の邸宅と推定できる手掛かりを得た。実測・写真撮影などの記録を取ったのち、6月12日には調査を終了した。

6区 6区は1区の南端、4区北東部に隣接する位置に東西約22m、南北約26mの範囲に設定し、2000年6月1日から重機掘削を開始した。検出した遺構は柵などにとどまり、実測・写真撮影などの記録を取ったのち、7月下旬には調査を終了した。調査終了後はこれまでの調査区と同様に測量点や検出遺構の保存を図り、2・3区の拡張区と同時に埋め戻した。

7区 3区の南東隅に隣接して東西約24m、南北約22mの範囲に設定し、2000年7月3日から重機掘削を開始し調査を進めたが、平安時代に属する遺構は未検出であった。実測・写真撮影などの記録を取ったのち、7月下旬には調査を終了した。調査終了後はこれまでの調査区と同様に測量点や検出遺構の保存を図った。

8区 調査対象地西部の遺跡の広がりを確認するために設定した。調査区は東西約12m、南北約3mに設定し、2000年8月上旬に重機掘削を開始した。調査では複数の柱穴を検出し、遺構が十六町西端付近まで広がることを確認することができた。実測・写真撮影などの記録を取ったのち、これまでの調査区と同様に測量点や検出遺構の保存を図り、8月中旬には埋め戻した。

以上、1区から8区までの全調査面積は7,556㎡に及んだ。8月上旬以降は、遺跡の活用が決定するまで調査対象地が再び同校のグラウンドとして利用されることになり、調査区の埋め戻しを含め、重機による整地を行なった。その間に調査の終了に向けて2000年8月末日までにフェンス・プレハブなどの施設をすべて撤去し、全工程を完了した。

調査終了までに示された文化庁の指導は、園池遺構を中心として1町規模の邸宅全体の遺跡保存を図るというものであった。その結果、現グラウンドに新校舎を建てる当初の計画は変更となり、現校舎位置に新校舎を建設するという計画が浮上してきた。

現地説明会 十六町の遺跡が園池を伴った1町規模の占地を有し、斎宮との関連が高まったことにより、現地説明会を開催して市民にも広く周知する機会を設けた。2000年3月17日に広報発表し、3月20日には現地説明会を開催した。現地説明会は午前と午後の2回に別けて実施し、延べ2,500名余の参加があった。

この間、遺跡保存を求める声も高まり、考古学・史学会を始め、各界の識者・研究者の来訪が度重なった。

2 十五町・十六町の発掘調査

同校敷地内では、1981年度に第1次調査、1987年度には第2次調査の発掘調査を実施し、多くの調査成果を得ている。また、本調査である第3次調査においては特筆すべき大きな成果があった。この調査成果に基づき遺跡の現地保存されることが決定されたことにより、新校舎の計画変更が図られた。この計画変更にともない、新たに試掘調査(第4次調査)および発掘調査(第5次

調査)を実施した。

第1次調査 同校敷地の東端中央部に格技体育館が建設されるに伴い実施した発掘調査である。調査区は十五町・十六町および押小路が想定できる箇所にあたる。調査の結果、押小路・野寺小路・野寺小路川・井戸1基、掘立柱建物1棟などを検出した。

第2次調査 同校敷地の南東部に学校の施設が建設されるに伴い実施した発掘調査である。調査区は十五町の北六門と北七門にあたる。調査の結果、平安時代の溝2条・掘立柱建物1棟などを検出した。

第4次調査・第5次調査 文化庁の指導を受けて、現校舎の建つ敷地内(十五町)における遺構の遺存状況を確認する目的で、これまで実施してきた発掘調査(第3次調査)に加え、新たに当該箇所でも試掘調査(第4次調査)を実施することとなった。試掘調査の結果、各地点で遺構の遺存状態が良好であることが判明し、第5次調査を実施した。

第4次調査は現校舎間で同校の運営の妨げにならない箇所を協議の上で選定し、4箇所の調査区を設定した。調査は2000年7月下旬に第3次調査と併行して実施した。調査の結果、各調査区で遺跡の遺存状況が良好であることを確認でき、8月7日には終了した。

第5次調査は第4次調査とほぼ同一箇所に4箇所の調査区を設け、2001年1月29日から発掘調査を実施した。調査の結果、十五町域でも池・建物・土壌などを検出し、実測・写真撮影などの記録を取ったのち、3月14日には調査を終了した。その後、3月末日までにフェンス・プレハブ等の施設をすべて撤去し、西京商業高等学校の敷地における一連の調査は、すべて終了した。

3 日誌抄

第1次調査

日付	日誌抄
1981年	
7月 3日	重機掘削を開始
6日	重機掘削と併行して南部の遺構検出を開始。建物跡を検出し南に1間分拡張する。
8日	調査区南から遺構検出。
11日	個別写真撮影。
15日	調査区東半で検出した南北方向の川状遺構(野寺小路川)・柱穴の掘り下げ開始。
21日	川状遺構を完掘。
22日	押小路北側溝(溝1)を検出。
23日	押小路南側溝(溝5)及び井戸(井戸3)を検出。
25日	遺構を完掘。
27日	午前中は写真撮影の準備、午後から全景写真撮影。
28日	調査区南北端の断割実施、併行して南から平面実測を開始。井戸3は実測後写真撮影。
31日	全調査を終了。

第2次調査

日付	日誌抄
1987年	
5月18日	重機掘削を開始。
19日	重機掘削と併行して溝の掘削開始。
21日	南西部の遺構検出及び検出した溝の掘り下げ。
23日	完掘した遺構の平面実測を開始。
25日	溝の掘り下げの継続。
27日	第1面の全景写真撮影。その後、第1層の掘り下げを開始。
29日	東西溝を2条(溝7・溝8)、やや大型の柱穴を数基検出(建物22)。
30日	第2面の遺構の調査にかかる。
6月 1日	東西溝2条を完掘。
4日	柱穴群は調査区南東部に集中する。
5日	第2面の全景写真撮影。その後、柱穴の断割、実測を開始。
6日	遺構の広がりを確認する目的で調査区南側を拡張。
9日	拡張区の実測を完了し、全調査を終了。

第3節 十五町・十六町の調査経過

第3・4次調査

日付	調査区	日誌抄
1999年		
6月 9日		西京商業高等学校で打ち合わせ。
7月21日		1区と2区の重機掘削を開始。
23日	2区	重機掘削終了。遺構検出を開始。
8月 2日	〳	遺構検出で柱穴を検出し始める。
3日	1区	重機掘削を終了、調査区の1/3を粘土採掘穴が占める。攪乱処理を開始。
4日	2区	耕作溝の掘り下げを開始。
16日	1区	調査区北東から遺構検出を開始。
17日	〳	野寺小路築地想定線付近で柵102を検出。北部で建物1も検出。
20日	2区	耕作溝の掘り下げをほぼ終了。西端から平面実測を開始。
25日	1区	南半部の遺構検出を終了。南西部の東西溝から中世の土師器が出土。
26日	〳	西半部の耕作溝の掘り下げ。耕作溝下で建物2の柱穴を検出。
9月 1日	2区	第1面の全景写真撮影。その後、下層の遺構検出で池1の一部を検出。
2日	〳	西半部で第1層掘り下げ後、建物3の柱穴検出。北壁に沿って柵1を検出。
3日	〳	池の北肩口を掘り下げ、土層堆積や北肩口の石積み状況を確認。池と建物配置が明らかになり、今後の調査方針の再検討を行なう。
10日	〳	池1の南への広がり確認のため3区の設定を決定。2区の調査は一時中断。
14日	1区	南半部の耕作溝の掘り下げ。柵1～3は完掘。
16日	〳	東端から平面実測を開始。全景写真撮影の準備にかかる。
27日	3区	重機掘削を開始。
29日	1区	全景写真撮影。溝101・柵1～3の個別写真撮影。その後、平面実測を再開。建物1全体確認のため北側の拡張。
10月1日	〳	北側拡張区の遺構検出。
	3区	池1に南北断面を設定。
4日	〳	重機掘削後、遺構検出を開始。
5日	1区	井戸1の掘り下げにかかる。0.5mで井戸枠を検出。
12日	〳	井戸1の構造は方形縦板横棧組と判明。柵1は断割後断面実測を開始。
13日	〳	野寺小路跡確認で東に拡張区を設定。
14日	〳	井戸1の写真撮影。その後平面実測を開始。南西部は整地土層を掘り下げ。
18日	〳	東拡張区で野寺小路想定位置で川跡の西肩口を検出。掘り下げを開始。
20日	〳	南西部の調査はほぼ終了に近づく。
22日	〳	建物2の写真撮影。建物1の調査および壁面の清掃を開始。

25日	3区	南半部の遺構検出を終了。北西部から耕作溝の掘り下げにかかる。
11月4日	1区	建物1・野寺小路川の写真撮影。柵3は断割後断面実測、建物2・井戸1は断面実測開始。
9日	〳	井戸1の断割。断面写真撮影。
11日	〳	野寺小路に想定される門跡検出のため東へさらに拡張区を設定し、重機掘削後、遺構検出を開始。
17日	〳	この時点では門跡は未検出であったが、野寺小路と溝101の取り付け部を確認。
22日	〳	平面・断面実測を終了。
25日	3区	調査区西半部の耕作溝を完掘し、平面実測を開始。
29日	1区	建物1の柱穴で根石を有するものを写真撮影。平面図に補足。本日で1区の調査は終了。
12月6日	3区	中央断面西半北側から平安時代の遺構検出開始。
8日	〳	西半の南側からも遺構検出を開始。
13日	〳	継続して遺構検出。溝2を検出。東半の北側から遺構検出を開始。
14日	〳	東半から池1の第1層掘り下げ開始。
4区		重機掘削を開始。
15日	3区	池1の遺水・洲浜などの検出開始。
16日	〳	池1の北半部にサブトレンチを設定、洲浜では大振りの石を検出。東半部では汀付近で景石を検出。



図4 池1調査風景

21日	4区	1区と同様、調査区の中央部に粘土採掘穴による攪乱が占めることが判明。
2000年		
1月 5日	3区	東半部は引き続いて第1層の掘り下げ。層中に中世の遺物を包含することから、池に伴わないことが判明。
	4区	調査区東側から遺構検出を開始。
7日	3区	池1内の掘り下げ。西半部は洲浜の検出を開始。
11日	〳	東半部の第1層掘り下げは終了。池1北端部の調査にかかる。

- 24日 4区 粘土採掘穴の清掃を開始し、断面で掘立柱物の柱穴を多数検出。
- 25日 3区 池1の掘り下げ及び池北端部の調査を継続。建物3がほぼ方形を呈することを確認。
- 26日 文化庁が現場視察のため来場。
- 2月 1日 4区 東半の遺構配置を確認後、耕作溝の掘り下げ開始。押小路を確認するため南西部に拡張区を設定、押小路北側溝(溝1)・柵105などを検出。
- 3日 3区 池北端部で泉1を検出、掘り下げ時に方形木枠を検出、祭祀遺物(土師器皿)が出土。
- 4区 引き続き南東部の耕作溝の掘り下げ。
- 7日 3区 泉1の土師器出土状況を写真撮影。
- 10日 〳 泉1の土師器出土状況を実測後、さらに掘り下げ。木枠は上下2段を確認したが、東側下段の木枠はなく、石を用いる。北東部では連続する溝4を検出。
- 4区 引き続き南東部の耕作溝の掘り下げ。柱穴複数や土壌などを検出。
- 16日 3区 泉1の掘り下げ、木枠の配置などから作り替えがあることを確認。
- 17日 〳 池内堆積土中に、植物遺体が多数含まれるため、花粉分析を古環境研究所に依頼し、土壌の抽出が行われた。
- 21日 4区 西半部の耕作溝の掘り下げ。中央部と北西部は平面実測にかかる。
- 22日 3区 泉1の底面付近で人形代を検出。池1北部は写真撮影の準備にかかる。
- 23日 〳 池1北部は写真撮影。泉1の人形検出状況を写真撮影。
- 24日 4区 実測終了箇所から第1層の掘り下げを開始、黒褐色の土層で、平安時代後期の土器類が出土。南西部は引き続き平面実測。
- 3月 2日 3区 池1中央断面の写真撮影。泉1・池1北端部の土器出土状態の平面実測。
- 7日 〳 池1中央断面の実測は終了。断面除去作業にかかる。建物3は掘り下げ。池東部の土壌1・2は掘り下げ、景石採取穴と考えられる。石敷遺構1を掘り下げ。
- 8日 〳 池1東側の石敷遺構1の継続調査。建物3内で地鎮遺構2を検出。南部の遺構検出にかかり、建物4・11・12などを検出。
- 9日 4区 南拡張区の溝1(押小路北側溝)・柵105を完掘、写真撮影の準備にかかる。北西部では溝103・柵103を完掘。
- 10日 3区 地鎮遺構2・石敷遺構1の写真撮影。
- 4区 溝1(押小路北側溝)の写真撮影。
- 14日 〳 東半で検出した建物群の掘り下げ。

- 15日 3区 南部の遺構検出の継続。建物4・11・12、石敷遺構1を完掘。
- 17日 新聞社・放送局など報道関係者に調査成果を広報発表。
- 20日 現地説明会を午前・午後の2回開催、多数の市民の参加があった。



図5 現地説明会風景

- 22日 3区 説明会用に残した池1断面取り外し。
- 4区 建物6の南西隅で地鎮遺構3を検出。
- 23日 〳 南東部で建物7・柵5を検出。地鎮遺構3を掘り下げ、石組みを検出。
- 24日 3区 池1中央断面の取り外しの継続。溝2は写真撮影の準備。
- 29日 4区 拡張区で井戸2を検出、掘り下げ。
- 31日 3区 池1中央断面の取り外しは終了。
- 4月 4日 4区 東半部の全景写真撮影、建物・地鎮遺構3は個別写真撮影。
- 7日 〳 南東部建物は根石を有する柱穴が多い。井戸2は引き続き掘り下げ。
- 13日 3区 南東部・北西部の写真撮影の準備にかかり、写真撮影を終了。
- 4区 井戸2の写真撮影。東半の平面実測終了。東半の写真撮影準備にかかる。
- 14日 3区 建物3内の地鎮遺構の実測。池1内出土墨書土器の出土地点図の作成。
- 4区 南東部建物群の全景写真撮影。西半部は全景写真撮影の準備にかかる。
- 19日 3区 東部の土壌1・2の写真撮影。
- 4区 西半部は全景写真撮影。その後クレーン車を利用した高角度からの全景写真撮影。また、東半部の建物の写真撮影。
- 21日 3区 クレーン車を利用した高角度からの全景写真撮影。池1の洲浜部の立面写真実測の準備にかかる。
- 24日 〳 池1の洲浜部の立面写真実測。
- 25日 〳 溝2の写真撮影。全景写真撮影の準備にかかる。
- 27日 〳 池1南東部の景石の写真撮影。
- 28日 〳 航空機により遺跡の空中写真撮影。その後クレーン車で池1の全景写真撮影。

第3節 十五町・十六町の調査経過

- 5月 1日 4区 東半部の建物群の断面実測は終了。
西半部の建物群の断面実測にかかる。
- 8日 3区 池1西半部の洲浜の写真撮影。池1は
遺物の記録と取り上げを開始。
- 9日 4区 井戸2の断面写真撮影、断面実測。
- 10日 3区 池1西半部の洲浜の細部写真撮影の準
備。建物4の写真撮影。池1北部は写
真撮影の準備にかかる。
- 11日 ✕ 池1北・東部の洲浜細部写真撮影。
- 12日 ✕ 池1北部の個別遺構・遺物出土状況の
写真撮影。
- 4区 埋め戻しの準備にかかる。柱穴や割付
基準点に土嚢を置く。



図6 遺跡保存作業風景

- 15日 3区 前日の大雨の雨水を利用し池1に水を
湛えた状態の全景写真撮影を計画。
- 5区 4区の北東部に5区を設定、重機掘削
を行ない野寺小路川西肩口を検出。
- 16日 3区 池1に水を湛えた状態の全景写真撮
影。その後最終全景の準備にかかる。
- 4区 柵103の断面実測。
- 19日 3区 終日、全景写真・個別写真撮影。
- 22日 ✕ 泉1古段階の調査にかかる。池1内の
遺物取り上げにかかる。
京都府山城郷土資料館の橋本氏に池1
洲浜使用石材の鑑定を依頼。
- 23日 4区 井戸2は調査を終了。
- 5区 野寺小路西築地付近で柱穴を検出、建
物15とする。
- 24日 ✕ 建物15は門跡と考えるに至る。野寺小
路川上面で井戸101を検出。
- 25日 3区 泉1旧段階の調査継続。枠内の石材を
実測後取り上げる。池内の泉2・石製
鍬具検出状況および溝3の写真撮影。
- 4区 拡張区の土壌3の写真撮影。
- 26日 ✕ 土壌3の平面・立面図を作成し、4区
の調査は終了。
- 30日 3区 石敷遺構の全形を確認するため、重機
により北東部を拡張。
- 6月 1日 5区 建物15が四脚門であることを確定する

ため、重機により北西部を拡張。
野寺小路川で削平を受けていたが、
遺存していた柱穴は親柱に想定、四
脚門の前柱は消失した可能性がある。

- 5日 3区 池1内の遺物取り上げを終了。泉1
の旧段階の写真撮影。北東部拡張区
の遺構検出。
- 5区 建物15の南柱穴は深さ0.2mあり柱痕
が遺存していた。柵101の掘り下げで、
11世紀の遺物が出土。
- 7日 3区 東京大学の池内研究室による3次元
グラフィック図作成が試行される。
- 5区 全景写真撮影を行なう。その後、平
面及び調査区の断面図作成にかかる。
- 8日 ✕ 平面実測終了。建物15の断面図作成。
- 12日 3区 南東部から埋め戻しを開始、池1内
には厚く土嚢を敷き詰める予定。
- 5区 建物15の柱穴の断面写真撮影。5区
の調査は終了。
- 13日 6区 重機掘削の後、遺構検出を開始。耕
作溝を多数検出。
- 14日 3区 泉1旧段階の木枠組細部の写真撮影。
- 15日 6区 検出した遺構の配置図を作成。耕作
溝の掘り下げを開始。
耕作溝掘り下げの継続。
- 16日 ✕ 耕作溝掘り下げの終了。その後南北
- 26日 ✕ 方向の溝102を検出。この溝は1区か
ら4区に連続することが判明。
- 30日 ✕ 溝102掘り下げの終了。
- 7月 5日 3区 拡張区東端で南北方向の柱穴列を検
出、確認のためさらに東側を拡張。
- 6日 7区 重機掘削の後、遺構検出を開始。
- 7日 3区 柱穴列北端を確認。
- 10日 ✕ 柱穴列の東西柱間は1間であることを
確認。拡張区南側をさらに拡張。
- 6区 東半部で柵7を検出。
- 7区 遺構配置図作成後、耕作溝の掘り下げ。
- 13日 3区 東西1間の南北建物を建物14とした。
南へ延長するため、さらに南へ拡張。
- 6区 全景写真撮影。
- 14日 ✕ 断面実測を行ない、6区は終了。
- 19日 7区 全景写真撮影。その後平面実測開始
- 26日 3区 建物14の写真撮影。その後平面実測
- 31日 ✕ 拡張区の断面実測を行ない、3区の
調査を終了。
- 8月 2日 8区 重機掘削後、遺構検出を行ない、検
出した遺構の掘り下げ。
- 4日 ✕ 天神川旧流路の堆積土層除去後、柱
穴を数基検出、2基は建物16とした。
- 8日 ✕ 全景写真撮影。
- 9日 ✕ 平面・断面実測後、調査を終了。
- 30日 西京商業高等学校へ調査終了の報告。
現場引き渡しの確認を行なう。

第5次調査

日付	調査区	日誌抄
2001年		
1月29日	1区	重機掘削後、遺構検出を開始。
30日	2区	重機掘削後、遺構検出を開始。
2月5日	1区	耕作溝の掘り下げを開始。
7日	〃	耕作溝の掘り下げを終了。
	2区	耕作溝の掘り下げを開始。
9日	1区	柵8・柵9・溝状遺構などを検出。平面実測を開始。
	2区	耕作溝の掘り下げを終了。第1面の平面実測を開始。
13日	〃	平面実測を終了。東半部で検出した池4の掘り下げにかかる。
14日	1区	平面実測を終了。全景写真撮影の準備にかかる。
15日	〃	全景写真撮影。その後、第2面の平面実測を開始。
16日	2区	北西部検出した土壌4の全体を確認するため北側へ拡張。
19日	1区	柵8・柵9の断面実測。西端の溝状遺構は2区の池4の東肩口と判明。
20日	3区	重機掘削後、遺構検出を開始。
21日	〃	耕作溝の掘り下げを開始。
22日	2区	池4の洲浜の検出及び平面実測。西半部から平面実測開始。
23日	3区	東半部の平面実測を開始。
	4区	重機掘削後、遺構検出を開始。
27日	2区	池4の全景写真撮影。
	3区	平面実測を終了。包含層の掘り下げ。
3月1日	〃	包含層は完掘、遺構検出にかかる。
2日	4区	耕作溝の掘り下げを開始。
5日	2区	池4の平面実測。土壌4は断面実測。
6日	1区	北壁に沿って断割を行なう。
	4区	平面実測を開始。
7日	1区	北壁断面実測。その後、1区は完了
	3区	全景写真撮影。
	4区	南端で石敷遺構2を検出。
8日	2区	平面実測を終了。その後、池4の掘り下げを開始。
	3区	柱穴の断面実測終了。その後、南壁に沿って断割。
12日	2区	池4を完掘し、写真撮影。その後、平面実測開始。北壁に沿って断割開始。
	3区	断面実測。その後、3区の調査完了。
	4区	平面実測の継続。全景写真撮影の準備にかかる。
13日	〃	全景写真撮影。その後、東壁に沿って断割。
14日	2区	断面実測。その後、2区の調査完了。
	4区	断面実測。その後、4区の調査完了。

4 発掘調査体制

第1次調査から第5次調査までの調査担当は、以下の通りである。

第1次調査 所長 杉山信三(故人)、調査部 調査部長 田辺昭三の指導のもと、辻 純一が担当した。

第2次調査 所長 杉山信三(故人)、調査部 調査課長 永田信一の指導のもと、調査部 調査課主任 本 弥八郎が担当した。

第3・4次調査 所長 川上 貢、調査部 調査課長 鈴木久男の指導のもと、調査部 調査課調査第4係 鈴木廣司、網 伸也、清藤玲子が担当した。

第5次調査 所長 川上 貢、調査部 調査課長 鈴木久男の指導のもと、調査部 調査課調査第4係 鈴木廣司、清藤玲子が担当した。

5 遺跡の測量

当研究所における遺跡の位置表示は、以下の通りで、遺跡調査時の記録なども原則として平面直角座標系による割り付けに基づいている。

近畿圏を網羅する平面直角座標系VIは、東経136°、北緯36°の日本海上に座標起点がある。これを起点に東西320kmをA～Hに、南北600kmをA～Tと表記して、それぞれ東西40km、南北30kmのブロックに分割している。今回の調査地点は、座標系VI-ND63-4 D42・43、D52・53となる。図7上図は、座標系VI-ND(東西40km、南北30km)中の63-4(東西2km、南北1.5km)

第3節 十五町・十六町の調査経過

表3 第3・4次調査 工程表

調査期間	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	試掘調査 (4次調査)	備考
1999年 6月										
7月										
8月	機械掘削 遺構検出 調査 実測 写真撮影									
9月										
10月										朝日カルチャー センター日本史 講座見学会
11月										
12月										
2000年 1月										西京商業高校 生徒見学会
2月										
3月										記者発表・ 現地説明会
4月										
5月										西京商業高校 生徒見学会
6月										東京大学による レーザー測量
7月										
8月										

表4 第5次調査 工程表

調査期間	1区	2区	3区	4区
2001年 1月				
2月	機械掘削 遺構検出 調査 実測 写真撮影			
3月				

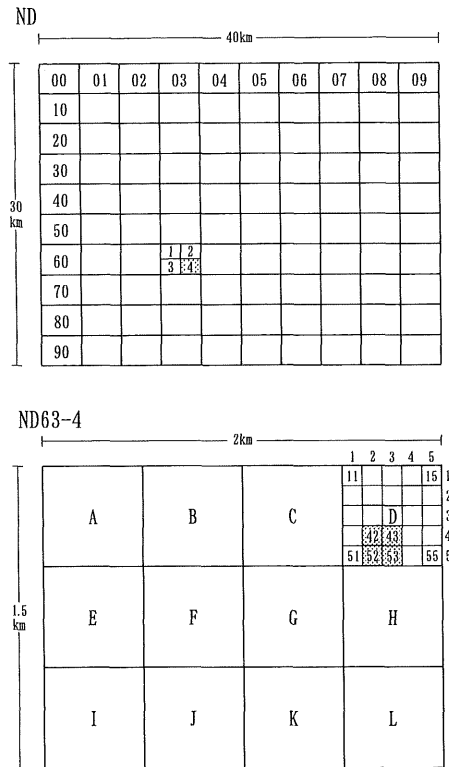


図7 平面直角座標系Ⅵによる地区割図

を表す。図7下図は、これにA～Lを付して500m四方の区画に分割し、さらに11～55を付して100m四方に細分した図である。

図版1には、図7下図の100m区画をさらに4mごとに細分して、Y軸は西から、X軸は北からA～Yを付した区分模式図を併載している。遺構実測の基準線および遺物取り上げ時の地点表示なども原則としてこの4mごとに細分した方眼を基にしている。

現在では、GPS(汎地球測位システム)により測量基準点設置作業を行なっているが、調査対象地内に設置後は上記の地点表示に基づいて地区割りし、調査を進めている。

表5 十五町・十六町の座標数値表

平安京が『延喜式』の「京程」通りに、同一尺度を用い、同一方向で設定されたという仮定の「平安京直角座標」と、実際に発掘調査で検出した60箇所の条坊遺構の平面直角座標系の数値との、振れと尺度の最確値を求めたものが、以下の座標数値である。

1尺=29.84708cm 造営方位=-0度14分03秒

下記に、四行八門制による1～49までの一町内の行門交点の平面直角座標系Ⅵの数値を表している。

十六町					十五町							
二条大路					押小路							
	1	11	21	31	41		1	11	21	31	41	
	2	12	22	32	42		2	12	22	32	42	
	3	13	23	33	43		3	13	23	33	43	
	4	14	24	34	44		4	14	24	34	44	
道祖大路	5	15	25	35	45	野寺小路	5	15	25	35	45	野寺小路
	6	16	26	36	46		6	16	26	36	46	
	7	17	27	37	47		7	17	27	37	47	
	8	18	28	38	48		8	18	28	38	48	
	9	19	29	39	49		9	19	29	39	49	
押小路					三条坊門小路							
1 X=-109792.66 Y=-24371.93	11 X=-109792.53 Y=-24342.08	21 X=-109792.41 Y=-24312.24	31 X=-109792.29 Y=-24282.39	41 X=-109792.17 Y=-24252.54	1 X=-109923.98 Y=-24371.39	11 X=-109923.86 Y=-24341.55	21 X=-109923.74 Y=-24311.70	31 X=-109923.62 Y=-24281.85	41 X=-109923.49 Y=-24252.01			
2 X=-109807.58 Y=-24371.87	12 X=-109807.46 Y=-24342.02	22 X=-109807.33 Y=-24312.17	32 X=-109807.21 Y=-24282.33	42 X=-109807.09 Y=-24252.48	2 X=-109938.90 Y=-24371.33	12 X=-109938.78 Y=-24341.49	22 X=-109938.66 Y=-24311.64	32 X=-109938.54 Y=-24281.79	42 X=-109938.42 Y=-24251.94			
3 X=-109822.50 Y=-24371.81	13 X=-109822.38 Y=-24341.96	23 X=-109822.26 Y=-24312.11	33 X=-109822.14 Y=-24282.27	43 X=-109822.01 Y=-24252.42	3 X=-109953.83 Y=-24371.27	13 X=-109953.71 Y=-24341.42	23 X=-109953.58 Y=-24311.58	33 X=-109953.46 Y=-24281.73	43 X=-109953.34 Y=-24251.88			
4 X=-109837.43 Y=-24371.75	14 X=-109837.30 Y=-24341.90	24 X=-109837.18 Y=-24312.05	34 X=-109837.06 Y=-24282.21	44 X=-109836.94 Y=-24252.36	4 X=-109968.75 Y=-24371.21	14 X=-109968.63 Y=-24341.36	24 X=-109968.51 Y=-24311.52	34 X=-109968.39 Y=-24281.67	44 X=-109968.26 Y=-24251.82			
5 X=-109852.35 Y=-24371.69	15 X=-109852.23 Y=-24341.84	25 X=-109852.11 Y=-24311.99	35 X=-109851.98 Y=-24282.15	45 X=-109851.86 Y=-24252.30	5 X=-109983.68 Y=-24371.15	15 X=-109983.55 Y=-24341.30	25 X=-109983.43 Y=-24311.46	35 X=-109983.31 Y=-24281.61	45 X=-109983.19 Y=-24251.76			
6 X=-109867.27 Y=-24371.62	16 X=-109867.15 Y=-24341.78	26 X=-109867.03 Y=-24311.93	36 X=-109866.91 Y=-24282.08	46 X=-109866.78 Y=-24252.24	6 X=-109998.60 Y=-24371.09	16 X=-109998.48 Y=-24341.24	26 X=-109998.35 Y=-24311.39	36 X=-109998.23 Y=-24281.55	46 X=-109998.11 Y=-24251.70			
7 X=-109882.20 Y=-24371.56	17 X=-109882.07 Y=-24341.72	27 X=-109881.95 Y=-24311.87	37 X=-109881.83 Y=-24282.02	47 X=-109881.71 Y=-24252.18	7 X=-110013.52 Y=-24371.03	17 X=-110013.40 Y=-24341.18	27 X=-110013.28 Y=-24311.33	37 X=-110013.16 Y=-24281.49	47 X=-110013.03 Y=-24251.64			
8 X=-109897.12 Y=-24371.50	18 X=-109897.00 Y=-24341.66	28 X=-109896.88 Y=-24311.81	38 X=-109896.75 Y=-24281.96	48 X=-109896.63 Y=-24252.12	8 X=-110028.45 Y=-24370.97	18 X=-110028.32 Y=-24341.12	28 X=-110028.20 Y=-24311.27	38 X=-110028.08 Y=-24281.43	48 X=-110027.96 Y=-24251.58			
9 X=-109912.04 Y=-24371.44	19 X=-109911.92 Y=-24341.59	29 X=-109911.80 Y=-24311.75	39 X=-109911.68 Y=-24281.90	49 X=-109911.55 Y=-24252.05	9 X=-110043.37 Y=-24370.90	19 X=-110043.25 Y=-24341.06	29 X=-110043.12 Y=-24311.21	39 X=-110043.00 Y=-24281.36	49 X=-110042.88 Y=-24251.52			

第4節 報告書作成の経緯

およそ一年余のわたり実施した一連の調査では、想定をはるかに越えた調査成果を挙げる事ができた。1町規模の庭園を伴う邸宅の全容が明らかになったのは、平安京跡では初めてであり、広く一般に公開すべきとの方針のもと、第3次・4次調査終了後ただちに遺物洗浄、図面整理など報告書作成のための準備に入った。途中、2001年1月から3月まで第5次調査などにより中断はあったものの、2001年4月に整理作業を再開した。報告書作成に当たっては、本調査である第3～5次調査の調査成果を報告するとともに、これまで同校敷地内で実施された第1・2次調査の調査成果も本調査成果の理解の上で不可欠であるという視点に立ち、これまでに当研究所の年次概要報告で既報告ではあるが、新たな知見を加えてまとめて報告することとする。整理作業体制は以下の通りである。

整理作業は、調査部 調査課 調査第4係 鈴木廣司、網 伸也、清藤玲子が担当した。

遺物復原・彩色は、調査部 資料課 村上 勉、出水みゆきが担当した。

保存処理は、調査部 担当課長 永田信一の指導のもと、卜田健司、竜子正彦が担当した。

なお、本報告書作成の作業担当ならびに原稿執筆者などは凡例を参照されたい。

第2章 遺構

第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)

調査対象地は平坦に整備されたグラウンドで、南北約130m、東西約120mの規模を有する。この調査対象地に1区から8区までの調査区を設置した。また、各調査区で検出した遺構が調査区外へ延長する場合には可能なかぎり拡張区を設定し遺構の解明に努めた。

1 遺跡の層序

各調査区の基本層序はほぼ同様の堆積を示すものの、基盤となる無遺物層の高さが南に向かって低くなるため、グラウンド造成土層は相対的に南に向かって次第に厚くなる。無遺物層上面での高低差を各調査区断面で観察すると、南北方向では、2区北端(T.P.=35.1m)から4区南端間の約104m間で0.75mの高低差がある(図8)。一方、東西方向(X=-109,855線上)では、5区東端(T.P.=34.8m)から3区の西端間の約100mの間で約0.2mの高低差があり(図9)、対象地内の無遺物層上面は南西に向かって緩傾斜を呈する。

基本層序は、現地表面からグラウンド整地土層が厚さ0.1~0.2m、グラウンド盛土層が厚さ0.4~1.2m、各時代の耕作土層が厚さ0.4~0.5m堆積し、無遺物層となる。平安時代の遺構は無遺物層上面で検出した。グラウンド上面から無遺物層上面までの深さは、2区で約1.3m、4区で約1.8mある。つぎに各土層の詳細を述べる。

耕作土層は、土層観察や出土遺物および耕作に伴う溝の検出状況から、各層中でさらに細分することができるが、中には堆積が途切れる土層もあり、耕作土層Ⅰ：明治時代から大正時代、耕作土層Ⅱ：江戸時代、耕作土層Ⅲ：室町時代の3層に大別した。耕作土層Ⅰは砂を多く含む灰褐

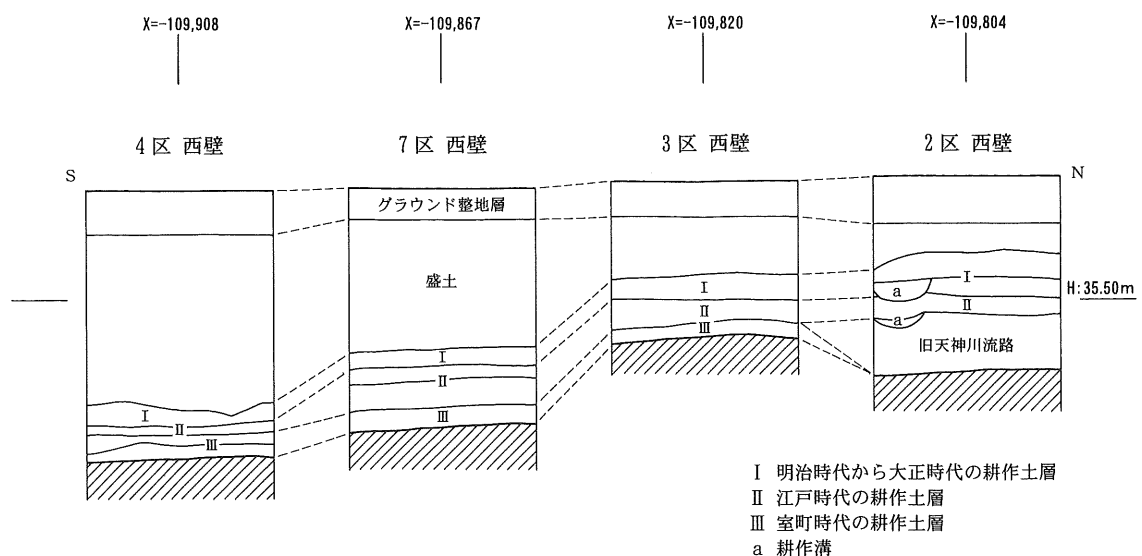


図8 調査区南北断面模式柱状図(深さ:1/50)

第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)

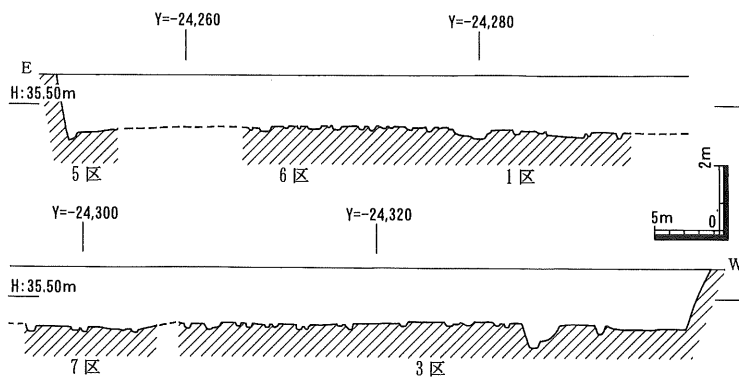


図9 調査区東西断面模式図(長さ:1/500 深さ:1/200)

色から灰黄褐色を呈する砂泥層で、2区の北部では厚さ約0.3mあり2層に細分できる。耕作土層Ⅱは、灰黄褐色から暗オリーブ褐色を呈する砂泥層で、厚さ0.1～0.28mある。耕作に伴う溝の多くはこの土層の上面で検出している。2区西端では、耕作土層Ⅱの下

層で流路もしくは氾濫を示すと考えられる灰黄褐色から黒褐色を呈する礫混じりの砂泥層が堆積し、18世紀から19世紀前半代に属する陶磁器類が出土した。8区の西半部でも氾濫を示すと考えられる堆積土層を検出している。耕作土層Ⅲは、オリーブ褐色から黒褐色を呈する泥砂層で、厚さ0.05～0.15mある。耕作土層Ⅲは調査対象地の西側に位置する調査区では分布しない箇所もあり、旧天神川により削平を受けたことが想定できる。

無遺物層は大別して3層がある。無遺物層Ⅰは、黒色から黒褐色を呈する砂泥層で、1区から3区にかけて部分的に堆積する土層である。無遺物層Ⅱは、黄褐色から灰オリーブ色を呈する粘土層ないし砂泥層で、厚さ0.6～1.0mある。各調査区に広く分布する土層で、平安時代の遺構の大半はこの土層の上面で検出している。この無遺物層Ⅱが粘土採掘の対象となった土層である。無遺物層Ⅲは、暗灰黄色や暗褐色を呈する砂礫層である。無遺物層Ⅲは1区の東端から2区の北端にかけてと、4区の北東部などで高まり、無遺物層Ⅱと同一面上に分布する。この砂礫層と粘土ないし砂泥層の変換点が地下水の湧水点となる。

2 平安時代中期の遺構

平安時代中期の遺構は、十六町のほぼ全域で検出し、平安京における1町規模の宅地利用の実態を明らかにすることができた。とくに、2・3区で検出した庭園遺構は、池跡を中心に全容が明らかとなった初めての事例であり、貴族宅地における園池と建物配置を示す資料として特筆に値する成果であるといえる。ここでは検出遺構の理解を容易にするため、調査区ごとに遺構の解説を加えることとする。なお、明記しないかぎり、建物・柵の方位はほぼ座標北である。

(1) 1区の遺構

調査対象地の北東部に設定した調査区である。近世以降の大規模な粘土採掘穴(土取穴)によって調査区の約3分の1の面積が破壊を受けていたが、それ以外の面では遺構は比較的良好に遺存しており、十六町北東部の様相を把握することができた。検出した遺構には、建物2棟(建物1・2)、柵3条(柵1～3)、井戸1基(井戸1)、地鎮遺構1基(地鎮遺構1)がある。建物2は2・3区東拡張区で検出した建物14に連続する建物であると考えられるため、次項で示す。

建物1 調査区北部で検出した東西4間(10.1m)、南北5間(13.1m)の南北棟建物である。検出した掘立柱の柱穴は側柱のみで、身舎に相当する箇所では柱穴などの柱位置を示す遺構は未検

出である。建物北東部の1基および南東部の2基の柱穴は、後世の遺構の削平を受け遺存していない。柱穴の平面形は、ややいびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.6～0.8m、深さ0.1～0.35mある。検出できた柱当りの柱径は約0.3mある。南柱列の柱穴底面には径0.2～0.3mの根石を据える。柱間は梁行・桁行とも端の間が2.7m、中央間が2.4mあり、8尺等間の身舎に9尺の底が4面に付く建物を復元できる。前述したように、身舎に相当する箇所柱位置を示す遺構は未検出であることから、身舎部分は基壇状に高まって礎石建ちであった可能性がある。

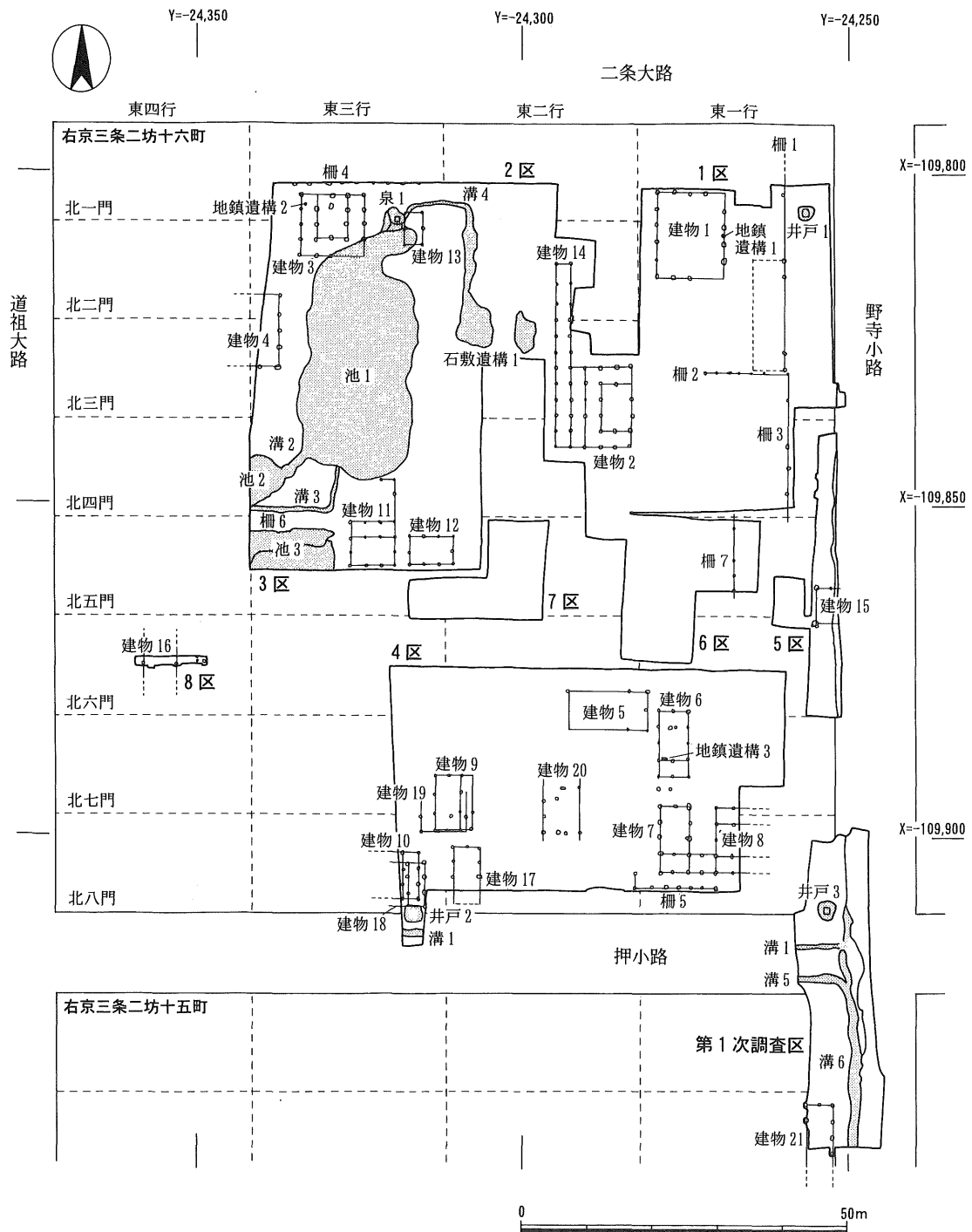


図10 平安時代中期遺構配置図 (1/1,000)

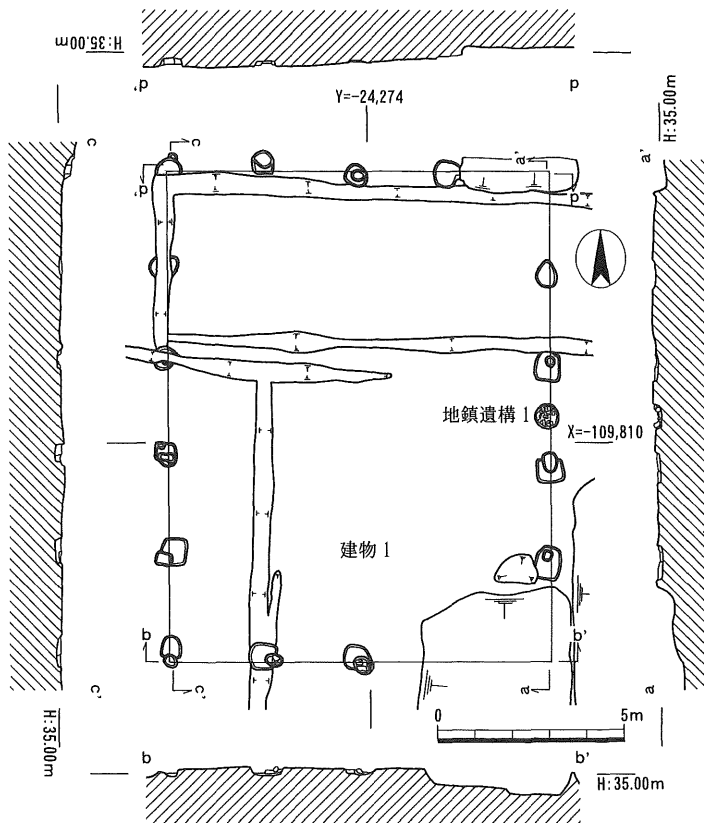


図11 建物1平面・断面実測図 (1/200)

地鎮遺構1 建物1の東柱列の中央間の中心位置で検出した土壌である。平面形は円形を呈し、検出面での規模は径0.65m、深さ0.2mあり、黒褐色砂泥層が堆積する。竈底に長径0.2～0.3mの礫を壁面に沿って並べ、中央にやや小振りの礫を2個置く。遺物は出土していないが、この土壌は建物1との位置から建物と同じ工程で造作されたものと考えることができ、建物建設時の地鎮に関わる遺構と考えられる。

柵1 調査区東部で検出した南北方向に延長する掘立柱の柱列である。中央部は粘土採掘穴によって削平を受けており、北部で1間分、南端で1間分の柱穴を検出した。野寺小路西築地心想定線から西に7.5mに位置する。柱穴の平面形はややいびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺約0.6m、深さ0.15mある。柱根が遺存する柱穴があり、検出した柱当りを含め、柱径は0.2～0.3mある。総延長は現存規模で16.4mあり、中央部は5間分に相当する柱穴が破壊を受けるが、柱間は8尺等間(約2.4m)の7間に復元できる。柵1の柱穴の規模は、他の柵の柱穴よりも大きく、建物1の柱

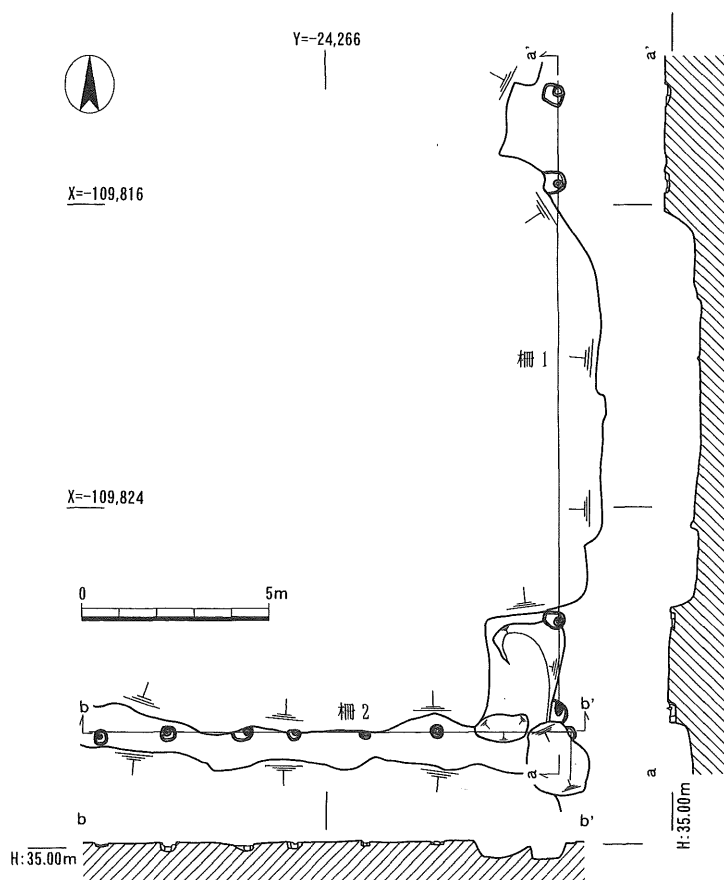


図12 柵1・柵2平面・断面実測図 (1/200)

穴の規模に匹敵する。西側と北側が破壊されているため類推の域を出ないが、建物1との配置から想定すれば、南北に長い建物の東桁柱列の可能性もあり、東西2間、南北7間以上の南北棟建物を想定することができる。

柵2 調査区中央で検出した東西方向に延長する掘立柱の柱列で、長さ12.4m分を検出した。東端の柱穴は柵1の南端柱穴と接する。柱間は1.3～2.2mと一定でない。柱穴の平面形は円形を呈し、検出面での規模は径0.4m前後、深さ0.1～0.25m、検出できた柱当りの柱径は約0.2mある。

柵3 柵2の南側で検出した南北方向に延長する掘立柱の柱列で、長さ17.5m分を検出した。柵2の東端柱穴位置と柵3の柱列の方向が一致し、柵2東端から南折して連続する柱列とも考えられるが、柱間などを考慮して、柵2とは別の柵として扱った。柱間は1.8～2.4mと一定でない。柱穴の平面形は円形を呈し、検出面での規模は径0.4m前後、深さ0.05～0.15mある。

井戸1 調査区北東隅で検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形の平面形はいびつな方形を呈し、一辺約2.2m、深さ0.9mある。掘形の中央に木枠を構築する。木枠は一辺0.9mある。底面中央を掘り窪め、径40cm、高さ24cmの曲物を据え付ける。木枠は、2面に枘穴を開けた隅柱を四隅に立てて横棧で組み、その外側に幅20～30cm、厚さ5cm、現存高さ50～60cmの縦板を一辺につき3枚立てて構築している。縦板や隅柱は建築部材を転用する。木枠内には、上層に黒褐色砂泥層が、下層は黒色泥土層が堆積する。

井戸1の北東側で、井戸1によって削平を受けた井戸跡を検出した。本来ならば別の遺構番号を付さなければならないが、検出位置から井戸1の作り替え(旧段階の井戸)と考えており、ここで扱っておく。旧段階の井戸は、掘形の平面形は方形を呈し、一辺約2.5m、深さ0.6mある。北東隅部で方形縦板組の一部が遺存していた。

(2) 2・3区の遺構

調査対象地の北西部に設定した調査区である。調査の経緯で述べたように、2区で園池遺構を検出し、遺構の広がりを確認するため2区から南へ連続して3区を、東に拡張区をそれぞれ設定した。それぞれの区にまたがる遺構もあるため、ここでは明示が必要と考えられる場合を除いて検出位置は表記しない。

2・3区は、粘土採掘の対象となった土層である粘土層(無遺物層Ⅱ)が広く分布するが、幸いにも粘土採掘が全く及んでいなかった。北部では砂礫層(無遺物層Ⅲ)から無遺物層Ⅱへと変換しており、この位置に湧水が多く認められる。遺構は良好に遺存しており、池跡を主体に十六町北西部の様相を把握することができた。検出した遺構には、泉2基(泉1・2)、池3基(池1～3)、溝3条(溝2～4)、石敷遺構1基(石敷遺構1)、建物6棟(建物3・4・建物11～14)、地鎮遺構1基(地鎮遺構2)、柵2条(柵4・6)、土塋2基(土塋1・2)がある。1区で検出した建物2は建物14と密接な関係にある建物と考えられるためここで扱う。

2・3区で検出した遺構の広がり、池1を中心として十六町の敷地の約4分の1町を占める。溝2は南西へ延長し、溝3は南へ延長したのち西折してそれぞれ池2へ至る。さらに池2の南側には池3が位置する。これら相互に関連した池の周囲に建物や柵あるいは空間がたくみに配置さ

れている。溝4は泉1の北東部から東へ延長し、南折して石敷遺構1へ連続する。

泉1 池の最北端で検出した泉である。北西部は後世の遺構により一部削平を受ける。掘形の平面形はややいびつな長方形を呈し、東西約2.5m、南北約2.2m、深さ約0.85mある。掘形の中央部に方形の木枠を据える。木枠の構造から、新旧の2時期ある。底面は砂礫層(無遺物層Ⅲ)に達しており、この土層が湧水層と考えている。

旧段階の泉は、一辺約1.1mの木枠を横板組に組み合わせて構成する。板材は長さ130～140cm、幅30cm、厚さ4cmある。南北方向の板は、両端を上下から切り込み、長さ12cm、幅12cmの枅を作りだす。東西方向の板は、両端から約10cmの箇所、幅5～6cm、高さ15cmの枅穴を設け、南北方向の板と組み合わせる。南東隅の枅穴には平面形が三角形を呈する楔が差し込まれていた。また、板材の長辺の端面中央部には枅穴があり、現存高2～4cm、長さ6cm、幅2cmの枅が遺存していた。このことから、旧段階の泉の木枠は、横板2段組の構造であったと考えられる。底部中央には長径約0.6mで深さの浅い不整形な窪みを持ち、長径15cm程の礫を5個、円形を意識して据えていた。底面の標高は34.35mである。旧段階の枠内には黒褐色砂泥層が堆積し、長径30cm前後の石を含む多量の礫が混入する。

この泉は10世紀初頭に旧段階の下段木枠を残して解体され、門礎石などを含む石群を枠東半部に組み上げて南辺と東辺を縮小し、幅約25cm、厚さ約0.25cmの薄い横板で一辺約0.8mの方形枅に改修している。その際、新段階木枠の南辺と東辺は旧枠内に新たに設置した石の上に直接載せて石組みで固定しており、これらの石組み構造物を西からより効果的に見せる工夫がなされている。西辺および北辺木枠は旧段階木枠の上に載せられたと考えられるが、遺存状況は良好でなく組み方の詳細は明らかでない。

新段階の泉の堆積土層は、上面は後述する池1と同様の土層が堆積しており、木枠内の堆積層は上下2層堆積する。上層は粘質を帯びた黒褐色砂泥層で、腐植土を含んでおり、厚さ約0.3mある。下層は黒褐色砂泥層で厚さは枠周辺で0.2～0.3m、中央部は窪み約0.15mある。木枠内には長径20cm前後の石を含む多量の石が混入する。新段階の底面標高は34.45mである。

巻頭図版の人形代は、新段階の泉の堆積土層中位から頭部を上、墨書面を内側に三つ折りにした状態で出土した。また、上層から土師器皿2枚が合わせ口にした状態で出土している。

導水路 泉1から池1に連続する間の導水施設で、水路・堰からなる。泉1から池に連続する導水部で水路を検出した。検出面での規模は長さ約1.5m、幅約1.4m、深さ0.15～0.25mある。この水路と池1の境界に堰がある。堰は長さ約160cm、幅約5cm、厚さ1cm弱の板を使用し、両端南側は杭で固定する。堰の後方の砂礫層は、周囲に比べ礫の状況は異なっており、泉から湧き出す水流の豊富さを示している。なお、導水路の標高は、北で約35.0m、南の堰部で34.9mである。

池1 2・3区中央で検出した池で、泉－水路－堰－池へと連続する。

池1の平面形は南北に長い楕円形を呈し、検出面での規模は、東西約15m、南北約40m、深さは最深部で0.5mある。池1の堆積状況を観察するために、中央の南北断面を1条、東西断面を数箇所設置した。このうち、池1西岸部洲浜のX＝－109,820線上に設定した東西断面の一部を図14

に示した。池1の土層堆積状況は、図中の第2～4層がほぼ水平に堆積している。第1層は中世の耕作土層であり、調査区全体に広がっている。第2層からも中世の遺物が出土しており、当該期においても池跡に残った窪みに耕作土層が堆積したと考えている。第3層から出土する遺物は、平安時代中期の遺物が主体であるが、中には平安時代後期の遺物も混入している。第4層は池が機能していた時期の堆積土層で、池底の凹凸にしたがって厚さ0.05～0.1mある。第4層は腐植土層の比率が高く、種実・枝など自然遺物も多数出土している。第5層は洲浜の石が崩れ始め、その石と石の間に堆積した土層と考えている。第4層に対応し、第3層のように平安時代後期の遺物は出土しない。第6層とした土層は、洲浜の石を貼り付けるための粘土層であるが、原位置を保つ石を覆う2次的な堆積土層も含まれている。なお、遺跡保存を前提に調査を進めたため洲浜の断割作業は行なっておらず、第6層の所見は後世の遺構の断面などから観察したにとどまる。

池は洲浜の様相や景石の配置など、それぞれの箇所の特徴的な意匠を有することから、以下、

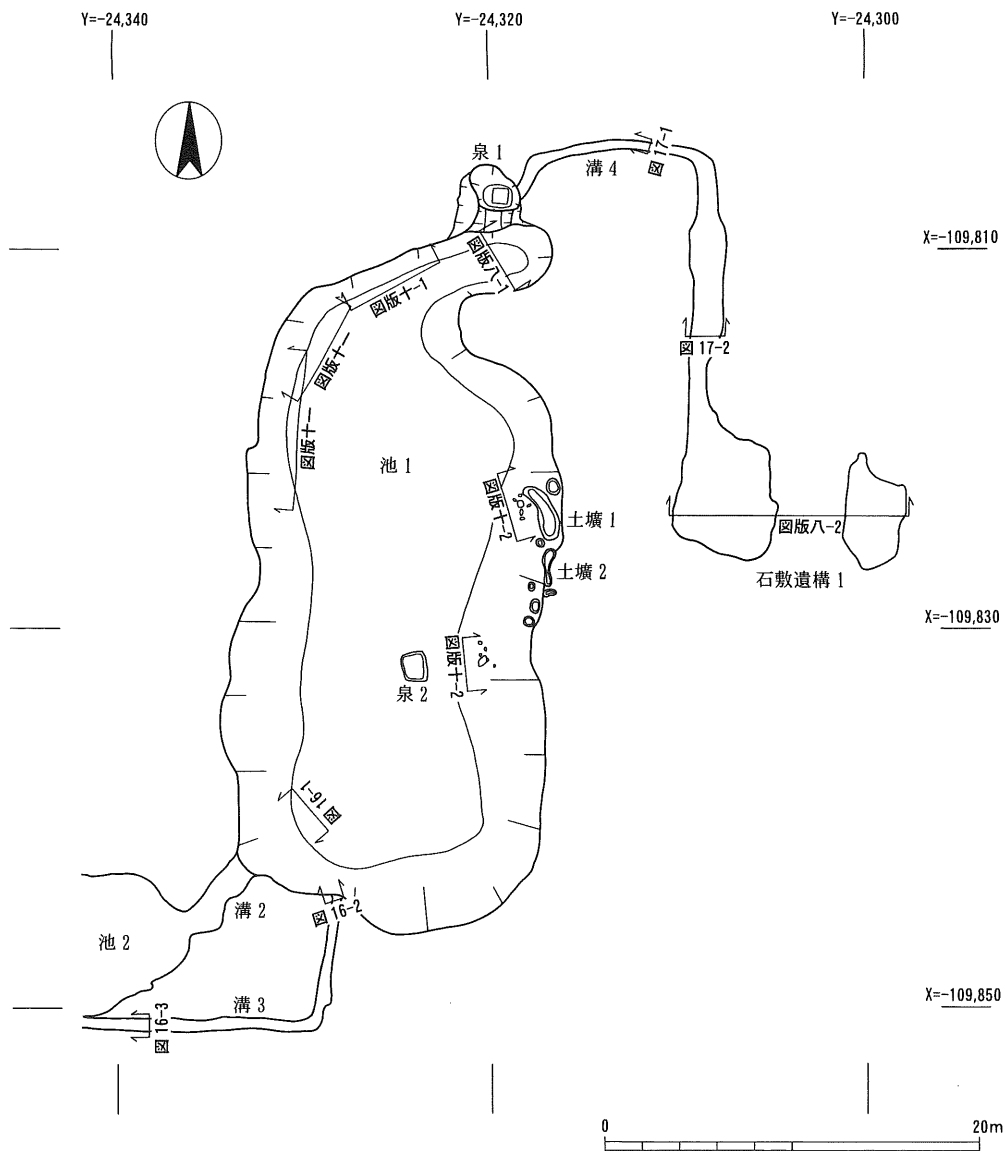


図13 園池遺構断面・立面図計測位置図 (1/400)

各箇所^{註1}の状況について詳述する。

ア) 北東部汀 堰から池1に水が流れ込む部分は、南北幅約3mの南西に傾斜する水路のような形状をとって池の本体へとつながる。底部の標高は、堰の南部で34.8m、南西部は約34.7mと傾斜が緩やかである。深さは0.3mで、東汀は緩やかな傾斜面をもち、堰から東へ約2.5mの位置で陸部となる。底部にはやや小振りの石がまばらに貼り付けられているが、基盤となる粘土層上には石のはずれたような凹凸が各所に遺存しており、当初は密に敷かれていた可能性がある。また、東傾斜面には5cm程黒褐色砂泥(粘質)層が堆積しており、この土層から礫とともに土師器杯皿類を中心とした土器群が多量に出土した(土師器第1グループ)。これら土器を多量に含む黒褐色砂泥(粘質)層は東汀を造成する意図的な整地層と考えられる。南岸の傾斜部には護岸意匠は施されないが、北岸では、堰の東で化粧護岸としての石列を東西約1.5mにわたって検出しており、この石列はY=-24,317ラインの西で北に直角に並ぶ石列として一部残存していた。泉部周辺を区画する化粧石が存在した可能性がある。後述する建物13の南西部2箇所の礎石は、東汀の整地層内と石列内に組み込まれていた。なお、堰の西にも北護岸の石組みが施されるが、これは北岸部石垣に連続していく。

イ) 北岸部石垣・張り出し部 池の北岸で石垣を検出した。堰の西から南西に延びるまばらな石列に連続して、Y=-24,322ラインから北岸部石垣が始まり、建物3の東側柱を接して建物内のY=-24,326ラインまで続く。長さ5m、高さ0.2~0.3mある。池肩口の粘土層(無遺物層Ⅱ)に幅0.2~0.3mの平坦部を削り出し、その平坦部上面に長径20~30cmの角張った石材を組み上げ石垣とする。石垣は2段検出したが、石垣に使用したとみられる同規模の石が池堆積土層中に含まれていることから、上部にはさらに1・2段積み上げられていたと考えられる。

石垣の前面では0.2~0.6m間隔でほぼ垂直からやや斜めに打ち込まれた杭を8本検出した。杭の現存規模は長さ20cm、径5cmある。石垣の裏込め側でも数本検出した。砂礫層(無遺物層Ⅲ)上の杭は、石垣の崩落状態と同様に傾いてはいるが、原位置は保っている。石垣検出面での陸部標高は35.1~35.15mで、底部標高は34.75mである。

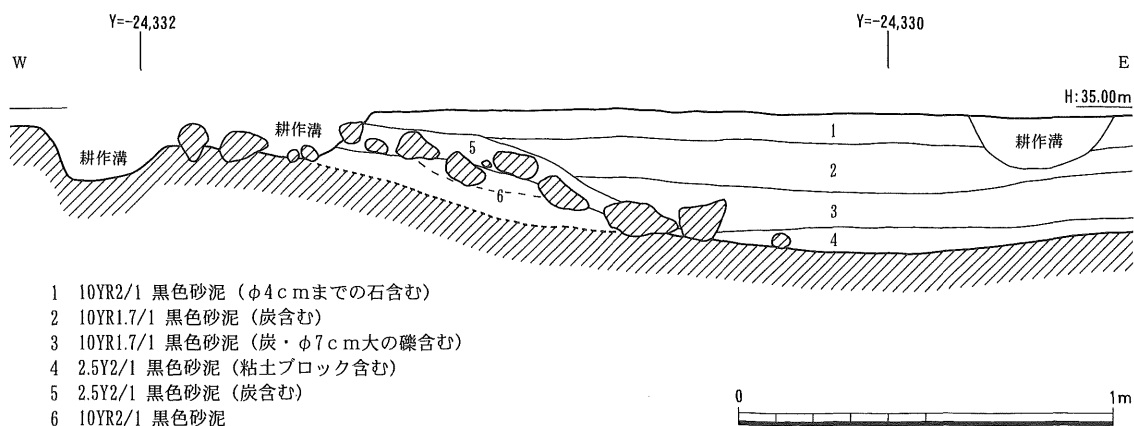


図14 池1西岸部洲浜断面実測図(X=-109,820 1/20)

石垣の南東部対岸には、半島状を呈する張り出し部がある。張り出し部の検出面での規模は長さ約5m、幅は先端部で約3.2mある。張り出し部の西半部は砂礫層(無遺物層Ⅲ)が露呈しているが、その他の箇所には白色ないし茶褐色の粘土を無遺物層Ⅲ上に貼り付けて固く叩き締めている^{註2}。張り出し部の形状を保つための施工と考えている。張り出し部の上半では石垣あるいは洲浜などは未検出である。泉から湧き出した水は、この張り出し部分で南西方向に流れを変え、池の中央部に至るものと想定できる。

ウ) 西岸部洲浜 建物3の南側から建物4の東にかけて検出した。検出面での規模は長さ約11m、幅1.2～1.5m、傾斜角度は13°前後ある。洲浜はX=-109,824付近で途切れ、この付近で傾斜角度は緩傾斜となる。洲浜には拳大ほどの石が密に敷き詰められ、長径20cm前後の石も多量に使用されているが、意図的に面を揃えることはしない。また、大きい石の中には原位置を失ったものが相当数あり、上部に使用された石が崩落したと考えている。洲浜の検出面での陸部標高は、35.0m、池底部標高は34.6～34.65mである。

エ) 東岸部景石 北部の張り出し部から弧を描いて東方に広がる箇所では、張り出し部から南へ約10mの東岸斜面(標高34.8～35.0m)で、景石および景石が抜き取られた痕跡(土壙1・土壙2)を検出した。

土壙1は、池と陸部の境界で検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈し、検出面での規模は長さ約3m、最大幅約1m、深さ0.8mある。底部面には凹凸がある。この抜き穴の規模から類推すると、大規模な景石が複数個据えられていたと想定できる。この抜き穴の前面には拳大から人頭大の石を使用した石敷が広がり、先端には長径40cmを超える石も据えられている。また、この景石抜き跡の南部でも大小の窪みを検出していることから、景石が配置されていた可能性がある。そのうちの一つである南北に細長い土壙2の北端では、地鎮のために据えられた緑釉陶器皿が出土している。土壙2の検出面での規模は、長さ2m、最大幅0.7mあるが、深さは0.1m程と非常に浅い。このように、北東部から東部にかけては、池1の中でも大規模な景石を配置していたことが想定でき、洲浜を構成する西岸部とは異なった意匠を示している。この部分での池1底部は、標高34.65mである。

これらの抜き穴の南西方向の池中には、唯一原位置を保つ景石が遺存していた。石材は黒雲母花崗岩で、上面は平坦面を有する^{註3}。長さ約70cm、幅約40cm、高さ約30cmある。景石を据えた池の底面は周囲よりも一段高く造作しており(標高34.7m)、景石の上部は標高34.93mと、想定水面から浮き出るように配置されたと考えている。

オ) 南岸部洲浜 池の南半部は、幅4.0～4.5mで、傾斜角3°程度のなだらかな斜面に、拳大に充たない玉石を密に敷詰めた洲浜となっている。ただ、南西部では、長径20cmを超える石も少量使用されている。また、南東部の洲浜は、南西部に比較すると石敷の密度は若干低い。

泉2 池1底面の中央南寄りで検出した泉である。平面形は方形を呈し一辺約1.5m、深さ約0.25mある。泉1のように周囲の造作はなく、素掘りのままである。底面は砂礫層(無遺物層Ⅲ)に達する。湧水を確保するための施設と考えている。泉2の底部の標高は34.3mで、周囲の池1

第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)

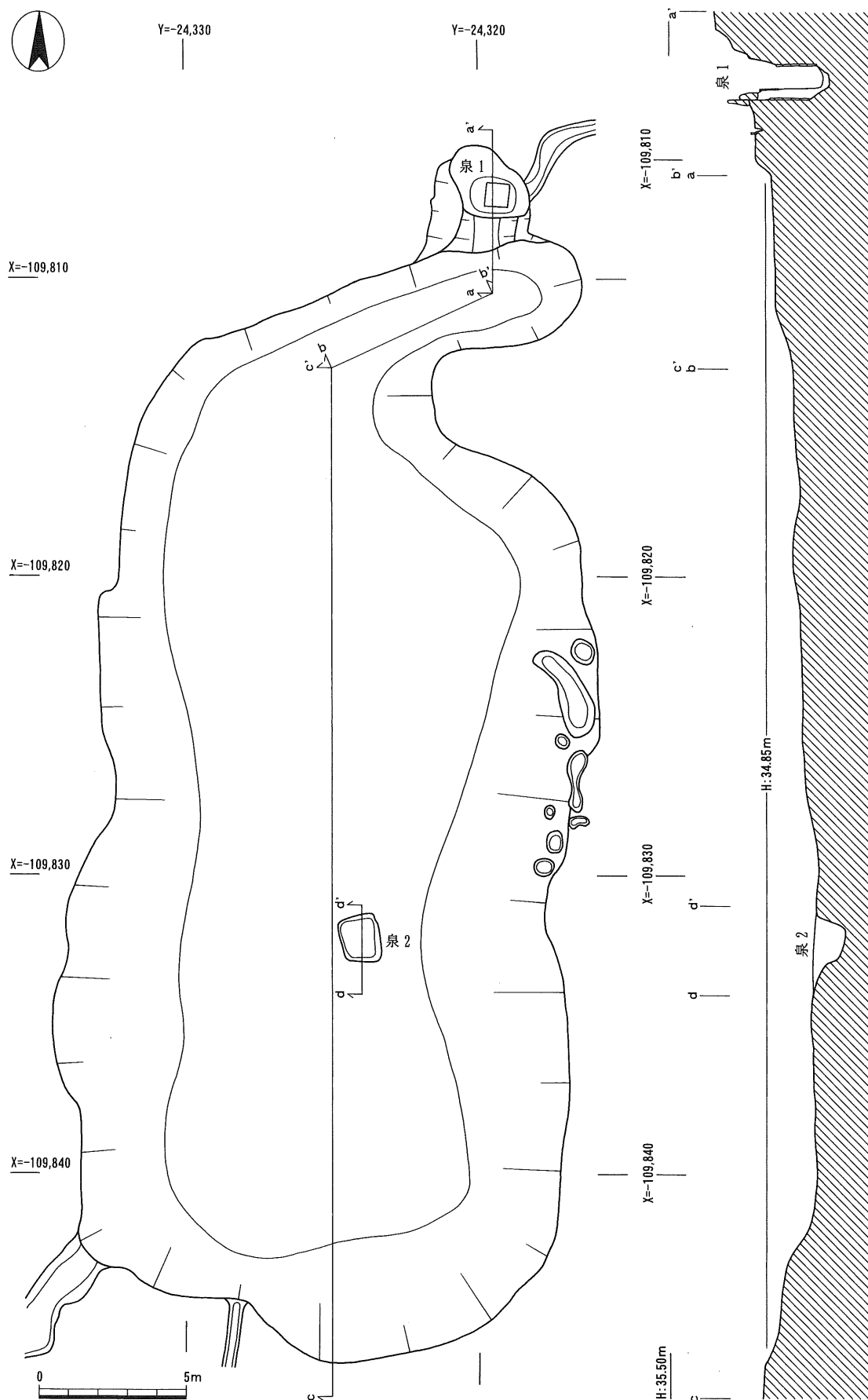


図15 池1平面・断面実測図(長さ:1/200 深さ:1/40)

底部は、34.55～34.6mと非常に平坦である。

溝2 池1の南西部で検出した、池1から連続し北東－南西方向に延びる遣水状の溝である。この溝2の南西部には後述する池2があり、池1－溝2－池2と連続する。溝2は池2に連続する箇所が後世の遺構により削平を受けるが、検出面での規模は長さ約4.5m、幅約1.5m、深さ0.02～0.04mと非常に浅い。溝底面のほぼ全面に南西部の洲浜から連続する石敷があるが、この溝の石敷は池1の底面より高位に位置しており、池1から排出される上水を池2へ流す施設と考えている。なお、池1と溝2の接続部の池1底面の標高は34.6m、溝2底面の標高は34.8mである。溝2が池1の上水を流す機能をもつのであれば、必然的に池1の満水時の水面標高は、34.8m強と推定できる。

池2 溝2の南西部で検出した池である。西部は調査区外に広がり、検出面での現存規模は、南北約8m、東西約6m、深さ約0.2mある。拳大前後の大きさの石を密に、また比較的平坦に敷き詰めている。この石敷上面は、溝2との接続部から西に向かって緩傾斜を呈しており、東端底面で標高34.7m、西端底面の標高は34.6mある。

溝3 池1の南端部で検出した素掘りの溝である。池1から連続して南に延長し、北四・五門界付近で西折する。西へは池2と連続するが、接続部は後世の遺構により削平を受ける。池1から溝3への導入部ではほぼ完全な丸瓦を検出した。検出面での規模は幅0.5～0.7m、深さ0.15mある。池1と溝3の接合部の池1底面の標高は34.58m、溝3の底面の標高も34.58mで、底面はほぼ同じ高さにある。また、池2との接続部の標高は、溝3の底面で34.55m、池2で34.6mである。なお、南岸部洲浜の石敷はこの溝を覆っており、池1の機能時には塞がれていたと考えられ、溝2とは用途の異なる溝であることが想定できる。各底面の標高の比較からは、清掃など、池1の水

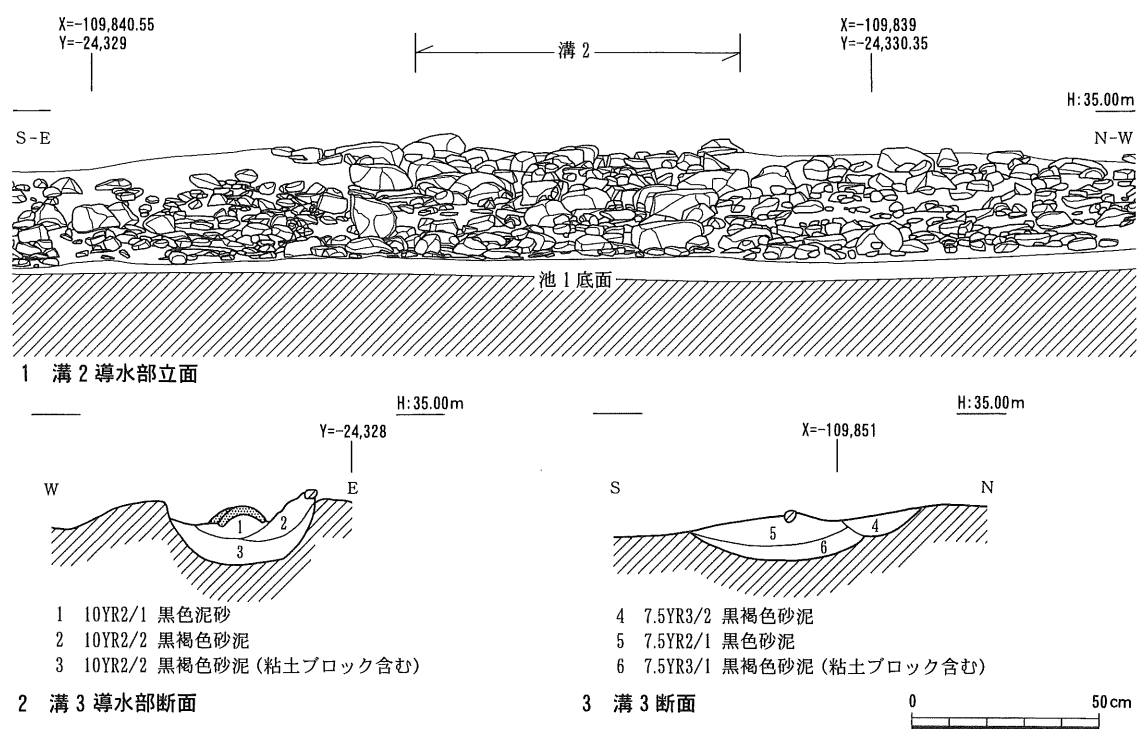


図16 溝2 導水部立面図・溝3 断面実測図 (1/20)

第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)

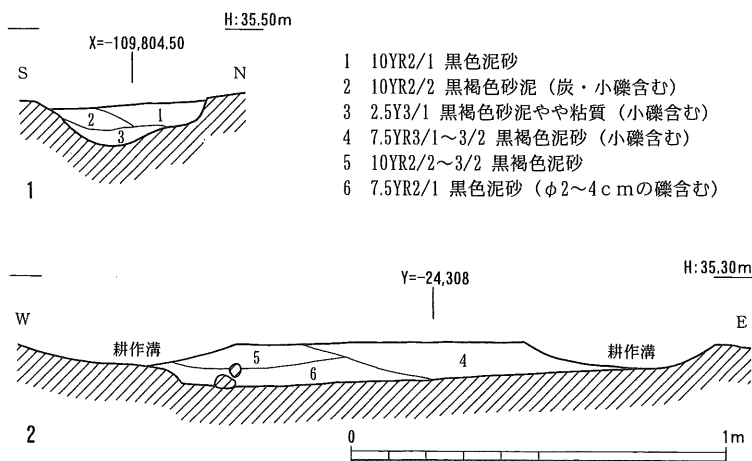


図17 溝4断面実測図(1/20)

向へ直線的に延長し、溝3南半部とは並行の位置にあり、池3北肩口と溝3間には幅約2.5mの空地となる。出土遺物は池1と同時期で、池1・2とともに機能した施設と考えている。底面の標高は、34.45~34.5mである。

溝4 泉1の東で検出した溝で、泉1と連続する。東へ約10m延長して南折する。検出面での規模は幅0.5~0.6m、深さ0.15~0.2mある。南へは石敷遺構1に連続する。溝底面の標高は、泉1との接続部で35.2m、石敷遺構との接続部で34.95mである。泉1・導水路の標高と比較すると、泉1の水は絶対に溝4には流れないことがわかる。

石敷遺構1 溝4の南端部で検出した石敷を伴う遺構である。東約3.5mにやや小規模で同様の遺構があるが、石敷遺構1中央部が削平を受けた結果の現況と考えている。平面形はいびつな菱形を呈し、検出面での規模は南北約6.2m、東西約5.8m、深さ0.1mと非常に浅い。底面に径5cm前後の細かい石などを敷き詰める。肩口周辺に沿って、石の抜取穴と考えられる大小の穴が多数あり、景石を据えていた可能性も考えられる。底面の標高は34.95mである。また、石敷遺構1の東の窪みは、平面形が南北に長い楕円形を呈し、検出面での規模は南北約6m、東西約3.5m、深さ0.1m程である。底面に石をまばらに敷く。これら遺構の出土遺物は、池1と同時期であり、検出位置からも庭園施設の一部と考えられる。

建物3 泉を東に、池を南に眺めるように建てられている。この建物は東西4間(9.7m)、南北4間(9.4m)の方形で南面と東西に庇を持つ構造である。身舎の柱間は7.5尺等間、庇は東と南が9尺と広く、西が8尺と不規則な構造に復元できる。南東隅の庇部分は池に入っており、柱穴を確認することができなかった。推定建物内では汀線の護岸石組が施されていないことから、建物南東部に推定される2箇所の柱は、池の中に礎石を据えて建てられていたと考えられる。泉から流れてきた水は、この建物の南東部の床下を流れていく構造だったのであろう。柱穴の平面形は、いびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.5~0.7m、深さは0.1~0.25m、池の肩口部に設置された2箇所の柱穴には柱根が遺存しており、柱径は約0.2mある。これら2箇所の柱穴は柱を据えた後、石で覆い洲浜への修復がなされている。

地鎮遺構2 建物3の北西隅で建物の造営に伴う小土壙を検出した。遺構は直径0.8mの浅い土

を抜く必要が生じた時、排水路として機能したと考えられる。

池3 調査区南西隅で検出した湿地状堆積を示す池で、南および西へは調査区外へ広がる。検出面での現存規模は、南北約6m、東西約14m、深さ約0.4mある。底面は凹凸がある。池3の北肩口は東西方

墳で、3枚の土師器杯と2枚の土師器杯をそれぞれ重ねて正位で置き、さらに土壌内に小石を充填させていた。同様な遺構は平安京跡の各所で検出されており、地鎮に伴う遺構と推定されている。

建物4 池の西側で東西1間分(2.7m)、南北4間(10.8m)を検出した。調査区外へ広がるため全体の規模は不明であるが、東側柱は北から10尺・8尺・8尺・10尺の柱間を取っている。身舎部分の柱穴は検出できないことから、建物1と同じく身舎部礎石建ちで庇柱が掘立柱構造の四面庇建物と考えられる。おそらく、身舎部分は8尺等間、庇の出は南北が10尺、東西が9尺となるのであろう。柱穴の平面形はいびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.5～0.7m、深さ0.1～0.15mある。検出できた柱当りでは、柱径は0.25mある。北側柱列は拡張して次の柱穴を求めたが、江戸時代の旧天神川流路により消失していた。東側柱列の柱穴には、北端を除いて東に接して添え柱と考えられる長軸約0.3mの小規模な柱穴を検出した。建物4は池のほぼ中央で、対岸に景石群を望む位置にある。

建物11 池1南岸部洲浜の南、中央よりやや東寄りで検出した。東西3間(6.6m)、南北3間(6.6m)の方形の建物で北に庇がつく。建物11の身舎部分と後述する建物12は、全く同じ構造で、梁行7尺等間、桁行は7尺・8尺・7尺に復元でき、建物11では北に8尺の庇がつく。柱穴の検出面での規模は長軸0.3～0.6m、深さ0.1～0.15m、検出できた柱当りでは柱径は約0.2mある。また、建物11の東側2条の柱列を北へ延長した線上に3基の柱穴を検出している。いずれも、直径60cm未満の柱穴で構成されており、また平面形も丸みを持ったものが多い。

建物12 建物11の東約2.4mで検出した東西3間(6.6m)、南北2間(4.2m)の東西棟である。建物11の身舎部と同じ構造に復元できる。柱穴の検出面での規模は0.4～0.7m、深さ0.15～0.25mあ

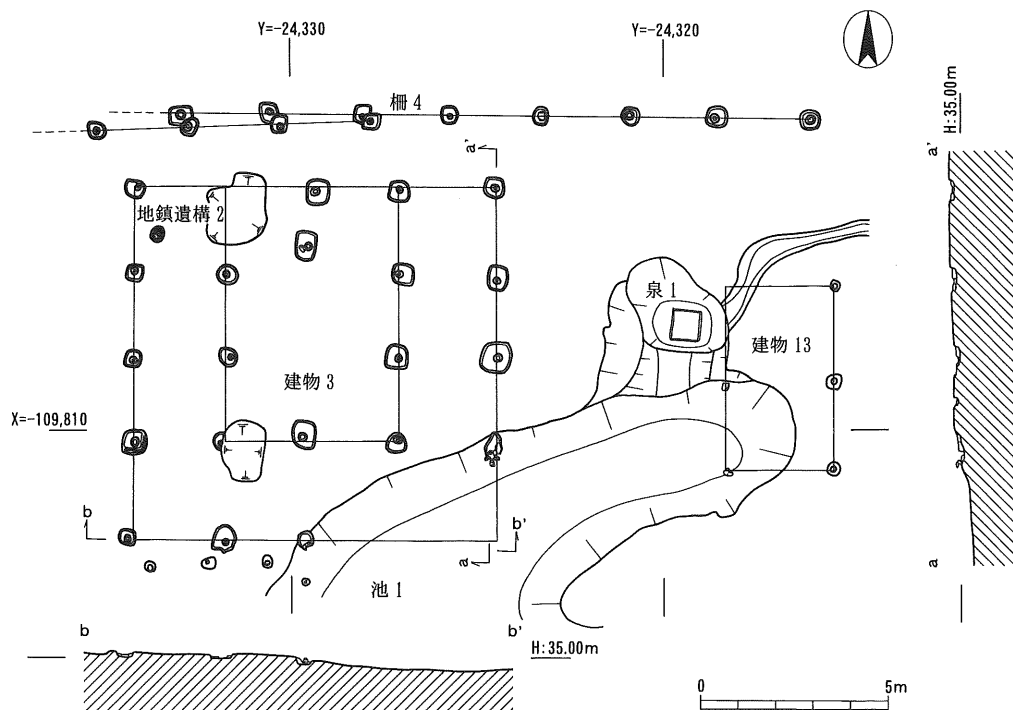


図18 建物3・建物13・柵4平面・断面実測図 (1/200)

第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)

る。検出できた柱当りでは、柱径は0.2mある。建物11に比べると、座標北に対して若干西に振れることからこの2棟は別棟としたが、棟続きの建物の可能性もある。

建物13 泉1の南東部で、導水路部より東側が張り出し、入江状をなす部分にある。東西1間(2.85m)、南北2間(4.8m)で検出した。東側の柱列は掘立柱で、西側の柱列は礎石柱に復元できる建物である。柱穴の平面形は、いびつな方形ないし円形を呈し、検出面での規模は0.3~0.4m、深さ0.05~0.1mある。検出できた柱当りでは、柱径は約0.15mある。西側柱列は、南端が池汀部に据えられた礎石(長径30cm、上面の標高は35.0m)、中央が石垣の一部に組み込まれた礎石(長径25cm、上面の標高は35.1m)として検出した。北端も柱穴を未検出であることから、礎石を据えたと考えられる。前述したように建物南半から堰部分にかけての整地層内で、完形品の土師器杯皿類を含む多くの土器が出土した。短期間に形成されたものと思われる状況で一括性の高い土器群である。

建物2・14 建物2・14は主軸方向や柱間、柱穴規模などを考慮すると密接な関係にあることがわかる。建物としてのまとまりごとに概要を記す。

建物2は1区の西端中央で検出した南北12.1m、東西6.95mの規模を有する南北棟掘立柱建物で、東を除く3面に庇がつく。身舎の柱間は、桁行・梁行ともが8尺等間に復元できる。庇の出は北庇と南庇が8尺、西庇が7.5尺である。柱穴の平面形は、いびつな方形を呈し、検出面での規模は長軸0.5~0.7m、深さは南西部柱穴で0.3m、他は0.05~0.2mある。検出できた柱当りでは、柱径は0.2~0.3mある。身舎東柱列の中央の2基の柱穴には添え柱と考えられるほぼ同規模の柱穴が接する。

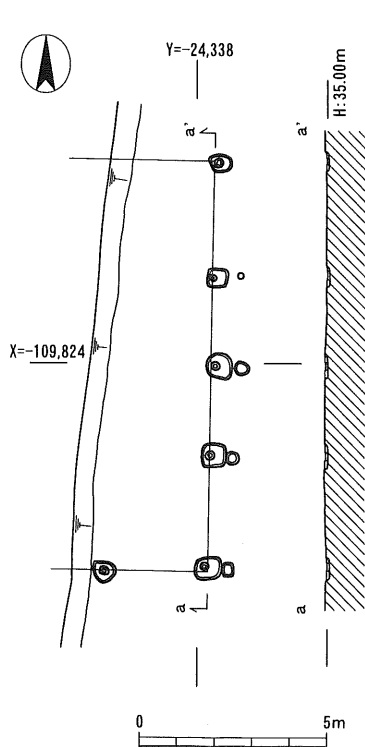


図19 建物4平面・断面実測図
(1/200)

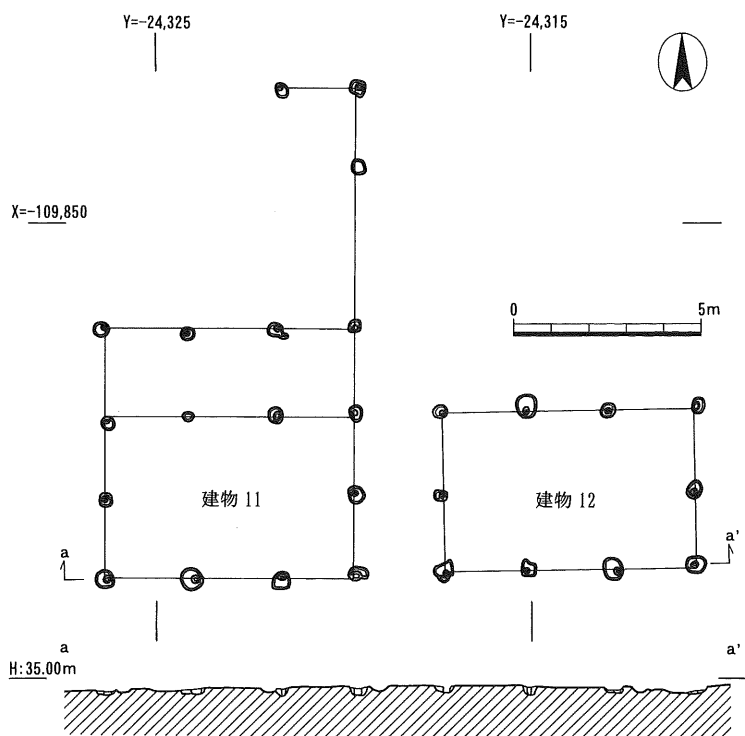


図20 建物11・建物12平面・断面実測図 (1/200)

建物14は建物2の西側で検出した南北11間(27.8m)、東西1間(2.25m)の南北棟掘立柱建物である。柱穴の平面形は、いびつな方形ないし円形を呈し、検出面での規模は長軸0.3~0.6m、深さは柱根が遺存する柱穴で0.35m、他は0.1~0.15mある。遺存する柱根や検出できた柱当りを含め、柱径は約0.25mある。建物14の南半の6基の柱穴は、建物2の全ての梁行柱列と同一延長線上にあり、6間目から9間目までも同規模の8尺等間に復元できるが、北端の10・11間目は柱間が約3mで10尺等間となる。また、建物14の東柱列と建物2の西庇柱列の柱間も2.25mであり、建物14から建物2の西庇までの東西柱間は7.5尺等間となる。各建物の柱間から想定すると、この2棟の建物が密接な関係にあると考えており、建物14は建物2から連続する建物であろう。建物2との取り付きにつ

いては、建物2の南北庇部分から建物14へ廊で連結する構造が妥当と考えられる。

なお、建物14の北から5列目の柱間中央やや北寄りの位置で完形の地鎮壺が横たえた状態で出土した。据えるための施設の痕跡は、耕作溝で壊されており明らかにできなかったが、出土位置や検出状況から建物14に伴う地鎮に関係する遺物と考えられる。

柵4 建物3の北側で東西7間分(16.8m)を検出した。柱間は8尺等間である。柱穴の検出面での規模は一辺0.4~0.5m、深さ0.1~0.15m、検出できた柱当りでは、柱径は0.2~0.25mある。柵と判断したのは、柵4の中央部にあたる柱穴の北側1箇所を可能な限り拡張し精査を行なったが、柱穴は認められなかったためである。柵4に関しては二条大路推定築地心まで9m余りの距離を

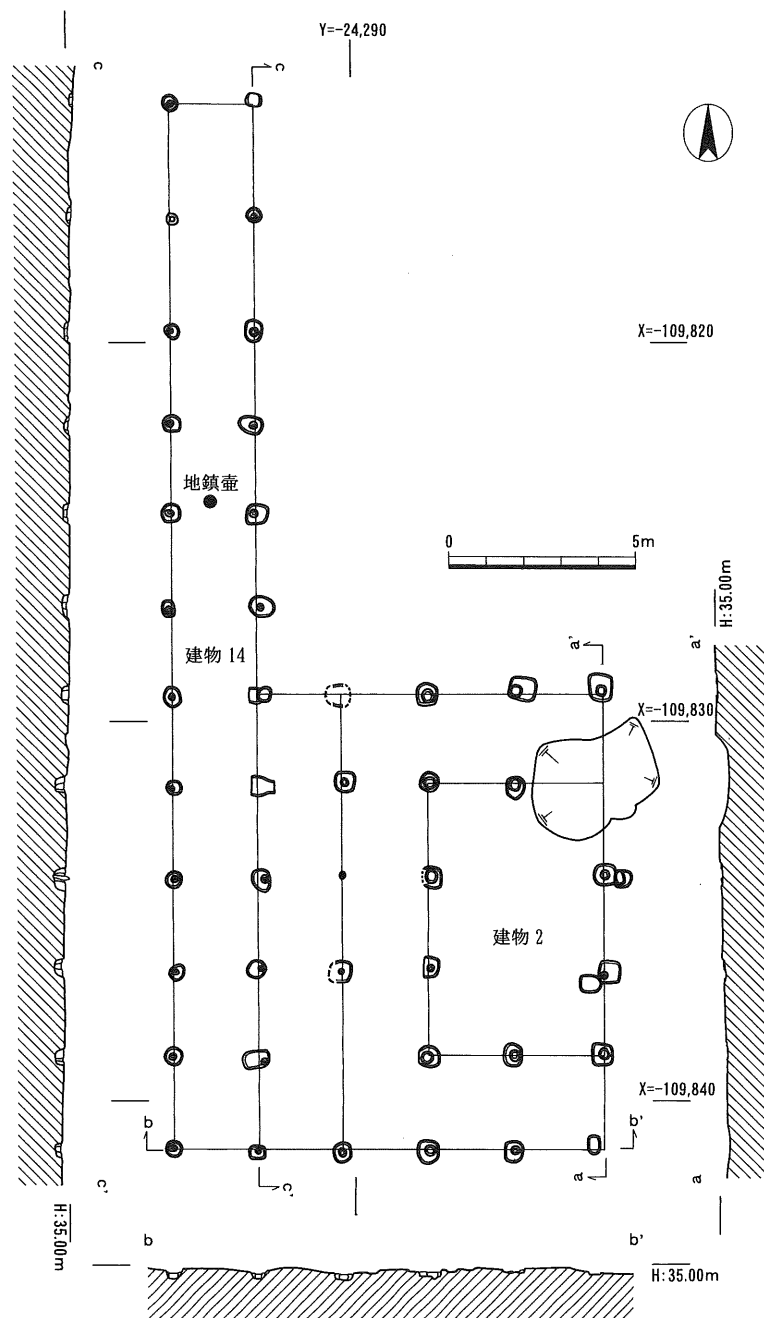


図21 建物2・建物14平面・断面実測図 (1/200)

第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)

残していることから、柵4が建物14同様の廊下の遺構である可能性も考慮に入れておきたい。

柵4の南に接して、さらに東西方向の柵を1条検出した。3間分(7.3m)を検出し、柱間は8尺等間に復元できる。検出面での規模は一辺0.5m、深さ0.05～0.15mある。検出できた柱当りでは、柱径は約0.2mある。東側3基の柱穴は、柵4の3基の柱穴と同位置にあり、柵4柱穴を切っている。柵4西部の作り替えて、さらに西に1間分延長したと考えている。柵4と比べると、主軸方向は座標東に対し北に若干振れる。

柵6 池3の北辺部の傾斜面で、東西4間分(約11.7m)を検出している。柱間是不揃いながら、東から2.8m・1.8m・2.8m・3.3mとも解釈できる。柱穴はいずれも直径0.3m未満の円形で、深さ0.15m、検出できた柱当たりでは、柱径は0.2mある。溝3との関連から柵に類した施設が考えられる。主軸方向は座標東に対し、北に若干振れる。

(3) 4区の遺構

調査対象地の南半分に設置した調査区である。1区と同じく、近世以降の大規模な粘土採掘穴によって中央部が削平を受けていたが、東部は砂礫層(無遺物層Ⅲ)が粘土層(無遺物層Ⅱ)と同一面まで高まっていることから粘土採掘が及ばず、遺構は比較的良好に遺存していた。この調査区では十六町南半部の様相を把握することができた。調査区南端には押小路北築地心想定線が東西に延長することから、南西部に南拡張区を設定した。検出した遺構には、建物10棟(建物5～10・建物17～20)、地鎮遺構1基(地鎮遺構3)、柵1条(柵5)、押小路北側溝1条(溝1)、井戸1基(井戸2)がある。

建物5 粘土採掘穴で壊されており東端部のみの確認であるが、南北2間の東西棟と考えられ

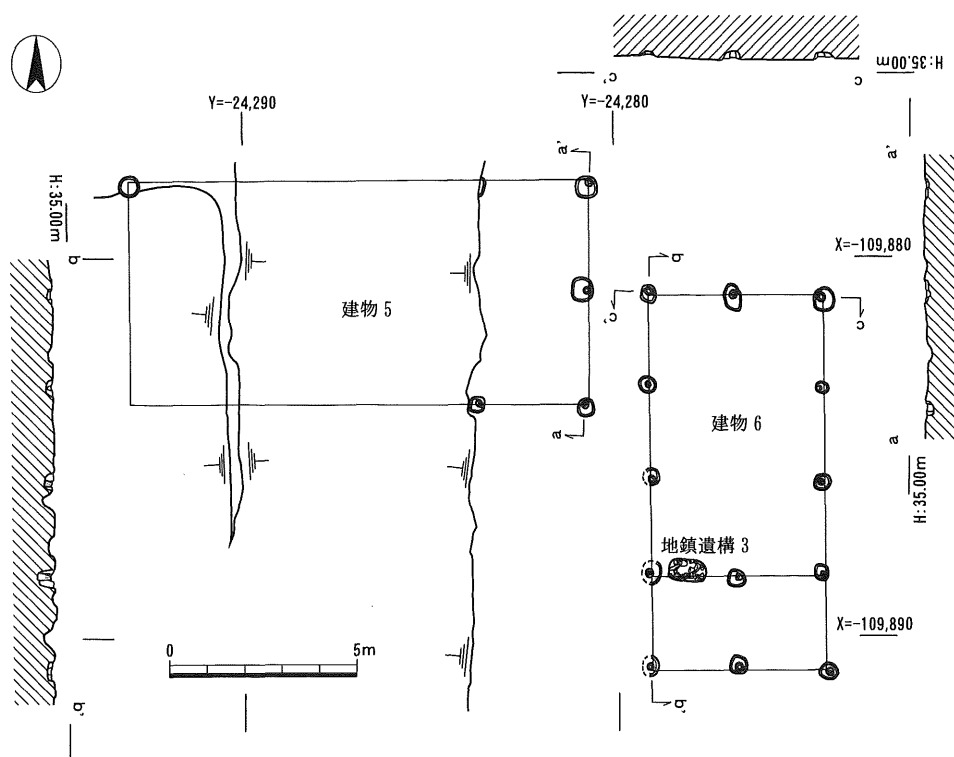


図22 建物5・建物6平面・断面実測図(1/200)

る。粘土採掘穴の壁面に北柱列の4間目柱穴の痕跡が確認でき、その西では柱穴が検出できないことから、東西は4間である可能性が高い。東西12m強、南北5.8mで、柱間は3mと広く取っており、桁行が10尺等間、梁行は9.5尺等間の建物に復元できる。柱掘形は0.4～0.6mの隅丸方形、柱径は0.2mである。

建物6 建物5の東南に建てられた東西2間、南北4間の南庇付き南北棟建物である。東西4.7m、南北9.8mで、北側柱列を建物5の妻中央柱に揃えている。身舎部分は柱間が2.4m前後、庇の出も2.4mで、8尺等間の建物に復元できる。柱掘形は0.4～0.5mの隅丸方形、深さは柱根が遺存する柱穴で0.3～0.4m、他は0.1～0.2mある。身舎南西隅柱では柱材が完存しており柱径が0.2mであることが判明した。身舎南柱列の西の柱間で地鎮遺構と考えられる地鎮遺構3を検出している。

地鎮遺構3 建物6の身舎南柱間で検出した石組み土壇である。長辺約1m、短辺0.6mの隅丸方形で、深さ0.25mある。壁面に0.2～0.3mの石を組んで石室状にしている。埋土は細かい炭や土器片を含んだ黒褐色砂泥で、遺構の性格を示す遺物は出土しなかったが、おそらく建物1の地鎮遺構1と同じく地鎮に関する遺構と考えられる。

建物7 建物6の南で検出した東西2間、南北4間の南庇付き南北棟建物である。東西4.5m、南北9.75mで、若干のずれはあるが建物6と桁行を揃えている。身舎部分は東西柱間が7.5尺等間、南北柱間が8尺・7.5尺・8尺で、庇の出は9尺に復元できる。柱掘形は0.5～0.7mの隅丸方形、深さ0.1～0.4m、柱径は0.2m前後で、柱材の一部が残存する柱穴が2箇所あった。建物6の南庇柱と建物7の北側柱との距離は4.5mで15尺に計画されており、一連の建物であることを示唆している。なお、南庇から東へ延びる柱穴を1間分検出している。柱間は約2mで、南庇部が7尺程

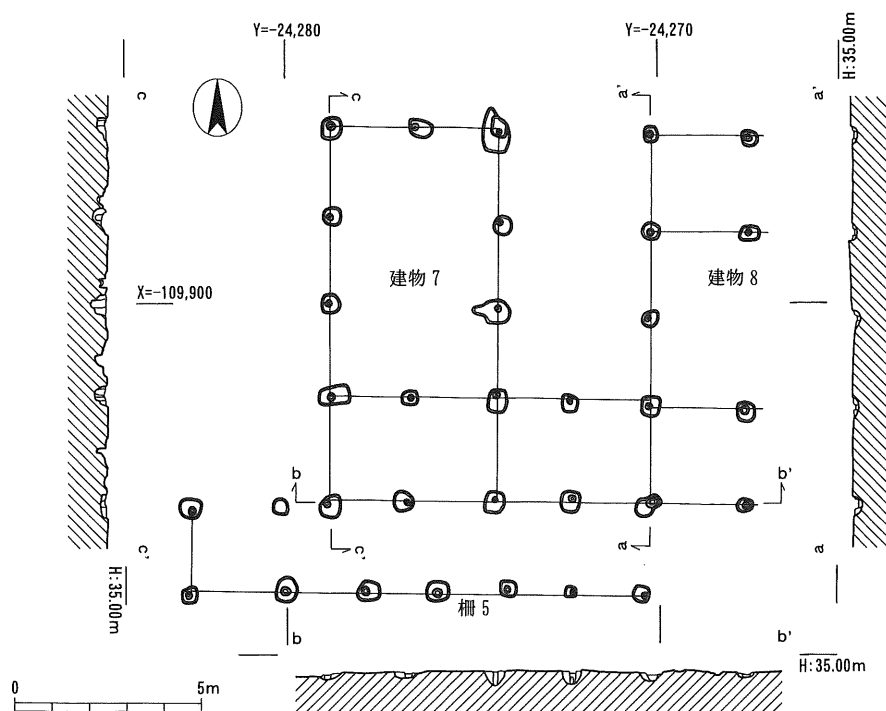


図23 建物7・建物8・柵5平面・断面実測図 (1/200)

東へ張り出した構造になっていた。おそらく、この張り出しは後述する建物8への渡廊として機能していたと考えられる。

建物8 建物7の東に隣接して建てられた南北4間(9.6m)、東西1間以上の南北庇付き建物で、おそらく東西棟になると考えられる。身舎の梁行2間分の長さが4.5mであることから7.5尺等間であることがわかり、庇の出は2.55mで8.5尺に復元できる。桁行は庇の出と同じく8.5尺であるが、全体の構造は不明である。柱掘形は0.5~0.6mの隅丸方形、柱径は0.2m前後である。前述したように建物7とは南庇部の渡廊に想定した張り出しで連結するが、身舎南柱列は建物7と若干あわない。

柵5 建物7・8の南2.4mで検出した柵である。東端の柱穴は建物8の西側柱列の南延長に位置する。西へ6間延長し、さらに北折して1間分延長している。検出した長さは東西12.2m、西端での南北柱間は2.1mある。北折した柱穴は、建物7の身舎西側柱列から3.6mに位置する。柱穴の平面形は、いびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.4~0.6m、深さ0.1~0.3mある。検出できた柱当りでは、柱径は約0.2mある。柱間は1.8~2.4mと一定していない。この柵は、建物7・8と同一工程で造作されたと考えている。

建物9 調査区西半部で検出した東西3間(5.4m)、南北3間(8.2m)の東庇付き建物である。身舎梁行、庇の出ともに6尺等間、南北柱間は8.5尺・10尺・8.5尺に復元できる。柱掘形は0.4~

0.6mの隅丸方形、柱径は0.2m前後である。

建物10 建物9の南西で検出した南北3間(6.9m)、東西1間(2.4m)以上の建物である。東庇部の検出にとどまっており、西の調査区外に身舎部が展開すると考えられるが、詳細は明らかにできなかった。東西柱間は8尺で、南北柱間については北から8尺・8尺・7尺と復元できるが、若干の不揃いが生じている。柱掘形は0.4~0.7mの隅丸方形、柱径は0.2m前後である。現状では井戸2と共存した建物と考えており、井戸2を掘削する折りに、後述する建物18をやや北にずらして建て替えたものである。

建物17 東西2間(4.2m)、南北3間以上の南北棟である。南北桁行の

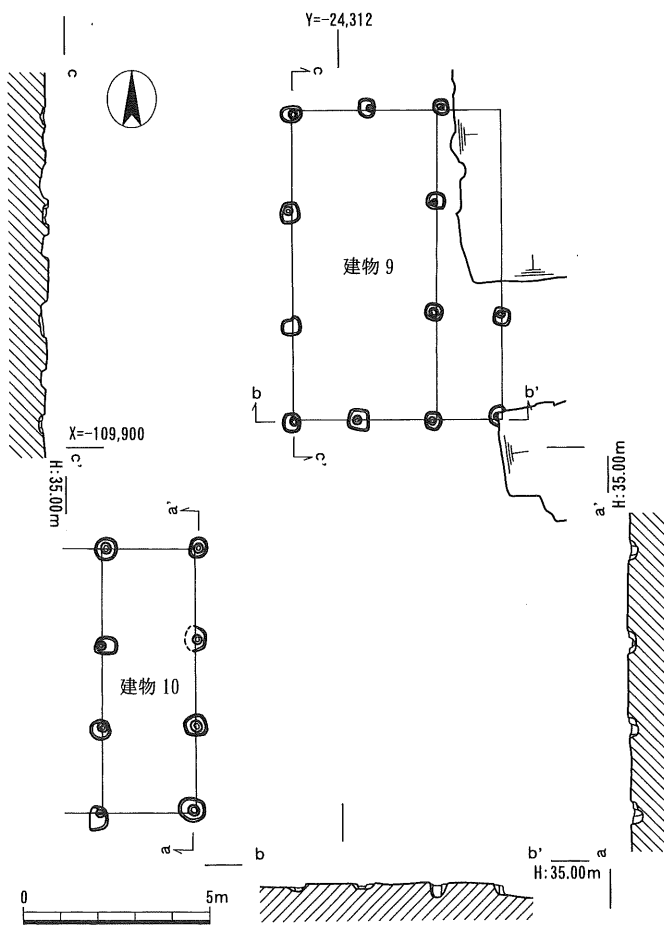


図24 建物9・建物10平面・断面実測図(1/200)

柱間は北から7尺・8尺・8尺で、もう1間(7尺分)とれば後述する建物18と南柱列が揃うことから、南北は4間になる可能性が高い。東西は7尺を意識したと考えられるが、西から2.1m・1.9mあり柱間は揃っていない。柱掘形は0.3~0.4mの円形とやや小さく、柱径は0.2m前後である。

建物18 井戸2を掘削する以前に建てられた南北3間(6.6m)、東西1間(2.4m)以上の建物である。南北柱間は北から7尺・8尺・7尺で、中央間が広い。東底部の検出であり、西の調査区外に身舎部が展開すると考えられる。東底の出は8尺である。柱掘形は0.5~0.7mの隅丸方形が基本で、柱径は0.2~0.3mである。東底の南端に曲物を据えた土壇3を検出している。

土壇3 南拡張区で検出した土壇である。南半は井戸2の掘形によって削平を受ける。掘形の平面形は方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.8m、深さ0.7mある。底面中央に底板を抜いた曲物を据えるが、遺存状態は悪く、現存径45cm、高さ8cmある。底面には礫をまばらに敷く。底面は粘土層(無遺物層Ⅱ)内にあり、砂礫層(無遺物層Ⅲ)には達していない。検出位置は建物18の東底部内に納まる。^{註4}水溜めとして機能していたと考えられる。

建物19 建物17の北側約2.4mに位置する掘立柱建物である。北側の柱穴は、大半が削平を受け

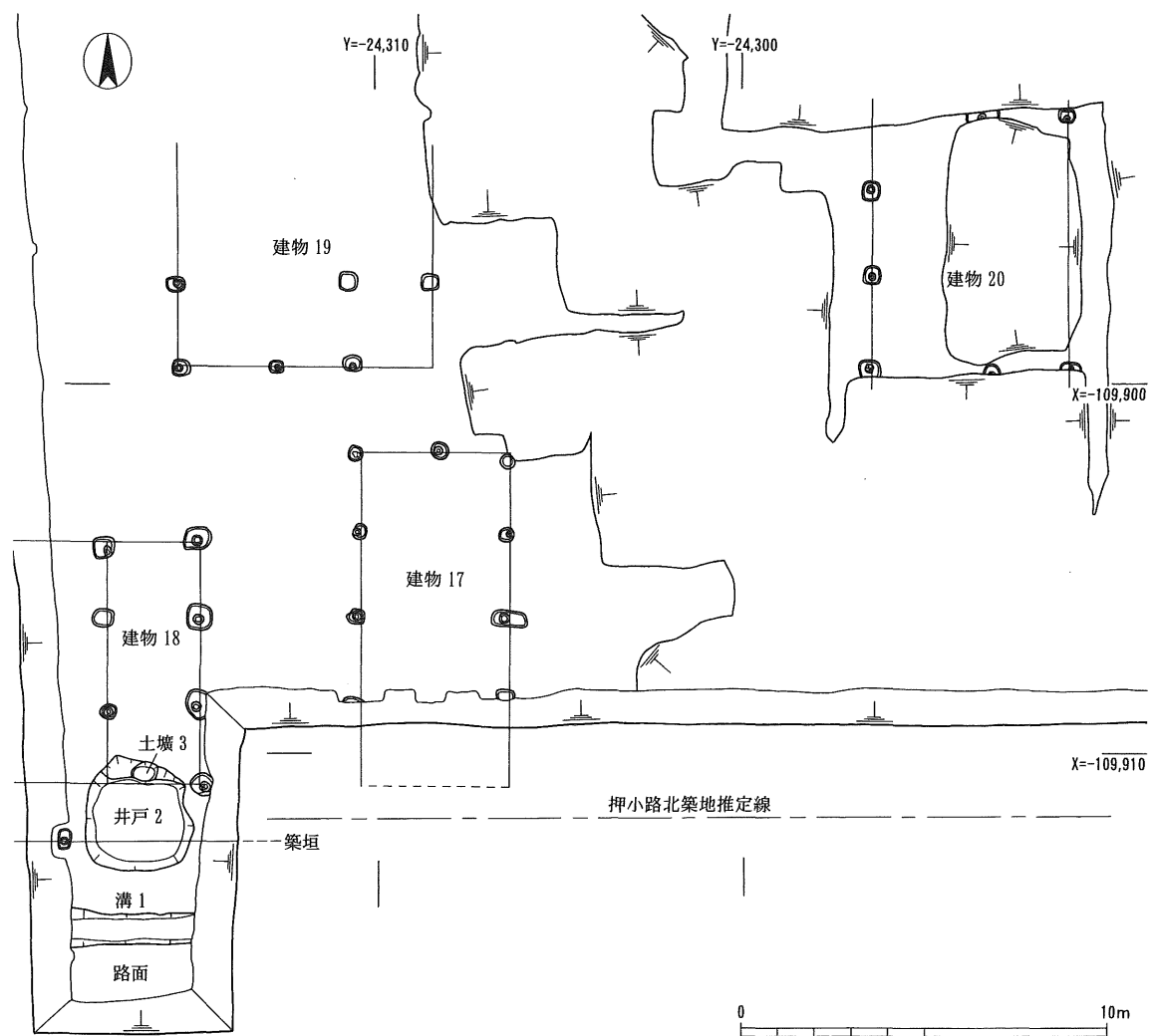


図25 建物17・建物18・建物19・建物20平面実測図 (1/200)

第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)

ているため、全体の規模は不明であるが、南北1間(2.1m)以上、東西3間(7.0m)あり、柱穴の配置から南北棟建物で身舎の南と西に底のつく建物と考えている。東西柱間は身舎桁行が7尺等間、底の出が9尺に復元できる。柱穴の平面形は、いびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.4~0.5m、深さ約0.1mある。検出できた柱当りでは、柱径は約0.2mある。

建物20 調査区中央南寄りで検出した7基の柱穴は、周囲の大半が粘土採掘穴により削平を受けており複数の建物になる可能性もあるが、それぞれの方向で柱筋が一致するため同一の掘立柱建物としてまとめた。南側柱列は建物19の南側柱列と柱筋がほぼ一致する。復元線のように3つの柱穴を対応させた平行する2列の南北掘立柱列を建物の側柱と考えると、この柱間は5.4m(18尺)となる。南北柱間は西柱列では8尺等間に復元でき、梁行9尺等間の南北棟建物の存在が想定できる。しかし、他の柱穴との相関関係は、抽出することができない。柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、検出面での規模は一辺0.4~0.8m、深さ0.1~0.3mある。検出できた柱当りでは、柱径は約0.2mある。

井戸2 南拡張区の、後述する押小路北側溝の北約1mで検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形の平面形は方形を呈し、一辺2.8~3.0m、深さ1.3mある。底面中央を井戸枠が納まる規模に掘り窪め、井戸枠を構築する。井戸枠は一辺0.8mある。2面に枳穴を開けた隅柱を四隅に立てて横棧で組み、その外側に幅25~30cm、厚さ3~4cm、現存高さ90~100cmの縦板を一辺につき3枚立て構成している。縦板の外側にさらに板を重ねる箇所もある。縦板や隅柱は建築部材を転用する。木枠内には、上層に黒褐色砂泥層、下層に黒色泥土層などが堆積する。この井戸の掘形は押小路北築地心想定線上に位置し、木枠は築垣の内側に接した位置にある。掘形南半の上面は、礫を多量に含む黒褐色砂泥層で突き固められている。

押小路 南拡張区で築地心想定線上の柱穴・地業・北側溝(溝1)・道路敷などを検出した。

築地心想定線上で地業(礫を多量に含む黒褐色砂泥層)を検出しており、築垣敷設に伴う地業と考えている。この地業下層の築地心想定線上で掘立柱の柱穴を1基検出した。掘形は南北0.5m、東西0.35mの隅丸方形で柱径は約0.2mある。押小路北築垣に伴う柱穴と考えている。

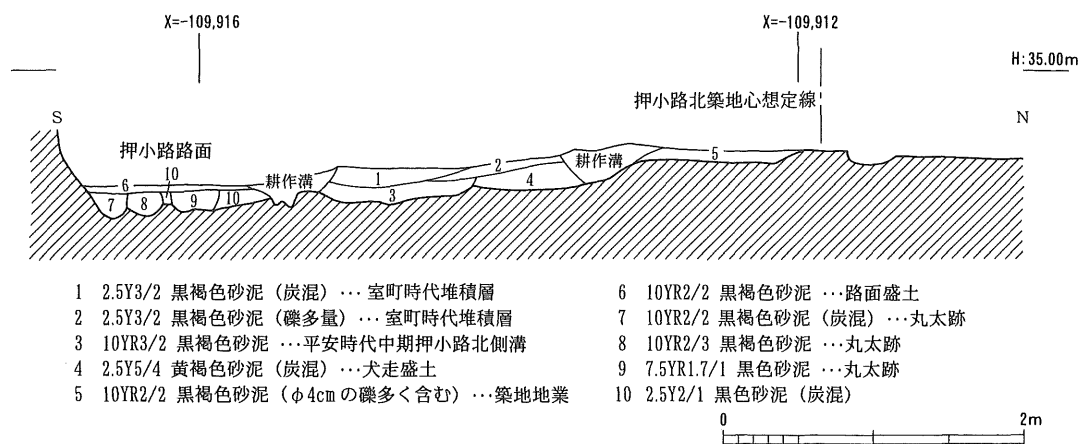


図26 押小路路面・溝1断面実測図(4区南拡張区西壁 1/50)

溝1（北側溝）は、押小路北築地心想定線から南約2.3mで北肩を検出した、東西方向に延長する溝である。1981年度調査で検出した北側溝（溝1）に連続する。検出面での規模は幅0.8m、深さ0.15mある。南斜面は小礫を突き固めた状態がみられる。堆積土層は上・下層2層あり、上層からは平安時代後期以降の土器などが、下層から平安時代中期の土器などが出土した。溝心の座標値は $X = -109,914.8$ である。なお、土層の溝は後述する溝104に関係するものと考えられる。

路面は溝1の南側で検出した。安定地盤付近まで掘り下げた粘土層（無遺物層Ⅱ）に黒色砂泥層を厚さ0.1m、その上面に黒褐色砂泥層を厚さ0.05m積土し路面を形成している。黒色砂泥層中で溝1に並行して東西に延長する溝状の遺構を3条検出した。検出面での規模は、幅0.25～0.3m、長さ1.2～2.6mで、断面形は丸みを帯びる。底面は砂礫層（無遺物層Ⅲ）に達する。断面観察によると、この溝状遺構の埋土は、しまりのない黒褐色ないし黒色砂泥層で、木材のような有機質が腐食した痕跡と考えられる。この材間に黒色砂泥層を詰め、その上面に黒褐色砂泥層を敷いて堅く築き固め、路面を構築する。なお、北側溝の南斜面に小礫を突き固めた状態があることから、黒褐色砂泥層上面は石敷舗装されていた可能性がある。

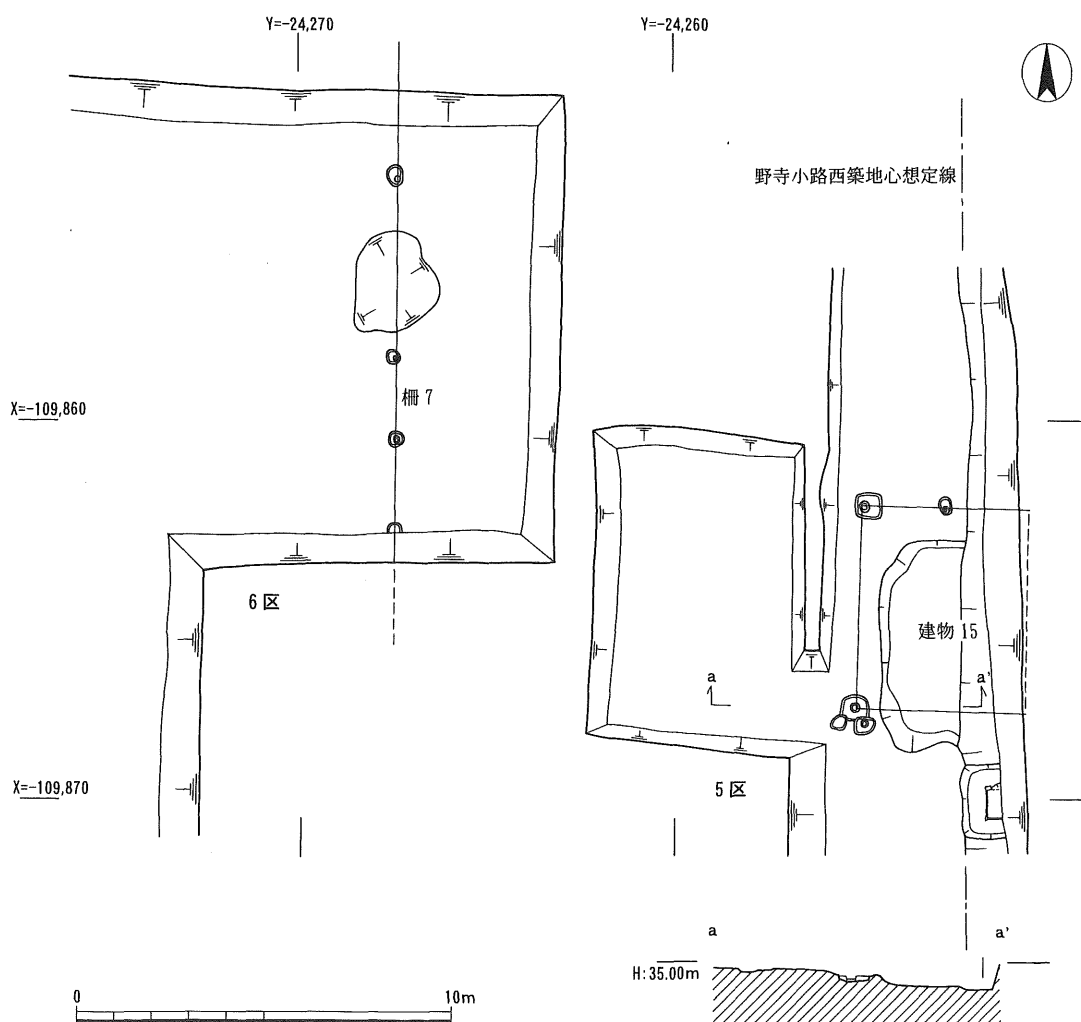


図27 建物15・柵7平面・断面実測図（1/200）

(4) 5区の遺構

野寺小路および門の検出を目的として設定した調査区である。邸宅内への門の有無を確認するため、野寺小路西築地線に沿って南北に細長く調査区を設定した。

建物15 調査区中央部で検出した掘立柱建物である。検出した柱穴は3基あり、西側の南北方向に柱筋を揃える柱穴2基は、平面形が方形を呈し、検出面での規模は一辺0.7~0.8m、深さ0.1~0.15m、柱当りは柱径0.3mある。野寺小路西築地心想定線から西へ2.7mに位置し、主軸方向は北に対して東へ若干振れる。柱間は5.4mあり、南北中心は北五・六門界から北へ約1.7mに位置する。西拡張区ではこの2基の柱穴に連続する柱穴は未検出である。さらに、北側柱穴の東へ2.2m延長した箇所でも柱穴を1基検出した。野寺小路西築地心想事成線から西へ0.5mに位置する。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は長径0.5m、深さ0.1m、柱当りは柱径0.2mある。

この3基の柱穴は、検出位置から野寺小路に開口した門であると考えている。東側の柱穴は上面に削平を受けており、検出した現存規模は小規模であるが親柱に、西側の2基の柱穴は後柱に考えることができる。これら柱位置から門の構造を復元すると、最も小規模な門としては棟門が考えられるが、一町規模の邸宅に伴う門を想定すれば、四脚門も考えられる可能性はある。この場合、東側柱は調査区外にあると考え、復元想定線を図27に復元している。

(5) 6区から8区の遺構

1~4区で検出した遺構の広がりを確認する目的で設定した補足調査区である。各調査区とも粘土採掘穴などによる攪乱は受けていないが、検出した遺構は極めて少なく、建物15から西は空閑地として利用されたことが判明した。検出した遺構には、6区東側で柵1条(柵7)、8区で建物1棟(建物16)がある。

柵7 野寺小路西築地心想事成線から西へ約15mの位置で検出した南北方向の柵である。柱穴は4基検出したが、南北とも調査区外へさらに延長する可能性はある。柱穴の平面形はいびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.4~0.5m、深さ0.15~0.2m、検出できた柱当りの柱径は0.2mある。柱間は7.5尺に復元できる。建物15から約12m西に位置し、検出位置から目隠し塀などの施設が想定できる。

建物16 8区は狭小な調査区であるが、掘立柱の柱穴を7基検出した。このうち、東西方向に並ぶ2基の柱穴を建物として取り上げた。柱穴の平面形は方形を呈し、検出面での規模は一辺0.5m、深さ0.15m、柱当りの柱径0.25m、柱間は4.8mある。柱穴の検出位置から南北棟建物の可能性

性があると考えている。

他の柱穴も平面形や規模などが近似することから、十六町の南西部にも複数棟の建物が存在したことが窺われる。

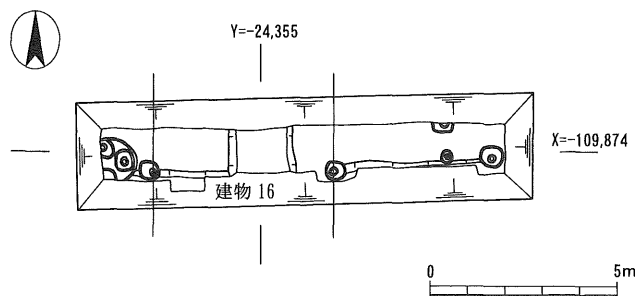


図28 8区平面実測図(1/200)

3 平安時代後期の遺構

平安時代後期の遺構群は野寺小路および押小路に面した地域、つまり1区・5区・6区・4区・第1次調査区において検出しており、1町の中心部にあたる2区・3区・7区・8区では明確な遺構は確認できなかった。平安時代中期の邸宅が廃絶した後、居住空間は押小路に面した4区が中心となっており、園池が存在した中央域は、空閑地あるいは耕作地としてしか土地利用がなされなかったことを示している。ここでは調査区ごと説明するのではなく、全体として検出した遺構の説明を加える。

建物101 4区の南東部で検出した南北棟総柱建物である。東西3間(7.3m)、南北4間(8.8m)で、柱間は2~2.4mと一定ではない。座標北に対して西へ若干振れる。柱掘形は0.3~0.5mの隅

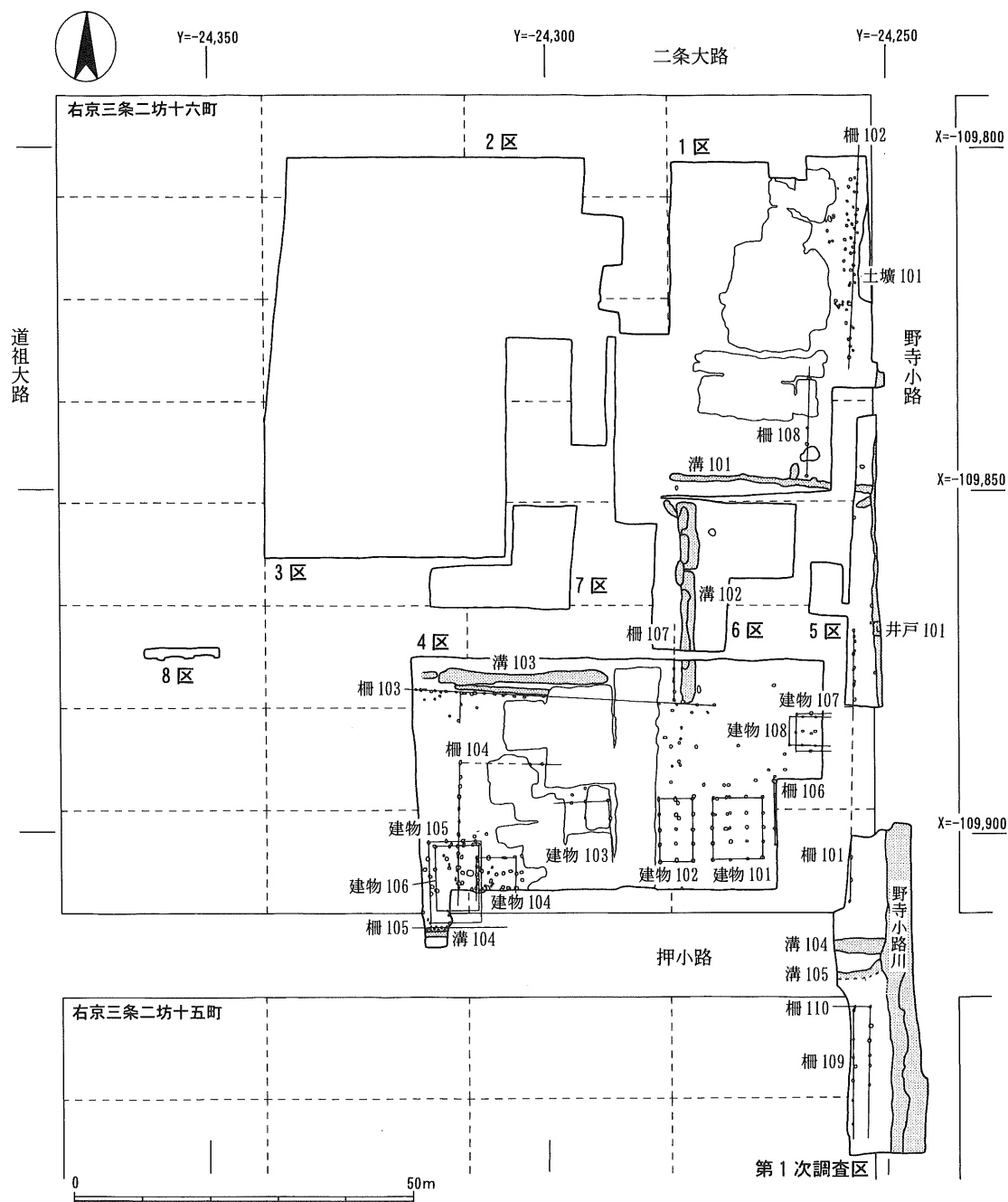


図29 平安時代後期遺構配置図 (1/1,000)

第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)

丸方形が基本で、深さ0.15～0.2m、柱径は0.2m前後である。南西隅の柱穴4箇所では柱当たりの根石を検出しており、1箇所は平瓦を根石に代用していた。なお、北西部の柱穴5箇所において、隣接した位置で添え柱と考えられる柱穴を検出しており、2箇所では柱の根元に石をかませた補修痕跡も確認している。なお、柱穴2箇所から平安時代後期の土師器皿と瓦器椀が出土している。

建物102 建物101の西に柱筋を揃えて建てられた南北棟の総柱建物である。東西2間(4.8m)、南北4間(9m)であるが、西側が粘土採掘穴で壊されており、建物101と同じ構造の建物であれば東西3間になる可能性が高い。柱規模も建物101と同じで、柱間は2.1～2.4mと一定ではない。座標北に対して西へ若干振れる。検出面での柱掘形は0.4～0.6m、深さ0.25～0.35m、柱径は約0.2mある。南東隅の柱穴2箇所では柱当たりの根石を検出している。また、北東部の柱穴3箇所において建物101と同じく添え柱を検出しており、東側柱の2箇所でも腐朽柱の補修に伴う根石を確認している。建物101とほとんど柱筋を揃えており、補修の形態も同じであるため同一建物の可能性もあるが、建物101の西側柱列と建物102の東側柱列との距離は約3mと広く、別建物と復元するのが適切であろう。なお、柱穴7箇所から平安時代後期の土師器皿と瓦器椀が出土している。特に西側柱の北から2箇所目の柱穴の掘形底部には小型の回転台成形土師器皿が、北側柱中央の柱穴底部には大型の回転台成形土師器皿が意図的に据えられていた。

建物103 建物102の西側約7.5mの位置で検出した東西2間以上、南北2間以上の掘立柱建物である。周囲は粘土採掘穴で削平を受けているため全体規模は不明であるが、北側柱穴位置は建物102の北側柱列と同一線上にあり、同一規模の建物が想定できる。柱列は座標北に対して西へ若干振れる。柱穴の平面形は、ややいびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.4～0.5m、深さ

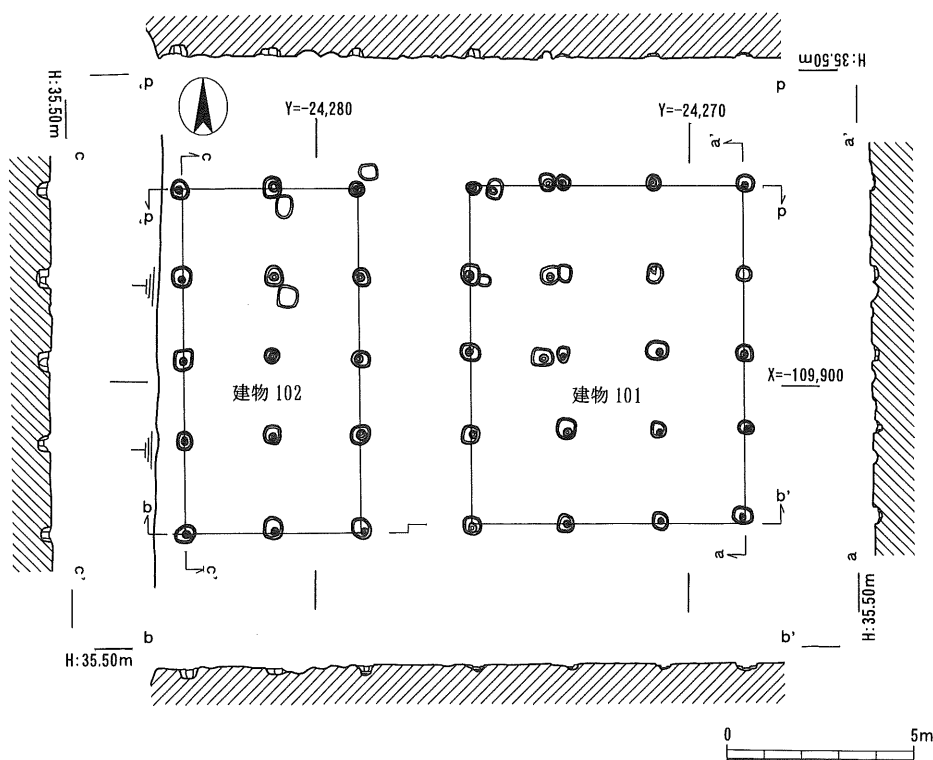


図30 建物101・建物102平面・断面実測図 (1/200)

0.1～0.3mある。柱間は東西が2.2m・3.3m、南北が2.2mある。東の柱間が広いことから、東西に並ぶ2棟の建物の東側柱列と西側柱列となる可能性もある。なお、粘土採掘穴の西で検出した柱列の中央の柱穴から回転台成形土師器皿が出土した。

建物104 4区南西部で検出した総柱建物で、南へは調査区外へ1間程度広がると考えている。東西3間(5.8m)、南北2間(4.5m)分を検出した。座標北に対して西へ若干振れる。柱間は1.8～2.4mと一定ではない。柱穴の平面形は方形を呈し、検出面での規模は一辺0.4～0.5m、深さ0.15～0.2mある。検出できた柱当りの柱径は約0.2mある。北側柱列の1箇所の柱穴に隣接して添え柱と考えられる柱穴を検出した。

建物105 建物104の西に重複して検出した掘立柱建物である。東西3間(7.5m)、南北5間(12m)の南北棟に復元できる。柱の検出状況から想定すれば2間×3間の身舎に南北東に底をもつ3面庇建物となるが、柱穴の遺存状況が悪く確定はできない。座標北に対して西へ若干振れる。

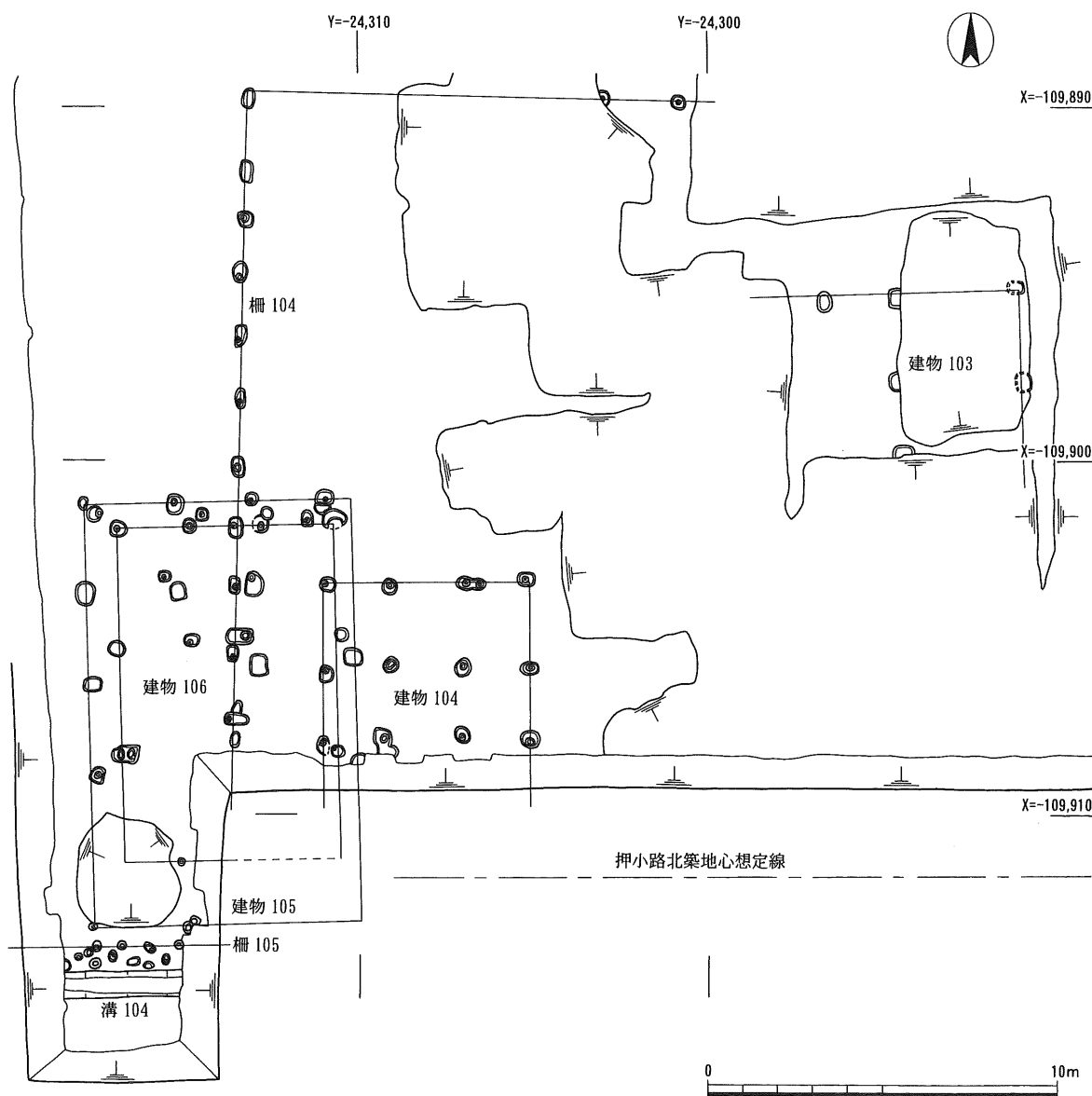


図31 建物103・建物104・建物105・建物106・柵104・柵105・溝104平面実測図 (1/200)

第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)

柱間は1.8～2.7mと一定でない。柱穴の平面形はややいびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.3～0.6m、深さ0.15～0.2mある。3基の柱穴で添え柱と考えられる柱穴を検出した。

建物106 建物105と同位置で検出した東西3間(6.2m)、南北3間(9.4m)の掘立柱建物である。柱間は南北柱列が3.0～3.3m、東西柱列が2.0m前後と一定でない。座標北に対して西へ若干振れる。柱穴の平面形はややいびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.3～0.5m、深さ0.15～0.2mある。3基の柱穴で添え柱と考えられる柱穴を検出した。建物105と同位置にあるが、柱穴相互の重複がなく前後関係は明らかでないが、一方の建て替え建物と考えられる。

建物107 4区東端で検出した東西1間(2.1m)以上、南北2間(5.5m)の総柱建物である。東へはさらに調査区外へ広がると考えられる。座標北に対して東へ若干振れる。柱間は南北柱列が9尺等間、東西は7尺と復元できる。柱穴の平面形は円形を呈し、検出面での規模は径0.3～0.4m、深さ0.15～0.2mある。他の建物より小規模である。

建物108 建物107と同位置で検出した東西2間(3.6m)以上、南北2間(4.1m)の総柱建物である。北西隅の柱穴2箇所は削平を受け未検出である。座標北に対して東へ若干振れる。柱間は南北柱列が北から7尺・6尺、東西柱列が6尺等間に復元できる。柱穴の平面形は円形を呈し、検出面での規模は径0.3～0.4m、深さ0.15～0.2mある。建物107と同規模で、他の建物より小規模である。建物107とほぼ同位置にあり、前後関係は明らかでないが、一方の建て替え建物と考えられる。

柵101 5区で検出した南北方向の柵で、野寺小路西築地心想定線から西へ約3mに位置する。座標北に対して東に若干振れる。柱間は1.8～3.0mと一定でない。柱穴の平面形はややいびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mある。柱穴の重複状態から少なくとも新旧2時期ある。野寺小路西築垣に相当するが、北五・六門界想定線から南へ3.5mで途切れる。また、この柵は第1次調査(1981年度調査)で検出した柵101と柱筋が一致しており、同一の柵と考えている。これを合わせると、長さ約39m分検出したことになる。

柵102 1区の東端で検出した南北方向の柵である。柱穴は南北方向に多数検出しており、少なくとも4回の建て替えを確認している。図中で復元した柵は、野寺小路西築地心想定線から西へ3mに位置し、座標北に対して東に若干振れる。長さ約26m分検出した。柱間は1.8m前後と一定でない。柱穴の平面形はややいびつな方形ないし円形を呈し、検出面での規模は長軸0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mある。柵101と同じく野寺小路西築垣に相当する柵で、検出位置も柵101とほぼ同位置にあるが、平安時代後期宅地の北限を示すと考えている溝101の北に位置するため、柵101とは別の柵とした。

柵103 4区の北部で検出した東西方向の柵で、西へは調査区外へ延長すると考えられ、現存長さ約42m分検出した。同位置付近で多数の柱穴を検出しており、少なくとも3時期の建て替えを確認した。座標東に対して南に若干振れるが、検出位置は北六・七門界に相当する。柱穴の平面形は円形ないしいびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺0.3～0.4m、深さ0.1～0.38mある。柵103は押小路に面した建物群の北を限る柵と考えている。この柵は東一行の西で途切れており、

後述する溝102や柵107がここから北へ延びる。

柵104 4区の西端で検出した南北方向の柵である。検出位置は東二・三行界（1町東西中心）に相当する。南は調査区外へさらに延長して後述する柵105にとり付くと考えられ、北は柵103に至る。さらに北七門の南北中央部で東折し延長する柵があるが、これも含めて柵104とした。南北方向の柱筋は座標北に対して東に若干振れる。柱間は1.8mを基本とするが、1.5～2.1mと一定しない。柱穴の平面形は長方形を呈し、検出面での規模は長軸0.5～0.6m、深さ0.1～0.2mある。建物105・建物106と重複した位置にあるが、前後関係は明らかでない。しかし、この柵は配置から建物101～104の建物群の西を限る施設と考えており、これら建物群の廃絶後に建物105・建物106が建てられたと想定できる。

柵105 4区南拡張区で検出した東西方向の柵である。柱穴は東西方向に多数検出しており、少なくとも3時期の建て替えを確認している。座標東に対して南に若干振れるが、検出面積が狭く、振れの角度は確定できない。復元した1条の柵は、押小路北築地心想定線から南へ約2mに位置しており、押小路北築垣に相当する。柱穴の平面形は円形ないしいびつな方形を呈し、検出面での規模は長軸0.2～0.3m、深さ0.1～0.15mある。

柵106 4区東端で検出した南北方向の柵である。東一行の東西中心に位置する。座標北に対して東に若干振れる。4間分（長さ約10m）検出し、柱間は2.4m前後ある。柱穴の平面形はいびつな円形を呈し、検出面での規模は長軸0.2～0.3m、深さ0.05～0.15mある。建物101から東へ約1.5mに位置しており、検出位置から建物101の東を限る柵と想定したが、建物の西側柱になる可能性もある。



図32 井戸101検出状況（北から）

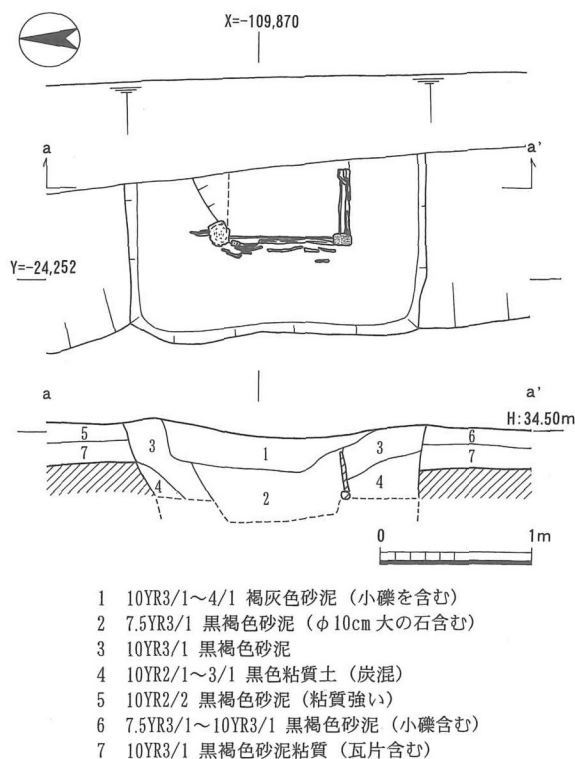


図33 井戸101平面・断面実測図（1/50）

第1節 右京三条二坊十六町の調査(第3次調査)

柵107 柵103の北側で検出した南北方向の柵である。他にも柱穴があり、少なくとも2時期の建て替えを確認している。北へは調査区外へ延長すると考えられるが、北側の6区では未検出である。南は柵103に至る。現状ではほぼ座標北を示しており、東一・二行界に位置する。柱穴の平面形は円形ないしいびつな方形を呈し、検出面での規模は長軸0.3～0.4m、深さ0.1～0.15mある。

柵108 1区で検出した南北方向の柵である。北に対して東に若干振れる。粘土採掘穴で削平を受けるが6間分(長さ14.4m)を検出し、南は後述する溝101に至る。柱間は2.4mある。柱穴の平面形はいびつな方形を呈し、検出面での規模は一辺約0.4m、深さ0.15～0.2mある。検出できた柱当りの柱径は約0.2mある。これまでの柵と比較すると、柱間は等間で、柱穴の規模や形状が異なることなど、建物の柱穴に近似する。

溝101 1区南端および5区で検出した東西方向の溝で、北四・五門界から北へ2～3mに位置する。西は東一・二行界で途切れ、東は野寺小路川に連続する。東に対して南に若干振れる。検出面での規模は幅約1.0m、深さ0.2～0.3mある。上層は礫を多く含む黒褐色砂泥層、下層は黒色粘土層が堆積し、土師器皿や瓦器など平安時代後期の土器類が多量に出土した。Y=-24,264上で直交して北側に土壌状の張り出し部がある。長さ約2.5m、幅1.5mある。野寺小路川との合流点でも同様の遺構を検出している。洗い場のような施設と考えられる。

溝102 6区から4区にかけて検出した南北方向の溝で、東一・二行界から約2m東に位置する。北は北四・五門界で途切れ、南は柵103に至る。検出面での規模は、幅2～2.5m、深さ0.4mある。新旧2時期あり、新段階の溝は深く掘り込んだ箇所が連続する。堆積土層は旧段階が黒褐色砂泥層、新段階が上層は黒褐色砂泥層、下層は暗褐色層と黒褐色粘土層である。北端で北西へ張り出す箇所を検出した。前述の溝101との間は幅3mある。この空閑地の溝101寄りでは柱穴を検出しており、1町中央部への開口部が想定できる。

溝103 柵103の北側で検出した東西方向の溝で、座標北に対する振れも柵103に近似する。西は調査区内で、東は東二行中心からやや東で途切れる。新旧2時期あり、旧段階は柵103の北側に接する位置にあり、幅約0.7m、深さ0.1mある。新段階は柵103の北側約2mに位置し、幅1.5～2.5m、深さ0.1～0.2mある。溝底面は2段落ちを呈する。堆積土層は旧段階は黒褐色砂泥層、新段階は黒色砂泥層が堆積する。

井戸101 5区の東端、野寺小路川西肩口に位置する方形縦板横棧組の井戸である。野寺小路川が野寺小路西築地心想定線以西に及んだ土層(平安時代後期)の上面で検出した。東半は調査区外にある。調査区東端で検出したため調査を行なうには危険が及ぶと判断し、掘り下げは深さ0.5mまででとどめ、底面までの調査は行なっていない。掘形の平面形は方形を呈し、現存規模は一辺約2mある。掘形の中央部に井戸枠を据える。井戸枠は一辺0.8mある。井戸枠は一辺10～15cmの断面形が方形を呈する隅柱に横棧を組み、外側に幅15cm、厚さ約3cmの縦板を立て構成している。北側の枠材は未検出である。井戸枠内には黒褐色砂泥層が堆積し、平安時代後期の土師器皿などが出土した。

野寺小路川 1区東拡張区から5区にかけて西肩口部を検出している。検出位置は野寺小路西

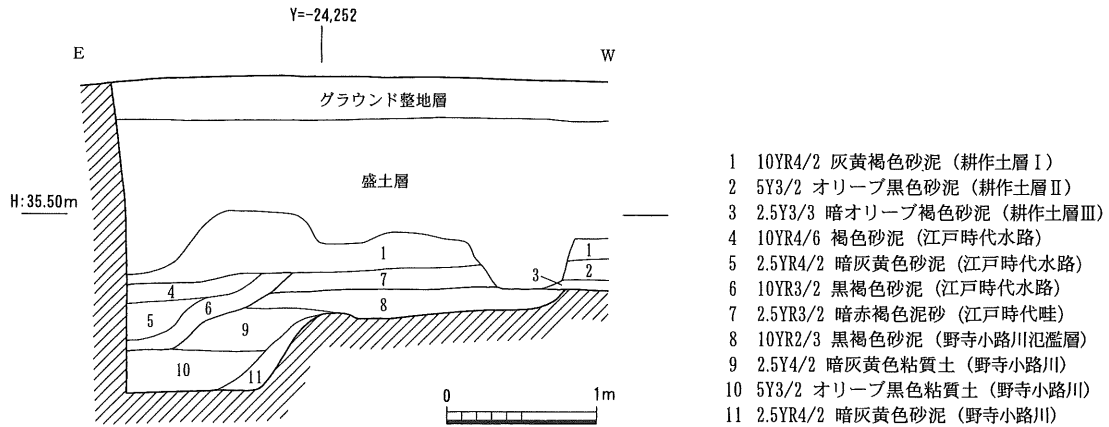


図34 1区東拡張区南壁断面実測図 (1/50)

築地心想定線上ないしやや東に位置する。各調査区とも部分的な検出にとどまるが、1区東拡張区の断面で堆積土層の状況が良好に観察できた。断面観察によると、西肩口から東へ急傾斜を呈し、検出面から約0.5mの深さでほぼ平らな面となる。後述する第1次調査などで検出した野寺小路川は検出面からの深さは1m以上であるため、この平坦面が当該箇所の野寺小路川の底面とは考えられず、西岸に形成された段の一部と想定した。堆積土層は暗灰黄色粘土層・オリーブ黒色粘土層で、平安時代後期の遺物を包含していた。また、上層には氾濫層として、西肩口から約1.6m西に広がって黒褐色砂泥層が厚さ約0.2m堆積していた。

土壌101 柵102と野寺小路川間で検出した南北に長い土壌である。東は調査区外に広がる。検出面での現存規模は南北14.5m、深さ0.3～0.4mある。上層は砂礫を多く含む黒褐色砂泥層、下層は黒褐色粘土が堆積し、平安時代後期の土師器皿が出土した。

4 室町時代から江戸時代の遺構

第3次調査ではほぼすべての調査区で、第1面遺構面として室町時代から江戸時代の遺構を検出している。検出した遺構は、耕作に関連する遺構・旧天神川の流路・溝・土壌・粘土採掘穴などがある。耕作に関連する遺構の様相については第5章で概観する。

野寺小路上の区画溝 1区東拡張区では、野寺小路川の埋没後に旧流路西岸上に暗赤褐色泥砂で叩き締めて畦を築き、旧流路と重なるように幅1m以上、深さ0.4～0.5mの区画溝が設けられていた。溝内からは、近世の遺物が出土した。

旧天神川の氾濫原 2区西端から8区の西部部で、旧天神川の流路と考えられる東肩口および氾濫原と考えられる堆積土層を検出した。旧天神川の氾濫原と考えられる土層は、耕作土層Ⅱの下層で検出しており、灰黄褐色から黒褐色を呈する礫混じりの砂泥層である。

粘土採掘穴 1区と4区で大規模な粘土採掘穴を検出した。粘土層(無遺物層Ⅱ)が採掘の対象となった土層で、底面は砂礫層(無遺物層Ⅲ)上面でとどまる。底面には凹凸がある。

第2節 右京三条二坊十五・十六町の調査(第1次調査)

昭和57(1982)年度に、同校の格技体育館建設に先だって実施した発掘調査である。調査面積は約550㎡ある。調査対象地は十五・十六町および野寺小路に該当する。この調査は十六町を含むため本来は前節に入れるべきところであるが、調査次数が異なり煩雑差が生じる可能性があるため、この節を立てた。

1 基本層序

調査区は同校グラウンドの南東部に位置し、土層堆積状況は第3次調査の4区とほぼ同様である。基本層序は上層から、地表下1.5～1.8mまでがグラウンドの整地および盛土層、盛土層下は耕作土層が厚さ0.3～0.5m堆積し、耕作土層下は無遺物層(黄褐色泥土層・灰色ないし青灰色砂礫層)が堆積する。遺構は黄褐色泥土層(無遺物層Ⅱ)の上面で検出した。無遺物層上面の標高は約34.3mである。

2 平安時代中期の遺構

平安時代中期に属する遺構には、押小路北側溝(溝1)・南側溝(溝5)・路面・野寺小路西側溝(溝6)、井戸(井戸3)・掘立柱建物(建物21)がある。

溝1 押小路北築地心想定線から南へ約4.5mで北肩を検出した、東西方向の溝である。西は調査区外へ延長し、第3次調査の4区で検出した溝1につながると考えられる。東は後述する野寺小路の西側で途切れる。検出面での規模は幅約0.5m、深さ0.2～0.3mある。押小路北側溝に該当するが、溝心の座標値は $X = -109,916.5$ で、第3次調査の4区で検出した溝1とは、東西座標値が若干ずれている。同一溝として続きをみると、座標東に対して南へ若干振れていることになる。

溝5 押小路南築地心想定線から北へ約1.8mで南肩を検出した、東西方向の溝である。西は調査区外へ延長し、東は緩やかに南折し、南北溝である野寺小路西側溝(溝6)へ連続する。検出面での規模は、幅0.7～1.2m、深さ約0.35mある。押小路南側溝に該当し、溝心の座標値は $X = -109,921.3$ である。

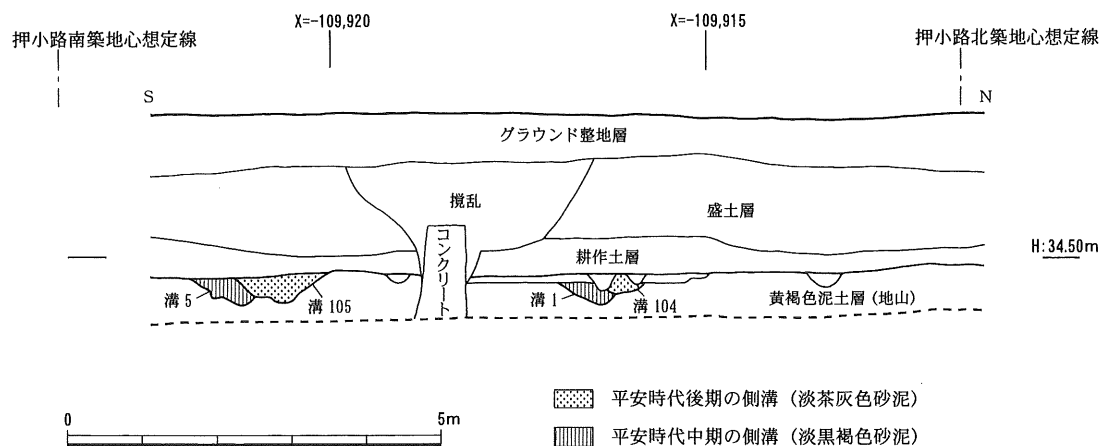


図35 第1次調査区西壁断面実測図 (1/100)

路面 溝1と溝5の間が押小路の路面幅となるが、礫を用いた道路敷などは未検出である。路面幅は4.2m、側溝心々間距離は4.8mある。少量ではあるが、路面整地土層内から平安時代中期の遺物が出土した。

溝6 野寺小路西築地心想定線から東へ約2mの位置で西肩を検出した、南北方向の溝である。北は押小路南側溝である溝5に連続し、さらに北に約5m延びて押小路路面を南北に貫いている。南は調査区外へ延長する。平安時代後期の野寺小路川で東肩口は削平を受けるが、検出面での規模は、幅1.0～1.6m、深さ0.2～0.4mある。野寺小路西側溝に該当し、推定溝心の座標値は $Y = -24,249$ となる。

建物21 調査区南西部(十五町)で検出した掘立柱建物で、南は調査区外へ広がる可能性がある。検出した柱穴の配置から南北棟と考えられる。東西2間(4.2m)、南北3間(7.2m)分を検出し、

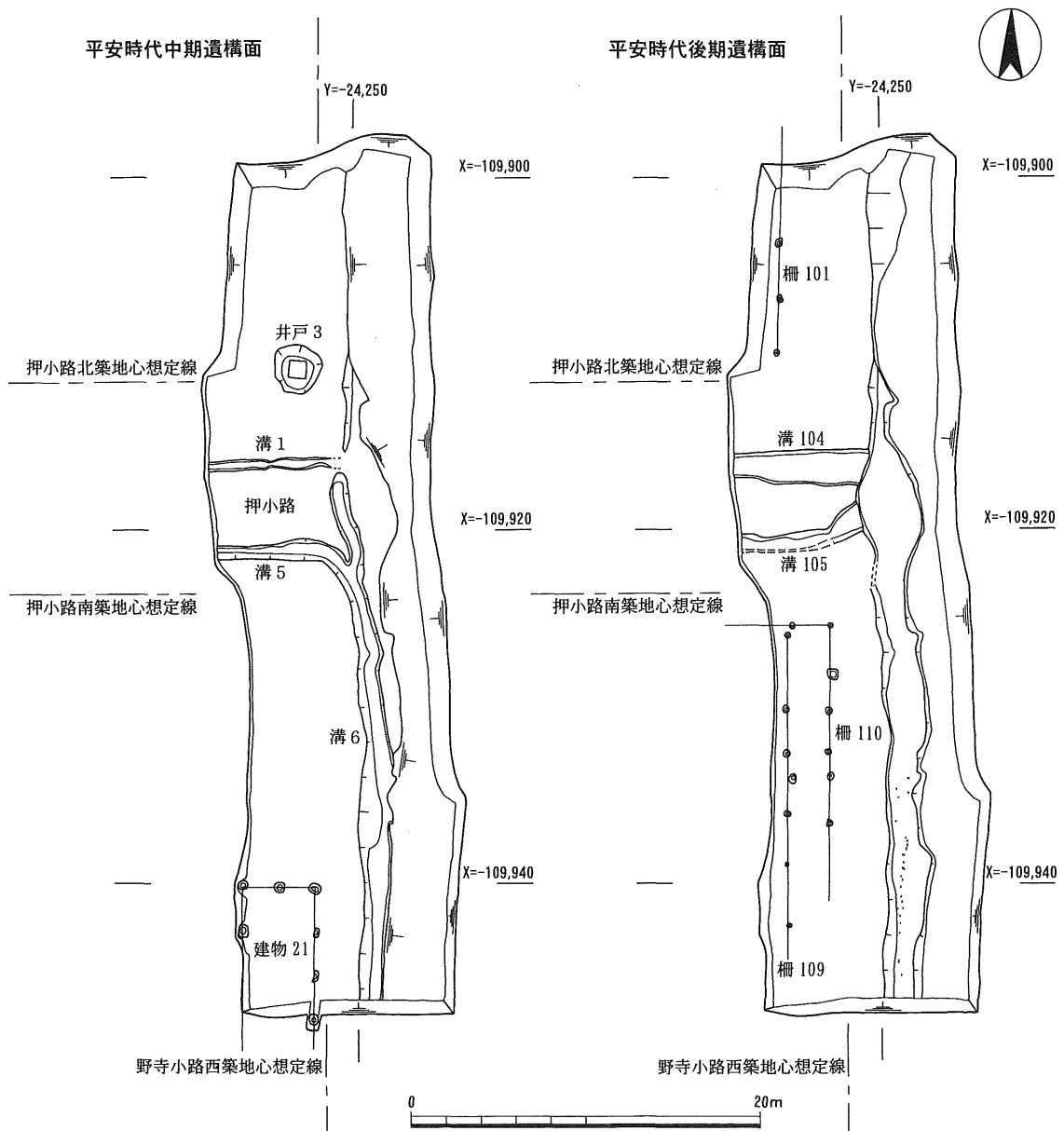


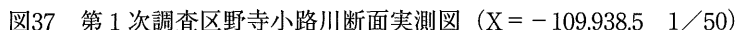
図36 第1次調査区平面実測図 (1/400)

柱間は東西が7尺等間、南北が8尺等間に復元できる。柱穴の平面形は方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.6~0.8m、深さ0.15~0.3m、柱径は検出できたもので約0.2mある。平安時代中期の土器類が少量出土した。東柱列は、野寺小路西築地心想定線から西へ約0.8mに位置している。

3 平安時代後期の遺構

溝104 溝1上面で検出した東西方向の溝で、東は野寺小路川へ連続する。検出面での規模は、幅1.2～2.0m、深さ約0.3mある。溝心の座標値はX＝-109.916.1である。

路面 溝104と溝105の間が平安時代後期の押小路の路面幅となるのであるが、路面幅は西端で



は3.2mあるものの、野寺小路川と連続する箇所では幅1.0mと極端に狭まる。西端での側溝心々間距離は4.5mある。

柵109 調査区南西部で検出した南北方向の柵で、ほぼ柵101の南延長線にある。野寺小路西築地心想定線から西へ約3.2mに位置する。5間分(約16.4m)を検出した。柱間は2.4～4.2mと一定していない。ほぼ真北である。柱穴の平面形は円形を呈し、検出面での規模は0.3～0.4m、深さ0.15～0.2mある。柱径は検出できたもので約0.2mある。

柵110 柵109の東側で検出した南北方向の柵である。野寺小路西築地心想定線から西へ約0.8mに位置する。5間分(約11.3m)を検出した。柱間は1.5～2.7mと一定していない。北に対して東に若干振れる。北端の柱穴の西側約2.1mで柱穴を1基検出し、北端で西折し、押小路に沿って延長する柵が想定できる

野寺小路川 調査区東半の野寺小路想定位置で検出した南北方向の川である。東肩口は調査区外にある。検出面での現存規模は幅約5m、深さ約1mある。埋土は砂礫層を多く含む砂泥層や泥土層である。西肩口は押小路接続部から南では2段落ちを呈し、 $X = -109,934$ から南では、長さ1m以上の杭が約11mにわたって南北に多数打ち込まれていた。出土遺物は大半は磨滅した平安時代後期の土師器皿や瓦器碗、輸入陶磁器などであるが、平安時代中期のものもある。なお、当調査地点の南で行なわれた十一・十四町の発掘調査では、三条坊門小路との交差部を含む野寺小路の全幅を検出した。野寺小路川の川幅は約9m、深さ約2mあり、川幅はほぼ小路の両側溝を含む幅に相当する。底面は南に向かって階段状に深くなっており、3段が確認されている。^{註6}

4 室町時代から江戸時代の遺構

耕作土層や耕作に伴う溝などを検出したが、耕作に伴う溝は第2～5次調査に比べると、希薄であることが窺われる。

第3節 右京三条二坊十五町の調査(第2・4・5次調査)

十五町では、昭和62(1987)年度に同校の施設建設に先だち実施した発掘調査である第2次調査と、本調査である第4・5次調査の3次にわたる調査を実施しているが、この節では、十五町として一括し、主に各調査区で検出した平安時代の遺構について報告することとする。平安時代の遺構は、各調査区が狭いため性格を明確にできる状況ではないが、溝や柱穴などとともに第5次調査で園池遺構の一部を検出している。

1 第2次調査

同校敷地の南東隅で、1987年度に行なった発掘調査である。調査区は東西約16m、南北約12mに設定した。平安時代の遺構には、溝4条および建物1棟がある。

(1) 基本層序

調査区の層序は、地表下0.5~0.9mまでが学校建設に伴う盛土層で、次に中世から近世の耕作土層が0.15~0.3m堆積している。この耕作土層上面では、室町時代以降の溝および野壺と考えられる土壌を検出したにとどまる。耕作土層直下は黄褐色粘土層(無遺物層Ⅱ)となり、この面で平安時代の遺構を検出した。無遺物層上面の標高は約33.7mある。

(2) 平安時代の遺構

平安時代の遺構には、建物(建物22)・溝(溝7~10)などがある。

建物22 調査区南東部で検出した東西2間(5.4m)以上、南北2間(5.1m)の掘立柱建物である。柱穴の遺存状況は良好でないが、柱間は東西が約2.7m、南北が約2.55mで、東西9尺等間、南北8.5尺等間の東西棟の西端部と考えられる。柱穴の平面形は、隅丸方形を呈し、検出面での規模は0.4~0.9m、深さ0.2~0.4m、柱径は検出できたもので0.25mある。建物の西1間内には1辺が約

0.8mで方形やいびつな円形を呈する比較的大型の6基の穴が、3基ずつ東西に2列、規則正しく穿たれていた。既報告では柱穴として報告していたが、断面観察によれば掘形の底部断面が丸いことや、規則性のある配列であるが、柱穴とすると柱間が揃わないことなどから、柱穴ではなく建物に付属する、いわゆる甕据付穴である可能性が高い^{註7}。深さは0.2~0.3mある。

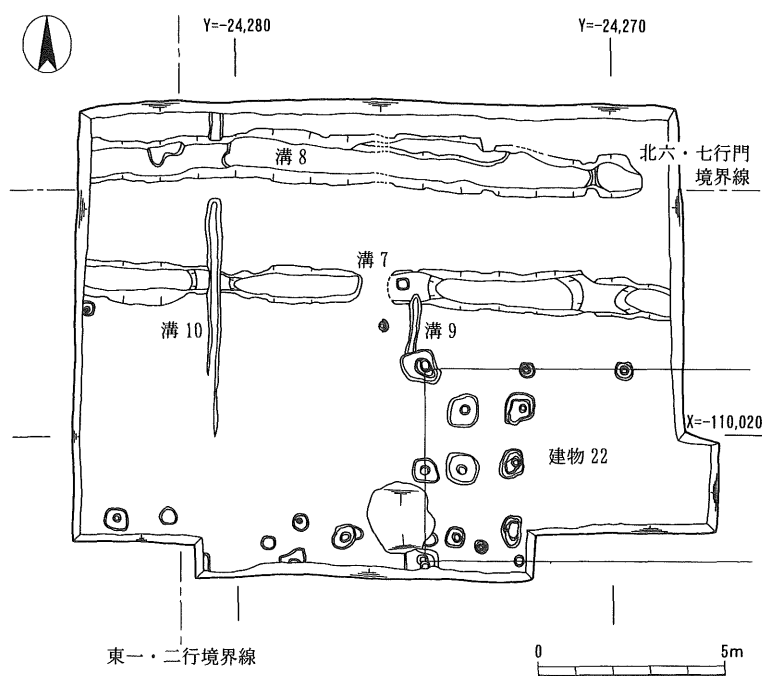


図38 第2次調査区平面実測図(1/200)

溝7 調査区中央部で検出

した東西方向の溝である。東西は調査区外へ延長する。幅約1.2m、深さ0.1～0.2mある。溝底面には凹凸があり、細長い土壌の連続状態を呈する。

溝8 溝7の北約3.3m(心々間距離)で検出した東西方向の溝で、北六・七門界に位置する。西は調査区外へ延長し、東は調査区内で途切れる。幅1.2～1.5m、深さ約0.3mある。溝底面は溝7に比べ平坦である。

溝9・10 調査区の中央で溝9、その西約5.5mで溝10を検出した。南北溝で、幅約0.4m、深さ0.1mあるが、全容を確認できたわけではない。また、四行八門制における東一・二行界は溝10の東1mに位置する。12世紀代の遺物が出土している。同時代の柱穴群は溝7の南側にのみ確認した。

(3) 室町時代から江戸時代の遺構

室町時代から江戸時代の遺構には耕作用と考えられる小溝群と野壺がある。耕作に伴う溝の検出密度は十六町とほぼ同様の状況を呈する。

2 第4・5次調査

第4・5次調査は、現校舎間で実施した調査である。このうち、第4次調査は第5次調査を実施するに当たって予め遺構の広がりを確認することを目的とした試掘調査であり、調査区も第5次調査の調査区に重なっている。第5次調査では、1区～4区の調査区を設定した。

1・2区は学校の平常の授業で使用する通路を確保する必要があったために、便宜上2箇所の調査区に分けた。第4次調査では、第3トレンチ(1区)、第4トレンチ(2区)として調査しており、第3トレンチでは柱穴を数基検出している。1区は東西約14.6m、南北約6.5m。2区は東西約13.5m、南北約6.0mに設定している。

3区は発掘調査の実施時に新設した調査区である。1987年の第2次調査区の北東に位置する。現状では、駐輪場として使用されており、厚いコンクリートの舗装が施されていた。調査区は東西約14.5m、南北約6.1mに設定した。

4区は中庭であった場所で、調査区は東西約10.7m、南北約10mに設定した。試掘調査では第2トレンチとして調査している。

(1) 基本層序

各調査区とも学校建設時の盛土は厚さ0.5～0.9m、耕作土層が厚さ0.15～0.3mあり、この上面で室町時代以降の遺構を検出した。耕作土層下は黄褐色粘土層(無遺物層Ⅱ)となる。平安時代の遺構は無遺物層Ⅱ上面で検出した。各調査区の無遺物層上面の標高は、1・2区が34.0m、3区が33.8m、4区が33.7mある。

(2) 平安時代の遺構

各調査区とも平安時代中期の遺構を検出しているが、調査区が狭小なこともあり、調査区内で完結した遺構はない。その中で、注目すべき遺構に1・2区で検出した園池遺構(池4)がある。この他、柵(柵8・9)・土塋(土塋4)などを検出している。

池4 1区西端部から2区東部にかけて検出した池跡である。北へは調査区外へさらに広がる。

第3節 右京三条二坊十五町の調査(第4・5次調査)

池の南部(池尻)と考えられ、緩く弧を描いて調査区南端で収束するものと考えている。肩口から底面にかけて小振りの石を敷き詰め洲浜を形成している。洲浜は西半部の遺存状況は良好であるが、東半部はわずかにその痕跡が残るのみである。検出面での現存規模は、東西約11m、南北約4.5m、深さは最深部で約0.5mある。池は黄褐色粘土層(無遺物層Ⅱ)を掘り込んで形成されている。肩口から池底までの斜面はかなり緩やかな傾斜をもち、傾斜角度は約5°ある。洲浜は原則としては無遺物層Ⅱに直接石を貼り付けている。この手法は第3次調査の池1と同様の手法である。ただし、池4の南西隅には一部砂礫層(無遺物層Ⅲ)が露出する箇所があり、ここから若干の湧水がみられる。この砂礫層部分から北半部にかけては、にぶい黄褐色粘土層と黒褐色砂泥層が混じり縞模様をなす粘土層が貼り付けられている。特に、無遺物層Ⅲ部分では厚く貼り付けることにより肩口部を成形している。また、北西側部分の池の肩口となる無遺物層は粘性を帯びない泥砂層であり、一度この無遺物層を掘り窪めた後に、池底に向かってしだいに厚く粘土を貼り付け造作していることが判明した。その際、池底の無遺物層Ⅱに接する部分にはさらに粘質の強い粘土を使用していた。このような状況は、調査区北壁に沿って実施した断割断面でも観察している。こうして下地を造った上に径10cm未満の石を叩き締めるように貼り付け、洲浜を形成する。堆積土層は3層に大別できる。上層は黒褐色砂泥層、中層は黒褐色砂泥層に黄褐色ないしは灰白色の粘土がブロック状に混入しており、池の肩口部付近では、拳大ほどの石が集中する。下層は黒褐色砂泥層で腐植土が混入する箇所もある。

土壌4 2区の北西部で検出した土壌で、北へはさらに調査区外へ広がる。検出面での現存規

模は、東西約2.4m、南北1.6m、深さ0.25mある。壙底の東半に直径0.8mのほぼ円形を呈する状態で石が集中する箇所がある。集石は表面のみで下部には及ばない。黒褐色砂泥層が堆積する。池4から西へ約3.5mに位置することから、あるいは池4に関連し、景石を据えた据付穴である可能性もあろう。



図39 土壌4 検出状況(北西から)

柵8 1区中央で検出した東西方向の柵で、東端の柱穴から南折する。柱間は東西が2.9m等間で3間分(8.7m)、南北1間(2m)以上ある。柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は、径0.3~0.4m、深さ0.1~0.2mある。東西列の柱穴のうち2基に根石が据えられている。

柵9 1区中央西寄りで検出した南北方向の柵である。南北へはさらに延長すると考えられる。1.5m等間の2間分(3m)を検出した。柱穴の規模などは柵8と同様である。

3区の遺構 遺構面自体の遺存状況は良好であったものの、平安時代の遺構は、約10基の柱穴と、土塋1基、溝1条を検出したにとどまる。柱穴は建物としてはまとまらない。

4区の遺構 平安時代の遺構には柱穴と石敷遺構2がある。

4区北半部の標高は1～3区とほぼ同一であるが、調査区中央を東西に延長する室町時代から江戸時代の溝を境に、南半部は遺構面が約0.2m下がる。遺構はすべて南半部で検出し、北半部では未検出であるため、この段差は平安時代に遡る可能性がある。柱穴は調査区南端部で8基検出したが、建物としてはまとまらない。

石敷遺構2は調査区南端で検出した拳大の礫が面的に広がった遺構で、東西約6.5m、南北は現存幅0.4mある。形状は不明であるが、遺構面に対して4cm程浅くなっており、南は調査区外へ延長する。

(3) 室町時代から江戸時代の遺構

十五町跡でも耕作土層や耕作に伴う溝などを検出し、耕作に伴う溝の検出密度は十六町とほぼ同様の状況を呈する。とくに3区で検出した耕作溝群は、第2次調査区に連続するものが認められる。

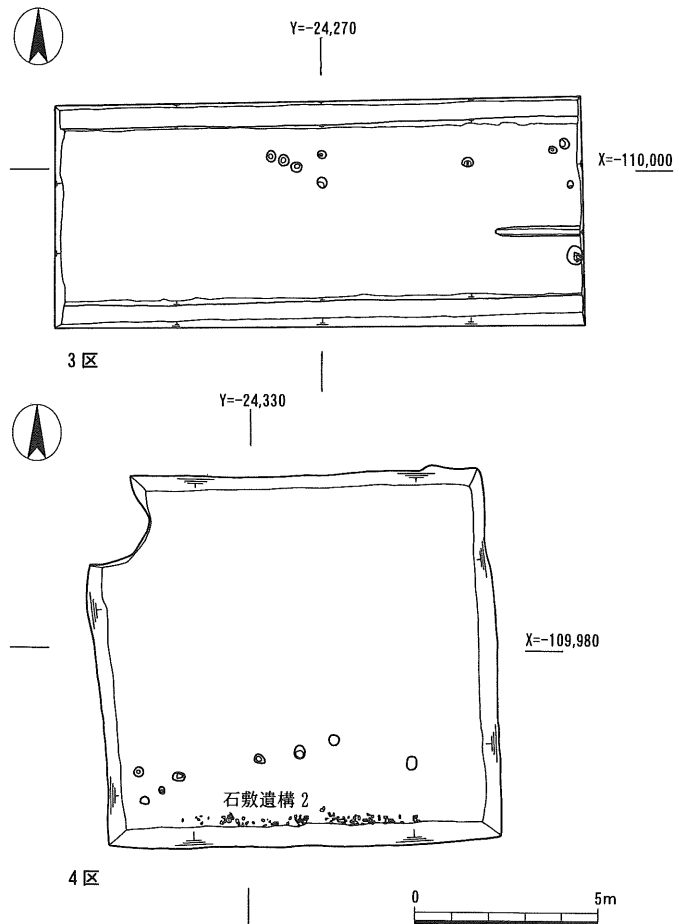


図40 第5次調査3・4区平面実測図 (1/200)

註

- 1 なお、橋本清一氏(京都府立山城郷土資料館)による池1使用石材の鑑定および所見は以下のとおりである。
池1の北部から西岸部洲浜にみられる平均20～30cmの大きさの石材は、チャートと砂岩からなり、わずかに頁岩から粘板岩・脈石英がみられる。これらは丹波地帯によくみられる岩石種である。円磨度は、チャートが0.4・0.5程度で、やや角張っている。砂岩は0.5程度でやや円磨が進んでいる。採取地については、もしも桂川から採取すれば、岩石種は良いが、円磨度がもっと大きいので適合しない。鴨川なら、もっと岩石種が多いはずである。そうすると、消去法として、紙屋川の河床礫を採取したとすると合理的である。池1の南岸部洲浜や池底に敷かれた平均数cmの小さな石については、石材はほぼ同様であるが、円磨度は下がりもう少し角張っている。採取地は大部分が地山の砂礫層中の礫(直径数cm程度のもの)を使用したと考えられる。
- 2 粘土を貼り付け洲浜を構築する例は、平安京左京二条二坊(高陽院跡)の調査で確認している。
網 伸也「発掘調査からみた頼通伝領前の高陽院」『研究紀要』第5号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 3 橋本清一氏の鑑定によれば、山中の崖または谷付近から採取したと考えられ、産地については大文字山付近の花崗岩本体から採取した可能性があるとのことである。
- 4 建物内の同様な施設は、平安京右京二条二坊五町でも検出している。9世紀の大型建物の東底下で検出した一辺1.0m、深さ1.2mの方形土壇で、井組木枠の下に曲物を入れ、さらにその下に0.2mほど砂利を詰めた遺構である。やはり、基盤の粘土層に作られており、湧水層である砂礫層まで達していない。建物内の水溜めとして機能したと考えられる。
東 洋一・網 伸也・真喜志悦子「平安京右京二条二坊」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 5 第1次・第2次調査は、既に『京都市埋蔵文化財調査概要』で概要報告されており、検出された遺構はそれぞれ固有の名称・番号を与えられている。しかし、本書ではこれらの遺構も第3次調査で検出した遺構と一連のものとして扱い、新たな遺構番号を与えていくこととした。以下に本書で採用した遺構番号と、概要における遺構番号を対比できるように表6を作成した。なお、第1次調査の旧SD3は押小路南側溝と野寺小路西側溝にあたるため、溝5・溝6と別の遺構番号を付加している。また、平安時代後期の押小路両側溝は遺構番号が与えられていなかったため、今回新たに溝104・105とした。
- 6 木下保明「平安京右京三条二坊2」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 7 堀内明博「長岡京出土の特殊建物遺構に関する2・3の覚え書き－所謂甕据付穴付掘立建物の類型別分析－」『長岡京古文化論叢』Ⅱ 三星出版 1992年

表6 遺構番号対照表

平安時代中期の遺構	本書の遺構番号	概要の遺構番号	遺構の種類	調査回数	報告年度
	井戸3	SE1	方形縦板組井戸	第1次	昭和56年度
	建物21	SB1	堀立柱建物	第1次	昭和56年度
	建物22	SA131	堀立柱建物	第2次	昭和62年度
	溝1	SD2	押小路北側溝	第1次	昭和56年度
	溝5	SD3	押小路南側溝	第1次	昭和56年度
	溝6	SD3	野寺小路西側溝	第1次	昭和56年度
	溝7	SD117	東西溝	第2次	昭和62年度
	溝8	SD118	東西溝	第2次	昭和62年度
	溝9	SD100	南北溝	第2次	昭和62年度
	溝10	SD105	南北溝	第2次	昭和62年度
平安時代後期の遺構	本書の遺構番号	概要の遺構番号	遺構の種類	調査回数	報告年度
	溝104	—	押小路北側溝	第1次	昭和56年度
	溝105	—	押小路南側溝	第1次	昭和56年度
	野寺小路川	SD1	川跡	第1次	昭和56年度

第3章 遺物

第1次調査から第5次調査まで含めて、出土した遺物は遺物整理箱にして約520箱にのぼる。

内訳は、野寺小路と押小路の交差点の調査である第1次調査では44箱、第2次調査では6箱、第4・5次調査では17箱出土している。また、十六町の調査である第3次調査では450箱余りの遺物が出土した。なかでも園池関連遺構から出土した平安時代中期に属する遺物が大半を占めており、その種類は瓦類・土器類・土製品・石製品・金属製品・木製品などがある。今回の報告では十六町邸宅に関わる平安時代中期の遺物を中心に記述を行ない、その他の遺物は別に節をたてて報告する。なお、瓦類と土器類の個々の遺物に関しては別掲の観察表を参照されたい。

第1節 平安時代中期の遺物

1 瓦類

瓦類は十六町域と野寺小路川を対象とする第1次調査と第3次調査で、総数5346点(788kg)が出土しているが、点数的にはほとんどが丸瓦と平瓦である。出土地点は園池を中心とする2区・3区に集中しており、その他では井戸2掘形と野寺小路川からまともって出土している。今回の調査で検出した平安時代の条坊側溝は押小路の両側溝および野寺小路西側溝であるが、ここからはほとんど瓦類が出土しない。遺構に伴わない丸・平瓦の時期を決定するのは難しいが、軒瓦を数量的にみてみると全体の90%以上、重量的にみると95%以上が平安時代中期以前の軒瓦であり、その他の瓦類も大半が平安時代中期以前のものと考えられる。また、軒瓦の出土地点をみてみると、園池関係遺構から101点で、2・3区全体では124点にのぼり、実に81%の軒瓦が園池周辺から出土したことになる。

表7 十六町出土軒丸瓦統計表

	形式別	数量(点)	重量(kg)	各期数量比	各期重量比	全数量比	全重量比
前期以前	重圏文式	20	11.87	67%	80%	27%	59%
	平城宮式	2	1.49	7%	10%	3%	7.5%
	長岡宮式	1	0.3	3%	2%	1%	2%
	吉志部・西賀茂産	6	0.89	20%	6%	8%	4.5%
	芝本産	1	0.35	3%	2%	1%	2%
	小計	30	14.9	100%	100%	40%	75%
中期	栗栖野産 四複弁式	7	0.66	21%	15%	9%	3%
	〃 八複弁式	1	0.1	3%	2%	1%	0.5%
	〃 単複弁式	8	1.56	24%	35%	11%	7.5%
	小野産	1	0.07	3%	1.5%	1%	0.5%
	備中安養寺式	2	0.12	6%	2.5%	3%	0.5%
	搬入四弁式	14	1.97	43%	44%	19%	10%
	小計	33	4.48	100%	100%	44%	22%
	不明	12	0.65			16%	3%
	総合計	75	20.03			100%	100%

(1) 軒丸瓦

十六町から出土した平安時代中期以前の軒丸瓦は、75点18型式(20.03kg)である。

(1～6)は難波宮式の重圈文軒丸瓦である。^{註1}(1・3・4)は中心に「右」銘を持つ6015A型式だが、(1)と(3)の資料では「右」銘が剥離しており、再利用する際に銘を意図的に消した可能性がある。(2)は6016型式、(6)はやや小型の6014型式と考えられる。(5)も小型の軒丸瓦であるが、周縁が斜縁になっているのが特徴的で、6021型式かと考えられる。重圈文軒丸瓦は20点(11.87kg)と最も多く出土しており、前期以前の軒丸瓦の中で点数では27%だが、重量比では全体の59%を占めている。この他の旧都搬入瓦としては、平城宮式蓮華文軒丸瓦が2点(1.49kg)、長岡宮式蓮華文軒丸瓦が1点(0.3kg)出土している。^{註2}(7)は平城宮6134A型式、(8)は平城宮6282型式のいずれかに相当する。(9)は長岡宮7133型式と考えられる。また、平安時代前期の蓮華文軒丸瓦も少量ながら出土した。(10)は西賀茂瓦窯産のNS154A型式軒丸瓦である。^{註3}(11)は吉志部瓦窯産の細弁十六葉蓮華文軒丸瓦で、(12)は芝本瓦窯産の細弁十五葉蓮華文軒丸瓦である。^{註4}これら平安時代前期軒瓦の出土数は、西賀茂・吉志部瓦窯産軒丸瓦は総数6点(0.89kg)、芝本瓦窯産軒丸瓦は1点(0.35kg)であった。

平安時代中期の軒丸瓦は、栗栖野瓦窯産の軒丸瓦と在地産の搬入瓦が主流を占める。(13～15)は成形台一本作りの複弁四葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当部は横型の成形台上に粘土塊を積み上げて丸瓦部と一体的に成形し、横から範型を打ち込んで文様面を作る。瓦当裏面には丸瓦部から連続する布目が残っており、丸瓦部と瓦当裏面の境界や丸瓦部側面から瓦当裏面下端にかけてをヘラケズリで整える。1点だけ出土している(16)の複弁八葉蓮華文軒丸瓦とともに、これらは栗栖野瓦窯産である。^{註5}また、これらと全く同じ技法で製作されているのが、(18～21)の単複弁蓮華文軒丸瓦である。おそらく同じ栗栖野瓦窯で生産されたものと考えられる。この他、小野瓦窯産の軒丸瓦(17)が1点出土しており、第1次調査で検出した野寺小路川からも同軒丸瓦(70)が1点出土している。数量的にみると、(13)と同型式は7点(0.66kg)、(18)と同型式は8点(1.56kg)出土しており、両型式が平安時代中期の軒丸瓦の半数を占める。

在地産の搬入瓦は、(22)が備中安養寺系の軒丸瓦で2点の出土をみる^{註6}が、今回平安京内で初めて出土した(23～29)の資料が注目される。文様は単弁四葉蓮華文で、間弁が大きく覗いており一見では八葉蓮華文を呈する。製作技法が特徴的で、まず瓦範の上に円形粘土板を押しつけて平底壺の底部内面と同じように瓦当部を成形する。そして、丸瓦を端部に接合し、補足粘土を加えて瓦範を回転させながら丸瓦接合部と瓦当下端の整形を行なうとともに、範を外した後も周縁と瓦当側面をつまんでナデ調整を施して仕上げている。平底壺の製作技法と共通する点が多く、在地の土器生産地周辺での生産が想定できる。出土数も14点(1.97kg)と栗栖野瓦窯産軒丸瓦と同量にまとまって出土しており、安養寺系の軒丸瓦も含めると平安時代中期の軒丸瓦は、栗栖野瓦窯産とこの在地産軒丸瓦が主流を占めていたことになる。また、出土地点も園池からの出土が大半であるが、1点だけ井戸2から出土しており、特殊な搬入瓦であることから園池遺構と4区の建物群との強い関連性を示唆している。

表8 十六町出土軒平瓦統計表

	形式別	数量 (点)	重量 (kg)	各期数量比	各期重量比	全数量比	全重量比
前期以前	重圈文式	8	5.52	25%	28.5%	13%	23%
	難波宮式唐草	1	1.41	3%	7%	2%	6%
	藤原宮式	1	0.4	3%	2.5%	2%	2%
	平城宮式	1	0.32	3%	2%	2%	1.5%
	長岡宮式	5	2.75	15%	14%	8%	12%
	吉志部・西賀茂産	4	3.16	13%	16%	7%	13.5%
	芝本産	6	4.63	19%	24%	10%	19%
	その他	6	1.2	19%	6%	10%	5%
	小計	32	19.39	100%	100%	55%	82%
中期	栗栖野・池田窯産	12	3.32	100%	100%	21%	14%
	不明	14	0.98			24%	4%
	総合計	58	23.69			100%	100%

(2) 軒平瓦

十六町から出土した平安時代中期以前の軒平瓦は58点21型式(23.69kg)である。

旧都から搬入された軒平瓦は、軒丸瓦と同じように難波宮式が9点(6.93kg)と最も多く出土している。そのうち重圈文軒平瓦は8点(5.52kg)で、(35)の1点だけ均整唐草文の難波宮6664B型式となる。重圈文軒平瓦は、(32)は難波宮6572型式、(33)が難波宮6576A型式、(34)は難波宮6574型式であろう。この他、(31)は藤原宮6641E型式で1点出土、平城宮式は6664型式の小破片が1点出土している。(37・38)は長岡宮7757A式で、(48)は長岡京東院で使用された軒平瓦の細片である。第1次調査の野寺小路川から出土した(71)と、十五町域の第5次調査で出土した(69)も長岡宮7757A式であろう。これらの資料を含めて長岡宮式軒平瓦は7点(4.2kg)出土している。

平安時代前期の軒平瓦は、西賀茂瓦窯産が4点(3.16kg)、芝本瓦窯産が6点(4.63kg)出土している。(39～41)は西賀茂瓦窯産軒平瓦で、(39)はNS205型式、(40)はNS202型式、(41)はNS207型式、(42)はNS206B型式に相当する。(43～46・52)は芝本瓦窯産軒平瓦である。また、(47・49～51)のように産地不明の前期軒平瓦片が数点出土している。(36)は中心飾の圈線の中に裏字の「松」銘が表現されている。この軒平瓦は、平安京右京六条二坊二町周辺で多く出土する特異な軒平瓦で、文様構成は長岡京東院で多く出土している「旨」銘均整唐草文軒平瓦と非常に類似している。長岡京東院でセットとなる軒丸瓦は平安京右京六条二坊二町の調査でこの軒平瓦と共伴している。^{註7}この他、(72)は吉志部瓦窯産軒平瓦で、第1次調査で検出した野寺小路川から1点出土している。

十六町出土軒平瓦を統計的にみると、平安時代前期以前の軒平瓦の出土量は全数比で55%、全重量比で82%と、軒丸瓦よりも出土比率がさらに多くなっているといえる。

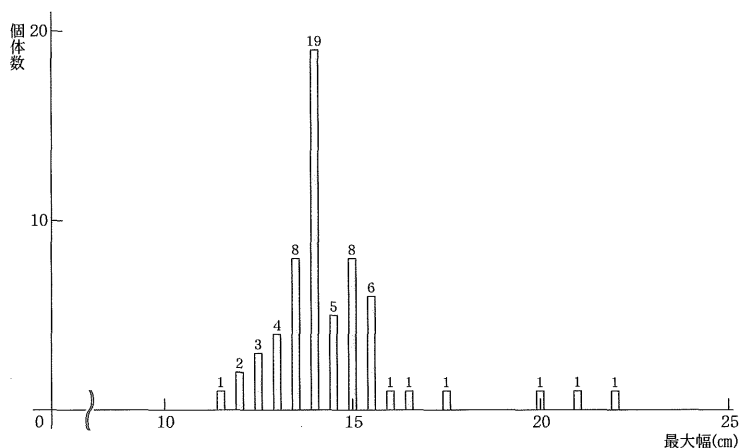
平安時代中期の軒平瓦は栗栖野瓦窯産および池田瓦窯産^{註8}の軒平瓦が主流である。(53～58)で、少なくとも同文異範が3型式確認できる。このうち(56)は池田瓦窯産で、野寺小路川出土の(73)も同型式軒平瓦である。これを含めると出土総数は13点(4.52kg)である。また、同じく野寺小路川から出土した(74)は、製作技法から推定して京都産で河上瓦窯産^{註9}と考えている。

丸瓦と平瓦の個別の出土数を対比してみると、調査区全体では丸瓦406点(78.74kg)に対し、平瓦4784点(655.55kg)で、そのうち第3次調査第2・3区では丸瓦262点(54.87kg)に対し、平瓦3743点(508kg)である。比率に換算すると、調査区全体では丸瓦：平瓦は数量比で1：11.8、重量比で1：8.3となり、第3次調査第2・3区では数量比で1：14、重量比で1：9.3となる。平安時代前期後半の資料である上ノ庄田瓦窯^{註10}の資料によると、丸瓦が約3kg、平瓦が約3.5kgである。この資料から重量差を換算して個体数の比率を求めると、調査地全体で丸瓦：平瓦=1：7、第3次調査第2・3区では丸瓦：平瓦=1：8となる。この数値は総瓦葺建物よりも葺棟瓦での使用を示唆している。

実際に接合可能な平瓦を観察すると、最大幅が20cmを超える資料は3点しか確認できなかった(81~83)。観察資料62点のうち、側破面は前述の3点以外大半が側面と平行した破面を持っており(84~92)、表9からわかるように最も多い最大幅資料は14cmのものである。つまり、平瓦はすべて14cm前後に意図的に割られて使用されていると考えられ、個体比率で想定した割熨斗瓦としての利用を裏付けるものである^{註11}。

平瓦の製作技法は、基本的には凸型台での成形後に縄叩き調整し、離れ砂を凸面に撒いて凹型調整台上に載せ変え、側面・端面などの調整を行ない仕上げる。特徴的なのは凹型調整台上に載せ変えるとき、凹面を板状工具で叩く資料が多く認められることである(82～85・88・92)。(82)の資料では、この叩き板に「木工」と陽刻されており、中央部を2回叩いている。在銘の意味については瓦生産の主体あるいは管理の問題を検討する必要があるが、基本的には凹面無文叩きは調整台の曲面に製品を合わせるために行なわれた調整と考えられる。同様の技法は池田瓦窯産の平瓦にも確認でき、平安時代後期に操業した南ノ庄田瓦窯でも凹面無文叩きの平瓦が出土することか

註12



- 60 -

の文字瓦として、「長」銘を凹面端部に施した資料(93)が出土している。

丸瓦は細片化した資料がほとんどであるが、池1の南洲浜から溝3への導入部にほぼ完全な丸瓦(76)が据えられたように置かれていた。暗渠としては機能せずその性格は不明である。その他の丸瓦は棟頂に雁振瓦として使用されていた資料であろう。また、池1から小型丸瓦(77・78)や緑釉丸瓦片(79)・緑釉熨斗瓦片(80)が出土している。

2 土器類

平安時代中期の土器類の出土状況も園池関連遺構からの出土が大半であり、その中でも池1から出土した遺物が

90%以上を占めている。器種は、土師器・黒色土器・白色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器がある。まずこれらの破片数を計測することによって器種別の出土傾向を園池関連遺構と井戸に分けて概観する(表10~12)。個別の土器は観察表を参照されたい。

園池関連遺構では、全土器破片数が47,869片であるのに対し、土師器の破片数が36,824片と全体の約77%を占める。このうち31,228片が杯皿類で土師器破片数の85%を占め、高杯・盤・鉢を合わせると35,891片と供膳具が97%以上となる。土師器に次ぐのが須恵器の5,822片で全体の12%であるが、土師器とは異なり杯皿類よりも壺・鉢・甕が5,525片と須恵器全体の95%近くを占め、貯蔵具が主流であったことがわかる。緑釉陶器も1,968片と全体の4%強であるが、このうち1,921片が碗皿類で土師器と同じく供膳具が97%以上を占めている。この他、黒色土器と灰釉陶器が3%弱で、白色土器と輸入陶磁器は1%にも満たない。しかし、輸入陶磁器は優品が多く、特別な用途が想定されている白色土器も一定量出土したことは注目すべきである。器種を超えて機能別にみると、供膳具が全体の85%近くを占めており、煮沸具が3%にも満たないことが、この地域での遺構の性格を示している。

井戸出土土器の破片数の状況は、邸宅北半地域に属する井戸1と邸宅南半地域に属する井戸2とが対照的な様相を呈している。井戸1は輸入陶磁器の出土がみられないが、比率的に園池関連



図41 十六町出土文字瓦拓本(1/2)

第1節 平安時代中期の遺物

表10 園池関連遺構出土土器破片数統計表

器種	器形	池1 数量	池2 数量	池3 数量	泉1 数量	溝2 数量	溝3 数量	溝4 数量	数量 合計	器種別 数量比	全数量比
土師器	杯・皿	28542	928	1307	299	9	97	46	31228	84.80%	65.24%
	高杯・盤	4415	147	67	23	2	3	6	4663	12.66%	9.74%
	甕・鍋	808	0	48	37	4	5	4	906	2.46%	1.89%
	壺	1	0	0	3	0	0	0	4	0.01%	0.01%
	その他	16	6	0	1	0	0	0	23	0.06%	0.05%
	小計								36824	100.00%	76.93%
黒色土器	碗・皿	1005	18	53	31	1	2	1	1111	81.81%	2.32%
	盤	6	0	0	0	0	0	0	6	0.44%	0.01%
	甕	203	7	21	6	0	0	0	237	17.45%	0.50%
	その他	4	0	0	0	0	0	0	4	0.29%	0.01%
		小計								1358	100.00%
白色土器	碗・皿	333	4	21	10	0	0	1	369	87.65%	0.77%
	高杯	40	3	0	0	0	0	0	43	10.21%	0.09%
	壺	7	0	0	0	0	0	0	7	1.66%	0.01%
	その他	0	0	2	0	0	0	0	2	0.48%	0.00%
		小計								421	100.00%
須恵器	杯・皿	256	7	14	9	0	9	0	295	5.07%	0.62%
	壺・鉢	2754	68	101	90	0	5	10	3028	52.01%	6.33%
	甕	2273	59	49	91	6	5	14	2497	42.89%	5.22%
	その他	1	0	1	0	0	0	0	2	0.03%	0.00%
		小計								5822	100.00%
緑釉陶器	碗・皿	1734	37	77	66	1	3	3	1921	97.61%	4.01%
	壺	39	1	3	1	0	0	0	44	2.24%	0.09%
	その他	2	1	0	0	0	0	0	3	0.15%	0.01%
		小計								1968	100.00%
灰釉陶器	碗・皿	770	33	46	34	1	0	0	884	65.53%	1.85%
	壺	320	15	13	5	0	0	0	353	26.17%	0.74%
	甕	98	1	9	0	0	0	0	108	8.01%	0.23%
	その他	3	0	0	1	0	0	0	4	0.30%	0.01%
		小計								1349	100.00%
輸入(青磁)	碗・皿	48	1	0	2	0	0	0	51	91.07%	0.11%
	壺	5	0	0	0	0	0	0	5	8.93%	0.01%
		小計								56	100.00%
輸入(白磁)	碗・皿	59	2	0	1	0	0	0	62	98.41%	0.13%
	壺	1	0	0	0	0	0	0	1	1.59%	0.00%
		小計								63	100.00%
輸入(褐釉)	壺	8	0	0	0	0	0	0	8	100.00%	0.02%
		小計								8	100.00%
計		43751	1338	1832	710	24	129	85	47869		100.00%

表11 井戸1出土土器破片数統計表

器種	器形	枠内 数量	掘形 数量	旧掘形 数量	数量 合計	器種別 数量比	全数量 比
土師器	杯・皿	268	347	123	738	83.30%	58.76%
	高杯・盤	30	24	17	71	8.01%	5.65%
	甕・鍋	35	28	14	77	8.69%	6.13%
	小計				886	100.00%	70.54%
黒色土器	碗・皿	30	37	10	77	84.62%	6.13%
	甕	8	6	0	14	15.38%	1.11%
	小計				91	100.00%	7.25%
白色土器	碗・皿	26	9	0	35	92.11%	2.79%
	高杯	0	1	0	1	2.63%	0.08%
	壺	2	0	0	2	5.26%	0.16%
	小計				38	100.00%	3.03%
須恵器	杯・皿	3	4	2	9	6.43%	0.72%
	壺・鉢	50	27	16	93	66.43%	7.40%
	甕	18	17	3	38	27.14%	3.03%
	小計				140	100.00%	11.15%
緑釉陶器	碗・皿	20	26	5	51	100.00%	4.06%
	壺	0	0	0	0	0.00%	0.00%
	その他	0	0	0	0	0.00%	0.00%
	小計				51	100.00%	4.06%
灰釉陶器	碗・皿	17	19	5	41	82.00%	3.26%
	壺	3	2	2	7	14.00%	0.56%
	甕	1	1	0	2	4.00%	0.16%
	小計				50	100.00%	3.98%
輸入(青磁)	碗・皿	0	0	0	0	0.00%	0.00%
	小計				0	0.00%	0.00%
輸入(白磁)	碗・皿	0	0	0	0	0.00%	0.00%
	小計				0	0.00%	0.00%
輸入(褐釉)	壺	0	0	0	0	0.00%	0.00%
	小計				0	0.00%	0.00%
計		106	33	508	1256		100.00%

表12 井戸2出土土器破片数統計表

上層 数量	枠内 数量	掘形 数量	礫地業 数量	数量 合計	器種別 数量比	全数量 比
300	121	688	9	1118	80.43%	40.10%
17	6	21	8	52	3.74%	1.87%
106	23	66	25	220	15.83%	7.89%
				1390	100.00%	49.86%
44	23	50	3	120	74.53%	4.30%
16	1	24	0	41	25.47%	1.47%
				161	100.00%	5.77%
10	6	6	0	22	95.65%	0.79%
0	0	1	0	1	4.35%	0.04%
0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
				23	100.00%	0.82%
29	3	53	5	90	11.04%	3.23%
119	28	179	25	351	43.07%	12.59%
80	35	219	40	374	45.89%	13.41%
				815	100.00%	29.23%
54	30	85	10	179	99.44%	6.42%
1	0	0	0	1	0.56%	0.04%
0	0	0	0	0	0.00%	0.00%
				180	100.00%	6.46%
41	17	62	6	126	60.87%	4.52%
20	7	30	6	63	30.43%	2.26%
9	0	5	4	18	8.70%	0.65%
				207	100.00%	7.42%
1	1	3	0	5	100.00%	0.18%
				5	100.00%	0.18%
1	0	1	0	2	100.00%	0.07%
				2	100.00%	0.07%
0	0	5	0	5	100.00%	0.18%
				5	100.00%	0.18%
848	301	1498	141	2788		100.00%

遺構とよく似た状況にある。井戸の資料であり煮沸具の出土比率も増えているが、白色土器碗皿類の比率が高く、全体的に供膳具を多く使う空間利用であったことがわかる。これに対し、井戸2では供膳具が全体の62%弱と少なく、貯蔵具が28%強、煮沸具が10%となっている。土師器だけをみても、園池関連遺構や井戸1では全体の90%を超えていた供膳具の比率が約84%まで低くなるとともに、園池関連遺構では3%にも満たなかった煮沸具の比率が16%近くまで増えており、明らかに遺構群の性格の違いが土器の比率にも現れている。十六町邸宅の空間利用を考えるうえでも、非常に有効な計測結果だといえよう。

次に、池1および各遺構から出土した土器類の概要を順次報告する。

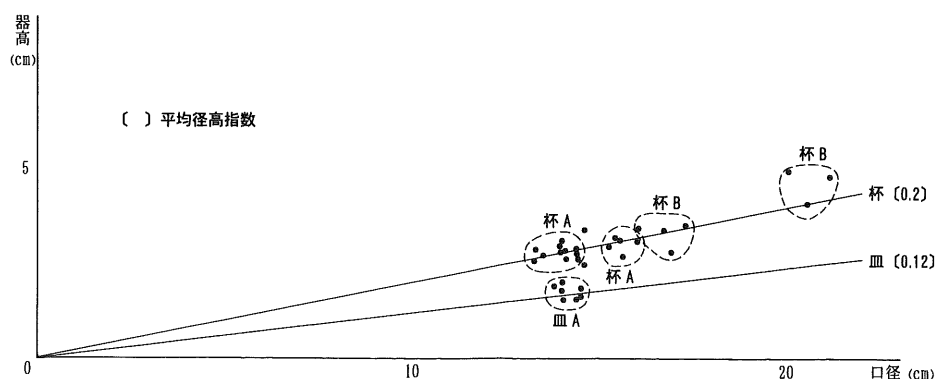
(1) 池1出土土器

土師器 池1から出土した土師器は、出土地点によって大きく二つのグループに分けることができる。

第1グループは泉1から清水が流れ込む地点の東汀周辺から出土した土器群(101~132)で、完形のものが多く含まれる。杯と皿の器種分化がまだはっきりしており、杯の平均径高指数は0.2、皿の平均径高指数は0.12である。皿は口径14cm前後の皿A(101~107)だけで占められるが、杯Aは口径14cm前後のもの(108~120)と口径15~16cmのやや大型のもの(121~125)に分かれる。ともに、底部から体部外面にかけてオサエ成形痕跡を残し、調整痕跡は粗いナデが若干認められる程度である。口縁部から内面にかけてナデ調整で、口縁部は屈曲し端部を内側に肥厚させる。杯Bも杯Aと同様の技法で成形し、断面三角形の低い高台を貼り付けるが、一部体部外面にヘラケズリ調整を施すものが認められる。口径17cm前後で杯Aよりやや大きいもの(126~129)と、口径が20cmを超える大型のものがある(130~132)。これらの土器群は東汀での祭祀儀礼に伴うものと考えられ、建物13はこの儀礼の際の覆屋であったと考えられる。土器群の多くは儀礼後に洲浜として整地土内に埋め込まれており、平安京編年のⅡ期中段階に相当する一括性の高い資料である。^{註13}

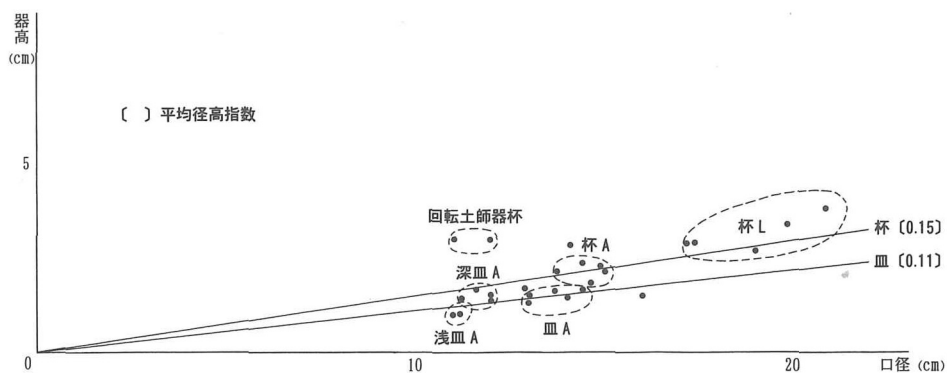
第2グループは池本体から散在的に出土した土器群で、第1グループが完形を多く含むのに対し、出土量が多いがほとんどが細片化していた。杯の平均径高指数は0.15、皿の平均径高指数は0.11となっており、皿と杯の器種分化が曖昧になりつつある段階の土器群である。杯Bもあまり認められず、杯L(150~153)が出土するようになり、第1グループよりも明らかに型式的に新し

表13 池1出土土師器第1グループ径高指数分布表



第1節 平安時代中期の遺物

表14 池1出土土師器第2グループ径高指数分布表



い要素をもっている。また、皿の法量を観察すると、第1グループと同じく口径14cm前後のもの(141～143)も出土するが、口径13cmのやや小型化したもの(139・140)や口径11～12cmの小型化が進んだもの(133～138)まで出土している。後者は器高の違いによってさらに深皿と浅皿に分化しており、前者から後者への変化は法量分化ではなく時期差として捉えるのが妥当であろう。杯Aは口径14～15cmのもの(144・145・147～149)が主流で、口縁部の屈曲が強くなり端部は上方に肥厚するようになる。平安京編年にあてはめると、Ⅱ期新段階からⅢ期古段階にわたる年代幅を持った資料である。その一方で、第1グループよりも型式的に古い特徴を持つもの(156・157)も若干出土している。なお、回転台成形土師器(154・155)が出土しており、山城産以外の土師器が搬入されたものとして注目できる。

その他の土師器として高杯が多量に出土している(158～166)。そのほとんどが脚柱部で、杯口



図42 池1出土土師器高杯

縁部(162)および脚裾部(164)の破片は非常に少ないのが特徴的である。脚柱にはヘラケズリによって面取りを施すもの(158・159・161)と、断面円形を呈するもの(160・163・165)がある。また、小型の高杯(166)も出土している。(167)は大型盤であるが、出土数は非常に少ない。これら土師器高杯の破片数は盤も含めて全体の約10%に達している。煮沸具は甕の破片(168～171)と羽釜の破片(172・173)がある。また、移動式竈の破片(174)も出土しているが、すべて小破片であり全体の3%にも満たない。

黒色土器 皿・碗・鉢・小杯・甕がある。内面のみに炭素を吸着させる黒色土器A類がほとんどであるが、碗B(190)と台付鉢(194)に黒色土器B類が認められる。黒色土器B類はともに内外面を丁寧にヘラミガキする。皿は無高台の皿A(175)と高台付の皿B(176)があるが点数は非常に少ない。碗も無高台の碗A(177～179)と高台付の碗B(180～190)に分かれるが、後者が主流である。外面調整は粗いヘラケズリを施すもの(177～179・182・188)と、オサエ成形痕跡に粗いナデ調整を施すだけのもの(180・181・183～187・189)がある。内面は丁寧なヨコヘラミガキで、暗文を施すもの(179・186・188・189)もある。口径は碗A・碗Bともに15～16.5cmのものが多く、碗Bには口径13.5cm前後のやや小型のものと、口径17.5cm前後のやや大型のものがある。

なお、碗Aの(178)と(179)の外面には黒色塗料が塗布されている。外面に黒色塗料の塗布痕跡が残る黒色土器A類は、碗B(186・189)や台付鉢(192)にも確認でき、漆器を指向して意図的に施されたものと考えられる。これを裏付ける資料として、黒色土器A類ではあるが外面を丁寧にヘラミガキして明らかに黒漆を塗った破片が池1から出土している。おそらく他の資料も塗料は漆であった可能性が高い。台付鉢は丁寧^{註14}に外面をヘラミガキしており、小型のもの(191)もある。また、鉢の把手(195)や獣脚(196)も出土しており、鉢の形態が多様であったことがわかる。甕(197・198)は体部外面に多量の煤が付着しており、煮沸に使用された痕跡をよく留めている。

白色土器 供膳具が大半で、蓋(199)・碗(200～202)・小杯(209)・高杯(210・211)がある。池1での白色土器の破片数は380片で、底部片(203～208)を含む碗皿類が333片と約88%を占めるとともに、高杯片が40片と10%強占めていることは興味深い。土師器でも高杯が同じように高比率で出土しており、高杯を多用した供膳形態が園池周辺で頻繁に行なわれたことを示している。^{註15}

須恵器 須恵器の破片は池全域から多量に出土した。前述したように壺・鉢・甕が大半を占め、供膳具の杯皿類は少ない傾向にある。

杯A(212・213)は体部が内湾気味外側に開いており、当期の特徴をよく示している。また、小型瓶子(217～222)は池内から目立って多く出土している。多くは水引き回転台成形で胴部が卵形を呈する。(223・224)は胴部が砲弾形で口縁の受け口が発達した型式的に新しい特徴を示す。特に(223)は、木栓(538)が詰められた状態で出土した。内容物は残っていなかった。長頸壺(225～229)も破片ではあるが一定量出土しており、短頸壺には耳付きのもの(235)とないもの(236)がある。(215)は壺蓋、(216)は杯蓋であろう。鉢は口縁端部を内側に肥厚させる形態が残る型式的に古い特徴を持つもの(230・231)から、完全に玉縁を呈するもの(232・233)まである。この型式差が池が存続した時間幅に対応する。甕(237～243)は細片化し、出土した大半が胴部の破片である。

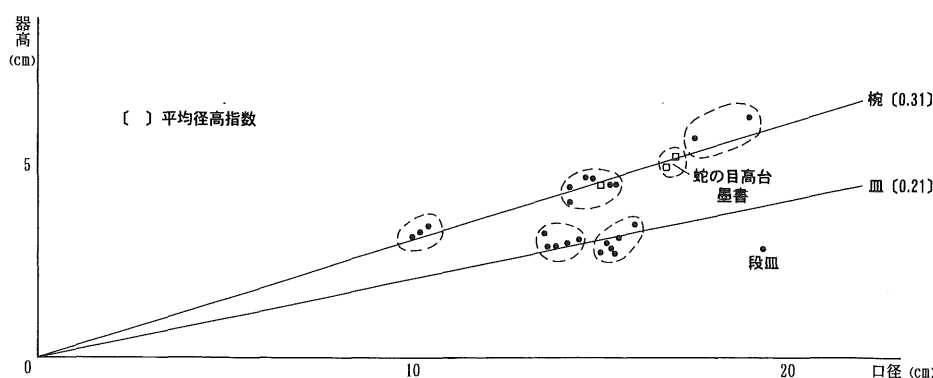
灰釉陶器 灰釉陶器は、須恵器を除く他の器種が圧倒的に供膳具で占められているのに対し、貯蔵具の比率が高く、碗皿類は66%弱の比率にとどまる。これは灰釉陶器生産が、須恵器生産と連続性を持って展開したため、灰釉陶器の貯蔵具も多く生産、供給されたためであろう。

灰釉陶器皿には、口径が15cmを超えるものと、14cm前後のやや小型のものが認められる。前者には断面方形の高台を持ち、内面に厚く灰釉が掛かった黒笹14号窯式のもの(244)が含まれるが、大半は三日月高台を持つ黒笹90号窯式(248~252)である。^{註16} 重ね焼きの痕跡が認められ、基本的には高台接着面である内面底部を残し、体部内外面に灰釉を塗掛けする。(250・251)は施釉されず、自然釉が薄く体部に掛かる程度である。ともに底部外面に「-」のヘラ記号があり、同じ窯で焼成されたと考えられる。やや小型である後者には、塗掛けのもの(246・247)とともに漬け掛けのもの(245・269・442)があり、猿投窯の型式で考えるならば黒笹90号窯式から折戸53号窯式に属するものであろう。なお、稜皿(254)・段皿(255)・三足盤(270)の資料などがあるが、(254)は外面だけに、(270)は内面だけに厚い釉が掛かり、(255)は内外面全体に薄い施釉がなされる。これらは黒笹14号窯式のものであり、体部が直線的に広がる(253)の資料も同型式と考えられる。

灰釉陶器碗には、口径10cm前後の小碗(256~258・463)と、15cm前後の碗(260~265・443)、17.5cm以上の大碗(266~268)がある。小碗は三日月高台で、(258)が口縁内外面を塗掛けするが、(256・257)は内面に厚く釉が掛かるだけである。断面方形の高台を持つ碗は、(259)などの黒笹14号窯式が少量出土する程度で、大半が三日月高台を持ち重ね焼きで焼成したものである。皿と同様に、高台接着面である内面底部を残し体部内外面に灰釉を塗掛けするもの(260・261・263・265)と、漬掛けのもの(262・264・443)がある。大碗は内外面とも塗掛けで重ね焼きである。

さらに、特徴的な灰釉陶器碗として、高台が蛇の目高台で釉は自然釉が薄く掛かるだけの資料(451・459)がある。口径17cm前後で、口縁部は上方に肥厚させて玉縁状に仕上げている。高台の形態や口径は異なるが、口縁の形態や施釉の状況から(446)も同一生産地のものであろう。これら蛇の目高台碗には、特徴として底部外面での墨書記入率が非常に高い点が指摘できる(449・456・457・460・461)。また、これらと形態は異なるが(455)も釉掛けはせず、重ね焼きの時に自然釉が掛かった資料である。口径も一般の碗より大きく、上記の墨書灰釉陶器碗に近い。これらの灰釉陶器碗には特定の数字が墨書されており、何らかの儀礼に際して意図的に選ばれた碗であ

表15 池1出土灰釉陶器径高指数分布表



ったと想定できる。特に(451)は建物13の前で行なわれた祭祀儀礼に関する土器群と共伴しており、土師器第1グループと同時期に属する資料である。これに対して、「齋宮」の墨書がある(440・441)には回転糸切り痕跡が明瞭に残っており、「齋雑所」墨書の(442・443)は漬掛け施釉である。これは産地の違いを示すものではあるが、皿で認められるように灰釉陶器にも時期差があり、齋宮関係墨書はやや新しい段階のものである可能性が高い。

なお、小椀(271)と椀(272)は百代寺窯式でも新しい段階の椀で、時期的に他の土器群よりかなり時期の下がる資料である。同タイプの資料はこれらだけであり、池1との関連性は薄い、遺存状況が良好なことから偶発的な混入とも考えにくい。この新しい段階の灰釉陶器椀の事例は、園池の廃絶時期を考えるにあたって問題を提起している。後述するように、泉1の埋め立てに伴う地鎮で使用された土師器皿は、池内出土の土器群より型式的に新しい様相を呈しており、泉1の埋納とは直接関係ないであろうが、池1が埋没した頃の土器と推測できる。

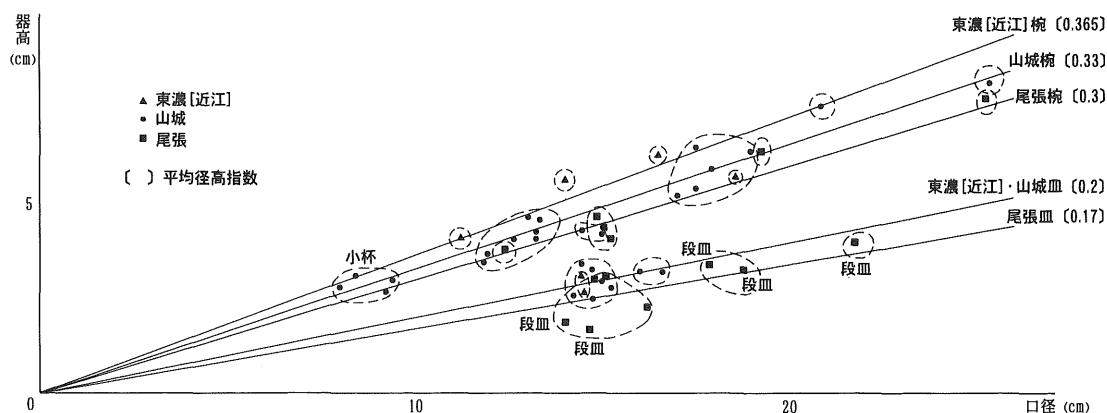
その他の灰釉陶器の器形として、耳皿(273)や小型の平瓶(274)、台付の大鉢(275・276)がある。また、貯蔵具として長頸壺(277・278)や広口壺(279・280)があるが、大半が細片であり、図示できるものは少ない。

緑釉陶器 大半は椀皿類で、出土緑釉陶器破片数の98%近くを椀皿類が占めていることになる。これらは平安京近郊の平安京近郊窯群(山城系)で生産されたグループと、尾張の猿投窯あるいは東濃地域の窯などから供給されたグループに分けることができる。^{註17}

山城系緑釉陶器は高台を削り出し調整によって仕上げるのが特徴だが、平高台の一部や小杯(319～322)底部は回転糸切り未調整である。また、素地が軟質で釉が淡いものと、素地が硬質なものが確認できる。高台部の破片数によって山城系緑釉陶器の個体数を求めると303個体分となるが、これは全個体数である436個体の約70%を占める。その内訳は未調整の平底が24個体、平高台が71個体(硬質：24個体、軟質：47個体)、蛇の目高台が61個体(硬質：47個体、軟質：14個体)、輪高台が147個体(硬質：126個体、軟質：21個体)で、平高台では軟質陶器が多く占めるのに対し、最も多く出土する輪高台では圧倒的に硬質陶器になることが確認できる。

実際に土器を観察すると、山城系の皿の平均径高指数は0.2で、稜皿や輪花皿も含めて口径14～

表16 池1出土緑釉陶器径高指数分布表



第1節 平安時代中期の遺物

15cmのもの(282・285・288・289・315)が最も多く、16cmを超えるもの(286・287)も若干出土している。碗は平均径高指数が0.33で、大きくみて口径12～13cmほどのもの(296～300・316・466)と、口径15cmほどのもの(301・323)、口径17～20cmのやや大型のもの(305～308・312・313)に分かれるが、口径25cmを超える大型碗(314)も出土している。陰刻花文はモチーフの崩れたもの(323・331)が数点出土するにすぎない。なお、少量ながら底部外面にヘラ記号が認められるものがある。(301)には「-」が施されており、この他の底部資料では「二」・「+」・「卅」のヘラ記号が確認できる。

在地から搬入された緑釉陶器碗皿類は、高台貼り付けを特徴とする一群である。猿投窯あるいは東濃で生産された製品が大半を占めるが、一部近江産が含まれており、極めて僅かであるが防長産の緑釉陶器も出土している。高台の形態で個体数を分類すると、蛇の目高台が6個体、断面方形の輪高台が71個体(低脚タイプ：43個体、高脚タイプ：28個体)、有段の輪高台が56個体(低脚タイプ：27個体、高脚タイプ：29個体)となる。これら高台の形態や釉調の差などによって、ある程度、猿投窯系(290・291・293・295・302～304・313・324～330)と東濃系(294・309・310・317・318)に分けることが可能となる。猿投窯系の碗皿類は口径15cm前後のものが多く、口径値からみて灰釉陶器碗皿類と共通性が高いことが指摘できる。また、産地の差異を径高指数で検討すると、猿投窯系の皿の平均径高指数は0.17、碗は平均径高指数が0.3で、山城系緑釉陶器より全体に低い数値となる。これに対し東濃系の碗の平均径高指数は0.365となり、逆に山城系緑釉陶器より高い数値となるのが特徴的である。

在地から搬入された緑釉陶器の中で注目できる資料に、セットで出土した東濃産と考えられる輪花皿(317)と輪花碗(318)がある。山城系の同セット(315・316)と比較して興味深い。また、(292)の段皿は近江産と考えられる資料である。さらに陰刻花文碗皿類は、猿投窯産の輪花皿(326・327)、輪花稜皿(324)、輪花段皿(325・328)、小碗(329)、大碗(330)などがある。

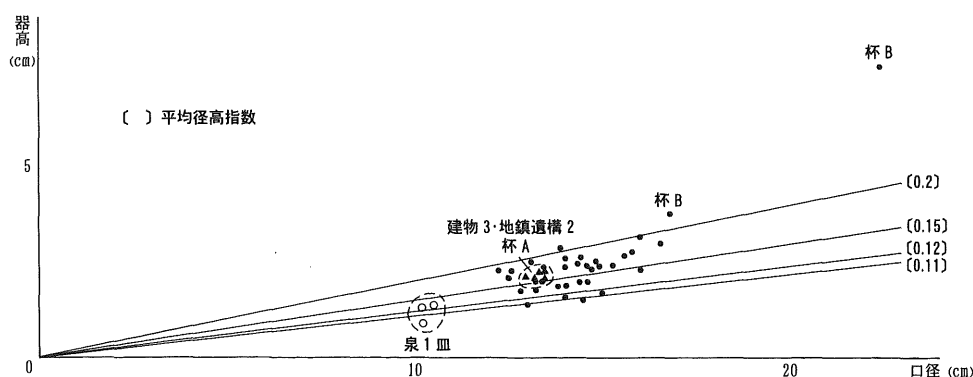
この他の緑釉陶器として、軟陶の蓋(332)、壺(333)、猿投窯産の唾壺(334)と香炉(335)などがあるが、なかでも壺(333)の底部は部分的に表面が黒色化し、淡い肌色の発色が点在することから明らかに防長産の資料である。また、(332)は山城系、とりわけ幡枝窯群での生産が想定できる。

輸入陶磁器 全体の85%が池1から出土しており、破片数でみると白磁と青磁はほぼ1：1の割合である。^{註18}白磁碗の優品として玉縁口縁碗Ⅰ-1類(336)と五輪花碗Ⅰ-2b類(337)がある。越州窯系青磁碗はⅠ-1類(339・340・342)と輪花碗Ⅰ-2b類(341・343・344)があり、なかでも(340)は石敷遺構1出土の破片と接合した資料である。また、小碗(338)や大碗(345)あるいは褐釉陶器壺(346)もある。この他、小破片であるが越州窯系水注の注口・把手や長沙銅官窯系の褐釉壺も出土しており、輸入陶磁器の多様性がこの邸宅の階層の高さを示している。

(2) 他の園池遺構出土土器

池1と他の園池遺構は、青磁碗片が接合した事例からわかるようにほぼ同時併存した遺構群である。以下、各遺構の主要な出土土器についての説明を加える。

表17 他の園池遺構出土土師器径高指数分布表



土師器 土師器には(347～363・369～375)がある。(374・375)は土師器高杯脚部である。池1出土土師器の様相と同じで、径高指数の多様性も表17からみてとれるように池1での時期的変遷の中で収まる。また、土師器高杯脚部が多く出土する点も共通する。

泉1出土土師器には(364～366)がある。(364・368)は合わせ口にして泉内に埋めこまれていた、口径10cm強の小型化した皿である。平安京編年ではⅢ期新段階にまで下がる資料であり、実年代では10世紀末から11世紀初頭ということになる。泉内から同型式の土師器皿(366)が出土している。この土器群は、泉の機能が完全に停止した時期を示す資料である。泉1の埋納土器群はⅢ期新段階、池1出土土器群はⅡ期中段階からⅢ期古段階の土器群であり、土器型式の年代観からみると、実年代で短くとも50年ほどの開きが生じてしまう。これら土器群の年代差は、園池あるいはこの邸宅の存続期間を考えるうえで重要な課題を提起したといえる。

灰釉陶器および緑釉陶器 土壙2から出土した緑釉陶器皿(381)は池1の景石を据える際の祭祀に伴う土器と考えられ、灯明皿として使用された痕跡を残す。耳皿(387)は泉1から出土した。表面が黒色化しており、防長産である可能性が高い。陰刻花文碗は簡略化した山城系のもの(385)と猿投窯産(386)が認められる。灰釉陶器および緑釉陶器も池1出土土器群の様相と共通性がある。

(3) 井戸1・井戸3出土土器

井戸1と井戸3から出土した土器は出土量は少ないが、池1など園池遺構とほぼ同じ時期の土器群である。土師器片とともに白色土器三足盤(396)が井戸1から出土し、注目できる。井戸掘形からはほとんど遺物が出土しなかった。

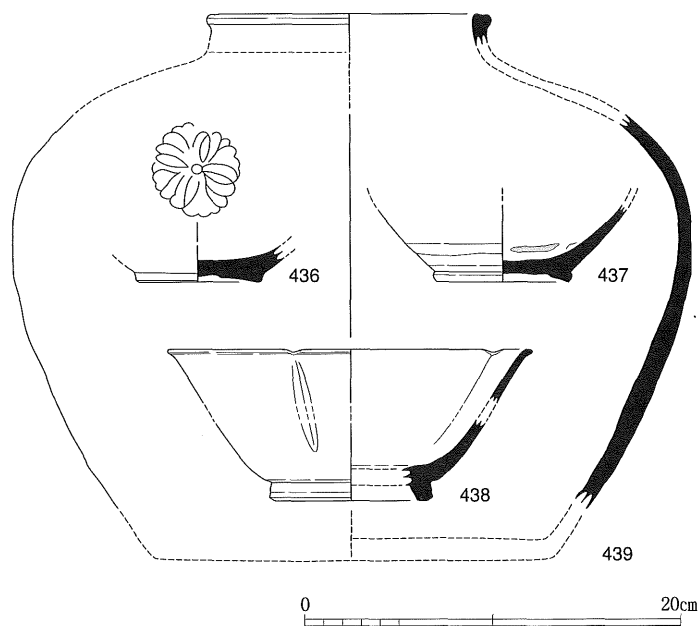


図43 輸入陶磁器実測図(1/4)

第1節 平安時代中期の遺物

土師器 (392・393)は井戸3、(394・395)は井戸1の枠内より出土した。平安京Ⅱ期中段階から新段階にかけての杯皿類である。池1の第1グループから第2グループの古い段階の土師器群と時期的に併行する。

(4) 井戸2出土土器

井戸2は枠内よりも掘形内から土器が多量に出土した。他の井戸との遺物の出土状況の違いは、井戸造作の時期差を現わしているといえる。

土師器 (397～399・401～406)は掘形から出土した。井戸1・井戸3出土遺物と同型式であるが、枠内から出土した(400)は掘形の資料よりも新しい特徴をみせており、Ⅱ期新段階以降のものである。また、細片で図示できないが、甕鍋類は土師器破片数の16%近くを占めているのも特徴的である。

須恵器 杯(411～414)は多く出土しており、須恵器破片数の11%を占めている。また、壺・鉢・甕の破片は725片と全破片数の27%近くを占めているのも特徴的である。

緑釉陶器 細片ではあるが、香炉蓋(416)が枠内の上層から出土している。この香炉蓋の破片が建物3検出中の耕作溝から出土した緑釉陶器香炉蓋と接合したことは重要である。園池を伴う北半の空間と、井戸2が掘削された南半の空間が同一邸宅内であった可能性を示す資料の一つである。

輸入陶磁器 越州窯系青磁碗(419・420)・青磁水注(421)は井戸掘形から出土している。また、褐釉陶器大型壺(439)の破片がまとまって出土した。

(5) 建物関係遺構出土土器

土師器 土師器杯(423～427)は建物3の造営に伴う地鎮遺構2から重なった状態で出土した。ほぼ同じ法量・形態の土器群である。型式的には池1出土土師器の第1グループよりも新しい様相を持ち、建物3が池1にやや遅れて造作されたことを示す資料である。土師器杯(428・429)は南半地域の建物18の柱穴から出土した、Ⅱ期中段階の資料である。

須恵器 長頸壺(431)は建物14の地鎮遺物として出土したものである。

輸入陶磁器 越州窯系青磁碗(436)は4区東南部において、建物群検出中に遺物包含層から出土した。底部内面に花文を施す。白磁輪花碗(438)・青磁碗(437)は第1次調査の野寺小路川から平安時代後期の土層に混入して出土したものである。これらの遺物は、平安時代中期の遺構に伴うものではないが、出土地点から4区東半建物群との関係が想定できる資料である。

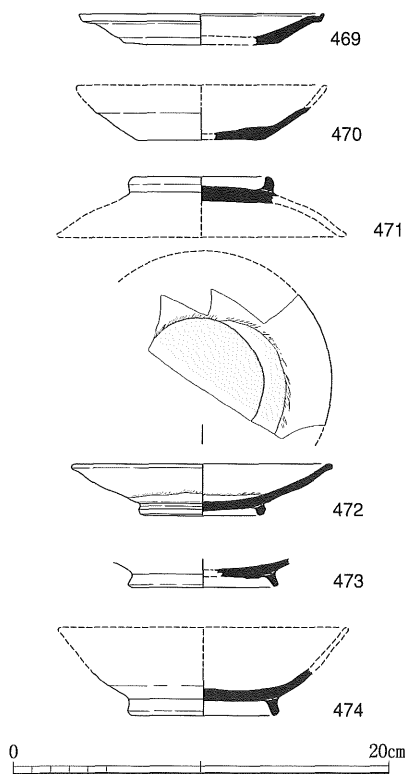


図44 転用硯実測図(1/4)

(6) 墨書土器・転用硯

墨書土器は大半が池1および溝4から出土しており、とくに建物3の前面にあたる池北部に集中している。また器種別にみると、灰釉陶器の碗皿類が圧倒的な比率を占めている。

墨書の内容は大きくみて、特定の数詞を記した墨書群と斎宮関係墨書群に分けることができる。数詞墨書には「清 十二」(449~451)・「六十」(454・455)・「卅三」(460・461)・「廿」(456・462)・「十五」(457)などがあり、僧供養関係の墨書(446・447)にも「廿」の数詞が書き込まれている。とくに、「清 十二」墨書(451)は土師器第1グループと共伴して出土し、その年代を示唆している。斎宮関係墨書は、「斎宮」(440・441)・「斎雑所」(442・443)・「斎舎所」(444・445)がある。「長」(463)や「侍」(466)もこれらに関係するのかもしれない。また、

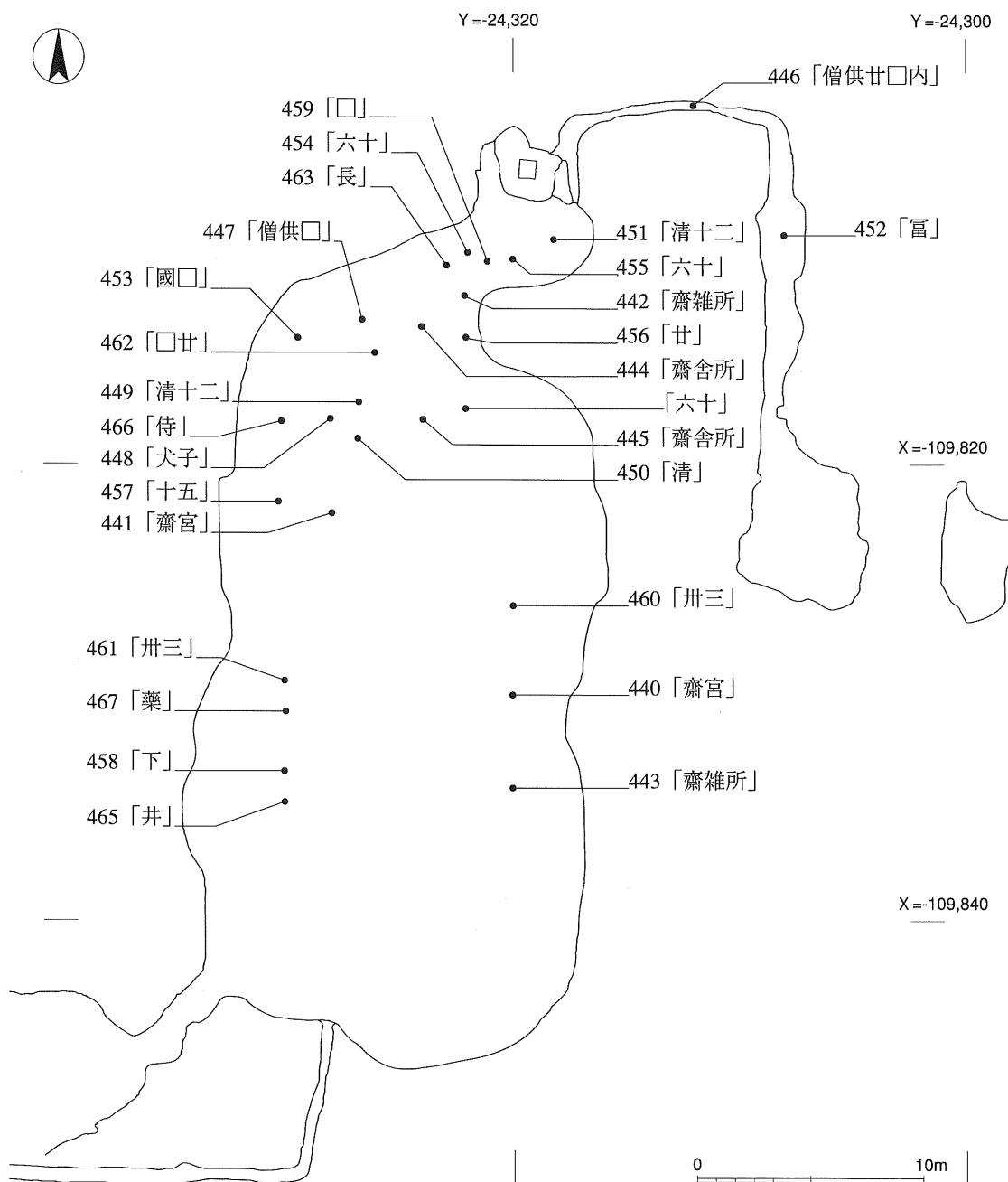


図45 墨書土器出土地点分布図 (1/300)

第1節 平安時代中期の遺物

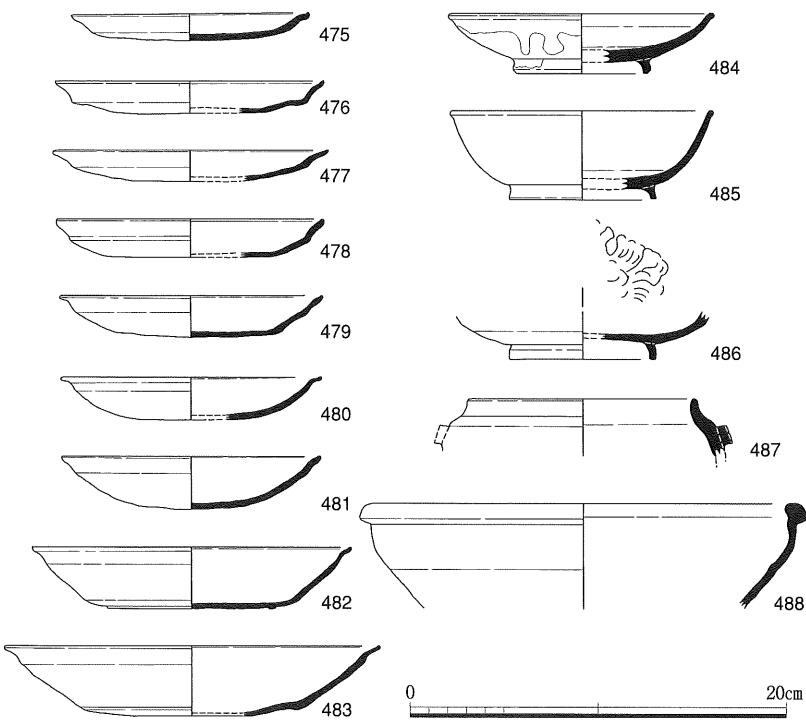


図46 第5次調査池4出土土器実測図（1／4）

吉祥句「富」（452）あるいは呪符記号「井」（465）を記したもののや、「犬子」（448）の存在を示唆する墨書、薬関係の墨書（467）などが出土した。邸宅内の具体的な生活を彷彿させる資料といえる。

転用硯は須恵器と灰釉陶器を利用したものが多い。（469）は須恵器蓋を、（470）は須恵器杯を硯に転用したものである。（471）は灰釉陶器皿の高台部を再利用して小型硯としたもので、（263・472

～474）は内面の無釉部を硯としている。なお、（473）には墨痕とともに擦痕の認められる金粉が^{註19}付着している。

（7）十五町出土土器

第5次調査では、遺物の大半は池4から出土した。土器類の破片数2,006片のうち、土師器は1,683片と全体の約80％を占め、土師器の中でも杯・皿・高杯・盤の供膳具が合わせて1,633片と97％以上を占める。土師器に次ぐのは数値的に少ないが須恵器で、土師器とは逆に貯蔵具である甕が多く約56％を占める。灰釉陶器と緑釉陶器は全体の3％に満たない。これらの数値は十六町域の園池関連遺構での様相と同じであり、時期的にも並行することから園池を持つ邸宅の土器組成として一般的な様相である。実際に土器をみると、土師器皿（475～478）や杯A（479～481）には口縁部の屈曲が強調されたものが多く、杯B（482・483）の高台はほとんど退化して痕跡を留めるだけである。平安京Ⅱ期新段階に相当する資料であろう。

表18 池4出土土器破片数統計表

器種	器形	数量	器種別数量比	全数量比
土師器	杯・皿	1580	93.88%	78.76%
	高杯・盤	53	3.15%	2.64%
	甕・鍋	50	2.97%	2.49%
	小計	1683	100.00%	83.90%
黒色土器	碗・皿	55	90.16%	2.74%
	甕	6	9.84%	0.30%
	小計	61	100.00%	3.04%
白色土器	碗・皿	1	100.00%	0.05%
	小計	1	100.00%	0.05%
須恵器	杯・皿	24	16.78%	1.20%
	壺・鉢	39	27.27%	1.94%
	甕	80	55.94%	3.99%
	小計	143	100.00%	7.13%
灰釉陶器	杯・皿	36	63.16%	1.79%
	壺・鉢	19	33.33%	0.95%
	甕	2	3.51%	0.10%
	小計	57	100.00%	2.84%
緑釉陶器	碗・皿	57	98.28%	2.84%
	壺	1	1.72%	0.05%
	小計	58	100.00%	2.89%
輸入陶磁器 （白磁）	碗・皿	1	50.00%	0.05%
	壺	1	50.00%	0.05%
	小計	2	50.00%	0.10%
輸入陶磁器 （青磁）	碗	1	100.00%	0.05%
	小計	1	100.00%	0.05%
計		2006	—	100.00%

須恵器鉢(488)は口縁部が玉縁状に変化したものである。緑釉陶器(485～487)は猿投窯産の資料が目立つが、出土量自体が少なく傾向としては把握できない。(486)は底部内面に陰刻花文を施す。この他、耳付き短頸壺(487)が出土している。

3 土製品

土製品には、硯・土鍾・紡錘車・土馬・フイゴ羽口などがある。^{註20}

硯 須恵器の硯には、円面硯(489～493)、猿面硯(494・495)、風字硯(496～498)がある。円面硯は脚部の装飾が縦沈線のもの(489・490)と、四方に長方形透かしを穿ち、間を沈線によって交互に「|||」と「✱」の装飾を施すもの(491～493)がある。風字硯も脚の形状や全体の形態が個々で異なる。(493)は井戸2から、猿面硯(494)は野寺小路川から、その他は池1および周辺から出土した。灰釉陶器硯は端面に切り込みを施した大型の風字硯(499)と多面硯の破片(500)がある。黒色土器の風字硯も形状が方形のもの(501)と円形のもの(502)がある。池1から出土した。また、特殊な資料として緑釉陶器の大型の風字硯(503)が池1から出土している。擦面以外の部位に均質に緑釉を施した優品で、斎宮跡でも出土しており興味深い。^{註21}

土鍾 土鍾(506～514)は形態、寸法など様々な10点がある。算盤珠を縦に長くした形状を持つ(506)のみ赤褐色の精良な胎土を持ち、他の円筒形状の土鍾は、茶褐色から暗灰色の砂を多く含むややザラザラした質感の胎土である。池1から(506～510)が出土した。(511)は3区の遺物包

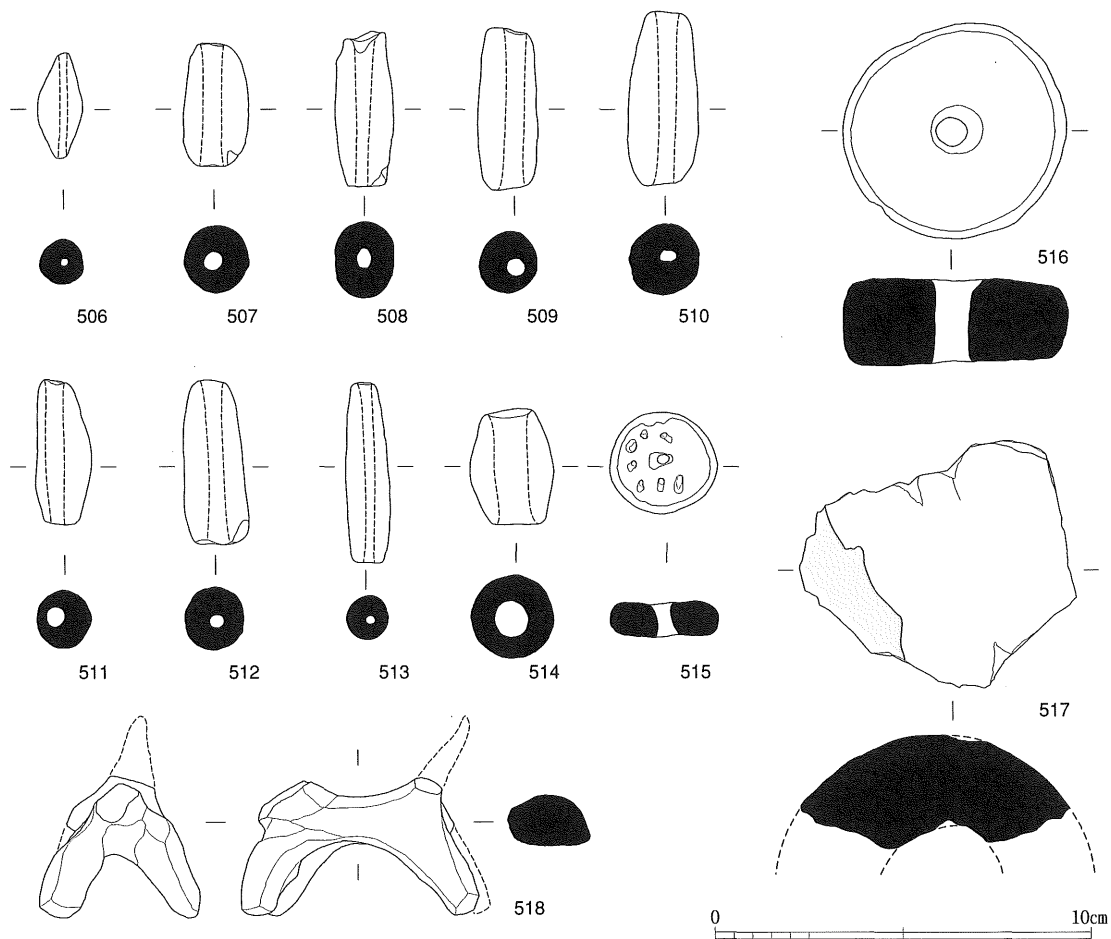


図47 土製品実測図(1/2)

第1節 平安時代中期の遺物

含層、(512)は3区石敷遺構1、(513)は4区井戸2から出土した。なお、1区の耕作溝から出土した灰白色で密な胎土の樽型をなす(514)は、時期を違える可能性がある。

紡錘車 (515)は、直径約2.9cm、厚さ0.9cmある。土器片を加工し丸味を持たせたものと思われる。中央部の円穴は両面から穿たれており、そのためかやや斜方向に貫通する。片面に刺突文状の痕跡がある。池1南西部の洲浜から出土した。紡錘車(516)は、直径約6.0cm、厚さ約2.2cmある。平瓦を転用したもので一部に平瓦の端面、片面に縄目叩き跡が残存する。中央部の丸穴、円周部ともに丁寧に、丸く加工している。泉1旧段階の木枠内から出土した。

土馬 小型の土馬(518)は、頭部・尾部・右後肢を欠く。手づくね成形で四肢等を引き出している。淡い橙色をなし、細かい赤礫を若干含む緻密な胎土である。井戸3から出土した。

フィゴ羽口 (517)は推定直径約8.5cmのフィゴ羽口の破片である。胎土は若干の砂粒を含むが全体に緻密で、繊維痕跡の細かい空洞が認められる。外面の一部に高熱化した銅滓が付着する。池1から出土した。

4 石製品

石製品には、硯・石製銚帯・玉などがある。

硯 (505)は滑石製の小型硯で、池1から出土している。また、(504)は滑石製の風字硯で、第1次調査の野寺小路川から出土している。使用擦痕が激しく、中央部が窪む。形態的に平安時代中期のものと考えられ、おそらく十六町域で使用されていたのであろう。

石製銚帯 石製銚帯は3点出土した。(519)は、丸軀で長径3.7cm、短径3cm、厚さ0.6cmある。表面、側面を平滑に磨くが、現状ではその光沢を失っている。裏面は平らに仕上げるが、ほとん

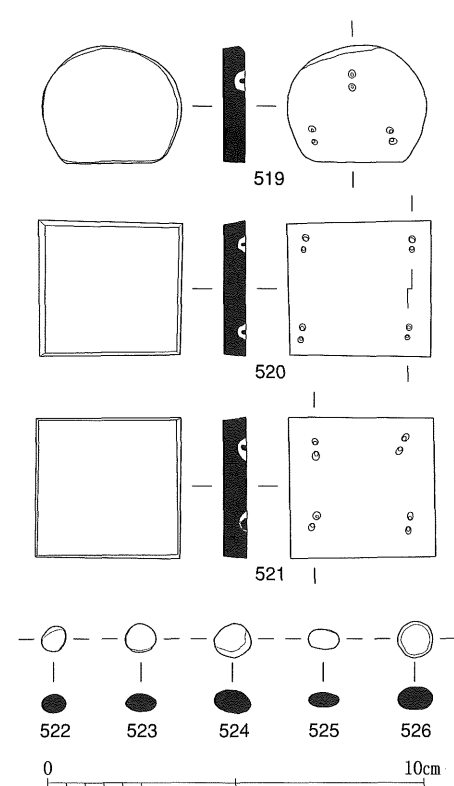


図48 石製品実測図 (1 / 2)

ど磨きかけられていない、断面形「V」字型の潜り穴を3箇所穿つ。石材は淡い緑灰色のアルコール砂岩である。3区南部の耕作溝から出土した。(520)は、巡方で一辺3.5~3.8cm平行四辺形をなし厚さ0.6cmある。表面、側面を平滑に磨き上げ光沢を出している。裏面は平らに仕上げるが、光沢を放つほどには磨いていない。隅寄りに4箇所の潜り穴を穿つ。石材は濃緑色と暗緑色の斑からなる含泥質砂岩である。池1北部から出土した。(521)は、巡方で一辺約3.8cmあり正方形に近い。厚さ0.6cmを測る。表面、側面を平滑に磨くが、光沢は鈍い。裏面は平らに仕上げるが、あまり磨かれず、部分的に切断痕が縞状に残る。隅寄りに4箇所の潜り穴を穿つ。石材は灰白色と灰色の斑からなるホルンフェルスと考えられる。池1北部の石垣裾部付近から出土した。

玉 玉は合計5点あり、(525・526)は池1から出土した。径は0.6~1.0cmある。平面形が円形の小石を求めた

とみられるが、(525)のような米粒形をなす例がある。断面形は楕円形をなすものが多い。石材は白玉(522～524)が石英で、黒玉(525・526)がホルンフェルスと考えられる。今回の調査では、用途を明確にする出土状況は得られなかった。

5 金属製品

金属製品の出土例は極く少なく、遺存状況も良くない。金製延べ板は平安時代中期の遺構に伴うものではないが、平安時代中期の邸宅で使用されたと考えるのが妥当と判断したため報告しておく。

金製延べ板 (527) は楔形を呈する金製の延べ板で、長さ2.9cm、最大幅0.5cm、厚さ0.4cm、重量は5.2gある。成分分析の結果(質量濃度 金91.45%、銀8.55%)、ほとんど純金であることが判明した。仕上げの調整が加えられていないため原材の可能性はある。

釘 (528) は鉄製の角釘である。現存長9.7cmあるが、厚く浮き出た錆のため、胴部周りの実寸を知るのは困難である。平頭釘に類すると思われる。泉1の旧段階の枠内から出土した。

方形板刃先状鉄製品 (529) は全容は明らかでないが、幅は約3cmある。背面は平らに、側面はやや弓なりに仕上げている。袋状部に微かに木質の痕跡が確認できることから、木の柄が接合していたことがわかる。池1北端部から出土した。

鋤先 (530) は鉄製のU字形刃の鋤先で、V字状溝部と刃先の一部が遺存する。現存最大幅約13.5cm、V字状溝部から刃先まで4.3cmある。池1南西部の洲浜に貼り付いた状況で出土した。

6 木製品

池1からは大量の木の枝・樹皮・種実などの自然遺物とともに木片や木製品が出土した。泉1、井戸1・2からも少量の木製品が出土している。建築部材あるいは建具の部位とみられる破片もあるが、多くは加工痕をとどめるのみの断片となっている。ここでは一部であるが、池1・泉1・井戸1・2から出土した木製品のうち、図示可能なものを取り上げた。

(1) 池1出土木製品

池1から出土した木製品には、祭祀具(531～534)、工具(535)、食事具(536・537)、容器(538～541)、服飾具(542)などがある。

人形代 (531) は泉1から出土した大型の人形代である。下部は欠損する。現存長65cm、幅7

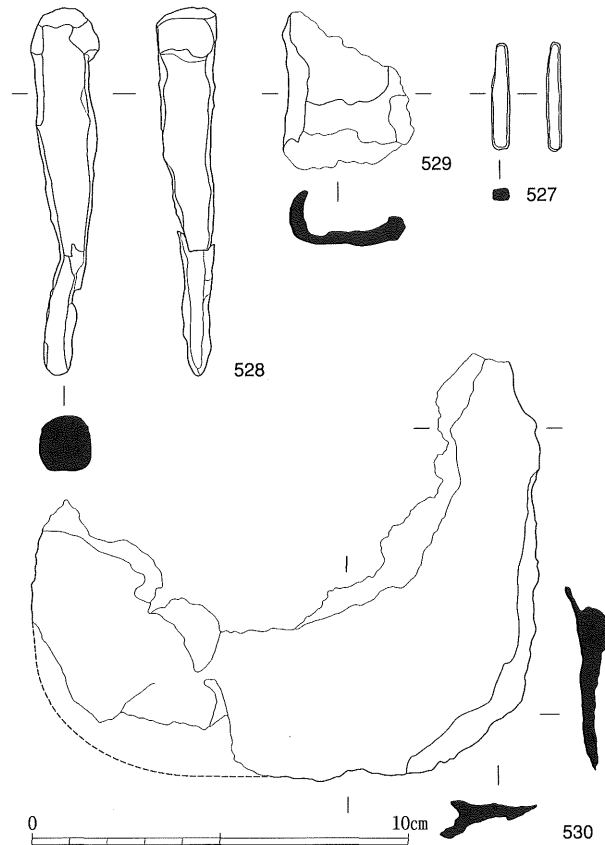


図49 金属製品実測図(1/2)

第1節 平安時代中期の遺物

cm、厚さ0.7cmある。頭部・顔面は墨で写實的に描写している。頭部は山形に削り頭髮を富士額に描き、側面から頸部にかけて長い放ち髪を表現する。おそらく女性を表現していると考えられるが、体部は腰部と脚を切り込みによって表現するだけで墨書による性別描写は認められない。紙あるいは布で衣服を造り飾り付けた可能性もある。10世紀の数少ない人形代の資料である。

刀子形代 (532) は南西部洲浜から出土した。長さ16.6cm、幅約1.5cm、厚さ約0.3cmある。薄板の片面のみを加工し、切先の仕上がりはやや鈍いが、片刃を明らかに削りだしている。刀身と柄の境は不明瞭である。

舟形代 (533) は池1北端部の一連の土器群とともに出土した。丸木船を模したもので、長さ10cm、最大幅1.5cm、厚さは舳先付近で0.8cm、艫付近で舷側から0.5cmある。舳先を三角形状に尖らせ、艫を隅丸方形に、舷側は中位程から船底にかけて角を落とし、船底を平らに造っている。船体の断面形は三角形状をなし、削り込みはやや雑である。

陽物形代 (534) は池1の北東部から出土した。現存長12.6cm、径3cmあり、心持材を使用している。先端部分は欠損しており、また、基部もやや腐食気味である。

楔 (535) は形態の類似から楔とした。両面に、先端に向かって加工痕がみられる。長さ12cm、最大幅2.5cm、厚さは頭部で1.3cmある。片面に文字とみられる稚拙な線刻がある。線刻文字は三文字あり、上は「春」あるいは「蚕」と判読できなくもない。次いで「見」、下は「𠂔」状の線刻が刻まれる。

杓子 (536) は池1南東部洲浜から出土した。現存長29.5cm、幅6.9cm、厚さ0.6～0.9cmある。先端部は欠損するが、丸味を持つものと思われる。身のおよそ半分の長さの柄が付く。

皿 (537) は池1南西部洲浜から出土した。直径18cm、高さ1.1cmある。白木作りで、口縁部外面から底部内面にかけて、轆轤挽きの痕跡が残る。底部外面はあまり丁寧な調整は施されない。

栓 (538～540) は池1から出土した。このうち、(538) は池1中央付近に横たわった状態で出土した須恵器瓶子(223)に使用されていた状況にあったもので、栓の中程には口縁部の痕跡が若干残る。下半を削り、細くしている。長さ3.2cm、径約2cmある。(539) は円筒形を呈し、長さ4.5cm、径3.2cmある。(540) は頭部に面取りを施し、全体的に丁寧に仕上げている。長さ4.1cm、径2.8cmある。

箱形容器 (541) は池1の南西部洲浜から出土した長方形を呈する板である。長さ31.5cm、幅4.2cm、厚さ1.2cmある。両端付近に径約1cmの孔が、中央に径約0.5cmの孔が開けられる。長辺の片側には3箇所小穴があり、一箇所には木釘が残存していた。このことから組み合わせの部材であることがわかり、底板を持つ箱形容器の部材に想定した。

下駄 (542) は池1から出土した。長さ17.5cm、幅9.5cm、高さ3.2cmある。板目材の木裏を上面に使用しており、平面形は隅丸長方形をなす。歯は台形状にやや外へ広がっている。歯の縦断面はほぼ垂直に切り出されているため、方形をなす。また、後歯に比べ前歯は細身である。前方の鼻緒孔はほぼ中央に開けられる。全体に腐食が進み、かつ歯の半分以上を失っている。

柄 (543) は柄の一部と思われる。現存長12.2cm、直径1.3cmある。樹皮を剥いだままの真っ直

ぐな枝を使用し、幅0.9cmの桜の皮を帯状に巻き付け、仕舞いを木釘か竹釘で留めている。

(2) 井戸1・井戸2出土木製品

井戸1から(544～546・549)が、井戸2から(547・548・550・551)が出土し、服飾具(544)、食事具(545)、容器(547)、農具(548)、不明木製品(549)、付木(550・551)などがある。

櫛 (544)は横櫛である。現存幅約3cm、高さ3.6cm、厚さ0.8cmある。歯の大部分は欠損している。背は直線的で、側縁はやや下方へ張り出す。両面とも背と歯の境目に切り通し線がある。表面は丁寧に磨いて仕上げています。

箸 (545)は一端は丸みを帯びる。先端部は欠損するが、次第に細く丸く削りだしている。現存長16cm、幅0.7cm、径

0.6cmある。細い割材を粗雑に加工しており、断面形はやや偏平な形状になっている。(546)は完形で、両端を尖らせている。丸味を持つように削っているが、多角形の状態で済ましている。長さ17cm、径0.5cmある。なお、箸と考えられる木製品は池1からも出土しているが、原形を留めるものはない。

円形曲物 (547)は円形曲物の底板である。復元径は18.8cm、厚さ0.6cmある。底板側面に釘穴が1箇所残っており、釘結合曲物とわかる。

柄 (548)は大半が欠損し原形をとどめないが、形態から鋤の柄と判断した。現存長12.5cm、厚さ2.3cmある。調整は粗く未製品の可能性がある。

不明木製品 (549)は方形ないし長方形の容器の類と考えられる木製品であるが、大半を欠損している。長さ21.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmある。縦方向の一端は僅かに上方へ持ち上がり縁をなす。内面に有機物状の黒褐色を呈する膜が付着しており、漆などが塗られていた可能性がある。外面は白木のままである

付木 (550・551)はいずれも一端が焼け焦げており、火を移すために使用された付木とした。(550)は長さ14cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、(551)は長さ14cm、幅1.1cm、厚さ0.9cmある。材を割いたままの状態で使用している。上記以外に両端が焼け焦げているものもあり、薪として使用された可能性もある。なお、池1などからも両者の類例が多量に出土している。

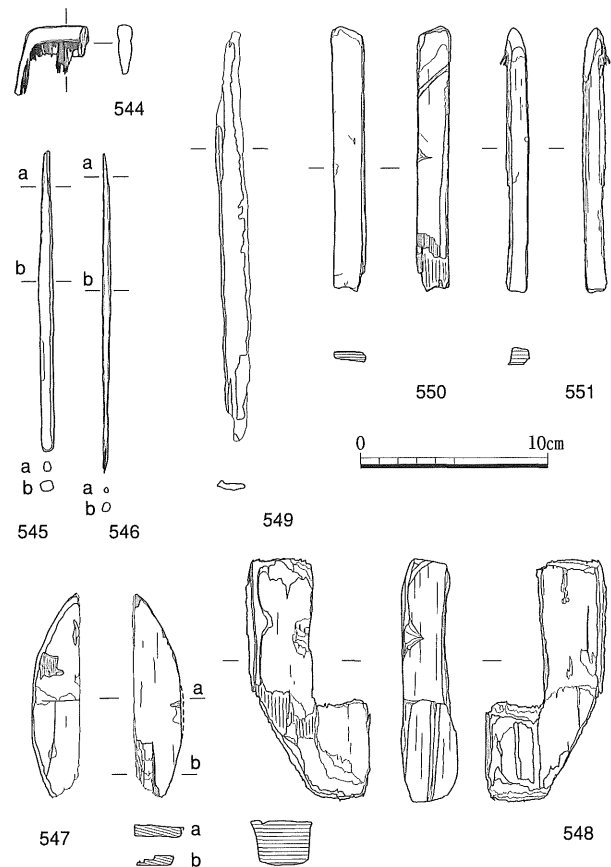


図50 井戸1・井戸2出土木製品実測図(1/4)

第2節 平安時代後期の遺物

1 瓦類

平安時代後期の瓦類の出土量は非常に少なく、調査区全体でも散発的に出土するにすぎない。

(30)は泉1の上面で検出した耕作溝から出土した南都産の軒丸瓦である。同範の資料が興福寺食堂跡から出土しており、興福寺の永承年間以後の再建に伴う軒丸瓦と考えられている。^{註22}(75)は野寺小路川から出土した讃岐産の軒平瓦で、11世紀後半に遡る資料である。この軒平瓦は鳥羽離宮創建時に讃岐で生産され、京都に搬入された軒平瓦と想定されている。^{註23}(63)は連巴文軒平瓦で、この軒平瓦も讃岐産軒平瓦である。この他、軒丸瓦では(59～62)、軒平瓦では(64～68)にみられるように、12世紀から13世紀にかけての資料が遺物包含層や耕作溝から少量出土している。

2 土器類

平安時代後期の土器類は、第1次調査の野寺小路川と、第3次調査の1区から4区にかけて検出した宅地の区画溝や建物柱穴などからまとまった資料が出土している。

土師器 小型皿と大型皿の単純な器種構成となる。手づくねで成形するいわゆる平安京型の土師器皿セットと、在地からの搬入と考えられる回転台成形土師器皿に分けられる。

平安京型の小型皿はいわゆる「ての字状口縁」のものと、口縁部をナデ調整で丸くおさめるものがある。「ての字状口縁」のものは溝101(552～557)、建物10(580・581)、溝104と溝105(588～590)、野寺小路川(591～593)から出土し、口径は10cm前後ある。口縁部をナデ調整で丸くおさめるものは、溝101出土資料をみると、さらに口縁端部が内湾するもの(559～562)と外反するもの(563～567)に細分できる。他の遺構の資料(576・594～599)は前者がほとんどである。口径は10cm前後あるが、後者の資料では口径9cm未満の皿(558・579)と、口径11.8cmの皿(577)が含まれる。大型皿は、口縁部をナデ調整で丸くおさめるもの(568～571・578・600～605)が主流で口径は15cm前後ある。これらは平安京編年のⅣ期新段階からⅤ期古段階に相当する。

回転台成形土師器は各遺構から出土した。建物102・建物103から出土した小皿(582～584)は口径8.5cm前後、押小路路面から出土した(575)は口径9.4cmある。大皿(585・606)は建物102と野寺小路川から出土し、(585)は(583)とともに建物102の柱穴に据えられていた。

瓦器 (574・586・587・607)は焼成が甘く軟質のものが多いが、高台の形態などは古い型式の様相を呈している。(572・573)は溝101から出土した皿である。

輸入陶磁器 野寺小路川から白磁が出土している。白磁皿はⅦ類の資料(608・609)が、白磁碗はⅡ類(610)・Ⅳ類(611～613)・Ⅴ類(614～617)が出土している。これらは11世紀後半から12世紀前半の標準資料である。^{註24}土師器の型式編年や瓦器碗の様相とともに齟齬はないであろう。

第3節 室町時代から江戸時代の遺物

1 土器類

室町時代の土器類は、遺物包含層および耕作に伴う溝や土層から多量に出土した。

土師器はへそ皿(618～634)・赤系土器皿(635～639)・大皿(640～654)がある。陶器は瀬戸茶碗(655)・美濃山茶碗(656)・天目茶碗(657)がある。輸入陶磁器は口禿の白磁皿(658～660)とともに多くの青磁碗(661～669)が出土しており、資料(666～669)は龍泉窯系青磁碗である。その他、龍泉窯系青磁鉢(670)や輸入天目茶碗(671)も出土している。これらは室町時代から江戸時代の耕作に伴う土層から出土したもので、15世紀を中心とした資料と考えられる。

2 石製品

硯(672・673)は石硯である。(672)は、「くぼみ」部と思われる幅5.5cmを測る一端が残る。底部に向かってやや角度を付け、断面形逆台形状に成形する。堤部の2条の沈線とともに、両角には花を模した線刻が施される。(673)は「おか」部の破片である。裏面は剥離しているが、表面には使用痕と淡い墨痕が残る。石材は低度ホルンフェルスと考えられる。

砥石(674～692)は小型品から大型品の一部と考えられるものまで36点が出土した。いずれも断片であり原形を留めるものはない。大半の砥石は側面に切断痕を留めている。両面を使用しており、研磨痕の著しいものが多い。小型品の現存する大きさは幅2.5～4.0cmある。大型品の現存する大きさは幅4～8cmある。石硯・砥石ともに大半は耕作溝から出土している。ほとんどが丹波帯の珪質頁岩～珪質粘板岩である。

3 木製品

(693・694)は白木のままの木碗である。4区耕作溝から出土した。体部は内湾し口縁端部は丸くおさめる。高台を削りだす。内・外面および高台部に轆轤引きの痕跡が残る。(693)は口径5.4cm、高さ4.7cmある。(694)は口径7.5cm、高さ4.7cmある。8区の旧天神川氾濫原から(695・697・698)が出土した。蓋板(695)は平面形が円形を呈し、中心に針状工具で細かい孔を開ける。直径5.2cm、厚さ0.3cmある。上面に「摘み」の痕跡とみられる0.5×0.4cmの圧痕がある。(696)は糸巻の横木で4区から出土した。現存長10.6cm、幅2cm、厚さ1.3cmある。相欠き仕口で接合する型式で、枝部は側面を粗く削る。軸穴周辺は回転による磨耗が著しい。(697)は将棋駒の未製品と考えている。両面・側面ともに丁寧に調整するが、山形の一方を切り、一方は野描きを両面に引いたままで切り離していない。長さ6.4cm、幅3cm、厚

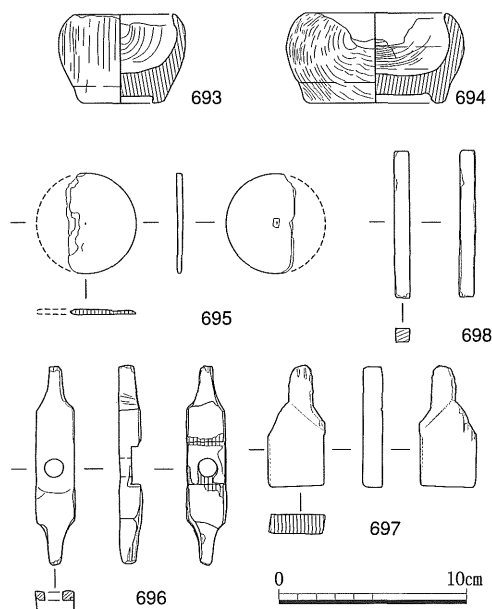


図51 室町時代から江戸時代
木製品実測図(1/4)

第3節 室町時代から江戸時代の遺物

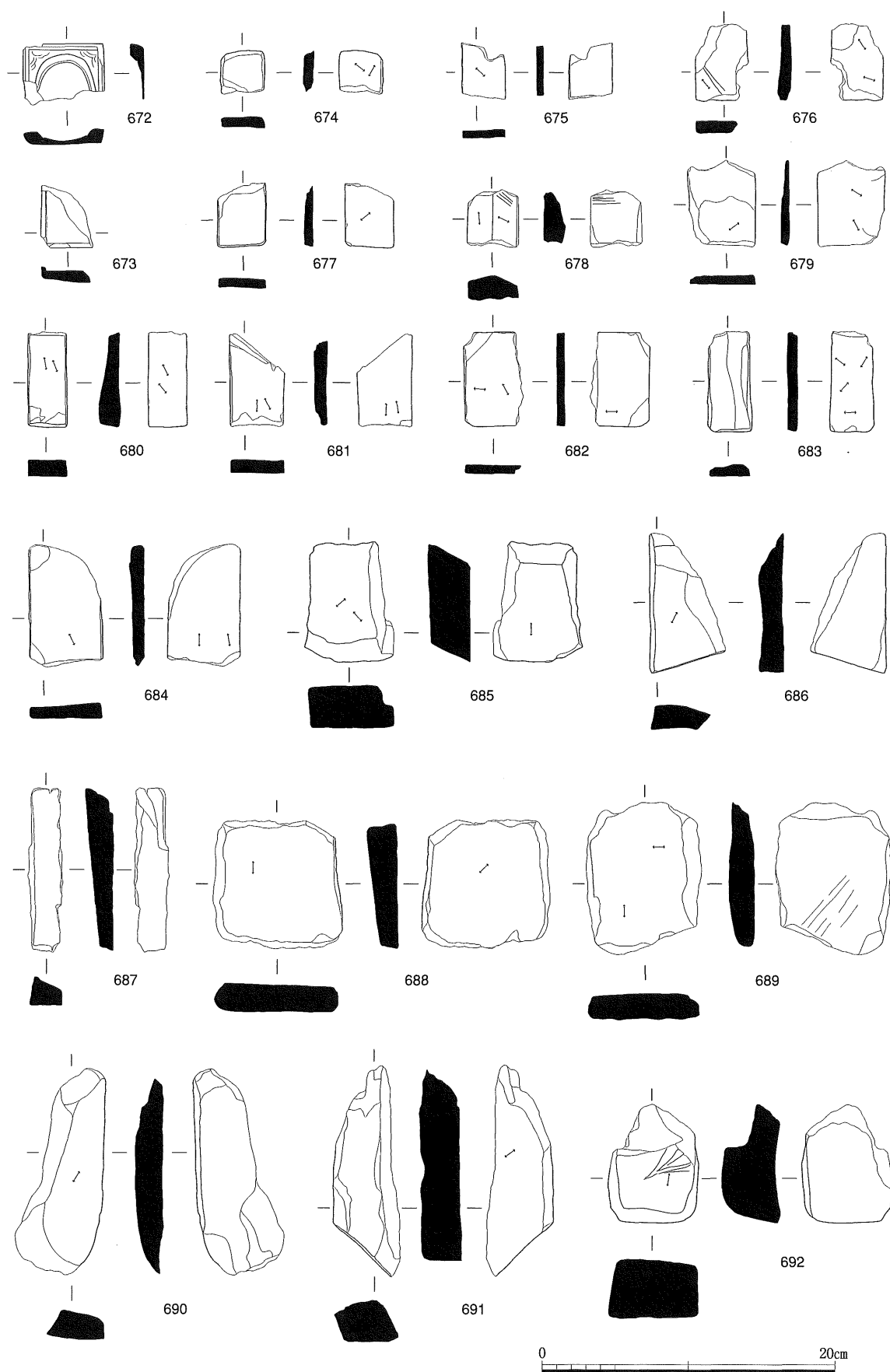


図52 硯・砥石実測図（1／4）

さ1cmある。(698)は断面方形の角材で、長さ7.8cm、幅0.7cm、厚さ0.6cmある。一端に圧痕があり、組み合わせて使用した部材と考えられる。

4 銭貨

銭貨は遺物包含層および耕作溝・第1次調査区の野寺小路川から14枚出土した。腐食が激しく銭名不明の銭貨片が1枚あるが、多くは北宋銭で、3区の遺物包含層と耕作溝から

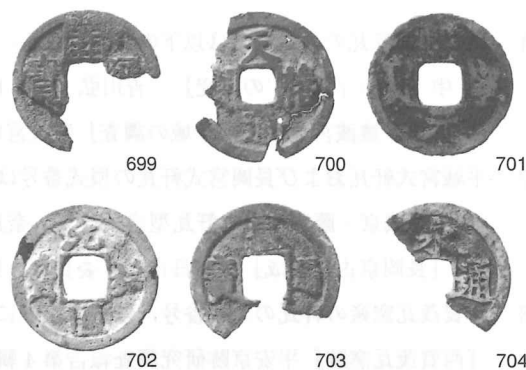


図53 出土銭貨

天禧通寶(700)・熙寧元寶(701)・元祐通寶(702)・皇宋通寶(703)が1枚ずつ出土している。元祐通寶は4区耕作溝からも1枚出土した。また、野寺小路川から咸平元寶が1枚出土している。(699)は3区耕作溝から出土した唐銭の開元通寶で、背に「洛」銘がある。南宋銭は紹興通寶が2区耕作溝から1枚出土しているが、腐食が激しい。明銭は(704)の永楽通寶が3区耕作溝から1枚出土した。江戸時代の銭貨には、寛永通寶が4枚ある。

第4節 古墳時代以前の遺物

古墳時代以前の遺物は、池1埋土や耕作溝あるいは遺物包含層に混入した状態で出土した。

弥生土器 弥生土器と考えられる土器細片は数点遺物包含層から出土しているが、図示できるものはない。壺の口縁部・肩部および底部の破片がある。

石器 石鏃(705)が4区の耕作溝から1点出土した。石材は透明感の強い青灰色を呈するチャートである。長さ2.1cm、幅1.3cm、重量は0.8gある。(706)は石棒である。4区の遺物包含層から出土した。表面は丁寧に磨いて成形している。現存長約8.5cm、長径約6cm、重量は413gある。石材は玢岩である。

古墳時代の遺物 古墳時代の資料は土師器杯(707)と須恵器碗(708)が池1から出土している。土師器杯は口径約15cmで、体部外面下半をヘラケズリ調整し、内面には放射状ヘラミガキを施す。口縁部調整は横ナデで、若干外方へ屈曲させる。須恵器杯身は受部口径が約11cmで、回転成形し、底部外面は回転ヘラケズリを丁寧に施す。また、6区の耕作溝から波状文を施した須恵器甕口縁部片(709)が出土している。

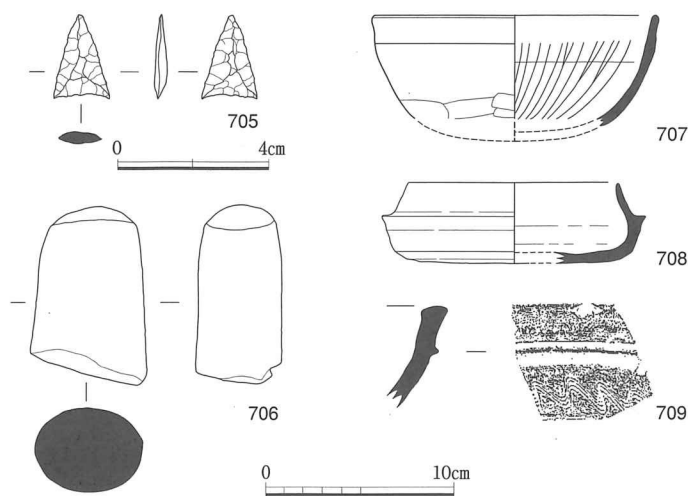


図54 古墳時代以前遺物実測図(1/2・1/4)

註

- 1 難波宮式軒瓦の型式番号は以下の文献による。
 - a 中尾芳治『難波宮の研究』 吉川弘文館 1995年
 - b 『後期難波宮大極殿院地域の調査』 難波宮址の研究第10 財団法人大阪市文化財協会 1995年
- 2 平城宮式軒瓦および長岡宮式軒瓦の型式番号は以下の文献による。
 - a 『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』 奈良国立文化財研究所 奈良市教育委員会 1996年
 - b 『長岡京古瓦聚成』 向日市教育委員会 1987年
- 3 西賀茂瓦窯産の軒瓦の型式番号は以下の文献による。

『西賀茂瓦窯跡』 平安京跡研究調査報告第4輯 財団法人古代学協会 1978年
- 4 吉志部瓦窯産および芝本瓦窯産軒瓦の同定は以下の文献による。
 - a 『岸部瓦窯跡発掘調査概報－吹田市小路－』 大阪府教育委員会 1968年
 - b 『坂東善平収蔵品目録』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 5 栗栖野瓦窯産および小野瓦窯産の同定については以下の文献による。
 - a 木村捷三郎「山城幡枝発見の瓦窯址－延喜式に見えたる栗栖野瓦屋－」『史林』15－4 1930年
 - b 同「平安中期の瓦についての私見」『延喜天暦時代の研究』 吉川弘文館 1969年
 - c 『栗栖野瓦窯址調査報告』 京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告第15冊 京都府 1934年
 - d 『平安京古瓦図録』 平安博物館編 雄山閣出版 1977年
 - e 『木村捷三郎収集瓦図録』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6 『岡山県史第18巻 考古資料』 岡山県 1986年
- 7 網 伸也「平安京右京六条二坊Ⅰ」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 8 『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』 大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会 1984年
- 9 坂東善平収蔵品の中に同范と考えられる軒平瓦が採集されている。(前掲註4－b)
- 10 上ノ庄田瓦窯の調査は、平成7年度から平成12年度まで4次にわたって財団法人京都市埋蔵文化財研究所で発掘調査している。現在、報告書作成に向けて整理中であるが、多くの完形丸瓦および平瓦が出土しており、その重量を今回参照とした。
- 11 上原真人「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった－平安京右京一条三坊九町出土瓦をめぐって－」『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』 真陽社 1988年
- 12 『南ノ庄田瓦窯跡』 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第18冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 13 平安京の土器編年は以下の文献による。
 - a 『平安京右京三条三坊』 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1990年。
 - b 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1996年

土器型式における各期の年代は、上記文献では平安京Ⅱ期古とⅡ期中の境が870年頃、同Ⅱ期中とⅡ期新の境が900年頃、同Ⅱ期とⅢ期の境が930年頃、同Ⅲ期古とⅢ期中の境が950年頃と推定されている。
- 14 外面に漆を塗布する資料は、高陽院の10世紀の園池からも出土している。

網 伸也「発掘調査からみた頼通伝領前の高陽院」『研究紀要』第5号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 15 白色土器は平安京内でも特異な出土傾向をもっており、宮中を中心とする特定の用途が想定されている。

後に述べる灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器の出土傾向を考えても、この邸宅が宮中に近い土器組成をもっていると考えられる。

平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』 財団法人古代学協会・古代学研究所編 角川書店 1994年

- 16 灰釉陶器の編年体系は、近年の研究で精緻に検討されてきた。ここでは以下の文献に依拠して年代観を定めている。
 - a 『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』 愛知県教育委員会 1983年
 - b 斎藤孝正「灰釉陶器の研究Ⅱ－猿投窯第Ⅴ期椀・皿類の型式編年－」『名古屋大学文学部研究論集 104』 名古屋大学文学部 1989年
 - c 平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』（前掲註15）
 - d 『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』 古代の土器研究会 1994年
- 17 緑釉陶器の検討にあたっては以下の文献を参照とした。
 - a 百瀬正恒「平安時代の緑釉陶器－平安京近郊の生産窯について－」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』 日本中世土器研究会 1986年
 - b 平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』（前掲註15）
 - c 『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』（前掲註16－d）
 - d 『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社 1995年
 - e 『日本の三彩と緑釉－天平に咲いた華－』 愛知県陶磁資料館 1998年
- 18 輸入陶磁器を検討するにあたって以下の文献を参照とした。
 - a 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集 4』 九州歴史資料館普及会 1978年
 - b 『大宰府条坊跡XⅤ－陶磁器分類編－』 大宰府市教育委員会 2000年
- 19 金付着灰釉陶器は、埼玉県中堀遺跡から出土している。報告の中では東日本における金付着土器の出土例を検討し、金粉製作の道具としての利用を指摘するとともに、別の容器で膠とともに溶かれて金泥として使用されたことが推測されている。今回出土した資料は、平安京でも金泥を使用した様々な文物が邸宅内で製作されていた状況を示す遺物といえる。

田中広明「金付着灰釉陶器」『中堀遺跡（第4分冊）』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997年
- 20 なお、平安時代中期と考えられる硯以外の土製品・石製品・金属製品・木製品は、出地地点一覧表を作成し第3章の末尾に掲載している。
- 21 『斎宮跡発掘資料選』 斎宮歴史博物館 1989年
- 22 a 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 財団法人元興寺文化財研究所 1978年
- b 藪中五百樹「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」『仏教芸術』194号 毎日新聞社 1991年
- 23 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14（前掲註22－a）
- 24 『大宰府条坊跡XⅤ－陶磁器分類編－』（前掲註18－b）

表19 その他の遺物出土遺構一覧表

遺物 番号	種類	形態	調査 区	地区	出土遺構 ・層位	備考			硯		D42ER・FR	耕作溝	約1/3		
							672	石 製 品	砥石	3区	D42IT～KT		角部の破片		
							673								
506	土 製 品	土 鍾	3区	D42JU	池 1	完存	674						東半部	遺構検出中	一端のみ
507				D42ES						675			D43DA～GA	耕作溝	両端を欠く
508				D42JT						676			D42VX・VY WX・WY	遺物包含層	一端のみ
509				D42FS・GS	遺物包含層	完存	677					D42HU・IU	耕作溝	両端を欠く	
510				D42GT						678					D42KX
511				D42IV・JV						679					D43VE～VJ
512				D42FX・GX	石敷遺構 1	ほぼ完存	680					D42DR・ER	遺構検出中	一端のみ	
513			4区	D52CU・CV DU・DV	井戸 2	完存	681					D42JX～MX	耕作溝	両端を欠く	
514				1区	D43FF・FG		耕作溝			682			D42FS～FU	遺物包含層	一端のみ
515		紡錘車	3区	D42JQ	池 1		683					D42HP・HQ IP・IQ	遺構検出中		
516			2区	D42BU	泉 1		684					D42FW・FX GW・GX	耕作溝	両端を欠く	
517	フイゴ羽口	3区	D42FS・GS	池 1	体部破片	685					3区	D42ET・FT	遺物包含層	一端のみ	
518	土馬	1次 調査	D53DL	井戸 3	頭・尾部を 欠損	686						D42IU～KU	耕作溝	角部の破片	
519	銚具(丸柄)	3区	D42MU～ MX	耕作溝	完存	687						D42NQ・OQ		中部の破片	
520			銚具(巡方)	D42DS		池 1	688							D42DT～FT	一辺のみ
521				D42CS			689							D42ES	中部の破片
522				1区			D43LI			清掃中	690				
523	3区	D42OO～OS		耕作溝			691						D42JP～LP	耕作溝	角部の破片
524	白玉	4区	D53XI	柱穴102			692						D42DR	遺物包含層	一端のみ
525		黒玉	3区	D42KR		池 1	693								
526	D42ER			694											
527	金 属 製 品	金製延べ板	1区	南半部	遺構検出中	完存	695	木 製 品	碗	4区	D42TT～TW	耕作溝	約1/2		
528		釘	2区	D42BU	泉 1	先端を欠く	696		蓋	8区	D42SK	旧天神川氾 濫原	約2/3		
529		方形板刃先 状鉄製品	3区	D42CT・CU	池 1	両端を欠く	697		糸巻	4区	西半部	遺構検出中	両端を欠く		
530		鋤先		D42HR		刃先のみ	698		将棋駒	8区	D42SK	旧天神川氾 濫原			
531	木 製 品	人形代	2区	D42 BT・BU CT・CU	泉 1	脚部を欠損	699	金 属 製 品	銭貨	3区	D42JU・KU	耕作溝	開元通寶 約3/4		
532		刀子形代	3区	D42IQ	池 1	ほぼ完存	700				D42EV		天禧通寶 一部を欠く		
533		舟形代		D42CU			701				西半部	遺構検出中	熙寧元寶 完存		
534		陽物形代		D42DT		先端を欠く	702				D42JT	遺物包含層	元祐通寶 完存		
535		楔		D42FT・FU GT・GU		完存、線刻 あり	703				D42HS	遺物包含層	皇宋通寶 約3/4		
536		杓子		D42JU		先端を欠く	704				D42DV～DX	耕作溝	永樂通寶 約1/2		
537		皿		D42IQ		約1/3	705	石 製 品	石鏃	4区	D52CU・CV	耕作溝	完存		
538				D42FT		完存	706		石棒		D52BU	遺物包含層	一端のみ		
539		栓		D42ET			707	土 師 器	碗	3区	D42FT	池 1	口縁部の破 片		
540				D42FR			708		杯身		D42KS・KT	池 1	口縁部から 底部にかけ ての破片		
541		箱形容器		D42IQ		一部分	709	須 恵 器	甕	6区	D43NG	耕作溝	口縁部の破 片		
542		下駄		D42FS		歯を若干欠 く									
543		柄		D42IQ		一部分									
544		櫛				1/2未満									
545		箸	1区	D43BK	井戸 1	先端を欠く									
546						完存									
547		円形曲物	4区	D52CU・CV DU・DV	井戸 2	一部分									
548		鋤													
549		不明木製品	1区	D43BK	井戸 1	一部分									
550		付木	4区	D52CU・CV DU・DV	井戸 2	ほぼ完存									
551															

第4章 自然遺物の環境考古学分析

十六町(第3次調査)では園地遺構を検出した。この園地遺構の環境を理解するうえで、池1ならびに周辺における植生の復原は不可欠と考え、泉1・池1・池2・池3の堆積土中の自然遺物を分析することとした。また、井戸・地鎮遺構についても自然遺物の遺存状況が良好と考えられたものは堆積土の分析を行なっている。

第1節 花粉分析

1 原理

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壤中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行なう。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

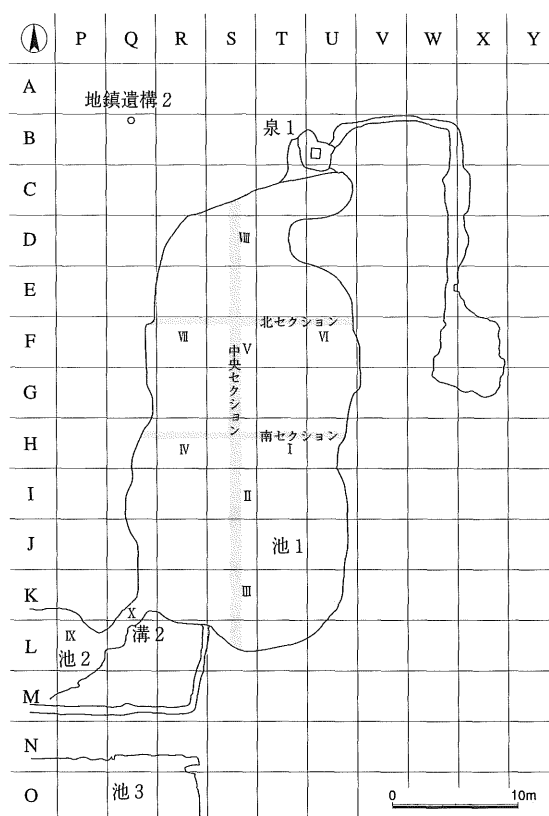


図55 試料採取地点位置図(1)

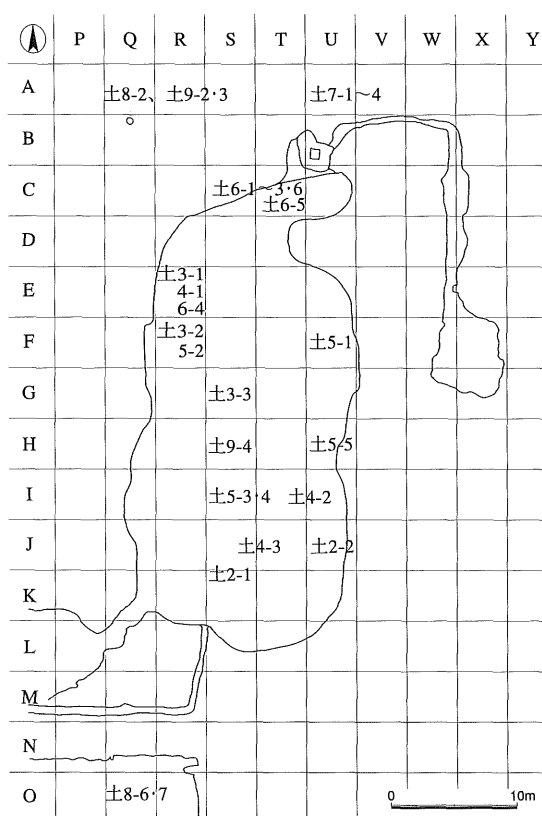


図56 試料採取地点位置図(2)

(図示した以外に、4区地鎮遺構3から土8-3を、4区井戸2から土8-4・5、土9-1を採取している)

第1節 花粉分析

2 試料

3区池1から採取した試料として、Ⅰ地点(上・下)、Ⅱ地点(上・中・下)、Ⅲ地点(上・下)、Ⅳ地点(上・下)、Ⅴ地点(①・②・③・④)、Ⅵ地点(上・下)、Ⅶ地点(上・中・下)、Ⅷ地点(上・中・下)の堆積物21点と、土-2(1・2)、土-3(1・2・3)、土-4(1・2・3)、土-5(1・2・3・4・5)、土-6(1・2・3・4・5・6)、土-9(4)の堆積物20点がある。また、池1関連遺構である池2からⅨ地点、溝2からⅩ地点、および泉1では土-7(1・2・3・4)の堆積物4点を採取している。この泉1試料は、後述する上層・合わせ口土師器皿内・中層・下層の試料に対応する。このほかに、池3から土-8(6・7)、地鎮遺構2から土-8(2)・土-9(2・3)、4区地鎮遺構3から土-8(3)、4区井戸2から土-8(4・5)・土-9(1)の堆積物13点を採取しており、計56点となる。

3 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行なった。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行なう。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行なう。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行ない、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1500rpm、2分間)の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行なった。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行なった。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行なった。結果は同定レベルによって、科・亜科・属・亜属・節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉45、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉38、シダ植物孢子2形態の計89である。これらの学名と和名および粒数を表に示し、花粉数が200個以上計数で

きた試料は、試料1 cm³中の花粉密度とともに花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムに示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は写真に示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、センダン属、キハダ属、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ツタ、ツバキ属、カキ属、ハインキ属、モクセイ科、トネリコ属、リョウブ、ツツジ科、ニワトコ属－ガマズミ属、イスノキ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、ユリ科、アヤメ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、スベリヒユ属、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ササゲ属、ノブドウ、フウロソウ属、アカバナ科、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、キュウリ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

・ I 地点から X 地点

I 地点から IV 地点、VI 地点はエノキ属－ムクノキが多く検出される。次いで、コナラ属アカガシ亜属、スギ、マツ属複維管束亜属が多い。他に、シイ属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、カキ属、カエデ属などが出現する。草本花粉は、イネ科がやや多く検出される。また、ミズアオイ属、カヤツリグサ科、ヨモギ属も多い。他に、ソバ属、ササゲ属、イネ属型が低率に出現する。

V 地点、VII 地点はコナラ属アカガシ亜属がやや多く、次いでスギ、マツ属複維管束亜属が多い。他に、シイ属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、エノキ属－ムクノキが出現し、エノキ属－ムクノキは上部で減少する。VII 地点ではアカメガシワもやや多い。

VI 地点、VIII 地点ではスギの出現率が高い。続いて多いマツ属複維管束亜属は上部で増加し、コナラ属アカガシ亜属は減少する。他に、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、シイ属が比較的多い。草本花粉は、イネ科がやや多く検出される。また、カヤツリグサ科、ヨモ

第1節 花粉分析

ギ属も多い。他に、ソバ属、ササゲ属、イネ属型が低率に出現する。

X地点ではコナラ属アカガシ亜属の出現率が高い。また、シイ属、スギが多く検出される。他に、マツ属複維管束亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属が出現する。草本花粉は、イネ科がやや多く検出される。また、カヤツリグサ科、ヨモギ属も多い。他に、ソバ属、イネ属型が低率に出現する。

・池1 土-2から土-6、土-9(4)

土-2(2)、土-3から土-5、土-9(4)はエノキ属－ムクノキが多く検出される。次いで、コナラ属アカガシ亜属、スギ、マツ属複維管束亜属が多い。他に、シイ属、クリ、コナラ属コナラ亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、カキ属、カエデ属などが出現する。草本花粉は、イネ科がやや多く検出される。また、ミズアオイ属、カヤツリグサ科、ヨモギ属も多い。他に、ソバ属、ササゲ属、イネ属型が低率に出現する。

土-6ではコナラ属アカガシ亜属がやや多く、次いでスギ、マツ属複維管束亜属が多い。他に、シイ属、コナラ属コナラ亜属、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワが出現する。草本花粉は、イネ科の占める割合が高い。また、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、ミズアオイ属もやや多い。他に、ソバ属、ササゲ属、イネ属型が低率に出現する。

・泉1

上層・合わせ口土師器皿内・中層・下層の各試料は、出現する花粉群集が同傾向を示す。樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が高い。特にイネ科の出現率が高く、次いでヨモギ属、カヤツリグサ科が多い。他に、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、ミズアオイ属、アヤメ属やササゲ属、ソバ属などが低率ではあるが検出される。樹木花粉は、スギ、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属がやや多く検出される。

・井戸2他 土-8、土-9

コナラ属アカガシ亜属がやや多く、次いでスギ、マツ属複維管束亜属が多い。他に、コナラ属コナラ亜属、シイ属、モミ属、ツガ属などが低率に出現する。草本花粉は、イネ科の占める割合が高い。次にヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科などが多い。他に、ソバ属、イネ属型が低率に出現する。

5 花粉分析から推定される植生と環境

(1) I地点からX地点

I地点からIV地点、IX地点は、比較的近隣に多く樹木が分布していた。特にエノキ属－ムクノキが多い。周辺地域の森林植生として、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹、スギ、マツ属複維管束亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の針葉樹、クリ、コナラ属コナラ亜属、カキ属、カエデ属の落葉広葉樹などの樹木が分布していた。堆積地はイネ科を主にミズアオイ属、カヤツリグサ科などの水生植物の生育する池沼から湿地の環境が示唆される。また、人里植物ないし耕地雑草の性格を持つヨモギ属も分布し、周囲には乾燥した環境が分布していた。

V地点、VII地点は、周辺の樹木要素として、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹、スギ、

マツ属複維管束亜属の針葉樹、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹などが分布していた。堆積地はイネ科を主にカヤツリグサ科などの水生植物の生育する湿地の環境が示唆される。また、人里植物ないし耕地雑草のヨモギ属、アブラナ科が多く、これらの草本が繁茂する乾燥した環境が示唆される。

XI地点、XIII地点は、周辺地域の樹木要素としてスギ、マツ属複維管束亜属の針葉樹が分布していたと考えられる。堆積地周辺はイネ科、カヤツリグサ科の湿地性草本の他にヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科などの人里植物や耕地雑草が多く生育する比較的乾燥した環境であった。

X地点は、樹木要素として、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹、スギ、マツ属複維管束亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の針葉樹、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹が分布していた。堆積地周辺はイネ科、カヤツリグサ科の湿地性草本の他にヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科などの人里植物や耕地雑草が多く生育する比較的乾燥した環境であった。

(2)池1 土-2から土-6、土-9(4)

土-2(2)、土-3から土-5、土-9(4)は、樹木花粉と草本花粉の占める割合はほぼ同程度であるため、比較的樹木の多い環境が考えられる。特にエノキ属-ムクノキが多く検出され、周辺にエノキ属-ムクノキが分布していた。周辺地域の森林植生として、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹、スギ、マツ属複維管束亜属の針葉樹、クリ、コナラ属コナラ亜属、カキ属、カエデ属の落葉広葉樹などが分布していた。堆積地はイネ科を主にミズアオイ属、カヤツリグサ科などの水生植物の生育する湿地の環境が示唆される。人里植物ないし耕地雑草のヨモギ属も多い。

土-6は、樹木要素として、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹、スギ、マツ属複維管束亜属の針葉樹、クリ、コナラ属コナラ亜属、アカメガシワの落葉広葉樹が分布していた。堆積地はイネ科を主にカヤツリグサ科、ミズアオイ属などの水生植物の生育する湿地の環境が示唆される。周囲は人里植物ないし耕地雑草のヨモギ属、アカザ科-ヒユ科が多く、これらの草本が繁茂する乾燥した環境が広がっていた。

(3)泉1

上層・合わせ口土師器皿内・中層・下層は樹木要素として、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹、スギ、マツ属複維管束亜属の針葉樹などが主に分布している。堆積地はイネ科を主にカヤツリグサ科、ミズアオイ属、アヤメ属などの水生植物の生育する湿地の環境が示唆される。また、周囲は人里植物ないし耕地雑草のヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科が多く、これらの草本が繁茂する乾燥した環境であった。土器内の堆積物は、周囲の植生を反映し、埋没時の堆積物と考えられる。

(4)井戸2他 土-8、土-9

樹木要素として、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹、スギ、マツ属複維管束亜属の針葉樹などが分布する。堆積地周辺はイネ科、カヤツリグサ科の湿地性草本の他にヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科などの人里植物や耕地雑草が多く生育し比較的乾燥した環境であった。

第2節 種実同定

1 原理

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし、古環境の推定を行なうことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2 試料

池1より採取された堆積物試料、Ⅰ地点(下)、Ⅱ地点(下)、Ⅲ地点(下)、Ⅳ地点(下)、Ⅴ地点(④)、Ⅵ地点(下)、Ⅶ地点(下)、Ⅷ地点(下)、土-9(4)とⅨ地点、Ⅹ地点の11点。泉1より採取された4点(上層・合わせ口土師器皿内・中層・下層)である。選別済み試料は1～3区より採取された植物遺体である。試料は11箱(455袋)で、各箱の内分けは以下の通り。箱No.1(袋No.1～48)、箱No.2(袋No.1～50)、箱No.3(袋No.1～26)、箱No.4(袋No.1～40)、箱No.5(袋No.1～65)、箱No.6(袋No.1～35)、箱No.7(袋No.1～25)、箱No.8(袋No.1～40)、箱No.9(袋No.1～50)、箱No.10(袋No.1～23)、箱No.11(袋No.1～53)。

3 方法

試料(堆積物)に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行なった。

1) 試料100cm³に水を加え放置し、泥化を行なう。

※土-9(4)は堆積物1000cm³に水を加え放置し、泥化を行なう。

2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行なう。

3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行なう。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行ない、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4 結果

(1) 分類群

樹木10、草本29の計39が同定された。学名、和名および粒数を表に示し、主要な分類群を写真に示す。堆積物試料の種実数をダイアグラムに示した。以下同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* 毬果・種子 マツ科

毬果は黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平5角形であり、その中央にはヘソがある。

種子は倒卵形を呈し、やや扁平である。

ヒメグルミ *Juglans mandshurica* Carr. var. *cordiformis* Kitamura 核 クルミ科

淡褐色で円形を呈し、一端が尖る。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。

ムクノキ *Aphananthe aspera* Planch. 核 ニレ科

淡褐色で広倒卵形を呈し、一側面は狭倒卵形で厚く、他方は稜になって薄い。

ウメ *Prunus mume* Sieb. et Zucc. 核 バラ科

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。

スモモ *Prunus salicina* Lindley 核 バラ科

淡褐色で扁平楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面は粗い。

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* 核 バラ科

黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。

カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc. 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いヘソがある。表面には大きい網目模様がある。

センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. 核 センダン科

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に5本の発達した稜が走る。

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端が尖る。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のヘソがある。

〔草本〕

ヒルムシロ属 *Potamogeton* 果実 ヒルムシロ科

茶褐色で楕円形を呈し、頂端に花柱が残る。果背に稜がある。

オモダカ属 *Sagittaria* 果実 オモダカ科

オモダカ *Sagittaria trifolia* L.は淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状となり、花柱がクチバシ状に残る。オモダカと類似した大きさと形態を持つものとして、他にウリカワ *Sagittaria pygmaea* Miq. がある。翼状部が傷んでおり、その概形が判別できないため、属レベルの同定にとどめる。

オモダカ科 *Alismataceae* 種子

茶褐色で逆U字形を呈す。種皮は薄くやや透き通る。果実が欠落し、その特徴が判別できない。

イネ科 *Gramineae* 穎

灰褐色～茶褐色で紡錘形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。

カヤツリグサ属 *Cyperus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

第2節 種実同定

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

黒褐色で倒卵形を呈し、断面は扁平である。表面には網目模様がある。

黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

イボクサ Aneilema Keisak Hassk. 種子 ツユクサ科

黒褐色～黒色で楕円形を呈す。腹部に一文字状のヘソがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。

コナギ Monochoria vaginalis Presl var. plantaginea Solms-Laub. 種子 ミズアオイ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に8～10本程度の隆起があり、その間には横方向に微細な隆線がある。種皮は薄く透き通る。

イグサ科 Juncaceae 種子

半透明の黄褐色ないし茶褐色、ゆがんだ卵形を呈す。両端は尖り、黒褐色。表面には網目模様がある。

ミゾソバ Polygonum Thunbergii Sieb. et Zucc. 果実 タデ科

黄褐色で三角状広卵形を呈し、基部に小突起がある。表面には微細な網目模様がある。

タデ属 Polygonum 果実 タデ科

黒褐色で先端が尖る卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

ギンギシ属 Rumex 果実 タデ科

茶褐色で頂端が尖る卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。翼状の花被の残るものもある。

アカザ属 Chenopodium 種子 アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ヒユ属 Amaranthus 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。

ザクロソウ Mollugo pentaphylla L. 種子 ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一カ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。

ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子

黒色で円形を呈し、側面にヘソがある。表面全体に突起がある。

タガラシ Ranunculus scleratus L. 果実 キンボウゲ科

黄褐色、扁平、ややレンズ状。側面にシワはないが、滑らかではない。

カタバミ属 Oxalis 種子 カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端が尖る。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。

スミレ属 Viola 果実 スミレ科

下端が尖る倒卵形を呈す。基部の側面にヘソがあり、そこから上端まで筋が走る。

チドメグサ属 Hydrocotyle 果実 セリ科

淡褐色で半円形を呈す。断面は楕円形である。両面に明瞭な一本の円弧状の隆起が走る。

アブラナ科 Cruciferae 種子

茶褐色で楕円形を呈し、下端にヘソがある。表面には長方形の網目がある。

セリ科 Umbelliferae 果実

淡褐色～黄褐色で楕円形を呈す。果皮はコルク質で厚く弾力があり、片面に3本の肥厚した隆起がみられる。断面は半円形である。

イヌコウジュ属 Mosla 果実 シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にヘソがある。表面は網目模様である。

ナス科 Solanaceae 種子

黄褐色で円形を呈す。表面には網目模様がある。

タカサブロウ Eclipta prostrata L. 果実 キク科

淡褐色～茶褐色で長楕円形を呈す。上端は円形に突出し、下端は切形となる。表面中央部にイボ状の突起がある。断面は菱形である。

キク科 Compositae 果実 キク科

茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に8本程度の筋が走る。

シャジクモ属 Chara 卵胞子 シャジクモ科

黒色で楕円形を呈す。断面は円形で、表面には右下がりの螺旋状の隆起が8～10本程度ある。

(2) 種実群集の特徴

・ I 地点から X 地点

I 地点(下)からコナギ種子、タガラシ果実が多く検出された。特にコナギ種子が目立って多い。

II 地点(下)からコナギ種子、ナデシコ科種子、タガラシ果実が多く検出された。

III 地点(下)からコナギ種子が多量に検出された。次いでシャジクモ属卵胞子、タガラシ果実、カヤツリグサ科果実が多い。

IV 地点(下)では種実の検出数が少ない。コナギ種子、アカザ属種子がわずかに検出される。

V 地点(④)からコナギ種子、ナデシコ科種子が数多く検出され、次いでタガラシ果実、カヤツリグサ属果実、タデ属果実が多い。

VI 地点下からタガラシ果実、コナギ種子、カヤツリグサ属果実、ナデシコ科種子が多く検出された。

VII 地点(下)は種実の検出数が少ない。コナギ種子、ナデシコ科種子などがわずかにみられる。

VIII 地点(下)はコナギ種子、タガラシ果実、カヤツリグサ属果実が多い。

IX 地点ではコナギ種子が目立って多い。

X 地点から種実を検出されなかった。

・ 土-9(4)

マツ属複維管束亜属毬果、ヒルムシロ属果実、コナギ種子、タガラシ果実が目立って検出された。

第2節 種実同定

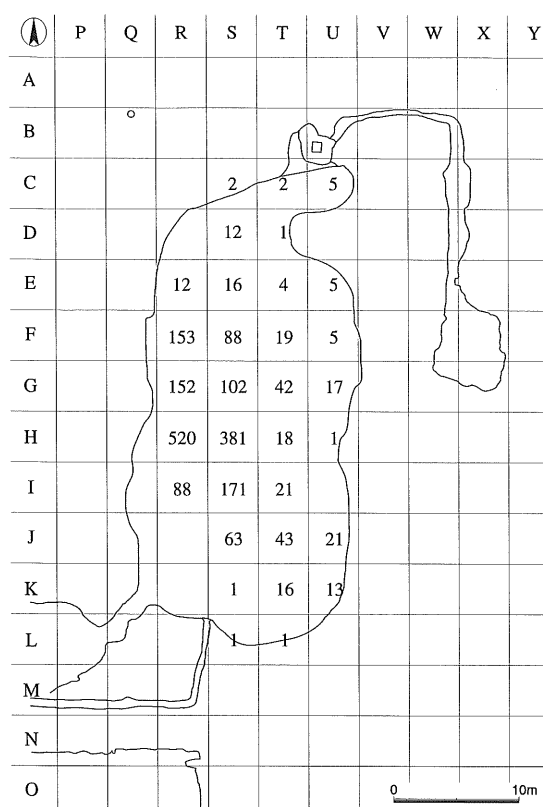


図57 マツ属複維管束亜属毬果の検出度数

・泉1

上層から、カヤツリグサ属果実、ザクロソウ種子、ナデシコ科種子が多量に検出された。

合わせ口土師器皿内から、カヤツリグサ属果実、ザクロソウ種子、ナデシコ科種子が多く検出された。有用植物であるスモモ核がみられる。

中層から、カヤツリグサ属果実、カヤツリグサ科果実、ザクロソウ種子、ナデシコ科種子、チドメグサ属果実が検出された。特にナデシコ科種子が多い。下層から、カヤツリグサ属果実、カヤツリグサ科果実、タデ属果実、ザクロソウ種子、ナデシコ科種子、チドメグサ属果実、アブラナ科種子が多く検出された。

・選別済み試料

同定されたのは大型種実であるマツ属複維管束亜属毬果、ヒメグルミ核、ウメ核、スモモ核、モモ核、サクラ属サクラ節核、センダン核であ

った。ほとんどがマツ属複維管束亜属毬果、モモ核であった。

5 種実同定から推定される植生と環境

(1) I地点からX地点

コナギ、シャジクモ属、タガラシの抽水植物から沈水植物が多く生育し、池沼の環境が示唆される。路傍などに多い乾燥した人里環境を好むナデシコ科も多く生育し、周囲には乾燥した人為地が分布していた。

(2) 土-9(4)

浮葉植物のヒルムシロ属、抽水植物のコナギ、抽水から湿性植物のタガラシが生育し池沼の環境が示唆される。マツ属複維管束亜属の毬果が多く、近隣のニヨウマツ類(アカマツやクロマツ)の生育が考えられる。

(3) 泉1

カヤツリグサ科、ザクロソウ、ナデシコ科、チドメグサ属、アブラナ科の人里植物ないし耕地雑草が繁茂していたと考えられる。

(4) 選別済み試料

選別済み試料で同定された種実は、移動性の少ない大型種実であった。マツ属複維管束亜属が多量にあり、ニヨウマツ類(アカマツやクロマツ)が周辺に比較的多く生育ないし植栽されていた。モモ、ウメ、スモモもみられ、一般的に遺跡から多く出土する種類であるが、生育ないし植栽していた可能性がある。ヒメグルミは珍しく、近隣に生育ないし植栽されていたと考えられる。

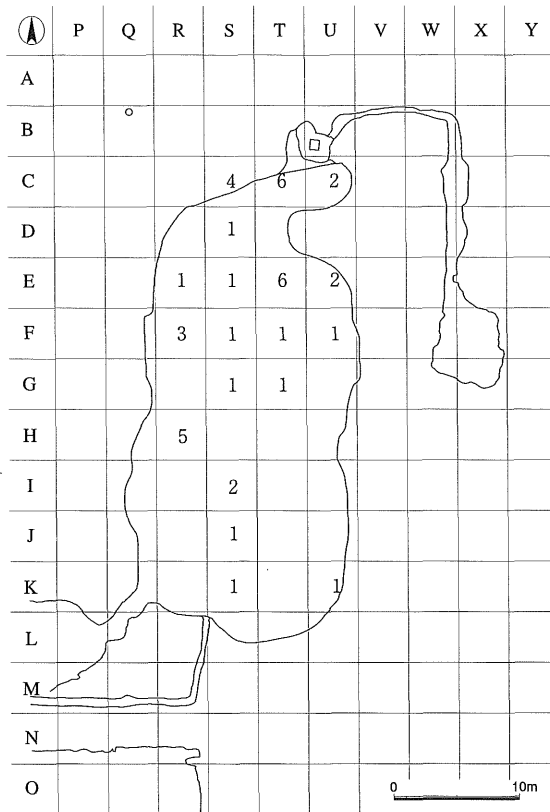


図58 ヒメグルミ核の検出度数

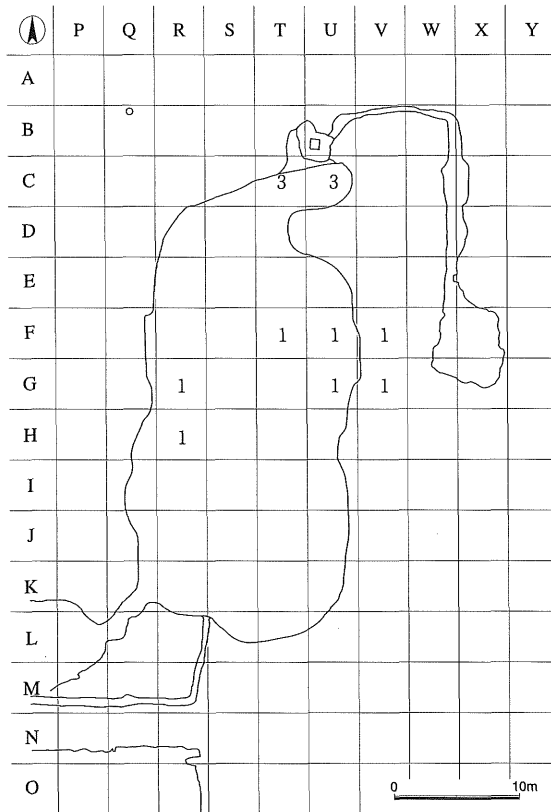


図59 ウメ核の検出度数

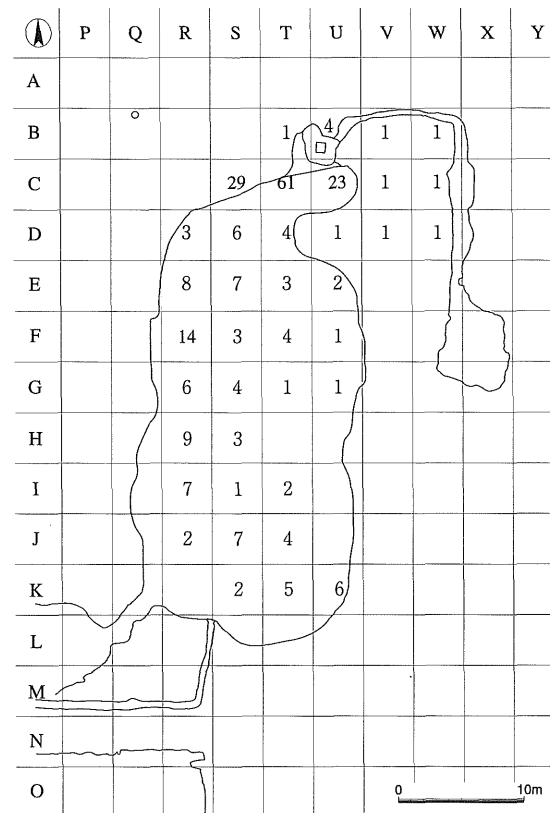


図60 モモ核の検出度数

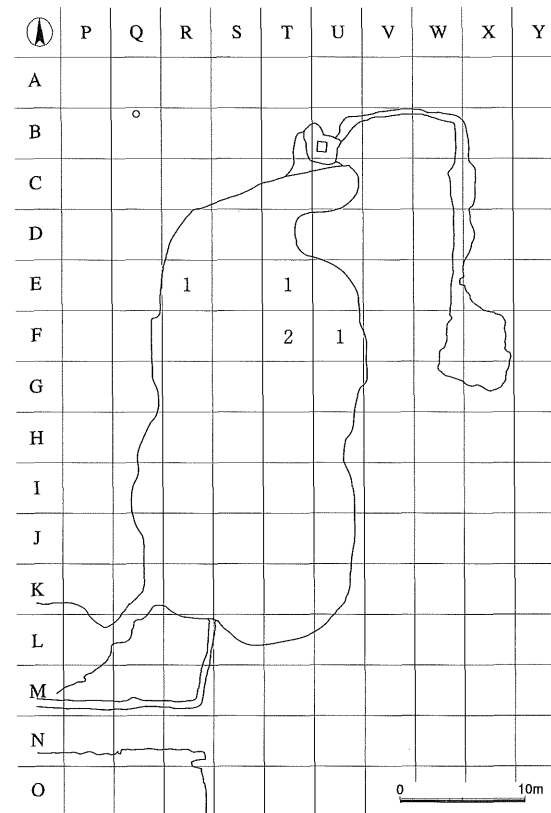


図61 センダン核の検出度数

第3節 樹種同定

1 原理

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織を持つ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2 試料

試料は、選別済み試料で1～3区より採取された植物遺体で11箱(455袋)で、各箱の内分けは以下の通り。箱No.1(袋No.1～48)、箱No.2(袋No.1～50)、箱No.3(袋No.1～26)、箱No.4(袋No.1～40)、箱No.5(袋No.1～65)、箱No.6(袋No.1～35)、箱No.7(袋No.1～25)、箱No.8(袋No.1～40)、箱No.9(袋No.1～50)、箱No.10(袋No.1～23)、箱No.11(袋No.1～53)。この中で自然木と思われるもの305点を対象とした。

3 方法

試料はカミソリを用いて、新鮮な基本的三断面(木材の横断面、放射断面、接線断面)を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行なった。

4 結果

結果は表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、螺旋肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示す螺旋肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径0.9mに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

2) モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

3) ツガ *Tsuga sieboldii* Carr. マツ科

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞および放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2～4個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、ツガに同定される。ツガは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20～25m、径0.5～0.8mである。材は耐朽、保存性中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

4) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿に良く耐え、広く用いられる。

5) ヒノキ科 *Cupressaceae*

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、小型のものが存在するが、1分野に存在する個数および型は不明瞭である。樹脂細胞がみられる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりヒノキ科に同定される。

6) 針葉樹 *conifer*

横断面：仮道管と放射組織が存在する。

放射断面：仮道管と放射組織が存在する。

接線断面：仮道管と単列の放射組織が存在する。

以上の形質より針葉樹に同定される。なお本試料は、保存状態が悪く、広範囲の観察が困難で

第3節 樹種同定

あったため、針葉樹の同定にとどまる。

7) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

横断面：小型で丸い、放射方向にやや伸びた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

8) カバノキ属 *Betula* カバノキ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、ややまばらに散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～20本ぐらいである。放射組織は同性である。道管と放射組織の間の壁孔は極めて小さく密である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で、1～3細胞幅である。道管相互の壁孔は極めて小さく密に配列する。

以上の形質よりカバノキ属に同定される。カバノキ属にミズメ、ウダイカンバ、シラカンバ、オノオレカンバなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

9) ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

10) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ

30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

11) ウメ *Prunus mume* Sieb. et Zucc. バラ科

横断面：早材部で、中型からやや小型の道管が密になる傾向を示し、他の部分においては、小型の丸い道管が、単独あるいは不規則な方向に複合して散在する、環孔材的な性質を持つ散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には螺旋肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～8細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりウメに同定される。ウメは中国原産で、各地で栽培されているが、九州では野生状態で生えている地域もある。落葉小高木で、高さ10m、径0.6mに達する。

12) サクラ属 *Prunus* バラ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁には螺旋肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～6細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

13) ヤブツバキ *Camellia japonica* L. ツバキ科

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、ダルマ状に膨れているものが存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径0.2～0.3mである。材は強靱で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

14) ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60本を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

第3節 樹種同定

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径0.3mである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

15) スノキ属 *Vaccinium* ツツジ科

横断面：小型で角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく10本前後のものが多いが、まれに単穿孔も認められる。道管の内壁には螺旋肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、直立細胞からなる単列のものと、6～8細胞幅で長い紡錘形を示す多列のものからなる。多列のものはほとんどが平伏細胞からなるが、上下縁辺部と側面部に直立細胞がみられる。

以上の形質よりスノキ属に同定される。スノキ属には、シャシャンボ、ナツハゼなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。常緑または落葉の低木である。

16) ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科

横断面：小型で多角形の道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。放射組織の細胞が大きく接線方向への幅が道管の直径より大きいことが認められる。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は50本前後である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、2～5細胞幅の細長い紡錘形であり鞘細胞のあるものが多い。

以上の形質よりウツギ属に同定される。ウツギ属は日本各地の日当たりの良い山野に自生する落葉低木である。株立ち状になり、高さ1～3m、枝は分枝繁密、幹枝とも中空である。庭園樹、境界樹として栽培、材は木釘などに用いられる。

17) ヒイラギ *Osmanthus heterophyllus* P. S. Green モクセイ科

横断面：小型でやや角張った道管が、多数集合して火炎状に配列する紋様孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁には螺旋肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～2細胞幅である。

以上の形質よりヒイラギに同定される。ヒイラギは福島県以西の本州、四国、九州に分布する。常緑の小高木で、高さ6m、径30cmに達する。材は堅硬、強靱で重い。器具、楽器、彫刻、ろくろ細工、櫛に用いられる。

18) ムラサキシキブ属 *Callicarpa* クマツヅラ科

横断面：小型で厚壁の丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、晩材部でやや減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管と放射組織間の壁孔、および道管相互の壁孔は、極く小型で、交互状に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅であり、1～10個の直立細胞からなる単列部は長い。

以上の形質よりムラサキシキブ属に同定される。ムラサキシキブ属には、ヤブムラサキ、ムラサキシキブ、コムラサキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉の低木ないし高木である。なお現在、ムラサキシキブと言って、庭に植えられているのは、ほとんどコムラサキである。

19) 散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。なお本試料は、保存状態が悪く、広範囲の観察が出来なかったため、散孔材の同定にとどまる。

20) 広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお本試料は、保存状態が悪く、広範囲の観察が出来なかったため、広葉樹の同定にとどまる。

21) 草本 grass

木材の形質を呈していない。

5 樹種同定における所見

同定の結果、当遺跡より出土した自然木はカヤ3、モミ属21、ツガ11、マツ属複維管束亜属215、ヒノキ科2、針葉樹1、ヤナギ属1、カバノキ属2、ツブラジイ3、コナラ属アカガシ亜属2、ウメ3、サクラ属20、ヤブツバキ2、ヒサカキ属4、スノキ属1、ウツギ属2、ヒイラギ1、ムラサキシキブ属2、散孔材4、広葉樹4、草本1であった。マツ属複維管束亜属が多く出土しているのが特徴的である。マツ属複維管束亜属はアカマツとクロマツとがある。ヒイラギは1点のみの検出であるが珍しい。

第3節 樹種同定

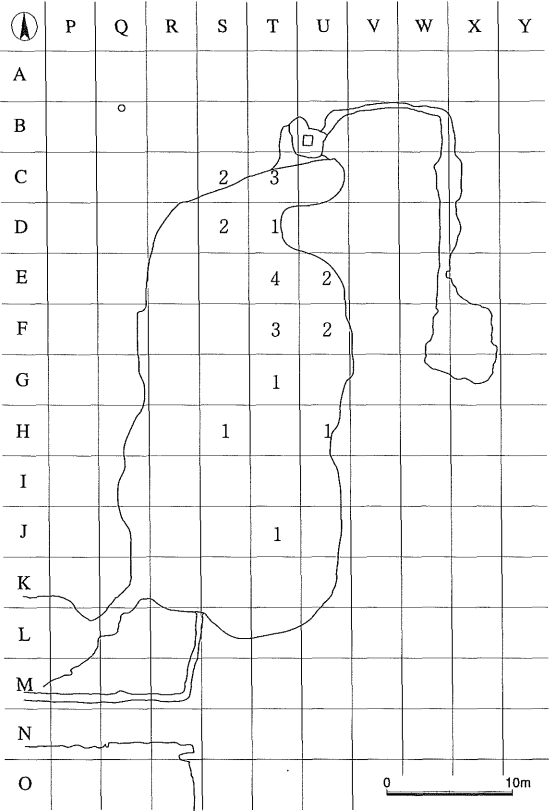


図62 モミ属材の検出度数

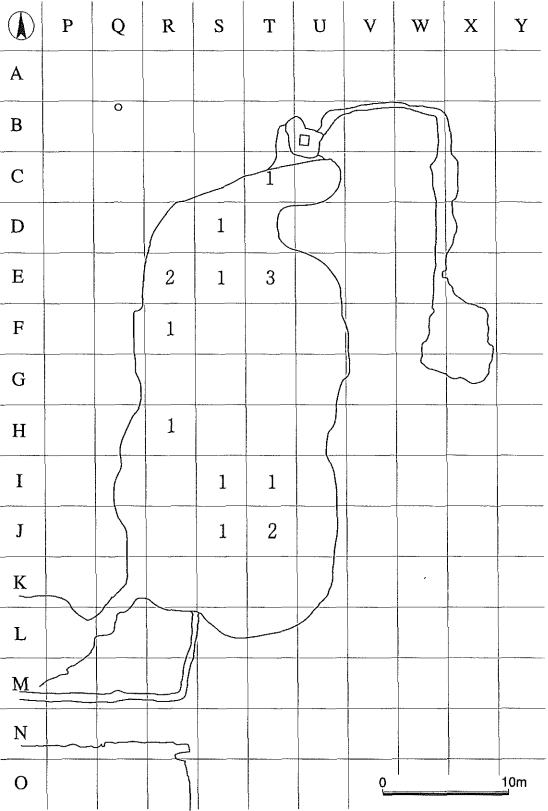


図63 ツガ属材の検出度数

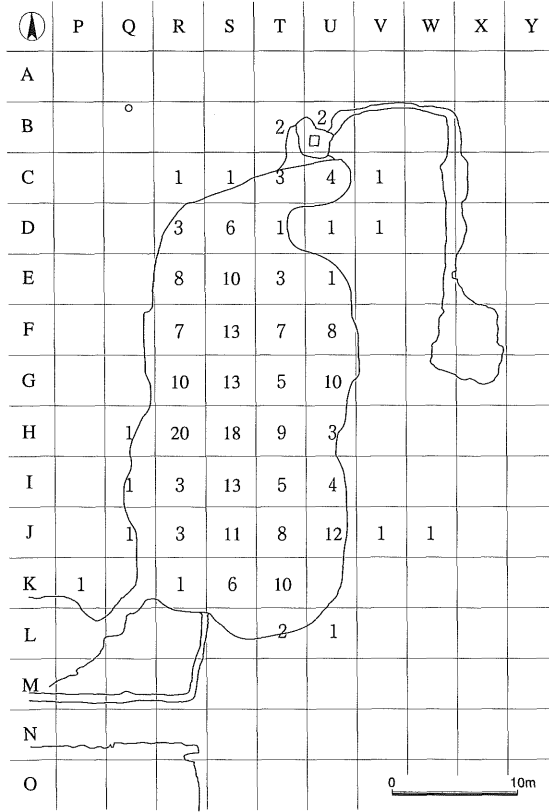


図64 マツ属複織管束亜属材の検出度数

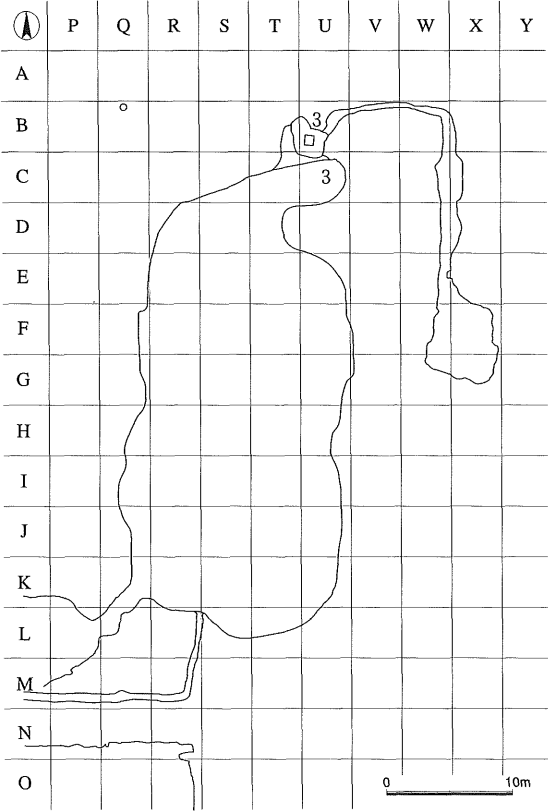


図65 ツブラジイ属材の検出度数

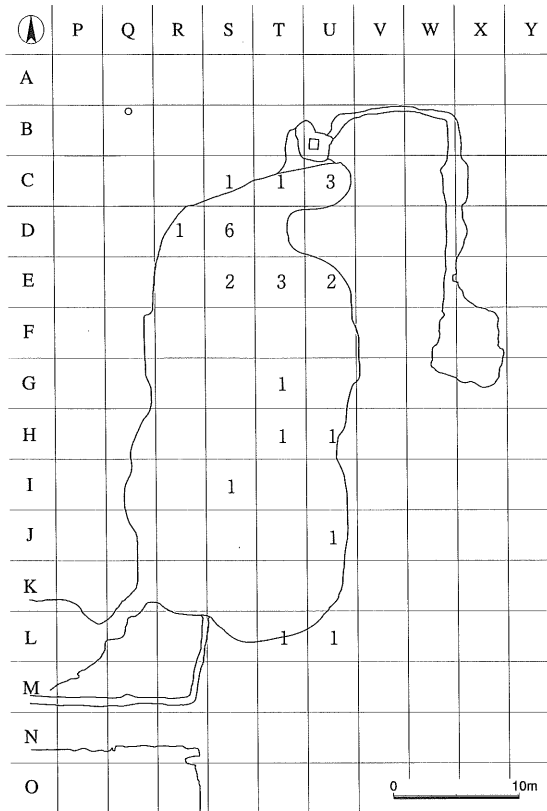


図66 サクラ属材の検出度数

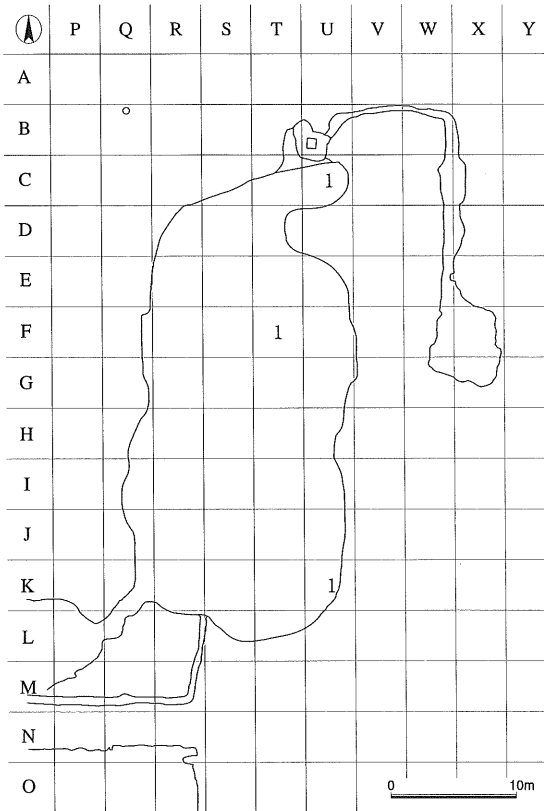


図67 ウメ属材の検出度数

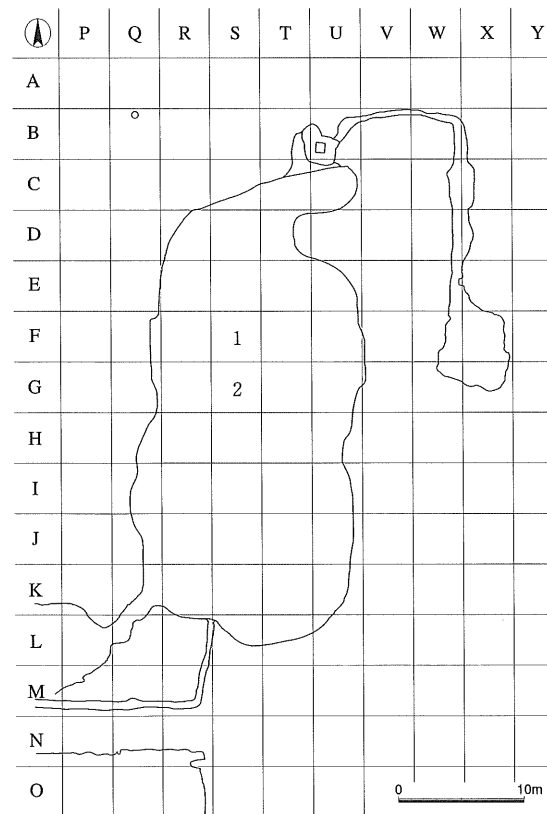


図68 ヤブツバキ材の検出度数

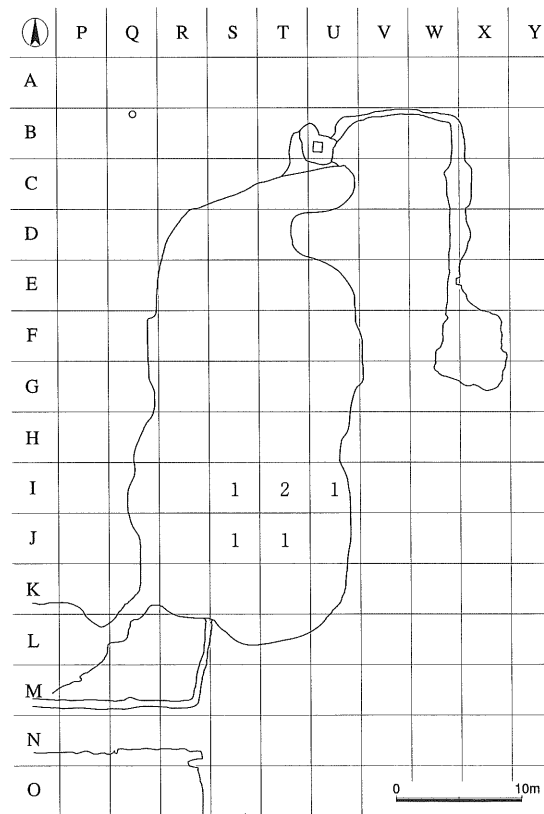


図69 ムラサキシギ属材の検出度数

第4節 珪藻分析

1 原理

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

2 試料

池1より採取された堆積物試料は、Ⅰ地点(下)、Ⅱ地点(下)、Ⅲ地点(下)、Ⅳ地点(下)、Ⅴ地点(④)、Ⅵ地点(下)、Ⅶ地点(下)、Ⅷ地点(下)と、土-2(1・2)、土-3(1・2・3)、土-4(1・2・3)、土-5(1・2・3・4・5)、土-6(1・2・3・4・5・6)、土-9(4)の28点である。また、池2からⅨ地点、溝2からⅩ地点の2点、泉1より採取された4点(上層・合わせ口土師器皿内・中層・下層)のほか、池3から土-8(6・7)、地鎮遺構2から土-8(2)、土-9(2・3)、4区地鎮遺構3から土-8(3)、4区井戸2から土-8(4・5)、土-9(1)の堆積物9点で総合計43点である。

3 方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1 cm³を秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行なう。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5・6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600~1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行なう。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行ない、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行なった。

4 結果

試料から出現した珪藻は、貧塩性種(淡水生種)136分類群、中塩性種(汽水生種)1分類群、真-中塩性種(海-汽水生種)4分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表28、表29、表30に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定した主要珪藻ダイアグラムを図76、図77、図78に示す。

(1) Ⅰ地点からⅩ地点

Ⅰ地点(下)、Ⅱ地点(下)は、止水性種や沼沢湿地付着性種群の*Eunotia minor*、流水不定性の*Amphora copulata*、*Eunotia soleirolii*、が優占して出現する。他に、*Cymbella minuta*、

Gomphonema quadripunctatum、*Navicula decussis*などの中～下流性河川指標種群や流水性種も出現する。

Ⅲ地点(下)からⅨ地点の試料は、止水性種や沼沢湿地付着性種群の*Eunotia minor*、*Eunotia pectinalis*、*Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis*、流水不定性の*Amphora copulata*、*Eunotia sudetica*、が多く検出される。*Cymbella minuta*、*Gomphonema parvulum*などの中～下流性河川指標種群や流水性種も比較的多い。他に、*Pinnularia subcapitata*、*Navicula confervacea*などの陸生珪藻が検出される。

X地点は、珪藻殻数密度が非常に低い。

(2) 池1 土-2から土-6、土-9(4)

土-2は、珪藻殻数密度が非常に低い。土-3、土-4、土-5は、止水性種で沼沢湿地付着性種群の*Eunotia minor*、*Gomphonema gracile*、*Pinnularia microstauron*、各生態性が不定性の*Amphora copulata*、*Cymbella silesiaca*、*Eunotia soleirolii*などの出現率が高い。また、陸生珪藻の*Navicula confervacea*、流水性種の*Gomphonema parvulum*がやや多い。

土-6は、どの試料も珪藻殻数密度が非常に低いが、土-3、土-4、土-5と同様な出現傾向を示す。

土-9(4)は、止水性種で沼沢湿地付着性種群の*Eunotia minor*、流水不定性の*Amphora copulata*が多く検出される。次いで陸生珪藻の*Navicula confervacea*、流水性種の*Gomphonema parvulum*、*Navicula elginensis*が多い。

(3) 泉1

上層、合わせ口土師器皿内は、*Eunotia minor*、*Gomphonema gracile*、*Eunotia curvata*など沼沢湿地付着性種群や止水性種が特徴的に出現する。他に*Gomphonema parvulum*、*Gomphonema quadripunctatum*などの中～下流性河川指標種群や流水性種も出現する。

中層、下層は、止水性種で沼沢湿地付着性種群の*Eunotia minor*がやや多く出現する。他に、中～下流性河川指標種群の*Gomphonema parvulum*、陸生珪藻の*Pinnularia subcapitata*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、各生態性が不定性などの*Eunotia sudetica*が比較的多い。

(4) 井戸2 土-8(4)・土-9(1)

土-8(4)は*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata*、*Navicula confervacea*、*Amphora montana*などの陸生珪藻の出現率が高い。他に、出現率は低いが*Gomphonema parvulum*、*Surirella angusta*などの流水性種が検出される。土-9(1)は陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata*、*Navicula confervacea*、*Amphora montana*、流水性種の*Gomphonema parvulum*、*Surirella angusta*、各生態性が不定性の*Navicula goeppertiana*、*Navicula sp.*が比較的多い。

他の試料は珪藻殻数密度が非常に低い。

5 珪藻分析から推定される堆積環境

(1) I 地点から X 地点

I 地点(下)、II 地点(下)は、止水性種や沼沢湿地付着性種群と各生態性が不定性の珪藻が優占し、中～下流性河川指標種群や流水性種も出現することから、流水の影響のややある止水域の環境が示唆され、水草の繁茂する池沼の環境が示唆される。

III 地点(下)からIX 地点は、止水性種や沼沢湿地付着性種群、中～下流性河川指標種群や流水性種、流水不定性の珪藻が出現するため、流水の影響のある止水域の池沼の環境が示唆される。陸生珪藻がやや多いことから周囲に湿った環境も分布していた。

X 地点は、珪藻殻数密度が非常に低く、珪藻が生育しにくい乾燥した堆積環境が示唆される。

(2) 池1 土-2 から土-6、土-9(4)

土-2 は、珪藻殻数密度が非常に低く、堆積速度が速かったなどが考えられる。

土-3、土-4、土-5、土-6 は、止水性種で沼沢湿地付着性種群、流水不定性の珪藻が多く、陸生珪藻、流水性種も比較的多く検出されるので、流水の影響があり、周囲に湿地が分布する池沼の止水域の環境が示唆される。

土-9(4)の時期は、止水性種で沼沢湿地付着性種群、各生態性が不定性の珪藻が多く検出され、池沼などの止水域が分布していたと考えられる。陸生珪藻や流水性種も検出され、流水の影響もあり、湿地も分布していたと考えられる。

(3) 泉1

上層、合わせ口土師器皿内の時期は、沼沢湿地付着性種群や止水性種が特徴的に出現し、中～下流性河川指標種群や流水性種も出現するため、流水の影響のある池沼などの止水域の環境であったと考えられる。

中層、下層の時期は、止水性種で沼沢湿地付着性種群、中～下流性河川指標種群、陸生珪藻が出現し、流水の影響のある止水域の環境が示唆され、周囲に湿った環境が分布していた。

(4) 井戸2 土-8(4)上層・土-9(1)下層

陸生珪藻の出現率が高く、周囲は湿地の環境であったと考えられる。他に、出現率は低いが流水性種が検出され、流水の影響があったことが示唆される。土-9(1)の時期は陸生珪藻が多く、流水性種、各生態性が不定性の珪藻などが伴われるため、流水の影響がある湿地が分布していたと考えられる。

第5節 考察

1 植生と環境

花粉群集は、いずれの試料においてもマツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属の出現率が高く、これらは地域的な森林植生として多かったか、近隣に生育していたとみなされる。地点によって変異するエノキ属ムクノキ、虫媒花植物のシイ属は近接した生育が示唆される。草本では、イネ科が優占し、カヤツリグサ科、ミズアオイ属の水生植物の分布とヨモギ属、アカザ科ヒユ科、アブラナ科、チドメグサ亜科の乾燥を好む人里植物ないし耕地雑草が分布する。イネ科は種類が多く生育環境が多様である。池の堆積物であることから、水生植物は池内に生育し、周囲には乾燥した環境が分布していた。

2 池の周囲の植栽

マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属の花粉出現率が高く、池の周囲に生育していた可能性が高いが風媒花植物であり限定しにくい。マツ属複維管束亜属の材は池の西部中央部に偏在してやや多く、毬果は特に西部中央部に多く、マツ属複維管束亜属(ニヨウマツ類、アカマツかクロマツ)が西岸中央部付近に分布していたとみなされる。ニヨウマツ類は材と毬果とも数量が多く、全体にも多く植栽されていた可能性が高い。エノキ属ムクノキ花粉も南部から西部に偏在し、種子からムクノキと推定され、南部から西岸に分布していた。カエデ属も南部に生育していたと推定される。カキ属花粉は南東部と北東部で検出され、東岸のやや南部と同やや北部付近に植栽されていたと推定される。モミ属材、ツブラジイ材、サクラ属材は少ないが北側に偏在し、北岸周辺の分布が推定される。ヤブツバキ材も少ないが植栽されていたと推定される。少ないが、ウメ核は北側に偏在し、センダン核は北東部に分布し、それぞれ植栽されていたと推定される。モモ核は全体に多く、やや北側に偏在する。ヒメグルミ核も分布の特徴を示さない。

3 池とその周囲の環境

池にはイネ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属の水生植物を主に、アヤメ属やユリ科などが生育していた。珪藻群集では池沼湿地付着生種を主とする止水生種に中～下流性河川指標種の流水性種、不定生種が伴われる。水草の多い池沼の環境であるが流水の影響も強く、たえず水が入れ替わっていたと考えられる。泉1では優占種が異なるが、ほぼ同じ環境が示唆される。池内堆積物の土-1から土-6、土-9(4)もほぼ同じ群集が検出され同環境が示唆される。他に清水性の珪藻が多く、冷温性のものもあり、池は比較的きれいな水であり、植栽された木々により日陰も多かったとみなされる。

池の周囲はヨモギ属、アカザ科ヒユ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、ナデシコ科などのやや乾燥を好むの人里植物が生育し、池の周囲は水はけが良く、乾燥した環境であることが示唆される。

他の土-8(2・3)と土-9(2・3)は遺構内堆積物であるが、陸生珪藻が検出される試料があ

るか珪藻が少ないかであり、陸生珪藻の生育する湿った環境から珪藻の生育しにくい乾燥した環境が示唆される。土-8(4・5)と土-9(1)は井戸であるが、陸生珪藻が多く周囲の湿った環境を示す。井戸内は日当たりが悪く珪藻が生育しにくく周囲からの珪藻遺体が多く反映され堆積したと考えられる。

4. まとめ

当遺跡の花粉分析、種実同定、樹種同定、珪藻分析を行なった結果、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が、地域的な森林植生として多かったか、近隣に生育して、他にエノキ属-ムクノキ、シイ属も堆積地に近接して生育していた。池の周囲の植栽に植栽されたまたは生育が示唆されるものは、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属アカガシ

亜属、コナラ属コナラ亜属(ニヨウマツ類、アカマツかクロマツ)、ムクノキ、カエデ属、カキ属、モミ属、ツブラジイ、サクラ属、センダン、モモ、ヒメグルミが考えられた。また、周囲は水はけのよい乾燥した環境であり、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、ナデシコ科などの人里植物が生育していた。池にはイネ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属の水生植物を主にアヤメ属やユリ科などが生育し、水草の多い池沼の環境を示し、流水の影響も強く、たえず清水が入れ替わっていた。

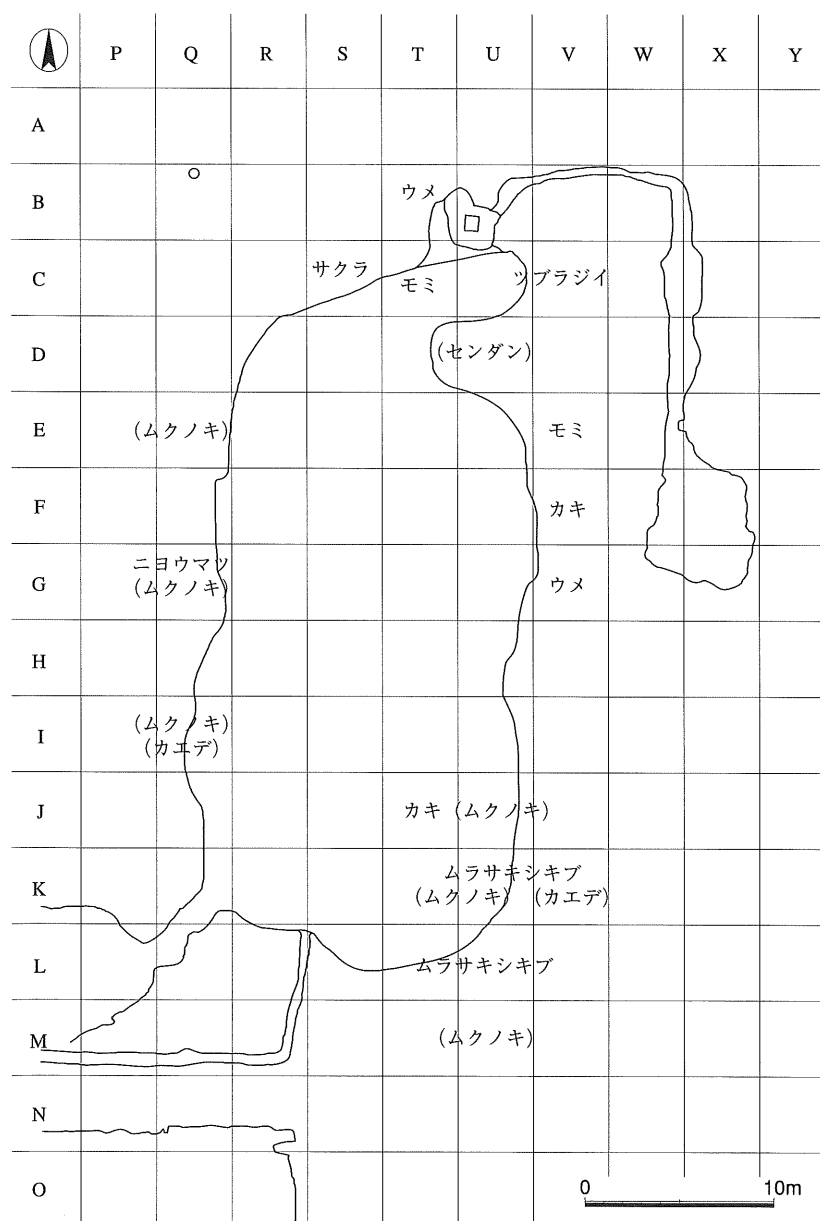


図70 池1周辺の植栽推定復元図

図示以外に植栽あるいは生育していた可能性のある植物 スギ・カシ・ツバキ・ゴヨウマツ(少ない)等の樹木・カヤツリグサ科(多い)・ヒルムシロ・コナギ・アヤメ属・イネ科・ユリ科等の水生植物・ナデシコ科・ザクロソウ・チドメグサ属・アブラナ科等の陸生植物

表20 花粉分析結果 1

分類群		泉 1			
学名	和名	上層	合せ口土師器皿内	中層	下層
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Abies</i>	モミ属	1	11	4	2
<i>Picea</i>	トウヒ属	1			
<i>Tsuga</i>	ツガ属	4	5	2	5
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	15	19	17	12
<i>Pinus subgen. Haploxylon</i>	マツ属単管束亜属	1			
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	15	35	36	15
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ		2		1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	6	9	3	2
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	1			
<i>Juglans</i>	クルミ属	1		1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		1	1	
<i>Betula</i>	カバノキ属	2		1	2
<i>Corylus</i>	ハシバミ属			1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1	1		1
<i>Castanea crenata</i>	クリ	2	1		
<i>Castanopsis</i>	シイ属	6	5	11	5
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	1		
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	6	5	6	3
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	22	15	17	12
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1	2	1	1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	2	7	4	1
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ		1		
<i>Acer</i>	カエデ属	3	2		1
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属			1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	7	7	8	
Leguminosae	マメ科		1		
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科	131	171	228	142
<i>Oryza type</i>	イネ属型		2		1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	29	34	42	29
<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ				1
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	5	5	2	1
<i>Iris</i>	アヤメ属		1	2	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	5	3	2	3
<i>Rumex</i>	ギンギン属	1	1	3	3
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	8	8	10	16
Caryophyllaceae	ナデシコ科	6	4	7	3
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属	2	3	1	1
Cruciferae	アブラナ科	7	9	8	1
<i>Vigna</i>	ササゲ属	1		1	
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科	6	12	13	13
Apiodeae	セリ亜科	1		1	1
<i>Plantago</i>	オオバコ属	2	2		6
Lactuoidaeae	タンポポ亜科	3	1	1	2
Asteroidaeae	キク亜科	3	6	7	9
<i>Xanthium</i>	オナモミ属	1			1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	27	25	38	54
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ		1		
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	10	18	6	10
Trilate type spore	三条溝胞子	10	9	10	6
Arboreal pollen	樹木花粉	91	122	106	63
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	7	8	8	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	239	288	366	287
Total pollen	花粉総数	337	418	480	350
	試料1cm ² 中の花粉密度	3.2 × 10 ⁻⁴	2.0 × 10 ⁻⁴	5.2 × 10 ⁻⁴	3.8 × 10 ⁻⁴
Unknown pollen	未同定花粉	2	2	1	5
Fern spore	シダ植物胞子	20	27	16	16
Helminth eggs	寄生虫卵				
<i>Ascaris</i>	回虫卵		1		
<i>Trichuris</i>	鞭虫卵	1			2
<i>Fasciola</i>	肝蛭類卵				1
Total	計	1	1	0	3
	試料1cm ² 中の寄生虫卵密度	2.4 × 10 ⁻⁴	2.4 × 10 ⁻⁴	0.0 × 10 ⁻⁴	8.1 × 10 ⁻⁴
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)

表21 花粉分析結果 2

学名	分類群	和名	I		II			III		IV	
			上	下	上	中	下	上	下	上	下
Arboreal pollen		樹木花粉									
Podocarpus		マキ属				1					
Abies		モミ属	3	3	7	10	2	5	2	6	5
Tsuga		ツガ属	1		2	2	3	3	5	6	3
Pinus subgen. Diploxylon		マツ属短針葉系亜属	31	10	36	19	25	40	28	54	37
Pinus subgen. Haploxylon		マツ属単針葉系亜属							1		
Cryptomeria japonica		スギ	39	21	40	33	32	39	33	66	27
Sciadopitys verticillata		コウヤマキ	1	1	3	1	1	3		2	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	12	10	3	4	14	11	14	11	1
Myrica		ヤマモミ属		1							
Juglans		クルミ属					3	2	1		
Pterocarya rhoifolia		サワグルミ		1	1	3	2			1	2
Alnus		ハンノキ属			2	2	1				
Betula		カバノキ属	1	1	2	5	3	4	1	4	3
Corylus		ハシバミ属				1					
Carpinus-Ostrya japonica		クマシデ属-アサダ	2	1	4	2	1		4	1	
Castanea crenata		クリ	2	2	4	6	5	4	2	2	2
Castanopsis		シイ属	10	11	13	30	17	28	18	10	16
Fagus		ブナ属	1	3	4			3	1	1	1
Quercus subgen. Lepidobalanus		コナラ属コナラ亜属	14	6	26	18	8	5	17	6	8
Quercus subgen. Cyclobalanopsis		コナラ属アカガシ亜属	28	25	38	34	52	61	34	54	26
Ulmus-Zelkova serrata		ニレ属-ケヤキ	1	3	1	1	2	1	1	1	1
Celtis-Aphananthe aspera		エノキ属-ムクノキ	44	29	39	43	93	60	37	41	32
Mallotus japonicus		アカメガシワ	1	4	4	4	9	9	6	6	3
Zanthoxylum		サンショウ属						1			
Melia		センダン属	1								
Phellodendron		キハダ属				1					
Ilex		モチノキ属				1	1				
Acer		カエデ属	6	5	4	3	8	7	7	7	7
Aesculus turbinata		トチノキ				1		1	1		
Vitis		ブドウ属	1		2						
Parthenocissus tricuspidata		ツタ		1							
Diospyros		カキ属	7	9	10	3	17	4	5	5	2
Clethra barbinervis		リョウブ									
Ericaceae		ツツジ科				1					
Sambucus-Viburnum		ニワトコ属-ガマズミ属		1	2		2	2	3		1
Distylium		イスノキ属									
Lonicera		スイカズラ属		1							
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉									
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	3	1	1	3	5	7	5	1	
Rosaceae		バラ科	1	1							1
Leguminosae		マメ科			1	1		1			
Araliaceae		ウコギ科		1	1	1		2		3	
Nonarboreal pollen		草本花粉									
Typha-Sparganium		ガマ属-ミクリ属						1			
Alisma		サジオモダカ属						1	2	1	
Sagittaria		オモダカ属				1		6	7		1
Gramineae		イネ科	148	101	177	115	97	179	121	219	171
Oryza type		イネ属型	11	3	3	5		1	1	7	2
Cyperaceae		カヤツリグサ科	38	30	42	41	40	47	64	51	19
Eriocaulon		ホシクサ属		1				1	1		
Anellema keisak		イボクサ	1		1	1					
Monochoria		ミズアオイ属	25	36	13	8	12	42	43	14	11
Iris		アヤメ属									
Polygonum		タデ属		3							
Polygonum sect. Persicaria		タデ属サナエタデ節	3		1		2	3	2	2	2
Rumex		ギンギン属	1	1							
Fagopyrum		ソバ属			2	1		1	1		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	4	1	6	11	8	8	9	18	4
Caryophyllaceae		ナデシコ科	6	2	1	5	1	3	1	4	1
Ranunculaceae		キンボウゲ属	4			1	1	1	2	1	4
Cruciferae		アブラナ科	10	7	4	8	1	11	4	10	4
Sanguisorba		ワレモコウ属	1	2	1		1				1
Vigna		ササゲ属	1		1						1
Ampelopsis brevipedunculata		ノブドウ		1							
Geranium		フウロソウ属									
Onagraceae		アカバナ科									
Haloragis-Myriophyllum		アリノトウグサ属-フサモ属	1	1	5	2	1	1	3		1
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科	4	2	8	2	2	5	5	8	3
Apiodeae		セリ亜科			1	1		1		2	
Labiatae		シソ科		1							
Solanaceae		ナス科									
Plantago		オオバコ属				1					
Valerianaceae		オミナエシ科									1
Lactuoidaeae		タンポポグサ科	1	2	8	2	3	3	2	2	1
Asteroidaeae		キク亜科	3	1		3	6	3	2	5	4
Xanthium		オナモミ属									
Artemisia		ヨモギ属	23	19	28	41	28	37	32	66	24
Carthamus tinctorius		ベニバナ		1	2	1		1	1	2	2
Fern spore		シダ植物胞子									
Monolate type spore		単条溝胞子	6	2	12	4	7	3	9	5	13
Trilate type spore		三条溝胞子	3	2	6	3	2	8	10	6	6
Arboreal pollen		樹木花粉	206	149	247	229	301	293	221	284	177
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	4	3	3	5	5	8	7	1	4
Nonarboreal pollen		草本花粉	285	215	304	250	203	356	303	412	257
Total pollen		花粉総数	495	367	554	484	509	657	531	697	438
		試料1cm ³ 中の花粉密度	4.8	7.9	8.0	7.0	4.9	7.1	1.1	6.1	1.4
			×10 ⁴ ×10 ⁴		×10 ⁴ ×10 ⁴ ×10 ⁴		×10 ⁴ ×10 ⁴	×10 ⁴ ×10 ⁴		×10 ⁴ ×10 ⁴	
Unknown pollen		未同定花粉	2	5	5	4	6	6	8	3	3
Fern spore		シダ植物胞子	9	4	18	7	9	11	19	11	19
Helminth eggs		寄生虫卵									
Ascaris		回虫卵	1					2			1
Trichuris		鞭虫卵	4	1		1	2		3		
Clonorchis sinensis		肝吸虫卵									
Metagonimus-Heterophyes		異形吸虫卵									
Capillaria		カビラリア									
Total		計	5	1	0	1	2	2	3	0	1
		試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	1.2	2.7	0.0	0.9	4.8	5.4	8.1	0.0	1.0
			×10 ⁴ ×10		×10 ⁴ ×10	×10 ⁴ ×10	×10 ⁴ ×10	×10 ⁴ ×10	×10 ⁴ ×10	×10 ⁴ ×10	
		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

V				VI		VII			VIII			IX	X
①	②	③	④	上	下	上	中	下	上	中	下		
5	3	4	2	4	5	2	3	1	3	3	4	1	5
5	5	2	2	2	4	2	3	2	1	2	4	1	2
26	19	16	22	17	15	27	30	24	11	25	5	35	10
32	35	27	34	32	51	28	29	49	25	25	25	35	25
1	1	1		2		2	2	1	1	2	1		
11	9	8	4	9	15	10	11	19	7	8	7	12	9
				1			1	3	1			1	1
2	1		2	1	2	1	1	1	1			4	
			1		2		1					1	
2	3	2	4		4	3	3	3	1	2		7	3
1													
1	3		4	2	3	7	5	3		3	3	1	1
2	1	2	2	2	3		1	20	1	1	2	1	
24	12	7	20	11	7	11	11	33	7	6	8	2	23
3	2	1	2			2	1	2	1	1		2	1
15	10	11	13	11	15	9	9	4	6	7	11	8	9
47	50	31	46	10	42	29	27	65	12	12	23	44	37
1	3	1		2	3		1	3		1	1		1
4	2	8	21	6	4	6	21	51	1	4	5	92	
		1				1	13	43	3	1	1	7	1
			1			1		1					
3	2	3	7	2		3	2	8		4	5	1	
1				1				1				7	3
	1												
2	5	4	16	3	1		2	3	1		1	2	
										1			
1				3	2		2	1				1	
	1											1	
	1												
1													
5	4	7	9	4	1	4	2	8	2	6	3	6	5
	2			1	1			1					
		1	2			1	1	14		1	2	2	
1													
1	1			1	2	3		1		1	2	2	1
192	269	166	164	170	341	325	126	124	161	139	127	85	137
		1		15	26	34	3	8	14	9	6	3	1
57	55	33	29	35	41	34	29	27	22	36	27	29	47
						1							
14	1	3		1	3	1			1		1		1
8	5	13	10	16	46	7	9	14	5	16	20	49	
										1			
1	3	1	3	2	4	1	2	1	1		3	4	
				1						1			
2	1	3		1	1	1	1	1	1	2	1	1	1
4	3	4	11	7	16	9	9	12	9	5	18	9	9
3	5	9	6	2	2	4	3	2		1	3		2
	1		2	3	10	7		4	1	2	2	1	
11	8	6	5	13	20	13	5	17	9	6	8		9
2			1										1
	2			1		1				1	1		
		3	1	1	1	2	3		1	2		1	1
4	19	6	5	4	9	12	2	11	4	1	4	5	8
2		2	1	2			2	2	2	1	1	4	3
						1							
												1	
											2		
2	2	2	2	4	2	4	2	2	1	2		4	2
5	4	3	1	5	2	3	5	7		7	2	2	4
						1	1						
43	61	35	37	21	17	21	25	51	9	19	25	52	46
1		1	1		2	1	2	2	1	2	2	1	1
15	8	11	4	5	6	8	6	10	5	5	4	5	8
15	3	5	6	13	12	6	1	8	5	7	6	5	16
189	169	129	203	121	178	143	178	345	84	108	106	266	131
5	6	8	11	5	2	5	5	24	2	7	5	8	5
352	443	289	280	305	545	485	231	287	244	254	257	254	274
546	618	426	494	431	725	633	414	656	330	369	368	528	410
6.1	9.9	1.1	6.5	4.7	4.6	1.1	8.9	7.9	1.1	4.9	1.1	7.6	4.6
$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^4$
4	5	4	5	2	3	6	6	12	3	4	4	5	1
30	11	16	10	18	18	14	7	18	10	12	10	10	24
1	2					2					2	2	
	1	4	2	2	2	1		4	2	1	2	3	
											1		
1													
1	3	4	2	2	2	3	0	6	2	1	5	5	0.0
0.7	3.0	1.3	6.6	5.4	4.8	3.3	0.0	1.8	2.0	3.3	4.5	4.5	0.0
$\times 10$	$\times 10$	$\times 10^4$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	
(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表22 花粉分析結果 3

学名	分類群	和名	土-2		土-3			土-4		
			1	2	1	2	3	1	2	3
Arboreal pollen		樹木花粉								
Podocarpus		マキ属			1	1				
Abies		モミ属	6	3	2	1	1	6	2	5
Tsuga		ツガ属	7	3	6	3	1	2	4	3
Pinus subgen. Diploxylon		マツ属 複雑管束亜属	12	25	20	24	33	30	29	33
Cryptomeria japonica		スギ	52	30	38	25	38	37	39	33
Sciadopitys verticillata		コウヤマキ	2		1	2	2		2	4
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イタイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	6	3	5	3	12	8	5	12
Salix		ヤナギ属								
Myrica		ヤマモモ属								
Juglans		クルミ属	3				1	1	1	1
Pterocarya rhoifolia		サワグルミ	1			1			1	
Platycarya strobilacea		ノグルミ								
Alnus		ハンノキ属			1	1			1	1
Betula		カバノキ属	4	1	3	2	1	4	5	7
Corylus		ハシバミ属								1
Carpinus-Ostrya japonica		クマシテ属-アサダ	3	1	2	2	3		1	3
Castanea crenata		クリ	6	4	4	8	7	12	10	11
Castanopsis		シイ属	26	10	15	8	13	6	17	5
Fagus		ブナ属	2		1	1	1	1	2	2
Quercus subgen. Lepidobalanus		コナラ属 コナラ亜属	18	6	9	2	10	11	7	6
Quercus subgen. Cyclobalanopsis		コナラ属 アカガシ亜属	105	45	30	38	39	54	47	57
Ulmus-Zelkova serrata		ニレ属-ケヤキ	2	3	1	2	1	2		1
Celtis-Aphananthe aspera		エノキ属-ムクノキ	5	109	15	32	43	55	110	76
Mallotus japonicus		アカメカシワ		3	4	13	4	32	3	6
Zanthoxylum		サンショウ属	1		1					
Melia		センダン属								
Phellodendron		キハダ属			1					
Rhus		ウルシ属				2				
Ilex		モチノキ属			1					1
Acer		カエデ属	1	1	2	1	10	4	9	2
Aesculus turbinata		トチノキ		1				1		1
Vitis		ブドウ属								
Camellia		ツバキ属				1				
Diospyros		カキ属		1	1	4	1	4	1	8
Oleaceae		モクセイ科								
Fraxinus		トネリコ属		4		1				2
Clethra barbinervis		リョウブ								
Ericaceae		ツツジ科			1					
Sambucus-Viburnum		ニワトコ属-ガマズミ属		4		1		1	5	2
Distylium		イスノキ属							1	
Lonicera		スイカズラ属								2
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	5	2	1	1	10	4	5	5
Rosaceae		バラ科				1				
Leguminosae		マメ科	2				2	3		
Araliaceae		ウコキ科		1	2	6		4		1
Nonarboreal pollen		草本花粉								
Typha-Sparganium		ガマ属-ミクリ属			1					
Alisma		サジオモダカ属	1							
Sagittaria		オモダカ属					2		1	1
Gramineae		イネ科	146	58	125	89	137	120	111	112
Oryza type		イネ属型	14	2	1	1		2	2	9
Cyperaceae		カヤツリグサ科	79	14	29	22	61	33	40	35
Eriocaulon		ボンクサ属							1	1
Anellema keisak		イボクサ								
Monochoria		ミズアオイ属		12	7	17	36	9	49	65
Liliaceae		ユリ科								
Iris		アヤメ属								
Polygonum		タデ属				1	1			1
Polygonum sect. Persicaria		タデ属 サナエタデ節	1		1	1	2	3	1	1
Rumex		キンキン属								1
Tagopyrum		ソバ属		1	1	2	1	1	1	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカサ科-ヒユ科	2	23	14	10	10	14	7	6
Portulaca oleracea		スベリヒユ属								
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1	1	2	1	1	6		
Ranunculus		キンボウゲ属			2	5	1	5		1
Cruciferae		アブラナ科		3	11	6	3	6	1	
Sanguisorba		ワレモコウ属	6	2			1		2	1
Vigna		ササゲ属					1		1	
Ampelopsis brevipedunculata		ノブドウ			1					
Onagraceae		アカバナ科					1		1	1
Haloragis-Myriophyllum		アリノトウグサ属-フサモ属	1	1		1	1	1	1	
Hydrocotyloideae		ナドメグサ亜科	1	3	4	3	4	7	8	1
Apiodeae		セリ亜科	4	3	2		1	1	4	1
Labiatae		シソ科								
Solanaceae		ナス科					1			
Plantago		オオバコ属						2		1
Valerianaceae		オミナエシ科	1							
Cucumis		キュウリ属			1					
Lactucoideae		タンポポ亜科	1		5	1	3	1	1	1
Asteroidae		キク亜科	1	2	4	2	9	6	5	6
Xanthium		オナモミ属		1				1	1	
Artemisia		ヨモギ属	75	29	33	41	40	43	31	24
Carthamus tinctorius		ベニバナ			7	2	1	2		
Fern spore		シダ植物胞子								
Monolate type spore		単条溝胞子	21	8	18	9	8	17	11	4
Trilate type spore		三条溝胞子	12	4	11	4	6	10	6	12
Arboreal pollen		樹木花粉	262	257	165	179	221	271	302	285
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	7	3	3	8	12	11	5	6
Nonarboreal pollen		草本花粉	334	155	251	206	317	264	269	270
Total pollen		花粉総数	603	415	419	393	550	546	576	561
		試料1cm ² 中の花粉密度	3.4	1.1	2.1	1.3	8.8	1.6	1.5	8.1
			$\times 10^4 \times 10^4$	$\times 10^4 \times 10^4$	$\times 10^4 \times 10^4 \times 10^4$	$\times 10^4 \times 10^4 \times 10^4$	$\times 10^4 \times 10^4 \times 10^4$	$\times 10^4 \times 10^4 \times 10^4$	$\times 10^4 \times 10^4 \times 10^4$	$\times 10^4 \times 10^4 \times 10^4$
Unknown pollen		未同定花粉	7	1	1	7	3	12	5	6
Fern spore		シダ植物胞子	33	12	29	13	14	27	17	16
Helminth eggs		寄生虫卵								
Ascaris		回虫卵	1				1	1		
Trichuris		鞭虫卵		1			1	2		
Metagonimus-Heterophyes		異形吸虫卵								
Capillaria		カビラリア						1		
Unknown eggs		不明虫卵								
Total		計								
		試料1cm ² 中の寄生虫卵密度	7.0	8.0	0.0	0.0	2.0	4.0	0.0	0.0
			$\times 10 \times 10$	$\times 10 \times 10$	$\times 10 \times 10$	$\times 10 \times 10$	$\times 10 \times 10$	$\times 10 \times 10$	$\times 10 \times 10$	$\times 10 \times 10$
		明らかな消花残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

[illegible]

表23 種実同定結果 1

学名	分類群 和名	部位	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
			下	下	下	下	④	下	下	下		
Herb	草本											
<i>Potamogeton</i>	ヒルムシロ属	果実			1				1	1		
Alismataceae	オモダカ科	種子						2			2	1
Gramineae	イネ科	穎		2	1		7	4				
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	1					1				
<i>Cyperus</i>	カヤツリグサ属	果実	2	1	7		12	14	3	13	1	
<i>Carex</i>	スゲ属	果実	2									
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	11		16		2	7	2	8		
<i>Aneilema keisak</i> Hassk.	イボクサ	種子		4	1		2	1		1		
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl var. <i>plantaginea</i> Solms Laub.	コナギ	種子	168	46	214	3	72	31	6	37	45	
Juncaceae	イグサ科	種子			1							
<i>Polygonum Thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	ミゾソバ	果実			1							
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	6				12					
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1		3	2	3					
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.	ザクロソウ	種子	2					1	3	5	5	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	9	86	9		60	10		4		
<i>Ranunculus sceletatus</i>	タガラシ	果実	31	48	25		39	37	4	18		
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	1	1			5		1			
<i>Viola</i>	スミレ属	種子						4		2		
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	果実								1		
Cruciferae	アブラナ科	種子		1			6	1				
Umbelliferae	セリ科	果実	1									
<i>Mosla</i>	イヌコウジュ属	果実		1			1	1				
Solanaceae	ナス科	種子					1					
<i>Eclipta prostrata</i> L.	タカサブロウ	果実						2		1		
Compositae	キク科	果実	5	1	1		5					
<i>Chara</i>	シャジクモ属	卵胞子	1	1	26							
Total	合計		241	192	306	5	227	116	20	93	52	0
Unknown	不明		1	0	0	0	0	0	0	0	53	0

堆積物100cm3水洗0.25mm篩

表24 種実同定結果 2

学名	分類群 和名	部位	泉 1			
			上層	合せ口土師器皿内	中層	下層
Arbor	樹木					
<i>Prunus salicina</i> Lindley	スモモ	核		1		
Herb	草本					
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	果実		1		
Gramineae	イネ科	穎	4	8	5	28
<i>Cyperus</i>	カヤツリグサ属	果実	60	19	57	30
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	6	5	12	8
<i>Aneilema keisak</i> Hassk.	イボクサ	種子	2		1	
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl var. <i>plantaginea</i> Solms Laub.	コナギ	種子		2	8	
<i>Polygonum Thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	ミゾソバ	果実	5	7	1	7
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	2		3	43
<i>Rumex</i>	ギンギン属	果実	2	1	2	
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子		2	3	5
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.	ザクロソウ	種子	33	29	27	16
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	50	41	90	67
<i>Ranunculus sceletatus</i>	タガラシ	果実	4	3	1	
<i>Viola</i>	スミレ属	種子	4	3	4	5
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	果実	2	8	15	21
Cruciferae	アブラナ科	種子	4	4	3	26
<i>Eclipta prostrata</i> L.	タカサブロウ	果実	1			
Total	合計		179	134	232	256
Unknown	不明		3	0	6	0

堆積物100cm3水洗0.25mm篩

表25 種実同定結果 3

学名	分類群		部位	池1 土9-4
	和名			
Arbor	樹木			
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	毬果	75	
		種子	5	
<i>Juglans</i> var. <i>cordiformis</i>	ヒメグルミ	核	1	
<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ	核	1	
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	
<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Sieb. et Zucc.	カラスザンショウ	種子	1	
<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	センダン	核	2	
<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子	1	
Herb	草本			
<i>Potamogeton</i>	ヒルムシロ属	果実	14	
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	果実	7	
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	1	
<i>Cyperus</i>	カヤツリグサ属	果実	2	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	
<i>Aneilema keisak</i> Hassk.	イボクサ	種子	4	
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl var. <i>plantaginea</i> Solms Laub.	コナギ	種子	121	
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	3	
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	6	
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.	ザクロソウ	種子	5	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	4	
<i>Ranunculus scleratus</i> L.	タガラシ	果実	32	
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	4	
<i>Eclipta prostrata</i> L.	タカサブロウ	果実	1	
Total	合計		292	

堆積物1000cm³水洗0.25mm篩

表26 種実同定結果 4

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	部位	個数
1	1	池1・2区CT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	4
1	2	池1・3区IT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	3	池1・3区GS	—		
1	4	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	5
1	5	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
1	6	井戸1・1区D42BJ	—		
1	7	池1・3区KU	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	4
1	8	泉1・2区B.TU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	9	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
1	10	池1・3区ES	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	11	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	6
1	12	泉1・2区BU	—		
1	13	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	5
1	14	池1・3区D.RS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	15	池1・3区CU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	16	池1・3区ERS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	17	池1・3区C.TU	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
1	18	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	6
1	19	池1・3区DE.S	—		
1	20	池1・3区C.TU	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	5
1	21	池1・3区CD.S	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	22	溝4・2区B~D.VW	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	23	池1・3区GS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	24	池1・3区CU	—		
1	25	池1・3区FS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	26	池1・3区G.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
1	27	池1・3区CS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	28	池1・3区K.TU	—		
1	29	池1・3区GR	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
1	30	池1・3区GS	—		
1	31	池1・3区FG.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	48
1	32	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	20
1	33	池1・3区DS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
1	34	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	71
1	35	池3・3区KL.K	—		
1	36	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
1	37	池1・3区KT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	38	泉1・2・3区BC.U	—		
1	39	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	20
1	40	池1・3区JS	—		
1	41	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
1	42	池1・3区ERS	—		
1	43	池1・3区CT	—		
1	44	池1・3区CS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
1	45	池1・3区J.ST	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
1	46	池1・3区ERS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
1	47	土塙1・3区FG.UV	ウメ <i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核	1
1	48	池1・3区I~K.Q	—		
2	1	池1・3区HR	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
2	2	池1・3区C.TU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
			ウメ <i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核	2
2	3	池1・3区JK.S	—		
2	4	池1・3区CU	—		
2	5	池1・3区K.TU	—		
2	6	池1・3区ES~U	—		
2	7	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	35
2	8	池1・3区ERS	—		
2	9	池1・3区L.TU	—		
2	10	泉1・2区BU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
2	11	池1・3区KU	—		
2	12	土塙1・3区FG.U	—		
2	13	池1・3区FG.U	—		
2	14	池1・3区JU	—		
2	15	池1・3区JU	—		
2	16	池1・3区E~G.T	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
2	17	池1・3区KT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
2	18	池1・3区KU	—		
2	19	池1・3区GS	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
2	20	池1・3区HS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
2	21	池1・3区EF.S	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
2	22	池1・3区GT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
2	23	池1・3区J.TU	—		
2	24	池1・3区KS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	部位	個数
2	25	池1・3区HR	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
			ウメ <i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核	1
2	26	池1・3区FG.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
2	27	池1・3区K.TU	—		
2	28	池1・3区ET	—		
2	29	池1・3区E.TU	—		
2	30	池1・3区LT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
2	31	池1・3区DT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
2	32	池1・3区EU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
2	33	池1・3区KS	—		
2	34	耕作溝・3区EF.B	—		
2	35	池1・3区GS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
2	36	池1・3区CT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
2	37	泉1・2区B.TU	不明植物遺体片	堅果片	1
2	38	第1層・3区FG.U	—		
2	39	耕作溝・3区HI.B	—		
2	40	泉1・2区BU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
2	41	池1・3区KR	—		
2	42	耕作溝・7区Q.YA	—		
2	43	石敷遺構1・3区G.YA	—		
2	44	池1・3区LS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
2	45	池2・3区LP	—		
2	46	池1・3区GQ	—		
2	47	池1・3区KP	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
2	48	池1・3区DS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
2	49	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	5
2	50	池1・3区CU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
3	1	池1・3区JR	—		
3	2	池1・3区JT	—		
3	3	池1・3区IU	—		
3	4	池1・3区CU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
3	5	池1・3区JQ	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
3	6	池1・3区KU	—		
3	7	池1・3区JU	—		
3	8	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	25
3	9	池1・3区CT	—		
3	10	池1・3区FG.S	—		
3	11	池1・3区IT	—		
3	12	池1・3区I.JST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
3	13	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	47
3	14	池1・3区GS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
3	15	池1・3区JK.S	—		
3	16	池1・3区C.TU	—		
3	17	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
3	18	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
3	19	池1・3区CU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	4
3	20	池1・3区ET	—		
3	21	池1・3区E.TU	—		
3	22	池1・3区CU	—		
3	23	泉1・2区BU	—		
3	24	池1・3区CS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
3	25	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	25
3	26	池1・3区CU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
			ウメ <i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核	1
4	1	池1・3区FS	—		
4	2	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	33
4	3	池1・3区FS	—		
4	4	池1・3区FS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
4	5	池1・3区E.RS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
4	6	池1・3区ES	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
4	7	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	16
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
4	8	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	39
4	9	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
4	10	池1・3区DE.S	—		
4	11	池1・3区ES	—		
4	12	池1・3区JK.S	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
4	13	池1・3区C.TU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
4	14	池1・3区KU	—		
4	15	池1・3区FG.U	—		
4	16	池1・3区FG.U	—		
4	17	第1層・3区S.RS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
4	18	池1・3区DT	—		
4	19	池1・3区JU	—		
4	20	池1・3区L.ST	—		
4	21	池1・3区ET	—		
4	22	池3・3区O.OP	—		
4	23	池1・3区HI.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	部位	個数
4	24	池1・3区L.TU	—		
4	25	池1・3区JK.U	—		
4	26	池1・3区K.ST	—		
4	27	池1・3区FT	—		
4	28	池1・3区KU	—		
4	29	池1・3区KU	—		
4	30	池1・3区KU	—		
4	31	池1・3区FG.U	—		
4	32	池1・3区EG.T	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	10
4	33	池1・3区ET	—		
4	34	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	8
4	35	池1・3区FG.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
4	36	池1・3区FU	—		
4	37	池1・3区GT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
4	38	池1・3区FR	—		
4	39	池1・3区CD.RS	—		
4	40	池1・3区FT	—		
5	1	池1・3区GT	—		
5	2	池1・3区H.QR	—		
5	3	池1・3区FG.U	—		
5	4	池1・3区GR	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
5	5	池1・3区EST	—		
5	6	池1・3区KU	—		
5	7	池1・3区JU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	8
5	8	池1・3区E.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
5	9	池1・3区JU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	11
5	10	池1・3区J.ST	—		
5	11	池1・3区J.UV	—		
5	12	池1・3区DS	—		
5	13	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
5	14	池1・3区CD.S	—		
5	15	池1・3区CS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	4
5	16	野薔・3区EB	—		
5	17	池1・3区DS	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
5	18	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	5
5	19	池1・3区JT	—		
5	20	井戸2・4区D52CD.UV	—		
5	21	池1・3区EF.S	—		
5	22	池1・3区DS	—		
5	24	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	24
5	25	池1・3区JK.U	—		
5	26	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
5	27	池1・3区HT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	4
5	28	池1・3区JK.U	—		
5	29	池1・3区JT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
5	30	池1・3区I.ST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
5	31	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	13
5	32	池1・3区HR	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
5	33	池1・3区DE.T	—		
5	34	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
5	35	池1・3区ER	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
5	36	池1・3区HT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
5	37	池1・3区H.ST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	10
5	38	池1・3区ER	—		
5	39	池1・3区HT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
5	40	池1・3区HK	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	45
5	41	池1・3区E.RS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
5	42	池1・3区G.QR	—		
5	43	池1・3区GH.S	—		
5	44	池1・3区CD.T	—		
5	45	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
5	46	池1・3区JU	—		
5	47	池1・3区ET	—		
5	48	池1・3区KT	—		
5	49	池1・3区ER	—		
5	50	池1・3区JK.ST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
5	51	池1・3区JU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
5	52	池1・3区LU	—		
5	53	池1・3区K.TU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
5	54	池1・3区DR	—		
5	55	池1・3区DR	—		
5	56	池1・3区GH.T	—		
5	57	池1・3区JU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
5	58	池1・3区ET	—		
5	59	池1・3区JU	—		
5	60	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	31
5	61	池1・3区ES	—		
5	62	池1・3区JT	—		
5	63	池1・3区不明	—		

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	部位	個数
5	64	池1・3区DR	—		
5	65	池1・3区JW	—		
6	1	池1・3区FS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
6	2	池1・3区K.TU	—		
6	3	池1・3区IU	—		
6	4	池1・3区ER	—		
6	5	池1・3区DS	—		
6	6	池1・3区GR	—		
6	7	池1・3区ES	—		
6	8	池1・3区H.ST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
6	9	池1・3区JU	—		
6	10	池1・3区EU	—		
6	11	池1・3区DS	—		
6	12	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
6	13	池1・3区HR	—		
6	14	池1・3区ET	—		
6	15	池1・3区IR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	46
		モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核	2
6	16	池1・3区F.S~U	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
6	17	池1・3区IR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	17
		モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核	2
6	18	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	8
6	19	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
		モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核	1
6	20	池1・3区IR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	6
		モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核	1
6	21	池1・3区KR	—		
6	22	池1・3区F.TU	—		
6	23	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	95
		ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura		核	1
6	24	池1・3区FR	—		
6	25	池1・3区F.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
6	26	池1・3区FR	—		
6	27	池1・3区FS	—		
6	28	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	5
6	29	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
		ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura		核	2
		モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核	1
6	30	池1・3区FU	—		
6	31	池1・3区F.RS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
6	32	池1・3区FR	—		
6	33	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	5
6	34	池1・3区ET	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
6	35	池1・3区F.S~U	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
7	1	池1・3区DT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
7	2	池1・3区GS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	12
7	3	池1・3区JT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	13
7	4	池1・3区F.S~U	ウメ <i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核	1
7	5	池1・3区GS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
7	6	池1・3区HR	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
		マツ属複維管束 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		毬果	68
		モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核	2
7	7	池1・3区GS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
		モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核	1
7	8	池1・3区FS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	11
		モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核	1
7	9	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
7	10	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	24
7	11	池1・3区JK.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	8
7	12	池1・3区KT	—		
7	13	池1・3区G.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
7	14	池1・3区DS	—		
7	15	池1・3区I.TU	—		
7	16	池1・3区C.TU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	3
7	17	池1・3区KT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
7	18	池1・3区C.TU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
7	19	池1・3区JT	—		
7	20	池1・3区E.ST	—		
7	21	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	30
		モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核	1
		ウメ <i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.		核	1
7	22	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	22
		モモ <i>Prunus persica</i> Batsch		核	6

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	部位	個数
7	23	池1・3区ER	スモモ <i>Prunus salicina</i> Lindley	核	1
			マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
			サクラ属サクラ節 <i>Prunus</i> L. Sect. <i>Pseudocerasus</i>	核	1
			センダン <i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	核	1
7	24	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	37
7	25	池1・3区ET	—		
8	1	池1・3区C.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
8	2	池1・3区GH.S	—		
8	3	池1・3区D.RS	—		
8	4	池1・3区ET	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
8	5	池1・3区D.ST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
8	6	池1・3区D.ST	—		
8	7	池1・3区K.ST	—		
8	8	池1・3区GH.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
8	9	池1・3区ES	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
8	10	池1・3区ES	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
8	11	池1・3区DES	—		
8	12	池1・3区ES	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
8	13	池1・3区ES	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	6
8	14	池1・3区D.TU	—		
8	15	池1・3区I.TU	—		
8	16	池1・3区KU	—		
8	17	池1・3区C.ST	—		
8	18	池1・3区CD.RS	—		
8	19	池1・3区IU	—		
8	20	池1・3区E.TU	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
8	21	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	6
8	22	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	7
8	23	池1・3区D.ST	—		
8	24	池1・3区DS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
8	25	池1・3区GU	—		
8	26	池1・3区EU	—		
8	27	池1・3区G.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	8
8	28	池1・3区CT	—		
8	29	池1・3区GT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	28
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
8	30	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	78
8	31	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	5
8	32	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
8	33	池1・3区FT	—		
8	34	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
8	35	池1・3区E.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			ヒメグルミ <i>Juglans</i> var. <i>Cordiformis</i>	核	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
8	36	池1・3区GH.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	11
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
8	37	池1・3区FU	—		
8	38	池1・3区KR	—		
8	39	池1・3区F.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
			センダン <i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	核	1
			マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
9	1	池1・3区FT	—		
9	2	池1・3区F.ST	—		
9	3	池1・3区JR	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
9	4	池1・3区KS	—		
9	5	池1・3区ER	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
			ウメ <i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核	1
9	6	池1・3区HS	—		
9	7	池1・3区DS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
9	8	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	30
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
9	9	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	9
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
9	10	池1・3区JT	—		
9	11	池1・3区IR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	5

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	部位	個数
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
9	12	池1・3区FT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
9	13	池1・3区JR	—		
9	14	池1・3区F.R.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
9	15	池1・3区F.R.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
9	16	池1・3区JR	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
9	17	池1・3区GH.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
9	18	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
9	19	池1・3区JS	—		
9	20	池1・3区F.R.S	—		
9	21	池1・3区FU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
9	22	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	13
9	23	池1・3区F.TU	—		
9	24	池1・3区CT	—		
9	25	池1・3区DS	—		
9	26	池1・3区KS	—		
9	27	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	10
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
9	28	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	13
9	29	池1・3区CD.TU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
9	30	池1・3区C.ST	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	6
9	31	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	14
9	32	池1・3区ER	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
9	33	池1・3区FG.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	9
9	34	池1・3区C.ST	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	8
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
9	35	池1・3区DS	—		
9	36	池1・3区FS	—		
9	37	池1・3区HT	—		
9	39	池1・3区GT	—		
9	40	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	60
9	41	池1・3区CT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	10
9	42	池1・3区ET	ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
9	43	池1・3区H.ST	—		
9	44	池1・3区D.RS	—		
9	45	池1・3区DR	—		
9	46	池1・3区DR	—		
9	47	池1・3区ER	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
9	48	池1・3区K.TU	—		
9	49	池1・3区HS	—		
9	50	池1・3区JK.TU	—		
10	1	池1・3区G.ST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
10	2	池1・3区GS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	8
10	3	池1・3区H.TU	—		
10	4	池1・3区C.ST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	3
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	10
10	5	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	7
10	6	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	26
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
10	7	池1・3区C.ST	—		
10	8	池1・3区GU	—		
10	9	池1・3区CS	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
10	10	池1・3区J.ST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	13
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
10	11	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
10	12	池1・3区HU	—		
10	13	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	11
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
10	14	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	67
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
10	15	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	64
			ヒメグルミ <i>Juglans mandshurica</i> Carr. var. <i>cordiformis</i> Kitamura	核	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
10	16	池1・3区GU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
10	17	池1・3区I.ST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	11
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
10	18	池1・3区I.TU	—		
10	19	池1・3区HU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
10	20	池1・3区ET	—		
10	21	池1・3区H.TU	—		
10	22	池1・3区I.ST	—		
10	23	池1・3区DS	—		
11	1	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	17
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	4
11	2	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	部位	個数
11	3	池1・3区GT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
11	4	池1・3区HT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
11	5	池1・3区IS	—		
11	6	池1・3区IR	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
11	7	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
11	8	池1・3区GS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
11	9	池1・3区GU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	6
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
11	10	池1・3区FT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
11	11	池1・3区ES	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	2
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
11	12	池1・3区HS	—		
11	13	池1・3区CT	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	4
			ウメ <i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc.	核	1
11	14	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
11	15	池1・3区IJ.ST	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	7
11	16	池1・3区ER	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	3
11	17	池1・3区CR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	7
11	18	池1・3区DS	—		
11	19	池1・3区GT	※試料ナシ		
11	20	池1・3区FU	—		
11	21	池1・3区ET	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
			センダン <i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	核	1
11	22	池1・3区FT	センダン <i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	核	1
11	23	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
11	24	池1・3区FS	—		
11	25	池1・3区ES	—		
11	26	泉1・2区BU	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	1
11	27	池1・3区IQ	—		
11	28	池1・3区HU	—		
11	29	池1・3区ER	—		
11	30	池1・3区CT	—		
11	31	池1・3区JT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	8
11	32	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	4
11	33	池1・3区GR	—		
11	34	池1・3区DR	—		
11	35	池1・3区D.ST	—		
11	36	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	20
11	37	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	3
11	38	池1・3区DR	—		
11	39	池1・3区DR	—		
11	40	池1・3区C.ST	—		
11	41	池1・3区CS	—		
11	42	池1・3区DR	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
11	43	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
11	44	池1・3区GT	—		
11	45	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	4
			モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	3
11	46	池1・3区K.TU	—		
11	47	池1・3区GT	—		
11	48	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	4
11	49	池1・3区DR	—		
11	50	井戸1・1区D43 B K	モモ <i>Prunus persica</i> Batsch	核	2
11	51	池1・3区ER	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1
11	52	池1・3区ER	—		
11	53	池1・3区FS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	毬果	1

表27 樹種同定結果

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	
1	1	池1・2区CT	—	
1	2	池1・3区IT	—	
1	3	池1・3区GS	—	
1	4	池1・3区IS	サクラ属	<i>Prunus</i>
1	5	池1・3区HR	—	
1	6	井戸1・1区D42BJ	—	
1	7	池1・3区KU	—	
1	8	泉1・2区B.TU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	9	池1・3区HS	—	
1	10	池1・3区ES	サクラ属	<i>Prunus</i>
1	11	池1・3区HS	—	
1	12	泉1・2区BU	—	
1	13	池1・3区HS	—	
1	14	池1・3区D.RS	サクラ属 マツ属複維管束亜属	<i>Prunus</i> <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	15	池1・3区CU	—	
1	16	池1・3区E.RS	—	
1	17	池1・3区C.TU	—	
1	18	池1・3区HS	—	
1	19	池1・3区D.E.S	サクラ属	<i>Prunus</i>
1	20	池1・3区C.TU	—	
1	21	池1・3区CD.S	—	
1	22	溝4・2区B~D.VW	—	
1	23	池1・3区GS	—	
1	24	池1・3区CU	—	
1	25	池1・3区FS	—	
1	26	池1・3区G.TU	—	
1	27	池1・3区CS	サクラ属	<i>Prunus</i>
1	28	池1・3区K.TU	—	
1	29	池1・3区GR	—	
1	30	池1・3区GS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	31	池1・3区FG.S	ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i> Linn.
1	32	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	33	池1・3区DS	ツガ マツ属複維管束亜属 サクラ属	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr. <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> <i>Prunus</i>
1	34	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	35	池3・3区KL.K	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	36	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	37	池1・3区KT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	38	泉1・2・3区BC.U	ツブラジイ ツブラジイ ツブラジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky <i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky <i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
1	39	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	40	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属 マツ属複維管束亜属 マツ属複維管束亜属 マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	41	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	42	池1・3区E.RS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	43	池1・3区CT	—	
1	44	池1・3区CS	—	
1	45	池1・3区J.ST	—	
1	46	池1・3区E.RS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
1	47	土壇1・3区FG.UV	—	
1	48	池1・3区I~K.Q	—	
2	1	池1・3区HR	カバノキ属 カバノキ属	<i>Betula</i> <i>Betula</i>
2	2	池1・3区C.TU	—	
2	3	池1・3区JK.S	—	
2	4	池1・3区CU	—	
2	5	池1・3区K.TU	樹皮	bark
2	6	池1・3区ES~U	—	
2	7	池1・3区HS	—	
2	8	池1・3区E.RS	—	
2	9	池1・3区L.TU	サクラ属	<i>Prunus</i>
2	10	泉1・2区BU	—	
2	11	池1・3区KU	ウメ	<i>Prunus mume</i> Sieb.et Zucc.
2	12	土壇1・3区FG.U	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
2	13	池1・3区FG.U	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
2	14	池1・3区JU	—	
2	15	池1・3区JU	—	
2	16	池1・3区E~G.T	—	

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)
2	17	池1・3区KT	—
2	18	池1・3区KU	—
2	19	池1・3区GS	—
2	20	池1・3区HS	ウツギ属 <i>Deutzia</i>
2	21	池1・3区EF.S	—
2	22	池1・3区GT	—
2	23	池1・3区J.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
2	24	池1・3区KS	—
2	25	池1・3区HR	—
2	26	池1・3区FG.S	—
2	27	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
2	28	池1・3区ET	—
2	29	池1・3区E.TU	サクラ属 <i>Prunus</i>
2	30	池1・3区LT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
2	31	池1・3区DT	—
2	32	池1・3区EU	モミ属 <i>Abies</i>
2	33	池1・3区KS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
2	34	耕作溝・3区EF.B	—
2	35	池1・3区GS	—
2	36	池1・3区CT	—
2	37	泉1・2区B.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
2	38	第1層・3区FG.U	—
2	39	耕作溝・3区HL.B	—
2	40	泉1・2区BU	—
2	41	池1・3区KR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
2	42	耕作溝・7区Q.YA	針葉樹 <i>conifer</i>
2	43	石敷遺構1・3区G.YA	—
2	44	池1・3区LS	—
2	45	池2・3区LP	—
2	46	池1・3区GQ	—
2	47	池1・3区KP	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
2	48	池1・3区DS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
2	49	池1・3区JS	散孔材 <i>diffuse-porous wood</i>
2	50	池1・3区CU	サクラ属 <i>Prunus</i>
3	1	池1・3区JR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	2	池1・3区JT	ツガ <i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
3	3	池1・3区IU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	4	池1・3区CU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	5	池1・3区Q	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	6	池1・3区KU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	7	池1・3区JU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	8	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	9	池1・3区CT	モミ属 <i>Abies</i>
3	10	池1・3区FG.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	11	池1・3区IT	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	12	池1・3区UJ.ST	ツガ <i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
3	13	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	14	池1・3区GS	ウツギ属 <i>Deutzia</i>
3	15	池1・3区JK.S	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	16	池1・3区C.TU	—
3	17	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	18	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	19	池1・3区CU	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	20	池1・3区ET	サクラ属 <i>Prunus</i>
3	21	池1・3区E.TU	—
3	22	池1・3区CU	—
3	23	泉1・2区BU	ヒサカキ属 <i>Eurya</i>
3	24	池1・3区CS	モミ属 <i>Abies</i>
3	25	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
3	26	池1・3区CU	ウメ <i>Prunus mume</i> Sieb.et Zucc.
4	1	池1・3区FS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	2	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	3	池1・3区FS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	4	池1・3区FS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	5	池1・3区E.RS	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	6	池1・3区ES	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	7	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4			マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名／学名)	
4	8	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	9	池1・3区K.TU	—	
4	10	池1・3区D.E.S	—	
4	11	池1・3区ES	散孔材	diffuse-porous wood
4	12	池1・3区JK.S	—	
4	13	池1・3区C.TU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	14	池1・3区KU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	15	池1・3区FG.U	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	16	池1・3区FG.U	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	17	第1層・3区S.RS	—	
4	18	池1・3区DT	—	
4	19	池1・3区JU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	20	池1・3区L.ST	—	
4	21	池1・3区ET	モミ属	<i>Abies</i>
4	22	池3・3区O.OP	—	
4	23	池1・3区HLS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	24	池1・3区L.TU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	25	池1・3区JK.U	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	26	池1・3区K.ST	広葉樹	broad-leaved tree
4	27	池1・3区FT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	28	池1・3区KU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	29	池1・3区KU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	30	池1・3区KU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	31	池1・3区FG.U	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	32	池1・3区EG.T	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	33	池1・3区ET	—	
4	34	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	35	池1・3区FG.S	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	36	池1・3区FU	—	
4	37	池1・3区GT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	38	池1・3区FR	—	
4	39	池1・3区CD.RS	—	
4	40	池1・3区FT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	1	池1・3区GT	モミ属	<i>Abies</i>
5	2	池1・3区H.QR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	3	池1・3区FG.U	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	4	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	5	池1・3区E.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	6	池1・3区KU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	7	池1・3区JU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	8	池1・3区E.TU	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	9	池1・3区JU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	10	池1・3区J.ST	—	
5	11	池1・3区J.UV	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	12	池1・3区DS	—	
5	13	池1・3区HR	—	
5	14	池1・3区CD.S	—	
5	15	池1・3区CS	—	
5	16	野壺・3区EB	—	
5	17	池1・3区DS	サクラ属	<i>Prunus</i>
5	18	池1・3区HS	—	
5	19	池1・3区JT	広葉樹	broad-leaved tree
5	20	井戸2・4区D52CD.UV	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	21	池1・3区EF.S	—	
5	22	池1・3区DS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	23	第1層・3区ET	広葉樹	broad-leaved tree
5	24	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	25	池1・3区JK.U	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	26	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	27	池1・3区HT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	28	池1・3区JK.U	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	29	池1・3区JT	—	
5	30	池1・3区I.ST	—	
5	31	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	32	池1・3区HR	—	
5	33	池1・3区DE.T	—	
5	34	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	35	池1・3区ER	—	
5	36	池1・3区HT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	37	池1・3区H.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	38	池1・3区ER	—	
5	39	池1・3区HT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	40	池1・3区HK	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	
5	41	池1・3区E.RS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	42	池1・3区G.QR	—	
5	43	池1・3区G.H.S	—	
5	44	池1・3区C.D.T	—	
5	45	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	46	池1・3区JU	—	
5	47	池1・3区ET	—	
5	48	池1・3区KT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	49	池1・3区ER	—	
5	50	池1・3区JK.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	51	池1・3区JU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	52	池1・3区LU	—	
5	53	池1・3区K.TU	—	
5	54	池1・3区DR	—	
5	55	池1・3区DR	—	
5	56	池1・3区G.H.T	サクラ属	<i>Prunus</i>
5	57	池1・3区JU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	58	池1・3区ET	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
5	59	池1・3区JU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	60	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	61	池1・3区ES	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	62	池1・3区JT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
5	63	池1・3区不明	—	
5	64	池1・3区DR	—	
5	65	池1・3区JW	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	1	池1・3区FS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	2	池1・3区K.TU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	3	池1・3区IU	—	
6	4	池1・3区ER	—	
6	5	池1・3区DS	—	
6	6	池1・3区GR	—	
6	7	池1・3区ES	—	
6	8	池1・3区H.ST	—	
6	9	池1・3区JU	サクラ属	<i>Prunus</i>
6	10	池1・3区EU	モミ属	<i>Abies</i>
6	11	池1・3区DS	—	
6	12	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	13	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	14	池1・3区ET	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
6	15	池1・3区IR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	16	池1・3区F.S~U	—	
6	17	池1・3区IR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	18	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	19	池1・3区HS	モミ属	<i>Abies</i>
6	20	池1・3区IR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	21	池1・3区KR	—	
6	22	池1・3区F.TU	モミ属	<i>Abies</i>
6	23	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	24	池1・3区FR	—	
6	25	池1・3区F.TU	モミ属	<i>Abies</i>
6	26	池1・3区FR	—	
6	27	池1・3区FS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	28	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	29	池1・3区FR	—	
6	30	池1・3区FU	—	
6	31	池1・3区F.RS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
6	32	池1・3区FR	—	
6	33	池1・3区HR	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
6	34	池1・3区ET	モミ属	<i>Abies</i>
6	35	池1・3区F.S~U	ヒサカキ属	<i>Eurya</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	1	池1・3区DT	モミ属	<i>Abies</i>
7	2	池1・3区GS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	3	池1・3区JT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	4	池1・3区F.S~U	—	
7	5	池1・3区GS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	6	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	7	池1・3区GS	—	
7	8	池1・3区FS	—	
7	9	池1・3区K.TU	—	
7	10	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	11	池1・3区JK.S	—	
7	12	池1・3区KT	—	
7	13	池1・3区G.TU	—	

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	
7	14	池1・3区DS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	15	池1・3区I.TU	ムラサキシキブ属	<i>Callicarpa</i>
7	16	池1・3区C.TU	—	
7	17	池1・3区KT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	18	池1・3区C.TU	草本	grass
7	19	池1・3区JT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	20	池1・3区E.ST	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
7	21	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	22	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	23	池1・3区ER	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	24	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
7	25	池1・3区ET	サクラ属	<i>Prunus</i>
8	1	池1・3区C.TU	サクラ属	<i>Prunus</i>
8	2	池1・3区GH.S	—	
8	3	池1・3区D.RS	—	
8	4	池1・3区ET	—	
8	5	池1・3区D.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	6	池1・3区D.ST	—	
8	7	池1・3区K.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	8	池1・3区GH.S	—	
8	9	池1・3区ES	—	
8	10	池1・3区ES	—	
8	11	池1・3区DE.S	—	
8	12	池1・3区ES	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	13	池1・3区ES	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	14	池1・3区D.TU	—	
8	15	池1・3区I.TU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	16	池1・3区KU	—	
8	17	池1・3区C.ST	—	
8	18	池1・3区CD.RS	—	
8	19	池1・3区IU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	20	池1・3区E.TU	—	
8	21	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	22	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	23	池1・3区D.ST	—	
8	24	池1・3区DS	サクラ属	<i>Prunus</i>
			モミ属	<i>Abies</i>
8	25	池1・3区GU	ヒノキ科	Cupressaceae
8	26	池1・3区EU	サクラ属	<i>Prunus</i>
8	27	池1・3区G.T	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	28	池1・3区CT	—	
8	29	池1・3区GT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	30	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	31	池1・3区FR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	32	池1・3区K.TU	—	
8	33	池1・3区FT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	34	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	35	池1・3区E.TU	モミ属	<i>Abies</i>
8	36	池1・3区GH.S	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
8	37	池1・3区FU	—	
8	38	池1・3区KR	—	
8	39	池1・3区F.TU	—	
8	40	池1・3区J.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	1	池1・3区FT	—	
9	2	池1・3区F.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	3	池1・3区JR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	4	池1・3区KS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	5	池1・3区ER	モミ属	<i>Abies</i>
9	6	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	7	池1・3区DS	—	
9	8	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	9	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	10	池1・3区JT	モミ属	<i>Abies</i>
9	11	池1・3区IR	—	
9	12	池1・3区FT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	13	池1・3区JR	—	
9	14	池1・3区F.RS	—	
9	15	池1・3区F.RS	—	
9	16	池1・3区JR	—	
9	17	池1・3区GH.S	—	
9	18	池1・3区FR	—	
9	19	池1・3区JS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	20	池1・3区F.RS	—	
9	21	池1・3区FU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	
9	22	池1・3区IS	—	
9	23	池1・3区F.TU	—	
9	24	池1・3区CT	—	
9	25	池1・3区DS	モミ属	<i>Abies</i>
9	26	池1・3区KS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	27	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	28	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	29	池1・3区CD.TU	—	
9	30	池1・3区C.ST	モミ属	<i>Abies</i>
9	31	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	32	池1・3区ER	—	
9	33	池1・3区FG.S	スノキ属	<i>Vaccinium</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	34	池1・3区C.ST	—	
9	35	池1・3区DS	サクラ属	<i>Prunus</i>
9	36	池1・3区FS	—	
9	37	池1・3区HT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	38	池1・3区GH.T	カヤ	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.
9	39	池1・3区GT	—	
9	40	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	41	池1・3区CT	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
9	42	池1・3区ET	サクラ属	<i>Prunus</i>
9	43	池1・3区H.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	44	池1・3区D.RS	—	
9	45	池1・3区DR	—	
9	46	池1・3区DR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
9	47	池1・3区ER	散孔材	diffuse-porous wood
9	48	池1・3区K.TU	—	
9	49	池1・3区HS	—	
9	50	池1・3区JK.TU	—	
10	1	池1・3区G.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
10	2	池1・3区GS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	3	池1・3区H.TU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	4	池1・3区C.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	5	池1・3区HS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	6	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	7	池1・3区C.ST	—	
10	8	池1・3区GU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	9	池1・3区CS	散孔材	diffuse-porous wood
10	10	池1・3区I.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	11	池1・3区HR	—	
10	12	池1・3区HU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	13	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	14	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	15	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	16	池1・3区GU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	17	池1・3区I.ST	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	18	池1・3区I.TU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	19	池1・3区HU	モミ属	<i>Abies</i>
10	20	池1・3区ET	モミ属	<i>Abies</i>
10	21	池1・3区H.TU	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
10	22	池1・3区I.ST	ヤナギ属	<i>Salix</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			ヒサカキ属	<i>Eurya</i>
10	23	池1・3区DS	—	
11	1	池1・3区FR	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	2	池1・3区GR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	3	池1・3区GT	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	4	池1・3区HT	カヤ	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			ヒサカキ属	<i>Eurya</i>
11	5	池1・3区IS	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	6	池1・3区IR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	7	池1・3区HR	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>

箱	袋	遺構・地区名	分類群 (和名/学名)	
11	8	池1・3区GS	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	9	池1・3区GU	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	10	池1・3区FT	モミ属	<i>Abies</i>
			ウメ	<i>Prunus mume</i> Sieb.et Zucc.
11	11	池1・3区ES	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	12	池1・3区HS	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
			マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	13	池1・3区CT	モミ属	<i>Abies</i>
11	14	池1・3区GR	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	15	池1・3区IJ.ST	ムラサキシキブ属	<i>Callicarpa</i>
11	16	池1・3区ER	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
11	17	池1・3区CR	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	18	池1・3区DS	—	
11	19	池1・3区GT	—	
11	20	池1・3区FU	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	21	池1・3区ET	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	22	池1・3区FT	—	
11	23	池1・3区HS	—	
11	24	池1・3区FS	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	25	泉1・2区BU	—	
11	26	池1・3区ES	—	
11	27	池1・3区IQ	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	28	池1・3区HU	サクラ属	<i>Prunus</i>
11	29	池1・3区ER	—	
11	30	池1・3区CT	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	31	池1・3区JT	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	32	池1・3区HR	—	
11	33	池1・3区GR	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	34	池1・3区DR	—	
11	35	池1・3区D.ST	—	
11	36	池1・3区HS	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	37	池1・3区FR	—	
11	38	池1・3区DR	—	
11	39	池1・3区DR	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	40	池1・3区C.ST	—	
11	41	池1・3区CS	—	
11	42	池1・3区DR	—	
11	43	池1・3区GR	ヒノキ科	Cupressaceae
11	44	池1・3区GT	—	
11	45	池1・3区FR	—	
11	46	池1・3区K.TU	—	
11	47	池1・3区GT	広葉樹	broad-leaved tree
11	48	池1・3区GR	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	49	池1・3区DR	—	
11	50	井戸1・1区D43 B K	—	
11	51	池1・3区ER	ツガ	<i>Tsuga sieboldii</i> Carr.
			マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
11	52	池1・3区ER	カヤ	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.
11	53	池1・3区FS	マツ属復維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>

表28 珪藻分析結果 1

種類	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
貧塩性種 (淡水生種)	下	下	下	下	④	下	下	下		
<i>Achnanthes hungarica</i>	1		7	1	4		1	2	1	
<i>Achnanthes lanceolata</i>	1				4			1		
<i>Amphora copulata</i>	96	100	71	70	104	29	35	25	61	
<i>Amphora montana</i>			1				1			
<i>Caloneis bacillum</i>								2	2	
<i>Caloneis hyalina</i>								3		
<i>Caloneis lauta</i>			1	9		1		5		2
<i>Caloneis silicula</i>			2		6	1	3	5	3	
<i>Cymbella aspera</i>				2	1					
<i>Cymbella cuspidata</i>	3	1		1						
<i>Cymbella gracilis</i>		2				1		1		
<i>Cymbella minuta</i>	21	26	27	49	23	11	29	12	23	2
<i>Cymbella naviculiformis</i>	1	1	22		8	12		8		
<i>Cymbella tumida</i>	2	6	4	5		4		4	5	
<i>Diploneis finnica</i>								1		
<i>Diploneis ovalis</i>	1			1		1			3	
<i>Eunotia curvata</i>						1				
<i>Eunotia exigua</i>					1					
<i>Eunotia formica</i>								1		
<i>Eunotia minor</i>	60	57	45	33	45	18	56	24	31	4
<i>Eunotia pectinails</i>	1	1	18	60	26	4	24	6	23	
<i>Eunotia praerupta</i>							3			
<i>Eunotia praerupta v. bideas</i>		4			1					
<i>Eunotia sp.</i>	1	1				5	2			
<i>Eunotia soleirolii</i>	8	28								
<i>Eunotia sudetica</i>			20	6	10	1	27	12	8	
<i>Fragilaria vaucheriae</i>			3					1	1	
<i>Gomphonema acuminatum</i>	1	5	3	3	1	1	2	1	3	
<i>Gomphonema affine</i>					12					
<i>Gomphonema angustatum</i>			6		22			7		
<i>Gomphonema angustum</i>	1									
<i>Gomphonema augur v. truncatum</i>			1							
<i>Gomphonema augur v. turris</i>		2		9			3	4	4	
<i>Gomphonema gracile</i>		1	13	1	8	14	5	9	5	
<i>Gomphonema minutum</i>						8				
<i>Gomphonema parvulum</i>	13	2	20	5	23	21	2	25	8	
<i>Gomphonema pseudoaugur</i>		9	8		6	8	2		1	
<i>Gomphonema pseudosphaerophorum</i>					1					
<i>Gomphonema quadripunctatum</i>	7	16								
<i>Gomphonema sp.</i>				1						
<i>Gomphonema truncatum</i>	1						1			
<i>Gyrosigma sp.</i>									1	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	2		4	9	4	2	5	1	1	
<i>Navicula americana</i>	5		1	3					1	
<i>Navicula bacillum</i>		1								
<i>Navicula capitata</i>					1					
<i>Navicula confervacea</i>	10	4	23	3	6	4	3	15	15	
<i>Navicula cryptotenella</i>			1						1	
<i>Navicula cuspidata</i>		3	2			1	1	1	1	
<i>Navicula decussis</i>	16		26	1	1	5		4	20	
<i>Navicula elginensis</i>			4		1	1	2	2	1	
<i>Navicula elginensis v. neglecta</i>			2		1	2		2		
<i>Navicula goeppertiana</i>								3		
<i>Navicula mutica</i>		3		2	3			1	2	
<i>Navicula muticoides</i>					3					
<i>Navicula pupula v. rectangularis</i>	6		11		13	3		9	2	
<i>Navicula tokyoensis</i>								1		
<i>Neidium affine</i>			2					1		
<i>Neidium bisulcatum</i>				1			1			
<i>Neidium iridis</i>					8	1				
<i>Nitzschia amphibia</i>									2	
<i>Pinnularia acrospiraeria</i>	1		6	1	6	5	1	6	1	
<i>Pinnularia anguata</i>	1		1							
<i>Pinnularia appendiculata</i>	1									
<i>Pinnularia bemptera</i>						1				
<i>Pinnularia borealis</i>	1	1	1	4	3	1	2	3		2
<i>Pinnularia brevicostata</i>	6		2	8	7	1		1	1	
<i>Pinnularia gibba</i>	12	4	15	15	49	22	5	12	7	
<i>Pinnularia interrupta</i>			1		1			1	2	
<i>Pinnularia mesolepta</i>			1							
<i>Pinnularia microstauron</i>			6	2	22	6	1	5	1	
<i>Pinnularia subcapitata</i>			3		7	4	2	10		
<i>Pinnularia sudetica</i>					1					
<i>Pinnularia viridis</i>	3	4	14	4	27	9	2	20	3	
<i>Stauroneis acuta</i>					6					
<i>Stauroneis anceps</i>	4	1	1	2	4	9	1	5	3	
<i>Stauroneis kriegeri</i>						2				
<i>Stauroneis laueburgiana</i>	4		2	3	23	2		1	1	
<i>Stauroneis nobilis</i>				1						
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	3		4	15	10			3	2	
<i>Surirella angustata</i>		1								
<i>Synedra ulna</i>	4	8	12	8	12	6	9	3	7	
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>		2			1		2			
中塩性種 (汽水生種)										
<i>Nitzschia plana</i>	1	2			3	1	2			
真・中塩性種 (海・汽水生種)										
<i>Cocconeis scutellum</i>				1						
<i>Fragilaria pulchella</i>							5		3	
合計	299	302	417	339	529	230	240	269	260	10
未同定	21	12	21	12	19	10	8	6	7	0
破片	956	1500	192	710	284	110	138	177	174	50
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	1.9	2.4	2.7	1.4	4.2	9.8	3.8	8.6	1.6	2.0
	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^3$
完形殻保存率 (%)	25.1	17.3	69.5	33.1	65.9	68.6	64.2	60.8	60.5	16.7

表29 珪藻分析結果 2

種類	泉 1			
	上層	合せ口土師器皿内	中層	下層
貧塩性種 (淡水生種)				
<i>Achnanthes hungarica</i>	9	6	1	1
<i>Achnanthes lanceolata</i>	1		1	1
<i>Amphora copulata</i>	1	3	1	
<i>Amphora montana</i>			1	
<i>Caloneis bacillum</i>		1		
<i>Caloneis lauta</i>			1	
<i>Caloneis silicula</i>	1	1		
<i>Cymbella aspera</i>			1	
<i>Cymbella gracilis</i>	1			
<i>Cymbella minuta</i>	3		1	1
<i>Cymbella naviculiformis</i>	2			
<i>Eunotia arcus</i>	3			
<i>Eunotia curvata</i>	42	9	16	20
<i>Eunotia formica</i>	10	1	5	4
<i>Eunotia lunaris</i>			1	
<i>Eunotia minor</i>	225	180	85	96
<i>Eunotia pectinails</i>		5	3	3
<i>Eunotia sudetica</i>			29	28
<i>Eunotia veneris</i>	14			
<i>Fragilaria vaucheriae</i>			8	4
<i>Frustulia rhomboides</i> v. <i>saxonica</i>				1
<i>Frustulia vulgaris</i>	1			
<i>Gomphonema angustatum</i>				6
<i>Gomphonema angustum</i>			3	
<i>Gomphonema augur</i> v. <i>turris</i>				1
<i>Gomphonema gracile</i>	58	17	11	3
<i>Gomphonema parvulum</i>	41	28	22	44
<i>Gomphonema pseudoaugur</i>	5	1		
<i>Gomphonema quadripunctatum</i>	11	12		
<i>Gomphonema truncatum</i>	2			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	1	2	18	5
<i>Meridion circulare</i> v. <i>constrictum</i>	1			
<i>Navicula arvensis</i>	2	3		
<i>Navicula capitata</i>		1		
<i>Navicula confervacea</i>			2	2
<i>Navicula cuspidata</i>	1			
<i>Navicula decussis</i>	1			1
<i>Navicula elginensis</i> v. <i>neglecta</i>	1	2		
<i>Navicula goeppertiana</i>			2	3
<i>Navicula mutica</i>	1	2	16	7
<i>Navicula muticoides</i>				1
<i>Navicula pupula</i>	5	3	1	
<i>Navicula pupula</i> v. <i>rectangularis</i>	1			
<i>Neidium affine</i>				3
<i>Neidium ampliatum</i>	3			
<i>Neidium iridis</i>				1
<i>Nitzschia brevissima</i>				1
<i>Pinnularia borealis</i>	1	1	4	5
<i>Pinnularia gibba</i>	17	7	2	6
<i>Pinnularia interrupta</i>				1
<i>Pinnularia microstauron</i>		4		
<i>Pinnularia subcapitata</i>	5	9	32	27
<i>Pinnularia viridis</i>	2	4	4	
<i>Stauroneis kriegerei</i>		1		1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	3			
<i>Surirella angustata</i>	1			
<i>Synedra rumpens</i>	17	11		
<i>Synedra rumpens</i> v. <i>familiaris</i>	1			
<i>Synedra ulna</i>	1		12	5
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>	4	2		
合 計	499	316	283	282
未同定	28	21	18	12
破片	417	284	90	83
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	4.8	3.0	9.1	9.0
	×10 ⁶	×10 ⁶	×10 ⁵	×10 ⁵
完形殻保存率 (%)	55.8	54.3	77.0	78.0

表30 珪藻分析結果 3

分類群	土-2		土-3		土-4		土-5		土-6		土-8		土-9	
	1	2	1	2	3	1	2	3	4	5	1	2	3	4
貧殖性種 (淡水生種)														
<i>Achnanthes exigua</i>														
<i>Achnanthes hungarica</i>			4	7		4		8	10	10	2	1	1	11
<i>Achnanthes inflata</i>														4
<i>Achnanthes lanceolata</i>			3	1				1	1	1				4
<i>Amphora copulata</i>	20	9	68	38	24	66	57	68	38	61	81	48	4	2
<i>Amphora montana</i>		1						4	1	2	2	1	1	1
<i>Caloneis byalina</i>		2	1										13	16
<i>Caloneis lauta</i>					2	2		2						
<i>Caloneis silicola</i>	1	1	1	3	1	3	5	10	4	6	3	2		11
<i>Caloneis</i> sp.														
<i>Coconeis plaecentula</i>														
<i>Cymbella cuspidata</i>						2		1				1	2	
<i>Cymbella mesiana</i>														
<i>Cymbella minuta</i>						1		1						
<i>Cymbella naviculiformis</i>			3	5	1	1	7	2	2	4	2	1	1	1
<i>Cymbella silicola</i>	9	5	23	11	20	15	17	8	19	30	18	19	8	2
<i>Cymbella tumida</i>	7	2	4	3	1	10	5	2	1	3	2		2	4
<i>Diploneis ovalis</i>			1											1
<i>Diploneis</i> sp.														
<i>Eunotia bitumaria</i>														
<i>Eunotia fallax</i>								1				5	2	5
<i>Eunotia minor</i>	9	17	78	30	51	40	52	57	62	96	67	57	16	14
<i>Eunotia monodon</i>						1	2						2	65
<i>Eunotia praeputia</i>	1													
<i>Eunotia serrata</i>														
<i>Eunotia soleirolii</i>	12	8	29	8	29	7	8	10	11	35	11	12	2	3
<i>Eunotia</i> sp.	1													1
<i>Fragilaria capucina</i>														
<i>Fragilaria thomboidea</i> v. <i>saxonica</i>														
<i>Fragilaria vulgaris</i>														
<i>Gomphonema acuminatum</i>	1	1	1	3	1	1	1	4	2	2	3	2	2	1
<i>Gomphonema affine</i>		1												
<i>Gomphonema angustatum</i>			1											
<i>Gomphonema augur</i>	2					2								
<i>Gomphonema augur</i> v. <i>turris</i>														
<i>Gomphonema gracile</i>	1	1	12	6	5	1	1	1	7	5	5	6	3	3
<i>Gomphonema minutum</i>		4	6	6	2	4	2	2	13	12	4	5	3	7
<i>Gomphonema parvulum</i>	1	7	9	2	4	10	5	10	7	16	10	2	3	4
<i>Gomphonema pseudoaugur</i>		1	8	4	2	5	9	3	10	18	11	7	3	3
<i>Gomphonema pseudosphaerophorum</i>	2													
<i>Gomphonema sphaerophorum</i>														
<i>Gomphonema</i> sp.														
<i>Gomphonema subtile</i>														
<i>Gomphonema truncatum</i>	1	5	1	4										
<i>Gyrodinium</i> sp.														
<i>Hantzschia amphioxys</i>														
<i>Navicula americana</i>	1	17	2	1	11	1	1	5	2	3	6	36	5	23
<i>Navicula capitata</i>														
<i>Navicula confervacea</i>	2	1	3	16	4	4	12	2	27	10	23	7	2	2
<i>Navicula contenta</i>														
<i>Navicula cryptocephala</i>														
<i>Navicula cryptotenella</i>														
<i>Navicula cuspidata</i>														
<i>Navicula decussis</i>														
<i>Navicula elginensis</i>														
<i>Navicula exigua</i>														
<i>Navicula goeppertiana</i>														
<i>Navicula kotschy</i>	1	1												
<i>Navicula laevissima</i>														

Navicula mutica	3	5		2	4	1	1	3		6	6	4	5	2	1	1	10	8	4	8									
Navicula muticoides									1																				
Navicula oblata																	5												
Navicula placentula			7	13	11		12	2	3	5									1	3									
Navicula pupula			6	1	4		3	1	1	1				1	1														
Navicula pusilla																			1	17									
Navicula sp.			2							3																			
Navicula tokyoensis																													
Navicula viridula v. rostellata									2																				
Neidium ampliatum						1			1	2						1			1	3									
Neidium binucleatum																				5									
Neidium iridis																													
Neidium sp.	1																												
Nitzschia amphibia						1		1	1	1									1	1									
Nitzschia clausii																				3									
Nitzschia palea																	3			5									
Nitzschia solita										4																			
Nitzschia sp.																	3												
Pinnularia acropachia		2	2	4		1	1	1	1	1										3									
Pinnularia borealis		2	2		2	3	2	2		3	2		1		4		3	2	2	4	1								
Pinnularia brevicostata			1		2	2	2		1	1																			
Pinnularia gibba		1	8	4	2	5	1	9	5	1	6	10	2	2	6	3													
Pinnularia interrupta													1	1	1				1	1									
Pinnularia lundii								2																					
Pinnularia major			1							1	2									1									
Pinnularia mesolepta																													
Pinnularia microstauron		1	5	5	2	3	12	21	4	5	9	10	8	3	5	9	10	1		2									
Pinnularia nodosa							1													1									
Pinnularia sp.	1																			8									
Pinnularia subcapitata		3	2	1			1	1	1	1			4	3	9	1	5	30	1	5									
Pinnularia viridis		2	5	5	3	3	2	4	1		3	12	2	3	4	3	1	1	1	2	36								
Rhoicosphenia abbreviata												1								1									
Rhopalodia gibberula			1																										
Stauroneis acuta								4																					
Stauroneis anceps			1				1					2			2	1				1									
Stauroneis laueburgiana			3	2	2	1	1	2	2	1	3	4																	
Stauroneis nobilis								1																					
Stauroneis phoenicenteron		4	6	2	5	1	5	4	1	3	3	2	1	1	2	1				4									
Stauroneis smithii																													
Stauroneis sp.	1																												
Surirella angusta																	8		35	1									
Surirella angustata																			1										
Surirella ovata																				2									
Synedra ulna		2	2	8	6	9	3	4	5	7	5	2	2		1	5	1												
Tabellaria fenestrata-flocculosa		1				2			1	3	2	1		11	1	37	18												
中塩性種 (汽水性種)																													
Nitzschia plana	1					1		2							1					1									
真・中塩性種 (海水・汽水性種)																													
Cocconeis scutellum	1																	1											
Grammatophora sp.																				1									
Nitzschia levidensis v. victoriae																													
合計	2	73	105	318	203	200	205	266	230	259	323	324	235	165	57	163	225	224	156	4	0	201	53	13	41	285	2	1	258
未測定	1	6	12	15	14	8	13	15	11	14	18	10	5	12	0	3	8	8	5	0	0	30	6	2	4	28	1	0	5
破片	13	146	118	175	94	182	269	122	266	147	166	155	163	86	38	131	95	70	150	9	10	67	61	40	57	57	3	0	101
試料 1 cm 中の観数密度	4.0	2.9	8.4	1.0	1.3	1.6	1.6	3.4	1.8	1.7	1.0	2.1	3.8	6.6	2.3	6.5	1.4	7.2	3.1	8.0	0.0	6.4	2.1	2.6	1.6	5.7	4.0	2.0	3.3
×10 ² ×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴
元形観保存率 (%)	-	35.1	49.8	65.6	69.8	53.3	44.8	69.7	47.5	65.0	67.3	68.3	59.6	67.3	60.0	55.9	71.0	76.8	51.8	-	-	77.5	49.2	27.3	44.1	84.6	-	-	72.3

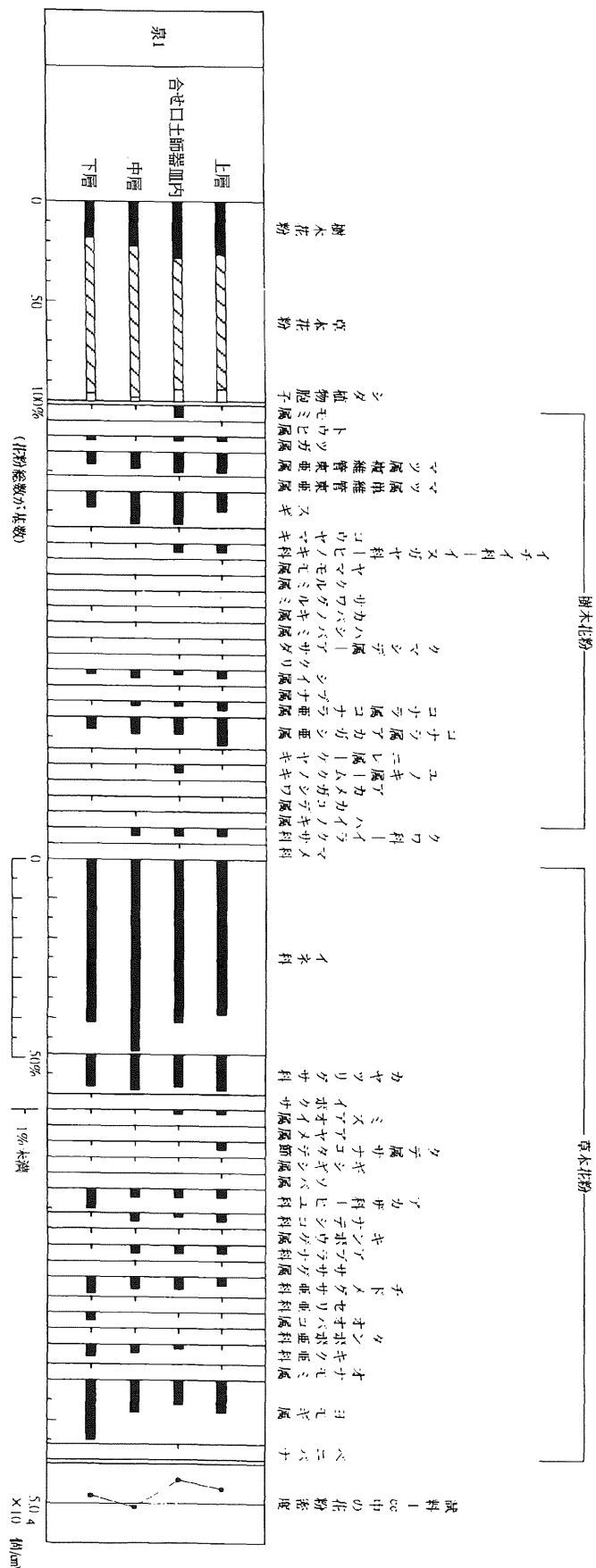


図72 花粉ダイアグラム 2

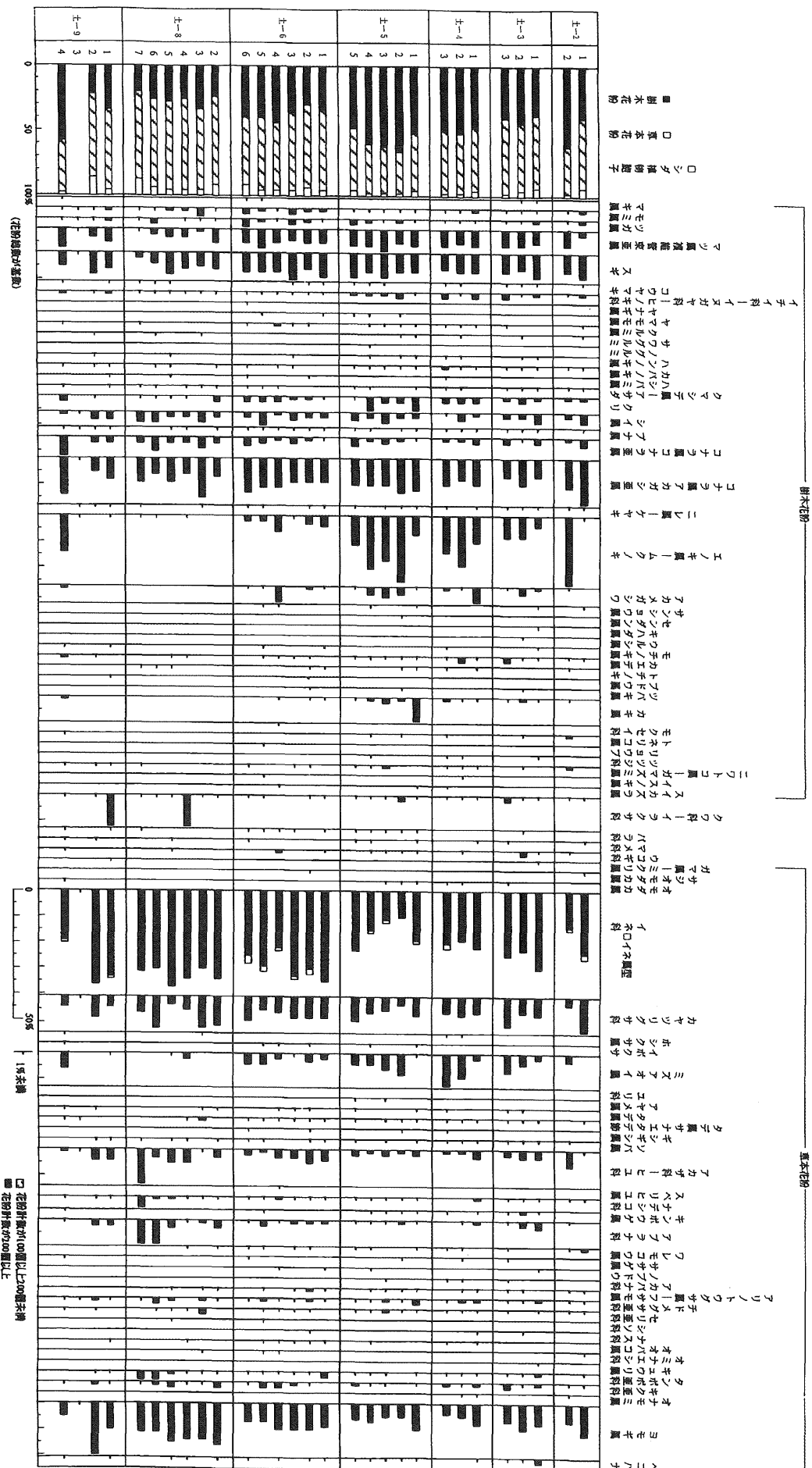


図73 花粉ダイアグラム 3

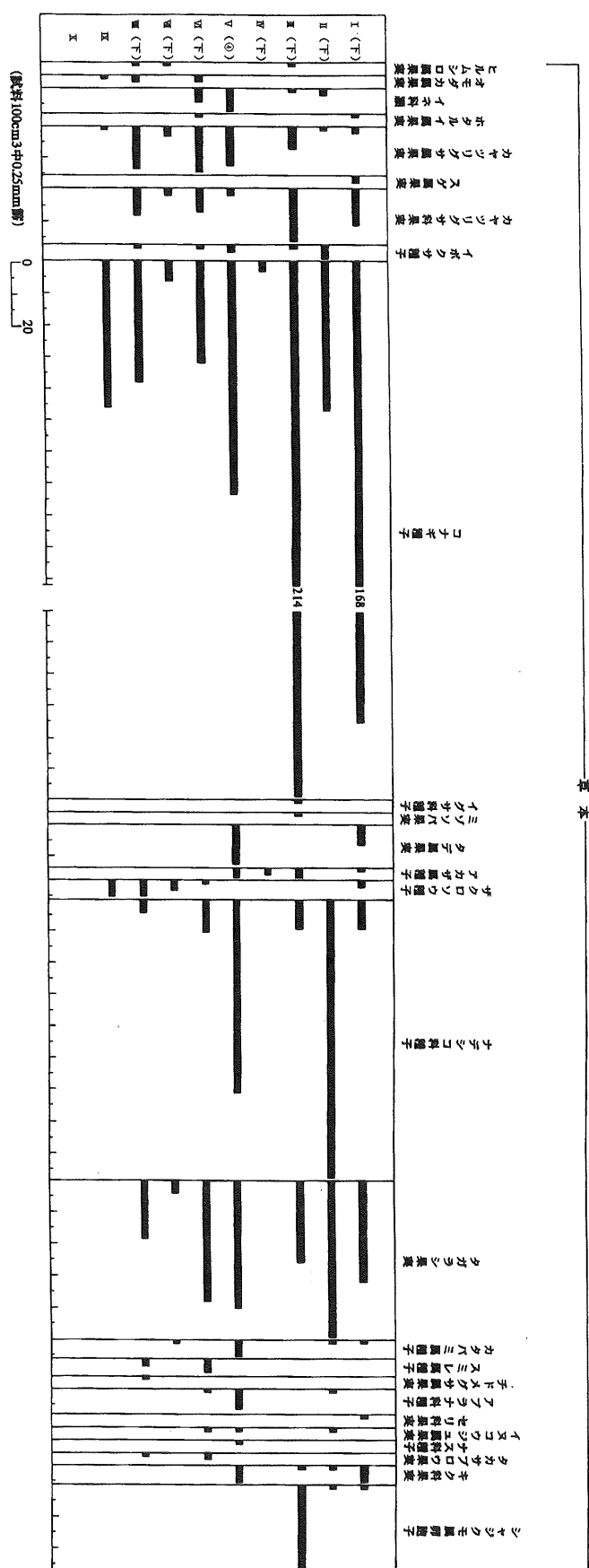


図74 種実ダイアグラム 1

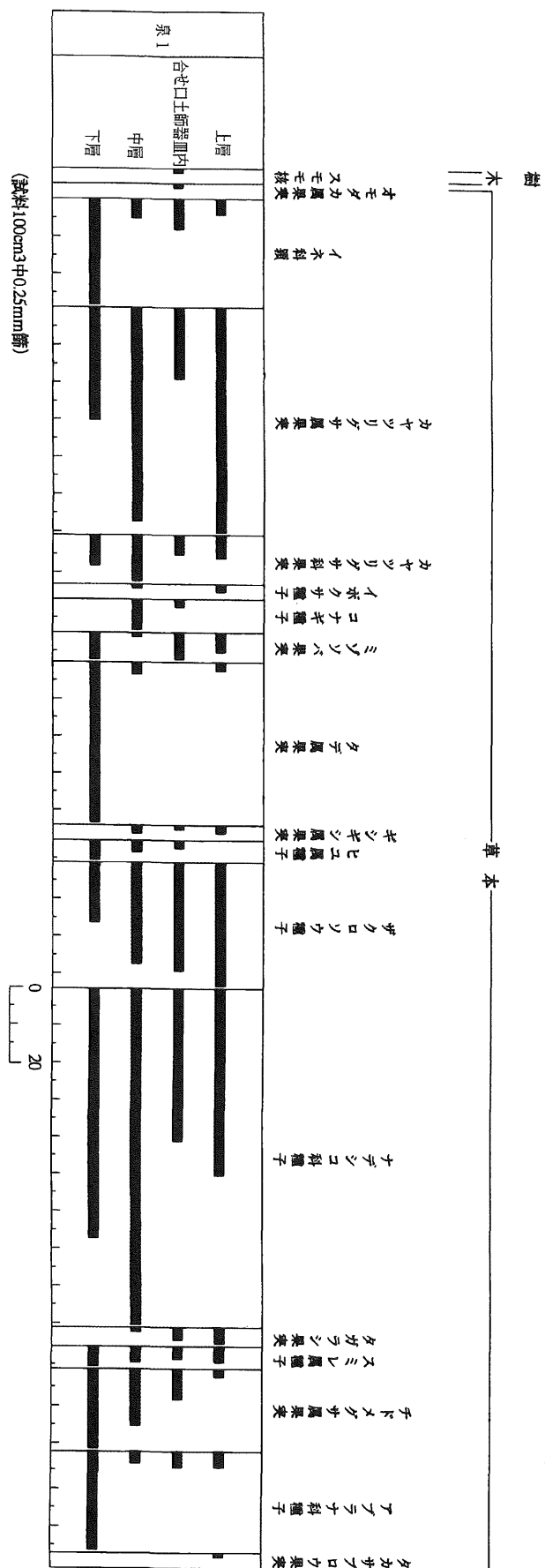


図75 種実ダイアグラム2

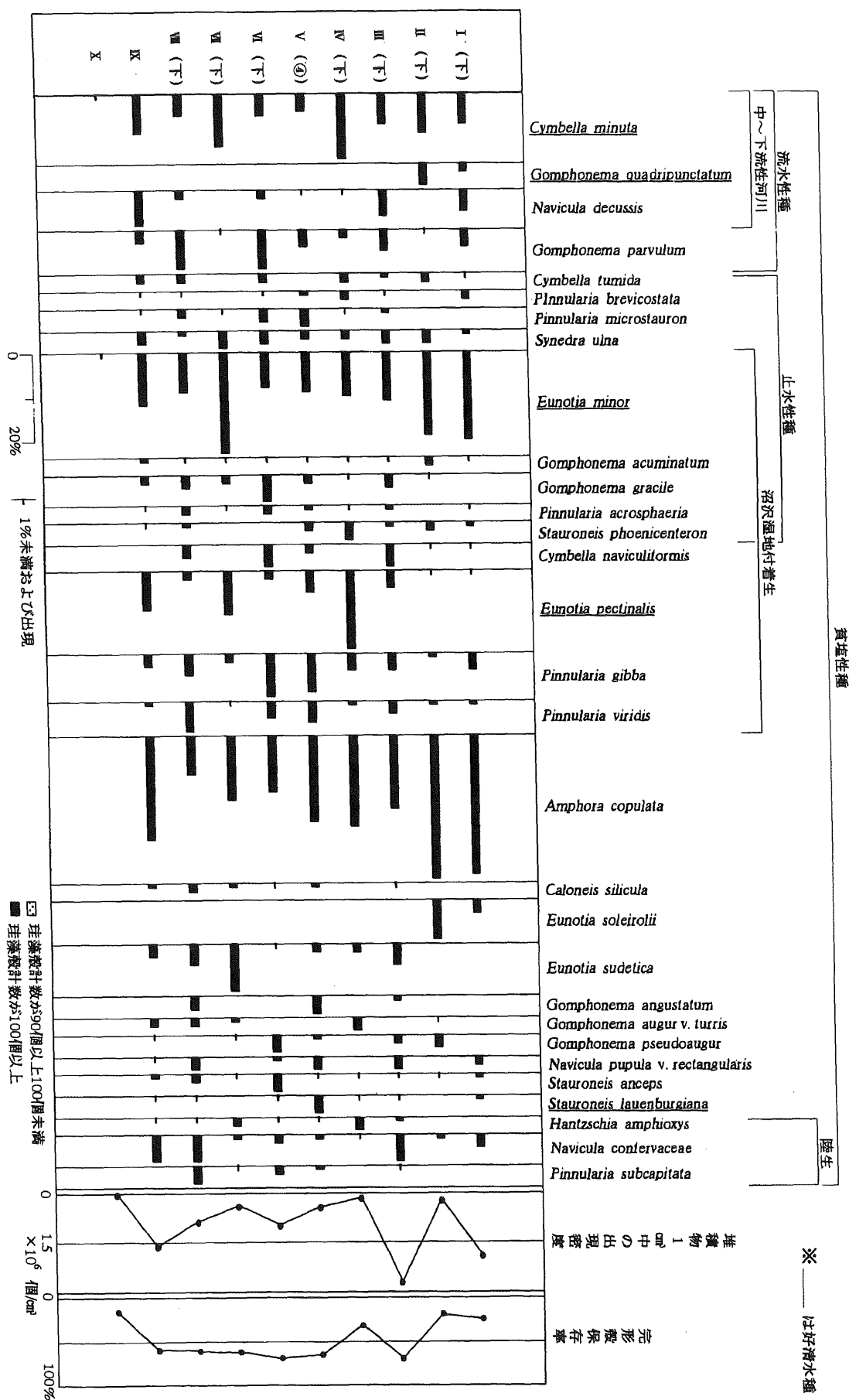
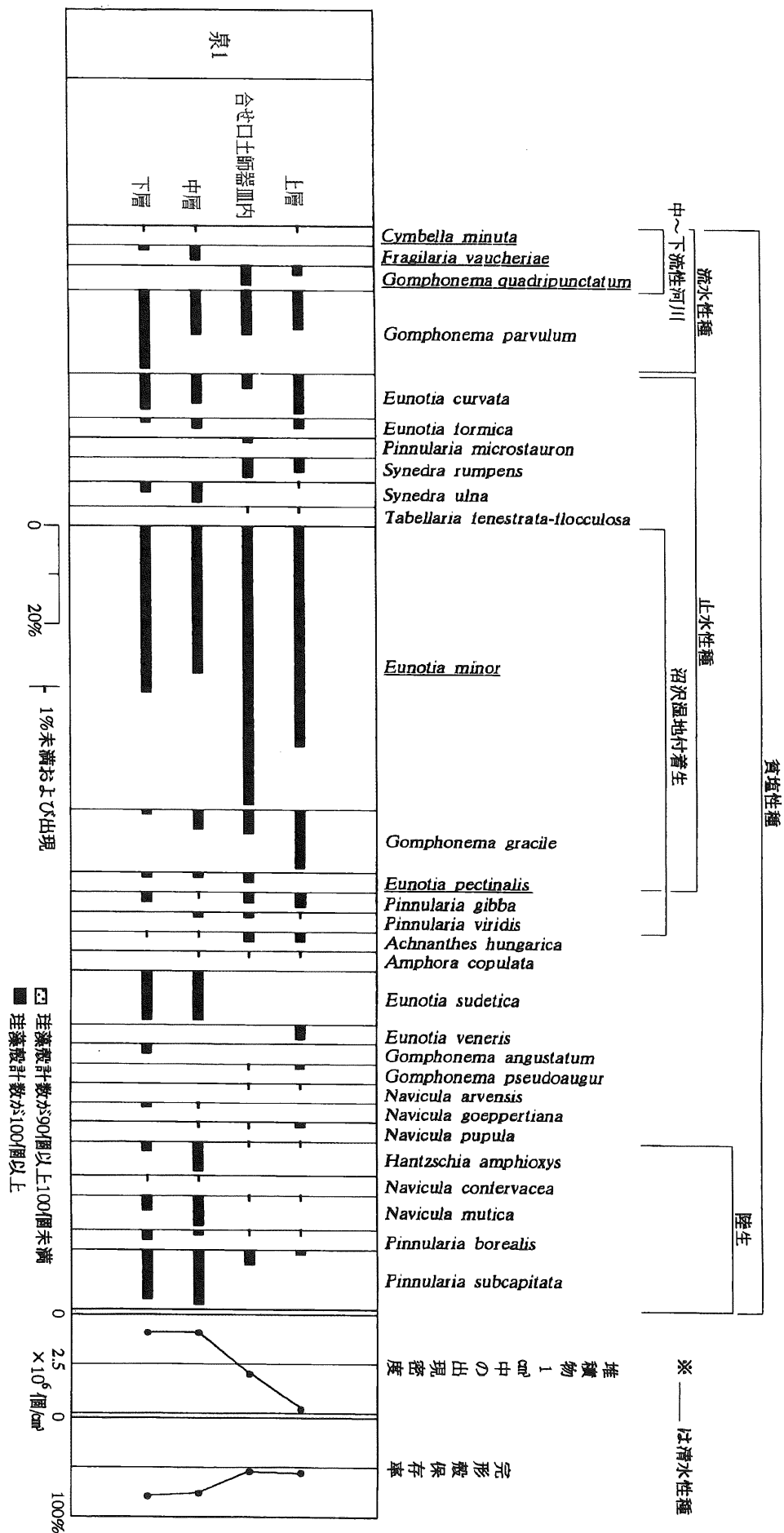


図76 主要珪藻ダイアグラム 1



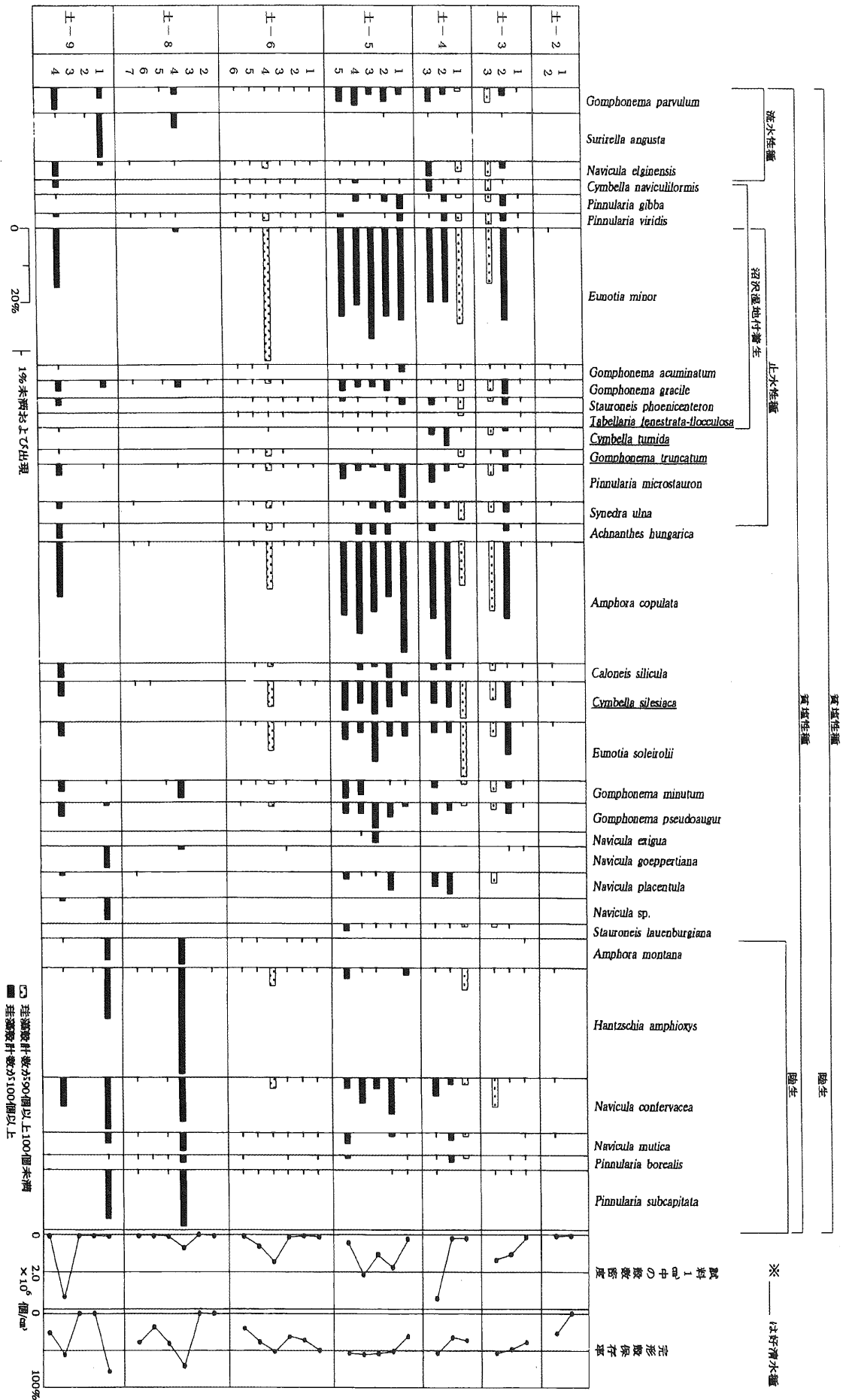


図78 主要珪藻ダイアグラム 3

参考文献

- 中村 純『花粉分析』古今書院 1973年 p.82-110.
- 金原正明「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店 1993年 p.248-262.
- 島倉巳三郎『日本植物の花粉形態』大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集 1973年 60p.
- 中村 純『日本産花粉の標徴』大阪自然史博物館収蔵目録第13集 1980年 91p.
- 中村 純「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13 1974年 p.187-193.
- 中村 純「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 1977年 p.21-30.
- 笠原安夫『日本雑草図説』養賢堂 1985年 494p.
- 南木睦彦「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナル』No.355 ニューサイエンス社 1992年 p.18-22.
- 南木睦彦「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編 第四紀試料分析法』東京大学出版会 1993年 p.276-283
- 金原正明「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル』No.409 ニューサイエンス社 1996年 p.15-19.
- 佐伯 浩・原田 浩「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 1985年 p.20-48.
- 佐伯 浩・原田 浩「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 1985年 p.49-100.
- 島地 謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 1988年 296p.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p.131-506.
- Patrick, Reimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Research Center.
- Patrick, Reimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- 小杉正人「陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－」『植生史研究』第1号 植生史研究会 1986年 p.29-44.
- 小杉正人「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 1988年 p.1-20.
- 安藤一男「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42 1990年 p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 1991年 p.23-45.

第5章 考 察

第1節 平安時代中期の邸宅

今回発見した庭園遺構を持つ宅地は、二条大路を北に、道祖大路を西に面する平安宮に近接した宅地であり、出土遺物や墨書土器の内容からも皇族あるいは高級貴族に深く関わっていたと推測できる。とくに、平安時代の庭園については絵巻物などからその優雅な姿が推測されていたが、実際の発掘調査では園池の一部分を発見するに留まっており、その実態については全く不明であった。今回の調査では平安時代中期における邸宅の園池と建物の関係がはじめて明らかとなり、非常に大きな成果を挙げることができたといえよう。ここでは調査所見から考察されるいくつかの問題点について、簡単に述べておきたい。

1 邸宅の規模について

まず問題となるのは、十六町が1町規模の宅地であったかどうかである。宅地北半では園池を中心とし、それに望むように建物が配置されている状況が窺える。1区で検出した建物1あるいは南北建物の可能性が高い柵1を合わせても北半の空間には比較的大型の建物が贅沢な空間利用のもとに配置されている。これらの建物群と4区で検出した南半の小型建物群が、同じ邸宅内であるかどうか調査時における最大の問題となっていた。ただ、北半園池から「齋雑所」「齋舎所」と記された墨書土器が発見されたことから、この邸宅が齋宮に密接に関わる邸宅であると同時に、齋宮に仕える家政機関の存在を示唆しており、このような雑舎群の空間として南半の建物群が最も妥当と考えていた。この問題を解決するために補足調査を行なったわけであるが、結果的に5区において野寺小路に面する門跡を検出したことによって、1町規模宅地であることがほぼ確定したといえる。

5区で検出した門跡は北五門と六門の中間に位置するが、このラインから北側に園池を中心とする大型建物群があり、南側に規則正しく配置された小型建物群が存在したことになる。1町の中で北半地域は庭園の存在や建物配置のあり方から、まさに邸宅の「ハレの場」と認識できる。それに対し、南半地域は建物群がL字形に規則正しく配置される官衙に特徴的な建物配置をとることから、この邸宅に仕える人々が日々の雑務を行なった「ケの場」と考えられよう。つまり、野寺小路に面する門を入った内部の北半と南半とで、機能が分化した宅地構成となっているのである。

平安宮からこの邸宅に向かうには二条大路を西進し、野寺小路を下がるのが最も近いコースとなる。このような位置関係から考えると、野寺小路に正門を開くのが最も合理的であることが理解される。また、園池が北半でも西寄りに配置されているのも、泉の湧く地点が限定されるという地質的条件によるだけではないであろう。東面に正門を開き、園池を伴う主人の空間を奥まった位置に配置することにより、邸宅内での階層性を可視的に表現する意図をも実現できるのであ

第1節 平安時代中期の邸宅

る。平安時代前期の邸宅では南面が重視される傾向が指摘されているが^{註1}、この邸宅では平安宮との位置関係から正門の位置が決められたと考えられ、平安時代後期から一般的となる東西面に正門を開く指向が、平安時代中期の段階ですでに存在していたことを示すものであろう。

2 邸宅の造営時期について

考古学の立場から遺跡の存続期間を決定する場合、出土遺物の型式年代が一つの大きなよりどころとなる。今回検出した宅地の存続期間は遺構面がかなり削られているため、池1から出土する多量の土器群と3基の井戸からの出土遺物が対象となる。

池1出土遺物の中で一括性をもつものは、建物13の前で行なわれた祭祀儀礼に伴う土器群である。これらの土器群は祭祀儀礼を行なった場所に据え置かれ、汀の整地層の中で折り重なるように出土している。つまり、祭祀儀礼に使用された土器は不要物として廃棄されるのではなく、その場所に存在し続けることに意味があり、だからこそ園池という常に清掃管理されるべき空間においても片付けられることなく、むしろ意識的に汀の中に埋め込まれたのである。おそらく、この祭祀儀礼は園池造営後の間もない時期に執り行われたと考えられる。園池とそれを取り巻く空間を鎮めるために、そしてその空間に居住する人々のために、祭祀儀礼は造営後の早い段階で行なわれたのであろう。

これら第1グループとして把握した土師器の型式は、平安京の編年観からみればⅡ期中段階に限定されるもので、その実年代は9世紀第3四半期末から第4四半期でも早い時期に相当する。池1から出土する灰釉陶器や緑釉陶器には型式的にやや古い様相のものも含んでいるが、園池ないし邸宅の造営時期としてはこれら第1グループの土師器の年代が最も妥当と考えられる。その年代観については、生活の痕跡を示す井戸1および井戸3から出土する土器型式からも裏付けられよう。

ただ、問題として出土軒瓦の年代観を検討する必要がある。軒瓦の様相は出土点数の比率で見ると、軒丸瓦で40%、軒平瓦で55%が平安時代前期以前のものである。重量比で見ると、軒丸瓦で75%、軒平瓦で実に82%を占めることになる。さらに旧都からの搬入瓦に限ってみると、軒丸瓦ではこのうち点数比で77%、重量比で92%、軒平瓦では点数比で49.5%、重量比で54%にも及ぶ。この事実を従来の解釈で捉えるならば、平安時代前期に旧都搬入瓦を多量に再利用した建物が存在したことになる。しかし、実際に検出した遺構や土器群の様相からは、平安時代前期に遡る邸宅の存在を想定することはできない。この問題を合理的に解決するためには、これらの軒瓦群の生産年代と使用年代の間に何らかの理由で大きな隔たりが生じたと考えざるを得ない。

まず第一に、これらの軒瓦群が果たして初めからこの邸宅で使用するために、搬入あるいは生産されたのかどうか問題となるが、この点に関しては前述の通り否定せざるを得ない。そうすると、平安京に搬入された軒瓦群が一度いずれかの場所で使用され、9世紀後半になって二次的に移されてきた可能性が高くなる。ここで旧都搬入瓦が多く使用された場所を平安京内で求めるならば、やはり宮内が最も有力な候補地となろう。平安宮では応天門や大極殿院の火災など、遷都後最も大きな被災が貞観年間に続けて起こっている。火災後には朝堂院の修復造営が大規模

に行なわれており、この時多くの不要部材が生じたと想定できる。おそらく、まだ使用に耐える軒瓦類などは宮内あるいは京域の様々な施設に下賜されたことであろう。当邸宅は平安宮に近く、斎宮関係の墨書土器が多数出土している。皇族に非常に関係の深い貴族が居住していたと推測でき、邸宅造営に際してこれら平安宮から下賜された軒瓦を再利用したと考えれば理解しやすい。むしろ、そのように理解することによって軒瓦群と土器群の年代差を埋めることが可能となり、土器型式から導きだした造営年代をさらに補強することになるのである。^{註2}

3 邸宅の変遷と存続期間について

今回検出した邸宅の建物群は建て替えの痕跡があまり認められず、その変遷過程はなかなか把握にくい。しかし、園池の造営後に大きな面取りが一度あったことが遺構群の分析から確認できる。それは建物3の造営年代である。

建物3では造営に伴う地鎮遺構を検出しており、土師器杯が5枚重ねて据えられていた。この土師器の型式を平安京編年に当て嵌めて観察すると、前述したように園池造営時期を示す第1グループの土師器群よりも新しい様相をもっており、Ⅱ期中段階の末から新段階にかけての年代が想定できる。建物3の造営に際しては、池1北汀の石積み護岸や西汀の洲浜が改修されており、泉1も建物3から正面となる東辺と南辺を短縮し石を組み直して見栄えよく造り変えている。また、南半地域でも同時期に井戸2の掘削に伴い建物の建て替えが認められる。これらの建て替え改修は一体の事業であり、西暦900年前後にこの邸宅で再整備がなされたことを示している。この歴史的背景に皇女の斎宮卜定があり、邸宅が一時「斎宮」となったことが大きな要因として挙げられるのではなかろうか。斎宮関係の墨書土器が灰釉陶器の検討の中で、若干新しい要素を持っていたことも、それを裏付けている。おそらく、「斎宮」として整備された段階が、この邸宅の変遷の中で最も建物設備が整った時期であったと考えられる。

しかし、池1本体から出土する土器群は、土師器第2グループとして検討したように邸宅再整備の段階を超えて年代幅があり、新しいものは10世紀後半にかかるものまで存在する。とくに、泉1を埋める時に鎮めたと考えられる土師器は明らかに10世紀末から11世紀初頭の型式となる。これらのことから判断すれば、池の存続期間は長くて9世紀後半から11世紀初頭という非常に長い期間を想定せざるを得ない。掘立柱建物による単純な建物構成では短期間の変遷しか考えられず、土器の型式幅と明らかに矛盾する。発掘調査の所見だけで考えるならば、邸宅が伝領されるなかで建物の建て替えは新たに行なわれず園池だけが管理されていたことも想定できる。あるいは、遺構面が削られていることを考慮して新しい時期の建て替えが礎石建物であり、検出できなかったことも考慮する必要もあるが、考古学的には確認できないのが現状である。

4 邸宅の建物構成について

邸宅北半地域の大型建物群は3つの空間に分けることが可能である。第1の空間は建物1を中心とした園池を伴わない空間である。建物1は側柱のみの検出であるが、身舎部が2間×3間の四面庇建物と推定できる。身舎部分は礎石を利用したと考えられ、同様な建物は平安京の大規模邸宅で前期段階から検出されている。^{註3}

第1節 平安時代中期の邸宅

第2の空間は建物2・14から西の「庭(おほば)」を望む空間である。建物2は西面する3面庇建物であるが、南北長殿である建物14と連結させることによって建物空間を広く取る構造となっている。建物14から園池東汀までは20m強の広い空間となっており、平場である「庭」を意識したものとなっている。『作庭記』によれば、「南庭を、く事は階隠の外のはしらより池の汀にいたるまで六七丈若内裏儀式ならば八九丈にもおよふへし拝禮事用意あるへきゆへ也」とあり、建物前面(『作庭記』では南となっているが)の池汀との間に儀礼のための空間を6・7丈(約20m)置くべきことを記している。建物2・14から西の空間も、おそらく園池を背景に望んだ儀式空間と考えられる。

第3の空間は建物3や建物4そして園池が一体化した空間である。建物4は建物1と同じく身舎礎石建てで庇柱が掘立柱の構造をもつ東西棟で、建物3とはおそらく透渡殿で連結していたと想定している。東の池の汀と建物4は4～5mしか離れておらず、南の空間も14mほどである。「庭」を意識したものとは考えられず園池を望むことに主眼をおいた建物構成をとる。とくに、建物3は清水の湧き出る泉に面して園池の北東岸に建てられており、いわゆる泉殿として機能したと考えられる。また、南東隅の床下では泉からの清水が池に流れるせせらぎとなっており、その光景は平安時代後期の代表的絵画資料である『扇面法華経冊子』に描かれた泉殿やせせらぎ上の建物、あるいは鎌倉時代の資料である『紫式部日記絵詞』に描かれた土御門第の釣殿などと共通する。

園池南岸の建物11と建物12は園池との関係が深く第3の空間に属すると考えられるが、第2の空間とも無関係ではないであろう。あるいは、建物11と建物12が神社建築でみられる割拝殿のような建物で、第2の空間の「庭」へ入る機能を持つとともに、建物11の構造から第3の空間を閉鎖する役割も果たしていたとも考えられる。

以上の空間がそれぞれ機能分化し、時には融合しながら北半地域での主人の生活空間を構成していたと想定できるが、ここで問題となるのがいわゆる「寝殿造」との関係である。平安時代の「寝殿造」について、その実態の不明瞭さから様々な疑問が投げかけられている^{註5}。「寝殿造」は中世末期の住宅様式である「書院造」と対比される平安時代の住宅様式であるが、その様式表徴に

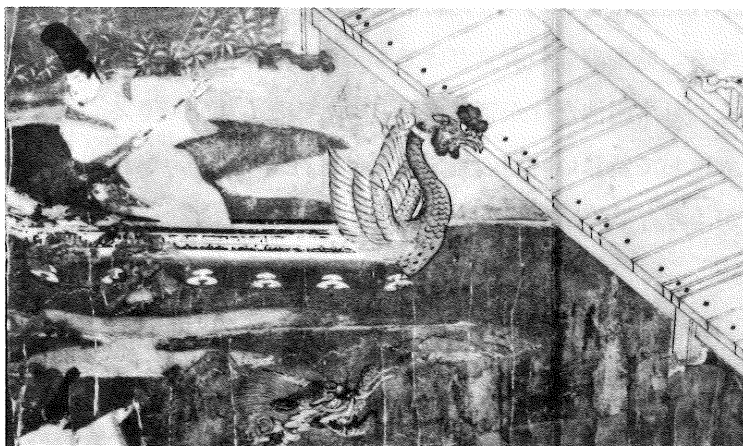


図79 庭園と釣殿 (『紫式部日記絵巻』より)

については非常に曖昧である。その原因は「書院造」が個々の建物構造そのものに武家文化を反映する様式表徴を見いだしているのに対し、「寝殿造」が主に邸宅内における園池や建物の配置に定型化したものを求めているためである。平安時代を代表する「建築様式」として「寝殿造」を理解する

ためには、年中行事化した儀礼が貴族の邸宅で頻繁に行なわれる時代性を建物構造の中に確認し、それを様式表徴として定義し直す必要がある。

そういう意味では、平安京における四面庇の南北棟建物の成立に着目し、儀礼を含む私邸内での多様な空間利用にその要因を求める視点が重要になってくる。今回の邸宅遺構も従来の「寝殿造」では説明ができないが、地勢に従って典型的な園池を掘削し、池に規定されるように主殿クラスの建物群が空間の利用形態によって計画的に配置されている姿は、まさに平安時代貴族邸宅の住宅様式として捉えられるのではなからうか。^{註7}

5 庭園史からみた十六町庭園

平安時代の庭園邸宅のイメージとして我々が一般的に持つ姿は、絵巻物などに優美に描かれたいわゆる「寝殿造」である。これは南面する寝殿の東西に対屋などの建物群を整然と配置し、寝殿の南に造られた広大な園池を望むように中門廊や釣殿などを派生させるもので、平安時代後期の東三条殿などの姿が具体的に復元されている。^{註8}これら「寝殿造」の重要な要素として南面性の重視が挙げられるが、平城宮・京内で発見されている庭園遺構から「寝殿造」への変遷過程が従来から問題となっていた。

平城京左京三条二坊六坪で発見された曲水庭園は非常に残りがよく、奈良時代の庭園のあり方を知るうえで重要な資料となっている。ここでの庭園と建物との関係を見ると、曲水庭園には北から望む視点はあまり重視されておらず、主要建物は西岸に建てられ北西岸にも南東隅を汀に接して小さな南北棟が建てられており、建物3・4によって構成される第3の空間と共通点が多い。このような建物配置については景観論の立場から考察が加えられている。つまり、平城京は奈良盆地の北端に位置することから北から望むと景観として山が全く視野に入らない。南北に曲水する庭園は西から望むことによって背景に三笠山を望むことができ、周囲の自然を庭園内に取り入れることによって趣ある景観を造りだすわけである。

このような地理的状況は平安京においても変わらないであろう。京都盆地は北東西を山に囲まれていることから、東西からの視点によって自然景観を庭園内に取り入れることが

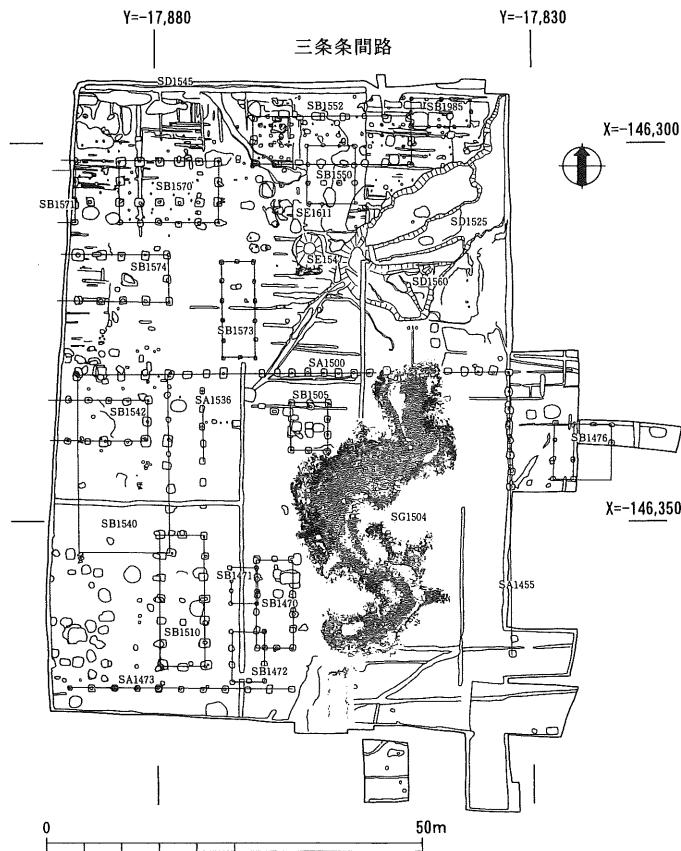


図80 平城京左京三条二坊の園地遺構（註9から転載）

第1節 平安時代中期の邸宅

できるが、北からの視点では背景には広大な空がみえるだけとなる。しかし、今回検出した庭園遺構は、平城京左京三条二坊六坪とほぼ同じ形態・大きさを持ち、建物配置も東西から庭園を望む構成となっている。つまり、建物3・4からは景観として平安宮や東山・比叡山を取り入れることができ、建物2・14からは北山から西山にかけての自然景観が見えることになる。平安時代の庭園のイメージとして定型化した「寝殿造」を想定するのではなく、実態はむしろ平城京と同じように自然景観を取り込むことを重視した庭園と建物配置であったことが判明したことになる。^{註10}

そして、平城京庭園との違いを考えるうえでは、むしろ園池の構造の変化を重視すべきであろう。平城京左京三条二坊六坪庭園は、曲水庭園の全面に平石を敷き詰めた非常に人工的な雰囲気のある園池であったといえる。このような嗜好は飛鳥時代庭園から継承したものであり、古代的要素が強いものである。それに対し、今回検出した園池は洲浜などを構築しない汀を多く残しており、人工的な洲浜部分も面を揃えるのではなく、むしろ石の角を意図的に立てている。建物配置も一方的な視点だけでなく、園池を中心に建物が取り巻くように配置されており、景観をあらゆる角度から楽しめるように工夫されている。平安時代は邸宅内における「ハレの場」の儀式が確立していく時代であり、園池を取り巻く建物配置もそのような儀式空間と密接に関わってくると考えられるが、人工的要素の強い古代庭園からより自然景観を楽しむ平安時代庭園への過渡的状況が窺えるのである。

6 「齋宮」墨書土器について

今回検出した園池内から多くの墨書土器が出土しているが、注目できるものとして齋宮関係の墨書土器がある。墨書は灰釉陶器の底部外面に記されたもので、「齋宮」2点、「齋雑所」2点、「齋舎所」2点が確認できる。墨書はほとんどが建物3の前面付近から出土しており、この邸宅に齋宮に卜定された女性が居住していた可能性が高い。

『延喜式』によれば齋宮は、天皇の即位にともなって未婚の内親王あるいは女王から卜定されることになっており、卜定されれば平安宮内に設けられた初齋院で1年間、さらに宮城外に新造された野宮で1年間潔斎を行ない、3年目の9月に伊勢へ群行することになっている。今回出土した墨書土器には「齋雑所」「齋舎所」と記された墨書土器があるが、齋宮寮官司は「所」ではなく「司」であり、ここに居住した齋宮は齋宮寮が管轄する以前、つまり群行以前の齋宮ということになる。

そこで群行前に齋宮が居住した施設として可能性があるのは、卜定されてから初齋院にはいるまでの邸宅(『延喜式』では「齋王家」と記載されている)と野宮ということになる。「齋王家」については齋王が卜定されると「彼家」に勅使が派遣され、祓の後に殿の四面と内外門に賢木が立てられ、初齋院に入るまで齋宮が過ごす。また、野宮潔斎後あるいは伊勢からの退下時には齋宮が使用した金銀の器などが収められる。この場合、卜定された段階で邸宅が齋宮となるのであり、それまでは普通の皇族邸宅であったことになる。野宮は初齋院での潔斎の後に入る宮で仮宮的性格が強く、齋宮が卜定されるたびに新造されることとなる。しかし、仮宮的性格といっても様々な施設が付属しており150名近い官人が仕えるなど、相当規模の大きい施設であったことがわか

註11
っている。

今回検出した邸宅は、建物配置が非常に単純であり、建物の建て替えもあまり認められないことから、遺構の状況から判断すれば仮宮として造営された野宮である可能性が指摘できよう。しかし、遺物の概要で述べているように出土土器の型式幅は長期にわたっており、一時的な仮宮で使用されたものとするには若干の無理が生じてしまうことになる。考古学的な考察からはどちらの可能性も指摘でき、即決に判断することはできない。

7 邸宅外の道路

前章まで邸宅内の利用状況をみてきたわけであるが、今回の調査で押小路および野寺小路の条坊遺構が検出できたことも、平安京における道路事情を考えるうえで大きな成果といえる。

まず道路の構造であるが、発掘調査で条坊両側溝が検出された場合、側溝間の空閑地が路面遺構となる。路面上には石を敷き詰める場合と石を敷かない場合の2種が存在するが、註12
今回路面を検出した押小路に関しては上面が大きく削平を受けており路面舗装は不明である。しかし、第3次調査4区で検出した押小路北側溝では側溝斜面に礫や細かな瓦片などが敷き詰められており、同様の舗装が路面上にも施されていた可能性が高い。このような礫敷き地業が行なわれたのも、路面部の地盤の弱さが原因となっているものと考えられる。

実際、この地域は粘質性の高い無遺物層Ⅱが遺構面となっており、水捌けが悪く地盤が緩くなっている。これらの地盤を改良するために特殊な盛土地業を行なって路面を形成していることが、第3次調査4区の調査で判明した。その工法は、北側溝の掘削予定ラインから南に堆積した無遺物層Ⅱを安定地盤である無遺物層Ⅲ付近まで掘り下げ、側溝の南斜面から路面を盛り上げていく方法である。この時、北側溝南斜面の土留のために材木を何本か基礎地業として側溝に並行して置いて盛り土を行ない、最後に路面土として黒褐色砂泥を固く搗き固めていったと考えられる。無遺物層Ⅲ上で認められた溝状遺構は、断面観察からもこの地業材木を敷いた痕跡と考えられよう。

同じような地業を行なっている道路遺構として、石川県賀茂遺跡で発見された古代北陸道がある。註13
問題の地業は、道路遺構と水上輸送路として機能した大溝がつながる部分で検出されており、砂とともに木材が路面に平行して置かれていた。調査概要では地盤の弱い部分における路面造成の基礎地業の一種と想定している。規模は異なるが今回確認した押小路の基礎地業も同じものであろう。

ただ、野寺小路との交差点部分である第1次調査区では、同じような地盤であるにも関わらず、このような地業痕跡は認められない。北側溝の位置も南にずれて、路面幅自体が約4.3mと『延喜式』左右京職式京程条の規定よりも大幅に狭くなっている。同じ敷地の管理下に置かれた道路も一律的に造成されたとは限らず、むしろ条坊路造営時における分担施行の結果が調査地点での造成地業の差異としてあらわれているのかもしれない。

次に、条坊交差点における排水の優先関係をみると、第1次調査区で確認できるように明らかに南北路である野寺小路の側溝が押小路路面を切って流れている。註14
同じ状況は野寺小路と三条坊

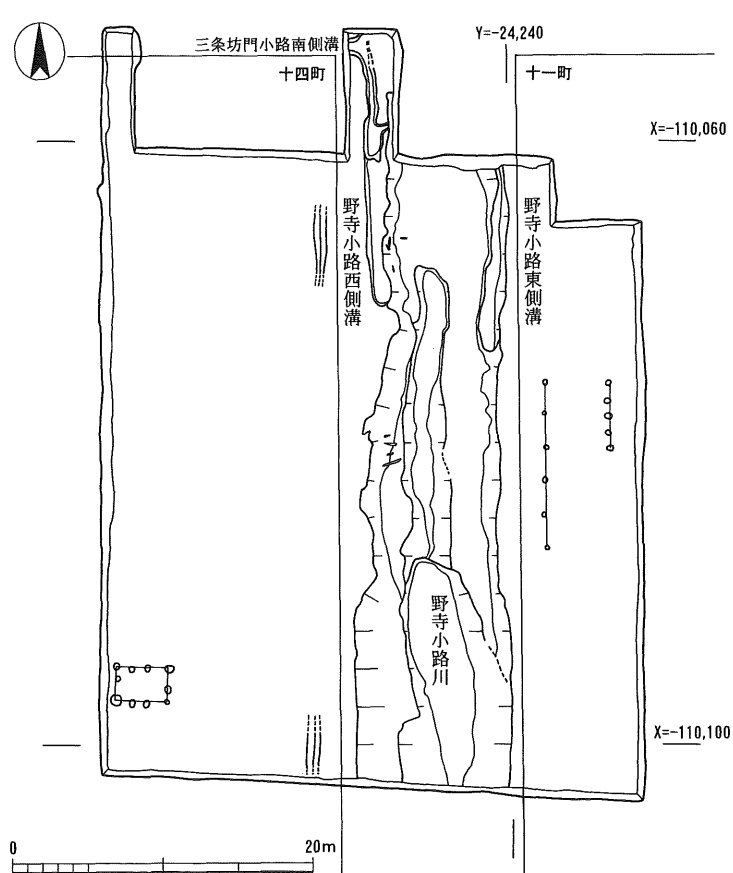


図81 右京三条二坊十一町・十四町平面実測図 (1/500)

門小路の関係にもみてとれる。^{註15}
 平安宮南西域は天神川扇状地に立地しており、旧流路とともに湧水が非常に豊富な地域であった。実際に周辺地域の調査で概観したように右京三条二坊八町の調査でも池跡が出土しており、北方の右京二条二坊一町では西大宮大路西側溝が平安時代中期まで流路化していたことが判明している。^{註16}
 平安京造営当初の排水計画では、西堀川がこれらの排水機能を担っていたのであるが、その他の条坊路でも南北側溝を優先して西堀川の排水機能を補完していたと考えられる。

しかし、もともと豊富な水量を西堀川だけに一元化する排水計画自体に無理が生じたことは明らかで、土木工学の立場からも雨水排除能力からみれば平安京の溝の配置や構造は形式的であったことが指摘されている。^{註17}
 前述した西大宮大路西側溝だけでなく、道祖大路東側溝も9世紀後半には流路化したことが右京三条二坊十四町の調査で確認されており、おそらく十六町宅地の園池の排水も流路化した道祖大路東側溝に流し出していたと推測できる。そして、型式化した排水計画は10世紀後半における西堀川の廃絶という結果をまねき、平安時代後期の野寺小路の流路化あるいは旧天神川流路の復活として都城構造自体を変質させていったのである。^{註18}

以上、平安時代中期の邸宅に関する考古学的所見を、調査を担当した立場からまとめてみた。^{註20}
 ただ、ここで提示した問題点に対する所見は、あくまで考古学的な観点に立脚した解釈であり、主観的判断は避けられないであろう。いままでこれほど良好な状態で平安時代中期の邸宅遺跡を調査した事例はなく、考古学だけでなく文献史学・建築史学・庭園史学などの立場からも遺跡に対する考察を深めていかなければならない。そして、自然科学系の分野も含めた学際的な共同研究を進めることによって、今回検出した邸宅遺構だけでなく実態としての平安京像がはじめて明らかになるのである。

第2節 邸宅廃絶後の土地利用

1 平安時代後期の宅地

平安京の右京域は平安時代も半ばを過ぎると、それまで宅地として利用されていた地域においてその後も継続して宅地として営まれる事例は減少し、都市的様相は急速に変貌を遂げていくようである。平安宮に間近な三条二坊十五・十六町においても例外ではなく、平安時代後期には都市的様相が失なわれていったことが遺跡の検討を通して窺われた。

十六町では、1町規模の邸宅が営まれていた時期の南半部は、「ケ」の場として機能していた区域として全面に建物が配置されていたが、平安時代後期には主として南側の押小路に面して間口を開く小規模な建物で構成される建物群へと変貌する。建物群の背後には新たに開削された溝や柵により居住区と中心地域とが区画され、もはや1町規模の広大な宅地面積を確保する必然性が喪失した状況が窺われる。かつて野寺小路であった南北路には、ほぼ小路幅をなす川が南流し、東の限りとして、柵が設けられた。この光景は、古代の都市的空間から農耕地域への過程を彷彿させる空間となっている。しかしながら、宅地内の様相が一変する過程において、考察の第1節でも示したように、10世紀後半には西堀川が埋没し廃絶するという結果をまねき、平安時代後期の野寺小路の流路化に示されるように都城構造自体が変質したのであるが、野寺小路川は厳然と野寺小路の路幅内を南流しており、押小路は路幅を狭めながらも南北両側溝を伴い東西路としての機能を維持しているのである。宅地として機能している地域に路は不可欠ではあるが、この場所の宅地にのみ維持・管理されるものではなく、ある地点間を延長することにより路は機能すると考えられる。都市機能の一つである移動・交通手段として、平安京の都市的地域と近郊(別業・寺院)を結ぶ条坊路の機能が依然として維持される要素があるのではないだろうか。

さて、本調査例のように、右京域において平安時代後期の建物配置が明らかにされた調査例はごく少ないのであるが、1987年度に実施した六条一坊五・六町の調査^{註21}で検出された例を、一例として取り上げて検討を加える。この調査は、五町のほぼ全域と六町の南端部を対象に実施されており、平安時代前期の邸宅跡を始め、楊梅小路南北両側溝、皇嘉門大路東側溝などの条坊路も確認されているが、宅地内では平安時代中期の遺構はほとんど検出されず、平安時代後期に至り条坊路に面した建物が出現することが明らかになった。この調査では、大路・小路に面して間口を開いた平安時代後期の建物群を検出している(図82)。いずれの建物も柱穴の平面形は円形から隅丸方形を呈し、径30～50cm程度の規模であり、本調査の当該期の建物の柱穴とほぼ同規模を有している。大路・小路に面して総柱建物と考えられる構造を持った、間口が3間ないし4間で奥行きのある掘立柱建物が配置されており、楊梅小路の南側で具体的な建物群の配置を知ることができる。報告では建物は6種の類型が示されている。建物61～63は東西3間(7.2～8m)、南北5間(10.2～11m)の規模を有する建物である。また、東西3間(約7m)、南北3間(約7.5m)の方形に復元された建物54や、最大規模を有する東西3間ないしは4間(約8m)、南北6間ないしは7間(約14.8m)あり、南東隅の建物内に井戸を配置する建物65がある。これらの建物は、それぞれ

第2節 邸宅廃絶後の土地利用

の宅地の境界を示す柵を伴う。また、宅地の背後は溝や柵により1町の中央地域とは厳然と区画されている。中央部の空間は何らかの共用の場あるいは耕作地のような用途が想定できるのではないだろうか。五町の四周は、楊梅小路以外の各大路・小路に面する箇所においても建物の一部、柵や井戸あるいは池なども配されており、家屋を伴う宅地が四周を取り囲んでいた可能性は高いものと考えられる。楊梅小路が側溝を伴い機能していることは、三条二坊十五・十六町間の押小路との類似性としてあげられる。楊梅小路の北側(六町)も建物の展開は五町と同様の状況を呈することが想定できるものの、東西棟の建物51の存在は画一的な屋並でなかったことも示している。

三条二坊十六町でも押小路に面して間口を開く複数の建物を検出している。建物は溝や柵による区画がなされており、東西溝103と南北溝102あるいは柵103・柵107などによって小路側の宅地

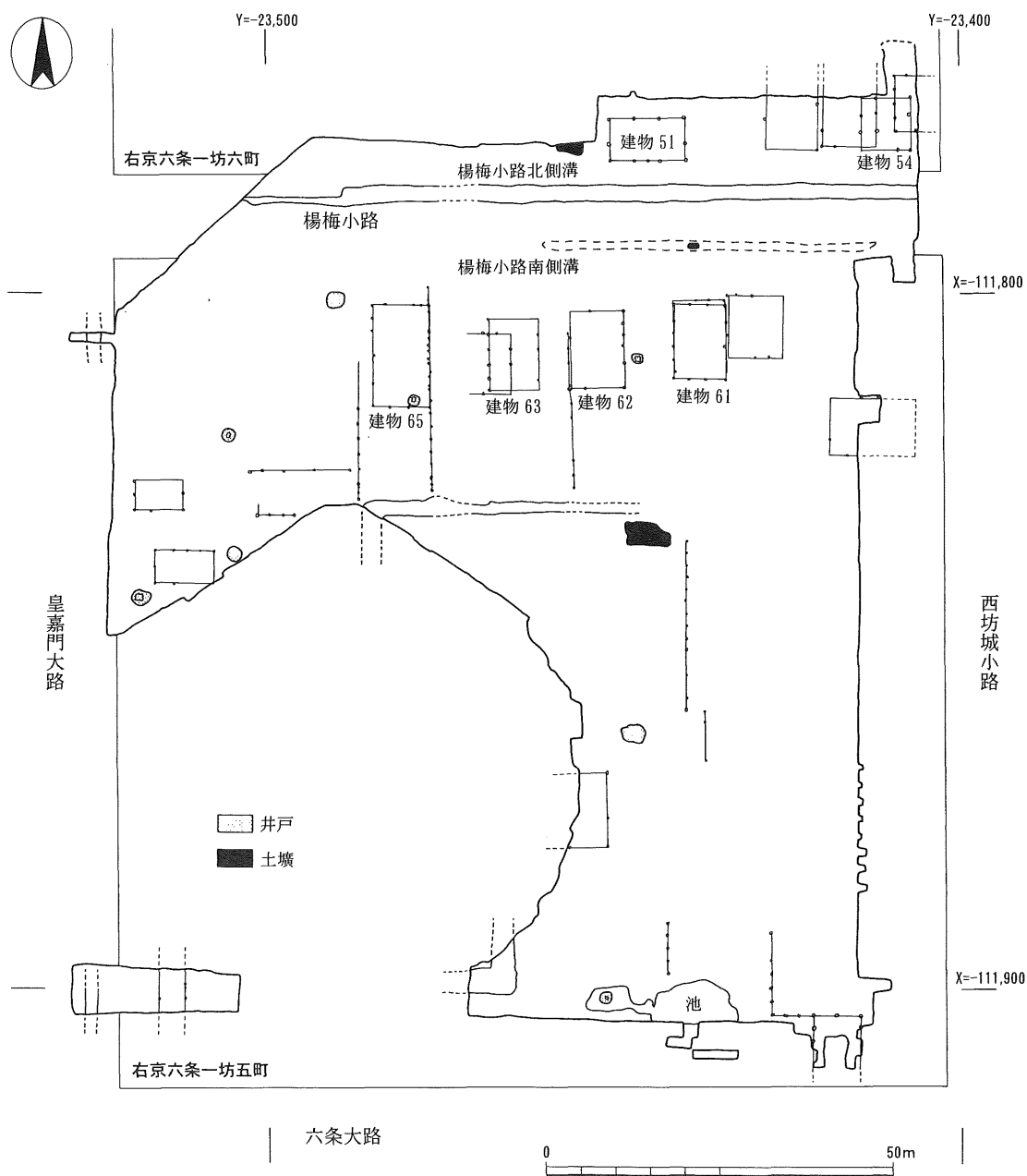


図82 平安京右京六条一坊五・六町 平安時代から鎌倉時代遺構配置図 (1/1,000)

と1町の中央部の空閑地とを明確に画しており、六条一坊五町の事例との1町内における宅地と中央部との区画配置には何らかの共通性が窺われる。しかし細部を検討すると、十六町の溝や柵の検出位置は、おおよそ四行八門の想定線上ないし近接した箇所位置するが、六条一坊五町の柵・溝の検出位置は、それぞれ各条坊路の想定築地心から内側に約36m前後に位置していることを指摘しておきたい。

一方、押小路に面して間口を開く、東西3間、南北4間程の規模を有する総柱建物101・建物102・建物106や、それらより小規模の建物104などは、右京六条一坊跡の事例との類似性が指摘できよう。さらに、このような1町内における宅地配置と中央部の使用形態は、左京域における中世の様相との類似傾向を示す調査例^{註22}もあり、このことから右京域が平安時代後期以降に都市的様相は失っても急速に耕作地化していく過程は読み取ることにはできないのである。

2 室町時代以降の耕作地

平安時代後期に宅地として利用された十六町も、その後再び宅地として活用されることはなく、鎌倉時代を通じて耕作地としての遺構も認められず、当該期の遺物の出土量も極めて少ない。室町時代までには、野寺小路川、西側の道祖大路川ともに埋没する。遺跡からは室町時代には農耕地化が促進されたようで、十五・十六町では、部分的ではあるが室町時代に比定できる耕作土層も分布し、室町時代から桃山時代の遺物を包含する耕作に伴う溝も多数検出した。これら遺構から出土した遺物から、14世紀後半代には耕作地として活用され始め、多数出土した15世紀代を中心とする土器類は、当該期の耕作地域としての活発な利用があったことを示唆している。この後、当地は京都市立西京商業高等学校が建設されるまで永らく田園地帯となる。

昭和6(1931)年に、西京商業高等学校の前身である京都市立第一商業学校が、当地に校舎を新設し移転されている。その後、校舎の北側にグラウンドが整備される際にコンクリートの塹壁が敷設されるのであるが、当時の塹壁は現状では土中にあり、第1次調査ではその一部を確認している。第3次調査でもそれに連続する擁壁を4区南拡張区で検出した。この塹壁に南肩を削平された溝は、大正11(1922)年測量の京都市土木局都市計画図に記載されており、学校発足時まで用水路として機能していたものである。溝の北側には、江戸時代の耕作土層Ⅱに対して幅1m前後の畦畔が、少なくとも2時期ある。同位置の下層で平安時代の押小路北側溝を検出しており、道路から用水路へと用途を替えながらも境界の意識は長く受け継がれていたことが窺われるのである。

なお、大正11年の地図上で当該地周辺の状況を概観すると、記載された道路・畦畔・水路などは、押小路を始め三条坊門小路、姉小路、三条大路などの東西路の想定位置とほぼ同位置にあり、東西方向に整然と配置されていることがわかる。また、南北路については、旧河川あるいは旧流路の影響を受けたと思われる、東西方向に比べるとやや乱れたものが多いようである。

さて、今回の調査では、十五町・十六町ともに耕作地を画する区画溝や耕作溝(排水溝)を多数検出しており、これら遺構からこの地域における耕作地の構成を考えてみたい。

まず、区画溝は耕作地を区画する機能と給排水などの水量調整を受け持ち、排水溝は耕作地内の給排水などの機能を持つのであろう。排水溝は区画溝の主軸方向によって、南北方向を主体と

第2節 邸宅廃絶後の土地利用

する耕作地と、東西方向を主体とする耕作地がある。また、掘られた溝の条数も各耕作地の地理的な条件などにより疎密のあることが窺われる。以下、これら耕作に関連する遺構のうち、主として江戸時代に属する遺構について分析を加える。

区画溝とは、区画施設の一部ないし用水路の機能を有し、検出した溝の中で一定規模以上の溝幅を有しており、全てではないが溝の周囲に野壺ないしは水溜めなどの遺構が付属し、溝に畦畔を伴うなどの条件を有する溝と位置づけ、それ以外の排水溝と区分した。

十六町域の区画溝の配置をみると、概して平安時代の四行八門の想定線に重なるものと、重ならないものがあることがわかる。室町時代における耕作地の区画溝は明確ではないが、江戸時代の区画溝は平安時代後期の宅地と中央部を画した用途に想定した溝102や溝101にほぼ重複した位置にある。十五町域では、第5次調査4区で検出した区画溝は、十五町のほぼ中心を東西に延長し、南側に畦畔が平行する。この溝を境に南北で高低差が生じ、溝・畦畔ともにほぼ同位置で作り替えた痕跡がある。第5次調査2区で検出した南北方向の区画溝は、第3次調査で検出した十六町域の南北区画溝のほぼ延長線上に位置する。

これら区画溝を基に、十六町域における耕作地の配分についての復元を試みた。明確に耕作地区画と認識できた箇所を優先に、それぞれにA～Hの符号を図83中に付した。また、面積がほぼ同規模の耕作地には、A1、A2の記号を付している。それによると、耕作地は一瞥して広狭の差異のあることがわかる。全容のわかるA1は、東西約29m、南北約33mの長方形をなす。西側の溝は、平安時代中期の池1の西側に、北側の溝は池1と導水路間に、南側の東西溝は池尻付近をそれぞれ延長し、A1はほぼ池1を取り囲むような位置にあることがわかる。しかし、旧天神川の氾濫を避けるために西側が規制を受けたことも考えられる。池の跡地は湿地化し耕作地としては良好ではなかったようで、池1と重複する箇所では排水溝の改修が重ねられ、A1では100条に余る排水溝を検出した。野壺や水溜めは、調査区全体で検出したが、A1で最も多い。溝・畦畔の周囲に分布しており、平面形は円形・方形・長方形を呈し、底面に桶や木杵の痕跡を残すものもある。すべてが同時期併存したものではなく、造り替えが認められるものもある。

十六町域では、A1・A2などの溝の重複状態では東西方向の溝が古いと解釈できる溝もあるが、出土する遺物からは明らかな年代差はみられない。また、溝は南北方向を主体とするが、B1・D1・G1、Fでは東西方向を主体としている。十五町域では、第5次調査4区の排水溝は、区画溝を境に南北で溝の方向が異なり、北半部では南北方向に、南半部では東西方向を主体としている。十五町域東部では南北方向の溝が主体である。

当該地周辺における無遺物層は、南に向かって緩傾斜を呈するため、単に排水のみを想定するなら南北方向の排水溝で機能は達成できそうにみえる。しかし、十六町域のG1・Fなどの耕作地では、東西方向の排水溝が主体をなしている。あるいは、これら耕作地の基盤層が砂礫層（無遺物層Ⅲ）であることと関連し、給水と排水の微妙な調整に基づいて耕作地ごとの基盤層の状況によって配置される排水溝の方向を規定したのではないだろうか。南北方向の排水溝を有する耕作地は、基本的に粘土層（無遺物層Ⅱ）を基盤層としている。

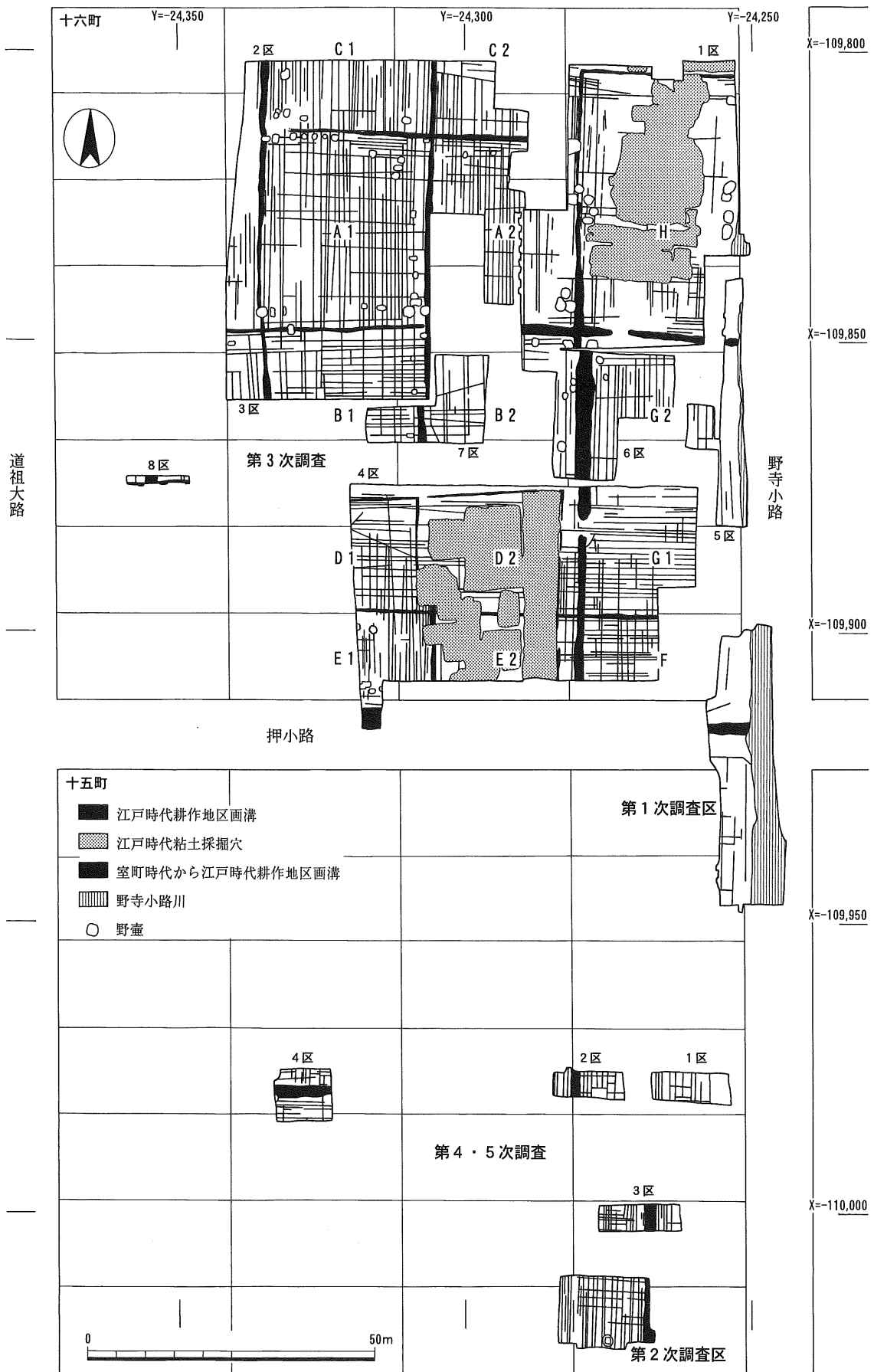


図83 室町時代から江戸時代遺構配置図 (1/1,000)

第2節 邸宅廃絶後の土地利用

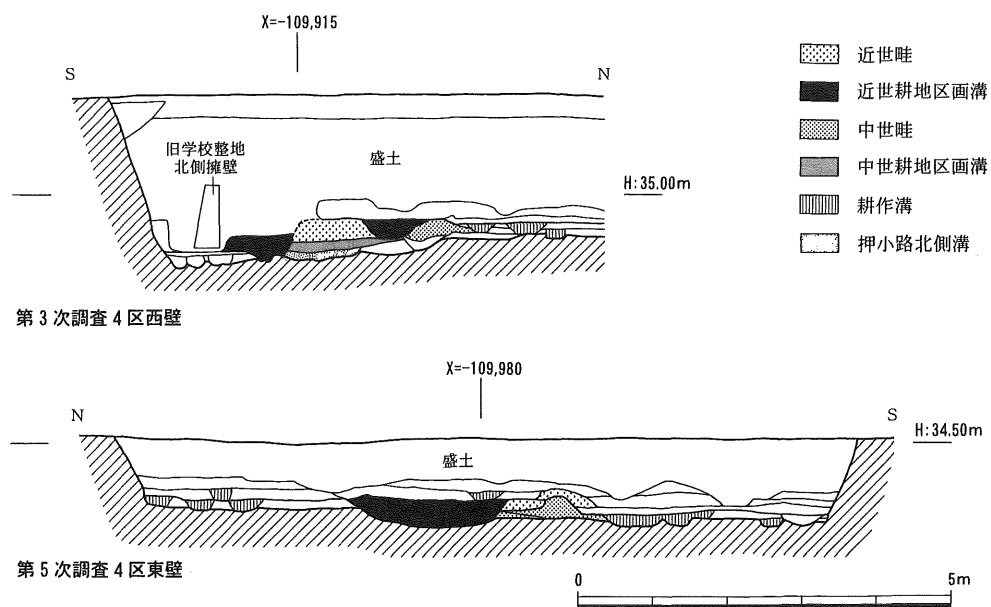


図84 第3次調査4区南拡張区西壁および第5次調査4区東壁断面実測図 (1/100)

右京域において1町規模を対象とした発掘調査は数少なく、さらに、平安時代後期以降の土地利用の変遷を遺跡から明確にできる資料は乏しかった。今回の調査では、平安時代後期の宅地ならびに建物配置を明らかにできた。また、今回の成果がその一助になれば幸いである。

第3節 右京三条二坊十六町の庭園遺構について

今回の調査では十六町の約60%を発掘調査し、建物や園池の全容など明らかにした。

次に、今回の調査で明らかにした庭園遺構の特徴を述べてみよう。

1 池の水

池の水は、池の北側に設けられた泉と池底を土壙状に掘り窪めた箇所から給水している。すなわち、池の北端に設けられた泉から湧き出た水は、直接池に注ぎ込まず泉と池との間を短い距離ではあるが一度流れた後に池へと注ぐ様にしている。

池に注ぎ込んだ水は北から南へ緩やかに流れ、池の南西にある短い遣水(溝2)を経て池2へと流れ込むようになっている。このような状況から池の水は、たえずゆっくりと北から南へと流れ久しく池に留まることが無かったと推定される。

言い換えればこの池1は、平安時代に一般的に見られるような汀を玉石で敷き詰めた洲浜に仕上げられており水を満々と湛える園池のように思われるが、実は清らかな水の流れを意識した意匠ではなかったかと考える。そのために、池は流れを意識し南北方向に細長く形作ったのではないであろうか。

なお、池内堆積土を珪藻分析した結果、池の水は常に清浄を保っていたことが確かめられた。

2 泉について

平安時代の庭園で、泉跡を発見したのは大きな成果の一つである。平安時代の庭園跡で泉を調査した例はない。今回池の北側で発見した泉は、規模や構造については同時代の井戸といくつか共通する点が見られた。泉の調査例として時代は新しくなるが、西本願寺滴翠園の醒眠泉(江戸時代)^{註23}がある。この醒眠泉についても今回の調査例と同様にその基本的な構造は江戸時代の井戸と極めて類似している。

泉の底面は標高34.45mあり、十六町内で検出した同時代の井戸の底部より50cm以上浅い。また、建物3や建物4の遺構面とは30~40cmしか違ってない。こうしたことからこの泉は、ここに庭園が作庭される以前からあった湧き水の吹き出し口に手を加えて泉としたものと考えられる。調査では泉や建物13の周辺部で拳大の川原石を敷き詰めた箇所を部分的に認めたが、当時は川原石をかなり広範囲に渡って敷き詰め清浄な空間としていたと考えられる。

ところで、泉の南側には、玉石や杭で板材を止めたような痕跡があり水量調整を想定させるような痕跡が見られたが、詳細が明らかでないのは残念である。

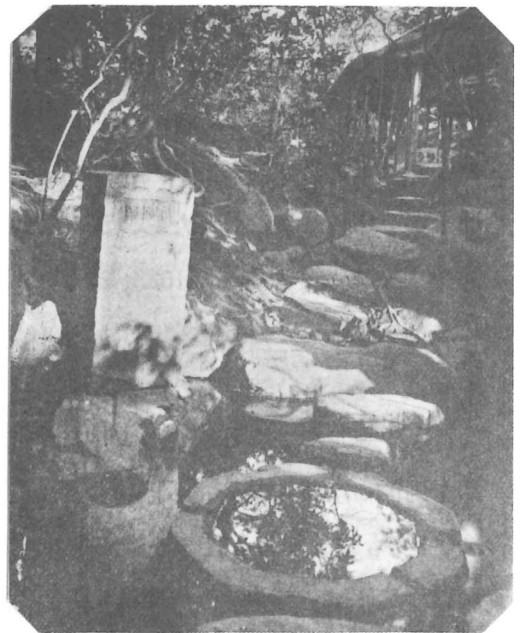


図85 西本願寺滴翠園の醒眠泉
(『本派本願寺名所圖會』より)

3 洲浜の玉石

池の汀に敷き詰められた玉石は、池の北岸から建物3周辺部や景石据付穴付近は大粒であるのに対して池の南半部は小粒である。この違いは偶然ではなく、池北岸から南を望んだ時に池の南岸が遠方に見えるように工夫した結果ではないかと考えたい。すなわち、遠近法を意識した意匠と推定したい。

汀の勾配は、それぞれ少しずつ違っているが、概ね 3° ～ 13° である。この数値は、今までに調査した平安時代の汀勾配とほぼ同様である。

4 遺構配置

十六町域に250尺(7.5m)の方眼地割りを設定すると、建物、泉、井戸、柵などの一部は地割線線上に位置する。このことは、平安京の宅地割である四行八門制の地区割を意識した結果であろう。

現在、平安京内の1町規模邸宅跡での調査では今回のように宅地内を建物遺構や庭園遺構の全容をほぼ明らかにした事例はほとんどないため、比較検討する資料がないのは残念である。

池の位置については、先述したように豊富な水量を推定させる泉の場所が、最優先されたためではないであろうか。すなわちこの宅地の主な遺構は、清らかな湧き水を最大限利用(使用)することを目的とした施設と考えられる。

5 平城京左京三条二坊六坪庭園遺構との比較

1975年度に実施された、平城京左京三条二坊六坪の発掘調査で検出された庭園遺構と比較してみよう。^{註24}遺構の成立年代は、平城京左京三条二坊六坪は8世紀、平安京右京三条二坊十六町は9世紀後半から10世紀とそれぞれ異なる。しかしながら、二三類似する点があるのでそれを比較してみたい。

①導水口と排水口の位置 平城京左京三条二坊六坪(以下、六坪)では、池の北岸から南岸までは約37m、SX1524からSX1464までは約38mである。一方、平安京右京三条二坊十六町(以下、十六町)は池北岸から南岸間は約37m、泉から排水溝までは約38m前後である。そのため、十六町の泉を六坪のSX1524と重ね合わせると六坪の排水施設(SX1464)の口と十六町の溝3の排水口とほぼ重なり合わさる。ただし、池の平面形態や幅は大きく異なっている。

②SX1524と泉 木樋(SX1523)を通りSX1524に貯まった水は、池側に並べられた石と石との間から池へと流れ出す意匠となっている。このような意匠は、十六町で見たような泉を意識した施設であったと考える。すなわち、六坪の水は、自然の湧き水ではないがSX1524から流れ出る水の様は、地下からこんこんと湧き出す泉を想定した意匠ではないだろうか。

③池周囲の空間寸法 六坪の場合2時期あるがC期(奈良時代中頃)では東西41m、D期(奈良時代後半)でも42mである。一方、十六町では東西42mを測り六坪とほぼ同様の寸法となっている。南北については、六坪のD期ではSA1500からSA1473間は42mである。十六町では、柵4と建物11間は約52m、建物3の身舎から建物11間は42mである。

なお、十六町では池の北西岸に建物3を発見している。この建物は身舎2間・3間で南・東・

西に庇が巡る。

六坪でもほぼ同様の位置にSB1505が検出されている。十六町の建物3は庇が3面に付いているが、身舎の規模や方向は六坪のSB1505と同様である。調査報告では、SB1505の成立時期は園池が作庭される以前とあるが、園池と同時存在の可能性は全くないのであろうか。もし、再検討の余地があるならば六坪と十六町の遺構位置関係は更に一層深くなるが。

この二つの遺跡の年代は、8世紀中頃と9世紀末から10世紀前半であり年代に少し開きがある。しかしながら、いくつかの共通する点は偶然の一致とは考えがたい。すなわち、二つの遺跡は、場所や成立年代に隔たりはあるが双方とも宮にほど近く、宅地は1町規模、宅地内は池を中心とした清浄な空間。しかも、池の水の給排水口までがほぼ同位置、池を挟む東西の広さも概ね共通している。

平安京十六町の水を中心とした清らかな空間の演出は、奈良時代の六坪にまでその起源を遡ることができるのではないであろうか。

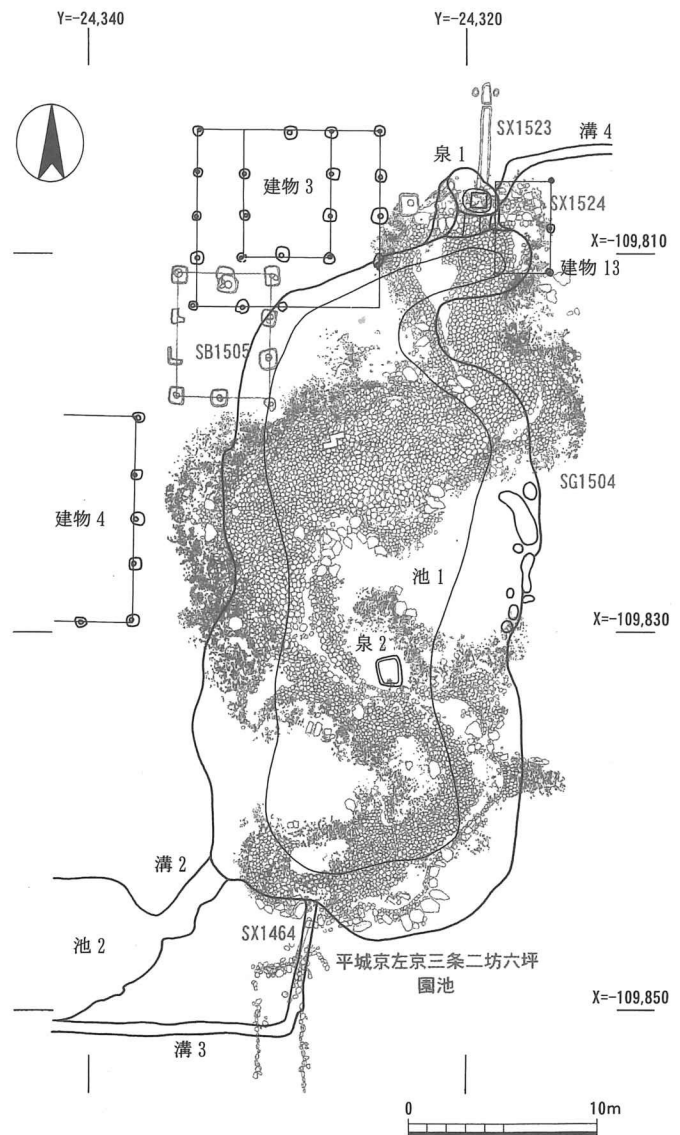


図86 園池遺構比較図 (1/400)

第4節 右京三条二坊十六町の建築遺構と齋宮野宮の建築について

1 齋宮について

右京三条二坊十六町に相当すると考えられる遺跡の発掘調査において、出土した墨書土器に「齋宮」「齋雑所」「齋舎所」と記されたものがあるところから、この遺跡は齋宮に関係のあるものと推測される。

齋宮は伊勢神宮に奉仕する齋王(未婚の内親王を卜定)のための施設であり、「延喜式」にあげられている施設は初齋院、野宮そして伊勢齋宮の別がある。卜定された齋王が伊勢へ下るまで予め禊齋の生活を送ることが義務づけられていて、その最初の手続きとして、宮城内に設定される初齋院に入り一年の禊齋の期間を過ごす。つぎに城外の浄野を卜して造られた野宮に入り、さらに一年間の禊齋期間を重ねる。三年目の九月上旬に野宮を出て、群行し伊勢齋宮に参入している。

なお、齋王に卜定された人が卜定以前に住んでいた邸宅または齋王の任を終えた人の帰京後の邸宅も広く解釈すると関連があるように思えるが、これらは齋宮とは呼べないし、邸宅の規模や家屋の構成にも別があるように考えられる。

上出の齋宮の三種の施設のうち、三条二坊十六町の遺跡に関係すると考えられるものは、その所在地に注目すると、宮城内の初齋院や伊勢齋宮は問題なく除外され、残るところは野宮にしばらくられる。野宮が造られる場所は一定していなかったようで、今日、伊勢齋宮と所縁があると伝える史跡には、市内右京区嵯峨野野宮町の野宮神社が著名であり、同じ右京区内に嵯峨野宮ノ元町の齋宮神社、嵯峨柳田町の齋明神社、西院日照町の野々宮神社があり、等しく天照大神を祭神とし、伊勢齋宮の禊齋地の一つであるとの伝えをもっている。^{註25}

2 齋宮の組織と野宮の建築

「延喜式」にみえる齋宮の組織は齋王を補佐するところの多くの職員からなり、別当を長官に多くの部署に分かれていて、その内訳は

別当2(内1人は命婦)、中臣1、忌部1、宮主1、内舎人1、大舎人2、膳部3、殿部3、炊部1、水部3、酒部1、掃部3、采女2、内女孺2、乳母3、宮女孺14、戸座1、火炬小子2、今良4人、仕丁12、女丁8以上80人(野宮129人)

野宮の職員は上の構成のうち、部署によってはわずかの増員がなされている。

この野宮での齋王の禊齋期間がわずか一年に限られていて、期間を終えると施設は取り壊され、その施設は齋宮の幹部聴員に配分された。即ち、内外屋ならびに垣の類は神祇官中臣に、出居殿御座装束は主神司中臣に、寝殿内雑物は主神司忌部にそれぞれ配分されることが決まっていた。この配分内容から野宮の施設を推測すると、まず内外の別があったようで、内院は齋王の禊齋、伊勢遥拝のための殿舎からなり、神殿、齋殿、出居殿と呼んでいる殿を中心に、齋王の居住する寝殿、近侍する女官の宿舍を付属したと思われる。また、外院は職員の勤務する諸司雑舎からなり、別当の庁屋を筆頭に日々の神前に供える御饌、御酒の調整や日常の衣食住の生活をまかなう

諸司の雑舎群が設営されていた。

3 発掘遺構の建築と野宮の建築

今回発掘した十六町のほぼ調査地区全域に分布して検出した遺構の性格を説き明かすことは極めて難しい課題であると言える。はじめに述べたように、出土した墨書土器に記された「斎宮」と関わる施設、上記の斎宮野宮がこの地に営まれていたとみる可能性は大きい。それでは検出した遺構が堆定される斎宮の施設構成にどのように関わっているのか次に検討してみよう。

十六町の敷地の、方一町の大きさを占めて邸地を限り、そのうちの西寄りに南北に大きく広がる園池がつくられていた。この池の北の畔に三面庇をもつ建物3がたち、その東に近く泉1があり、そこから湧き出る水は南の大池へそそいでいた。そして泉1に接して建物13がたつ。大池の西側中ほどに建物4があり、その東端の南北4間の柱列を検出しただけで、西面するのか南面するのか不明。大池の東方は野寺小路に近く南北行の柵1、柵3が長くつづき、この柵内の北側に建物1、その西南に建物2（三間三面屋）その西に接続して梁行一間の廊（建物14）が南北に長く北へ突き出ている。

柵3の南方、野寺小路に面してたつ建物15は門跡と推定される。この門から西方南寄り、敷地南辺を限る押小路に近く梁間の小さい建物群（建物5～10・17～20）が集中していた。

上記の建物遺構のうち、建物3は池畔にたち一部の柱は池面に乗り出して立てられており、泉1も近くにあることは、この建物が園池のつくる景観を眺めるためだけのものであるよりも、泉や池の水を汲み上げて使用する特別な行事のためのものと考えられる。例えば内院の斎殿として、神をまつり御饌を捧げ、奉仕のために禊祓を行なうための神殿であったろう。

建物4のある地区は西の道祖大路に近く、大路からの出入りがしやすいところで、発掘範囲外であるため遺構の有無を確認できなかったが、先の建物3に近く位置するところから斎王の住まい（寝殿）や斎王に奉仕する女官の住まい（対屋）そしてこれらの建物群へ出入りの門が開かれていたと推測したい。

また、大池の東方は外院を構成し、東の通用門より北には庁屋、膳部、炊部、酒部、水部、殿部などの神に供える朝夕の御飯や神酒など供物類を調製するための諸司雑舎がならびたっていた。そして建物14の北へ長く突き出た廊は斎殿へ供物を供えるための通い廊と見做せば、この長廊の普通ではない形態とその用法が納得できるのではないか。

また、東門から南の建物群については、外院のなかでも下級の官人や仕丁、女丁の住居や諸物資を収納する倉そして厩などの雑舎が置かれていたのであろう。

註

- 1 たとえば、平安時代前期の大規模邸宅である平安京右京一条三坊九町では、南限である鷹司小路に面して四脚門が検出されており、正門が南に設けられていたことが判明している。
村田和弘「平安時代前期の邸宅遺構－平安京跡右京一条三坊九町の邸宅から－」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001年
- 2 以前、平安京域で旧都からの搬入軒瓦が多い邸宅に大規模建物を伴う邸宅が多いことから、平安京造営段階における造宮使の京域整備と関連づけたことがある。しかし、搬入軒瓦の使用年代が平安時代前期まで遡らない事例の存在が判明したため、京域における他の事例についても検出遺構あるいは共伴遺物の再検討を行ない、平安京造営当初まで遡るかどうか厳密に検証する必要がある。
網 伸也「平安京出土の長岡宮搬入瓦」『月刊考古学ジャーナル』No.402 1996年
- 3 右京三条一坊九町で検出された正殿建物SB 9は、身舎が礎石建てで南北庇部分が掘立柱建物に復元されている。また、右京一条三坊十六町でも正殿建物S B 52が東西7間、南北4間の東西棟に復元されているが、掘立柱穴は南北と東の側柱しか検出できておらず、身舎部分は柱の痕跡が全く認められなかった。この建物も身舎礎石建ての大型建物と考えられる。
a 『埋蔵文化財発掘調査概報』1980－3 京都府教育委員会 1980年
b 『埋蔵文化財発掘調査概報』1981－1 京都府教育委員会 1981年
c 『住宅公団花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報－平安京右京土御門木辻－』 鳥羽離宮跡調査研究所 1975年
- 4 「作庭記」『羣書類従』
- 5 京楽真帆子「「寝殿造」はなかった」『洛中洛外－京は“花の都”か』朝日百科日本の歴史別冊歴史を読みなおす12 朝日新聞社 1994年
- 6 南 孝雄「平安京掘立柱建物の特性－庇付き建物の展開」『研究紀要』第1号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 7 森 蘊氏は平安時代の「寝殿造系庭園」について、地形や水系によって園池の意匠が決められる実態を、実地調査を丹念に行なうことによって明らかにされた。定型化した「寝殿造」を庭園史の立場から批判した先駆的業績であり、今回の調査成果も森氏の仮説を裏付けるものである。ただ、この邸宅が当時の典型的な貴族邸宅を反映しているかどうかは不明であり、むしろ平安時代の邸宅は機能に応じて多様な建物配置をもっており、定型化した「寝殿造」もその一つの属性にすぎないのが実態なのかもしれない。
森 蘊『寝殿造系庭園の立地的考察』 奈良国立文化財研究所 1962年
- 8 太田静六氏は「寝殿造」邸宅の復元を、文献史料の分析などから長年にわたり精緻に行なわれた。その成果は以下の文献で集大成されている。
太田静六『寝殿造の研究』 吉川弘文館 1987年
- 9 『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所 1986年
- 10 本中真『日本古代の庭園と景観』 吉川弘文館 1994年
- 11 早川庄八「斎宮寮の成立とその財政」『名古屋大学文学部研究論集』史学39 1993年
- 12 山本雅和「平安京の路について」『立命館大学考古学論集Ⅰ』 立命館大学考古学論集刊行会 1997年
- 13 柿田祐司「石川県津幡町加茂遺跡の発掘調査について」『条里制・古代都市研究』通巻17号 2001年
- 14 山中章氏は条坊交差点における側溝の優先関係を、都城交通の優先権の問題として取り上げている。平安京においても朱雀大路の優先権を認めつつ、第1次調査区を類例として基本的に北から南に流れる排水構造を指摘し、交通路として多くの橋の導入を想定している。
山中 章「古代都城の交通－交差点からみた条坊の機能－」『考古学研究』37－1 1990年

- 15 木下保明「平安京右京三条二坊2」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 16 a 堀内明博・木下保明「平安京右京三条二坊」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
 b 辻 裕司「平安京右京三条二坊1」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
 c 平田 泰・小檜山一良「平安宮・平安京右京一条三・四坊・二条二・三坊・三条一坊」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 17 a 神吉和夫・神田 徹・増味康彰・中山卓「古代都市の雨水排除計画－平安京を事例に－」『水工学論文集』37 1993年
 b 神吉和夫・神田 徹・中山卓「わが国の古代都市の溝について－長岡京と平安京－」『土木史研究』15 1995年
- 18 南 孝雄「平安京右京三条二坊」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 19 平尾政幸・辻 純一「右京三条二坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 20 なお、これらの所見に関しては、調査概要として以下の文献でも公表している。今回の考察は、拙稿にその後の整理過程の中で生じた問題点を加えたものである。
 網 伸也「平安京右京三条二坊十六町の発掘調査概要」『条里制・古代都市研究』通巻17号 2001年
- 21 『平安京右京六条一坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1992年
- 22 『平安京左京二条四坊十町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第19冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2001年
- 23 a 『本派本願寺名所圖會』博文館 1902年
 b 近藤知子「平安京左京七条二坊・名勝滴翠園」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 24 『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』（前掲註9）
- 25 所 京子「斎王野宮の位置と造営」神道史研究 第27巻－4 1979年

第6章 結 語

平安京右京三条二坊十六町は、平安宮朱雀門の中心から西へ1 kmあまりいった地点で二条大路に北面して位置しており、京内でも一等地に所在している。このように立地的に平安宮に近い地点で、邸宅の様相が1町規模で具体的に明らかとなったことは大きな成果である。とくに、市街地化した平安京城での発掘調査は対象面積が限られており、京内宅地の全容を明らかにするのは困難な状況の中で、このように平安時代中期の邸宅の盛衰が解明された意義は大きいといえる。

また、園池遺構を完全な状態で検出できたことも重要な成果である。近年、飛鳥京では伝飛鳥板蓋宮跡北西の飛鳥川右岸において広大な苑池遺構が発見され、平城京では法華寺阿弥陀浄土院の園池や建物が発見されるなど発掘資料の蓄積が豊富になっており、飛鳥京から平城京にかけての古代庭園の状況が明らかになりつつある。飛鳥時代が方形や円形を主体とする極めて人工的な様相の強い園池であるのに対し、奈良時代になるにつれて自然を意識した曲線の汀をもつ浅い園池に変化していくことが指摘され、汀の造作も飛鳥時代的な玉石護岸が残りつつも洲浜敷護岸が成立していくようである。しかし、平安京においては平安時代前期から中期の庭園遺構は一部の検出にとどまっており、奈良時代と平安時代後期の寝殿造系庭園をつなぐ明確な資料がなかったといえる。今回検出した園池遺構は、古代庭園史におけるこれらの空白時期を埋める唯一の資料として重要な意味をもっている。

さらに、園池だけでなく周辺に配置された建物群や植栽の様相も明らかになっており、園池をとりまく空間構成を復元することが可能となった。園池をとりまく空間には、自然景観を意識した植栽群とともに様々な儀礼空間が配置されており、それらは建物群と一体となって庭園全体を構成する。この邸宅では園池の西には池と一体となった主殿クラスの建物群が建てられ、東には広い「庭(おほば)」と南北廊を伴う建物群と対称的に配置されている。これらの建物群の配置は南面を指向せず、園池を挟んで東西に展開する事実も重要な所見といえる。また、植栽も庭園を構成する重要な属性であり、園池から出土した自然遺物の分析結果は園池周辺に植えられた草花木々を復元する貴重なデータを提示している。

出土文字資料としては、「齋宮」関係墨書土器がやはり注目される。「齋宮」墨書だけでなく齋宮の家政機関である「齋雑所」・「齋舎所」の墨書土器も出土しており、この邸宅に齋宮が居住していたことは間違いない。園池から出土した土器群の分析から推定できる邸宅の造営年代は9世紀第3四半期末から第4四半期初頭であり、最盛期は10世紀第2四半期ころまでである。この年代観を天皇の治世で考えると、清和天皇の貞観年間から村上天皇の天暦年間の初めにほぼ相当する。この間に卜定された齋宮は貞観元年(859)に卜定された恬子内親王から、天暦元年(947)に卜定された悦子女王まで11人おり、西暦900年前後に邸宅の再整備がなされたことを考慮すれば、寛平九年(897)に卜定された醍醐天皇の柔子内親王を第一候補に上げることができる。しかし、絶対年代を示す遺物が出土しているわけではなく、考古学的には確定できない。少なくとも伊勢

群行前に齋宮が京内に居住した地であり、皇族との深い関係のもとに維持されていたことを指摘するにとどめておきたい。

以上が調査成果の概要であるが、残された問題点も多くある。土器の分析の中で触れたように、土器型式から導かれる邸宅の存続時期が非常に長く、建物群の単純な配置や変遷とあわないのである。長期間にわたる園池の管理がなされているのであれば、園池と一体として管理されていたはずの建物群の増改築が遺構にあらわれてくるべきであるが、実際に検出した建物群には多くみても2時期の変遷しか認められず矛盾が生じている。建物構造の時期的変化、あるいは邸宅管理の実態も考慮したうえで再検討する必要がある。

また、遺物から導かれる造営時期が9世紀後半であり、平安遷都直後から邸宅が造営される以前の遺構が全く検出されないことも重要な所見といえる。前述したように当地は平安京でも一等地と想定できる地点であり、遷都後の土地利用がどのようになされていたのか問題となる。実際に右京のこの地域は9世紀後半以降、邸宅が多く造られる傾向にあり、平安京全体の構造論にも大きな影響を与えるであろう。

最後に平安京右京三条二坊十六町邸宅は、関係者の努力により全面保存されることになり、埋め戻した後は西京商業高等学校のグラウンドとして再利用されることになった。平安京邸宅が1町規模で保存されるのは今回がはじめてであり、遺跡保存の観点からも非常に喜ばしいことである。平安京を代表する史跡として有効に利用されることを望んでやまない。

付 章

第1節 泉出土の人形代について

－鴨社の祓から、人形・斎串の神事をみる－

新木直人

1 官祭の解除・御祓の祭祀について

平安時代には、神仏習合思想と道教などの影響を受けた信仰が混然一体となって、社会全般に根深く浸透していた。呪符や呪術的な信仰が隆盛を極めた。それを反映して各地神社の祭事は、新たな展開をみせている。

ここでは、そうした時代背景のなかで賀茂御祖神社すなわち、鴨社における『延喜式』収載の官祭の解除と鴨社古来の御祓についてみてみよう。

解除とは『延喜式』に、定められた祭祀に臨むにあたり行なわれる儀礼のことである。『字類抄』には、罪や穢れを祓い清めることとある。鴨社における御祓とは、人の心の浄化のことである。心のくもりやわだかまりが意識的であれ、無意識的であっても生の生成を阻害するものを一切除いて清らかな、生まれたばかりの心に立ち返るための作用である。単に罪や穢れを祓うということにとどまらず心身を清浄に保ち、森羅万象すべてから力強い生命力あふれる霊力を得て、天災や苦難を乗り越えられる威力を乞い願う神事であった。官祭の解除にあっても、鴨社の御祓の理念を求めて併用されることが多かった。

延暦十三(794)年十二月二十一日、桓武天皇は、平安京遷都に際して賀茂両社へ行幸され祭祀を親斎された。^{註1}以降歴代の行幸親拝の記録は枚挙にいとまがない。承保三(1076)年四月二十三日、白河天皇の行幸親拝より、式日の制が定められた。院・上皇・法皇の御幸は、^{註2}応徳三(1086)年、白河上皇より、御参籠御幸は、^{註3}治承三(1179)年四月二十三日より五ヶ日間、後白河法皇より^{註4}定例となった。また関白賀茂詣の制は、天禄二(971)年九月二十六日、摂政太政大臣藤原伊尹の^{これたが}拝礼があつて以来定例とされた。いずれもこれらの祭祀には、官祭の解除が行なわれた。

行幸の時の解除については、『玉葉』(玉海)に「後鳥羽院、文治三年十一月十四日、賀茂行幸あり。(略)次に御手水事ありて御拝の座にうつりつかせまします時に、摂政御座のほとりに候せらる。頭中将御笏を献ず。次御贖物二膳を供すれば、宮主北縁下に着て御麻を奉る。頭中将取伝えて供し奉れば先御祓の事あり案のものと軾に着ス。次上卿南幔門より入前庭を経て着座し給へば、御馬一疋将監是を引。次走馬三疋、舞人是を引。次御祓いおはりぬれば、宮主御祓いの間を退出れば、主上解縄をとき人形を撫給う事例のごとし。次神馬、走馬を引出し御贖物を撒しさる。」とある。「御麻」とは麻斎串の事である。「人形」を「撫給」う、ともある。この解除の次第は、延暦十三年以来変わらずに行なわれていたであろう。

一方、賀茂齋院の斎王御禊については、『社記』に「齋院の御禊といへるは鴨川に行啓なりて

御祓ある事也。その儀式は二日以前に齋院別当齋院御祓点地ト言フ陰陽寮その外供奉の諸司を相具して河原にいたり、そのところを点し定めて奏聞す。齋院御神事の御所を宮城の中、便所に定められて是を初齋院といふ。この院にいられ給ふとて鴨河原へ御車に召しておもむかせ給ふ。その行列走女十人・御車ぞひ十四人・手振十人・御よそひ物の唐櫃・御手水の具・入りたる櫃各一供共膳・雑器・衣服・禄物などの唐櫃あいつらなり、次膳部^{かしわべ}六人・舍人二人・荷領^{にりょう}十人・蔵人所^{べいじゆ}の陪従六人・齋院女別当など御車のあとにならび従う。次に公卿勅使一人・齋院別当一人・五位四人・六位四人・並御前を駈る。左右の近衛各二人・左右の火長十人供奉し、左右京の官人兵士を引率してむかへ奉る。山城国司郡司どもを引ゐて京極の大路に祇候しまいる。弁一人・太政官の史生二人・官掌一人供奉の諸司を引ゐて御祓の所に参りその事を行ふ。齋院御幕の内に入らせ給ひ、河水に臨みてはらへし給ふ。神祇官中臣御麻を奉り、宮主祓祝詞^{のつと}をよむ。事をわりぬれば勅使以下に饗膳を供し御櫛をたつる。この初齋院にして三年の御潔斎ましましてその年の四月に始めて賀茂紫野の野宮にうつり入らせ給ふ也。その儀先ず吉日をえらび又河原の御祓あり。初齋院の御祓の時のごとし。」(以下、略)と、御祓の全容が判明する。

この常設の殿舎が造営される寸前の寛治七(1039)年四月十二日、『後二条師通記』賀茂祭齋王御祓の条りの付図に「齋院河原屋圖」(図1)の記載がある。

また『社記』には、「齋院河原屋」における御祓の詳細図(図2)が収載されている。

「祓物」について、『延喜式』巻六、神祇、齋院司の条りをみると、「祓物 五色(絹)各四尺。塩二升。酒、米各一斗。鰯、鰹、海藻各三斤。匏^{ひさご}一柄。輦^{註7}籠^{れんろ}一腰。加^{註8}枋^{かりよく}。庸布二段。食薦^{こも}二枚。黄檗^{きはだ}五斤。安芸木綿^{はんもめん}三両。凡木綿、麻各一斤。鋏二口。稻二束。夫二人。」(略)「率供奉諸司。就祓所行事。齋王倒幕臨流而禊。神祇官中臣進麻。宮主読祓詞。」(略)とある。

『貞観儀式』の齋王御祓の条りに、(略)「齋王已倒幕臨流而禊。神祇官中臣捧進麻授院司。院司転取付宣旨供之訖。返授院司、院司授中臣、中臣受之授宮主。宮主受之捧持読祓詞。」(略)とある。また「右毎年十一月上卯日鶏鳴。齋王潔斎。遥拝奉幣於神社。」(略)とあるのは、賀茂臨時祭、相嘗祭の齋王鴨社遥拝のことである。遥拝に際しても解除が

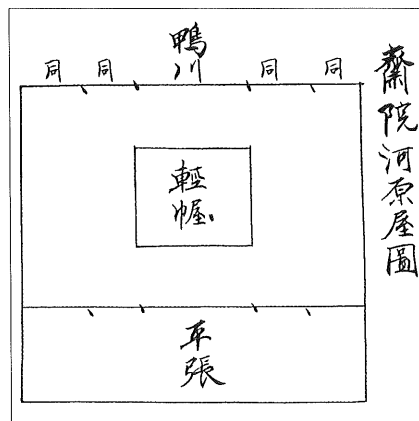


図1 「齋院河原屋圖」

『後二条師通記』寛治七(1039)年四月十二日の条り、附図を『社記』斎には詳細に記述している。

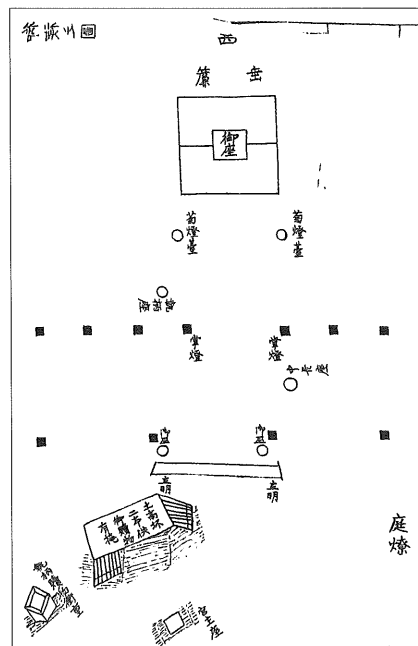


図2 「齋院河原屋圖」

『後二条師通記』寛治七(1039)年四月十二日、齋院御祓の条りの、附図。

第1節 泉出土の人形代について

行なわれたことを記している。

関白賀茂詣の解除は、どうであろうか。『執政所抄』^{註10}に、(略)「中申日。御賀茂詣定事。恒例大事也。」(略)「前三ヶ日被行御祓。下家司一人調備尾襖具候之。当日早旦御祓之後、御出於弘庇、御覽神宝。」(略)「下御社御祓戸輕幄、」(略)「供御祓具。御料一前居士高坏。次公卿衝重。御幣神宝神馬引列畢。陰陽史着円座。掃部寮敷之。次土瓶役下家司俊清。御祓畢。」(略)とある。「土瓶」とあるのは、息を吐く土器の壺のことである。関白賀茂詣の場合は、「弘庇」^{ひろびし}とあるように、御所の出で立ちの時と、「下御社御祓戸輕幄、」すなわち、鴨川の解除御所と二度にわたって行なわれている。

賀茂祭の解除は、『貞観儀式』賀茂祭警固儀の条り、(略)「内侍已下与使等共向内藏寮。於庁事前、解除。」と、ある。前出の関白賀茂詣と同様に、出で立ちの時、内藏寮の庁舎で行なわれ、さらに鴨川の解除御所において解除をされていた。『延喜儀式』逸文「鴨脚秀文文書」所引に、(略)「祭日已一克。奉幣使等就内侍奉參社状。」(略)「内侍已下与使等共向内藏寮。於庁事前、解除。」とあるのもそれである。

『鴨年中行事』^{註11}に、「西日葵祭也。」(略)「三日禊齋前夜參籠也。朝廷之儀式畢近衛使參向当社。」(略)「次一之鳥居ヨリ下馬次手水次祓幄ニテ解除。」(略)「次御撫物奉納。」(略)「翌日御撫物返物。但時依御所日異也。」(略)と、ある。この資料に記録のある賀茂祭は、文亀二(1502)年四月十九日の賀茂祭を最後に応仁・文明の乱のため中絶したのを、元禄七(1694)年四月十八日再興された。その当時の記録が基となっている。文亀までの賀茂祭解除は、鴨川の解除御所で行なわれていたが、乱の兵火により解除御所が焼亡したので、元禄七年、賀茂祭再興時には「次一之鳥居ヨリ下馬次手水次祓幄ニテ解除。」(図4-1)と、南口鳥居の西脇に臨時に設けられた幄の解除所において行なわれた。そうして、「御撫物奉納。」とあるのは、直ちに朝廷へ人形が届けられ、翌日あるいは数日後、自ら解除された人形が朝廷から鴨社へ戻されるのであった。

賀茂臨時祭解除は、『藏人式』逸文「政事要略」所引に、(略)「時刻出御。内藏寮奉御贖物。藏人自侍伝取供之。次使及宮主、自仙華門參入着座。次舞人牽御馬。自北廊東戸參入。御祓畢。」(略)「次撒御贖物。」(略)とある。基本的に解除の構成は、賀茂祭・臨時祭・相嘗祭等の官祭に関しては、勅使として出で立つ前、御所内での解除と、鴨社に到着し、鴨川の解除御所での解除の二重構成になっていた。さらに、御贖物が同時に朝廷に届けられた。人形の御撫物が行なわれた後、鴨社へ戻されていた。

次いで、古代から鴨社ではどのように御祓の祭祀が行なわれてきたのか、『神道伝書』^{註12}と称する口伝書をみてみよう。くだんの口伝書は「大清祓之傳記」として伝えられている。また注書があって「只、清祓トイウベシ。シカシ常ノ清祓式トマギレヌヨウニ大ノ字ヲクワフル也。」とある。

「前ノ日、職官位姓名家ノ掃除ヲシ庭ヲハキ、サテ穢氣不浄触来ノナキヤウニ敬ムヘシ。当日、庭上ニ食薦ヲシカシメ高案ヲモウク。此高案ハ神座トス。其高案ノ上ニ榊臺ヲ置。榊臺ナクハ不苦。シカシ別ニ神体ヲコシラユルコトナク榊勸請ニテ其榊ヲ神座ノ高案ノ傍ニ置コトナレドモ其

櫛ヲ見ネハ、折ルニ力ナキノヨシ申シ傳ヘテ櫛臺ヲ設ケ
けいひつ警蹕ノ櫛ヲ立置コト也。御飯臺一脚高案ノ前ニ置ク。但、
 大ノ幣十二本。此御飯臺ノ上カラ高案ニモタシカクル也。
 小ノ幣十二本ハ食薦ノ上カラ此御飯臺ニヨセカクル也。御
 飯臺ハ幣ヲ供ズル案也。又御飯臺一脚。是ハ神供備進ノ臺
 也。皆以テ檜木ニテ調フ。何モ白木也。

清祓串一本。是ハ斎王、権官ノ身ノ清祓ニ用ユ。但、一
 座祓ノ幣ニテモ太麻ニテモ用ユ。何レヲ用ヒテモクルシカ
 ラザルコト也。

警蹕ノ櫛一本。常ノ清祓式ノゴトシ。

神供四膳。御酒。銚子ヲ用ユ也。

御菓子四膳。各四方ヲ用ユル也。但、高坏ニモリ高坏一
 臺ニテモ不苦也。」

以上が祭祀が行なわれる場所の設営である。続いて、
 「采女見神供式」というのが行なわれる。「采女」とは、鴨
 社独自の制で忌子女、いむこのめ雑仕女ぞうしめと称する御祓や御供え等を奉
 仕する女性神官のことである。図3の手前が忌子女である。

「大幣十二本。幣串 篠竹ヲ用ユ 長三尺、是ハ案上ニ供ス。
 天神ノ幣也。

小幣十二本。幣串 同断 一尺二寸、是ハ案下ニ供フ。
 地祇ノ幣也。案ニヨセカケ立ツル也。近代多クハ幣台ヲト
 トノヘテ立ツル也。」以下にこのことの口伝として説いて
 いる。

「天神地祇ニ幣ヲ奉ルハ天津神ハあめのいわと天磐戸おしひらきてきこしめしヲ押開所聞食。
 国津神ハたかやまひきやま高山短山いほりノ伊保利ヲ搔別テ、祓ヒ申シ清メ申ス事

ヲ聞食玉ヒテ、諸ノ不吉ノ事ヲハ他方ヘ退ケ、若愚意ニシテ犯セラレントコロノ不信懈怠不浄ノ
 咎崇アランヲハ神直日大直日ニ見直シ聞直シマシテ、某姓名ヲ平安静謐ナラシメ玉ヘトノ祈祷也。

十二本ツツ用ユルハ十二支ノ意ニテ四方四隅マン丸ニ、八百万ノ神達ヘ残りナク奉ルノ意也。
 是口伝也。ヨク心得アルベシ。」とある。

次が「大清祓之式」である。

「先 斎主出仕。次 権官、祓串ヲ持進。斎主ノ身ヲハラフ。其儀先ヅ権官ハ斎主ノ前ニそんきよ蹲踞
 シテ小揖シ左右左ト祓フ。此時、祓ノ歌三返。又小揖シ退ク。次 斎主中央ノ座ニ着ク。次
 権官斎主ノ後ノ座ニ着ク。次 権官警蹕ノ櫛ヲ持進。斎主ニ授ク。斎主櫛ヲ握テ再拜シテ平伏。
 神ヲ唱ヘ警蹕三声。又再拜。此時、神奉招禱。

せおりつひめ瀬織津姫。はやあきつひめ速秋津姫。いぶきどぬし伊吹戸主。はやさすらひめ速左須良比姫。此四神ハ中臣祓ニ伝フ。皆傳アル神ナリ。



図3 「樹下神事」 酒井包一画

御幣を捧持するのは預太夫。正官神官)。忌子女(手前の童)。座前には斎串を立て、散米、切麻がみえる。御手洗川(あるいは奈良の小川の場合もある)の流れに面し、樹下に坐して神事が行われていた。御祓の図とも呼ばれている。



図4-1 賀茂祭図



図4-2 衝重と解縄・散米

元禄七(1694)年四月十八日、約200年ぶりに再興された賀茂祭(葵祭)に際して勅使解除の祓物について鴨社公文所司林康満の記録

図4-1の左下「衝重」には、解縄(左ねじ)(右ねじ)二筋を土器に入れる。散米(切麻と玄米を混ぜ合わせたもの)を置く。衝重は、唐織あるいは錦の衿(敷物のこと)の上に置く。

次 権官清祓机ヲ斎主ノ前ニ置テ退ク。次 斎主一揖シ、笏ヲ右ノ旁ニ置キ清祓串ヲ取テ左右左ト祓ヒ、(略)次ニ切麻、散米、又御祓串ヲ取テ左右左ト祓フベシ。次 撰掌。拍手ニツ。笏ヲ取テ一揖。次 権官撤祓机。次 神供ヲ献ス。権官伝供。次 神供祝詞、拍手ニツ。一揖。次 奉幣。先 大幣十二本ヲ握ル。両段再拝シテ権官ニ渡ス。(略)次 権官幣ヲ持

進テ、案上ニ立ル。幣使返申ノ式、如常。小幣十二本ヲ握ル。両段再拝シテ幣ヲ権官ニ渡ス。権官幣ヲ持進テ、案下ニ立ル。返申ノ式、如常。次 一揖、拍手ニツ、撰掌。三種大祓八十座。祈祷、拍手ニツ。一揖。次 権官祝詞 扶文状 持来。次 斎主祝文ヲ笏ニ取副、再拝シテ読之。読蹕。又再拝。(略)祝詞(略)。次 祝文ヲ権官ニ撤ス。次 撰掌。拍手ニツ。次 御幣、神供ヲ撤ス。次 斎主櫛ヲ取テ再拝。警蹕三声。又再拝。此時、祓四神奉送也。櫛ヲ左ニワキ狹テ拍手ニツ。次 櫛ヲ権官ニ渡ス。此櫛ハ大川ヘ流サスベシ。次 退座。」とある。

これら資料の記述からみると、官祭の解除の御贖物は、^{みあがもの}衝重(折敷高杯ともいう)に^{ついで}解縄、散米(図4-2)を置く。人形、斎串あるいは、麻斎串は案に置かれる。この設定は、解除と御祓が併用して行なわれていたからである。このときの人形は、銀人である。今日まで賀茂祭等官祭の解除にはこの形態が伝承されている。木製の人形は、官制祭祀以外の祈願に用いられることが多い。

人形を大別するとこの2種に分けることができる。また古代から氏神の祭祀は、人形を用いる例は少なく斎串、麻斎串あるいはどちらか一方のみが多い。「御幣」は、御祓具ではなく「大清祓」にある「天神ノ幣」「国神ノ幣」の様に神霊の宿る御幣である。

また例えば、賀茂臨時祭解除について、先に引用した『蔵人式』逸文のほかに『宇多天皇御記』には、御幣「三裏」(^こ裏は、かたの意)とある。『西宮記』(賀茂臨時祭条)には、「延喜二十一年、御幣六裏、東西机各置三裏、(略)、御禊了、使就机辺捧幣、即奉拝之惣三个云々、」とある。要約すると、「賀茂臨時祭に出御があつて、内蔵寮の奉る御贖物を蔵人が侍臣から受け所役する。御禊が畢ると宮主、^{とおつら}十列(武官のこと)が退出し、御贖物も撤する。次に使が奉持する御幣に御拝が行なわれる。次に使が御幣を奉持して退出すると、入御される」ということである。この時の「御幣」は遥拝の^{よりしろ}依代の御幣である。

2 解除御所

『延喜式』初齋院の条りに「為初齋院。即先臨川頭。祓禊乃入。」と時子内親王の初齋院の御禊ごけいを記している。『類聚国史』には、「天長八(831)年十二月九日、為前賀茂内親王相替祓干鴨川。」とある。この時の内親王は『齋院記』に、「天長十(833)年三月二十六日、高子内親王、卜定。」とあり、『続日本後紀』^{註13}には、この時より、鴨川畔を御禊所と制定せられたとある。糺の森の西方、神館御所と鴨社神宮寺西塔との間に解除所が設けられていたことが、『鴨社古図』^{註14}(図5)や『社記』にもみえ所在地は、明かとなっている。しかし、解除という古代からの御禊の性格上特定の殿舎はなく、齋王の御禊など必要に応じて臨時的に幄舎などが造営されていた。供奉の諸官は、隣接の神館御所の殿舎が併用されていた。

「天永二(1111)年四月十日、鴨社解除御所建立。」との記述が『中右記』にある。この頃になると常設の殿舎が造営され、解除御所が成立している。ちょうど、天永元年四月二十七日に第四回、下鴨神社式年遷宮が斎行され、神館御所^{註15}に並行して鴨川辺に建立されたものと思われる。

『古事記』崇神天皇の条りに「河瀬神」との記述がある。また同じく景行天皇の条にも「河神」とある。『日本書紀』には仁徳天皇紀に「河伯」(河神)とあり、川を神の鎮まる処としている。川の流れや水の恩恵に対する特別な信仰が発生し、神社の成立へ展開する起因ともなった。

水には、様々な強力な力がある。それを人々は霊力とも云っている。物事を清浄にし、浄化する力のほか、万物を生成、育成させるなど優れた力は数限りない。その神秘的な威力に古代の人達は、神観念を見い出していたのである。鴨社の神道説は、水が地中から湧き出してくる、生まれたばかりの自然より「御生」^{あれ}る威力によって、新たな生命-強力な力を得る、と考えていたのである。その「御生」^{みあれ}に臨場して人形代に威力を息吹くのであった。

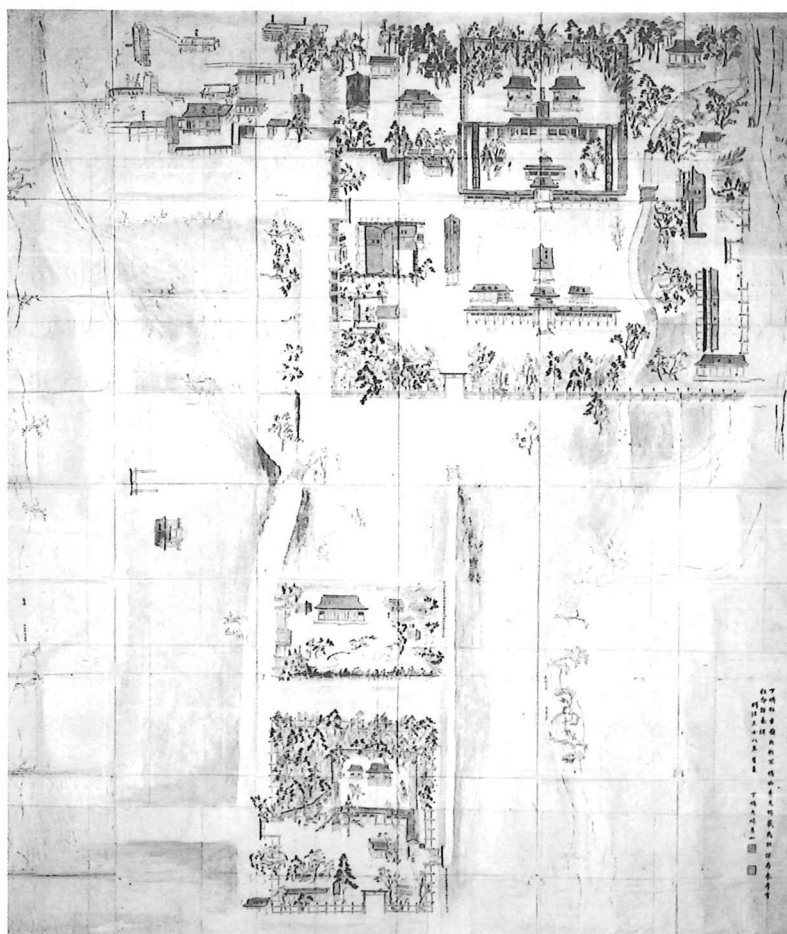


図5 『鴨社古図』

この絵図は、第八回、建仁元(1201)年十二月十日、式年遷宮のため元暦元(1184)年あるいは、建久七(1196)年に描かれたとみられる原図を鎌倉時代に書写したとされている。中央左の鳥居が解除御所。

3 人形代

一般に人形といえば大祓である。人形を人の身代わりとして、一撫一吐し穢れや疫疾を祓やることで知られている。その意味もあって人形代と呼ばれているが、一般的には略して人形と称している。その大祓の起源は、『古事記』によると仲哀天皇崩御の条り、『日本書紀』天武天皇五年八月辛亥(十六日)条りの「大解除」であろう。『令集解』諸国大祓の条りの「古記」と天武天皇五年の条りの祓物とを比較検証された熊谷保孝氏は、類似しているので『神祇令』の法源として指摘されている。従って、『大宝令』の頃には制度化されていたのであろう。古代中国に起源をみる人形が信仰や文化と共に我が国に渡来し祭祀に登場するのは、この頃からとみられる。

『延喜式』(巻一、神祇一 四時祭式上)に「六月晦日大祓 金銀人像二枚」とある。また(巻二、神祇二 四時祭式下)「毎月晦日御麻 鉄人像 四枚」。(巻三、神祇三 臨時祭式)「八十島神祭 金銀人像各三十枚」。(巻四、神祇四 伊勢太神宮式)「鋤鋤柄採祭 鉄人像八十枚」。(巻五、神祇五 斎宮式)「河頭祓祭 鉄人像二枚」等々の記述がある。

また『延喜式』の木工寮式には、人形の形状などが記されている。「金銀人像一枚、長一尺 広一寸」・「木人像、長八寸 広八分、其面飾以金銀」と、大きさや製造過程が記されている。記述には、「人像」・「偶像」とあるが「ひとがた」と読んでおり、「大祓」を始め四時祭の解除に用いる人形である。このあたりの検証は、泉武氏^{註17}が実に詳しくしておられるので、そのままをお借りする。

人形の製作は木工寮式によると金属製の人形は鉄が素材となり、その上に種々の加工を施したようである。四時祭式大祓では「金銀塗人像」とあり、木工寮式では「押金銀薄」とあることなどから素材に金銀を塗るものと、薄(箔)を貼り付ける二種類の方法があったようである。木工寮式の年料には練金一両、銀二両と金薄一四四〇枚、銀薄一四四〇枚を挙げており、人形一枚につき三枚の薄を必要とした。木を素材とした場合は「其面飾以金銀」とあり、ここでも鉄素材と同



図6 賀茂御祖神社解除の銀人
『延喜式』に「銀薄」を貼る、とある製法の人形。元禄七年、賀茂祭再興当時の人形。



図7 賀茂御祖神社解除の銀人
江戸時代末期に製作された「銀薄」銀人の人形。



図8 賀茂御祖神社解除の銀人
『延喜式』製法、銀を塗った人形。明治十七(1884)年、賀茂祭再興時の人形。

じように練金銀によって製作されたものとみられる。このようにみてくると金銀の使用は人形に必要不可欠であったとみられる。と、報告されている。

現在なお人形の伴う神事は鴨社で行なわれている。(図6)は、賀茂祭が乱により、文亀二^{註18}(1502)年に中絶した後、元禄七(1694)年四月十八日再興^{註19}された頃の銀人として伝えられているものである。長さ8cm、幅6cm、厚さ0.3cm。厚紙に型圧しして銀薄を貼ったものである。(図7)は、江戸時代末期の官祭解除の薄を貼った人形である。前記した銀を塗った方の木工寮式の製法である(図8)は、製法・大きさなどはほぼ同じながら、銀を塗ったもので、明治初年、祭祀改正以降に用いられていた銀人である。いずれも先に引用した『延喜式』に規定をみるのと変わらない。これ以外に木製の人形がある(図9)。長さ10.4cm、幅9.2cm、厚さ0.8cm。ただし人体を模造した人形ではなく、装束を着けた姿であり、用途が限られた氏神祭祀の特別な儀式用ではなかったか。いずれも、先の『延喜式』に定めのある寸法とはかなり相違があるが、近世官祭の解除に用いられていた。(図10)は、賀茂別雷神社の人形(7cm×3cm)。(図11)は、春日大社の人形(10cm×5.5cm)。同じ官祭であってもこの二社の場合『延喜式』の製法とはかなり異なった独自の様式を継承されている。

ここで全国で実施されている発掘調査の成果をみてみよう。水の湧き出るところを神聖化して祭祀の場所とした古代の遺跡が数多く報告されている。

律令国家祭祀として制定された大祓や官祭の解除、あるいは神祇信仰と道教信仰との混在する御祓と称する祭祀が井戸や湧出地、泉の流れの側で行なわれていたことが、出土する土馬や人形、斎串、剣、鏡などの祭祀遺物によって推測させている。井泉の神霊の力によって更なる湧出や、様々な祈願成就を込めて行なわれた祭祀儀礼への奉納の神宝であり、^{ほうさい}奉賽の祭具であった。

これらと共に出土する木製の人形については、金子裕之氏の^{註20}論考がある。それによると平城宮壬生門の調査で判明した祓には、複数の人形を組み合わせ、他界に送るため馬形や鳥形、斎串など木製模造品類を用いていた、との報告がある。また、山形県俵田遺跡から出土した祭祀遺物に

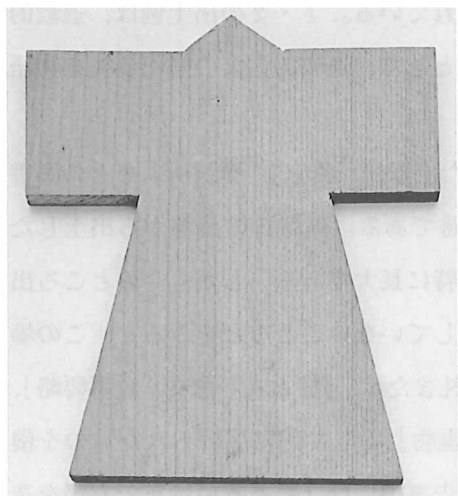


図9 木製人形

賀茂御祖神社氏神の神事の人形。



図10 木製人形

賀茂別雷神社官祭解除の人形。桧製。



図11 木製人形

春日大社官祭解除の人形。黄蘗製。

第1節 泉1出土の人形代について

表1 京都市域、人形及び斎串出土主要遺跡一覧表

番号	遺跡名・住所	出土遺物の概要	寸法 (cm)	報告書名
1	水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊 (伏見区流水垂町他)	長岡京期の川跡から人形12点出土。全身に黒点が描かれた、痲瘡の羅患者の祈願と思われるものもある。	長さ19.0以下から78.0以上のものあり。	『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
2	平安京右京八条二坊二町 (下京区西七条石井町 京都市立七条小学校)	溝などから人形7点。写実的。9世紀前半。	残存部の長さは、12.0～35.0。	『平安京右京八条二坊』『京都市埋蔵文化財調査概要昭和60年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
3	平安京左京七条一坊十三町	井戸から烏帽子を冠った男性像(杉材)の人形1点、斎串3点(檜木材)出土。9世紀中頃。	人形は、長さ12.7、幅2.2、厚さ0.1。 斎串は、長さ10.0～15.0、幅1.5～2.0、厚さ0.1。	『左京七条一坊十三町 平安京東市外町の調査』京都平安学園平安中・高等学校 1985年
4	平安京左京八条三坊二町 (下京区西洞院通塩小路上 東塩小路町)	溝から人形3点。頭部のみ、脚部のみと、未製品が出土。同じ溝から斎串4点も出土。人形・斎串共に9～10世紀。	未製品の1点は、残存長13.8、幅2.8、厚さ0.4。 ほぼ完存する斎串は、長さ20.3、幅1.2、厚さ0.15。	『平安京左京八条三坊二町-第2次調査-』平安京跡研究調査報告第16輯 財団法人古代学協会 1985年
5	中久世遺跡 (南区久世殿城町)	川跡から人形7点が、削りかけ、墨書人面土器と共に出土。9世紀前半。	ほぼ完存する1点は、長さ19.0、幅2.0、厚さ0.15。	『平安京跡発掘資料選』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1980年
6	中臣遺跡 (山科区勤修寺西金ヶ崎町)	井戸から人形及び削りかけ9点出土。9世紀後半～10世紀前半。	完存品数点あり。長さ16.6～26.0、幅1.5～2.5、厚さ0.2～0.3。	『中臣遺跡-文化庁国庫補助による発掘調査の概要-』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1977年
7	平安京右京三条二坊十六町 (中京区西ノ京東中合町)	泉から写実的な人形が1点出土。10世紀前半。	長さ65.0以上、幅7.0、厚さ0.4。	本報告書
8	平安京左京四条一坊五・六町 (中京区壬生坊城町)	井戸から人形(立像)1点出土。胸部に「秋野方」の墨書。9世紀前半。 また、井戸・溝から平安時代の人形1点。平安時代末期の墨書人面木札3点出土。 この他、鎌倉時代の人形1点、同座像1点出土。 井戸から9世紀前半の斎串10点出土。	立像は、高さ14.5、幅3.0。 人形は、長さ11.9、幅2.4、厚さ0.2。 木札は、長さ13.5～14.1、幅0.6～0.9、厚さ0.1～0.2。 斎串は、15.0～24.1、幅2.2～2.7、厚さ0.15～0.2。	『平安京跡発掘調査報告書 左京四条一坊』平安京調査会 1975年
9	平安京左京九条二坊十三町 (南区西九条春日町)	溝から人形及び斎串が出土。9世紀後半～10世紀初頭。 桃山時代から江戸時代の御土居の堀から人形が舟形等と共に出土。	— —	『平安京左京九条二坊』『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年

基づく復元を試みられた。

平安京はどうであったろうか。手元にある発掘調査報告書・概要を基にして、井戸あるいは溝などから出土した資料をみてみよう(表1)。

官祭解除の御祓具人形は、資料が示す限り銀人が用いられている。1・2の出土例は、道教的色合いの濃い儀礼を思わせている。特に斎串が伴わない例として、道教的信仰の祭祀儀礼を物語るのではなかろうか。

7の、右京三条二坊十六町(本報告)は、池跡から出土した土器に「齋宮」「齋雑所」などの墨書があり、「齋宮」に卜定された皇女の居館と考えられる遺跡である。同遺跡の泉跡から出土した人形代(原色図版8)は、他の遺跡出土の人形代と比較して特に長大である。しかも今のところ出土例が1点ということ、他に御贖物と思われるものが出土していないことなどをみると、この場所で祭祀が伴う人形とは考えにくい。特別に行なわれた儀礼または、『蔵人式』逸文「政事要略」、『鴨年中行事』の記録にあるように官祭解除に際して「御撫物」として館に届けられたものを儀礼の後、湧泉へ鎮められたのではないかと考えたい。報告書中には「紙あるいは布で衣服を造り飾り付けた可能性もある。」と報告されているところをみれば、人形代を超越して神像そのものではなかったかとも考える。あるいは、10世紀半ばとなれば「鴨人形」の例があるように、人

形代の一類は、「ニンギョウ」へと展開していくその過程を示す遺物ではなかったか。

いま一つは、同書では大型の人形代を女人像と考えている節がある。しかし、どう見ても女性像とはみえない。衣紋は10世紀中頃までの男性の朝服、あるいは上級官吏の礼服姿ではあるまいか。冠は、礼冠ではなかろうか。また顔の両側の髪様のものを^{びんそぎ}鬢除と解釈された結果、女性像とされたのではないかと思うが、これは^{ゆうかざら}木綿鬘ではないかと思われてならない。

神社の^{ししこま}獅狛は、雄雌のない想像上の動物とされている。また仏像も性を超えた存在であるように、現実から遊離した次元を表現しているのではなかろうか。さらに最も特徴的な点は、口も鼻も二重に描かれていることである。1の水垂遺跡の出土例が示しているように、人形代の全身に黒点を付け疱瘡の治癒を祈願したと思われる人形と同様に、この人形代も内面の心の病、あるいは思い悩んでいる様を顕そうとしたのではなかろうか。もっと素直にみれば、言霊信仰に基づく祈願ではなかったか。

古代、無文字時代の人間相互の意志の伝達方法は、言葉や擬音、身振りなどであったことは想像に難くない。神祇信仰の時代は、自然のモノ、動く全てのモノに魂が宿り、超自然の力の存在を認めていた。やがて自然現象の神々は、日の神となって自然の神々の中心的存在となる。鴨社の神道説が口伝するのは、自然神に象徴される稻魂・船魂・木魂・人魂・国魂などの様に、見ることや触れることのできる具体的な神々がやがて^{いざなぎのみこと}伊弉諾尊、^{いざなみのみこと}伊弉美尊という人格神から^{あめのみなかぬしのみこと}天御中主尊、^{たかみむすびのみこと}高産靈尊という抽象神が顕れ、具体から抽象へと思惟が展開する様を表している。

言語機能の面においても、魂・霊・日など言葉に神秘的な観念の働きがあることを感じていた。言葉の機能には、呪歌・呪文・呪詞など呪力的信仰が言葉の神格化と共に様々な習俗を生むことになる。それは社会のどの階層にも大きく影響を及ぼしている。

タマ→魂・玉・霊は、^{うかのみたま}宇賀霊の様に言葉や事物に内在する霊力のことをいっている。またムス→産・成は、生産・生成の根源となる生命を生み出す力^{あれ}「御生」。ヒ→^{ひこ}日子・^{ひめ}日女は、その自然を超えた機能を顕す、といっている。

史料によると、文武天皇六年十二月、国家的儀礼として大祓が制定化されたことにより『古事記』に「^{ふとのりとことほぎまをし}布刀詔戸言禰白」、『日本書紀』には「^{ひろきあつき。たたえごとのみまおさむ。いまだかくのことのうわしきことあらず}広厚。称辞祈啓矣。未有若言之麗美也。」また『万葉集』巻五の山上憶良「好去好来歌」(894)に「神代より^{いいつて}言伝て来らく^{そら}虚みつ 倭の國は^{すめらぎ}皇神の^{いつく}厳しき國 言霊の幸はふ國と 語り継ぎ 言ひ継がひけり 今の世の 人も悉 目の前に 見たり 知りたり」とある。言葉に特別な霊威がある存在として古代から口承、継承されてきた大祓詞が『延喜式』祝詞に成文化されている。祓詞に古くから知られているのに中臣祓のほか、最要祓、最上祓、三種大祓、六根清浄祓、身曾貴ノ大祓、一切成就祓、十種ノ神宝を八部の祓と呼ばれている。平安時代から百度祓、千度祓、万度祓と称してこれらを繰り返して暗誦してきた。まさに言霊信仰の故である。

こうした時代背景があって人形に秘められた祈願は、都の人口増加に伴い繁雑極まる社会現象を生み出した。動乱、政争等々、都人の苦悩は増えたはずである。その苦しみは、具体的なもののから抽象的・内面的なものへと展開したのであった。その苦悩を託された人形は、やがて消長

する運命を辿る過程の人形代ではなかったかと思われてならない。

4 斎串

全国各地の遺跡から多量に出土する斎串について、専門的な研究は緒に着いたばかりである。唯一先行されているのは黒崎^{註22}直氏がおられる。氏によると、斎串の初現は、六世紀半ば頃、平城宮西方官衙地区の井戸から出土した斎串。平城京左京二条二坊六坪の建物柱穴より出土のもの。平城宮大膳職地区の井戸および、西隆寺跡の井戸出土の斎串が最も古い例であろう、とされている。しかし、起源は、古墳時代にまで遡るとも述べられている。また、7世紀末から9世紀の間に出土が集中しているとも記述されている。

『万葉集』巻十三 長歌(3227)の反歌(3229)に「斎串立て 御神酒坐え奉る 神主部の髻華の玉陰 見れば 羨しも」とあるなど、文献上の史料にも散見する。各遺跡の発掘調査報告書によると、形状はほとんど一定している。幅2.0～2.5cm、長さ20～30cm程の薄板の両端を山形に削って、一端は土に刺したと思われるのと、「切りかけ」とか「削りかけ」と称されているのは上になる方の先端部分を2段、3段に切り込みを入れたもの、あるいは薄板の両側の4～6箇所程、ササクレ状の削りを入れたものなど多彩である。両側の削りは、紙垂に通ずるのではないか。また平安京から出土の斎串と三重県明和町の史跡斎宮跡第90次発掘調査で検出した平安時代Ⅱ期の井戸出土の斎串とは、形状がほぼ同じ様である。従って、その祭祀は同様の形式ではなかったかと思われる。

斎串を土に突き立てたであろうと思われることに諸説がある。それについて、黒崎直氏の論証を中心に取りまとめてみよう。

(1) 聖域として区画したとみられるとの説。

大祓詞の中で「天津罪」と称して「畔放、溝埋、樋放、頻蒔、串刺、生剥、逆剥、屎戸」^{あはなち みぞうめ ひはなち しきまき くしさし いけはぎ さかはぎ くそへ}と罪の内容を挙げ、これを犯さぬ区域。禁足地など聖域や用益権などを示す区画とした。

(2) 神への捧げ物のしるしとする説。

『出雲風土記』意宇郡の条りに、語部臣猪麻呂が娘を殺したワニを成敗すべく神助を請い願った結果、本懐が果たせた。その後にワニを裂いて串に掛け、感謝の供え物とした例。

(3) 降神の依代とする説。^{よりしろ}

『延喜式』「挿幣帛木」。^{註24}長野県箕輪遺跡の例。

(4) 御贖物の料とする説。

御祓具。

(5) 鉾の形状とする説。

静岡県伊場遺跡^{註25}の例。

諸説を取りまとめると以上となる。しかし本稿で取り上げたいのは、9世紀頃平安京の遺跡からの出土例によって、斎串の伴う祭祀儀礼について考察をころみたいのである。

ところが各遺跡の発掘調査報告書には、出土する斎串を「削りかけ」とか「木片」あるいは、「挿幣帛木」など様々に呼ばれているのみで祭祀については、推し計るよりない。また出土する

状況も人形と斎串が共なう場合と斎串のみの出土例がある。ということは、必ずしも人形と斎串がセットとなった祭祀とはいいいきれない。多くの人形に関わる祭祀儀礼は道教的信仰による場合が多い。鴨社の例をみても官祭の解除は、人形・斎串・解縄・切麻が解除具である。氏神の樹下神事の御祓は、斎串と幣である。従って、御祓の儀礼の構成が根本から異なっている。

例えば、1. に掲げた「聖域」として区画する場合は、通例ならば瑞籬である。鴨社『社記』に「崇神天皇七年、賜瑞籬築造。」とある。この記述

は、^{かなび}神奈備の神域中にさらに禁足地を区画した例である。石上神宮禁足地等々例は多い。2. 「捧げ物のしるし」説は、伴 信友『瀬見の小川』^{あれ}「阿礼と言へるものは」と述べている条に「竿の先に^{はく}布帛」を下げる竿を、はたして斎串と呼ぶべきか。例えば、鴨社の場合は(図12)の様にカモかキジを枝に掛けて御供えする。枝はナラノキなど常緑樹もある。モミジの様に落葉樹もある。イネは、瑞籬に掛ける。棒状の木に鳥を括って挟むか吊るす。古代、^{いわくら}磐坐の周りにそのような形式の御供えをした遺制を、鴨社の場合は「懸鳥」と称している。

3. 神の「依代」説とするのはどうであろうか。無社殿神時代は、神地あるいは、磐坐そのものが神の鎮まる処であったからこれも当たらないのではないか。「挿幣帛木」とするのは、鴨社の「大清祓」にある幣に当たるであろう。斎串の出土例が井戸ばかりではなく柱穴跡からもみられるので4. は「御贖物」とすべきではなかろうか。鴨社の神道説を背景とする「大清祓」の様



図12 懸鳥

春の祭りは鴨。秋は雉がモミジ・ナラノキなどの枝に垂りさげ、本殿御扉の脇に立て掛けられる。社殿が成立する以前の古代祭祀の遺制。

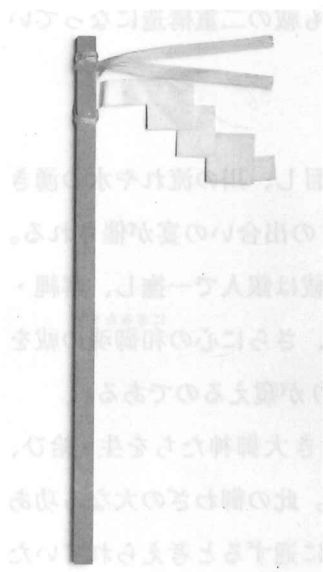
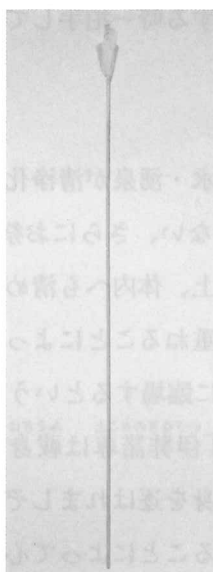


図13 賀茂御祖神社斎串

図14 賀茂御祖神社
麻斎串図15 賀茂別雷神神社
斎串

桧製。
長さ34.7cm

図16 春日大社斎串
竹と桃の木を合わせた串に
紙垂を付けたもの。
長さ19.2cm

第1節 泉出土の人形代について

に御祓の祓具と解すべきであろう。

鴨社の斎串の形状は、紙垂を付けたもの(図13:長さ25.6cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm。紙垂10.5cm、麻10.5cm)と、麻斎串(図14:長さ25.8cm、幅0.9cm、厚さ0.7cm。串に6巻する巻紙垂、麻の葉を串に挟む様式を用いる)の、二種に分けることができる。

いずれも檜木材で、平安京出土のものと長さはほぼ同じである。また平安京出土のものは、薄い板状になっているのが、鴨社は名の通り串になっているのが大きな違いであろうか。

また官祭の解除と樹下神事の御祓をまとめると次のようになる。

官祭解除(作法の順に従い記述)

解縄 左ねり一筋・右ねり一筋 ^{なかとみのことば} 中臣詞奏上中に「下津磐根 仁 宮柱太敷立・高天原 禰 千木 高知 底 皇孫 乃 美頭 乃 御舎仕奉」の条り中・点の時、作法を起こす。

人形 中臣詞「天津祝詞 乃 太祝詞事 於 宣 礼 ・」身体の左側から右へと一撫し、中心へ戻して息を一吹する。

散米 ^{ゆ う} 木綿・玄米・切り紙を混ぜ合わせる。中臣詞「罪 止 言罪咎 止 言咎 波 不在物 於止 ・ 祓 比 給 比 清給 止 申事 乃 由」の時、身体の左・右・左と祓う。

以上の解除が終わってから、次の御祓の斎串の作法が行なわれる。いずれも宮主^{みやじ}(宮中の神官のこと)が中臣詞を奏上している間にそれぞれの作法を自身で行ない解除することになっている。斎串は、宮主^{しとり}が後取をして自身を左から右へ一撫して祓い、中央にて一吐する。明かに銀人の解除と斎串の御祓が合一した祭祀といえる。

一方、樹下神事の方は、宮主の中臣詞奏上の後、あらかじめ宮主から受けていた麻斎串をもって自身を左右と一撫し、身体の中央で息を一吐いて祓う。さらに宮主は、幣を捧持して神官の座の前を祓詞を奏しながら三度回る。前述の「大清祓」に「祓ノ歌 三反」とあるのがそれである。神官は、自坐の前を幣が通過する時一拍手して祓を受ける。この場合も祓の二重構造になっているのが特徴的である。

5 おわりに

古代、神祇信仰の時代、流水・湧泉が清浄化に最も適していると着目し、川の流れや水の湧き出ている所に面して祭祀を行ない、さらにお祭りのあとで、神と人との出会いの宴が催される。身体の外から祓浄を行なった上、体内へも清めを入れて、清まる。御祓は銀人で一撫し、解縄・木綿・斎串と繰り返し祓除を重ねることによって、身体^{あらみたま}の荒御魂の祓、さらに心^{にぎみたま}の和御魂の祓を重ねて「御生^{みあれ}」の荘厳な瞬間に臨場するという古代の人々の敬虔な祈りが窺えるのである。

賀茂真淵『祝詞考』にも「伊弉諾尊^{いざなぎのみこと}は祓身滌をしまして、遂に貴き大御神たちを生^{みそぎはらえ}給ひ、須佐能男命^{すさのおのみこと}は贖物を出し、御身を逐はれましぞ、清き神心と成給ひつ。此の御わざの大なる功ある事を知べし」と、禊祓^{みそぎはらえ}をすることによって心身が一転し、延命長寿に通ずると考えられていたことを記述している。

平安京右京三条二坊十六町より出土の人形代は、本文中にも述べたように果たして、人形代とすべきかどうかの時期に当たっていたのではないかと率直に思われてならない。この動乱の時代

の人形代の祭祀は、神祇的、道教的信仰に基づく祈願より一層神祇信仰の色合いが濃厚な祭祀へと変貌の過程にある祈願と思われ、その意味合いもかなり社会的、政治的な内容に展開していく時期ではなかったか。どちらかといえば、内面的な心の問題として、心に噂くまる葛藤の解決を求めている祈願と思える。『源氏物語』須磨の巻に、光源氏が須磨へ赴く前に糺の森の神々へ「憂き世をば 今ぞ離るる 留まらむ 名をば糺の^{ただ}神にまかせて」と、無実の罪に問われた悔しさ、人の心の変わり行く様を嘆いて、正邪を糺す祈願を込め、糺の神々の名を唱えながら御手洗川に贖物を流したであろう事を詠んでいる。このような社会的背景をも考察すべきであろう。

註

- 1 『日本後紀』賀茂両社行幸親拝、延暦十三年十二月二十一日条。『日本紀略』同じ。
- 2 『年中行事秘抄』賀茂行幸式日条。『百練抄』同じ。
- 3 『小儀類観』鴨社院・上皇御幸条。
- 4 『賀茂御幸記』御參籠御幸条。梨木祐之編『賀茂史綱』同じ。
- 5 『公事根源』関白賀茂詣条。
- 6 滋野井公澄『賀茂祭部類記』斎王禊条。
- 7 匏製の杓のこと。ふくべ(ひょうたん)を縦半分に分けたもの。
- 8 輦籠。天子の乗り物のこと。
- 9 『貞観儀式』斎王禊条。
- 10 『執政所抄』関白賀茂詣条。
- 11 『鴨社年中行事』葵祭条。
- 12 口伝書『神道伝書』賀茂内親王、鴨川御祓条。成立年代不詳。禰宜俊永書写本。
- 13 『続日本後紀』鴨川御禊所条。
- 14 『鴨社古図』賀茂御祖神社本(明治三十八年、大崎書写本)
- 15 『中右記』天永元年四月二十七日条。「鴨社式年遷宮」
- 16 熊谷保孝「諸国大祓の成立」『政治経済史』第四〇〇号 政治経済史学会
- 17 泉 武「人形祭祀の基本的考察」『日本考古学論集』3 吉川弘文館 1986年
- 18 『宣胤卿記』文龜二年条、「賀茂祭中絶」。梨木祐之『御祭記』
- 19 戸田保延編『賀茂史略』元禄七年、賀茂祭再興。梨木祐之『賀茂史綱』『御祭記』条。
- 20 金子祐之「古代の木製模造品」『奈良国立文化財研究所研究論集』IV 1977年
- 21 「依田遺跡祭祀遺構」『依田遺跡第二次発掘調査報告書』山形県教育委員会編 1984年
山形県飽海郡八幡町岡島に所在する9世紀中頃の遺跡で、川跡の近くに祓所と思われる遺構が検出されている。馬形、人形、刀形、斎串のほか人面墨書土器等が出土している。また、検出した祭祀遺構(SM60祭祀遺構)の復元模型が製作されている。
- 22 黒崎 直「斎申考」『日本考古学論集』3 吉川弘文館 1986年
- 23 「第90次調査」『史跡斎宮跡 平成3年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1992年
- 24 「考古史料編(3)」『長野県史』長野県編 1983年
- 25 『伊場遺跡遺構編』浜松市教育委員会 1977年
- 26 泉亭俊永『賀茂社御造営纂記』崇神天皇七年条。「造賜瑞籬」

第2節 平安京の墨書「齋宮」と齋王家・齋王御所

西山良平

1 はじめに

平安京の右京三条二坊十六町(京都市立西京商業高校学校)で「1町規模の邸宅」が良好な状態で調査された。この遺構は地勢に従い典型的な園池を掘削し、主殿クラスの建物群が池に規定され計画的に配置される。園池ないし邸宅は9世紀後半に造営され、池は10世紀後半(11世紀初頭)まで存続すると想定される。また、園池から「齋宮」2点・「齋雑所」2点・「齋舎所」2点や「僧供廿□内」「僧供□」「長」「侍」「菓」などの墨書土器が出土する。この邸宅には「齋宮」に卜定された女性が居住する可能性が高い。そこで、墨書「齋宮」「齋雑所」「齋舎所」などを考察し、さらに、文献史料からこの邸宅の性格を検討する。

2 墨書「齋宮」

まず、「齋宮」の意味を検討する。「齋宮」は一般に伊勢齋王やその居処の齋王宮をさすが^{註1}、その訓義に三義あり、(A)清浄な神殿(イヒミヤ)、(B)伊勢神宮(内宮 イヒミヤ)、(C)齋王の御殿(イツミヤ)である^{註2}。ところで、この墨書「齋宮」は平安京から出土するから、(B)伊勢神宮(内宮)の可能性はまずない。つぎに、(A)清浄な神殿については、平城京で実例がある。神亀元年(724)11月、聖武天皇が大嘗し、石上勝男・石上乙麻呂らが内物部を率い、神楯を「齋宮」の南北二門に立てる(『続日本紀』神亀元年11月己卯条)。この「齋宮」は大嘗宮である^{註3}。しかし、(A)清浄な神殿の用例は他に類例が稀少である。また、平安京では、大嘗宮の宮地は朝堂院の龍尾道南庭である(『延喜式』「踐祚大嘗祭」22大嘗宮条)。したがって、(A)清浄な神殿の可能性も極めて少なく、(C)齋王の御殿の蓋然性をもっとも大きい。ところで、齋王には伊勢大神宮の齋王と賀茂大神の齋王がある。しかし、賀茂齋王の御殿は「齋院」であり、まず「齋宮」としない^{註4}。

このように、墨書「齋宮」は伊勢齋王の<御殿>を意味し、十六町の「邸宅」がその御殿と推定される。

註

- 1 『平安時代史事典』「齋宮①」項<田中卓執筆>、『国史大辞典』「齋宮」項<所功執筆>
- 2 西宮一民「『齋宮』の訓義」(『上代祭祀と言語』、桜楓社、1990年)
- 3 新日本古典文学大系『続日本紀』2(岩波書店、1990年)
- 4 榎村寛之「『齋宮式』の構造とその特殊性—齋院司式と比較して—」(『延喜式研究』12、1996年)

3 伊勢齋王の<御殿>

そこで、平安京とその周辺の伊勢齋王の御殿を検討するが、それは3箇所である。

《1》凡天皇即位者、定伊勢大神宮齋王、仍簡内親王未嫁者卜之若無内親王、依世次、簡定女王卜之、訖即遣勅使於彼家、告示事由、神祇祐已上一人、率僚下随勅使共向、卜部解除、神部以木綿著賢木、立殿四面及内外門賢木、木綿所司儲之、解除料散米酒肴等本家儲之、其後朔日時、百官為大祓同尋常二季儀(『延喜式』「齋宮」1定齋王条)

《2》凡齋内親王定畢、即ト宮城内便所、為初齋院、祓禊而入、至于明年七月、齋於此院、更ト城外淨野、造野宮畢、八月上旬、ト定吉日、臨河祓禊、即入野宮、自遷入日、至于明年八月、齋於此宮、九月上旬、ト定吉日、臨河祓禊、參入於伊勢齋宮(「齋宮」3祓禊条)

齋王がト定されると、勅使を「彼の家」に遣わし、神祇祐以上が共に向う。ト部が解除し、神部は木綿を賢木に著け、殿の四面と内外の門に立てる。解除料・散米・酒肴などは「本家」が儲る《1》。齋王の本家すなわち「齋王家」^{註1}では、ト部が解除し、木綿著きの賢木(榊)を殿の四面や内外の門に立てる。齋王家は、すでに聖域である。ついで、宮城内の便所をトいて初齋院とし、祓禊して入り、更に城外淨野をトい野宮を造り、河に臨み祓禊して入る《2》。このように、ト定ののち、齋王は齋王家から初齋院・野宮へ移入し、伊勢齋宮に参入する。

このうち、齋王家は齋王の本家であるから、京内・京中にある。初齋院は「宮城内」の便所であるが、「宮城」ではその南路で大祓し、大臣以下が朱雀門に就く(『延喜式』「太政官」大祓条)。宮城はまさしく平安宮で、その南路は二条大路、朱雀門は宮の南面正門である。すなわち、初齋院は平安宮の内部にある。初齋院の初見は貞観元年(859)で、伊勢齋恬子内親王と賀茂齋儀子内親王が鴨水辺で禊を修し、並びに「初齋院」に入る(『日本三代実録』貞観元年12月25日条)。一方、野宮は「城外」の淨野である。行幸には中院・八省・「京内」・城外と野行幸があり(『西宮記』臨時五「一行幸」)、城外は京内の対極である。また、城外はしばしば「在京」と並列され、正確には<在城外>を意味する。^{註2}<城>には「宮城」と「京城」があり、鎮火祭は「宮城の四隅」で祭り、道饗祭は「京城の四隅」で祭る(『延喜式』「四時祭上」33鎮火祭条・34道饗祭条)。結局、城外は京城の外部で、京外にはかならず、宮城の外部ではない。野宮の初例は延暦16年(797)で、齋内親王布施内親王が葛野川に祓えし、移りて「野宮」に入る(『類聚国史』四「伊勢齋宮」延暦16年8月甲戌条)。野宮の「野」は淨野の「野」を指示し、野宮は城外と不可分である。そもそも宮城外の京内に、淨野の存在は想定しがたい。かくして、京中の齋王御殿は齋王家のみである。

十六町の「邸宅」では墨書「齋宮」が出土し、この「邸宅」は「齋宮」と呼称される。一方、京中の齋王御殿は齋王家のみであるから、齋王家と「齋宮」の関係が問題である。齋宮の事例では「伊勢齋宮」が多く、野宮以前の用例は僅少^{註3}である。

《3》凡齋宮諸門、常立著木綿賢木月別立替、所須木綿一斤、麻一斤八兩(「齋宮」4木綿賢木条)

「齋宮」の諸門には、常に木綿著きの賢木を立てる。齋王家の賢木は《1》に規定があり、この「齋宮」は《2》の初齋院・野宮と伊勢齋宮を指示する。^{註4}したがって、この「齋宮」には齋王家は含意されない。しかし、すでに《1》に賢木の規定があるので、《3》に齋王家を例示する必要はない。初齋院や野宮が「齋宮」である以上、齋王家も齋宮の可能性がある。また、齋宮の訓義は神殿・神宮・御殿であるが、9世紀末期以降、齋王を齋宮とする事例が急増する。寛平3年(891)、「伊勢齋宮」元子女王が野宮より葛野河に禊し、伊勢に参向し、寛平9年、幣帛使を遣わし「齋宮」柔子内親王を定めると告げる。また、昌泰3年(900)、「前齋宮」晏子内親王が死去する(『日本紀略』寛平3年9月4日条・9年8月13日条・昌泰3年7月20日条)。9世紀でも、天長10年(833)、久子内親王を「伊勢齋宮」とし、伊勢大神宮に「齋宮」宜子女王の替りに久子

内親王を定めると告げる(『続日本後紀』天長10年3月癸丑条・4月甲子条)。あるいは、9世紀にも齋王を慣用的に齋宮と呼称すると想定される。^{註5}伊勢齋王を定めるには、内親王・女王を簡びトい、勅使を「彼の家」に遣わすから、齋王家でも内親王らは齋王である《1》。齋王家の齋王を齋宮と通称し、そこから齋王家を齋宮と呼称しうる。11世紀には、長和元年(1012)、「齋宮」に当子内親王をト定し、右少将源経親を以って「彼の宮」に「齋宮」となすの消息を遣わす。また、神祇官の伯以下僚下の者が「齋宮」に参り、神木を立てる(『日本紀略』『御堂関白記』長和元年12月4日条)。長和5年、齋王嫡子女王をト定し、宣旨は左少将源経親を以って「齋宮」に示し遣わす。あるいは、齋王ト定の由を左少将経親を以って「女王宅染殿」に仰せ遣わす(『御堂関白記』長和5年2月13日・19日条、『小右記』長和5年2月19日条)。これらの「齋宮」「彼の宮」は《1》の「彼の家」すなわち齋王家に相当する。このように、齋王家は充分に齋宮である。

ところで、9・10世紀には、伊勢齋王は2箇月から1年ほど齋王家に居住する。^{註6}ついで、初齋院・野宮に遷入し、さらに伊勢齋宮に参入する。しかし、なお齋王家は存続する。齋王は在京潔齋三年し、伊勢大神宮に向かう。そして、野宮の内外屋や垣などは神祇官中臣らに給うが、金・銀器や釜・甕は齋王家に納める(「齋宮」45潔齋三年条)。また、齋王が還京し所有の雑物は寮官以下に分給するが、金・銀器は齋王家に納める(「齋宮」100給雑物条)。すなわち、齋王家は初齋院・野宮の在住期間から、伊勢齋宮より還京すなわち退下のさらに以後も継続する。この齋王家は家政機関の側面もあるが、その実体はト定から初齋院までの邸宅から別個の邸宅に移転しうる。しかし、ト定から退下以降も、齋王家の邸宅が移動せず同一でもありうる。齋王家は短期間で移転しうるし、また退下以降も存続しうる。一方、齋王は齋王家に僅か2箇月から1年しか居住せず、この期間はその邸宅の歴史の過程ではきわめて短期間にすぎない。

註

- 1 齋内親王は在京潔齋三年、齋終るの後、金・銀器などは「齋王家」に納める。また、齋内親王が還京し、金・銀器は「齋王家」に納める(「齋宮」45潔齋三年条・100給雑物条)。
- 2 拙稿「王朝都市と農村の交流」(『日本の時代史』6<摂関政治と王朝文化>、吉川弘文館、2002年)
- 3 朔日庭火祭や晦日解除料は「野宮・齋宮もこれに准」ずる(「齋宮」11庭火祭条・12解除料条)。この「齋宮」は大殿祭に「野宮・伊勢齋宮もこれに准」ずるとあり(「齋宮」9初齋院大殿祭条)、伊勢齋宮の略称である。
- 4 初齋院・野宮・伊勢齋宮には《3》と、初齋院の「供膳井」の賢木(「齋宮」6河頭祓条)以外に賢木の規定がない。
- 5 榎村寛之「「齋王」という称の成立について」(『ヒストリア』151、1996年)
- 6 訳注日本史料『延喜式』<上>「付図・付表」表1「伊勢齋王(齋宮)一覧」(集英社、2000年)

4 墨書「齋雑所・齋舍所」

十六町の「邸宅」では、さらに「齋雑所」2点・「齋舍所」2点の墨書も出土する。「齋雑所」や「齋舍所」の「齋」は「齋宮」の省略で、これらの墨書は「齋宮」の「所」と推定される。「齋」と同様に、「雑」や「舍」も略称で、「雑」については多様な可能性が想定される。一方、齋宮では、「舍」は「舍人」^{註1}「雑舍」が想像されるが、齋宮には舍人がおり、その蓋然性が高い。かくして、齋王家には「齋雑所」や「齋舍所」など、複数の「所」が存在する。

伊勢の齋宮寮には主神司・舍人司・蔵部司・膳部司・炊部司・酒部司・水部司・采部司・殿部

表1 齋宮寮と初齋院・野宮の職員の比較表

神亀5年7月21日勅

初齋院別当以下員 [(+)は野宮で加える]

齋宮寮：頭1・助1・大允1・少允1・大属1・少属1 ・使部10	別当五位2(命婦1)
主神司：中臣1・忌部1・宮主1・神部6・卜部4	主神所(司)：中臣1・忌部1・宮主1(+神部4・卜部3)
舍人司：長官1・主典1・大舍人20・舍人10	(舍人所)内舍人1(+1)・大舍人2(+2)・宮舍人10(+10)
藏部司：長官1・主典1・藏部6	
膳部司：長官1・判官1・主典1・膳部□	膳部所：膳部3
炊部司：長1・炊部4	(炊部所)炊部1(+2)
酒部司：長1・酒部4	酒部所：酒部1(+2)
水部司：長1・水部4	水部所：水部3
采部司：長1・女部2	(采部所)采女2(+4)
殿部司：長1・殿部6	(殿部所)殿部3
薬部司：長1・医生2	
掃部司：長1・掃部6	(掃部所)掃部3
(下線は官位相当あり)	戸座所：戸座1・火炬小子2
	内女孺2・乳母3・宮女孺14(+25)・今良4・仕丁12・女丁8(+8)(+洗人2・厠人2)

司・薬部司・掃部司がある(『類聚三代格』四・神亀5年7月21日勅)。一方、野宮では年料供物に「膳部、酒部、水部所」の前案肥料などや「戸座所」の篩4口料など、「主神所」の料がある(「齋宮」37野宮年料供物条・38月料条)。また、初齋院の別当以下の「員」に中臣1人・忌部1人・宮主1人、膳部3人、水部3人、酒部1人、戸座1人があり、野宮では神部4人・卜部3人、酒部2人を加える。主神所は、初齋院や野宮では中臣・忌部・宮主や神部・卜部である(「齋宮」15別当以下員条)。「野宮の主神司の請くところの月料」などがあり(「齋宮」32主神司月料条・37野宮年料供物条)、主神司とも呼称する。そこで、伊勢の齋宮寮の「司」と初齋院・野宮の「員」を比較する(表1)。

齋宮寮の「司」と初齋院・野宮の「員」はほぼ同様の構成であるが、そのうち主神司と主神所(司)、膳部司と膳部所、酒部司と酒部所、水部司と水部所が対応する。初齋院などの戸座所は、ト戸座と火炬は初齋院から大神宮に参入するまで奉仕し、齋王が伊勢齋宮に入ると替え却く(「齋宮」35ト戸座火炬^{註2}条)。したがって、初齋院・野宮に舍人所・炊部所・采部所・殿部所・掃部所は明記されないが、その存在は十分に想定できる。かくして、初齋院や野宮は多様な「所」で構成される。たとえば、初齋院の舍人所は内舍人1人・大舍人2人・宮舍人10人、野宮では内舍人1人・大舍人2人・宮舍人10人が加わる。

さて、賀茂齋王は初齋院で3年齋し、先ず吉日を択び流れに臨んで祓禊し(初齋院御禊)、4月に始めて神社に参る。その儀に齋王は輿に乗るが、「膳部6人、膳所舍人2人」などが従う(「齋院司」6三年齋条)。初齋院の直前の祓禊では(初度禊)、齋王は車に駕し、「膳部6人、舍人2人」などが車後に従う(「齋院司」3初齋院条・4祓物条)。一方、伊勢齋王は河頭に臨んで祓をなし初齋院に入るが(初度禊)、齋王は車に駕し、「膳部6人、舍人2人」などが車後に従う(「齋宮」6河頭祓条)。賀茂齋王や伊勢齋王の初度禊の舍人は、賀茂齋王の初齋院御禊と同様に、「膳所」の

舎人と呼びうると想像される。また、膳部6人は初齋院の3人より多いので、河頭祓に臨時に従うと推定される。臨時の随従でも、「所」が確認しうる。

しかし、これらの「所」は初齋院直前の河頭祓や初齋院・野宮に存在する。墨書「齋雑所」や「齋舎所」はそれ以前の齋王家から出土する。

本宮(齋王家)では、神祇官が賢木を挿す。ついで木工寮が内膳屋を立て、大炊寮の御飯を渡す。左・右衛門府が陣屋を立て、衛門府が宿直する。修理職が火炬屋を立て、殿上より滝口1人・蔵人所衆2人が「彼の院」に参宿する(『江家次第』卷十二「齋王ト定事 伊勢^{註3}」)。一方、「本家」では、神祇官が賢木を立て、后宫に准じ「諸司が供奉する」(『西宮記』臨時七「ト定齋王事」)。皇后を立て、「諸司」が供奉する。諸衛が本宮に啓陣するが、3日を過ぎ退き、兵衛尉已下一員が候す(『西宮記』臨時七「立皇后・太子、任大臣事」、『北山抄』四「立后事」)。長和元年(1012)、女御藤原妍子の中宮とし、御前に火焚屋を据え陣屋を造る(『栄花物語』十「ひかげのかづら」)。また、修理職が庭中に炬火屋を立て(『江家次第』十七「立后事」)、寛治5年(1091)、媞子内親王を中宮とし、本宮に陣屋・炬屋・内膳(屋)を立てる(『中右記』寛治5年正月22条^{註4})。10世紀には、齋王家に衛府が宿直し、陣屋や火炬屋・内膳屋が立てられると推定される。あるいは、齋王家では舎人も奉仕すると想像される。

一方、「齋雑所」であるが、「雑」は多様な漢字と結合する。しかし、齋宮の「所」は「齋舎所」を始め、膳部所・酒部所・水部所・戸座所など、ほとんどが官人・雑任の名称の「所」である。したがって、「齋雑所」の「雑」も官人・雑任などの省略と推定され、「雑使・雑工・雑色(人)」が想定される。このうちでは、雑色(人)^{註5}がもっとも一般的であり、その可能性が高い。齋王家には「舎人所」や「雑色(人)所」が存在すると想定される^{註6}。ところで、これらの墨書は「舎人所」や「雑色(人)所」を省略し、わざわざ語頭に「齋」を付加する。かくして、「齋雑所」「齋舎所」は「齋宮」の「所」を強調するが、それは齋王家の外部からの呼称の可能性がある。

さて、齋宮は退下すると前齋宮と呼称されるが、前齋宮を「齋宮」とする事例もある。元慶5年(881)、「前伊勢齋内親王」識子が入京するので、山城国などに陪従の飲食などを供給させる。また、「齋内親王」が神宮を出るので、河内国などに陪従・檢校・奉迎使の酒食などを祓供させる(『日本三代実録』元慶5年正月19日戊辰条)。しかし、墨書「齋雑所」「齋舎所」などは、前齋宮の「邸宅」で記入・使用されるとは想定しがたい。

註

- 1 『延喜式』「齋宮」では、「舎」の熟語は舎人と雑舎である。
- 2 齋王が伊勢国に到り、度会郡の磯部氏の童男を戸座とし、炬火は童女を用いる(「齋宮」80戸座炬火条)。
- 3 「初齋院」の四面と近辺の汚穢を掃除するので、「彼の院」は初齋院であるが、この初齋院は本宮である。長暦2年(1038)、野宮の宿直檢非違使を参仕させず、本より滝口1人が候するが、今2人を差し遣わす。また、宗道・為忠・範基など所衆3人が月来「齋宮」に候する(田中本『春記』長暦2年9月20・22日条)。
- 4 立后と諸司の供奉については、中町美香子氏(京都大学大学院生)のご教示による。
- 5 野宮や伊勢齋宮では、毎月下旬に雑色や仕女以上の名簿を主神司に移送しとう。また、諸司の雑色人の衣服は色別に分ち行ない、雑色人以上で毆闘する者は上祓を科す(「齋宮」81名簿条・91月俸衣服条・94毆闘条)。

- 6 藤原実資家では、「宅」時代から雑色所が設置される(渡辺直彦「藤原実資家「家司」の研究」、『日本古代官位制度の基礎的研究』<増訂版>、吉川弘文館、1978年)。

5 斎王家と「人の家」

つぎに、斎王家を具体的に検討する。

元慶8年(884)、伊勢斎掲子内親王が野宮にあるが、「本家」に還る(『日本三代実録』元慶8年2月13日条)。しかし、9世紀には斎王家の内容はほとんど判明せず、10世紀に初めてその実態が明瞭になる。

天慶9年(946)、英子内親王を「斎宮」に卜定する。殿上より左少将源為善を差し勅使となす。「親王家」は酒饌饗を儲け、勅使・神祇官人に禄を給う(『貞信公記』天慶9年5月20日・27日条、『北山抄』六「卜定斎王事」天慶9年5月20日・27日条)。天曆元年(947)、悦子女王を「斎宮」に卜定し、右近少将藤原有年を差して「父中務卿重明親王家」に仰せ遣わす。また、神祇官が「彼の家」^{註1}に向かい賢木を差す(『日本紀略』『貞信公記』天曆元年2月26日条)。

また、永観2年(984)、弾正尹章明親王女・済子女王を伊勢斎王に卜定し、事縁があるので、左衛門権佐藤原為頼を以って、その由を仰せ遣わす(『小右記』永観2年11月4日・5日条、『日本紀略』11月4日条)。寛和元年(985)、伊勢斎王済子女王が「中河家」より東河に禊し、左兵衛府に入る(『日本紀略』寛和元年9月2日条)。すなわち、済子女王の「本家」は中河家である。「中河家」の中川(中河)とは「東の京極川」で、「中川のわたり」は一条末路南・二条末路北をさす^{註2}。つまり、中河家は東京極東、一条末路南・二条末路北に位置する。一方、「弾正尹章明親王の第」は「東北辺の末、鴨河堤の内」にある(『政事要略』六十九「致敬拝礼下馬事」寛和3年2月19日明法博士惟宗允正勘文)。「東北辺の末」は東の一条大路の末を意味し、章明親王の第は一条末路南、東京極大路の東、鴨河の堤の西に存在する。かくして、中河家は「弾正尹章明親王の第」にほかならない。10世紀初め、中納言藤原兼輔は東京極以東の墾田を買収し、正親町末北を娘の醍醐天皇更衣桑子に与える。章明親王は生母よりこの邸宅を譲り受けると推測される。結局、済子女王の本家は<父>章明の邸宅である^{註3}。

長和5年(1016)、故中務卿具平親王の三女嬬子女王を斎王に卜定し、左少将源経親を以って「女王宅染殿」に仰せ遣わす。先年、藤原実資は「染殿」に住み、箏二・琴六を置く。「斎宮」が「彼の宮」に立ち、雑物を運び移すので、その箏・琴を実資に返給する(『小右記』長和5年2月18日・19日条)。染殿は左京北辺四坊六町・七町にわたるが、七町南半を清和院に提供する。のち「染殿式部卿宮」が平親王が御所とし、六町を具平親王(女婿で異母弟)に割譲する。為平の死後、染殿は右大臣源師房、さらにその子の大納言師忠が伝領すると想像される^{註4}。具平の「北の方」は為平の中姫君で、その間に女宮三所・男宮二所がいる。嬬子はその「おと宮」すなわち三女、師房はその「一男」である(『栄花物語』八「はつはな」・十二「たまのむらぎく」、『公卿補任』治安4年条「尻付」)。為平の中姫君は、その三女嬬子と染殿に居住すると推定される。また、永承六年(1051)、敬子女王を斎宮に卜定し、翌七年、「新斎宮」が「五条宅」より東河原で解除し、

第2節 平安京の墨書「齋宮」と齋王家・齋王御所

初めて大膳職に入る(『春記』永承7年4月25日条)。敬子の本家は五条宅とのみあり、特定の人名を付加せず、「自邸」の可能性が高い。

さて、長和元年、三条天皇の第一(女一宮)当子内親王を「齋宮」に卜定する。当子は「大和守藤原輔尹六角町尻宅」に坐す。神祇官の伯以下僚下の者が「齋宮」に参り、神木を立てる(『日本紀略』『御堂関白記』長和元年12月4日条)。当子の「本宮」は大和守藤原輔尹の「六角町尻宅」と想定される。一方、長和2年8月、当子は東河に禊し、宮内省(初齋院)に入る。ところが、宮内省は「彼の宮」より乾方(北西)に当り、方が已に塞がる(『小右記』長和2年7月6日条)。宮内省は六角町尻宅から正しく北西に該当する。また、当子は三条大路と東洞院大路・二条大路を経て、二条末の河頭で御禊する(『小右記』長和2年8月21日条)。この経路を逆算すると、当子の本宮は三条以南・東洞院以西となり、六角町尻宅と符合する。すなわち、当子は^{註5}大和守藤原輔尹の六角町尻宅を本宮に借用すると推定される。また、寛治元年(1087)2月、齋王に善子内親王を卜定する。藤原宗忠が「勅使」を勤仕し、「女御殿」藤原道子に参り、姫宮が「齋宮」に立つ由を申す。すなわち、「善子内親王の三条烏丸加賀守(藤原)家通朝臣宅」に参入する(『中右記』寛治元年2月11日条)。同年9月、齋宮善子は「加賀守家道朝臣宅三条以北・烏丸以東也」に坐す。「三条北・烏丸東家」より鴨川に禊し、左近衛府に入御する(『為房卿記』『本朝世紀』寛治元年9月21日条)。善子内親王の「本宮」は加賀守藤原家通の三条烏丸宅である。

このように、伊勢齋王は本宮に「人の家」を借用する。この「人の家」も齋王御所と呼称される。天仁元年(1108)、白河院の「御子」姁子内親王を「齋宮」に卜定し、勅使藏人右少将藤原忠宗を「彼家」に遣わす。「齋王御所」は「遠江守(藤原)国資之宅、綾小路与油小路也」である。上卿源大納言俊実・右少弁藤原実光や神祇官が「彼宅」に行き向かい「賢木」を立てる(『中右記』天仁元年10月28日条)。齋王御所は遠江守藤原国資の綾小路油小路宅である。

11世紀後半には、「人の家」の借用は儀式次第に定着する。

《4》同(本宮)次第

先予定上卿・弁・史等、又仰其齋王令用意雑事、女房装束・几帳・帷等、兼所用意也、公家借人家給之、先是所用雑物・雑具皆改之、

当日大臣著陣諸卿同参、

…(後略)…

(『江家次第』十二「一齋王卜定事 伊勢」)

本宮の次第では、予め上卿・弁・史を定め、齋王に雑事を用意させる。公家(天皇)が「人の家」を借りて給わり、これより先に雑物・雑具はみな改める《4》。当子の大和守藤原輔尹の六角町尻宅や善子の加賀守藤原家通の三条烏丸宅などは、この「人の家」に相当する。

賀茂齋王の本家・本宮も公家が「人の家」を借給する。

《5》凡天皇即位者、定賀茂大神齋王、仍簡内親王未嫁者卜之若無内親王、依世次簡諸女王卜之、卜食訖遣勅使於彼家告示事由、神祇祐已上一人、率僚下随勅使共向、卜部解除、神部以木綿著賢木、立寝殿四面及内外門木綿賢木所司備之、解除料等本家儲之、事畢賜禄、中臣、忌部以下各有

差、其後遣参議已上一人於上下神社、奉幣告定斎王状内藏寮備幣、卜部一人随使、使就川頭解除向社
 (「斎院司」1 定斎王条)

賀茂斎王を卜定し、勅使を「彼の家」に遣わし、神祇祐以上が共に向う。卜部が解除し、神部は木綿を賢木に著け、寝殿の四面と内外の門に立てる。解除料などは「本家」が儲る《5》。これは伊勢斎王と全く同様である《1》。ところが、天延3年(975)、賀茂斎王に先朝(村上天皇)の第十選子内親王を卜定し、「陸奥守(平)貞盛二条万里小路宅」を「潔斎所」とする(『日本紀略』天延3年6月25日条)。この事例は「御禊までの準備場所としての御所の早い例」と推定される^{註6}。選子は伊勢斎王の当子や善子などと同様に、平貞盛の二条万里小路宅を「借」りて「本宮」とする。長元9年(1036)11月、娟子内親王を「斎院」に卜定する。長暦元年(1037)4月、斎院娟子内親王が御禊し、「道成朝臣宅」より右近衛府に入御する。二条大路より東行し、還行は二条大路より西行する(『行親記』長暦元年4月13日条、『年中行事秘抄』所引「経頼記」長暦元年4月13日条^{註7})。すなわち、娟子の本宮は道成宅である。道成は源道成と推定され(『尊卑分脈』「醍醐源氏」)、「長元九年に至り卒す」あるいは「没年不詳」である(『勅撰作者部類』、槇野廣造編『平安人名辞典—長保二年—』「源道成」項<高科書店、1993年>^{註8})。康和元年(1099)、禎子内親王を「斎院」に卜定する。禎子は太皇太后藤原寛子が収養し、枇杷殿から「(源)清実大炊御門南京極西宅」に渡る(『本朝世紀』康和元年10月20日条)。四条宮寛子の同宿は憚り沙汰あり、太皇太后寛子は宇治殿に入御する(『兵範記』嘉応元年10月3日条)。

賀茂斎王借用の「人の家」もやはり「御所」である。寛治3年、摂政藤原師実が「(源)高実朝臣家」を御覧し、令子内親王を「斎院」に卜定する(『後二条師通記』寛治3年6月26日・28日条)。寛治4年、斎王令子内親王が東河に禊し大膳職に入御する。その「御所」は「近衛万利小路前越前守(源)高実朝臣宅」で、近衛大路・東洞院大路と二条大路を経て、二条末を「御禊所」とする(『中右記』寛治4年4月9日条)。一方、一院(白河院)の姫宮令子内親王は「殿におはします」(摂政師実の邸宅にいる)。6月下旬ごろ「斎院」に卜定され、「人の家におはします」(ひとまず人の家にいる)。翌年の御禊の際、大膳職に渡る(『栄花物語』四十「紫野」)。斎王御所は前越前守源高実の近衛万利小路宅で、これは正しく「人の家」である。《4》の「人家」こそ、この「人の家」に該当する。また、天仁元年、官子内親王を「賀茂斎院」に卜定し、官子は「斎院御所、土佐守(藤原)盛業(実)朝臣二条京極宅」に渡る(『中右記』天仁元年11月8日条)。

長元4年12月16日、馨子内親王を「賀茂斎王」に卜定し、勅使・右少将藤原行経が参入する。次に神祇大副以下が参入し、神部が木綿を付け賢木を取り御在所屋の四角などに立てる(『左経記』『日本紀略』長元4年12月16日条)。さて、馨子の本宮の決定は、その詳細が判明する^{註9}。

《6》有召参殿、仰云、二宮御出并可奉卜定斎院之日等事、内々為間定所喚也、可遣召陰陽助孝秀者、仰隆佐朝臣召之、孝秀参入、即召御前被問件日日、申云、来月七日出御巽方家、十三日若十六日可被卜定歟云々、仰、自内裏当巽之人家誰家歟、余申云、丹波守章任朝臣三条宅宜歟、仰云、甚吉事也、又仰云、大略以此由可示宮大夫、即詣大夫許申此旨、被申云、件日々并宅吉程也云々、…(『左経記』長元4年11月7日条)

11月7日、関白・左大臣藤原頼通が二宮の「御出」と「齋院」卜定の日を「内々に間(ひそかに?)定せんがため」参議・右大弁源経頼を喚ぶ^{註10}。陰陽助巨勢孝秀は12月7日に「異方の家」に出御、13日あるいは16日に卜定と申す。頼通は「内裏より巽に当るの人の家」は誰の家かと仰す。経頼は「丹波守(源)章任朝臣三条宅」がよろしと申す。すなわち、頼通と経頼が齋院の出御と卜定の日を「内々に」「間定」する。かくして、馨子は12月7日に丹波守章任三条宅に出で、13日に賀茂齋王に卜定となる。しかし、12月3日に上東門院の御所・京極院が焼亡し(『左経記』『日本紀略』長元4年12月3日条)、13日に出御、16日卜定に改定する(『左経記』長元4年12月3日条)。結局、馨子は13日の戌刻に出御する(12月13日条)。あるいは、後一条天皇の乳母の「大式三位」は藤原道長の上源倫子の乳母子で、馨子は「その人の子に、丹波守(源)章任といふ人の家の三条なる」に移る。「榊など」をさす(『栄花物語』三十一「殿上の花見」)。すなわち、馨子の本宮は丹波守源章任の三条宅である。「内裏より巽に当るの人の家」「丹波守章任といふ人の家」で、まさしく「人の家」を借用する。

さて、《6》では、陰陽助巨勢孝秀が出御と卜定の日を「内々に」勘申する。儀式次第では、上卿・参議が陣に著す。蔵人が「伊勢齋王を卜定するの日時を勘申せ」よと仰せ、上卿が弁に勘申させる(『江家次第』十二「齋王卜定 伊勢」)。《6》は陣ではなく、頼通や経頼は上卿や弁でもない、あくまで「内々に」である。また、馨子内親王は後一条天皇や中宮藤原威子とともに内裏に居住するので、出御の日と方を勘申する。一方、齋王馨子が「諸司に入るべきの日時、並びにその所がいまだ一定」しないので、「早くその所を卜定し、修理せしめ、並びにその日を定め」る(『左経記』長元5年正月25日・27日・2月15日条)。そもそも、宮城内の便所を「トい」初齋院とし、更に城外の浄野を「トい」野宮を造る。吉日を「卜定し」野宮に入り、伊勢齋宮に参入する^{註12}《2》。これと同様に、「人の家」へ出御の日と方は勘申される可能性が高く、それが借用を具体的に規制すると想定される。

9世紀には、伊勢齋王も賀茂齋王も齋王家は具体的に判明しない。10世紀前半では、「親王家」(天慶9年、英子内親王)、「父中務卿重明親王家」(天曆元年、悦子女王)など、「自邸」である。また、10世紀後半から11世紀前半では、「中河家」つまり「(父)彈正尹章明親王の第」(永観2年、済子女王)、「女王宅染殿」(長和5年、嬬子女王)、「五条宅」(永承6年、敬子女王)は「自邸」と推定される。一方、大和守藤原輔尹の六角町尻宅(長和元年、当子内親王)、陸奥守平貞盛の二条万里小路宅(天延3、賀茂齋王選子内親王)、丹波守源章任の三条宅(長元4年、賀茂齋王馨子内親王)、(前隠岐守)源道成宅(長元9、賀茂齋王娟子内親王)は「人の家」の借用である。10世紀後半から11世紀前半には、「自邸」と「人の家」が交錯する。このうち「人の家」の借用は、当子が三条天皇と皇后藤原城子、選子は村上天皇と皇后藤原安子、馨子は後一条と中宮藤原威子、娟子は後朱雀と皇后禎子内親王と、すべて皇后・中宮の所生である。この時期には、皇后・中宮の所生^{註13}の内親王が「人の家」を借用する可能性が高い。

一方、11世紀後半以降では、加賀守藤原家通の三条烏丸宅(寛治元年、善子内親王)、遠江守藤原国資の綾小路与油小路宅(天仁元年、姁子内親王)、前越前守源高実の近衛万利小路宅(寛治

3年、賀茂斎王令子内親王)、源清実(越前々司・太皇太后宮<藤原寛子>大進)の大炊御門南京極西宅(康和元年、賀茂斎王禎子内親王)、土佐守藤原盛業(実)の二条京極宅(天仁元年、賀茂斎王官子内親王)であるが、このうち、姁子・官子は中宮・准三後の所生ではない。かくして、11世紀後半から12世紀初頭に斎王家は「人の家」に固定し、これと対応し、儀式次第に定着する《4》。10世紀前半まで、斎王は「自邸」を本家とする。10世紀後半から11世紀前半に「人の家」の借用が成立し、11世紀後半以降に盛行する^{註14}。

さて、その「人の家」は大和守・陸奥守・丹波守・前隠岐守、加賀守・遠江守・前越前守・越前前司・土佐守など、受領の家である。「人の家」の借用は、王族や貴族の居住形態の変化を背景とすると想像される。一方、嘉承2年(1107)、前斎宮善子が帰京し、「故隆時朝臣中御門富小路宅」に渡御する。母女御道子も「一所」に御座する。帰京上卿藤原宗忠が「前斎宮御所中御門亭」に参る(『中右記』嘉承2年12月30日条、3年正月3日条)。すなわち、善子と道子は帰京し、故(因幡守)藤原隆時の中御門富小路宅に居住する。また、康和元年、賀茂斎内親王令子は病に依り退出し、年来、「源中納言(国信)五条坊門東洞院家」に御す(『中右記』康和4年11月17日条^{註15})。善子の卜定の本宮は加賀守藤原家通の三条烏丸宅、令子は前越前守源高実の近衛万利小路宅であるから、ともに別邸である。

10世紀前半以前は、斎王家は「自邸」と推定される。斎王は京内不在となるが、「自邸」は存続しうる。かくして、斎王は帰京しその自邸あるいは別個の自邸に居住する可能性がある。延喜20年(920)、「斎院」宣子内親王が所病困篤で、院を出で、「太宰帥親王敦固桃園家」に至る(『醍醐天皇日記』延喜20年6月8日条^{註16})。延長4年(926)、兵部卿敦固は卒去し、延長5年、弾正尹克明親王が民部卿藤原清貫の60賀のため、「桃園宮」で法会を設ける(『扶桑略記』延長5年2月25日条)。敦固の没後、桃園宮(家)は克明が伝領すると推定される^{註17}。宣子の母は克明に同じ(源旧鑑女)。宣子は桃園宮(家)に由緒があると想定される。天禄元年(970)、前女御藤原懷子が死去する。皇太子師貞親王(花山天皇)と「斎院」尊子内親王の母なので、尊子は東院(花山院、東一条第)に退出する(『日本紀略』天延3年4月3日条)。天徳3年(959)、中宮藤原安子は小一条殿に、皇太子憲平親王(冷泉天皇)は左近中将伊尹の東一条宅に遷御する(『日本紀略』天徳3年正月25日条、『御産部類記』「外記」天徳3年正月25日・3月8日条)。懷子は藤原伊尹の女で、花山法皇や為尊親王と室伊尹女(九の御方)が東院に居住する^{註18}。伊尹・懷子・花山・尊子は東院を居所とする。

また、長和5年、前斎宮当子内親王が帰京するが、皇后宮城子の宮は狭いので、「またしらせたまふ所」(別に領有する所)に住ませる(『栄花物語』十二「たまのむらぎく」^{註19})。当子の卜定の本宮は藤原輔尹の六角町尻宅であるが、帰京し<母>の「自邸」に居住する。長元9年4月、後一条天皇が死去し、「斎院」馨子は院を出で、東隣の乳母宅に渡る(『左経記』『日本紀略』長元9年4月17日条)。「斎院」馨子が退下し、中宮威子の御所(鷹司殿)で過ごす。しかし、9月、威子が逝去し、10月、章子・馨子は上東門院(土御門第)に引き取られる(『栄花物語』三十三「きるはわびしとなげく女房」)。この事例は当子と城子と同様である。馨子は卜定まで内裏に居

第2節 平安京の墨書「齋宮」と齋王家・齋王御所

住し、丹波守源章任の三条宅に出御する。嘉承2年、「齋院」禎子内親王が危急なので、俄に長官藤原長兼の直廬に出だす。翌々日、「齋院」は本「太后の養子」なので、太皇太后藤原寛子御所の枇杷殿に渡る(『中右記』嘉承2年7月19日・22日条)。この時期の枇杷殿は、太后寛子の御所に建造され、禎子内親王が猶子として同殿する。禎子は卜定され、枇杷殿から源清実の大炊御門南京極西宅に渡る。当子・馨子・禎子は卜定の本宮に「人の家」を借用するが、退下し本来の「自邸」あるいは別個の自邸に居住する。

註

- 1 重明親王家は、「或説」では「東三条」である(『二中歴』十「名家歴」、『拾芥抄』中末・二十「諸名所部」)。齋宮女御徽子女王(父は重明、母は藤原寛子)は、「三条のみやにて」「東三条院にて」詠歌する(『齋宮女御集』)。藤原寛子(藤原忠平女)が重明と結婚し、忠平から伝領すると推定される(平安文学輪読会『齋宮女御集注釈』、塙書房、1981年)。
- 2 臈谷寿・角田文衛「平安京一条坊および官衙・邸宅一」(角川日本地名大辞典26『京都府』下巻、角川書店、1982年)
- 3 「平安京一条坊および官衙・邸宅一」(前掲)
天慶2年、章明親王は「京極亭」で元服を加える(『日本紀略』天慶2年閏7月4日条、『吏部王記』8月14日条、『御遊抄』三「親王御元服加冠以下例」)。この京極亭も「中河家」と同一と想定される。
- 4 「平安京一条坊および官衙・邸宅一」(前掲)
- 5 権大納言藤原公任は臨時御読経定に参入するが、「齋宮南小路」で飛礫を打たれる(『小右記』長和2年7月3日条)。公任は四条宮(四条南・西洞院東・町尻西)に居住し、これは齋宮(六角町尻宅)のほぼ真南にある(拙稿「平安京の<門前>と飛礫」(上)、『朱』42、1999年)。
- 6 所京子『『狭衣物語』にみる齋院の史的考察』(『齋王の歴史と文学』、国書刊行会、2000年)
- 7 『平記長暦元年/平行親記』(『続々群書類従』5)は「直成」とするが、複製(『行親記』、『平記・大府記・永昌記・愚昧記』<陽明叢書記録文書篇6>、思文閣出版、1988年)では「道成」である。
- 8 藤原道長やその子息がしばしば道成宅を借用し、寛仁3年(1019)正月、藤原道長が「道成家」に方違する(『御堂関白記』寛仁3年正月9日・10日条)。同じ月、左衛門督頼宗家(藤原為盛四宅)が焼亡し、「信乃守道成宅」に渡り(『御堂関白記』『小右記』寛仁3年正月14日条)、長元2年、関白頼通が鬼霊などに依り「前因幡守道成宅」に渡る(『小右記』長元2年9月13日条)。
- 9 長元4年、参議・右大弁源経頼が馨子内親王の御所(丹波守源章任三条宅)の施設・行事を詳細に記録する。さて、齋王を卜し了り、行事上卿以下を定める(『西宮記』臨時七「卜定齋王事」)。齋王を卜定し、行事の上卿・弁・史を仰せ下す、あるいは納言・弁・史を伊勢初齋院別当となすと仰す。また、初齋院勅別当(親王家勅別当)を仰せ下し、別当上卿・弁・史は齋王家に向う(『江家次第』「齋王卜定事 伊勢」)。馨子の初齋院行事弁は藏人頭・権左中弁藤原経任であるが、民部卿藤原齐信の室家の死去により、五位藏人・左少弁源経長が替わりに奉行する(『左経記』長元4年12月23日条)。経任は齐信の養子である(『公卿補任』長元8年条尻付、『尊卑分脈』「為光公孫」)。なお、長元6年に経長は齋院長官(『弁官補任』)。行事史は、左大史小槻貞行の服身の替わりに左大史惟宗義賢が行う(『左経記』12月24日条)。行事上卿は中宮権大夫藤原能信と推定され、たとえば12月16日、頭弁経任が馨子を賀茂齋王に卜定の勅を能信に仰す。能信は神祇官を召し、神祇大副大中臣兼興が卜定する。また、23日、能信は明年禊祭料を行事所に納め雑用に宛てる(12月19日・23日条)。さらに、12月22日、右少将源定良を齋院別当となす(12月23日条)。このほか、左衛門督源師房や左兵衛督藤原公成は「彼宮(二宮馨子)別当」あるいは「齋院の別当」、平範国は「官司」とあり、馨子家の別当や家司と想像される(『左経記』12月9日条、『栄花物語』三十一「殿上の花見」・三十二「調合」)。経頼は行事や別当・家司ではない。しかし、大宮(威子)や両宮(章子・馨子)の事を類に触れ召し仰せられるので、然るべき事を「内々に」申し行(『左経記』12月9日条)。経頼は後一条天皇の五位藏人(長和5年～寛仁2年)・藏人頭(長元2年～3年)、また中宮威子の中宮亮(治安2年<1022>～長元3年)・中宮権大夫(長元

- 8年～9年) (清水潔『類聚符宣抄の研究』第五章、国書刊行会、1982年)。
- 10 所京子氏は「内々為間定所喚也」を「内々為間ト定所喚也」とし、丹波守章任の三条宅を「ト定所」と論定する(所京子『『狭衣物語』にみる齋院の史的考察』前掲)。その根拠は不明なので、増補史料大成本に依拠する。
 - 11 馨子内親王は、このごろは「ことごとく二所(後一条と威子)の御中におはします」。出御の日には、後一条と威子が「(清涼殿)上の御局」にて涙をとどめず(『栄花物語』三十一「殿上の花見」)。15日、後一条天皇は宮退出の間の事を仰せ「涕泣」し、中宮威子も同じくこの事を仰す(『左経記』長元4年12月15日条)。
 - 12 天暦元年6月、「齋宮」悦子女王の入御する諸司を占い、8月、伊勢斎王の御禊の日時を勘じる(『日本紀略』天暦元年6月20日・8月25日条)。また、長暦元年4月2日、「齋院」娟子内親王の御禊定並びに「御所ト定」がある。御禊の日は13日で入御所は右近府である(『行親記』長暦元年4月2日条)。
 - 13 山本一也氏(京都大学研修員)のご教示による。
9・10世紀には中宮・皇后は女御以下と区別され、宮内で出産し、内裏内で皇子女を養育する(岡村幸子「職御曹司について－中宮職序と公卿直廬－」、『日本歴史』582、1996年)。
 - 14 所京子氏は、「初齋院入御の前に家人等の邸宅に移り入ったことは、平安時代も中後期のことで、勿論『延喜齋院司式』の規定にはみられない」とする(『『狭衣物語』にみる齋院の史的考察』前掲)。
 - 15 所京子『齋王和歌文学の史的研究』第二部第八章(テ)「令子内親王」(国書刊行会、1989年)
 - 16 この史料は山本一也氏のご教示による。
延喜2年、「齋院」君子内親王が煩病するので、「他家」に移る事を定める。親王は甚だ気力なく、罷り出で、死去する(『西宮記』臨時5「齋院」)。
 - 17 高橋康夫『京都市中世都市史研究』第一章「平安京北辺の地域的发展」(思文閣出版、1983年)
「桃園に住み侍ける前齋院屏風に」(紀貫之、『拾遺和歌集』一「春」)、「桃園の齋院の屏風に」(よみ人知らず、『拾遺和歌集』十六「雑春」)。この桃園の(前)齋院は宣子の可能性がある。
 - 18 黒板伸夫「藤原行成家」の家政と生活基盤(『平安王朝の宮廷社会』、吉川弘文館、1995年)
 - 19 長和3年、皇后宮「御領」元華山院が焼亡し(『小右記』長和3年12月17日条)、同5年、同じく「御領」の修理大夫藤原通任家(大炊御門南・東洞院西、あるいは二条・西洞院)が焼亡する(『日本紀略』『御堂関白記』長和5年12月10日条)。
 - 20 野口孝子「枇杷殿」(隴谷・加納・高橋編『平安京の邸第』、望稜舎、1987年)

6 齋王家の建築と装束

齋王家の建築や装束を検討する。

齋王家では、神部が木綿を賢木に著け、「殿の四面及び内外の門」に立てる《1》。齋王家には、「殿」と「内外の門」がある。^{註1}

一方、初齋院や野宮には齋殿がある。

《7》凡齋内親王在京潔齋三年、即每朔日、著木綿鬘、参入齋殿、遥拝大神、時先供御麻、次鬘木綿、…、別当大夫已下ト食者、共再拝兩段、但九月、六月、十二月不参、至十六七日参入、再拝兩段、長拍手兩段、齋王不拍手、齋終之後、乃向伊勢大神宮、…(「齋宮」45潔齋三年条)

齋内親王は在京潔齋三年で、朔日毎に木綿鬘を著け、「齋殿」に参入し、大神を遥拝する。齋内親王を定め祓禊して初齋院に入り、「明年7月に至るまで、この院に齋」し、8月上旬、祓禊して野宮に入り、「明年8月に至るまで、この宮に齋」す《2》。「京にありて潔齋すること三年」はト定年とその明年、さらにその明年と推定されるので、初齋院と野宮の期間である。^{註2}「齋殿」

は初齋院や野宮に設置されるが、齋王家にも存在を確認できる。

齋王本宮の建築はより詳細に判明する。

《8》本宮次第、

【β】先御浴殿、了著新御衣給、其後御装束並御調度一物以上皆被改、

次御所御装束御座撤旧鋪新、但暫曳反、御襖後展之、晝御座二間、

当母屋際簾立屏風一帖、其傍立二階一脚、其前敷両面端帖二枚、

同間孫庇敷小筵二枚、其上敷緑端半帖一枚、

公卿座設中門北、殿上人座設侍廊上、神司座饗十前設中門南廊、

勅使参入立中門、

敷勅使座於対南唐庇当母屋四間、遍長押敷之、本家家司役之、敷經綯一枚、或用高麗、

^(小字イ)
其上敷茵北面、

次勅使著座以四位家司示可被著座由、次居肴物衝重二合、

次勸盃或無勸盃只給禄、一献殿上四位、二・三献公卿勸之、

次給禄公卿取之、女装束一具、勅使下座再拝、

【0】次御禊此間上卿以下下地、

当晝御座間前庭敷菅円座先例云々、為宮主座、其南立八脚机東西妻、其傍立大床^[子脱カ]、

次齋王先洗手、著御禊座異面、

中臣官人取御贖物二高坏、進簀子敷下、乍立地伝之中臣女、

次中臣捧大麻、乍立地伝於女房、返給後^[下イ]卜部、卜部取之著座、修御禊、了捧麻退出、

次中臣参入、撤御贖物、次撤座、

【a】次大殿祭家司一人捧脂燭前行、神祇官二人、

懸^[玉脱カ]御所四角柱・御湯殿・進物所等也、或於御湯殿後祭御厠、然而件事無之、其御湯殿并進物所等皆四角懸之、

【b】次神祇官人奉仕御井祭、

【c】次神祇官挿賢木以木綿繫其木、

先挿御在所屋巽角、次艮角、次乾角、次坤角、次神殿戸当中央、次内膳屋、次井、次中門、

次門、挿件賢木後、人不登御在所板敷上、又挿賢木間、公卿以下下地、件挿賢木之神司不渡御前云云、

次神祇官人等著中門南廊座対座、預饗饌地下諸大夫役送、

次給禄五位白大褂、六位以下匹絹、次官人等列立再拝退出列於庭中、

【d】次立内膳屋、^(小字キ)木工寮<近代修理職>、次渡大炊寮御飯、次立陣屋、^(小字カ)左右衛門<先給宣旨>、并仰衛門可宿直之由、次立炬火屋修理職<先給宣旨>、

次掃除初齋院四面并近辺汚穢仰左京、

次上卿以勅別当令申事由了召別当於御前被問子細、

次自殿上滝口一人、藏人所衆二人、可参宿彼院由被仰之、若有妊者不可差之治承^[曆カ]五年例、

…(後略)(『江家次第』十二「斎王卜定 伊勢」)

斎王の御禊ののち、神祇官が大殿祭し、玉を「御所」「御湯殿」「進物所」に懸け、あるいは「御厠」を祭る【a】。また、神祇官人が「御井祭」を奉仕し【b】、賢木を「御在所屋」「神殿戸」「内膳屋」「井」「中門」「門」に挿す【c】。さらに、木工寮(近代は修理職)が「内膳屋」、左右衛門府が「陣屋」、修理職が「炬火屋」を立てる【d】。このうち、内膳屋・陣屋・炬火屋は新造であるが、内膳屋は【c】にも列挙される。内膳屋は斎王の御飯を用意し潔斎の義務があるので、【c】にも記載すると推定される。あるいは、なお新造の屋がある可能性がある。なお、野宮では「野宮の地を鎮むる祭」があり、その料は五色の薄施各5尺や埴・坏各5口などである(「斎宮」17鎮野宮地祭条)。

さて、【b】では神祇官人がとくに「御井祭」を奉仕する。本宮の「御井」は格別の意義がある。この御井は、初斎院と同様に「供膳の井」と推定される。伊勢斎王が初斎院に入り、「供膳の井」を卜定し賢木を立てる(「斎宮」6河頭祓条)。同じく、賀茂斎王が初斎院に入り、「供膳の井」を卜定し賢木を立てる(「斎院司」4祓物条)。「供膳の井」では、宮主が「井神祭」「井祭」を祭る(「斎宮」10忌火等祭条、「斎院司」5井祭料^{註3}条)。斎王本宮の御井祭は「供膳の井」の井神祭に相当すると想定される。【c】では、この井に賢木を挿す。

長元4年(1031)、賀茂斎王馨子内親王の本宮は丹波守源章任の三条宅で、本宮の次第が詳細に判明する。

《9》(13日)…(前略)、次参三条、令御装束、

【a】先以神殿当御在所西方云々、仍迫東対台北為御所塗籠東廂也、件塗籠可為神殿之故也、抑件宅本自無寝殿、只所在東対代・北対許也、仍以東対代為御所、以北対女房曹司、

【β】自内裏被度御屏風十帖五尺四、々尺六、大嘗会時被調也、自余敷設壁代御木帳等、皆本家被儲、御帳不立、自行事所追依可調渡也、…(後略)

(16日)…(前略)、

左衛門督、左兵衛督、余参三条、

【X】頃之勅使頭中将参入、甲斐前司範国申事由内府宿衣兼被候、南廂敷座高麗端一枚茵、召之、中将着座令申有准三宮宣旨由、次着肴物高坏二本、金吾武衛僕次第勸盃、次金吾取祿女装束、授中将、中将下庭拝退出、頃之関白殿令参給、次下宅[箸か]、了上達部多参入、次勅使右少将行経参入、令申事之由、敷座如初、使着申斎王卜定由、次武衛授祿女装束、拝出、

【0】次神祇大副以下参入、範国申事由、頃之中臣三人取御祓物二人高坏二本、々別居小土鍋四口納物、以紙裹、各四、一人大麻等、自東庭辺簾下授女房、女房取之供御前余自地辺立坐具、少許女房示案内、女房取大麻、摩御体、返中臣、々々取之授宮主宮主兼候東庭膝突、(北面)、宮主斎院宮主、以本宮解申結政任之、今日不可申任、仍用代官、

【a】御祓了神部四人、付木綿取賢木、立御在所屋四角始自巽次第立之、次立中門北南柱下、次立御門左右柱下、次立御井余仰云、如式球(者か)、所司立御井賢木、而於里第立之如何、神祇官云、前例如此者、仍重不答、

【b】次中臣下部各一人、奉仕大殿祭於御在所屋巽角始之、次乾、次坤祭之、次御湯殿、但不入簾中、只於簾外祭之、

【c】次有仰、副以下史以上着座以待所為件座、以机備饌、二献了諸大夫汁三献了、給祿副大掛各一領、祐單重各一領、史各二疋、(裏紙)、神祇部史生官掌等疋絹、雜人調布、史以上列南庭西上北面、再拜退出、

【①】次賀茂社司等參入、範圍申事由、令着座以政所為件座給饗、知家事等勸盃、役送正口、三献了給祿褌宜設黃衾各一帖、神人等調布、列庭、再拜了退出下社司不參入云々、

【②】次範圍朝臣家司等相共、於政所成始近江国御封返抄云々、

【③】又撤本御座并辺敷等、供新御座等但下敷、長筵、女房料量壁代屏風木帳不替、件新御座等本家所儲也、

【d】又木工寮新作三間大炊屋、御炊男々々本家注両三人、各宮主人卜定之云云、清雜具炊御飯政所新調儲雜具渡之、進物所清御膳具、調供御膳政所始自御器御台、至于雜具、調具渡之、

【④】又宮主清料物、祭御再〔井カ〕御竈庭火等本家宛料物、各進請文、

【⑤】自今夜參入人々并侍者等不可昇長押上、但可候簀子云々、又女房自里第參入之日不昇御在所長押上云々、經一宿之後可昇云々、又於御在所不口頭、況於余事乎、

【⑥】今夜不立神殿御帳并御所御帳等、又不立神〔殿戸脱カ〕賢木、不供神座并悅〔幌カ〕等、

【⑦】凡於神祇官庁始初齋院行事云々、行事弁史着之、上卿不着云々、

(『左経記』長元4年12月13日・16日条、□は西山註)

《8》と《9》では儀式的順序に齟齬があり、《9》では【a】(賢木、《8》【c】)から【b】(大殿祭、《8》【a】)に進行する。また、《9》には《8》【b】(御井祭)の記載がないらしく、一方、《9》は賀茂齋王の卜定で、【①】賀茂社司の参入がある。さらに、馨子は准三宮となり、年官・年爵や、本封の外に千戸封を賜わるので(『左経記』長元4年12月16日条)、おそらく《9》【②】で御封の返抄を成し始める(吉書始)。ところが、【d】(屋の新作)は《8》《9》で大差なく、結局、《8》は伊勢齋王、《9》は賀茂齋王であるが、両者は基本的に一致する。

さて、三条宅は「寢殿」がなく、「東対代・北対」がある許りである。そこで、「東対台(代)の北に迫りて御所(御在所)とな」し、北対を「女房曹司」とする。東対代では「神殿」を齋王の「御在所」の西方に当て、塗籠を神殿とし、御所は塗籠の東廂である。すなわち、《9》では神殿は東対代の塗籠にほかならない。《8》では、神祇官が「神殿の戸中央に当る」に賢木を挿す。神殿はわざわざ「戸」の中央とするが、これは神殿が独立の建築でない事実を反映すると推定される。かくして、11世紀には神殿は固有の建築ではなく、その一室と想定される。この神殿こそ^{註4}《7》の齋殿に該当する。

さて、《9》【⑥】では神殿や御所の御帳も立てず、神座も供さず。【β】では、行事所より追って調べ渡すので、13日に御帳は立てず。したがって、馨子の本宮では、卜定の当日に神殿や御所の装束はなお充分ではない。【⑦】では、16日に神祇官庁で初齋院行事を始めるので、御帳はこれ以後に立てるほかない。ところで、【⑥】では「又不立神賢木」とするが、これは【a】と矛盾し、また直前に「不立神殿御帳并御所御帳等」とある。そこで、この「神賢木」は「神殿賢木」あるいは「神殿戸賢木」の誤写・脱落と憶測され、すなわち《9》では神殿(戸)に賢木を立

てない。神殿や御所が未整備であり、そのため神殿(戸)に賢木を立てないと推定される。

【a】では神部が御井に賢木を立てる。「式の如くんば」、所(諸)司では御井に賢木を立てるが、「里第においてこれを立つるは如何^{註5}」。神祇官は「前例は此くの如し」と云う。よって、重ねて咎めず。初斎院では供膳の井を卜定し賢木を立てるが(「斎宮」6河頭祓条、「斎院司」4祓物条)、本宮ではこの規定はない。しかし、神祇官は、本宮でも前例で御井に賢木を立てる。さて、【④】では宮主が料物を清め、「祭御再御竈庭火等」とするが、このうち「御再」は本来「御井」ではないかと想像される。「野宮に遷り入るの初めに」忌火・庭火・御竈・井神祭を祭るが(「斎宮」10忌火等祭条)、このうち御竈と庭火が一致する。したがって、「御再」は忌火か井神に該当する可能性があるが、「再」と「井」は字形が近似し、「再」は「井」の誤写と憶測される。このように、【④】では宮主が「御井」や御竈・庭火などを祭り、《8》の【b】御井祭と対応する。賀茂斎院の初斎院では、宮主が供膳の井の井祭を祭る(「斎院司」5井祭料条)。

【d】では木工寮が三間大炊屋を新作し、御炊男が雑具を清め御飯を炊ぐ。また、進物所が御膳具を清め、御膳を調え供す。《8》の【d】では、木工寮が内膳屋を立て、大炊寮の御飯を渡す。三間大炊屋と内膳屋が対応し、大炊屋と進物所に炊飯と調供の分業がある。宮主が炊男をわざわざ卜定するが、供膳の井に賢木を立て、宮主が祭る。《8》では、内膳屋に賢木を挿し、進物所に玉を懸ける。供膳の調供は潔斎が厳格である。なお、《9》では、陣屋・炬火屋は記載がなく不明である^{註6}。

さて、野宮には「黒木の鳥居ども、さすがに神々しう見わたされて」とあり(『源氏物語』「賢木」)、黒木の鳥居があるが、斎王家では確認できない。また、「おまへのやり水」(御前の遣水)に残りの菊が浮かび、「いづみばかり」(泉許り)に身がしづむ(『源順集^{註7}』)。斎王の本宮は斎王の「自邸」や「人の家」の借用であるから、遣水や泉は充分に存在しうる。

斎王家の装束では、神殿や御所の御帳が枢要である。しかし、前述のように、卜定の当日は神殿や御所の御帳は立てず、神座も供さず、行事所より追って調え渡す。この御帳には紆余曲折の経緯がある。「賀茂初斎並びに野宮装束」に斗帳(御帳)2具があり、その内訳は白木1具、漆1具である(『延喜式』「内匠寮」賀茂初斎院条、「斎院司」22行具条^{註8})。白木の斗帳は「神殿料」、染塗(漆)は「斎王料」である。一方、宮城内便所を初斎院とするので《2》、諸司を初斎院と謂い、御帳や雑具は諸司に入る日に渡す。しかし、前斎院選子内親王の仰せでは卜定の日に御帳を立てるので、里第を初斎院と謂う(『左経記』長元4年12月5日条、『小記目録』八「斎王事^{註9}斎宮斎院」長元4年12月5日条)。結局、神殿の御帳は里第では立てずの儀あり。その場合は先に神座を敷き御節供を供す(『左経記』長元4年12月23日条)。12月28日、行事所が斎院の神殿の承塵や戸の幌、神座、斎王座などを調え具し、宮主代・神祇少祐則政が供し敷く。行事の弁・史は皆内の穢れに触れ、院に参らず(長元4年12月28日条)。かくして、里第では神殿に白木の御帳を立てない。なお、長元5年正月1日、宮主が神殿に御節供2前を供し、前別に衝重4合。神座の前ごとに各々院の御座あり(長元5年正月2日条)。神座は複数あり、それは御節供と同様に2前と推定される。

第2節 平安京の墨書「齋宮」と齋王家・齋王御所

なお、賀茂齋王では斗帳は2具であるが、伊勢齋王は1具である。伊勢齋王の初齋院の装束に「白木斗帳」1具があり、高さ8尺・方1丈で、「供物」すなわち「齋王料」である（「齋宮」14初齋院装束条、「内匠寮」初齋院装束条）。また、野宮に遷る装束に「白木斗帳」1具があり、やはり「供料」である（「齋宮」36野宮装束条、「内匠寮」野宮装束条）。さらに、齋内親王が3年の齋が終り、造り備える雑物に「斗帳」1具があり、方1丈2尺・高さ7尺5寸である（「齋宮」43造備雑物条）。伊勢齋王では、初齋院・野宮から伊勢齋宮まで「齋王料」の斗帳1具である。^{註10} 齋王家でも「齋王料」の斗帳を立てる可能性が充分にある。

長元5年正月1日、申時に齋王は「初めて」神殿に入る（『左経記』長元5年正月2日条）。これは卜定から14日後、神殿の神座などの供し敷きから2日後である。長元9年11月28日、良子内親王を「齋宮」に、娟子内親王を「齋院」に卜定し、勅使を両所に遣わす。「齋宮」は左中将藤原良頼（か）、「齋院」は四位左少将藤原行経。12月20日、「齋宮・齋院」が「始めて神殿に入御す」る（『範国記』長元9年11月28日・12月20条）。行事所が神座などを調べ具し、行事が敷き終わり、齋王は「初めて」神殿に入る。先述のように、卜定の当日に神殿の戸には賢木を立てない。しかし、同じ正月1日に神祇が所々の賢木を指し替えるので、神殿にも初めて賢木を立てる可能性が高い。^{註11}

本宮では、装束や調度を皆改め、御座は暫く曳き反し、御禊の後に展べる《8》【β】。馨子内親王の三条宅では、13日、内裏より屏風を度し、自余の壁代・木（几）帳などを敷き設けるが、これは皆本家が儲ける《9》【β】。16日、本の御座や辺敷を撤し新御座を供すが、下敷・長筵や女房料の畳・壁代・屏風・木帳は替えず。新御座は本家が儲ける【③】。大炊屋の雑具は政所が新たに調べ儲け、進物所の御膳の具は政所が御器・御台より雑具に至るまで調べ具して渡す【d】。

註

- 1 賀茂齋王の齋王家では、「殿」は「寝殿」である《5》。
- 2 賀茂齋王は「初齋院において三年齋」す（「齋院司」6三年齋条）。
- 3 伊勢齋王の忌火や井神祭は、「野宮に遷入するの初め」に祭る。この規定は初齋院（「齋宮」6河頭祓条）から野宮（「齋宮」17鎮野宮地祭条）の中間にあり、大殿祭、忌火・井神祭、朔日庭火祭、晦日解除料と連続する（「齋宮」9初齋院大殿祭条～12解除料条）。このうち、大殿祭・朔日庭火祭・晦日解除料は「野宮・（伊勢）齋宮これに准ず」る。したがって、「野宮に遷入するの初め」に祭るとは、忌火・井神祭は初齋院では祭らず、「野宮に遷入するの初め」や伊勢齋宮で祭祀すると推定される。一方、賀茂齋王の場合は、初齋院に入り供膳の井を卜定し、宮主が井祭を祭る（「齋院司」4祓物条・5井祭料条）。
- 4 福山敏男は、伊勢齋宮の神殿は齋王の御殿のかたわらや少し奥まったところにあり、「小さな祠（ほくら）」程度と推定する（『齋王宮と離宮院の建築』、三重の文化財と自然を守る会・松阪の文化財と自然を守る会）。
- 5 初齋院に二説が並立する。宮城内の便所（諸司）を初齋院とするが（「齋院司」3初齋院条）、一方、里第（本宮）を初齋院とする（『左経記』長元4年12月5日条）。後述を参照。
- 6 凡伊勢齋内親王初齋之時、差門部二人、衛士一人、為門衛門部直陣、衛士炬火、其賀茂齋院門衛准此、但雖遷齋院猶充之（『延喜式』「左衛門府」初齋条）

伊勢齋王の「初齋」は初齋院の直前の初度禊と推定され、「賀茂齋院の門衛」もおそらく初度禊である。伊勢齋王や賀茂齋王の初度禊では、左右門部各2人が供奉する（「齋宮」6河頭祓条、「齋院司」4祓物条）。「齋院に遷ると雖も」の齋院は初齋院と想定される。賀茂齋王が初齋院で三年齋し祓禊するが、その儀の門部4人は「院の門衛」

を用いる(「齋院司」6三年齋条)。この「院の門衛」は初齋院の門衛である。賀茂齋王では、左右衛門府が門衛の陣屋を造り、木工寮が炬舎を造る(「齋院司」31陣屋炬舎条)。すなわち、紫野齋院(野宮)では陣屋・炬舎が造営されると推測される。

- 7 所京子「歌にみる伊勢齋王の概要」(『齋王の歴史と文学』、国書刊行会、2000年)
- 8 前齋院の仰せでは、神殿の御帳の帷は「白約」、齋王の御帳の帷は「朽木形約」である(『左経記』長元4年12月21日条)。
- 9 賀茂齋王の紫野齋院では、相嘗祭の神座は2前で、上下両社料である。毎年11月上卯日、齋王は夕時に神座を齋殿に設け、座別に齋王の供奉座を設けて祭る(「齋院司」13相嘗祭条・14相嘗祭装束料条)。
- 10 野宮の年料供物に「斗帳」1具があり、縫殿寮が縫い備え毎年供すが、斗帳の骨は内匠寮が作り一度供す(「齋宮」37野宮年料供物条)。伊勢齋宮の年料供物に「斗帳料」の絹と綿があり、女部司が縫い備えるので(「齋宮」71年料供物条)、野宮の年料も「斗帳料」の絹と綿の縫い備えと推定される。
 なお、伊勢齋宮では、新嘗に供す料の掃部の請くところに、払細布1丈2尺・簀1合・白端帖12枚・短帖8枚・坂枕2枚・折薦帖2枚があり(「齋宮」66供新嘗料条)、神座と推定される。
 斗帳・神座については、上野勝之(京都大学大学院生)・吉江崇(京都大学助手)のご教示による。
- 11 長承元年(1132)11月25日、鳥羽院の第一姫宮禧子内親王を「齋院」に卜定し、12月8日、齋王は「初めて神殿に入る」(『中右記』長承元年11月25日・12月8日条)。

7 齋王家の行事

本宮では勅使が座を下りて再拝し、次いで「御禊」。晝御座の前庭に宮主座を敷き、その南に八脚机を立てる。次いで齋王は先ず手を洗い、御禊座(巽面)に著す。中臣官人が御贖物の「二高坏」を取り、中臣女に伝える。次いで中臣が大麻を捧げ、女房に伝える。卜部はこれを取り著座し、御禊を修し、麻を捧げて退出する。次いで中臣が御贖物を撤す《8》【0】。長元4年(1031)、賀茂齋王馨子内親王の場合もおおむね同様である《9》【0】。神祇大副以下が参入し、しばらくして中臣3人が「御祓物」を取る。2人は高坏、1人は大麻を女房に授ける。女房は高坏を御前に供し、大麻で「御体」を摩る。中臣に返し、中臣は宮主に授ける。「御祓」が了り、神部が賢木を立てるので《9》【a】、御禊を御祓と表記する。

齋内親王は在京して潔齋三年、朔日毎に木綿鬘を著け、「齋殿に参入し、大神を遥拝す」る《7》。この三年は初齋院と野宮の期間で、本意では齋王家は包括されない。しかし、齋殿(神殿)はすでに存在するから(5齋王家の建築と装束)、齋王家でも齋王は朔日毎に参入し、大神を遥拝すると推定される。長元4年、里第に神殿御帳を立てないので、元三日供・御節供や「朔日、齋王、神殿に参る」に、先ず神座などを敷き、御節供を供す。毎月朔日に参殿料の「裳・唐衣」は定めがないので、今は只候する由に随う。また、馨子は「幼稚の程」(3歳)であるが、必ず「裳・唐衣」を着す。乳母が相副いて神殿に参り、齋王に代り御祈を申す(『左経記』長元4年12月21日・23日条)。

《9》…(前略)、今日参齋院、謁侍従内侍、内侍云、

【a】昨日早朝供忌火御飯、

【b】次供御齒固、着御生气御衣、

【c】次神祇指替所々賢木、

【d】宮主供神殿御節供二前前別衛重四合、

【e】次院着御々唐衣裳了、申時初入御神殿 禱吉時也、令申公家御祈給毎神座前各有院御座、自侍御共、次退出、

【f】進物所供御節供御台六本、^(マ)須本須用御台盤、而自行事所未渡、仍本院設御台也(『左経記』長元5年正月2日条)

長元5年正月1日には、【a】早朝に忌火御飯を供す。【b】次いで齒固を供すが、生気の御衣を着す。【c】次いで神祇が所々の賢木を指し替え、【d】宮主が神殿に節供2前を供す。【e】次いで院が唐衣・裳を着し了り、申時に「初めて神殿に入御し」て、公家の御祈を申す。神座の前毎に各院の御座あり、次いで院は退出する。侍従内侍は「自ら御共に侍る」とあり、院の神殿入御に相副う。さらに、【f】進物所がおそらく齋王に節供を供す。行事所が台盤を渡さないの、本院が台6本を設ける。このうち、【e】神殿初入御は本来は元日や朔日の行事ではなく、【b】齒固が正月に固有である。また、元日に御薬を供す間は、生気方の唐衣である。さらに、元三日供や節供も御帳を立てず、先ず神座などを敷き、節供を供す(『左経記』長元4年12月21日・23日条)。【d】宮主が神殿に節供を供すが、元三日供は正月、節供は節日に供す。一方、【c】賢木の指し替えは、齋宮の諸門には常に賢木を立てるが、「月別に」立て替える(「齋宮」4木綿賢木条)。【a】忌火御飯は、天皇では6月1日(神今食)・11月1日(新嘗祭)・12月1日(神今食)である(『西宮記』恒例第二・第三)。齋王の場合は、朔日の齋殿参入と対応し、毎月朔日と想像される。結局、毎月朔日は【a】忌火御飯・【c】賢木の指し替えと齋殿参入、正月は【b】齒固・供御薬と元三日供、節日に【d】【f】節供と類別される。

一方、伊勢齋宮の年中行事には、正月元日に「於齋殿遥拝大神宮」や、「献齒固、供御薬」が復原され、遥拝大神宮は毎月朔日と推定される^{註1}。齋王家の正月の齒固・供御薬、朔日の神殿参入は伊勢齋宮の年中行事と一致する。このほか、長元4年12月29日、齋院で「御祓」があり、宮主が祓物を供す(『左経記』長元4年12月29日条)。野宮では6月・12月の晦日は大祓で、馬2疋に「その在国の日は4疋」とあるので(「齋宮」26大祓条)、伊勢齋宮でも同様である^{註2}。

ところで、長元4年、齋院では「野宮に至るまで」難良力(刀)自之神に朝夕の御膳の散飯(食事に際し、食物の少量をとり分けて、鬼神・餓鬼・鳥獸などに施すもの)を奉るが、「里第」でも御膳の散飯を奉る。また、御封や諸司より渡す物の「最前」(いちばんさき)も皆この神に奉る。さらに、毎月酉日にこの神を祭るが、その儀は只御炊男に一度料2升を宛て給い、酒肴で祭る(『左経記』長元4年12月19日・20条)。難良刀自神(難良専女)^{な ら とうめ}は現在も上賀茂神社の摂社奈良社に祭られ、御饌御酒の守護神である^{註3}。

さて、賀茂齋王馨子内親王は先年より比叡山で御祈を行うが、他所での仏事御祈は忌まないのが例事である。御封物を宛て、禊祭料を宛てない(『左経記』長元4年12月19日・20条)。この論理では、齋王家では同所の仏事を忌避する。しかし、齋院では、忌詞は死・病・泣・血・穴・打・墓で、齋宮の内七言(仏・経・塔・寺・僧・尼・齋)と別忌詞(堂・優婆塞)を除外する。伊勢

斎王の場合は、「同(本宮)次第」に「凡行事以下潔斎日」、内七詞、外七詞、「十一月中卯日以前、不食新年穀米事」が列挙され(『江家次第』巻十二「斎王ト定事 伊勢」)、斎王家でも仏など内七詞は死など外七詞と並列される。

一方、「昔」の斎宮・斎院は仏経などを「忌」むが、大斎院選子内親王は仏法を崇める。朝ごとの念誦を欠かず、雲林院の菩提講に布施を贈る(『大鏡』「右大臣師輔」)。また、東三条院藤原詮子の法華八講の「捧物に、金して亀の形を造りて」詠歌し、「法の^{のり}ため」花を数々に摘み百和香(薫香の一種)に加える(『拾遺和歌集』巻二十「哀傷」、『後拾遺和歌集』十「哀傷」)。斎院では、公的には仏教を忌避するが、私的には「仏典を読み仏を信じて差し支えな^{註4}」いのかもしれない。

ところで、野宮や伊勢斎宮では、毎月下旬に雑色や仕女以上の名簿を主神司に移送し^{うら}ト^は食まざる者は伊勢斎宮では「宮中」に参供できず、宮中で皆忌むが、野宮では内院で忌む(「斎宮」81名簿条)。承暦年中(1077～81)に大中臣公隆が「斎宮寮内中外、并三箇院、数十字殿舎」を造進し、また斎宮寮は内院(「斎王御之」)・中院(「寮頭在此」)・外院(「萱葺屋五十六字」)(『朝野群載』巻六「神祇官」元永元年6月8日大神宮大宮司補任官符、『新任弁官抄^{註5}』)。野宮では、外院などではト食まざる者を忌まず、内院と外院などで忌みに格差^{註6}がある。斎王家でも内院と外院が区別される可能性がある。斎王家では賢木を殿の四面と「内外門」に立てる《1》。この「内外門」とは、中門と門に挿す《8》【c】、あるいは中門の北南の柱下と御門の左右の柱下に立てる《9》【a】。内外門は中門と(御)門に該当し、斎王家は中門の内部の区画と、中門の外部で(御)門の内部の区画に二分される可能性がある。斎王家の内院と外院では、やはり忌みに懸隔があると想像される。

註

- 1 所 功「「斎宮年中行事」の復原試案」(『宮廷儀式書成立史の再検討』、国書刊行会、2001年)

所氏は藺田守良の復原を紹介し、各行事復原案は実在すると主張する。このうち、「於斎殿遥拝大神宮」は、「凡元日斎内親王遥拝大神宮、…」(「斎宮」73元日条)、「凡内院神殿者、令主神司専一勤守、…」(84神殿勤守条)。毎月朔日は、「斎内親王在京潔斎三年、即每朔日、著木綿鬘、参入斎殿、遥拝大神」(45潔斎三年条)から、「野宮と斎宮とは何事も同じ例なり」(藺田守良)。「献齒固、供御菓」は、「…、正月供屠蘇命婦以下嘗菓小児以上服料帛十疋、綿廿屯帛用斎王生気色、並寮充之」(71年料供物条)。

- 2 斎王家の行事では、しばしば高坏が使用される。御禊では、中臣官人が御贖物の「二高坏」を中臣女に伝え《8》【0】、長元4年には中臣2人が御祓物の「高坏二本」を取り、女房に授ける。本別に小土鍋4口を居き、物を納め紙で裹む《9》【0】。また、頭中将源隆国が三条宅に参入し、馨子内親王に准三宮宣旨ある由を申す。次いで肴物の「高坏二本」を着し、左衛門督源師房らが次第に勧盃する《9》【x】。

- 3 川出清彦「斎院内の生活をしのぶ—大斎院^{まき}前の御集を読みて—」(『神道史研究』16-1、1968年)

- 4 所京子「大斎院選子の仏教信仰」(『斎王和歌文学の史的研究』、国書刊行会、1989年)

十六町で墨書土器「僧供廿□内」「僧供□」が出土するが、その年代は9世紀後半で、「斎宮」関係の墨書土器は「若干新しい要素」を持つ(本書第5章第1節)。

- 5 『新任弁官抄』は、作者は藤原俊憲、保元3年(1158)末から4年始に成立か(『群書解題』5)。

- 6 斎王が伊勢大神宮に向うと、野宮の内外屋や垣は神祇官中臣に給う(「斎宮」45潔斎三年条)。屋に内外があり、内院と外院が想定される。

8 おわりに

平安京右京三条二坊十六町から墨書「齋宮」が出土する。「齋宮」は伊勢齋王の<御殿>を意味し、京中の齋王御殿は齋王家以外にない。9世紀にも齋王を慣用的に齋宮と通称し、齋王家も齋宮と呼称しうる。9世紀から10世紀前半には、齋王家は「自邸」と推定される。10世紀後半から11世紀前半には皇后・中宮所生の内親王が「人の家」を借用し、11世紀後半以降に「人の家」に固定・盛行する。

齋王家では賢木を立てる。11世紀には齋殿・神殿が存在し、「供膳の井」の井神祭を祭る。「齋王料」の斗帳も立て、御竈・庭火なども祭ると推定される。また、齋王は朔日毎に神殿に参入し、大神を遥拝すると想定される。さらに、正月の歯固・供御薬や忌詞などは伊勢齋宮の行事と一致するようである。11世紀には齋王家は初齋院・野宮や伊勢齋宮に接近するが、このあり方は9・10世紀に遡及すると推測される。

この邸宅の「齋宮」については、角田文衛氏の卓見がある。角田氏は、9世紀末葉から10世紀前期では、恬子内親王の御所が三条にあると強調される。恬子の母は文徳天皇の更衣紀静子で、三条に里第があり、「三条町」と呼称される。この三条宮が十六町の邸宅と同定できる。恬子は退下後、「亡母が遺した右京の三条宮で長い余生を過ご」^{註1}すと推定される。

さて、「900年前後」にこの邸宅は再整備されるが、その要因に皇女の「齋宮」点定が推定される(本書第5章第1節)。墨書「齋宮」は齋王家に固有であり、900年前後が焦点となる。恬子内親王は貞観元年(859)10月に伊勢齋に卜定され、同年12月に初齋院に入る。貞観18年に退下し、延喜13年(913)に死去する。貞観元年と900年前後とでは、少々時期が齟齬する。一方、天慶元年(938)、英子内親王は「西三条第」で初笄(裳著)し(『日本紀略』天慶元年8月27日条)、同9年に卜定される。英子の齋王家は西三条第である可能性^{註2}がある。

さて、齋王家には御所・御湯殿・進物所・御厠や神殿・内外門などが存在する。また、内膳屋・陣屋・炬火屋が新造され、「供膳の井」も想定される。しかし、これらと遺構の建物や井戸との対応は未解決で、今後の検討が必要である。

註

1 角田文衛「遺構は三条齋宮の御所」(『京都新聞』2000年3月23日)

2 今上親王でない場合は、「私第」で元服を加え参入する(『新儀式』五「親王加元服事」)。

西三条第は右京三条一坊六町(あるいは四町)にあり、右大臣藤原良相から大納言常行に伝領されると想定されるが、それ以後はまったく不明である(「平安京一条坊および官衛・邸宅」前掲)。この西三条第と別個の邸宅の可能性はある。

観察表 1 瓦類観察表

軒丸瓦(図版15)

遺物 番号	地区 遺構	文様	表面の色調 胎土	形態・手法の特徴	備考
1	3区 D42KU 耕作溝	重圏文軒丸瓦	N4/灰色。 7.5Y7/1灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端よりやや下がった位置に、強いナデつけによって溝を穿ち、丸瓦を押し込んで接合。補足粘土は丸瓦を覆うように多量に使い、瓦当裏面を厚くしてナデとケズリによって余分な粘土を掻き落とす。側面下半は横ヘラケズリ、上半凸面部は縦ヘラケズリで、後にナデ調整。	難波宮 6015A式。
2	3区 D42FR 池1		N4/灰色。 7.5Y7/1灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端よりやや下がった位置に、丸瓦を押し込んで接合。補足粘土は丸瓦を覆うように多量に使い、凸面破面には指圧痕跡が残る。瓦当裏面は厚くして、ナデとケズリによって余分な粘土を掻き落とす。側面下半は横ヘラケズリ、上半凸面部は縦ヘラケズリで、後にナデ調整。	難波宮 6016式。
3	3区 D42CT 池1		5G4/1暗緑灰色。 7.5Y7/1灰白色。 緻密。	1に同じ。	難波宮 6015A式。
4	3区 D42DR 池1		5G4/1暗緑灰色。 10YR8/2灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端よりやや下がった位置に、丸瓦を押し込んで接合。補足粘土は丸瓦を覆うように多量に使い、瓦当裏面は厚くして、ナデとケズリによって余分な粘土を掻き落とす。側面下半は横ヘラケズリで後にナデ調整、上半凸面部は縦ヘラケズリ調整か。	難波宮 6015A式。
5	3区 D42CT 池1		5BG4/1暗青灰色。 2.5GY8/1灰白色。 緻密。	周縁が直立縁でなく斜縁となる。瓦当裏面上端よりやや下がった位置に、強いナデつけによって溝を穿ち、丸瓦を押し込んで接合。補足粘土は少なく、凸面破面には指圧痕跡が残る。瓦当裏面はナデとケズリによって平坦に仕上げる。側面は縦ヘラケズリ調整。	難波宮 6021式か。
6	3区 D42TF 池1		5YR6/1褐灰色。 2.5Y7/1灰白色。 緻密。	周縁は直立縁だが、端部が丸みを帯びる。補足粘土は少なく、瓦当裏面はナデとケズリによって平坦に仕上げる。側面下半は横ヘラケズリ、布目が若干付着する。	難波宮 6014式。
7	3区 D42KU 池1	蓮華文軒丸瓦	10BG3/1暗青灰色。 5Y8/1灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端より3cm程下がった位置に、ナデによって浅い溝をつけ、丸瓦を押し付けて接合。補足粘土は丸瓦を覆うように多量に使い、瓦当裏面はナデによって余分な粘土を掻き落とすため、中央部が凹む。側面下半は横ヘラケズリ、上半凸面部は縦ヘラケズリで、後にナデ調整。	平城宮 6134A式。
8	3区 D42GU 池1		10BG7/1明青灰色。 5Y8/1灰白色。 緻密。	丸瓦接合を強化するため瓦当裏面上半にヘラ押しを施し、上端より3cm程下がった位置に丸瓦を押し付けて接合。補足粘土は丸瓦を覆うように多量に使う。瓦当裏面はケズリによって余分な粘土を掻き落とし、接合線は台形を呈する。側面は縦ヘラケズリで、後にナデ調整。	平城宮 6282式。
9	3区 D42 DS・DT 池1		N7/灰色。 5Y8/1灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端よりやや下がった位置に、ナデによって浅い溝をつけ、端面を斜めに削った丸瓦を押し付けて接合。補足粘土は丸瓦を覆うように多量に使い、瓦当裏面はナデによって余分な粘土を掻き落とす。側面は粗いナデ調整。	長岡宮 7133式。
10	3区 D42BU 池1		7.5Y8/1灰白色～ N5/灰色。 5YR8/1灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端よりやや下がった位置に、端面を斜めに削った丸瓦を押し付けて接合。補足粘土は丸瓦を覆うように多量に使い、瓦当裏面はナデによって余分な粘土を掻き落とし、平坦に仕上げる。	西賀茂窯産 NS154A式。
11	3区 D42IR 池1		N7/灰色。 5Y8/1灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端よりやや下がった位置に、端面を斜めに削った丸瓦を押し付けて接合。補足粘土は丸瓦を覆うように多量に使い、瓦当裏面はナデによって余分な粘土を掻き落とす。	吉志部窯産。
12	3区 D42GR 池1		5P3/1暗柴灰色。 5GY8/1灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端よりやや下がった位置に、端面を斜めに削った丸瓦を押し付けて接合。補足粘土は丸瓦を覆うように多量に使い、瓦当裏面はナデによって余分な粘土を掻き落とし、平坦に仕上げる。側面下半は横ナデ調整、上半凸面部は縦ナデ調整。	芝本窯産。

軒丸瓦(図版16)

13	3区 D42 FR～FT 池1	蓮華文軒丸瓦	N6/灰色。 5GY8/1灰白色。 緻密。	瓦当は厚く、裏面には丸瓦部に連続する布目が残る。断面には凸型成形台に粘土塊を順次積み上げた痕跡が確認できる。瓦当と丸瓦部の境界や裏面下端にはヘラケズリ調整を施す。側面下半は横ヘラケズリ、上半凸面部は縦ヘラケズリで、後にナデ調整。	栗栖野窯産。
14	3区 D42NQ 池3		10GY5/1 緑灰色。 10GY6/1 緑灰色。 緻密。	凸型成形台に粘土塊を順次積み上げた単位で剥離する。13と同じ手法による。	
15	3区 D42FT 池1		10BG3/1 暗青灰色。 10BG5/1 青灰色。 緻密。	瓦当裏面の中央部はやや凹んでおり、布目が残る。瓦当と丸瓦部の境界や裏面下端にはヘラケズリ調整を施す。側面下半は横ヘラケズリ調整。13と同じ手法による。	
16	3区 D42CU 池1		N4/灰白色。 10YR7/1 灰白色。 緻密。	凸型成形台に粘土塊を順次積み上げた単位で剥離する。13と同じ手法による。	
17	3区 D42 FS～FU 池1		5BG3/1 暗青灰色。 7.5YR8/2 灰白色。 緻密。	16に同じ。	小野窯産。

瓦類 (図版16)

18	3区 D42FR 池1	蓮華文軒丸瓦	N5/ 灰色。 5Y6/1 灰色。 緻密。	凸型成形台に粘土塊を順次積み上げた単位で剥離する。側面上半凸面は縦ヘラケズリで、後にナデ調整。13と同じ手法による。	栗栖野窯産か。
19	3区 D42IU・ JU・KU 耕作溝		N3/ 暗灰色。 10Y6/1 灰色。 緻密。	瓦当裏面には丸瓦部に連続する布目が残る。断面には凸型成形台に粘土塊を順次積み上げた痕跡が確認できる。側面下半は横ヘラケズリ、上半凸面は縦ヘラケズリで、後にナデ調整。13と同じ手法による。	
20	3区 D42EU 池1		N3/ 暗灰色～ 10GY5/1 緑灰色。 10Y8/2 灰白色。 緻密。	瓦当裏面には布目残り、裏面下端にヘラケズリ調整を施す。側面下半は横ヘラケズリ調整で、後にナデ調整。13と同じ手法による。	
21	2区 D42CS 池1		5GY6/1 オリーブ灰色。 2.5GY8/1 灰白色。 緻密。	20に同じ。	
22	3区D42 ES・FS 池1	宝相華文軒丸瓦	5Y7/3 浅黄色。 2.5Y8/2 灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端に端部未加工の丸瓦を強く押しつけ、凹面側は指圧で接合を密着させて補足粘土を加えて接合する。瓦当厚は薄く、裏面はナデ調整で仕上げる。	備中産 (安養寺式)。
23	3区 D42IR 池1	蓮華文軒丸瓦	N3/ 暗灰色。 7.5Y8/2 灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端に端部未加工の丸瓦を強く押しつけ、指圧で接合を密着させて補足粘土を加えナデつけて接合する。瓦当厚は薄く、側面は横ナデ調整。最後に周縁外端を面取りして整える。	搬入瓦だが、 生産地不明。
24	3区 D42LS 池1		7.5Y4/1 灰色。 2.5Y8/2 灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端に端部未加工の丸瓦を強く押しつけ、補足粘土を加えナデつけて接合する。瓦当厚は薄く、ナデ調整はかなり粗い。周縁上から側面にかけて指でつまみ横ナデ調整、丸瓦部は縦ナデ調整。	
25	2区 D42 CV・DV 池1		N5/ 灰色。 10Y8/1 灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端に端部未加工の丸瓦を強く押しつけ、補足粘土を加えてナデつけて接合する。瓦当厚は中央部が薄く、ナデ調整はかなり粗い。裏面下端は土手状に盛り上がり、丸瓦部側面から連続するナデ調整を端部から側面にかけて施す。	
26	4区 D52 CU・CV DU・DV 井戸2		10YR4/1 褐灰色。 10YR8/1 灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端に端部未加工の丸瓦を強く押しつけ、補足粘土を加えてナデつけて接合する。瓦当厚は薄く、ナデ調整はかなり粗い。側面は瓦当部は全体に横ナデ調整、丸瓦部は縦ナデ調整。	
27	3区 D42ES 池1		N3/ 暗灰色。 2.5Y8/1 灰白色。 緻密。	瓦当厚は中央部が薄く、ナデ調整はかなり粗い。裏面下端は土手状に盛り上がり、端部から側面にかけては丸瓦部側面から連続するナデ調整を施し、ナデ痕跡が2段となる。周縁上から側面にかけても指でつまんで横ナデ調整を施す。	
28	3区 D42KS 池1		7.5GY4/1 暗緑灰色。 5Y8/2 灰白色。 緻密。	瓦当厚は中央部が薄く、ナデ調整はかなり粗い。裏面下端は土手状に盛り上がり、端部から側面にかけては丸瓦部側面から連続するナデ調整を施す。周縁上から側面にかけても指でつまんで横ナデ調整を施す。	
29	3区 D42GS 池1		2.5Y5/1 黄灰色。 2.5Y8/2 灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端に端部未加工の丸瓦を強く押しつけ、補足粘土を加えて接合。瓦当中央は薄く、ナデ調整はかなり粗い。裏面下端は土手状に盛り上がり、端部から側面にかけて丸瓦部側面から連続するナデ調整を施す。周縁上から側面にかけても指でつまみ横ナデ調整。	
30	3区 D42 BT・BU 耕作溝		5PB3/1 暗青灰色。 7.5Y8/3 淡黄色。 緻密。	瓦当裏面上端よりやや下がった位置に、丸瓦を押し込んで接合。補足粘土は丸瓦を覆うように多量に使い、瓦当裏面を厚くしてナデとケズリによって余分な粘土を掻き落として平坦に仕上げる。側面下半は横ナデ調整、上半丸瓦凸面は縦ナデ調整。	大和産。

軒平瓦(図版17)

31	1区 D43EL 土壌101	偏向唐草文 軒平瓦	N6/灰色。 5P6/1紫灰色。 緻密。	深い段頸。頸面は縦方向の縄叩きで、文様面側半分は横ヘラケズリで叩きを消す。凹面は桶杵板痕跡を残す布目で、側端はヘラケズリ、文様面側端部は板状工具の木口で余分な粘土を掻き落とす。側面はヘラケズリによって大きく面取りする。	藤原宮 6641E式。
32	3区 D42KU 池1	重廓文軒平瓦	N5/灰色～10B G3/1暗青灰色。 10YR8/1 灰白色。 緻密。	直線頸。頸面は縦方向のヘラケズリで、平瓦部側端に第1次調整の横縄叩き痕跡が残る。凹面は丁寧な縦ヘラケズリとナデ調整で布目を消し、文様面側端部は横ヘラケズリを施す。側面はヘラケズリおよびナデ調整で直線的に面を仕上げる。	難波宮 6572式。
33	3区 D42FS 池1		10YR6/3にぶい黄色 ～N2/黒色。 7.5YR8/1灰白色。 密、やや軟質。	直線頸。頸面は縦ヘラケズリで、文様面側端部は横ヘラケズリとなる。側面はヘラケズリおよびナデ調整で直線的に面を仕上げる。	難波宮 6576A式。
34	3区 D42DS 池1		5R5/1赤灰色。 5Y5/1灰色。緻密。	直線頸。頸面は丁寧な横ナデ調整。凹面は丁寧な縦ヘラケズリとナデ調整で布目を消し、文様面側端部は横ヘラケズリを施す。	難波宮 6574式。
35	3区 D42FR 池1	均整唐草文 軒平瓦	2.5Y6/1黄灰色～ 2.5Y7/2灰黄色。 2.5Y7/1灰白色。 緻密。	段頸。頸面は丁寧な横ナデ調整。凹面は板状工具の木口で斜め方向にケズリを行ない布目を消し、文様面側端部は同じ工具で横方向にケズリを施し、余分な粘土を掻き落とす。側面もケズリによって直線的に面を仕上げる。	難波宮 6664B式。
36	3区 D42BU 泉1		7.5YR8/2灰白色。 10YR8/1灰白色。 密、やや軟質。	直線頸。頸面は縦方向のヘラケズリ。凹面は粗い布目が明瞭に残り、文様面側端部は粗い横ヘラケズリで整える。	中心飾りに 「松」裏字。
37	1区 D43 BK・BL 井戸1		10G3/1暗緑灰色。 10BG5/1青灰色。 緻密、砂を含む。	幅約2.5cmの頸平坦面を持つ曲線頸。頸面は横ヘラケズリ後に横ナデ調整。	長岡宮 7757A式。

38	4区 D52 CU・CV DU・DV 井戸2	均整唐草文 軒平瓦	2.5Y6/1黄灰色。 7.5Y8/1灰白色。 緻密。	幅約2.5cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ヘラケズリ後に横ナデ調整。平瓦部には第1次調整の斜め縄叩きの痕跡が残るが、縦ヘラケズリによって消す。凹面は丁寧なケズリとナデ調整で布目を消し、文様面側端部は横ヘラケズリを施す。	長岡宮 7757Ac式。
39	3区 D42IT 池1		10Y5/1灰色。 7.5Y8/1灰白色。 密、やや軟質、砂を含む。	幅約3cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ヘラケズリ後に横ナデ調整。平瓦部は丁寧な縦ヘラケズリを施す。凹面は横ヘラケズリによって丁寧に仕上げる。	西賀茂窯産。 NS205A式。
40	3区 D42 NP・NP 池3		10Y8/1灰白色。 N6/灰色。密、やや軟質、砂を含む。	幅約3.5cmの顎面を持つ曲線顎。顎面および凹面は丁寧な横ナデ調整によって仕上げる。	西賀茂窯産。 NS202A式。
41	4区 D52 CU・CV DU・DV 井戸2		N3/暗灰色。 2.5GY8/1灰白色。 密、やや軟質、砂を含む。	幅約2.5cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ヘラケズリ後に横ナデ調整。平瓦部は丁寧な縦ヘラケズリを施す。凹面は摩耗で不明だが、文様面側端部は横ヘラケズリか。側面はヘラケズリによって直線的に面を仕上げる。	西賀茂窯産。 NS207式。
42	3区 D42 NQ・OQ 池3		N3/暗灰色。 2.5GY7/1明オリーブ灰色。 緻密。	幅約3cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ヘラケズリ後に横ナデ調整。	西賀茂窯産。 NS206B式。
43	3区 D42CT 池1		5B3/1暗青灰色。 5PB3/1暗青灰色。 緻密。	幅約4cmの顎面を持つ曲線顎。顎面および凹面は磨耗しているが、横ナデ調整か。側面はヘラケズリによって直線的に面を仕上げる。	芝本窯産。
44	3区 D42HR 池1		N3/暗灰色。 10BG7/1明青灰色。 密、やや軟質、砂を含む。	幅約4cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は磨耗しているが、横ナデ調整か。平瓦部は縦ヘラケズリを施す。凹面は布目残り、文様面側端部は横ヘラケズリ調整。	芝本窯産。
45	3区 D42ER 池1		N3/暗灰色。 7.5Y7/1灰白色。 緻密。	幅約3.5cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は丁寧な横ナデ調整、平瓦部は縦ヘラケズリ調整。凹面にはやや粗い布目残り、側端部および文様面側端部はヘラケズリ調整。側面はヘラケズリによって直線的に面を作り、上端を面取りする。	芝本窯産。
46	3区 D42KU 池1		10G3/1暗緑灰色。 10BG4/1暗青灰色。 緻密。	幅約4.5cmの顎面を持つ曲線顎。顎面はケズリ後に丁寧な横ナデ調整、平瓦部は縦ヘラケズリ調整。凹面にはやや粗い布目残り、側端部および文様面側端部はヘラケズリ調整。側面はヘラケズリによって直線的に面をつくり、上端を面取りする。	芝本窯産。
47	3区 D42ET 池1		10G3/1暗緑灰色。 2.5Y8/2灰白色。 緻密。	顎面を持つ曲線顎か。顎部は縦ヘラケズリ。凹面にはやや粗い布目残り、側端部および文様面側端部はヘラケズリ調整。側面はヘラケズリによって直線的に面をつくる。	産地不明。
48	3区 D42LP 耕作溝		5PB3/1暗青灰色。 7.5Y8/2灰白色。 密、やや軟質。	文様面の破片。粘土の積み上げ単位で剥離する。	長岡宮式。
49	3区 D42 IQ・JQ 第1面		5Y8/2灰白色～ 5PB3/1暗青灰色。 5Y8/1灰白色。 密、軟質。	文様面の破片。粘土の積み上げ単位で剥離する。	産地不明。
50	3区 D42IQ 池1		10BG4/1暗青灰色。 5RP5/1紫灰色。 緻密。	文様面上外区の破片。粘土の積み上げ単位で剥離する。	産地不明。 珠文間に「×」文。
51	3区 D42FR 池1		5B3/1暗青灰色。 5P5/1紫灰色。 緻密。	文様面の破片。粘土の積み上げ単位で剥離する。	産地不明。
52	3区 D42KQ 池2		10YR4/1～ 10YR5/1褐灰色。 10YR6/1褐灰色。 密、軟質。	幅約3cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は磨耗しているが横ナデ調整か。平瓦部は縦ヘラケズリ調整。凹面には布目残り、文様面側端部は横ヘラケズリ調整。	芝本窯産。

軒瓦(図版18)

53	3区 D42FU 池1	均整唐草文 軒平瓦	10BG3/1暗青灰色。 2.5Y8/1灰白色。 密、やや軟質。砂を含む。	幅約2cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ケズリ、顎曲線部は縦ヘラケズリ後にナデ調整。側面はヘラケズリによって直線的に面を作る。凹面は成形時の粘土積み上げの単位で剥離する。	栗栖野窯産。
54	3区 D42DS 池1		5PB4/1暗青灰色。 10YR8/3浅黄橙色。 緻密。	文様面の剥離片。	
55	3区 D42 DS・DT 池1		N3/暗灰色。 2.5Y8/2灰白色。 密、やや軟質。	幅約2cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ケズリ、顎曲線部は縦ヘラケズリ後にナデ調整。側面はヘラケズリによって直線的に面を作る。凹面は成形時の粘土積み上げの単位で剥離する。	
56	4区 D52 CU・CV DU・DV 井戸2		10BG3/1暗青灰色。 10Y5/1灰色～2.5Y8/2灰白色。 緻密。	幅約2.5cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ケズリ後にナデ調整、顎曲線部は縦ヘラケズリ後にナデ調整。凹面はヘラケズリとナデ調整によって丁寧に布目を消し、側部を縦ヘラケズリで面取りする。側面はヘラケズリによって直線的に面を作る。	池田瓦窯産。

瓦類 (図版18)

57	3区 D42IR 池1	均整唐草文 軒平瓦	N4/灰色。 7.5YR8/2灰白色。 密、軟質。	幅約2cmほどの顎面を持つ曲線顎。調整は磨滅のため不明。	栗栖野窯産。
58	3区 D42 DS・DT 池1		10Y7/1灰白色～10 BG3/1暗青灰色。 7.5YR8/2灰白色。 緻密。	幅約2cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ケズリ後にナデ調整、顎曲線部は縦ヘラケズリ後にナデ調整。顎の曲げ皺が残る。凹面には粗い布目残り、文様面端部を横ヘラケズリ調整する。	
59	4区 D42 XH・XI 耕作溝	中房巴蓮華文 軒丸瓦	5PB5/1青灰色。 7.5Y8/2灰白色。 緻密。	丸瓦接合後に、瓦当裏面を指でナデつける。	山城産か。
60	4区 D52BY 検出中	巴文軒丸瓦	N3/暗灰色。 N6/灰色。 緻密。	59に同じ。	
61	3区 D42 MQ・NQ 耕作溝		7.5Y6/1灰色。 7.5Y7/1灰白色。 緻密。	瓦当裏面上端に端部未加工の丸瓦を接合し、補足粘土を指でナデつける。側面ナデ調整。	
62	4区 D42XC 耕作溝		2.5Y8/3淡黄色。 10GY8/1明緑灰色。 緻密。	61に同じ。	
63	3区 D42IS 検出中	連巴文軒平瓦	N2/黒色。 N6/灰色。 緻密。	幅約2cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ケズリ後に粗いナデ調整。顎曲線部は横縄叩き調整。凹面には粗い布目残り、側部および文様面端部を粗くヘラケズリ調整する。側面はヘラケズリによって直線的に面を作る。	讃岐産。
64	3区 D42IU 検出中		5G6/1緑灰色。 5G6/1緑灰色。 緻密。	文様面の剥離片。	山城産か。
65	1区 D43 JJ・JK 耕作溝	唐草文軒平瓦	2.5Y7/1灰白色。 2.5Y7/1灰白色。 密、軟質。	文様面が薄い曲線顎。端部未加工の平瓦を押し付けて、補足粘土で接合する。	播磨産か。
66	3区 D42 LS・LT MS・MT 検出中		7.5YR7/4にぶい橙 色～7.5YR8/8黄橙 色。 7.5Y6/1灰色。 密、軟質。	幅約1cmの顎面を持つ曲線顎。顎面横ヘラケズリ、顎曲線部は縦ケズリか。	
67	3区 D42 IS・IT 第1面	剣頭文軒平瓦	N3/暗灰色。 N5/灰色。 緻密。	幅約0.5cmの顎面を持つ曲線顎。文様面は平瓦端部を折り曲げて成形。平瓦部凸面は縦ナデ調整。凹面は磨滅するが布目痕跡および凸型台端部の当りが確認できる。	栗栖野窯産か。
68	7区 D42 PY・QY ～D52 PA・QA 検出中	格子文軒平瓦	10YR8/4淡黄橙色。 7.5Y8/1灰白色。 緻密。	幅約1cmの顎面を持つ高い曲線顎。平瓦部凸面端部を削って文様部を貼り付ける。顎面は横ケズリ調整、顎曲線部は粗いナデ調整。凹面端部には文様面から約1.5cmの位置で布端の痕跡が確認できる。	
69	第5次 2区 D53 SF～UF SG～UG 池4	均整唐草文 軒平瓦	5P4/1暗紫灰色。N 8/灰白色。 密、軟質。	幅約3cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は磨滅が激しいが、顎曲線部には縦ヘラケズリの当りが残る。凹面は布目残り、文様面端部は横ヘラケズリ。側面はヘラケズリによって直線的に面を作る。	長岡宮 7757A式。
70	第1次 D53JN 野寺小路 川	蓮華文軒丸瓦	10BG4/1暗青灰色。 7.5Y8/1灰白色。 密、やや軟質砂を少 量含む。	凸型成形台に粘土塊を順次積み上げた単位で剥離する。側面は縦ヘラケズリ調整。	小野瓦窯産。
71	第1次 D53AM 野寺小路 川	均整唐草文 軒平瓦	10YR7/1灰白色。 7.5Y8/1灰白色。 密、軟質。	幅約3cmの顎面を持つ曲線顎。顎面横ヘラケズリ、平瓦部は縦ヘラケズリで、曲線部は横ナデ調整。凹面には粗い布目と粘土糸切り痕跡残り、文様面端部および側部をヘラケズリ調整して面取りする。側面はヘラケズリによって直線的に面を作る。	長岡宮 7757A式。
72	第1次 D53FM 野寺小路 川		10BG5/1青灰色。 7.5Y7/1灰白色。 緻密、砂・小石を含 む。	幅約3cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ヘラケズリ、顎曲線部は丁寧な横ナデ調整で縄叩きらしき痕跡が残る。凹面も丁寧な横ナデ調整によって完全に布目を消す。	吉志部窯産。
73	第1次 D53 AM 野寺小路 川		5B5/1青灰色。 10Y8/1灰白色。 密、軟質、小石を少 量含む。	顎面を持つ曲線顎か。調整は磨滅のため不明だが、平瓦部凸面は縦ヘラケズリ、凹面はナデ調整か。	池田瓦窯産。
74	第1次 D53 AM～LM AN～LN 野寺小路 川	唐草文軒平瓦	5PB3/1暗青灰色。 5Y7/2灰白色。 密、やや軟質、砂・ 小石を含む。	幅約1.5cmの顎面を持つ曲線顎。顎面横ヘラケズリ、顎曲線部から平瓦部はオサエ成形後に粗いナデ調整。凹面には細かい布目残り、文様面端部をヘラケズリして面取りする。側面はヘラケズリによって直線的に面を作るが、文様面端部は范打ちのため膨れる。	河上瓦窯産。

75	第1次 D53KM 野寺小路 川	唐草文軒平瓦	10YR7/1灰白色。 7.5Y5/1灰色。 密、やや軟質、砂を 含む。	幅約2～3cmの顎面を持つ曲線顎。顎面は横ケズリ後に粗いナデ調整。顎曲線部は格子叩き調整。凹面には細かい布目残り、文様面端部を横ヘラケズリ調整する。側面はヘラケズリによって直線的に面を作る。	讃岐産。
----	---------------------------	--------	---	---	------

丸瓦・平瓦(図版19)

瓦 番号	地区 遺構 層位	大きさ 長×幅×厚(cm)	表面の色調 胎土	形態・手法の特徴	備考
76	3区 D42LR 溝3	38.2×16.5× 2.0	N4/灰色。 2.5Y7/4浅黄色。 緻密。	凸面は縦縄叩き後にナデ調整。板状工具の痕跡が残る。玉縁部は横ナデ調整。凹面は粗い布目と粘土板糸切り痕跡が残る。広端部および側部はヘラケズリで面取りを施す。端面および側面はヘラケズリ調整。	玉縁丸瓦。
77	3区D42 GT・GU 池1	12.2×10.7× 1.6	N3/暗灰色。 10Y7/1灰白色。 緻密。	凸面は縦縄叩き後に横ナデ調整。玉縁部も丁寧に横ナデ調整し側面をヘラケズリで面取りする。凹面は細かい布目残り、側部はヘラケズリによる面取りを施す。玉縁凹面端部には、模骨に付けられた輪状突帯の凹みが残る。	小型玉縁丸瓦。
78	3区 D42CT 池1	20.5×10.2× 1.6	10YR7/1灰白色。 2.5Y7/1灰白色。 緻密。	凸面は縦縄叩き後に横ナデ調整。玉縁部も丁寧に横ナデ調整し側面をヘラケズリで面取りする。凹面は細かい布目残り、側部および玉縁凹面端部はヘラケズリによる面取りを施す。	
79	3区 D42JR 池1	9.0×10.0×2.0	釉色 7.5GY4/1暗 緑灰色。 7.5Y8/2灰白色。 密、軟質。	凸面は縦縄叩き後に横ナデ調整。凹面は布目と側部には分割突帯が残る。凸面から側面に掛けて緑釉を施す。	緑釉丸瓦。
80	3区 D42 KO・KP LO・LP 池1	6.1×7.6×2.7	釉色 7.5Y5/3灰オ リーブ色。 7.5Y8/2灰白色。 密、軟質。	凸面は縦縄叩き。凹面は布目が残る。側面はヘラケズリによる面取り。凸面側端部から側面に掛けて緑釉を施す。	緑釉熨斗瓦。
81	3区 D42CS 池1	29.0×20.0× 1.7	7.5Y8/2灰白色。 5Y8/1灰白色。 緻密、小石を含む。 軟質。	凸面は縦縄叩きだが、端部まで及ばない。側部に手持ちの指痕跡が残る。凹面は粗い布目残り、側部と端部にヘラケズリによる面取りを施す。	平瓦。棟基 底部の熨斗 瓦か。
82	3区 D42ER 池1	24.4×20.4× 2.0	N6/灰色。 表面に同じ。 緻密。	凸面は縦縄叩き後に、オサエ調整。凹型調整台の痕跡と離れ砂が明瞭に残る。凹面は離れ砂と粗い布目残り、側部と端部にヘラケズリによる面取りを施す。「木工」銘の板状工具によって凹面を軽く叩いている。側面および端面はヘラケズリ調整。	
83	4区 D52 CU・CV DU・DV 井戸2	22.3×20.3× 3.0	5PB4/1暗青灰色。 N7/灰白色。 緻密。	凸面は縦縄叩き後に、端部をオサエ調整。凹型調整台の痕跡と離れ砂が明瞭に残る。凹面は粗い布目と粘土板糸切り痕跡残り、側部と端部にヘラケズリによる面取りを施す。板状工具によって凹面を軽く叩く。側面および端面はヘラケズリ調整。	
84	1区 D43 BK・BL 井戸1	22.5×17.2× 1.8	N4/灰色。 5PB4/1暗青灰色。 緻密、白砂を含む。	凸面は縦縄叩き後に、端部をオサエ調整。離れ砂が残る。凹面は粗い布目と粘土板糸切り痕跡残り、側部と端部にヘラケズリによる面取りを軽く施す。板状工具によって凹面を叩いている。側面および端面はヘラケズリ調整。	割熨斗瓦。

平瓦(図版20)

85	3区 D42BU 泉1	36.7×13.2× 2.7	N5/灰色。 5PB6/1青灰色。 密、砂・小石をかなり 含む。	凸面は縦縄叩き後に、オサエ調整。凹型調整台と離れ砂の痕跡が明瞭に残る。凹面も離れ砂と布目残り、側部には凸型成形台の端痕が認められる。板状工具によって凹面を軽く叩いている。側面および端面はヘラケズリ調整。	割熨斗瓦。
86	3区 D42KU 池1	26.8×15.0× 2.2	5PB3/1暗青灰色。 7.5Y8/1灰白色。 緻密、やや軟質。	凸面は縦縄叩き後にヘラケズリと横ナデ調整を施す。凹型調整台の痕跡が側部に残る。凹面は細かい布目残り、側部および端部はヘラケズリによって面取りする。側面および端面はヘラケズリ調整。	
87	3区 D42 IU～KU 耕作溝	19.0×14.0× 2.0	5Y8/2灰白色～N3/ 暗灰色。 5Y8/2灰白色。 密、軟質、砂を多く 含む。	凸面は縦縄叩き後に、端部をオサエ調整。離れ砂が残る。凹面は細かい布目残り、端部にヘラケズリによる面取りを施す。側面および端面はヘラケズリ調整。	
88	3区 D42ER 池1	20.0×12.8× 2.0	10YR7/1灰白色。 表面に同じ。 密、やや軟質、砂・ 小石を含む。	凸面は縦縄叩きを施し、端部をオサエ調整。離れ砂と棒状工具による指突痕が認められる。凹面は布目残り、板状工具によって凹面を軽く叩いている。側面および端面はヘラケズリ調整。	
89	3区 D42 CS・DS 池1	17.1×15.0× 2.0	10YR6/1褐灰色。 7.5Y8/1灰白色。 密砂・小石を含む。	凸面は縦縄叩きだが、端部まで及ばない。離れ砂が残る。凹面は粗い布目残り、指突痕跡が認められる。側面および端面はヘラケズリ調整。	
90	3区 D42ER 池1	20.9×12.5× 2.1	N3/暗灰色。 5R6/1赤灰色。 密、白砂を多量に含 む。	凸面は縦縄叩き調整。凹面は布目残り、側部及び端部をヘラケズリによって面取りする。側面および端面はヘラケズリ調整。	
91	3区 D42DS 池1	24.0×14.4× 1.8	N4/灰色。 5P7/1明紫灰色。 やや密、砂・小石を かなり含む。	凸面は縦縄叩き調整、側部に手持ちの指痕跡が残る。離れ砂残り、凹型調整台に載せるため縄叩きが潰る。凹面は粗い布目と粘土板糸切り痕跡が残る。側面および端面はヘラケズリ調整。	
92	3区 D42 LO・LP MO・MP 第1面	23.5×12.7× 1.8	5PB4/1暗青灰色。 2.5Y8/1灰白色。 やや密、軟質、白砂 を含む。	凸面は縦縄叩き後にオサエ調整。離れ砂が残る。凹面は布目残り、板状工具によって凹面を叩いている。側面および端面はヘラケズリ調整。	

観察表 2 土器類観察表

池1出土土師器1(図版21)

遺物 番号	地区 遺構	器種 器形	口径 高さ (cm)	色調 胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
101	3区 D42CU	土師器 皿A	14.0 1.6	10YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密、砂を少 量含む。	平坦な底部に屈曲した口 縁が立ち上がる。口縁端 部の内側は肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面 は板状工具による成形後、丁寧なナデ調整。口 縁部から底部内面約2cmの部分までは横方向の ナデ調整。	約1/4の破片。
102	池1 (以下略)		13.8 1.9	10YR7/2に ぶい黄橙色。 緻密、赤色小 礫を含む。	やや丸みを帯びた平底に 屈曲した口縁が立ち上 がる。口縁端部の内側は肥 厚する。	底部外面はオサエ成形後にナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部から底部内面約2.5cmの 部分までは横方向のナデ調整。	約1/2が残る。
103	3区 D42CT		14.0 1.8	10YR8/3浅 黄橙色。 緻密、赤色小 礫を含む。	102に同じ。	底部外面はオサエ成形後にナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部から底部内面約3cmの部 分までは横方向のナデ調整。	約1/3の破片。
104			14.4 1.6	2.5YR8/3淡黄 色。 緻密。	平坦な底部に屈曲した口 縁が立ち上がる。口縁端 部の内側は肥厚する。	底部外面はオサエ成形後にナデ調整。内面は板 状工具による成形後、丁寧なナデ調整。口縁部 から底部内面約1.5cmの部分までは横方向のナ デ調整。	口縁部約1/3の 破片。
105	3区 D42CU	土師器 杯A	14.5 1.65	10YR6/3に ぶい黄橙色。 緻密、砂を少 量含む。	104に同じ。	底部外面はオサエ成形後に、粗いナデ調整。螺旋状の 粘土繋ぎ目痕跡が残る。内面は板状工具による成形後、丁寧なナデ調整。口縁部から底 部内面約1cmの部分までは横方向のナデ調整。	約2/3が残る。
106	3区 D42CT		14.0 2.0	10YR7/4に ぶい黄橙色。 緻密、赤色小 礫を含む。	やや丸みを帯びた平底に 屈曲した口縁が立ち上 がる。口縁端部の内側は肥 厚する。	底部外面はオサエ成形後にナデ調整。指紋が残 る。内面は板状工具による成形後、丁寧なナデ 調整。口縁部から底部内面約1cmの部分までは 横方向のナデ調整。	約1/5の破片。
107	3区 D42CU		14.5 1.9	7.5YR7/4に ぶい黄橙色。 密、やや砂を 多く含む。	やや丸みを帯びた平底に 屈曲した口縁が立ち上 がる。口縁端部の内側は肥 厚する。	底部外面はオサエ成形後にナデ調整。螺旋状の 粘土繋ぎ目痕跡が残る。内面は板状工具による 成形後、丁寧なナデ調整。口縁部から底部内面 約3cmの部分までは横方向のナデ調整で、ナデ 上げ部分が残る。	口縁部約1/5を 欠損するが、ほ ぼ完存する。
108			13.3 2.9	10YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、体部は緩やかに 外上方へ開く。口縁部は 屈曲し、端部は内側に肥 厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形 後に、丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデ で成形・調整し、後に体部内面の横ナデ調整を 施すと共に、底部と体部の境界を強く押さえ、 最後はナデ上げる。	約2/3が残る。
109			13.2 2.6	10YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密、砂・赤 色小礫を少量 含む。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、体部は緩やかに 外上方へ開く。口縁部の 屈曲は弱く、端部内側の 肥厚もあまり顕著でない。 い。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口 縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部 内面の横ナデ調整を施すと共に、底部から体部 の境界を強く押さえ、最後はナデ上げる。	口縁部を少し欠 損するが、ほぼ 完存。
110	3区 D42CT		13.5 2.7	2.5Y8/3淡黄 色。 緻密、砂を少 量含む。	底部は平底で、体部は緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は小さく屈曲し、端 部内側の肥厚はやや弱 い。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 ナデ調整。底部内面は板状工具による成形の 後、丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデで 成形・調整し、後に体部内面の横ナデ調整を施 し、最後はナデ上げる。	体部は完存。口 縁部は約3/4が 残る。
111	3区 D42CU		14.0 2.8	10YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密、砂を少 量含む。	底部は平底で、体部は緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲し、端部は内 側に肥厚する。形状は楕 円形を呈する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。螺旋状の粘土繋ぎ目痕跡が若干 残る。底部内面は板状工具による成形の後、丁寧 なナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調 整し、後に体部内面の横ナデ調整を施す。	口縁部を少し欠 損するが、ほぼ 完存。
112	3区 D42 CT・CU		14.0 3.0	2.5Y8/3淡黄 色～2.5Y 7/2灰黄色。 緻密、砂を少 量含む。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、体部は緩やかに 外上方へ開く。口縁部は 屈曲し、端部は内側に肥 厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形 の後、丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデ で成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整、 最後はナデ上げる。	体部・口縁部の 一部を欠損する が、ほぼ完存。
113	3区 D42CT		14.6 3.0	7.5YR7/4に ぶい黄橙色。 緻密、砂を少 量含む。	112に同じ。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口 縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部 内面の横ナデ調整を施すと共に、底部と体部の 境界を強く押さえる。	底部中央を欠損 するが体部・口 縁部は約3/4が 残る。
114			14.4 2.7	7.5YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密、やや砂 を多く含む、 ガラガラして いる。	112に同じ。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に粗 いナデ調整。螺旋状の粘土繋ぎ目痕跡が若干残 る。底部内面は板状工具による成形の後、丁寧 なナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調 整し、後に体部内面を横ナデ調整するが、調整 が粗いため成形の痕跡が残る。	約2/3が残る。

115	3区 D42CU	土師器 杯A	14.4 2.9	10YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密、砂を少 量含む。	底部は平底で、体部は緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲し、端部は内 側に肥厚する。形状は楕 円形を呈する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口 縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部 内面の横ナデ調整を施すと共に、体部から底部 の境界を強く押さえる。	口縁部の一部を 欠損するのみ で、ほぼ完存。
116			14.0 3.1	10YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密、赤色砂 をやや多く含 む。	丸みを帯びた底部から、 体部は緩やかに外上方へ 開く。口縁部は屈曲する が、端部内側の肥厚はや や弱い。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。粘土継ぎ目痕跡が若干残る。底 部内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナ デて成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整 する。	口縁部の約1/4 を欠損するが、 ほぼ完存。
117			14.4 2.8	10YR8/3浅 黄橙色。 緻密、砂をや や含む。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、体部は緩やかに 外上方へ開く。口縁部は 屈曲し、端部は内側に肥 厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に粗 いナデ調整。螺旋状の粘土継ぎ目痕跡が残る。 底部内面は板状工具による成形後に丁寧なナデ 調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、 後に体部内面を横ナデ調整を施すと共に、底部 と体部の境界を強く押さえる。	口縁部の一部を 欠損するのみ で、ほぼ完存。
118			14.0 2.8	7.5YR7/3に ぶい橙色。 緻密、やや砂 を多く含む。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、体部は緩やかに 外上方へ開く。口縁部は 屈曲し、端部は内側に肥 厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形 後に丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて 成形・調整し、後に体部内面に横ナデ調整を施 す。	約1/2が残る。
119			14.1 2.6	7.5YR7/4に ぶい橙色。 緻密、やや砂 を多く含む。	底部は平底で、体部は緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲し、端部は内 側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形 の後、丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデ て成形・調整し、後に体部内面に横ナデ調整を 施す。	口縁部約1/5を 欠損するのみ で、ほぼ完存。
120			14.6 2.5	内面2.5Y7/ 2灰黄色。 外面7.5YR7/ 4にぶい橙 色。 密、やや砂を 多く含む。	底部は平底で、体部は緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲し、端部は内 側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形 後に丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて 成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整を施 すと共に、底部から体部の境界を強く押さえ る。	約1/2が残る。
121			15.2 3.0	10YR7/2に ぶい黄橙色。 緻密、砂を少 量含む。	丸みを帯びた底部から、 体部は緩やかに外上方へ 開く。口縁部は屈曲する が、端部内側の肥厚はや や弱い。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形 後に丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて 成形・調整し、後に体部内面に横ナデ調整を施 す。	約1/2が残る。
122			15.4 3.2	10YR4/3に ぶい黄褐色。 緻密、砂を少 量含む。	底部は平底で、体部は緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲するが、端部 内側の肥厚は弱い。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形 の後、丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデ て成形・調整し、体部内面は横ナデ調整を施す と共に、体部から底部の境界を強く押さえる。 最後はナデ上げる。	口縁部約1/5を 欠損する。
123			15.6 2.7	10YR7/2に ぶい黄橙色。 緻密。	底部は平底で、体部は緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲し、端部は内 側に肥厚する。	122に同じ。	口縁部約1/5を 欠損する。
124	3区 D42 CT・CU	土師器 杯B	15.9 3.1	10YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密、砂を少 量含む。	底部は平底で、体部は緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲し、端部は内 側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。螺旋状の粘土継ぎ目が残る。底 部内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナ デて成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整 を施すと共に、体部から底部の境界を強く押さ える。	ほぼ完存。
125			16.0 3.1	10YR7/4に ぶい黄橙色。 緻密、砂をや や多く含む。	底部は平底で、体部は緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲し、端部は内 側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口 縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部 内面を横ナデ調整を施すと共に、体部から底部 の境界を強く押さえる。	約1/3の破片。
126			16.7 3.4	10YR7/3に ぶい黄褐色。 緻密、赤色砂 をやや含む。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、断面三角形の低 い高台が付く。体部は緩 やかに外上方へ開き、口 縁部は屈曲する。口縁端 部は内側に肥厚するが、 やや弱い。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 ヘラケズリ調整。螺旋状の粘土継ぎ目が残る。 高台は貼り付け、横ナデ調整。底部内面は板状 工具による成形後に丁寧なナデ調整。口縁部を 横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面を 横ナデすることで仕上げる。	口縁部約1/2が 欠損するが、底 部は完存。
127	3区 D42CU		16.0 3.4	10YR7/2に ぶい黄褐色。 緻密。	底部は平底で、断面三角 形の低い高台が付く。体 部は緩やかに外上方へ開 き、口縁部は屈曲する。 口縁端部は内側に肥厚す るが、やや弱い。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。体部には螺旋状の粘土継ぎ目 が残る。高台は貼り付け、横ナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて 成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整を施 すと共に、体部と底部の境界は強く押さえる。	完存。

土器類（図版21）

128	3区 D42 CT・CU	土師器 杯B	16.6 2.9	7.5YR7/4に ぶい黄橙色。 緻密、微砂を 少量含む。	底部は平底で、断面三角形の低く細い高台が付く。体部は屈曲しながら外上方へ開き、口縁部も屈曲する。口縁端部は内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、粗いナデ調整。体部には螺旋状の粘土継ぎ目が残る。高台は貼り付け、横ナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整を施すと共に、体部と底部の境界は強く押さえる。	体部は約1/3を欠損するが、底部はほぼ完存。
129	3区 D42CT		17.3 3.5	10YR7/3に ぶい黄褐色。 緻密、微砂を 少量含む。	底部は平底で、断面台形の低くひしゃげた高台が付く。体部は緩やかに外上方へ開く。口縁部は屈曲し、端部は内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形。体部には螺旋状の粘土継ぎ目が残る。高台は貼り付け、横ナデ調整。底部内面は板状工具で成形後に丁寧なナデ調整。口縁部を横にナデで成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整、体部と底部の境界は強く押さえる。最後はナデ上げる。	約3/4が残る。
130			20.5 4.1	10YR7/3に ぶい黄褐色。 緻密、砂を少 量含む。	底部はやや丸みを帯びた平底で、断面三角形の低い高台が付く。体部は緩やかに外上方へ開き、口縁部は弱く屈曲する。口縁端部は内側に肥厚するが、やや弱い。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、粗いヘラケズリ調整。螺旋状の粘土継ぎ目が残る。高台は貼り付け、横ナデ調整。底部内面は板状工具による成形後に丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部内面を横ナデすることで仕上げる。	約2/3が残る。
131	3区 D42CU		21.1 4.9	内面10YR8/ 3浅黄橙色。 外面10YR7/ 2にぶい黄橙 色。 緻密、砂を少 量含む。	底部は平底で、断面三角形の低い高台が付く。体部は緩やかに外上方へ開く。口縁部は屈曲し、口縁端部は内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、粗いナデ調整。体部に螺旋状の粘土継ぎ目が残る。高台は貼り付け、横ナデ調整。底部から体部内面は板状工具で成形、後に底部は丁寧なナデ調整。口縁部を横にナデで成形・調整するが、体部は横ナデが粗く成形痕跡が明瞭に残る。	約3/4が残る。
132	3区 D42CT		20.0 5.0	7.5YR7/4に ぶい黄橙色。 緻密、砂をや や含む。	底部は平底で、断面三角形の高台が付く。体部は緩やかに外上方へ開く。口縁部は屈曲し、口縁端部は内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。体部には螺旋状の粘土継ぎ目が残る。高台は貼り付け、横ナデ調整。底部内面は板状工具で成形後に丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調整し後に体部内面を横ナデ調整。体部と底部の境界は強く押さえる。	体部約2/3が残るが、底部が大きく欠損。
133	3区 D42 KR・LR	土師器 皿A	11.0 1.0	10YR7/4に ぶい黄褐色。 緻密。	平坦な底部に、強く屈曲した口縁が外反して立ち上がる。口縁端部の内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部から底部内面約1_の部分までは横方向のナデ調整。	約1/2の破片。
134			11.1 1.0	10YR7/3に ぶい黄褐色。 密、やや軟 質。	平坦な底部に、強く屈曲した口縁が外反して立ち上がる。口縁端部の内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は板状工具による成形後に丁寧なナデ調整。口縁部から底部内面約1cmの部分までは横方向のナデ調整。	約1/4の破片。
135	3区 D42EU		11.2 1.4	10YR8/2灰 白色。密、や や軟質。	平坦な底部に、体部が低く立ち上がり、強く屈曲した口縁が外反する。口縁端部の内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部内面を横ナデすることで仕上げる。	約1/5の破片。 底部内面に煤が 付着、灯明皿に 使用。
136	3区 D42 HS・HT		11.6 1.7	10YR7/3に ぶい黄褐色。 密、やや軟 質。	やや丸みを帯びた平底に、体部が緩やかに低く立ち上がり、強く屈曲した口縁が外反する。口縁端部の内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部内面を横ナデすることで仕上げる。	約1/3の破片。
137	3区 D42ES		12.0 1.5	2.5Y7/3浅黄 色。 緻密。	136に同じ。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部内面を横ナデ、体部と底部の境界を強く押さえて仕上げる。最後はナデ上げる。	約1/4の破片。
138	3区 D42FS		12.0 1.4	2.5Y7/2灰黄 色。 緻密。	平坦な底部に体部が緩やかに低く立ち上がり、強く屈曲した口縁が外反する。口縁端部の内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は板状工具による成形後にナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部内面を横ナデして仕上げる。	約1/3の破片。
139	3区 D42JU		13.0 1.5	10YR7/1灰 白色。密、やや軟 質。	平坦な底部に体部が緩やかに低く立ち上がり、強く屈曲した口縁が外反する。口縁端部の内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調整し、体部内面は横ナデ調整を施すと共に、体部と底部の境界を強く押さえて仕上げる。最後はナデ上げる。	口縁部約1/3から 底部にかけて 残る。
140	3区 D42ER		13.0 1.3	2.5Y7/2灰黄 色。 緻密。	平坦な底部に、強く屈曲した口縁が外反して立ち上がる。口縁端部の内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部から底部内面約3cmの部分までは横方向のナデ調整。	口縁部の一部と、 底部の約 3/4が残る。
141			13.7 1.6	2.5Y7/3浅黄 色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底に、強く屈曲した口縁が外反して立ち上がる。口縁端部の内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部から底部内面約2.5cmの部分までは横方向のナデ調整。	底部は約2/3残るが、口縁部は約1/3のみ残る。

142	3区 D42DR	土師器 皿A	14.0 1.5	7.5YR6/4に ぶい 緻密。 橙色。	丸みを帯びた底部に、緩く外反した口縁が立ち上がる。口縁端部は内側にかすかに肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部は横方向のナデ調整。	約1/5の破片。
143	3区 D42ER		14.4 1.6	10YR7/2灰黄 色。 密、やや軟 質。	やや丸みを帯びた平底に、強く屈曲した口縁が外反して立ち上がる。口縁端部の内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部から底部内面約1_の部分までは横方向のナデ調整。	約1/4の破片。 底部内面に墨が 多量に付着して いる。
144	3区 D42DS	土師器 杯A	14.6 1.8	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密。	底部は平底で、体部は緩やかに外上方へ開く。口縁部は屈曲し、端部は内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形後に丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整、体部から底部の境界を押さえて仕上げる。	約1/5の破片。
145	3区 D42FR		15.0 2.1	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密。	底部から体部が緩やかに立ち上がり、強く屈曲した口縁が外反する。口縁端部の内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。螺旋状の粘土継ぎ目が残る。内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面を横ナデすることで仕上げる。	約1/5の破片。
146	3区 D42FT・ FU	土師器 皿A	16.0 2.0	7.5YR7/3に ぶい 緻密。 橙色。	底部は平底で、体部は緩やかに外上方へ開く。口縁部は強く屈曲し、端部内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。螺旋状の粘土継ぎ目が残る。内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整すると共に、体部から底部の境界を強く押さえて仕上げる。	約2/3が残る。
147	3区 D42DS		13.7 2.1	7.5YR6/4に ぶい 緻密。 橙色。 やや粗、砂を 多く含む。	底部はやや丸みを帯びた平底で、体部は緩やかに外上方へ開く。口縁部は強く屈曲し、端部内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整、体部から底部の境界を強く押さえて仕上げる。	約1/3が残る。
148	3区 D42JU	土師器 杯A	14.4 2.3	10YR6/2灰黄 褐色。 緻密。	底部は平底で、体部は緩やかに外上方へ開く。口縁部は強く屈曲し、端部内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。体部に螺旋状の粘土継ぎ目が残る。内面は板状工具による成形後に丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面を横ナデ、最後にナデ上げる。	完存。
149	3区 D42ER		14.9 2.2	2.5YR4/1赤 灰色。 緻密。	底部から体部は緩やかに外上方へ開く。口縁部は強く屈曲し、端部内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面を横ナデ、体部から底部への境界を強く押さえて仕上げる。	約1/5の破片。
150	3区 D42DR		17.4 2.9	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密。	体部は底部から緩やかに外上方へ開く。口縁部は弱く屈曲し、端部内側の肥厚も弱い。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は板状工具による成形後に丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面を横ナデ調整、最後はナデ上げる。	約1/3の破片。 口縁部に灯芯の 痕跡。
151	3区 D42GT	土師器 杯L	19.0 2.7	7.5YR7/3に ぶい 密、軟質。 橙色。	底部は平底で、体部は緩やかに外上方へ開く。口縁部は強く屈曲し、端部内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は底部から体部にかけて丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整する。	約1/5の破片。
152	3区 D42 DR・DS		19.8 3.4	10YR7/4にぶ い黄橙色。 緻密。	体部は底部から緩やかに外上方へ開く。口縁部は強く屈曲し、端部内側は上方に肥厚する。	151に同じ。	約1/5の破片。
153	3区 D42 HQ・HR		20.8 3.8	10YR7/2にぶ い黄橙色。 密、軟質。	底部は平底で、体部は緩やかに外反しながら開く。口縁部は屈曲し、端部内側は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。内面は底部から体部にかけて板状工具による成形の後に丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面上半を横ナデして仕上げる。	約1/5の破片。
154	3区 D42FR		11.0 3.0	10YR8/3浅黄 褐色。 密、軟質。	底部は平底で、体部は緩やかに外反しながら開き、口縁付近で内傾する。口縁端部は丸くおさめる。	底部は回転ヘラ切り後に、ナデ調整。体部は回転ナデ成形で、体部と底部の境界は回転ヘラケズリで仕上げる。	口縁部の残りは 悪いが体部はほ ぼ完存。
155	3区 D42GR	土師器 杯	12.0 3.0	5YR6/6橙 色。 緻密。	底部は平底で、体部は緩やかに外反しながら開く。口縁端部は丸くおさめる。	底部は回転ヘラ切り後に、丁寧なナデ調整。体部は回転ナデ成形。	約1/4の破片。
156	3区 D42DR		14.1 2.8	10YR8/1灰白 色。 緻密。	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、外上方へ開く。口縁部は弱く屈曲し、端部内側を肥厚させる。	底部から体部外面はオサエ成形後にナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面を丁寧に横ナデして仕上げる。	口縁部は約1/2 残る。
157			17.2 (2.9)	10YR7/4にぶ い黄橙色。 緻密。	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、外上方へ開く。口縁部は屈曲部分が溝状に残され、端部の内側は弱く肥厚させる。	体部外面は手持ちヘラケズリ。口縁は横ナデで屈曲部や端部を作り、外面は口縁上端までヘラケズリが及ぶ。内面は丁寧に横ナデして仕上げる。	約1/5の破片。

池1出土土師器2 (図版22)

158	3区 D42CT	土師器 高杯	— —	10YR7/4にぶ い黄橙色。 緻密。	脚部は断面十角形の面取りを施し、内部中空部は下方に向かってやや広がる。脚部から裾部にかけて屈曲し、大きくラッパ状に広がる。	脚部は棒状の芯に粘土を厚さ0.7~1cmで巻き付け、芯を回すことで中空部を作る。杯との接合部は補足粘土を付加して下方にナデつけ、外面を下から上への縦ヘラケズリで面取りする。裾部は板状工具で内面をナデつけながら押し広げて成形し、横ナデ調整で仕上げる。	脚部の破片。裾部に墨書によるの記号が施される。判読不明。
159	3区 D42FR		— —	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密。	脚部は断面七角形の面取りを施し、内部中空部は下方に向かってやや広がる。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、芯を回すことで中空部を作る。杯との接合部は補足粘土を付加して下方にナデつけ、外面を下から上への縦ヘラケズリで面取りして仕上げる。	脚部の破片。
160	3区 D42HR		— —	10YR8/1灰白 色。 緻密。	脚部は面取りが弱く、断面円形を呈する。脚部から杯部は緩やかに外上方に移行する。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、芯を回すことで中空部を作る。杯との接合部は多量の補足粘土を付加して、縦ヘラケズリで仕上げる。杯部外面は補足粘土部分は脚部からの縦ヘラケズリで調整し、体部は横ナデ調整。内面も丁寧なナデ調整。	脚部上端から杯部の破片。
161	3区 D42DR		— —	10YR7/4にぶ い黄橙色。 緻密。	脚部は断面九角形の面取りを施し、内部中空部は下方に向かってやや広がる。脚部から裾部にかけて屈曲し、大きくラッパ状に広がる。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、芯を回すことで中空部を作る。脚部外面は下から上への縦ヘラケズリで面取りする。裾部は板状工具で内面をナデつけながら押し広げて成形し、丁寧な横ナデ調整で仕上げる。	脚部下端から裾部にかけての破片。
162	3区 D42HR		28.0 —	2.5Y8/2灰白 色。 密、やや軟 質。	体部は緩やかに丸みを帯びて外上方に立ち上がり、口縁部で外反し水平に広がる。口縁端部は内側に曲げて上方に肥厚する。	体部外面には粘土継ぎ目痕跡と板状工具による横方向の成形痕跡が残るが、全体に丁寧な横ナデ調整で仕上げる。	杯部の破片。
163	3区 D42HQ		— —	10YR8/3浅黄 橙色。 緻密。	脚部は面取りが弱く、断面円形を呈する。内部中空部は下方に向かってやや広がり、脚部から裾部にかけて屈曲する。脚部から杯部は緩やかに外上方に移行する。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、芯を回すことで中空部を作る。杯との接合部は補足粘土を付加して下方にナデつけ、外面を下から上への縦ヘラケズリ調整するが、下端部まではヘラケズリが及ばずナデ調整のみである。杯部外面はナデ調整、内面も丁寧なナデ調整。	脚部から杯部にかけての破片。
164	3区 D42ER		脚部径 18.4 —	10YR7/2にぶ い黄橙色。 緻密。	緩やかに丸みを帯びて外下方に広がり、裾で内傾気味に外へ屈曲する。裾端部は内側に曲げて下方に肥厚させる。	外面はオサエ成形後に横ナデ調整。粘土継ぎ目痕跡が若干残る。内面は丁寧な横ナデ調整。	裾部の破片。
165	3区 D42ES		— —	10YR8/1灰白 色。 緻密。	脚部は面取りが弱く、断面円形を呈する。内部中空部は中央やや下部で最も狭くなる。脚部から裾部にかけて屈曲する。脚部から裾部の境界は明瞭でなく、緩やかに外下方に移行する。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、芯を回すことで中空部を作るが、芯の回転の支点が脚部中央になっている。外面は上から下への縦ヘラケズリで、他の個体と異質である。裾部内面は横ナデ調整で仕上げる。	脚部から裾部の破片。白色土器の可能性あり。
166	3区 D42DR	土師器 小型高杯	10.3 —	10YR8/3浅黄 橙色。 緻密。	脚部は断面七角形の面取りを施し、内部中空部は下方に向かってやや広がる。脚部から裾部にかけて屈曲し、裾部は大きくラッパ状に広がる。端部内側を外下方に肥厚させる。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、芯を回すことで中空部を作る。杯との接合部は補足粘土を付加して下方にナデつけ成形し、脚部外面を下から上への縦ヘラケズリ調整する。裾部はナデつけながら押し広げ成形した後、丁寧な横ナデ調整で仕上げる。	脚部から裾部の破片。
167	3区 D42HS	土師器 大盤	— —	10YR7/2にぶ い黄橙色。 密、やや軟 質。	やや丸みを帯びた底部に、やや内傾した断面四角形の高い高台が取り付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形。高台は貼り付け、横ナデ調整。底部内面は板状工具で成形後にナデ調整。	底部から体部約1/2の破片。
168	3区 D42CU	土師器 小甕	11.6 —	10YR6/1褐灰 色。 緻密。	丸い体部に外反する小さな口縁が付く。口縁部と体部外面の境界には成形時に生じた段が残る。口縁端部は丸くおさめる。	体部外面はオサエ、内面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデで成形・調整を行なう。	口縁部から体部上半約1/4の破片。
169	3区 D42FR	土師器 甕	15.0 —	内面10YR7/ 2にぶい黄橙 色。 外面10YR2/ 1黒色。 密、軟質、細 砂を多量に含 む。	丸い体部にやや内傾気味の小さな口縁が付く。口縁部と体部外面の境界には成形時に生じた段が残る。口縁端部は丸くおさめる。	体部外面はオサエ、内面はコテ状工具による成形後、丁寧なナデ調整。口縁部はオサエによって粗い成形後、横ナデ調整で仕上げる。	口縁部から体部約1/2が残る。体部外面には煤が多量に付着。

170	3区 D42KR	土師器 甕	19.6 —	10YR7/2に ぶい黄橙色。 密、やや軟 質、砂を多量 に含む。	丸い体部に強く屈曲した 口縁が付く。口縁部と体 部外面の境界には成形時 に生じた段が残る。口縁 端部の内側は上方に肥厚 させる。	体部外面はオサエ、粗いハケ痕跡が若干認めら れる。内面はオサエによる成形後、粗いナデ調 整。口縁部は横ナデ調整で仕上げる。	口縁部から体部 上半の破片。
171	3区 D42DR		22.4 —	7.5YR8/3浅 黄橙色。 緻密。	丸い体部に屈曲した口縁 が付く。口縁端部の内側 は上方に肥厚させる。	体部外面はオサエ、粗いハケ痕跡が認められ る。内面はオサエによる成形。口縁部は外面が 横ナデ調整、内面は横ハケ調整で仕上げる。	口縁部から体部 上半の破片。
172		土師器 羽釜	17.0 —	5YR6/6橙 色。 密、軟質。	緩やかな丸みをもつ体部 上端に、水平な長い罫が 付く。口縁はやや外反し て立ち上がり、端部を若 干内側に屈曲させ、丸く おさめる。	体部外面はオサエ成形後に、粗い縦ハケ調整を 施す。内面は板状工具による横方向の成形ナ デ。罫は貼り付け横ナデ調整。罫部から口縁に かけて強い横ナデで、最後に口縁端部を横ナデ で仕上げる。	口縁部から体部 上半の破片。 河内産。
173	3区 D42GR		25.5 —	10YR8/2灰 白色。 密、やや軟 質。	緩やかな丸みをもつ体部 上端に、端部が外上方に 立ち上がる短い罫が付 く。口縁は短く、端部を 内側に屈曲させ、丸くお さめる。	体部外面はオサエ成形後に、粗い縦ハケ調整を 施す。内面は丁寧な横ナデ。罫は貼り付け横ナ デ調整。罫部から口縁にかけて強い横ナデで、 最後に口縁端部を横ナデで内側につまみ上げて 仕上げる。	
174	3区 D42DR	土師器 甕	— —	内面7.5Y2/1 黒色。 外面7.5YR7/ 4にぶい橙 色。 緻密。	焚口の上に外反した長い 罫が付く。口縁は短く立 ち上がる。口縁端部は内 傾した平坦面を呈する。	体部外面はオサエによる成形、粘土積み上げに 伴う縦目痕跡が残る。内面は板状工具による 成形後、丁寧なナデ調整。罫は貼り付け横ナデ 調整。焚口部は切り込んで開ける。口縁端部は 横ナデ調整、端部を外上方につまみ上げる。	焚口左上の破 片。 河内産。

池1 出土黒色土器・白色土器(図版23)

175	3区 D42IS	黒色土器 A 皿A	13.9 2.5	内面N3/暗灰 色。 外面7.5YR6/ 3にぶい褐色 ～N3/暗灰 色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底か ら緩やかに体部が外上方 に立ち上がる。口縁部は 細くやや外反し、端部内 側を若干肥厚させる。	口縁から底部にかけて外面は丁寧なヘラケズリ 調整。内面は底部に丁寧なヘラミガキ調整を施 してから、体部の横方向の丁寧なヘラミガキで 仕上げる。	口縁部から底部 にかけて約1/3 の破片。
176	3区 D42ER	黒色土器 A 皿B	14.7 2.5	内面N2/黒 色。 体部下半10Y R6/3にぶい 黄橙色。 密、白色細砂 を含む。	平らな底部に外に隆張る 断面三角形の高台が付 く。体部はやや内傾しな がら外へ開き、口縁部は 外反する。端部内側をや や上に肥厚させる。	体部外面はヘラケズリ調整後にヘラミガキ、内 面は丁寧なヘラミガキを施す。口縁部は横調整 方向にナデつけて成形し、体部からのヘラミガ キ調整が及ぶ。高台は貼り付け、横ナデ調整で 仕上げる。	口縁部から体部 にかけて約1/6 の破片。底部内 面に漆と考えら れる付着物。
177	3区 D42 CS・CT	黒色土器 A 椀A	15.0 (4.4)	内面N2/黒 色。 外面10YR5/ 2灰黄褐色～ N2/黒色。 緻密、白色 砂・小石、赤 色小礫を含 む。	体部は緩やかに内湾して 立ち上がり、口縁部は若 干外反する。口縁端部は 丸くおさめ、端部内側に 沈線を巡らす。	体部外面はオサエ成形後に粗いヘラケズリ。口 縁部は横ナデで外反させ、端部を外につまみ上 げると同時に沈線を内側に施す。内面は底部に 丁寧なヘラミガキ調整を施してから、体部の横 方向の丁寧なヘラミガキで仕上げる。	口縁部から体部 にかけて約1/3 の破片。
178	3区 D42CU		16.2 4.4	内面N2/黒 色。 外面2.5Y5/2 暗灰黄色～ N2/黒色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底か ら、体部が緩やかに外上 方に立ち上がる。口縁部 は若干外反させて端部を 丸くおさめる。	体部外面はオサエ成形後に粗いヘラケズリ。口 縁部は横ナデ調整。内面は底部に丁寧なヘラミ ガキ調整を施してから、体部の横方向の丁寧な ヘラミガキで仕上げる。	口縁部から底部 にかけて約1/3 の破片。外面を 黒色塗布。
179			16.8 3.9	内面N2/黒 色。 外面2.5YR5/ 2暗灰黄色～ N2/黒色。 緻密。	平らな底部から体部が緩 やかに外上方に立ち上 がる。口縁部の外反は弱 く、端部を丸くおさめ る。	底部・体部外面はオサエ成形後にヘラケズリ調 整。口縁部は横ナデ調整。内面は底部に丁寧な ヘラミガキ調整を施してから、体部の横方向の 丁寧なヘラミガキで仕上げる。なお、体部内面 に暗文を施す。	口縁部から底部 にかけて約1/3 の破片。外面を 黒色塗布。
180	3区 D42HR	黒色土器 A 椀B	13.2 4.4	内面N2/黒 色。 外面7.5YR5/ 4にぶい褐色 ～N2/黒色。 緻密、粗砂・ 小石を含む。	平底の底部に断面三角形 の低い高台が付く。体部 は若干屈曲しながら緩や かに外上方へ開き、口縁 端部は丸くおさめる。口 縁端部内側に弱い沈線が 巡る。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。高台は貼り付け、横ナデ調整。 口縁部は横ナデ調整して端部内側に沈線を付加 する。内面は底部に丁寧なヘラミガキ調整を施 してから、体部の横方向の丁寧なヘラミガキで 仕上げる。	底部はほぼ完存 するが、口縁部 から体部は約 1/6の遺存。
181	3区 D42 CS・CT		13.8 4.1	内面N3/暗灰 色。 外面7.5YR6/ 3にぶい褐色 ～N3/暗灰 色。 密、白色砂・ 赤色小礫を含 む。	平底の底部に断面三角形 の低い高台が付く。体部 は若干屈曲しながら緩や かに外上方へ開き、口縁 端部は丸くおさめる。口 縁端部内側が弱く肥厚す る。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。若干ヘラミガキが認められる。 高台は貼り付け、横ナデ調整。口縁部は横ナデ 調整して端部を外側につまみ上げ、内側の肥厚 を作る。内面は底部と体部に横方向の丁寧なヘ ラミガキ調整を施して仕上げる。	口縁部から底部 にかけて約1/6 の破片。

土器類 (図版23)

182	3区 D42CT	黒色土器 A 椀B	15.2 4.5	内面N3/暗灰色。 外面5YR6/6 橙色～10YR 6/3にぶい黄 橙色。 緻密、白雲 母・茶色小礫 を含む。	やや丸みを帯びた平底 に、断面三角形の外に踏 張る高台が付く。体部は 緩やかに外上方に立ち上 がり、口縁部は弱く外反 させて端部を丸くおさめ る。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 ヘラケズリ調整。高台は貼り付け、横ナデ調 整。口縁部は横ナデ調整。内面は底部に丁寧な ヘラミガキ調整を施してから、体部の横方向の 丁寧なヘラミガキで仕上げる。	口縁部から底部 にかけて約1/4 の破片。底部外 面に墨が付着す る。
183	3区 D42DS		15.6 —	内面N2/黒色。 外面7.5YR6/ 3にぶい褐色 ～N2/黒色。 緻密、赤色小 礫を含む。	体部は内湾しながら緩や かに外上方へ開き、口縁 端部は丸くおさめる。口 縁端部内側に沈線が巡 る。	体部外面はオサエ成形後に、粗いナデ調整。口 縁部は横ナデ調整して端部内側に沈線を付加す る。口縁部外面に粗いヘラミガキが認められ る。体部内面は横方向の丁寧なヘラミガキで仕 上げる。	口縁部から体部 にかけて約1/4 の破片。
184	3区 D42CU		16.5 4.5	内面N2/黒色。 外面 10YR6/4に ぶい黄橙色。 緻密、赤色小 礫を含む。	底部に断面三角形の低い 高台が付く。体部は若干 屈曲しながら緩やかに外 上方へ開き、口縁端部は 丸くおさめる。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。高台は貼り付け、横ナデ調整。 口縁部も横ナデ調整。内面は底部に丁寧なヘラ ミガキ調整を施してから、体部の横方向の丁寧 なヘラミガキで仕上げる。	口縁部から底部 にかけて約1/6 の破片。
185	3区 D42 CS・DS		16.6 —	内面N2/黒色。 外面 7.5YR7/4に ぶい橙色。 緻密。	体部は内湾しながら緩や かに外上方へ開き、口縁 部は若干外反し、端部は 丸くおさめる。口縁端部 内側を若干肥厚させる。	体部外面はオサエ成形後に、粗いナデ調整。口 縁部は横ナデ調整で、端部を外側につまみ上げ て内側を肥厚させる。体部内面は横方向の丁寧 なヘラミガキで仕上げる。	口縁部から体部 にかけて約1/5 の破片。
186	3区 D42CU	3区 D42ER	17.6 (4.8)	内面N2/黒色。 外面10YR6/ 3にぶい黄橙 色～N2/黒色。 緻密、白色砂 を若干含む。	やや丸みを帯びた平底 に、断面三角形の外に踏 張る高台が付く。体部は 緩やかに外上方に立ち上 がり、口縁部は若干外反 する。端部は丸くおさ め、口縁端部内側を若干 肥厚させる。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 ナデ調整。高台は貼り付け、横ナデ調整。口縁 部は横ナデ調整。体部外面に粘土継ぎ目痕跡が 残る。内面は底部に丁寧なヘラミガキ調整を施 してから、体部に横方向のやや粗いヘラミガキ で仕上げる。なお、体部内面に暗文を施す。	口縁部から体部 にかけて約1/3 の破片と底部約 1/6の破片。合 成復元。体部外 面を黒色塗布。
187	3区 D42ER		17.6 5.0	内面N2/黒色。 外面10YR5/ 3にぶい黄褐 色。 緻密、白色砂 を若干含む。	平底の底部に断面三角形 の高台が付く。体部は強 く内湾して外上方へ開 き、口縁端部は丸くおさ める。口縁端部内側に沈 線が巡る。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。高台は貼り付け、横ナデ調整。 口縁部は横ナデ調整して端部を外側につまみ上 げ、内側の沈線を作る。内面は底部と体部に横 方向の丁寧なヘラミガキ調整を施して仕上げ る。	底部から体部に かけてほぼ完存 するが、口縁部 は破片。合成復 元。
188	3区 D42CU		17.4 5.1	内面N2/黒色。 外面7.5YR6/ 4にぶい橙色 ～N2/黒色。 緻密、赤色小 礫を含む。	やや丸みを帯びた平底 に、断面三角形の低い高 台が付く。体部は緩やか に外上方に立ち上がり、 口縁部は若干外反する。 端部は丸くおさめる。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 体部を粗いヘラケズリ調整。高台は貼り付け、 横ナデ調整。口縁部は横ナデ調整。内面は底部 に丁寧なヘラミガキ調整を施してから、体部に 横方向の丁寧なヘラミガキで仕上げる。なお、 体部内面に暗文を施す。	口縁部から底部 にかけて約1/3 の破片。
189			17.5 4.8	N2/黒色。 緻密、白色砂 を若干含む。	やや丸みを帯びた平底 に、断面三角形の低い高 台が付く。体部は緩やか に外上方に立ち上がり、 口縁部は若干外反する。 端部は丸くおさめ、端部 内側を弱く肥厚させる。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。高台は貼り付け、横ナデ調整。 口縁部は横ナデ調整して端部を外側につまみ上 げる。内面は底部と体部に横方向の丁寧なヘラ ミガキ調整を施して仕上げる。なお、体部内面 に暗文を施す。	口縁部から底部 にかけて約1/2 が残る。外面を 黒色塗布。
190	3区 D42ES	黒色土器 B 椀B	16.7 —	N2/黒色。 緻密。	体部は内湾しながら緩や かに外上方へ開き、口縁 部は若干外反し、端部は 丸くおさめる。口縁端部 内側に沈線を巡らす。	体部外面はオサエ成形後に、丁寧なヘラミガキ 調整。口縁部は横ナデ調整で、端部を外側につ まみ上げて沈線を作る。体部内面は横方向の丁 寧なヘラミガキで、口縁部内外面ともにヘラミ ガキ調整が及ぶ。高台は剥離しているが、貼り 付けナデ調整。	口縁部から体部 にかけて約1/4 の破片。
191	3区 D42ER	黒色土器 A 台付鉢	10.7 —	内面5YR5/3 にぶい赤褐色。 外面10YR6/ 3にぶい黄橙 色。 緻密、白色砂 を若干含む。	体部は内湾しながら外上 方へ立ち上がる。口縁部 は外へ屈曲し、端部は丸 くおさめる。	体部内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整。口縁 部は横ナデによって外側につまみ出す。黒色土 器だが、燻し焼きを施していない。	口縁部から体部 にかけて約1/6 の破片。口縁部 はわずかに残 る。

192	3区 D42 CT・CU	黒色土器 A台付鉢	14.8 8.3	内面N3/暗灰色。 外面7.5YR5/3にぶい褐色～N3/暗灰色。 緻密、白色の砂を若干含む。	平らな底部に断面三角形のやや内傾した高台が付く。体部は緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部で内側に内湾する。口縁部は外へ屈曲し、端部は丸くおさめる。	底部外面はオサエ成形後にナデ調整。高台は貼り付け、横ナデ調整。体部外面はオサエ成形後に丁寧なヘラミガキ、体部は丁寧にナデ調整を施した後、粗いヘラミガキ調整。口縁部は横ナデで外側につまみ出す。	約1/2残る。外面を黒色塗布。
193	3区 D42ER	黒色土器 A 小杯	高台 部径 4.3 —	内面N2/黒色。 外面10YR6/3にぶい黄褐色～N2/黒色。 緻密。	丸い底部に、外へ踏ん張った細い高台が付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	底部から体部外面はオサエ成形後にナデ調整。高台は貼り付け、横ナデ調整。内面は丁寧なヘラミガキ調整。	底部約1/4の破片。
194	3区 D42 ES・ET ・EU	黒色土器 B台付鉢	高台 部径 10.0 —	N2/黒色。 緻密、白色小石を含む。	平らな底部のやや内よりに、外へ踏張った高い高台が付く。	底部から体部内外面はオサエ成形後に丁寧なヘラミガキ調整。高台は貼り付け、横ナデ調整。	底部約1/3の破片。
195	3区 D42EU	黒色土器 A 鉢	— —	上面N2/黒色。 側下面7.5YR7/3にぶい橙色。 緻密。	断面長方形を呈する鉢把手。把手取付け部上面から0.7cmほどで、端部を丸く仕上げた口縁となる。	把手はオサエによって形作り、上面と片側面および下面の基部をヘラケズリ調整する。鉢口縁は横ナデ調整で、体部内面は丁寧なヘラミガキ調整を施す。	把手部破片。
196	3区 D42ES	黒色土器 A 鉢	— —	内面N2/黒色。 外面7.5YR6/4にぶい橙色。 緻密、白色砂を含む。	丸い底部に付けられた脚部下端に切り込みを入れて獣脚とする。	鉢の底部と体部の境界に棒状の粘土を貼り付け、オサエながら脚を形作り、ヘラケズリによって獣脚の形を整える。鉢体部内面は丁寧なヘラミガキ調整。	獣脚破片。
197	3区 D42 CS・CT	黒色土器 A 甕	13.6 —	内面N2/黒色。 外面10YR4/2灰黄褐色。 緻密、白色粗砂・赤色小礫を含む。		体部はオサエ成形で形作り、口縁部を屈曲させて仕上げる。口縁部から体部内面にかけて横ナデ調整。体部外面肩部を横ヘラケズリするが、他は粗いナデ調整。	口縁部から体部にかけて約1/6の破片。体部外面に煤が付着する。
198	3区 D42CU	黒色土器 A 甕	18.4 (13.8)	内面N2/黒色。 外面7.5YR6/4にぶい褐色～N2/黒色。 緻密、白色砂を若干含む。	丸い体部に外反した口縁部が取り付く。	体部はオサエ成形で形作り、口縁部を屈曲させて仕上げる。口縁部から体部内面にかけて横ナデ調整。体部外面は粗いナデ調整。	約1/3残る。体部外面には煤が、内面には炭化物の一部が付着。
199	3区 D42FS	白色土器 蓋	— —	2.5Y7/2灰黄色。 緻密、砂を少量含む。	やや丸みを帯びた天井部に、宝珠形のつまみが付く。天井部外面の中心から3cmの位置に低い突線を巡らす。	つまみは貼り付け、回転ナデ。突帯は削り出し回転ナデで仕上げる。内面は丁寧なナデ調整。	天井部のみの破片。
200	3区 D42CU	白色土器 椀	14.5 —	2.5Y8/2灰白色。 緻密。	体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁部は外反して端部を丸くおさめる。	体部外面下半は回転ヘラケズリ、口縁部から体部内面にかけては回転ナデ。	口縁部から体部にかけて約1/6の破片。
201	3区 D42DS		17.5 5.9	2.5Y7/2灰黄色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に断面逆台形の高台が取り付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。	回転成形によって器形を作りだし、底部外面から体部にかけて回転ヘラケズリで調整する。高台は貼り付け削り出しの輪高台で、回転ナデ調整で仕上げる。口縁部から体部内面にかけてはナデ調整、底部内面も粗いナデ調整。	約2/3が残る。
202	3区 D42ER		19.8 6.5	2.5Y8/2灰白色～2.5Y7/2灰黄色。 緻密、微砂を少量含む。	やや丸みを帯びた底部に断面四角形の高台が取り付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	回転成形によって器形を作りだし、底部外面から体部にかけて回転ヘラケズリで調整する。高台は貼り付け削り出しの輪高台で、回転ナデ調整で仕上げる。口縁部から体部内面にかけてはナデ調整、底部内面も粗いナデ調整。	底部は約1/2が残るが、口縁部は破片のみ。
203	3区 D42FR		高台 部径 6.8 —	2.5Y7/2灰黄色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に断面四角形の高台が取り付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	回転成形によって器形を作りだし、底部外面から体部にかけて回転ヘラケズリで調整する。高台は貼り付け削り出しの輪高台で、回転ナデ調整で仕上げる。底部内面はナデ調整。	底部の破片。
204	3区 D42CU		高台 部径 5.8 —	2.5Y8/2灰白色。 緻密、微砂を少量含む。	平らな底部に断面逆台形の高台が取り付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	回転成形によって器形を作りだし、底部外面から体部にかけて回転ヘラケズリで調整する。高台は貼り付け削り出しの輪高台で、回転ナデ調整で仕上げる。底部内面はナデ調整。	底部の破片。

土器類 (図版23)

205	3区 D42 FS・FT	白色土器 椀	高台 部径 6.5 —	2.5Y7/2灰黄色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に断面四角形の高台が取り付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	回転成形によって器形を作りだし、底部外面から体部にかけて回転ヘラケズリで調整する。高台は貼り付け削り出しの輪高台で、回転ナデ調整で仕上げる。底部内面は粗いヘラミガキ調整。	底部の破片。
206	3区 D42DR		高台 部径 6.2 —	2.5Y8/2灰白色。 緻密、砂を少量含む。	平らな底部に断面逆台形の高台が取り付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	回転成形によって器形を作りだし、底部外面から体部にかけて回転ヘラケズリで調整する。高台は貼り付け削り出しの輪高台で、回転ナデ調整で仕上げる。底部内面は粗いナデ調整。	底部の破片。
207	3区 D42IS		高台 部径 7.5 —	2.5Y7/2灰黄色。 緻密。	平らな底部を若干削っただけの蛇の目高台で、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	円盤状の底部で、若干削り出して蛇の目高台を模している。底部外面には削り残された回転糸切り痕跡が残る。底部内面はナデ調整後に、粗いヘラミガキ調整。	底部の破片。
208	3区 D42FR		高台 部径 5.8 —	2.5Y7/2灰黄色。 緻密、やや砂を含む。	平らな底部から、体部が緩やかに外上方に立ち上がる。	円盤状の底部で、未調整のため回転糸切り痕跡が明瞭に残る。底部内面はナデ調整。	底部の破片。
209	3区 D42 CS・DS	白色土器 小杯	9.7 4.1	2.5Y8/1灰白色。 緻密。	平らな底部から、体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。	円盤状の底部で、未調整のため回転糸切り痕跡が明瞭に残る。体部から口縁にかけて回転成形。底部内面はナデ調整。	底部は完存。口縁部は約1/4が残る。
210	3区 D42IS	白色土器 高杯	— —	2.5Y8/2灰白色～2.5Y/2灰黄色。 緻密、やや砂を含む。	底部は水平で体部は緩やかに丸みを帯びて外上方に立ち上がる。脚部は断面八角形の面取りを施す。	杯部外面は底部外面をヘラケズリ調整回転。脚部はヘラケズリによって仕上げる。	杯部の破片。
211	3区 D42IR		— —	2.5Y8/2灰白色。 緻密、やや砂を含む。	杯底部は水平で、脚部は断面八角形の面取りを施し、内部中空部は下方に向かってやや広がる。脚部から裾部にかけての屈曲は弱く、裾部は大きくラッパ状に広がる。	杯部内面はナデ調整後に粗いヘラミガキ調整。外面は回転ヘラケズリ後に脚部を付着してナデ調整脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、芯を回すことで中空部を作る。脚部外面は下から上へのタテヘラケズリ調整する。裾部は横ナデ調整。	杯部口縁と脚部を欠損。

池 1 出土須恵器(図版24)

212	3区 D42FR	須恵器 杯A	13.6 2.9	5Y7/1灰白色。 緻密。	平らな底部から体部が緩やかに立ち上がる。口縁部は内湾気味で、端部は丸くおさめる。	体部から口縁部にかけては回転成形で、口縁端部をやや内側につまみ上げる。底部外面は回転ヘラキリ後に、ナデ調整。体部から底部内面もナデ調整で仕上げる。	約1/6の破片。
213	3区 D42CU		15.7 3.8	2.5Y5/1黄灰色。 緻密。	平らな底部から体部が緩やかに立ち上がる。口縁部は内湾気味で、端部は内側を厚く肥厚させる。	体部から口縁部にかけては回転成形で、口縁端部は内側に折り曲げて肥厚部を作る。底部外面は回転ヘラキリ後に、ナデ調整。体部から底部内面もナデ調整で仕上げる。	底部はほぼ完存。口縁部は約1/2が残る。
214	3区 D42KR	須恵器 杯B	底部 径7.0 —	N5/灰色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に、断面方形の外に踏張った輪高台が付く。体部が緩やかに立ち上がる。	体部は回転成形で、底部外面は回転ヘラキリ後に高台を貼り付け、後にナデ調整で底部全体を仕上げる。高台端部を外につまみ出すため、端面に沈線が巡る。	底部約1/2の破片。
215	3区 D42 GT・GU	須恵器 壺蓋	7.7 1.5	7.5Y6/1灰色。 緻密。	平らな天井部から、体部は緩やかに外反しながら広がる。口縁部は体部からほぼ直角に折れ曲がり、端部を丸くおさめる。	体部から口縁部にかけては回転成形で、天井部外面は未調整のため回転糸切り痕跡が明瞭に残る。	約1/3の破片。
216	3区 D42FR	須恵器 杯蓋	14.0 1.5	N5/灰色。 緻密。	平らな天井部から、体部は緩やかに外反しながら広がる。口縁部と体部の境界は明瞭でなく、端部を丸くおさめる。	体部から口縁部にかけては回転成形で、口縁端部をやや外側につまみ出す。底部外面は回転ヘラキリ後に、ナデ調整。体部から底部内面もナデ調整で仕上げる。	約1/5の破片。 内面に擦痕が認められる。
217	3区 D42DR	須恵器 瓶子	3.4 胴部 径5.3 8.7	N5/灰色。 緻密。	平坦な底部から卵形の体部が立ち上がる。頸部は細く、口縁部は緩やかに外反し、端部で屈曲して外に広がる。	体部から口縁部にかけては回転成形で、頸部内側に水引きによる絞り痕跡が残る。口縁端部は強く外上方につまみ上げることで屈曲部を作る。底部外面は未調整で回転糸切り痕跡が残る。体部外面から口縁部にかけて回転ナデ調整、体部下端部に回転ヘラケズリを施す。	完存。底部外面に「一」ヘラ記号。
218	3区 D42CS		3.4 胴部 径5.3 8.9	5Y6/1灰色～5Y7/1灰白色。 緻密、白色砂を含む。	平坦な底部から卵形の体部が立ち上がる。頸部は細く、口縁部は緩やかに外反し、端部で屈曲して上方に丸くおさめる。	体部から口縁部にかけては回転成形で、口縁端部は強く上方につまみ上げることで屈曲部を作る。底部外面は未調整で回転糸切り痕跡が残る。体部外面から口縁部にかけて回転ナデ調整、体部下端部に回転ヘラケズリを施す。	完存。
219	3区 D42ER		3.8 胴部 径5.8 10.1	5Y7/1灰白色。 緻密。	平坦な底部から卵形の体部が立ち上がる。頸部は細く、口縁部は緩やかに外反する。端部は断面撥状につくって面を形成する。	体部から口縁部にかけては回転成形で、口縁端部は強く外上方につまみ上げる。底部外面は未調整で回転糸切り痕跡が残る。体部外面から口縁部にかけて回転ナデ調整で仕上げる。	口縁部の一部を欠損するだけで完存。

220	3区 D42ER	須恵器 瓶子	4.4 胴部 径6.2 10.1	N5/～6/灰色。 緻密、5mm角 の石を含む。	平坦な底部から卵形の体 部が立ち上がる。頸部は 細く、口縁部は緩やかに 外反する。端部は面を形 成して外上方に屈曲させ、 丸くおさめる。	体部から口縁部にかけては回転成形で、口縁端 部は強く外上方につまみ上げる。底部外面は未 調整で回転系キリ痕跡が残る。体部外面から口 縁部にかけて回転ナデ調整で仕上げる。	口縁部の一部を 欠損するだけで 完存。
221	3区 D42GT		4.5 胴部 径6.8 10.6	5Y6/1灰色。 緻密。	平坦な底部から卵形の体 部が立ち上がる。頸部は 細く、口縁部は緩やかに 外反する。端部は屈曲し ながら外方へ広がり、上 方に肥厚させるように丸 くおさめる。	体部から口縁部にかけては回転成形で、口縁端 部は弱く外上方につまみ上げる。底部外面は未 調整で回転系キリ痕跡が残る。体部外面から口 縁部にかけて回転ナデ調整で仕上げる。	口縁部の一部を 欠損するだけで 完存。
222	3区 D42JR		4.3 胴部 径7.2 12.3	5Y6/1灰色～ N2/黒色。 緻密、黒色小 礫含む。	平坦な底部から卵形の体 部が立ち上がる。頸部は 細く、口縁部は緩やかに 外反する。端部は面を形 成して上方に屈曲させ、 丸くおさめる。	体部から口縁部にかけては回転成形で、口縁端 部は強く上方につまみ上げる。底部外面は未調 整で回転系キリ痕跡が残る。体部外面から口縁 部にかけて回転ナデ調整で仕上げる。内面には 轆轤目が明瞭に残る。	口縁部は約1/3 しか残存しない が、体部は完 存。内外面に付 着物あり。
223	3区 D42FT		5.0 胴部 径8.2 10.9	2.5Y7/2灰黄 色。 緻密、白色砂 を含む。	広く平坦な底部から砲弾 形の体部を作り出す。頸 部は太く緩やかに外反し て立ち上がり、口縁部は 上内方に屈曲させる。端 部は丸くおさめる。	体部から口縁部にかけては回転成形で、口縁端 部は強く上方につまみ上げる。底部外面は未調 整で回転系キリ痕跡が残る。体部外面から口縁 部にかけて回転ナデ調整、体部下端部に回転ヘ ラケズリを施す。	口縁部の一部を 欠損するだけで 完存。木製栓を 伴って出土。
224	3区 D42 ES・FS		7.0 胴部 径9.3 —	内面2.5Y4/1 ～6/1黄灰 色。 外面2.5Y7/2 灰黄色。 緻密、6mmの 角石含む。	223に同じ。	体部から口縁部にかけては回転成形で、口縁端 部は強く上方につまみ上げる。体部外面から口 縁部にかけて回転ナデ調整、体部下端部に回転 ヘラケズリを施す。内面には轆轤目が明瞭に残 る。	口縁部約1/3の 破片とほぼ完存 する体部を合成 復元。底部外面 は剥離してい る。
225	3区 D42JQ	須恵器 壺	9.0 —	N5/灰色。 緻密。	頸部は外上方に立ち上が り、口縁部で外反して広 がる。端部は外傾した面 をなし、外上方に肥厚さ せて丸くおさめる。	体部に頸部を乗せて接合し、回転成形。調整は 回転ナデで、端部を外上方に強くつまみ上げ る。	体部上端から頸 部、口縁部の破 片。
226	3区 D42CU		10.5 —	N5/～6/灰色。 緻密。	頸部は外上方に立ち上が り、口縁部で外反して広 がる。端部は外傾した面 をなし、外上方に肥厚さ せて丸くおさめる。	体部に頸部を嵌め込み、接合して回転成形。調 整は回転ナデで、端部を外上方に強くつまみ上 げる。端部の面取りを強く行なうため、下方に もバリ状に突出する。	体部上端から頸 部、口縁部の破 片。
227	3区 D42FR		10.6 —	7.5Y5/1～ 6/1灰色。 緻密。	頸部は外上方に立ち上が り、口縁部で外反する。 端部は上下に引き出さ れ、外傾した面をなす。	体部に頸部を乗せて接合し、回転成形。調整は 回転ナデで、端部を外上方に強くつまみ上げ るとともに、下方にも押し広げる。頸部内面に轆 轤目が明瞭に残る。	体部上端から頸 部、口縁部の破 片。
228	3区 D42GT		底部 径6.9 —	2.5Y6/2灰黄 色。 緻密。	平坦な底部から体部が緩 やかに外上方に立ち上 がる。	体部は回転成形で、回転系キリによって切り離 す。体部外面はナデ調整で、体部外面下端を強 くナデで底部との境界を示す屈曲部を作り出 す。底部は未調整のため回転系キリ痕跡が残 るが、調整台上での置き換えに伴う圧痕が多く付 いている。内面には轆轤目が明瞭に残る。	体部下端部から 底部にかけて約 1/2の破片。
229	3区 D42 AU・BU CU・DU		胴部 径 14.1 底部 径7.7 —	N5/灰色。 緻密、小石を 含む。	228に同じ。	回転台上に粘土円盤を乗せ、巻き上げ成形。体 部内外面ともに回転ヘラケズリによって形を整 え、外面は丁寧な回転ナデ調整、内面は粗いナ デ調整で仕上げる。体部外面下端を強くナデ で、底部との境界の屈曲部を作り出す。底部外 面はオサエ未調整のままである。	体部から底部に かけて約2/3の 破片。
230	3区 D42IR	須恵器 鉢	21.4 —	10Y5/1灰 色。 緻密。	外上方に立ち上がってきた 体部は上位で内方に屈 曲し、短く外反する口縁 部となる。口縁はさらに 内上方に肥厚し、端部は やや凹んだ外傾面を形成 する。	体部は回転成形、外面は粗いナデ調整を施す。 内面は未調整で轆轤目を残す。口縁部は一度外 反させてから、内側をつまみ上げて口縁端面を 作り出す。	口縁部から体部 上半にかけて約 1/6の破片。
231	3区 D42GS		23.0 —	2.5Y8/2灰白 色。 緻密。	外上方に立ち上がってきた 体部は上位で内方に屈 曲し、短く外反する口縁 部となる。口縁はさらに 内上方に肥厚し、端部は 玉縁状となっている。	体部は回転成形、回転ナデ調整を施す。口縁部 は一度外反させてから、内側をつまみ上げて口 縁玉縁を作り出す。	口縁部から体部 上半にかけて約 1/6の破片。
232	3区 D42IR		20.0 —	N5/～6/灰 色。 緻密。	外上方に立ち上がってきた 体部は上位で内方に屈 曲し、玉縁状の口縁部と なる。	体部は回転成形、回転ナデ調整を施す。口縁部 は一度外反させてから、内側に折り曲げて口縁 玉縁を作り出す。	口縁部から体部 上半にかけて約 1/7の破片。

土器類（図版24）

233	3区 D42ER	須恵器 鉢	24.3 —	7.5Y5/1～ 6/1灰色。 緻密。	232に同じ。	232に同じ。	口縁部から体部 上半にかけて約 1/6の破片。
234	3区 D42 FS・FT ・FU		底部 径8.5 —	N5/灰色。 緻密。	平坦な底部から、外上方 に体部が立ち上がる。	円柱状粘土塊に体部の粘土を付加し、巻き上げ 回転成形する。底部は回転糸キリで切り離し、 未調整のため回転糸キリ痕跡が明瞭に残る。体 部外面は丁寧な回転ナデ調整、内面は轆轤目が 残り、底部との境界は接合強化のため強くナデ つける。	底部から体部下 半の破片。
235	3区 D42GR	須恵器 耳付壺	8.7 —	N6/灰色。 緻密。	内傾する肩部に、わずか に外反する短い口縁部が 付く。口縁端部は丸くお さめる。耳が取り付く肩 部には自然釉が厚く付着 する。	体部から口縁にかけて丁寧な回転ナデ調整。耳 は貼り付け成形。	口縁部から肩部 約1/4の破片。
236		須恵器 短頸壺	10.4 —	2.5Y6/1黄灰 色。 緻密。	内傾する肩部に、わずか に外反する口縁部が付く。 口縁端部は丸くおさめ る。肩部には自然釉が 付着する。	巻き上げ成形、回転ナデ調整で仕上げる。	口縁部から肩部 約1/3の破片。
237	3区 D42DR	須恵器 甕	17.5 —	N6/灰色。 緻密。	内傾する肩部に、外反す る口縁部が屈曲して立ち 上がる。口縁端部は外傾 する面をなす。	肩部外面には縦方向の平行タタキ、内面には青 海波文の当て具痕跡が明瞭に残る。口縁部は巻 き上げ接合後オサエによって成形し、横ナデ調 整によって仕上げる。	口縁部から肩部 約2/3の破片。 口縁部内側に 「卅」ヘラ記 号。
238	3区 D42FR		16.2 —	N5/～6/灰色。 緻密、小石を 含む。	内傾する肩部に、外反す る口縁部が屈曲して立ち 上がる。口縁端部は面を なし、外方につまみ出 す。	肩部外面には縦方向の平行タタキ、内面はナデ 調整だが青海波文の当て具痕跡が若干残る。口 縁部は巻き上げ接合後、強い横ナデによって成 形し、丁寧な横ナデ調整によって仕上げる。	口縁部から肩部 約1/3の破片。
239	3区 D42 CT・DT		18.4 —	内面N4/灰色。 外面5YR4/1 褐色～7.5Y R5/3にぶい 褐色。 緻密、粗い白 砂含む。	内傾する肩部に、外反す る口縁部が屈曲して立ち 上がる。口縁端部はやや 外傾する面をなし、外方 につまみ出す。	体部外面は細かい格子タタキ後にナデ調整、内 面はオサエ成形痕を粗いナデで整える。口縁内 外面から肩部内外面にかけて丁寧な横ナデ調整 が施される。	口縁部から肩部 約1/3の破片。
240	3区 D42GR		14.8 —	2.5Y6/1黄灰 色。 緻密。	内傾する肩部に、外反す る口縁部が屈曲して立ち 上がる。口縁端部はやや 外方につまみ出し、丸く おさめる。	体部から口縁外面は細かい格子タタキ後に丁寧 なナデ調整。口縁内面から肩部内面にかけても 丁寧な横ナデ調整が施される。	口縁部から肩部 約1/8の破片。
241	3区 D42 CS・CT		13.5 —	N5/灰色。 緻密。	内傾する肩部に、外湾す る頸部が緩やかに立ち上 がる。口縁部は外反し、 端部を内側に肥厚させ上 向きの平坦面を作る。	肩部外面には縦方向の平行タタキ、内面はナデ 調整だが青海波文の当て具痕跡が若干残る。口 縁部は巻き上げ接合後、強い横ナデによって成 形し、丁寧な横ナデ調整で仕上げる。口縁部内 側は強くナデつけることによって、端部内側を 肥厚させる。	口縁部から肩部 約1/3の破片。
242	3区 D42HT		22.1 —	10YR5/1褐 灰色。 緻密。	外湾する頸部が緩やかに 立ち上がる。口縁部は外 反し、端部を内側に肥厚 させ上向きの平坦面を作 る。	頸部から口縁部にかけて丁寧な横ナデ調整で仕 上げる。口縁部内側は強くナデ付けることに よって、端部内側を肥厚させる。	口縁部から頸部 約1/5の破片。
243	3区 D42DT		20.0 —	10Y5/1灰 色。 緻密。	内傾する肩部に、外湾す る頸部が緩やかに立ち上 がる。口縁部は外反し、 端部を上方に肥厚させ平 坦面を作る。	肩部外面には横方向の平行タタキ、内面はオサ エ後にナデ調整。頸部から口縁部にかけて丁寧 な横ナデ調整によって仕上げる。口縁端部は上 方につまみ上げ、強くナデ付けることによっ て、下方にも若干広がる平坦面を作り出す。	口縁部から肩部 約1/8の破片。 頸部内側にヘ ラ記号あり。

池 1 出土灰釉陶器(図版25)

244	3区 D42DR	灰釉陶器 皿	15.0 2.8	7.5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に断面方形の 短い高台が付く。体部は 浅く緩やかに外上方へ立 ち上がり、口縁部で外反 する。口縁端部は丸くお さめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台 を貼り付け、回転ナデ調整。口縁部は回転成 形・ナデ調整。釉は灰オリーブ色を呈し、内面 のみ厚く施釉する。	約1/3の破片。 三叉トチンの痕 跡が内面に残 る。
245	3区 D42 CS・CT		13.5 3.3	7.5Y7/1灰白 色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に 断面三角形の高台が付く。 体部は緩やかに外上方へ 立ち上がり、口縁端部は 外反気味に丸くおさめ る。	底部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付 け、回転ナデ調整。体部から口縁部は回転成 形・ナデ調整。釉はオリーブ黄色を呈し、施釉 は口縁から体部内外面に漬掛けする。	底部は完存、口 縁部から体部は 約2/3残る。重 ね焼きの痕跡が 内面に残る。
246	3区 D42FR		14.1 3.0	2.5Y7/1灰白 色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に 断面長方形の高い高台が 付く。体部は緩やかに外 上方へ立ち上がり、口縁 部はやや外反して端部を 丸くおさめる。	底部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付 け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調 整、口縁部はやや強くナデ調整して外反させ る。釉は灰白色を呈し、施釉は外面は口縁から 体部にかけて塗掛け、内面は全面に塗掛けす る。	底部は約1/2、 口縁部は部分的 に残る。重ね焼 きの痕跡が内面 に残る。

247	3区 D42 GS・HS	灰釉陶器 皿	14.4 3.1	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に断面台形の高台が付く。体部は緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部でやや外反して端部を丸くおさめる。底部外面に墨が多く付着しているが、擦痕はなくパレットとして再利用。	底部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整して外反させる。体部に回転成形時の沈線が渦巻き状に残る。釉はオリーブ黄色を呈し、施釉は外面は口縁から高台にかけて塗掛け、内面は底部を残して塗掛けする。	底部はほぼ完存、口縁部は部分的に残る。重ね焼きの痕跡が内面と高台端部に残る。
248	3区 D42CU		15.4 2.8	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	平坦な底部に断面三角形の細くやや外反した高台が付く。体部は浅く緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整して外反させる。体部外面に軸轆目が残る。施釉は外面は口縁から高台にかけて薄く塗掛け、内面は全面に厚く塗掛けする。釉色はオリーブ黄色を呈する。	底部は約2/3、口縁部は約1/4が残る。重ね焼きの痕跡が内面と高台端部に残る。
249	3区 D42BT		15.5 3.2	7.5Y7/1灰白色。 緻密。	平坦な底部にやや内湾した三日月高台が付く。体部は浅く緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部でやや内側に屈曲しながら外反する。口縁端部は丸くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉は灰オリーブ色を呈し、施釉は外面は口縁から体部全面にかけて厚く塗掛け、内面は底部を残して厚く塗掛けする。	約1/6の破片。重ね焼きの痕跡が内面と高台端部に残る。
250	3区 D42CT		15.3 2.9	5Y6/1灰色。 緻密。	平坦な底部に断面三角形のやや内湾した三日月高台が付く。体部は浅く緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整して外反させる。釉は体部内外面に一方からの自然釉が薄く付くが、意図的な施釉はされていない。	底部は完存するが、口縁部は約1/3が残る。重ね焼きの痕跡が内面に残る。底部外面に「一」ヘラ記号。
251	3区 D42CT		15.2 3.0	2.5Y7/1灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に断面三角形のやや内湾した細い三日月高台が付く。体部は浅く緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。	250と同じ。	
252	3区 D42 CT・CU ・DU		15.9 3.5	7.5Y7/1灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部にやや内湾した三日月高台が付く。体部は浅く緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉は灰白色を呈し、施釉は外面は口縁から体部全面にかけて厚く塗掛けしており、口縁からの釉垂れが認められる。内面は底部を残して厚く塗掛けする。	底部は完存するが、口縁部は約1/3が残る。重ね焼きの痕跡が内面と高台端部に残る。
253	3区 D42 CT・CU	灰釉陶器 段皿	16.3 —	7.5Y7/1灰白色。 緻密。	体部は浅く直線気味に外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸くおさめる。	体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉は灰オリーブ色を呈し、施釉は内外面とも厚く塗掛けする。	口縁部から体部にかけて約1/4の破片。
254	3区 D42 CS・CT		高台 部径 8.1 —	7.5Y8/1灰白色。 緻密、微砂を やや含む。	平坦な底部に断面方形の高台が付く。体部は浅く緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部で屈曲して外反する。	回転成形、高台を貼り付け、回転ナデ調整。釉はオリーブ灰色を呈し、体部・高台・底部外面全体に厚く施釉するが、内面は施釉しない。	底部から体部にかけての破片。
255	3区 D42GR		19.3 2.9	7.5Y7/1灰白色。 緻密、微砂を 少量含む。	平坦な底部にやや丸みを帯びた断面方形の高台が付く。体部は浅く外反しながら緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部内面は凹み、体部との境界に段をつけるが、体部外面には段は付かない。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付け、回転ナデ調整。段部は強くナデつけて成形し作り出す。釉はオリーブ灰色を呈し、施釉は内外面全体に薄く塗掛けする。	約1/4の破片。口縁部先端も若干欠けている。底部外面に円形のトチン痕跡が残る。
256	3区 D42DS	灰釉陶器 小椀	10.7 3.3	10Y7/1灰白色。 緻密。	平坦な底部にやや内湾した三日月高台が付く。体部は緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉はオリーブ灰色を呈し、施釉は内面全体に自然釉らしき釉が掛かる。外面は施釉しない。	底部は約2/3残存、口縁部は一部残存。高台端部に重ね焼きの痕跡が残る。
257	3区 D42 CS・DS		10.4 3.5	7.5Y7/1灰白色。 緻密。	256と同じ。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉は灰オリーブ色を呈し、施釉は内面全体に厚く塗掛けする。外面は施釉しない。	底部約1/2、口縁部約1/3が残る。
258	3区 D42ER		12.0 —	10Y7/1灰白色。 緻密。	体部は緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸くおさめる。	体部外面下端は回転ヘラケズリ後に、高台貼り付けに伴う回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉は灰白色を呈し、施釉は外面は口縁から体部全面に塗掛け、内面は口縁部を塗掛けする。	口縁部から体部約1/2の破片。

土器類 (図版25)

259	3区 D42 ES・FS	灰釉陶器 椀	高台 部径 6.3 —	7.5Y8/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部にやや外に踏 張った断面方形の短い高 台が付く。体部は緩やかに 外上方へ立ち上がる。	底部から体部外面は高台を貼り付け、丁寧な回 転ナデ調整。施釉は内面全体に厚く塗掛けす る。外面は施釉しないが自然釉が薄く付着す る。	底部から体部の 破片。底部は完 存。
260	3区 D42CT		14.2 4.1	5Y7/1灰白 色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に やや内湾した三日月高台 が付く。体部は緩やかに 外上方へ立ち上がり、口 縁部でやや外反する。口 縁端部は丸くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台 を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉 は灰オリーブ色を呈し、施釉は外面は口縁から 体部全面にかけて厚く塗掛け、内面は底部を残 して厚く塗掛けし、後に底部内面を粗く塗掛け する。	底部は完存。口 縁部は約1/4が 残る。重ね焼き の痕跡が内面と 高台端部に残 る。
261	3区 D42 CT・JU		14.2 4.5	N7/灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に やや内湾した断面長方形 の高台が付く。体部は緩 やかに外上方へ立ち上 がり、口縁端部は外側に 屈曲し丸くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台 を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ ナデ調整。口縁部を外方に強くつまみ出す。釉 は灰オリーブ色を呈し、施釉は外面は口縁から 体部全面にかけて厚く塗掛け、内面は底部を残 して厚く塗掛けする。	底部は約2/3残 るが、口縁部は 一部しか残らな い。重ね焼きの 痕跡が内面と高 台端部に残る。
262	3区 D42 CS・CT		14.6 4.8	7.5Y8/1灰白 色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に やや内湾した太い三日月 高台が付く。体部は緩や かに外上方へ立ち上 がり、口縁部でやや外反 する。口縁端部は丸くお さめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台 を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉 はオリーブ黄色を呈し、施釉は体部内外面を厚 く漬掛けするため、釉垂れが激しい。	底部は完存。口 縁部は約2/3が 残る。重ね焼き の痕跡が内面と 高台端部に残 る。
263	3区 D42GU		15.4 4.6	10Y6/1灰 色。 緻密。	平坦な底部にやや内湾し た三日月高台が付く。体 部は緩やかに外上方へ 立ち上がる。口縁端部は 外反し丸くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台 を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉 はオリーブ灰色を呈し、施釉は外面は口縁から 体部全面にかけて塗掛け、内面は底部を残して 塗掛けする。	口縁部から底部 約1/4の破片。 底部内面の無釉 部には墨擦痕が 認められる。
264	3区 D42ER		15.3 4.6	7.5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部にやや内湾し た三日月高台が付く。体 部は緩やかに外上方へ 立ち上がり、口縁部でや や外反する。口縁端部は 丸くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台 を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉 はオリーブ灰色を呈し、施釉は体部内外面を漬 掛けており、口縁部外面からの釉垂れが認め られる。	底部は焼膨れに より、中央部に 穴が開くが完 存。口縁部は約 1/4が残る。重 ね焼きの痕跡が 内面と高台端部 に残る。
265	3区 D42CS		15.6 —	10Y7/1灰白 色。 緻密。	体部は緩やかに外上方へ 立ち上がり、中央下より で屈曲して段をつくる。 口縁部はやや外反し、端 部は丸くおさめる。	体部外面の段部までは回転ヘラケズリを施し、 上半は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強く ナデ調整する。体部内面の段も強いナデとヘラ ケズリによって仕上げる。釉は灰白色を呈し、 施釉は内外面全体に薄く塗掛けを行なう。	口縁部から体部 約1/3の破片。
266	3区 D42KR	灰釉陶器 大椀	18.0 —	5Y7/1灰白 色。 緻密。	体部は緩やかに外上方へ 立ち上がり、口縁端部は 外側に屈曲し丸くおさ める。	体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強く 外につまみ出しナデ調整する。釉は灰白色を呈 し、施釉は内外面全体に厚く塗掛けを行なう。	口縁部から体部 約1/3の破片。
267	3区 D42 CS・CT		17.5 5.8	7.5Y8/1灰白 色。 緻密、砂をや や含む。	丸みを帯びた底部に断面 長方形のやや内湾した高 い高台が付く。体部は緩 やかに外上方へ立ち上 がり、口縁部でやや外反 する。口縁端部は丸くお さめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台 を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉 はオリーブ黄色を呈し、施釉は外面は口縁から 体部全面にかけて塗掛け、内面は底部を残して 塗掛けする。	口縁部の一部を 欠損するが、ほ ぼ完存。重ね焼 きの痕跡が内面 と高台端部に残 る。
268	3区 D42CT		19.0 6.4	10GY8/1明 緑灰色。 緻密。	平坦な底部に断面長方形 の外に踏張った高い高台 が付く。体部は緩やかに 外上方へ立ち上がり、口 縁端部は外側に屈曲し丸 くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台 を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉 は灰オリーブ色を呈し、施釉は外面は口縁から 体部全面にかけて塗掛け、内面は底部を残して 塗掛けする。体部内面に釉滴が塗具から連続し て落ちた痕跡が認められる。	底部は約3/4、 口縁部は約2/3 が残る。重ね焼 きの痕跡が内面 と高台端部に残 る。
269	3区 D42KS	灰釉陶器 輪花皿	13.6 2.9	7.5Y7/1灰白 色。 緻密、砂をや や含む。	底部にやや内湾した短い 三日月高台が付く。体部 は浅く緩やかに外上方へ 立ち上がり、口縁部で外 反する。口縁端部は丸く おさめる。	体部外面下半は高台を貼り付けに伴う回転ナデ 調整。体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はや や強くナデ調整する。口縁端部を外面からヘラ 押しして輪花を作り出す。釉は灰色を呈し、施 釉は体部内外面を漬掛けする。	口縁部から体部 と高台までの破 片。
270	3区 D42GU	灰釉陶器 三足盤	17.9 3.3	5R7/1明赤灰 色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部か ら体部が上方に短く屈曲 し、さらに口縁部が下方 気味に外に屈曲して開 く。底部には3箇所獣脚 を付ける。口縁端部は丸 くおさめる。	底部外面は回転ヘラケズリ後にナデ調整。底部 外方から体部・口縁部にかけては回転成形・ナ デ調整。獣脚は粘土柱を取付け、ヘラケズリに よって面取りし、外下端にエグリをつけて仕上 げる。釉は灰オリーブ色を呈し、内面全体に厚 く施釉するが、外面には施釉しない。	底部約1/3と口 縁部の一部が残 る。

271	3区 D42 CT・DT CU・DU	灰釉陶器 小椀	9.8 3.1	7.5Y6/1灰 色。 緻密。	平坦な底部に断面三角形 の太い高台が付く。体部 は内湾しながら緩やかに 外上方へ立ち上がり、口 縁端部は丸くおさめる。	底部は回転系キリ後に高台を貼り付け、強く回転 ナデ調整。底部外面にはナデ残された回転系キリ 痕跡が認められる。体部から口縁部は回転成形・ ナデ調整。自然釉が体部内外面に付く。	底部は完存。口 縁部は約1/6が 残る。重ね焼き の痕跡が底部内 面の無釉部とし て残る。
272	3区 D42 JS・JT	灰釉陶器 椀	14.8 5.2	N8/灰白色。 緻密。	平坦な底部に断面三角形 の太い高台が付く。体部 は緩やかに外上方へ立ち 上がり、口縁部で外反す る。口縁端部は丸くおさ める。	底部外面は高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部 から口縁部は回転成形・ナデ調整。灰白色を呈す る一方からの自然釉が体部内外面に付く。	底部はほぼ完 存。口縁部も約 3/4が残る。重 ね焼きの痕跡が 底部内面の無釉 部として残る。
273	3区 D42JR	灰釉陶器 耳皿	7.8× (12) 3.6	10Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に内湾気味で 断面長方形に近い三日月 高台を付ける。浅く外上 方に開く口縁部の相対す る部分を内側に折り曲げ て耳皿とする。口縁端部 は丸くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を 貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ 調整、折り曲げた耳部には襷を設けない。基本的 に施釉は行なわれず、灰オリーブ色を呈する自然 釉が体部内面と耳部に薄く付く。	底部はほぼ完 存。口縁部も約 3/4が残る。
274	3区 D42 GT・HT	灰釉陶器 平瓶	胴部 径6.5 —	2.5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部で、断面台形 で端面が凹んだ高台が外 側に踏張る。体部は外上 方に緩やかに立ち上が り、肩部で屈曲する。	底部は高台貼り付けに伴うナデ調整。体部は回転 成形・ナデ調整、肩端部は折り曲げてヘラケズリ で角度を付ける。内面には回転成形痕跡が明瞭に 残る。釉は灰オリーブ色を呈し、施釉は肩部上面 に厚く施され、底部内面の端に口縁から落ちた灰 釉が付着する。	底部から体部 にかけて約1/2の 破片。肩部は屈 曲部以外残って いない。
275	3区 D42HS	灰釉陶器 大鉢	36.5 —	10Y8/1灰白 色。 緻密。	緩やかに内湾した口縁部 で、端部内外面に2条の沈 線が巡る。	外面下半は回転ヘラケズリ後、ナデ調整。内面回 転ナデ調整。基本的には施釉は施さないが、口縁 部内面に薄く自然釉が付着。	口縁部の破片が 2点。276と同一 個体。
276	3区 D42 HS・FS FU・ET EU		高台 部径 20.1 —	10Y8/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、断面長方 形のやや内湾した高台が 付く。体部は外上方に緩 やかに立ち上がる。	底部から体部外面にかけては回転ヘラケズリ、後 にナデ調整。高台は貼り付け、回転ナデ調整で仕 上げる。内面は丁寧なナデ調整。基本的に施釉は 施さない。	底部から体部 にかけての破片。 底部内面に墨擦 痕が明瞭に残 る。
277	3区 D42CT	灰釉陶器 壺	12.1 —	10Y7/1灰白 色。 緻密。	頸部は外上方に立ち上が り、口縁部で外反して広 がる。端部は断面撚形で 外傾した面をなす。	肩部に頸部を乗せて接合し、回転成形。調整は回 転ナデで、端部を外上方に強くつまみ上げると ともに、下方にも押し広げる。内外面に厚く施釉 し、釉垂れが認められる。一方からの強い火力を 受けており、この部分で釉が剥落している。釉色 はオリーブ黄色を呈する。	頸部から口縁部 の破片。
278	3区 D42FT		10.9 —	10Y7/1灰白 色。 緻密。	内湾する肩部に外傾する 頸部が直線的に立ち上が り、口縁部で外反して広 がる。端部は断面撚形 で、やや凹んだ面を作り 出す。	肩部は回転成形。肩部に頸部を乗せて接合し回転 ナデ調整で仕上げる。端部を外上方に強くつまみ 上げるとともに、下方にも押し広げて端面をな す。釉はオリーブ灰色を呈し、施釉は肩部に厚く 施され、頸部外面から内面にも薄く灰釉が掛か る。	肩部から口縁部 の破片。
279	3区 D42DJ		24.2 —	7.5Y7/2灰白 色。 緻密。	内湾する肩部に外傾する 頸部が緩やかに立ち上が り、口縁部で外反する。 端部は断面撚形で、やや 凹んだ面を作り出す。	肩部外面は縦方向の平行タタキ、内面はナデ調 整。肩部に頸部を差し込んで接合し、巻き上げ成 形、ナデ調整で仕上げる。端部を外上方につまみ 上げるとともに、下方にも強くつまみ出して端面 をなす。釉はオリーブ灰色を呈し、施釉は外面全 体に厚く施され、頸部内面まで施釉。	肩部から口縁部 の破片。280と 同一個体。
280	3区 D42ET		底部 径 16.8 —	7.5YR5/2灰 褐色。 緻密。	平坦な底部に体部が緩や かに立ち上がる。	粘土円盤を底部とし、巻き上げによって体部を成 形する。底部内外面はオサエ成形後に粗くナデ調 整。体部内外面は横ナデ調整。体部外面には釉垂 れ痕跡が残る。	底部から体部 にかけての破片。 底部外面端部に 焼台痕跡が残 り、その間から 釉が薄く掛か る。

池 1 出土緑釉陶器(図版26)

281	3区 D42DS	緑釉陶器 皿	15.8 —	2.5Y7/2灰黄 色。 緻密。	体部は浅く外上方に立ち 上がり、口縁部で外反す る。口縁端部は丸くおさ める。	体部下半は回転ヘラケズリ後にナデ調整。体部上 半から内面にかけて回転成形・ナデ調整。口縁部 は強くナデつけて外反させる。緑釉は施さず、生 地のままである。	口縁部から体部 約1/3の破片。
282	3区 D42CU		14.2 2.6	7.5Y8/1灰白 色。 密、やや軟 質。	底部は蛇の目高台で、体 部は浅く内湾気味に広が る。口縁端部は丸くおさ める。口縁部外面に1条の 沈線を巡らす。	高台はケズリ出し成形。体部外面から内面にか けては回転ナデ調整。底部内面はヘラミギ調整。 内外面全体に淡い灰白色を呈する緑釉を均質に施 す。	底部完存。口縁 部は約1/4が残 る。底部外面に 三叉トチンの痕 跡が残る。 平安京近郊窯産 (以下、京近郊産 とする)。
283	3区 D42CT		14.7 2.5	10YR8/2灰白 色。 密、軟質。	底部は断面逆台形の輪高 台で、体部は浅く内湾気 味に広がる。口縁端部は 丸くおさめる。口縁部外 面に1条の沈線を巡らす。	高台はケズリ出し成形。体部外面から内面にか けては回転ナデ調整。内外面全体ににぶい黄橙色を 呈する淡い緑釉を施す。	口縁部から高台 部約1/5の破 片。 京近郊産。

土器類 (図版26)

284	3区 D42 DS・DT	緑釉陶器 皿	15.0 3.0	5Y8/1灰白色。 緻密、やや微砂粒を含む。	底部は中央が凹んだ円盤高台で、体部は浅く内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体部下半まで及ぶ。体部外面上半から内面にかけては回転ナデ調整。底部内面はヘラミガキ調整。内外面全体にオリープ黄色を呈する淡い緑釉を施すが、底部外面はムラが激しい。	口縁部から高台部約1/5の破片。 京近郊産。
285	3区 D42CT		15.2 2.8	10Y5/1灰色。 緻密。	底部は外に踏張った断面方形の輪高台で、体部は浅く内湾気味に立ち上がる。口縁部は若干内側に屈曲させて外反し、端部は丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体部下半まで及ぶ。体部外面上半から内面にかけては回転ナデ調整。口縁部は強くナデつけて屈曲させる。内面は口縁部以外ヘラミガキ調整。内外面全体に灰オリープ色を呈する濃い緑釉を施すが、底部外面はムラが激しい。	約1/2が残る。 底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。 京近郊産。
286	3区 D42 CS・CT		16.0 3.2	5Y7/2灰白色。 緻密。	底部は断面方形の輪高台で、体部は浅く内湾気味に立ち上がる。口縁部は若干内側に屈曲させて外反し、端部は丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体部下半まで及ぶ。体部外面上半から内面にかけては回転ナデ調整。口縁部は強くナデつけて屈曲させる。内面は口縁部以外ヘラミガキ調整。内外面全体に浅黄色を呈する淡い緑釉を施すが、底部外面は薄い。	口縁部から高台部約1/6の破片。 京近郊産。
287			16.6 3.2	10YR8/3浅黄橙色。 緻密。	底部は断面方形の輪高台で、体部は浅く内湾気味に立ち上がる。口縁部は若干内側に屈曲させて外反し、端部は丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形。体部外面上半から内面にかけては回転ナデ調整。口縁部は強くナデつけて屈曲させる。内面は口縁部以外ヘラミガキ調整。内外面全体に暗オリープ灰色を呈する濃い緑釉を粗く施しており、ハケ塗りの痕跡がムラとなって明瞭に残る。	約2/3が残る。 底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。 京近郊産。
288	3区 D42FR		14.7 3.3	N6/灰色。 緻密、若干砂を含む。	底部は断面方形の輪高台で、体部は浅く立ち上がり、口縁部で内側に屈曲して稜線をなす。口縁は外反し、端部を丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体部下半まで及ぶ。体部外面上半から内面にかけては回転ナデ調整。体部稜線の下内外は若干の回転ヘラケズリで整える。内面は口縁部以外ヘラミガキ調整。内外面全体に緑釉を施すが、底部外面は薄い。	約1/3が残る。 底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。 京近郊産。
289	3区 D42CT		15.0 3.0	10Y6/1灰色。 緻密。	288に同じ。	高台は輪高台貼り付けヘラケズリ出しで、ナデ調整で仕上げる。体部外面上半から内面にかけては回転ナデ調整。体部外面稜線の上下は若干の回転ヘラケズリで整える。内面は口縁部以外ヘラミガキ調整。内外面全体にオリープ黄色を呈する緑釉を施すが、底部外面は薄い。	約1/3が残る。 底部内面と高台部端部に重ね焼きの痕跡が残る。 京近郊産。
290	3区 D42CU	緑釉陶器 段皿	14.0 1.8	7.5Y7/1灰白色。 緻密。	平坦な底部に、断面方形の高台が付く。体部は浅くやや外反しながら広がり、体部内面に段を設ける。口縁部はほぼ水平で、端部を丸くおさめる。	底部は高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部から口縁部は回転成形、体部内面の段は回転ヘラケズリ成形で、最後に回転ナデ調整で仕上げる。内外面全体にオリープ黄色を呈する緑釉を均質に施す。	約1/4の破片。 尾張産。
291	3区 D42CT		14.7 1.7	10Y6/1灰色。 緻密。	平坦な底部に、断面方形でやや内湾気味の高台が付く。体部は浅くやや外反しながら広がり、体部内面に段を設ける。口縁部はほぼ水平で、端部を丸くおさめる。	底部は回転ヘラケズリ調整後に高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部から口縁部は回転成形、体部内面の段は回転ヘラケズリ成形で、最後に回転ナデ調整で仕上げる。内外面全体にオリープ黄色を呈する緑釉を施す。	底部完存。体部は約1/2が残る。底部内外面に三叉トチンの痕跡が残る。 尾張産。
292	3区 D42GR		14.5 2.6	2.5Y8/3淡黄色。 緻密。	平坦な底部に、外に踏張り端部に沈線が巡る高台が付く。体部は浅く立ち上がり、体部内面に段を設ける。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。	底部は回転系キリ後に高台を貼り付け、回転ナデ調整。底部外面に回転系キリ痕跡が残る。体部から口縁部は回転成形、体部内面の段は回転ヘラケズリで作り出す。緑釉はまず内外面全体に薄く施し、内面から体部外面・高台まで重ね塗りして施釉を濃くする。	底部完存。体部は約1/4が残る。底部内外面に三叉トチンの痕跡が残る。 近江産。
293	3区 D42 DS・ES		18.8 3.3	2.5Y7/2灰黄色。 緻密、やや微砂粒を含む。	やや丸みを帯びた底部に、外に踏張った断面方形の高台が付く。体部は浅く立ち上がり、体部内面に段を設ける。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。	底部は高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部から口縁部は回転成形、体部内面の段は回転ヘラケズリ成形で、最後に回転ナデ調整で仕上げる。内外面全体に緑釉を均質に施す。	底部は約1/4、口縁部は一部が残る。 尾張産。
294	3区 D42ES	緑釉陶器 椀	11.2 4.1	7.5Y6/1灰色。 緻密。	平坦な底部に、外に踏張り端部に沈線が巡る高い高台が付く。体部はやや内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。	底部は回転系キリ後に高台を貼り付け、回転ナデ調整。底部外面に回転系キリ痕跡が残る。体部から口縁部は回転成形、回転ナデ調整で仕上げる。体部はまず内外面全体に薄く施し、内面から体部外面・高台まで重ね塗りして施釉を濃くする。	底部完存。体部は約1/2が残る。底部内外面に三叉トチンの痕跡が残る。 近江産あるいは美濃産か。
295	3区 D42FR		12.4 3.8	10Y8/1灰白色。 緻密。	底部に断面方形の高台が付く。体部は外上方に緩やかに立ち上がり、口縁部でやや外反する。端部は丸くおさめる。	底部は高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部から口縁部は回転成形、回転ナデ調整で仕上げる。ややムラがあるが内外面全体に厚く緑釉を施しており、貫入がはいる。	口縁部から高台部約1/3の破片。 尾張産。

296	3区 D42FR	緑釉陶器 碗	11.9 3.7	10Y7/1灰白色。 緻密。	底部高台は断面逆台形で、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。体部中央で内側にやや屈曲して稜をなし、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体部まで及ぶ。高台端面に回転糸キリ痕跡が若干残る。体部外面稜線の上下は回転ヘラケズリで整える。口縁部から内面にかけて回転成形、回転ナデ調整。内面から体部外面に薄く緑釉を施す。	底部完存。口縁部は約2/3が残る。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。京近郊産。
297	3区 D42HR		11.8 3.5	N6/灰色。 緻密。	底部は中央が凹んだ円盤高台で、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。	高台は切り離し後に回転ヘラケズリ調整。体部外面から内面にかけて回転成形、回転ナデ調整。口縁端部を若干外へつまみ出す。内面から体部外面に厚く緑釉を施す。	口縁部約1/4を欠損する。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。京近郊産。
298	3区 D42 CS・CT		12.6 4.1	7.5Y8/2灰白色。 密、やや軟質。	底部は蛇の目高台で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめ、口縁部外面に1条の沈線を巡らす。	高台はケズリ出し成形。体部外面から内面にかけては回転ナデ調整。底部内面はヘラミガキ調整。内外面全体に灰オリーブ色を呈する淡い緑釉を均質に施す。	底部完存。口縁部は約1/3が残る。282と同一技法。京近郊産。
299	3区 D42CU		13.2 4.3	N6/灰色。 緻密。	底部は蛇の目高台で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。外面は不明瞭だが、体部内面に段を設けて稜碗とする。	高台はケズリ出し成形で、高台端面に回転糸キリ痕跡が若干残る。体部外面上半から内面にかけては回転ナデ調整。体部外面稜線の下半は回転ヘラケズリで整え、内面の段は強いナデ調整で作る。内外面全体に暗オリーブ色を呈する釉を濃く施すが、ムラが多い。	底部完存。口縁部は約1/3が残る。京近郊産。
300	3区 D42ES		13.2 4.1	N7/灰白色。 緻密。	底部は蛇の目高台で、体部は外上方に立ち上がる。体部に明確な稜を作りだし、口縁部は外反し、口縁端部を丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形。回転ナデ調整後に、体部外面稜線の上下は回転ヘラケズリで整える。口縁部から内面にかけて回転ナデ調整。内面の段は強いナデ調整で整え、内面は丁寧なヘラミガキ調整。緑釉は均質に濃く施釉するが、底部施釉は部分的である。	約1/3が残る。底部内面に三叉トチンの痕跡が残る。京近郊産。
301	3区 D42DR		14.4 4.3	10Y6/1灰色。 緻密、赤色の小礫をやや含む。	底部は蛇の目高台で、体部は外上方に立ち上がる。口縁部は外に屈曲し、端部を丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体部下端に及ぶ。体部外面から内面にかけて回転ナデ調整。口縁は強く外につまみ出す。灰オリーブ色を呈する釉を内面から体部外面にかけて均質に施釉するが、底部施釉は一文字状となる。	底部完存。口縁部は一部が残る。底部内面に「一」ヘラ記号あり。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。京近郊産。
302	3区 D42FR		15.0 4.4	5Y7/2灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に蛇の目高台が付く。体部は外上方に直線気味に立ち上がり、口縁でやや外反する。端部は丸くおさめる。	底部は高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部外面下半は回転ヘラケズリ後にナデ調整。口縁部から内面にかけて回転成形、内面は丁寧なヘラミガキ調整。釉は内外面全体に濃い緑釉を均質に施す。	約1/4の破片。底部内外面に三叉トチンの痕跡が残る。尾張産。
303	3区 D42HR		14.9 4.7	5Y7/1灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に、やや内湾した断面方形の高い高台が付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がり、体部中央で内側に屈曲して稜をなす。口縁は外反して、端部を丸くおさめる。	底部は回転ヘラケズリで、高台を貼り付け回転ナデ調整。体部外面稜線の上下は回転ヘラケズリで整える。口縁部から内面にかけて回転ナデ調整。内面の段はヘラ成形、回転ナデ調整で、内面全体をヘラミガキ調整する。緑釉は内外面全体に均質に施される。	底部約1/2、体部約1/3の破片。底部内外面に三叉トチンの痕跡が残る。尾張産。
304	3区 D42DS		15.2 4.1	N8/灰白色。 緻密。	平坦な底部に、断面方形でやや内湾気味の高台が付く。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部で外に屈曲する。端部は丸くおさめる。	底部は高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部外面から内面にかけて回転ナデ調整か。内面はヘラミガキ調整。釉は内外面全体に緑釉を均質に施し、貫入が認められる。	約1/4の破片。底部内外面に三叉トチンの痕跡が残る。尾張産。
305	3区 D42CU		17.5 6.5	7.5Y6/1灰色。 緻密。	底部は蛇の目高台で、体部は外上方に緩やかに立ち上がる。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体部下端に及び、ヘラミガキ調整で仕上げる。体部外面から内面にかけて回転ナデ調整。口縁は強くナデで外につまみ出す。底部から体部内面にかけてヘラミガキ調整。釉はオリーブ黄色を呈し、内外面全体に淡く施釉するが、若干ムラがある。	底部完存。口縁部は約1/3残る。京近郊産。
306	3区 D42 CR・CS DR・DS		17.9 5.9	10Y6/1灰色。 緻密。	底部は断面方形の短い輪高台で、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。口縁端部外面に1条の沈線を巡らす。外面は不明瞭だが、体部内面に段を設けて稜碗とする。	高台はケズリ出し成形で、体部外面稜線の下半まで回転ヘラケズリで調整する。体部上半から内面までは回転成形、口縁外面の沈線および体部内面の段はヘラで成形し、回転ナデ調整で仕上げる。施釉はオリーブ灰色を呈し、内外面全体に淡く施すが、底部外面の施釉は薄い。	約1/3の破片。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。京近郊産。

土器類 (図版26)

307	3区 D42JR	緑釉陶器 椀	17.0 5.2	N7/灰白色。 緻密。	底部は断面方形の短い輪高台で、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。外面は不明瞭だが、体部内面に段を設けて稜椀とする。	高台はケズリ出し成形で、体部外面から内面までは回転成形。体部外面稜線の下半は回転ヘラケズリで整え、内面の段はヘラで成形し回転ナデで仕上げる。緑釉は内外面全体に淡く施すが、底部外面の施釉は部分的であり全体にムラも多い。	底部は約1/3、口縁部は部分的に残る。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。京近郊産。
308	3区 D42JU		17.5 5.4	10Y6/1灰色。 緻密、やや微砂を含む。	底部は断面方形の短い輪高台で、体部は緩やかに外上方に立ち上がり、中央で内側に屈曲して稜をなす。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。体部内面の段は2段設けている。	高台はケズリ出し成形で、体部外面稜線の上下まで回転ヘラケズリで調整する。口縁部から内面までは回転成形、体部内面の段はヘラで2段成形し、回転ナデ調整で仕上げる。内面には全体にヘラミガキ調整を施す。緑釉はややムラがあるが内外面全体に施す。	約1/3の破片。京近郊産。
309	3区 D42IU		16.5 6.3	5Y8/2灰白色。 緻密。	平坦な底部に外に踏張り端面が外傾する高い高台が付く。体部は内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部で外反する。端部は丸くおさめる。	底部から体部外面下半は回転ヘラケズリ調整で、高台貼り付け後にナデ調整。口縁部から内面にかけて回転成形・ナデ調整。緑釉は内外面全体に淡く施すが、非常にムラが多く、口縁から下に釉が薄く流れている。	約1/2が残る。底部外面に三叉トチンの痕跡が残る。美濃産か。
310	3区 D42ET		18.6 5.7	2.5Y7/1灰白色～2.5Y7/4浅黄色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に、やや内湾した断面方形の高い高台が付く。高台端面には沈線が巡る。体部は外上方に直線気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。	底部は高台貼り付け後に、回転ナデ調整。体部外面下端には回転ヘラケズリ調整が認められる。体部内外面は回転成形で、底部内面はナデ調整で仕上げる。緑釉は内外面全体に淡く施すが、ムラが多く口縁部の釉は飛んでいる。	底部は約1/4の破片、口縁部は部分的に残る。底部外面に三叉トチンの痕跡が残る。美濃産か。
311	3区 D42FR		19.2 6.4	7.5Y7/1灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に、やや内湾した断面方形の高台が付く。体部は外上方に緩やかに立ち上がり、口縁部でやや外反し、端部は丸くおさめる。	底部は高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部外面から内面にかけて回転成形後に丁寧なヘラミガキ調整。緑釉は内外面全体に均質に施す。	底部は約3/4、口縁部は約1/2残る。底部内外面に三叉トチンの痕跡が残る。尾張産。
312	3区 D42DR		19.0 6.4	5Y8/2灰白色。 緻密。	底部は蛇の目高台で、体部は外上方に緩やかに立ち上がる。口縁部は強く外反し、端部を丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体部下端に及ぶ。体部外面上半から内面にかけて回転成形。口縁は強くナデで外につまみ出す。底部から体部内面にかけてヘラミガキ調整。釉はオリブ黄色を呈し、内外面全体に淡く均質に施釉する。	底部は約1/3、口縁部は部分的に残る。京近郊産。
313	3区 D42ER		20.8 7.6	2.5Y8/3淡黄色。 緻密。	底部は断面方形の輪高台で、体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体部下半に及ぶ。体部は粗いヘラミガキ調整で仕上げる。口縁部から内面にかけて回転成形。口縁は強くナデで外につまみ出す。底部内面から体部内面は粗いヘラミガキ調整。緑釉は内外面全体に施すが、ムラが多い。	底部ほぼ完存。口縁部は一部が残る。底部内外面に三叉トチンの痕跡が残る。京近郊産。
314	3区 D42DR	緑釉陶器 大椀	25.3 8.2	N8/灰白色。 緻密。	底部は断面方形の輪高台で、体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさめ、内側に1条の弱い沈線を巡らす。	高台はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体部下半に及び、丁寧なナデ調整で仕上げる。口縁部から内面にかけて回転成形。底部内面から体部内面は丁寧なヘラミガキ調整。釉は灰オリブ色を呈し、内外面全体に均質に施す。	底部で約1/3、口縁部は部分的に残る。高台端面に三叉トチンの痕跡が残る。京近郊産。
315	3区 D42IS	緑釉陶器 輪花皿	14.4 3.4	N6/灰色。 緻密。	底部は断面逆台形の輪高台で、体部は浅く外上方に立ち上がり、体部中央でやや内側に屈曲して弱い稜をなす。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。口縁端部には輪花を作る。	高台はケズリ出し成形。体部外面上半から内面にかけては回転ナデ調整。体部稜線の上下は若干の回転ヘラケズリで整える。内面は口縁部以外ヘラミガキ調整。口縁端部を外側からヘラで押して輪花を表現する。緑釉は底部外面以外に施す。	約1/4の破片。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。京近郊産。
316	3区 D42DS	緑釉陶器 輪花椀	13.3 4.6	10Y8/1灰白色。 緻密。	底部は断面方形の輪高台で、体部は緩やかに外上方に立ち上がり、体部中央でやや内側に屈曲して弱い稜をなす。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。口縁端部には四輪花を作る。	高台はケズリ出し成形。体部外面上半から内面にかけて回転ナデ調整。体部稜線の上下は若干の回転ヘラケズリで整える。内面は口縁部以外ヘラミガキ調整。口縁端部を外側からヘラで押して輪花を表現する。緑釉は底部外面以外に施すが、ややムラがある。	底部完存。口縁部は約2/3残る。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。京近郊産。
317	3区 D42CU	緑釉陶器 輪花皿	14.4 3.1	N6/灰色。 緻密、白色の微砂を少量含む。	底部には外に踏張った高台が付く。高台端面には沈線が巡る。体部は外上方に浅く立ち上がり、口縁部でやや外反する。端部は丸くおさめる。体部外面に沈線による輪花を表現する。	底部は高台を貼り付け、ナデ調整。体部から内面にかけて回転成形、内面の底部と体部の境界に強いナデで段を作る。体部外面はヘラで濃く施釉する。	口縁部から高台部まで約1/6の破片。美濃産か。

318	3区 D42 ER・ES FR・FS	緑釉陶器 輪花碗	14.0 5.6	N6/灰色。 緻密、白色の 微砂を少量含 む。	底部には外に踏張った高 台が付く。体部は外上 方に緩やかに立ち上 がり、口縁部でやや外 反する。端部は丸くお さめる。端部の切り込 みと体部外面の沈線で 輪花を表現する。	底部は高台を貼り付け 、ナデ調整。体部から 内面にかけて回転成形 ・ナデ調整。内面の底 部と体部の境界に強い ナデで弱い段を作る。 口縁端部の内側から切 り込みを入れ、体部外 面はヘラで沈線を縦に いれて四輪花とする。 緑釉は内外面全体に濃 く施釉するが、底部は 薄い。	底部から体部約1/3の 破片。底部内外面に三 叉トチンの痕跡が残 る。 美濃産か。
319	3区 D42GR	緑釉陶器 小杯	8.0 2.8	5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部から体部が 緩やかに立ち上がり、 口縁部でやや外反す る。端部は丸くおさめ る。	底部は回転系キリ、未 調整。体部から内面に かけて回転成形、体部 外面はナデ調整で仕上 げる。緑釉は底部外面 以外に淡く施すが、ム ラが激しい。	底部完存。口縁部は約 1/3残る。 京近郊産。
320	3区 D42 IS・IT JS・JT		8.4 3.1	7.5Y7/1灰白 色。 緻密。	319に同じ。	底部は回転系キリ、未 調整。体部から内面に かけて回転成形、体部 外面はナデ調整で仕上 げる。緑釉は底部外面 以外に淡く施す。	約1/3の破片。 底部内面に重ね焼 きの痕跡が残る。 京近郊産。
321	3区 D42FR		9.4 3.0	N6/灰色。 緻密。	平坦な底部から体部が 緩やかに立ち上がり、 口縁部は丸くおさめ る。	底部は回転系キリ、未 調整。体部から内面に かけて回転成形、体部 外面はナデ調整で仕上 げる。緑釉は底部外面 以外に濃く施すが、一 部底部外面までかかる 。	底部約1/2、口縁部は 約1/3残る。底部内 面に重ね焼きの痕跡 が残る。 京近郊産。
322	3区 D42ER		9.2 2.7	10Y7/1灰白 色。 緻密、やや微 砂を含む。	平坦な底部から体部が 緩やかに立ち上がり、 口縁部でやや外反す る。端部は丸くおさめ る。	底部は回転系キリ、未 調整。体部から内面に かけて回転成形、体部 外面はナデ調整で仕上 げる。緑釉は底部外面 以外に淡く施すが、一 部底部外面までかかる 。内面の釉は自然釉が 付着し、発色が乱れて いる。	底部ほぼ完存。 口縁部は一部が残 る。 京近郊産。

池1 出土緑釉陶器・輸入陶磁器(図版27・図版73・図版76)

323	3区 D42FR	緑釉陶器 陰刻花文 碗	15.0 4.2	7.5Y8/2灰白 色。 緻密。	体部内面の四方と底部 内面に陰刻花文をもつ 碗。底部に蛇の目高台 が付く。体部は緩やか に外上方に立ち上がり 、口縁端部は丸くおさ める。	底部はケズリ出し成形 。体部から内面にか けて回転成形、丁寧な ナデ調整で、内面底部 から体部にかけてはヘ ラミガキを施す。緑釉 は内外面全体に淡く施 釉するが、口縁部で若 干の釉垂れが生じる。	口縁から高台にか けて約1/4の破片。底 部内面に三叉トチンの 痕跡が残る。 京近郊産。
324	3区 D42HR	緑釉陶器 陰刻花文 輪花皿	15.0 3.0	10Y7/1灰白 色。 緻密。	口縁部内面の四方と底 部内面に陰刻花文をも つ輪花稜皿。やや丸み を帯びた底部に、断面 方形の内湾気味の高台 が付く。体部は浅く外 上方に広がり、中央部 で内側に屈曲して稜を なす。口縁部は外反し 、端部は丸くおさめ る。口縁花文の間に四 輪花を配する。	底部は回転ヘラケズリ 後に高台を貼り付け、 回転ナデ調整。体部稜 線の上下はヘラケズリ で整え、内面の段もヘ ラで設ける。口縁部か ら内面にかけて回転ナ デ調整、内面は後にヘ ラミガキ調整。口縁端 部を外側からヘラ押し して輪花を作る。緑釉 は内外面全体に施すが 、ムラが多い。	底部約1/2、口縁部約 1/4の破片。 尾張産。
325	3区 D42ER	緑釉陶器 陰刻花文 輪花段皿	17.8 3.4	7.5Y8/1灰白 色。 緻密。	体部内面の四方に陰刻 花文をもつ輪花段皿。 やや丸みを帯びた底部 に、外に踏張った断面 方形の高い高台が付く 。体部は浅く外反気味 に広がり、口縁端部は 丸くおさめる。体部内 面には段を作り、花文 の間に四輪花を配す る。	底部は回転ヘラケズリ 後に高台を貼り付け、 回転ナデ調整。体部内 面の段もヘラケズリで 設ける。口縁部から内 面にかけて回転ナデ調 整、口縁端部を外側か らヘラ押しして輪花を 作る。緑釉は内外面全 体に均質に施す。	底部約1/2、口縁部約 1/3の破片。底部内 面に三叉トチンの痕 跡が残る。 尾張産。
326	3区 D42 DR・DS DT・ER ES・ET FR・FS ・FT	緑釉陶器 陰刻花文 輪花皿	16.2 2.3	7.5Y7/2灰白 色。 緻密。	口縁部内面の四方と底 部内面に陰刻花文をも つ皿。平坦な底部に、 断面方形の高台が付く 。体部は浅く内湾気味 に外方に広がり、口縁 端部は丸くおさめる。 欠損するが、口縁花文 の間に四輪花を配す る可能性が高い。	底部は回転ヘラケズリ 後に高台を貼り付け、 回転ナデ調整。口縁部 から内面にかけて回転 ナデ調整、口縁部は強 くナデつけて形を整え る。緑釉は内外面全体 に薄く施すが、ムラが 多い。	底部約1/2、口縁部は 部分的に残る。 尾張産。
327	3区 D42 DT・DU		14.8 3.0	10Y7/1灰白 色。 緻密。	口縁部内面の四方と底 部内面に陰刻花文をも つ輪花皿。やや丸みを 帯びた底部に、断面方 形の高台が付く。体部 は浅く外上方に広がり 、口縁部で内側に弱く 屈曲して、端部は上に やや肥厚する。口縁花 文の間に四輪花を配 する。	底部は回転ヘラケズリ 後に高台を貼り付け、 回転ナデ調整。体部外 面は丁寧なヘラミガキ 調整。口縁部から内面 にかけて回転ナデ調整 、口縁端部を外側か して輪花を作る。釉は オリーブ黄色を呈し、 内外面全体に施すが、 ややムラがある。	底部約1/2、口縁部約 1/4の破片。底部内 外面に三叉トチンの痕 跡が残る。 尾張産。

土器類 (図版27・73・76)

328	3区 D42 FS~HS FT~HT	緑釉陶器 陰刻花文 輪花段皿	21.7 4.0	10Y7/1灰白色。 緻密、白色微砂をやや含む。	体部内面の五方に陰刻花文をもつ輪花段皿。やや丸みを帯びた底部に、外に踏張った断面方形の高い高台が付く。体部は浅く外反気味に広がり、口縁端部は丸くおさめる。体部内面には段を作り、花文の間に五輪花を配する。	底部は回転ヘラケズリ後に高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部内面の段もヘラケズリで設ける。体部外面から内面にかけて回転ナデ調整、底部内面は後にヘラミガキ調整。口縁端部を外側からヘラ押しして輪花を作る。緑釉は内外面全体に施すが、ムラが激しい。	底部約1/3、口縁部約1/5の破片。底部外面に三叉トチンの痕跡が残る。尾張産。
329	3区 D42 CT・CU	緑釉陶器 陰刻花文 小椀	11.0 —	7.5Y8/2灰白色。 緻密。	体部内面に陰刻花文を配する小椀。内湾気味に立ち上がる体部から、口縁部が外反し端部を丸くおさめる。	体部は回転成形、回転ナデ調整。口縁部は強くナデつけ外反させる。緑釉は全体に均質に施釉。貫入が激しい。	口縁部から体部約1/5の破片。尾張産。
330	3区 D42 CS・DS	緑釉陶器 陰刻花文 大椀	25.2 7.8	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	体部内面の四方と底部内面に陰刻花文をもつ大椀。底部に蛇の目高台が付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁部で若干内側に屈曲させる。端部は丸くおさめる。	底部は高台貼り付け、回転ナデ調整で仕上げる。体部から内面にかけて回転成形、丁寧なナデ調整で、内面は後に丁寧なヘラミガキを施す。口縁部は強くナデつけて仕上げる。釉はオリブ黄色を呈し、内外面全体に均質に施釉し、貫入が認められる。	底部約1/3、口縁部から体部にかけて約1/8の破片。底部内外面に三叉トチンの痕跡が残る。尾張産。
331	3区 D42FT	緑釉陶器 陰刻花文 椀	高台部 7.6 —	10Y7/1灰白色。 緻密、白色微砂を若干含む。	底部内面に陰刻花文をもつ椀底部。やや丸みを帯びた底部に、断面方形の高台が付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	底部はケズリ出し成形の輪高台で、体部外面下半まで回転ヘラケズリが及ぶ。底部内面にはヘラミガキを施す。緑釉は内外面全体に濃く施すが、ムラが多い。	底部約1/4の破片。 京近郊産。
332	3区 D42ER	緑釉陶器 蓋	23.0 (5.0)	7.5Y8/2灰白色。 緻密。	平坦な天井部の中心に、宝珠形のツマミが付く。体部は外下方に緩やかに下がる。口縁端部は丸く、下方に肥厚する。	天井部外面は回転ヘラケズリで、ツマミを貼り付け回転ナデで成形・調整する。天井部内面は回転ナデ調整。口縁端部は回転ナデで、下方につまんで肥厚部を成形する。緑釉は内外面全面に淡く施釉するが、剥落が激しい。	天井部から体部の破片と口縁部破片。合成復元。 京近郊産。
333	3区 D42GR	緑釉陶器 壺	高台部 5.9 —	2.5Y7/2灰黄色。 緻密、微砂をやや含む。	平坦な底部に、外に踏張った断面方形の高い高台が付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内面には轆轤目が明瞭に残る。	轆轤で体部を挽いた後に切り離し、高台を貼り付け回転ナデで仕上げる。体部下端は回転ヘラケズリを施す。緑釉は体部に淡く施すが、表面が黒色化する部分が多くみられる。また、淡い肌色の発色が点在する。	底部から体部の破片。 防長産。
334	3区 D42 ES・ET FS・FT	緑釉陶器 唾壺	18.6 —	10Y8/2灰白色。 緻密、微砂を若干含む。	口縁部は緩やかに外上方に立ち上がり、端部でやや外反し丸くおさめる。	回転成形、回転ナデ調整。口縁端部は強く外にナデつけて外反させる。口縁内面はヘラミガキ調整。緑釉は内外面に施釉し、貫入が認められる。	口縁部破片。 尾張産。
335	3区 D42 ER・ES FR・FS	緑釉陶器 香炉	12.6 —	10Y6/1灰色。 緻密。	脚部は緩やかに外下方に開き、端部外側に肥厚させて端面を作る。スカシを設けるが形態不明。底部はやや丸みを帯び、体部は内湾気味に立ち上がる。体部上下端には沈線が巡る。口縁部は内側に屈曲して上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。	体部から口縁部および脚部は回転成形後に回転ナデ調整。底部は脚部と体部を付着した後に回転ナデ調整で仕上げる。釉は内外面全体に濃く施釉するが、ややムラがある。	口縁部の破片と体部から脚部の破片。合成復元。 尾張産。
336	3区 D42 KO・KP LO・LP	白磁 椀	14.9 4.4	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	底部は蛇の目高台で、体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁端部は外側に玉縁状に肥厚させる。	底部はケズリ出しで成形し、体部外面下半まで回転ヘラケズリを施す。口縁端部は外側に折り曲げて玉縁を形成し、回転ナデで仕上げる。施釉は内面から体部外面・高台側面まで厚く施され、底部外面にも部分的に釉が付着する。釉の白色はかなり発色が良い。	底部から口縁にかけて約1/4が残る。 邢窯・定窯系。 椀Ⅰ-1類。
337	3区 D42GU	白磁 輪花椀	18.8 7.7	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	平坦な底部に面取りした断面五角形の高台が付く。体部は内湾気味に外上方へ緩やかに立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。切り込みを施して五輪花椀とする。	底部はケズリ出しで成形し、体部外面下半まで回転ヘラケズリを施す。体部から内面は回転ナデで仕上げる。口縁端部に五箇所の切り込みを入れ、体部外面にも縦の切り込みを入れ左側を削り取って輪花を表現する。施釉は内面から体部外面まで厚く施される。釉はややあせているが光沢は良好。	底部中央部と口縁・体部の一部が欠損する。 邢窯・定窯系。 椀Ⅰ-2b類。
338	3区 D42AQ	青磁 小椀	11.7 —	7.5Y6/1灰色。 緻密。	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で若干外反する。端部は丸くおさめる。	回転成形、回転ナデ調整。口縁部はやや強くナデつける。体部外面には轆轤目が残るが、内面のナデ調整は丁寧に施す。釉は灰オリブ色を呈し、厚く内外面に施し、内面には斑点状の発色が認められる。	口縁部から体部の破片。 越州窯系。 小椀Ⅱ類。

339	3区 D42LT	青磁 碗	14.7 —	10Y6/1灰 色。 緻密。	体部は直線気味に外上方 に立ち上がり、口縁端部 は丸くおさめる。	回転成形、回転ナデ調整。口縁部はやや強くナ デつける。体部外面には轆轤目が残るが、内面 のナデ調整は丁寧に施す。釉は灰オリーブ色を 呈し、厚く内外面に施釉する。	口縁部から体部 の破片。 越州窯系。 碗 I-1類。
340	3区 D42CS		高台 部径 6.4 —	5Y7/1灰白 色。 緻密。	底部は蛇の目高台で、体 部は外上方に直線気味に 立ち上がる。	底部はケズリ出しで成形し、体部は回転ナデ調 整。釉は灰オリーブ色を呈し、内面から底部外 面まで全面に厚く施す。	底部から体部の 破片。石敷遺構 1出土と接合。 高台外端部に目 跡が付く。 越州窯系。 碗 I-1類。
341	3区 D42FR	青磁 輪花碗	16.6 —	N7/灰白色。 緻密。	底部は幅の狭い蛇の目高 台で、体部は外上方に直 線気味に立ち上がる。口 縁部でやや外反し、端部 は丸くおさめる。切り込 みを施して輪花碗とす る。	底部はケズリ出しで成形し、体部から内面は回 転ナデで仕上げる。口縁端部に切り込みを入 れ、体部外面にも縦の切り込みを入れて輪花を 表現する。釉はオリーブ灰色を呈し、内面から 底部外面まで全体に厚く施される。	口縁部と体部か ら底部の破片で 復元。高台外端 部に目跡が付く。 越州窯系。 碗 I-2b類。
342	3区 D42 ES・FS	青磁 碗	16.8 —	N7/灰白色。 緻密。	体部は直線気味に外上方 に立ち上がり、口縁端部 は丸くおさめる。	回転成形後に、内外面に丁寧な回転ナデ調整。 口縁部はやや強くナデつける。釉は灰色を呈 し、厚く内外面に施釉する。	口縁部から体部 の破片。 越州窯系。 碗 I-1類。
343	3区 D42CS	青磁 輪花碗	16.5 —	N7/灰白色。 緻密。	体部は内湾気味に外上方 に立ち上がり、口縁部で 強く外反する。口縁端部 は丸くおさめる。端部に 切り込みを入れて輪花碗 とする。	回転成形後に、内外面に丁寧な回転ナデ調整。 口縁部は強くナデつけて外反させる。口縁端部 に切り込みを入れて輪花を表現する。釉はオリ ーブ灰色を呈し、厚く内外面に施釉する。	口縁部から体部 の破片。 越州窯系。 碗 I-2b類。
344	3区 D42ER		6.5 —	N6/灰色。 緻密。	丸みを帯びた底部に断面 逆台形の輪高台が付く。 体部は緩やかに立ち上 がる。内面の底部と体部 の境界に沈線が巡る。体 部外面に切り込みを施し て輪花碗とする。	底部はケズリ出しで成形し、体部から内面は回 転ナデで仕上げる。体部外面に縦の切り込みを 入れて輪花を表現する。釉は灰色を呈し、内面 から底部外面まで全体に厚く施し、高台端部は 釉を削り取る。	底部から体部の 破片。高台外端 部に目跡が付く。 越州窯系。 碗 I-2b類。
345	3区 D42IR	青磁 大碗	底部 径9.0 —	7.5Y6/1灰 色。 緻密。	中央がやや凹んだ平高台 から、体部が緩やかに外 上方に立ち上がる。	切り離し後に、外底をヘラナデ調整。体部は回 転成形で、体部外面に轆轤目が明瞭に残る。内 面はナデ調整。釉はオリーブ色～灰白色を呈 し、内面から体部外面上半部まで厚く施され、 体部外面下端から高台側面までは化粧掛けのま まである。底部外面は施釉しない。	底部から体部の 破片。底部内外 面に目跡が付く。 越州窯系。 大碗 I-5類。
346	3区 D42ES	褐釉陶器 壺	— —	N6/灰色。 緻密。	直立した短い頸部から、 口縁が外に強く屈曲す る。端部は丸くおさめ る。	回転成形で、口縁部は強く外につまみ出して形 作る。ムラのある厚いオリーブ灰色を呈する釉 を口縁から頸部にかけて内外面に施釉する。	口縁部から頸部 の破片。 輸入陶磁器。
710	3区 D42 DS・DT	白磁 碗	— —	5Y8/1灰白 色。 緻密。	口縁部はやや外反し、端 部は丸くおさめる。	口縁部は回転ナデ。施釉は内外面に厚く施され る。釉はややあせているが光沢は良好。	口縁部破片。 邢窯・定窯系。 I-2類。
711	3区 D42FR		— —	5Y8/1灰白 色。 緻密。	口縁端部は外側に若干玉 縁状に肥厚させる。	口縁端部は外側に肥厚させて玉縁を形成し、回 転ナデで仕上げる。施釉は内外面に厚く施され る。釉はややあせているが光沢は良好。	口縁部破片。 邢窯・定窯系。 I-1類。
712	3区 D42DS		— —	7.5Y8/1灰白 色。 緻密。	体部は外上方へ緩やかに 立ち上がり、口縁部でや や外反する。口縁端部は 丸くおさめる。	体部から内面は回転ナデで仕上げる。施釉は内 から体部外面まで厚く施され面。釉はややあ せているが光沢は良好。	口縁部から体部 にかけての破 片。 邢窯・定窯系。 I-2b類か。
713	3区 D42 CS・CT		— —	5Y8/1灰白 色。 緻密。	口縁端部は丸くおさめ る。	口縁部は回転ナデ。施釉は内外面に厚く施され る。釉はややあせているが光沢は良好。	口縁部破片。 邢窯・定窯系。 I-2類。
714	3区 D42 DS・ES		— —	5Y8/1灰白 色。 緻密。	口縁端部は外側に玉縁状 に肥厚させる。	口縁端部は外側に折り曲げて玉縁を形成し、回 転ナデで仕上げる。施釉は内外面に厚く施され る。釉はややあせているが光沢は良好。	口縁部破片。 邢窯・定窯系。 I-1類。
715	3区 D42HS		— —	7.5Y8/1灰白 色。 緻密。	体部は外上方へ緩やかに 立ち上がり、口縁部でや や外反する。口縁端部は 丸くおさめる。	体部から内面は回転ナデで仕上げる。体部外面 には轆轤痕跡が明瞭に残る。施釉は内面から体 部外面まで厚く施される。釉の光沢は良好。	口縁部から体部 にかけての破 片。 邢窯・定窯系。 I-2b類か。
716	3区 D42 DS・DT		— —	5Y8/1灰白 色。 緻密。	口縁端部は外側に玉縁状 に肥厚させる。	口縁端部は外側に折り曲げて玉縁を形成し、回 転ナデで仕上げる。施釉は内外面に厚く施され る。釉はややあせているが光沢は良好。	口縁部破片。 邢窯・定窯系。 I-1類。
717		白磁 輪花碗	— —	5Y8/1灰白 色。 緻密。	体部は内湾ぎみに外上方 に立ち上がる。	体部から内面は回転ナデで仕上げる。体部外面 に縦の切り込みを入れ左側を削り取って輪花を 表現する。施釉は内面から体部外面まで厚く施 される。釉はややあせているが光沢は良好。	体部破片。 邢窯・定窯系。 I-2b類。

土器類 (図版27・73・76)

718	3区 D42F	白磁 輪花碗	— —	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	体部から内面は回転ナデで仕上げる。施釉は内面外面に厚く施される。釉の光沢は良好。	体部破片。 邢窯・定窯系。 I-2b類か。
719	3区 D42 FR・FS	白磁 碗	— —	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	体部から内面は回転ナデで仕上げる。施釉は内面外面に厚く施される。釉の光沢は良好。	体部破片。 邢窯・定窯系。 I類。
720	3区 D42FQ		— —	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	底部は蛇の目高台で、体部が緩やかに外上方に立ち上がる。	底部はケズリ出しで成形し、高台外端を面取りする。体部内外面は回転ナデ調整で、施釉は内面から体部外面・高台側面まで厚く施される。釉の光沢は良好。	底部から体部の破片。 邢窯・定窯系。 I-1類か。
721	3区 D42 FS・FU		— —	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	体部が緩やかに外上方に立ち上がる。	底部はケズリ出しで成形し、体部内外面は回転ナデ調整。施釉は内外面に厚く施される。釉はややあせているが光沢は良好。	体部破片。 邢窯・定窯系。 I類。
722	3区 D42GR		— —	5Y8/1灰白色。 緻密。	底部は蛇の目高台で、体部が緩やかに外上方に立ち上がる。	底部はケズリ出しで成形し、高台外端を面取りする。体部内外面は回転ナデ調整で、施釉は内面から体部外面・高台側面まで厚く施される。釉はややあせているが光沢は良好。	底部から体部の破片。 邢窯・定窯系。 I-1類か。
723	3区 D42CS		— —	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	平坦な底部に断面方形の高台がつく。体部は内湾ぎみに外上方へ緩やかに立ち上がる。	底部はケズリ出し成形で、高台外端を面取りする。体部から内面は回転ナデで仕上げる。施釉は内面から体部外面・高台側面まで厚く施し、底部外面から高台内側面にも薄く施釉する。釉はややあせているが光沢は良好。	底部から体部の破片。 邢窯・定窯系。 I-2b類か。
724	3区 D42 KS・KT	青磁 碗	— —	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	体部から内面は回転ナデで仕上げる。施釉は内面外面に厚く施されるが、高台側面までは及ばない。釉の光沢は良好。	体部破片。 邢窯・定窯系。 I類。
725	3区 D42GR		— —	5Y6/1灰色。 緻密。	体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がり、口縁部で強く外反する。口縁端部は丸くおさめる。端部に切り込みを入れて輪花碗とする。	回転成形後に、内外面に丁寧な回転ナデ調整。口縁部は強くナデつけて外反させる。口縁端部に切り込みを入れて輪花を表現する。釉は厚く内外面に施釉する。釉は灰オリブ色。	口縁部から体部の破片。 越州窯系。 I-2b類。
726	3区 D42ER		— —	7.5Y6/1灰色。 緻密。	体部は直線ぎみに外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	回転成形、回転ナデ調整。口縁部はやや強くナデつける。体部外面には轆轤目が残るが、内面のナデ調整は丁寧に施す。釉は厚く内外面に施釉する。釉は灰オリブ色。	口縁部から体部の破片。 越州窯系。 I-1類。
727	3区 D42IT		— —	7.5Y6/1灰色。 緻密。	断面円形を呈する外碗した注口。	壺体部に貼り付け、ナデ成形。内外面に施釉する。釉は灰オリブ色。	注口破片。 越州窯系。
728	3区 D42 FU~HU		— —	7.5Y6/1灰色。 緻密。	幅約2cmの帯状把手の外面に沈線を縦に3条入れて文様とする。	手づくね成形。ナデ調整。釉は薄く内外面に施釉。釉は灰黄色。	把手破片。 越州窯系。
732	3区 D42 IU・JU	青磁 壺	— —	5Y7/1灰白色。 緻密。	平坦な底部に断面台形の低い高台が取り付き、体部は高台から直線的に外上方に立ち上がる。	底部はケズリ出し成形で、体部下端も回転ケズリ調整。内面は回転ナデで、轆轤成形痕跡が残る。施釉は外面は均質に施すが内面にはムラが多く、底部外面にも薄く施釉する。釉は灰オリブ色。	底部から体部にかけたの破片。 越州窯系。
733	3区 D42FR	褐釉 壺	— —	2.5Y6/1黄灰色。 緻密。	緩やかに湾曲する。	回転成形で、ムラのある厚い釉を外面に施す。釉は暗褐色。	体部破片。 長沙銅官窯系。
734	3区 D42ER	褐釉 水注把手	— —	5Y6/1灰色。 緻密。	幅約2.5cmの帯状把手の外面に、沈線を縦に3条入れて文様とする。	手づくね成形、ナデ調整。ムラのある釉を内外面に施釉。釉は暗褐色。	把手破片。 長沙銅官窯系。
735	3区 D42 DS・DT	褐釉 壺	— —	5Y6/1灰色。 緻密。	体部外面に幅約2.4cmの帯状把手を貼り付ける。把手部は沈線を縦に3条入れて文様とする。	体部は回転成形。把手部は手づくね成形、ナデ調整。ムラのある厚い釉を外面に施釉する。内面には釉垂れが認められる。釉は暗褐色。	把手部から体部破片。 長沙銅官窯系。
736	3区 D42HS		— —	5Y6/1灰色。 緻密。	体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	回転成形で、内面には轆轤成形痕跡が明瞭に残る。ムラのある厚い釉を外面に施すが、下半は素地のままである。釉は暗褐色。	体部破片。 長沙銅官窯系。
737	3区 D42FS		— —	5Y6/1灰色。 緻密。	体部から肩部にかけて緩やかに内傾し、頸部が立ち上がる。	回転成形で、ムラのある厚い釉を内外面に施すが、内面には釉垂れが及ばない素地が残る。釉は暗褐色。	肩部破片。 長沙銅官窯系。
738	3区 D42 CS・DS		— —	5Y6/1灰色。 緻密。	緩やかに湾曲する。	回転成形で、ムラのある厚い釉を外面に施す。釉は暗褐色。	体部破片。 長沙銅官窯系。
739	3区 D42 DS・ES		— —	5Y6/1灰色。 緻密。	緩やかに湾曲する。	回転成形で、ムラのある厚い釉を外面に施す。釉は暗褐色。	体部破片。 長沙銅官窯系。

園池関連遺構出土土器 1 (図版28)

347	3区 D42 KO・KP LO・LP 池2	土師器 杯A	13.1 2.5	7.5YR7/4に ぶい橙色。 緻密。	底部から体部が緩やかに 外上方へ開く。口縁部は 屈曲して外反し、端部は 内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形 の後、丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデ て成形・調整し、後に体部内面の横ナデ調整を 施す。	口縁部から体部 にかけて約1/4 の破片。
348		土師器 皿A	14.0 1.9	2.5Y7/2灰黄 色。 緻密。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、屈曲した口縁部 が外上方へ開く。口縁端 部は内側に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に、粗いナデ調整。底 部内面は板状工具による成形の後、丁寧なナデ 調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、 内面の立ち上がり部を横ナデ調整する。	口縁部から底部 にかけて約1/6 の破片。
349		土師器 杯A	14.4 (2.6)	5Y6/6橙色。 緻密。	底部から体部が緩やかに 外上方へ開く。口縁部は 屈曲して外反し、端部は 内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・ 調整し、後に体部内面の横ナデ調整を施す。	口縁部から体部 にかけて約1/4 の破片。
350			14.6 2.4	5Y6/4にぶい 橙色。 緻密。	349に同じ。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。粘土継目が外面に残る。口縁部 を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面 の横ナデ調整を施す。	口縁部から体部 にかけて約1/5 の破片。
351			14.9 2.4	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密。	349に同じ。	350に同じ。	口縁部から体部 にかけて約1/3 の破片。
352			15.3 2.4	10YR6/2灰黄 褐色、やや軟 質。	349に同じ。	底部外面はオサエ成形後に、粗いナデ調整。底 部内面は板状工具による成形の後、丁寧なナデ 調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、 体部内面を横ナデ調整する。	口縁部から体部 にかけて約1/6 の破片。
353			16.0 2.3	2.5Y7/4浅黄 色。 緻密。	底部は平坦で、体部が緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲して外反し、 端部は内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。粘土継目が体部外面に残る。口 縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部 内面の横ナデ調整を施す。	約1/4の破片。
354	3区 D42 LO・LP 池2		15.8 2.8	5YR6/6橙 色。 緻密。	底部は平坦で、体部が緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲して外反し、 端部は内側に肥厚する。 また端部外面に沈線状の 凹みがある。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。粘土継目が体部外面に残る。口 縁部を横方向にナデて成形・調整し、口縁端部 は強く上方につまみ上げる。後に体部内面の横 ナデ調整を施して仕上げる。	約1/3の破片。
355	3区 D42 OO・OP 池3	土師器 皿A	13.0 (1.4)	2.5Y7/3浅黄 色。 緻密。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、屈曲した口縁部 が外上方へ開く。口縁端 部は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に、粗いナデ調整。底 部内面は板状工具による成形の後、丁寧なナデ 調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、 内面の立ち上がり部を横ナデ調整する。	口縁部から底部 にかけて約1/6 の破片。
356	3区 D42 NP・OP 池3	土師器 杯A	12.8 (1.7)	10YR8/2灰白 色。 緻密。	体部は緩やかに外上方へ 開き、口縁部で屈曲す る。外反した口縁はほぼ 水平となり、端部は上方 に肥厚する。	体部外面はオサエ成形後に、粗いナデ調整。口 縁部は横方向にナデて成形・調整し、口縁端部 は上方につまみ上げる。体部内面は横ナデ調整 を施す。	口縁部から体部 にかけて約1/3 の破片。
357			13.2 2.0	5Y7/2灰白 色。 緻密、赤褐色 の砂を多く含 む。	やや丸みを帯びた底部か ら、体部が緩やかに外上 方へ開き、口縁部で屈曲 する。外反した口縁はほ ぼ水平となり、端部は上 方に肥厚する。	底部から体部外面にかけてはオサエ成形後に、 粗いナデ調整。体部外面に粘土継ぎ目が残る。 底部内面は板状工具による成形の後、ナデ調 整。口縁部は横方向にナデて成形・調整し、口 縁端部は上方につまみ上げる。体部内面を横ナ デ調整して仕上げる。	口縁部を若干欠 損するが、ほぼ 完存。
358			12.2 2.3	2.5Y7/2灰黄 色。 緻密。	357に同じ。	357に同じ。	底部はほぼ完 存。口縁部は約 1/4が残る。灯 芯痕が内面に残 る。
359			12.6 2.3	2.5Y8/3浅黄 色。 緻密。	平坦な底部から、体部が 緩やかに外上方へ開く。 口縁部で屈曲して外反 し、端部は内側に肥厚す る。	底部から体部外面にかけてはオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形 の後、丁寧なナデ調整。口縁部は横方向にナデ て成形・調整し、体部内面を横ナデ調整して仕 上げる。	約1/3の破片。
360			13.4 2.0	5Y7/2灰白 色。 緻密。	体部は緩やかに外上方へ 開き、口縁部で屈曲す る。口縁は外反し、端部 は内側に肥厚する。	底部から体部外面にかけてはオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による成形 の後、ナデ調整。口縁部は横方向にナデて成 形・調整し、体部内面を横ナデ調整して仕上げ る。	約1/3の破片。
361	3区 D42MP 溝3	土師器 皿A	15.0 1.7	7.5YR6/4に ぶい橙色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部か ら、口縁部が外反しなが ら緩やかに外上方へ立ち 上がる。口縁端部は内側 に肥厚する。	底部から体部外面にかけてはオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口 縁部は横方向にナデて成形・調整し、口縁端部 は内側につまんで肥厚させる。口縁部から底部 内面約2cmの部分までは横方向のナデ調整。	口縁部や底部の 一部を欠損する が、ほぼ完存。
362	3区 D42LR 溝3		14.6 2.0	2.5Y7/2灰黄 色。 密、やや軟 質。	357に同じ。	357に同じ。	約1/3の破片。

土器類（図版28）

363	3区 D42MP 溝3	土師器 杯L	16.0 3.2	7.5YR6/4に ぶい橙色。 緻密。	体部は緩やかに外上方へ 開き、口縁部でやや屈曲 する。口縁端部は内側に 肥厚する。	底部から体部外面にかけてはオサエ成形後に、 粗いナデ調整。口縁部は横方向にナデで成形・ 調整し、端部を内側につまんで肥厚させる。体 部内面は横ナデ調整して仕上げる。	口縁部破片。
364	3区 D42 BT・BU 泉1	土師器 皿A	10.2 1.3	2.5Y7/2灰黄 色～2.5Y7/3 浅黄色。 緻密、砂をや や含む。	やや丸みを帯びた底部か ら、口縁が屈曲して立ち 上がる。口縁は外反して 水平になり、端部は上方 に折り曲げて肥厚する。	底部はオサエ成形後に、粗いナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部から底部内面にか けては横方向のナデ調整で、端部は上方につま み上げて肥厚させる。	完存。泉の埋納 祭祀遺物。
365			10.5 1.4	2.5Y7/2灰黄 色。 緻密、微砂を 若干含む。	364に同じ。	364に同じ。	364に同じ。
366	3区 D42 CT・CU 泉1		10.2 0.9	10YR8/2灰白 色。 緻密。	平坦な底部から、口縁が 屈曲して立ち上がる。口 縁は外反して水平にな り、端部は上方に折り曲 げて肥厚する。	底部はオサエ成形後に、粗いナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部から底部内面にか けては横方向のナデ調整で、端部は上方につま み上げて肥厚させる。	口縁部から底部 にかけて約2/3 の破片。
367	3区 D42BU 泉1	土師器 杯A	12.5 2.1	10YR7/2にぶ い黄橙色。 緻密、赤色・ 黒色微砂をや や多く含む。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、体部は緩やかに 外上方へ開く。口縁部の 屈曲は弱く、端部は内側 に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は板状工具による丁寧 なナデ調整。口縁部を横方向にナデで成形・調 整し、後に体部内面の横ナデ調整でナデ上げ る。	口縁部から底部 にかけて約1/6 の破片。
368	3区 D42 BU・CU 泉1	土師器 皿A	14.4 2.0	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密、赤色・ 黒色微砂をや や多く含む。	やや丸みを帯びた底部か ら、口縁が外反しながら 緩やかに外上方に立ち上 がる。口縁端部は内側に 肥厚する。	底部はオサエ成形後に、粗いナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデで 成形し、後に口縁から底部内面にかけて横ナデ 調整を施すとともに、底部から口縁部の境界を 強く押さえて仕上げる。	約1/3の破片。
369	3区 D42 BV～DV BW～DW 溝4	土師器 杯A	13.9 2.9	2.5Y8/3淡黄 色。 緻密。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、体部は緩やかに 外上方へ開く。口縁部は 屈曲して外反し、端部は 内側に弱く肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。体部外面に粘土縫ぎ目痕跡が残 る。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方 向にナデで成形・調整し、後に体部内面の横ナ デ調整を施すとともに、底部と体部の境界を強 く押さえ、最後はナデ上げる。	口縁部から底部 にかけて約2/3 の破片。
370			14.4 2.5	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密。	平底から体部は緩やかに 外上方へ開く。口縁部は 強く屈曲して外反し、端 部は内側に弱く肥厚す る。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口 縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部 内面の横ナデ調整を施すとともに、底部と体部 の境界を強く押さえ、最後はナデ上げる。	口縁部から底部 にかけて約1/6 の破片。
371		土師器 杯B	17.4 2.9	7.5YR7/3に ぶい橙色。 緻密。	底部は平底で、断面三角 形の低い高台が付く。体 部は緩やかに外上方へ開 き、口縁部は屈曲し口縁 端部は内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形。 高台は貼り付け、横ナデ調整。底部内面から体部内 面にかけて板状工具で成形後にナデ調整。口縁 部を成形した後に口縁から体部内面を横ナデ調 整、体部と底部の境界は強く押さえる。	口縁部から底部 にかけて約1/3 の破片。
372	3区 D42BU 溝4		16.8 3.8	10YR8/3浅黄 橙色。 緻密。	371に同じ。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形。 高台は貼り付け、横ナデ調整。底部内面は板状工 具で成形後にナデ調整。口縁部を成形した後に、 体部外面を粗いヘラケズリ調整、口縁から体部 内面は横ナデ調整、体部と底部の境界は強く押 さえる。	口縁部から底部 にかけて約1/5 の破片。
373	3区 D42BV 溝4		21.8 5.7	7.5YR6/4に ぶい橙色。 緻密。	底部は平底で、断面台形 の低い高台が付く。体部 は緩やかに外上方へ開 き、口縁部は外反し、口 縁端部は内側に肥厚す る。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に粗 いヘラケズリ調整。高台は貼り付け、横ナデ調 整。底部内面は板状工具で成形後にナデ調整。 口縁部は横ナデ成形で、口縁から体部内面は横 ナデ調整して仕上げる。	底部約1/3、体 部から口縁部は 部分的に残存す る。
374	3区 D42 LO～LQ 池2	土師器 高杯	— —	10YR8/3浅黄 橙色。 緻密。	脚部は断面八角形の面取 りを施し、内部中空部は 下方に向かってやや広が る。脚部から裾部にか けて屈曲し、大きくラッパ 状に広がる。杯部は外方 やや上向きに広がる。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、芯を回すこ とで中空部を作る。脚部外面は下から上へのタ テヘラケズリで面取りする。裾部は板状工具で 内面をナデつけながら押し広げて成形し、丁寧 な横ナデ調整で仕上げる。杯部外面基部はヘラ ケズリ調整、内面はナデ調整。	杯基部から脚 部・裾部上半の 個体。
375	3区 D42 LO・LP 池2		脚部 径9.4 —	10YR8/2灰白 色。 密、やや軟 質。	脚部は断面八角形の面取 りを施し、内部中空部は 下方に向かってやや広が る。脚部から裾部にか けての屈曲は弱く、裾部は 大きく広がる。裾端部は 水平な面を作り、端部を 外下方に屈曲させる。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、芯を回すこ とで中空部を作る。杯との接合部は補足粘土を 付加して成形し、脚部外面を下から上へのタテ ヘラケズリ調整する。裾部はナデつけながら押 し広げた成形後、丁寧な横ナデ調整で仕上げ る。	脚部から裾部の 個体。杯部と、 裾部の約1/3を 欠損。 白色土器の可能 性あり。
376	3区 D42GX 石敷遺構 1	須恵器 壺蓋	9.2 1.2	10YR6/1褐灰 色。 緻密。	平らな天井部から、体部 は緩やかに外反しながら 広がる。口縁部は体部か らほぼ直角に折れ曲が り、端部を丸くおさめ る。	体部から口縁部にかけては回転成形で、天井部 外面は未調整のため回転系キリ痕跡が明瞭に残 る。	約1/5の破片

377	3区 D42 AW~DW AX~DX 溝4	須恵器 壺	底部 径7.2 —	N6/灰色。 緻密。	平坦な底部から体部が緩やかに外上方に立ち上がり、肩部で強く内側に屈曲して頸部へとすばまる。	底部外面は回転ヘラキリ、未調整。体部は回転成形で、肩部は体部から一体で引き出され、頸部に向けて絞り込む。回転による肩部の屈曲痕跡と絞り目が、体部の軸目とともに内面に明瞭に残る。	底部約1/2、体部から肩部約1/3の破片。頸部から上が欠損する。底部外面に「キ」ヘラ記号。
378	3区 D42LP 池2	灰釉陶器 輪花皿	14.3 3.2	10Y6/1灰色 ~10Y6/2オリ ーブ灰色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に、内湾した短い三日月高台が付く。体部は浅く緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸くおさめ、五輪花に表現する。	体部外面下半は高台を貼り付けに伴う回転ナデ調整。中央付近のナデ残した部分に回転ヘラケズリの痕跡が残る。体部は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。口縁端部を外面からヘラ押しして五輪花を作り出す。施釉は体部内外面を漬掛けする。	底部はほぼ完存。口縁部で約1/2残る。
379	3区 D42OQ 池3	灰釉陶器 椀	16.4 5.4	5Y7/1灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部にやや内湾した三日月高台が付く。体部は緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部内面に擦痕が認められる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部上半は回転成形・ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉は灰白色を呈し、外面の口縁から体部全面にかけて、内面は底部を残して塗掛けするが、高温のため釉は発色が荒れている。	底部から体部約1/3の破片。口縁部は部分的に残る。重ね焼きの痕跡が内面と高台端部に残る。
380	3区 D42 OO・OP 池3		17.4 5.5	5Y6/1灰色 緻密。	底部に内湾した高い三日月高台が付く。体部は緩やかに外上方へ立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸くおさめる。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部上半は回転成形・ナデ調整。口縁部はやや強くナデ調整する。釉は灰黄色を呈し、内外面に漬掛けする。	底部から口縁部約1/8の破片。重ね焼きの痕跡が内面に残る。
381	3区 D42GU 土壇2	緑釉陶器 皿	14.8 3.0	5Y8/2灰白色。 密、やや軟質。	底部は中央が凹んだ円盤高台で、体部は浅く内湾気味に立ち上がる。口縁部は若干外反し、端部は丸くおさめる。	高台は円盤ケズリ出しで、回転ヘラケズリは体部下半まで及び、ナデ調整で仕上げる。体部外面上半から内面にかけて回転ナデ調整。内面はヘラミガキ調整。内外面全体に淡い緑釉を施すが、ややムラがある。	完存。口縁部に灯心痕跡が残る。池1東岸の景石に伴う地鎮遺物。 京近郊産。
382	3区 D42 BV~DV BW~DW 溝4	緑釉陶器 段皿	14.4 2.6	7.5Y7/1灰白色。 緻密。	底部は断面方形の外に踏張った輪高台で、体部は浅く外反気味に立ち上がり、体部内面に段を設ける。口縁端部は丸くおさめる。	高台はケズリ出し成形。体部外面から内面にかけては回転ナデ調整。体部内面の段は回転ヘラケズリで作り出す。内面はヘラミガキ調整で仕上げる。内外面全体に淡緑色を呈する緑釉を施す。	口縁部を約1/4欠損するが、ほぼ完存。 京近郊産。
383	3区 D42 NO~PO 池3	緑釉陶器 輪花椀	13.0 4.6	10YR8/3浅黄 橙色。 緻密、白色の 微砂をやや含 む。	平坦な底部に、外に踏張り端面内側に沈線が巡る高台が付く。体部は緩やかに内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸くおさめ、輪花に表現する。	底部は回転系キリ後に高台を貼り付け、回転ナデ調整。回転系キリ痕跡が残る。体部から内面にかけて回転成形・ナデ調整。口縁部には外側からヘラ押しして五輪花を作る。内面の底部と体部の境界に沈線を巡らす。緑釉は内外面全体に濃く施釉するが、底部はムラが強く薄い。	底部約1/2、口縁部約1/4が残る。底部内外面に三叉トチンの痕跡が認められる。 近江産あるいは美濃産か。
384	3区 D42OQ 池3	緑釉陶器 椀	14.5 —	10Y7/1灰白色。 緻密。	体部は緩やかに外上方に立ち上がり、体部中央で内側にやや屈曲して稜をなす。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	体部外面稜線の上は回転ヘラケズリで整える。口縁部から内面にかけて回転ナデ調整。内面から体部外面に淡くオリーブ灰色を呈する緑釉を施す。	口縁部から体部の破片。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。 京近郊産。
385	3区 D42FW 石敷遺構 1	緑釉陶器 陰刻花文 椀	高台 径6.8 —	7.5Y8/2灰白色。 緻密。	底部内面に陰刻花文をもつ輪花稜皿。底部は断面方形の外に踏張った輪高台で、体部は浅く立ち上がり、体部中央で内側にやや屈曲して稜をなす。	高台はケズリ出し成形。体部外面から内面にかけては回転ナデ調整。内面はヘラミガキ調整で仕上げる。内外面全体に淡くオリーブ灰色を呈する緑釉を施す。	底部から体部下 半約1/2の破 片。 京近郊産。
386	3区 D42LO 池2		高台 径8.6 —	10Y7/1灰白色。 緻密。	口縁部内面と底部内面に陰刻花文をもつ輪花皿。やや丸みを帯びた底部に、断面方形の内湾気味の 高台が付く。体部は浅く外上方に広がる。	底部は回転ヘラケズリ後に高台を貼り付け、回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整後にヘラミガキ調整。釉は灰オリーブ色を呈し、内外面全体に施すが、ややムラがある。	底部から体部下 半約1/4の破 片。底部内外 面に三叉トチ ンの痕跡が残 る。 尾張産。
387	3区 D42 BT・BU 泉1	緑釉陶器 耳皿	高台 径4.8 —	10Y8/2灰白色。 緻密、微砂を やや含む。	平坦な底部に断面長方形の高い高台が付く、高台端面は内側に沈線が巡る。耳は相対して波状に表現する。	底部は高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形で皿形を作り、二方の口縁を内側に折り曲げ、中央を内側から押しもどす。体部外面と内面にヘラミガキ調整を施す。緑釉は内外面に施すが発色が悪く、黒色化した部分が多く認められる。また、淡い肌色の発色が点在する。	底部約1/2、体部約1/3の破片。 防長産。
388	3区 D42 NQ・OQ 池3	緑釉陶器 小杯	7.4 3.3	10Y8/2灰白色。 密、やや軟質。	平坦な底部から体部が緩やかに立ち上がり、口縁部でやや外反する。端部は丸くおさめる。	底部は回転系キリ、ナデ調整。体部から内面にかけて回転成形、体部外面はナデ調整で仕上げる。釉はオリーブ黄色を呈し、底部外面以外に淡く施し、濃い緑釉を斑点状に散らす。	底部約1/2、口縁部約1/4の破片。 京近郊産。

土器類 (図版28)

389	3区 D42NQ 池3	緑釉陶器 小杯	8.3 3.3	10Y7/1灰白色。 緻密。	平坦な底部から体部が緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	底部は回転糸キリ、未調整。体部から内面にかけて回転成形、体部外面はナデ調整で仕上げる。釉は灰オリーブ色を呈し、底部外面以外に淡く施す。	底部約1/2、口縁部約1/4の破片。 京近郊産。
390	3区 D42 BT・BU CT・CU 泉1	緑釉陶器 壺	高台 部径 6.4 —	5Y8/2灰白色。 密、やや軟質。	体部外面に陰刻花纹を施した壺底部である。底部は蛇の目高台で、体部は内湾しながら外上方に立ち上がる。	底部は貼り付けケズリ出し成形、ナデ調整。体部は回転ナデ調整で仕上げる。緑釉はオリーブ黄色を呈する。	底部から体部下 端約1/3の破 片。 尾張産。
391	3区 D42MO 池2	緑釉陶器 唾壺	高台 部径 7.0 —	2.5Y7/1灰白色。 緻密。	唾壺底部である。底部は蛇の目高台で、体部は内湾しながら上方に立ち上がる。	底部は貼り付け、ナデ調整。体部外面は回転ナデ調整、一部回転ヘラケズリで仕上げる。緑釉は灰白色を呈する。	底部から体部下 端約1/3の破 片。 尾張産。

井戸および建物関連遺構出土土器(図版29・図版76)

392	第1次 D53 CK・CL DK・DL 井戸3	土師器 皿A	13.8 1.9	10YR7/2にぶ い黄橙色。 緻密、微砂・ 赤褐色の礫を 少量含む。	やや丸みを帯びた底部から、屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁は外反し、端部は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。底部内面は板状工具によって成形し、丁寧にナデ調整する。口縁部は横方向にナデつけて成形・調整し、後に口縁部から底部内面約2cmの部分まで横方向のナデ調整してナデ上げる。	完存。 枳内出土。
393		土師器 杯A	14.0 2.6	392に同じ。	やや丸みを帯びた底部から、体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は屈曲して外反し、端部は上方内側に肥厚する。	底部から体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。体部外面に粘土継ぎ目が残る。底部内面は板状工具により成形し、丁寧にナデ調整する。口縁部は横方向にナデつけて成形・調整し、後に体部内面を横方向のナデ調整。底部と体部の境界は強くナデつけ、最後にナデ上げる。	口縁部と底部の 一部を欠損する が、ほぼ完存。 口縁端部に灯心 痕跡。 枳内出土。
394	1区 D43BK 井戸1		14.2 2.1	7.5YR7/2明 褐色。 緻密。	平坦な底部から、体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は弱く内側に肥厚する。	底部から体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。体部外面に粘土継ぎ目が残る。底部内面は丁寧にナデ調整する。口縁部は横方向にナデつけて成形・調整。体部内面は横方向のナデ調整で、内面成形時の板状工具の当りが残る。	口縁から底部約 1/5の破片。 枳内最下層出 土。
395			13.2 (2.2)	7.5YR8/2灰 白色。 緻密。	体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は弱く内側に肥厚する。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁部は横方向にナデつけて成形・調整し、後に体部内面を横方向のナデ調整。底部と体部の境界は強くナデつけ、最後にナデ上げる。	口縁から体部約 1/5の破片。 枳内出土。
396		白色土器 三足盤	16.0 3.3	10YR8/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部から体部が浅く立ち上がり、口縁部はやや外下方に短く屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。体部外面には横断面円形の獣脚が3箇所に取付く。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ調整。手づくねで成形した獣脚を貼り付ける。口縁から内面にかけては回転ナデ調整、後に口縁部を除く内面を粗くヘラミガキ調整する。	約1/3の破片。 枳内出土。
397	4区 D52 CU・CV DU・DV 井戸2	土師器 小皿	7.8 1.1	7.5YR6/3に ぶい褐色。 やや密、軟 質、砂を含 む。	丸みを帯びた底部から口縁部が浅く広がり、端部を丸くおさめる。	底部外面はオサエ成形。内面はナデ調整で仕上げる。	約3/4の破片。 掘形出土。
398		土師器 皿A	14.0 1.6	10YR7/3にぶ い黄橙色。 密、やや軟 質。	やや丸みを帯びた底部から、屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁は外反し、端部は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁部は横方向にナデつけて成形・調整し、後に口縁部から底部内面にかけて横方向のナデ調整。	口縁部約1/6の 破片。 掘形出土。
399			14.5 1.5	2.5Y8/2灰白 色。 密、やや軟 質。	398に同じ。	398に同じ。	口縁部約1/6の 破片。 掘形出土。
400		土師器 杯A	13.2 1.8	2.5Y8/2灰白 色。 緻密。	平坦な底部から、体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は外反して水平となり、端部は上方に肥厚する。	底部から体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。体部外面に粘土継ぎ目が残る。底部内面は丁寧にナデ調整する。口縁部は横方向にナデつけて成形・調整し、後に体部内面を横方向のナデ調整。底部と体部の境界は強くナデつける。	口縁から底部約 1/3の破片。 枳内最下層出 土。
401			13.4 2.4	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密。	体部は緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は屈曲して外反し、端部は上方内側に肥厚する。	底部から体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。底部内面は丁寧にナデ調整する。口縁部は横方向にナデつけて成形・調整し、後に体部内面を横方向のナデ調整。底部と体部の境界は強くナデつける。	口縁から底部約 1/6の破片。 掘形出土。
402			14.0 2.4	7.5YR7/3に ぶい橙色。 密、やや軟 質。	401に同じ。	401に同じ。	口縁から底部約 1/6の破片。 掘形出土。
403			14.6 2.4	7.5YR8/3浅 黄橙色。 密、やや軟 質。	体部は緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は屈曲して外反し、端部は上方内側に肥厚する。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁部は横方向にナデつけて成形・調整し、後に体部内面を横方向のナデ調整し、ナデ上げて仕上げる。	口縁から体部約 1/6の破片。 掘形出土。

遺物観察表

404	4区 D52 CU・CV DU・DV 井戸2	土師器 杯L	15.6 (2.7)	10YR6/3にぶ い黄橙色。 緻密。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がる。口縁部は屈 曲して外反し、端部は上 方内側に肥厚する。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁 部は横方向にナデつけて成形・調整し、後に体 部内面を横方向のナデ調整する。	口縁から体部約 1/6の破片。体 部内面に墨が付 着。 掘形出土。
405			15.2 3.6	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部か ら、体部が屈曲しながら 外上方に立ち上がる。口 縁部は屈曲して外反し、 端部は上方内側に肥厚す る。	底部から体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調 整。体部外面に粘土継ぎ目が残る。底部内面は 板状工具により成形し、丁寧にナデ調整する。 口縁部は横方向にナデつけて成形・調整し、後 に体部内面を横方向のナデ調整。底部と体部の 境界は強くナデつけ、最後にナデ上げる。	約2/3が残る。 掘形出土。
406			16.6 3.0	7.5YR6/4に ぶい橙色。 緻密。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がる。口縁部は屈 曲して外反し、端部は上 方内側に肥厚する。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁 部は横方向にナデつけて成形・調整し、後に体 部内面を横方向のナデ調整する。	口縁から体部約 1/6の破片。 掘形出土。
407		黒色土器 A 椀B	12.4 3.8	内面N1.5/黒 色。 外面7.5Y7/6 橙色。 密、やや軟 質。	平坦な底部に、断面三角 形の低い高台が付く。体 部は緩やかに外上方に立 ち上がり、口縁部は若干 外反する。端部は丸くお さめ、内側に一条の沈線 を巡らす。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 体部をヘラケズリ調整。高台は貼り付け、横ナ デ調整。口縁部は横ナデ調整。内面は底部に丁 寧なヘラミガキ調整を施してから、体部の横方 向の丁寧なヘラミガキで仕上げる。なお、体部 内面に暗文を施す。	約2/3が残る。 掘形出土。
408		黒色土器 A 甕	18.5 (13.2)	内面5PB2/1 青黒色。 外面 7.5YR6/4に ぶい橙色。 密、やや軟 質。	丸い体部に外反した口縁 部が取り付く。端部は丸 くおさめる。	体部はオサエ成形で形作り、口縁部を屈曲させ て仕上げる。口縁部から体部内面にかけて横ナ デ調整。体部外面は粗いナデ調整で、粘土継ぎ 目が中央下寄りに残る。肩部内面は横ハケ成形 し、内面全体を丁寧にナデ調整した後に、粗い ヘラミガキを施す。	底部を除く約 1/4の破片。 掘形出土。
409		白色土器 皿	高台 部径 6.4 —	10YR7/2にぶ い黄橙色。 密、やや軟 質。	底部は蛇の目高台状の輪 高台で、体部は浅く外上 方に開く。	底部は高台ケズリ出し成形で、体部から内面 にかけて丁寧なナデ調整。	底部完存、体部 下半の破片。内 面に墨擦痕が残 る。掘形出土。
410		白色土器 椀	高台 部径 6.4 —	7.5YR8/1灰 白色。 緻密。	丸みを帯びた底部に輪高 台が付く。体部は内湾気 味に外上方に立ち上がる 。	底部は高台ケズリ出し成形で、体部下端までヘ ラケズリが及ぶ。体部から内面にかけて回転ナ デ調整。	底部から体部約 2/3の破片。枠 内下層出土。
411		須恵器 杯A	13.0 2.9	2.5Y8/1灰白 色。 密、やや軟 質。	平坦な底部から内湾気味 に体部が立ち上がり、口 縁端部を丸くおさめる。	底部は回転ヘラキリ、未調整。体部から内面 にかけて回転成形、回転ナデ調整。	約1/5の破片。 底部内面と口縁 部に灯心痕跡を 残す。 掘形出土。
412			13.8 3.5	2.5Y7/1灰白 色。 密、やや軟 質。	平坦な底部から内湾気味 に体部が立ち上がり、口 縁部で内側にやや屈曲す る。口縁端部は丸くおさ める。	底部は回転ヘラキリ、粗いナデ調整。体部から 内面にかけて回転成形、回転ナデ調整。	口縁部を若干欠 損するが、ほぼ 完存。
413			14.7 3.5	10YR5/3にぶ い黄褐色。 密、やや軟 質。	412に同じ。	412に同じ。	約1/3の破片。 412・413とも 掘形出土。
414			14.0 3.5	N6/灰色。 緻密。	平坦な円盤状の底部から 内湾気味に体部が立ち上 がり、口縁端部は丸くお さめる。	底部は丁寧なナデ調整で切り離し痕跡を消す。 体部から内面にかけて回転成形。	約1/3の破片。 埋土上層出土。
415		灰釉陶器 椀	15.5 4.4	10Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部にやや内湾し た太い三日月高台が付く。 体部は緩やかに外上 方へ立ち上がり、口縁部 で外反する。口縁端部は 丸くおさめる。	底部から体部外面下半は回転ヘラケズリ後に、 高台を貼り付け、回転ナデ調整。体部上半から 内面にかけては回転成形・ナデ調整、口縁部は やや強くナデ調整する。釉はオリーブ灰色を呈 し、体部内外面を薄く塗掛けする。	約1/3の破片。 底部内面に擦 痕、重ね焼きの 痕跡残る。 掘形出土。
416		緑釉陶器 香炉蓋	— —	10Y5/1灰 色。 緻密。	天井部に陰刻花文を施し た香炉蓋。やや丸みを帯 びた天井部に宝珠つまみ が付く。	回転成形し、天井部につまみを貼り付け、回転 ナデ調整で仕上げる。陰刻花文の間を穿孔す る。釉はオリーブ灰色を呈し、内外面に均質に 施す。	天井部破片。 埋土上層出土。 2区D42BQ地区 耕作溝から出土 の破片と接合。 尾張産。
417		緑釉陶器 皿	14.8 3.5	10Y7/1灰白 色。 緻密。	底部は蛇の目高台を指向 するが中央部のケズリ落 としが弱く、円盤高台状 を呈する。体部は緩やか に外上方に立ち上がり、 中央で内側に屈曲し稜を なす。口縁部は外反し、 端部を丸くおさめる。	底部は高台ケズリ出し成形。体部は回転成形 で、稜も強くナデつけることで屈曲させる。体 部外面および底部内面にヘラミガキ調整を施 す。釉はオリーブ黒色を呈し、内外面全体に濃 く施釉する。	約1/3の破片。 掘形出土。 京近郊産。

土器類 (図版29)

418	4区 D52 CU・CV DU・DV 井戸2	緑釉陶器 皿	15.0 3.1	N7/灰白色。 緻密。	底部は弱い蛇の目高台で、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は弱く外反し、端部を丸くおさめる。	底部は高台ケズリ出し成形。体部から内面にかけては回転成形で、体部外面および底部内面にヘラミガキ調整を施す。釉はオリーブ黒色を呈し、底部外面を除き内外面に薄く施釉する。	口縁から高台約1/8の破片。底部内面に擦痕が残る。掘形出土。京近郊産。
419		青磁 碗	14.4 —	N7/～8/灰白色。 緻密。	体部は直線気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は上方に丸くおさめる。	回転成形、回転ナデ調整。口縁部はやや強く上方にナデつける。体部外面には轆轤目が残るが、内面のナデ調整は丁寧に施す。釉はオリーブ灰色を呈し、厚く内外面に施釉する。	口縁部から体部にかけての破片。越州窯系。碗Ⅰ-1類。掘形出土。
420			高台 部径 5.9 —	N8/灰白色。 緻密。	底部は蛇の目高台で、体部は外上方に直線気味に立ち上がる。	底部はケズリ出しで成形し、体部は回転ナデ調整。釉は灰色を呈し、内面から底部外面まで全面に施し、高台端面を一部削って釉を落とし、端部を面取りする。	底部から体部下 半の個体。掘形 出土。 越州窯系。 碗Ⅰ-1類。
421		青磁 水注	10.0 —	10YR6/3にぶ い黄褐色。 緻密。	口縁は肩部から緩やかに立ち上がり、端部は外反して広がる。端部は丸くおさめる。口縁部上半外面に把手が取り付け付く。	口縁部は回転成形で、内面に轆轤目が認められる。把手は貼り付けナデ成形。釉はにぶい黄色を呈し、内外面に均質に施釉する。	口縁部約1/4の破片。掘形出土。越州窯系。
422	4区 D52 AW・BW 耕作溝		— —	N7/灰白色。 緻密。	断面が楕円形を呈する外湾した注口。	壺体部に貼り付け、ナデ成形。釉は灰オリーブ色を呈し、内外面に施釉する。	注口破片。越州窯系。
423	3区 D42BQ 建物3 地鎮 遺構2	土師器 杯A	13.2 2.1	10YR8/2灰白 色～10YR 7/2にぶい黄 橙色。 緻密、微砂・ 赤色細砂を少 量含む。	底部はやや丸みを帯びた平底で、体部は緩やかに外上方へ開く。口縁部は屈曲し、端部は内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形。体部外面に指側部の圧痕が残る。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデて成形・調整し、後に体部内面の横ナデ調整を施し、最後はナデ上げる。423は、底部内面に板状工具による成形の痕跡が残る。	完存。
424			13.5 2.4	10YR8/2灰白 色。 緻密、微砂・ 赤色細砂を少 量含む。	423に同じ。	423に同じ。	完存。
425			13.0 2.1	細砂を少量含 む。	424に同じ。	424に同じ。	完存。
426			13.5 2.3	10YR7/3にぶ い黄褐色。 緻密、微砂・ 赤色細砂を少 量含む。	425に同じ。	425に同じ。	完存。
427			13.4 2.3	10YR7/2にぶ い黄褐色。 緻密、微砂・ 赤色細砂を少 量含む。	426に同じ。	426に同じ。	完存。
428	4区 D52BU 建物18	土師器 杯A	14.0 3.0	7.5YR7/4に ぶい橙色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部から、緩やかに体部が外上方に立ち上がる。口縁部は若干外反し、端部	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、ナデ調整。体部外面に粘土継ぎ目が残る。口縁部を横方向にナデて成形・調整	口縁部から底部 約1/3の破片。
429			13.8 3.1	10YR6/4にぶ い黄褐色。 密、やや軟 質。	は内側に弱く肥厚する。	し、後に体部内面の横ナデ調整を施す。体部と底部内面の境界は強くナデつけて強調し、最後はナデ上げる。	口縁部から底部 約1/2の破片。
430	8区 D42SK 包含層	須恵器 杯B	11.2 5.0	N6/灰色。 緻密。	平坦な底部に、断面逆台形の高台が付く。高台端面内側は沈線状に一段低くなる。体部は直線状に外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。	底部は回転ヘラ切り後に、高台貼り付けナデ調整。体部外面から内面にかけては回転成形・ナデ調整。	底部約1/2、体 部約1/3の破 片。 体部外面に 「小」墨書。
431	3区 D43GB 建物14	須恵器 壺	10.1 胴部 径 14.0 18.8	2.5YR3/1暗 赤灰色。 緻密。	平坦な底部から体部が外上方に立ち上がり、肩部で窄まる。口縁は外反して立ち上がり、端部は面をなす。	底部は回転糸ギリ、未調整。体部から肩部にかけては回転成形で、轆轤目が内外面に明瞭に残る。口縁は回転成形による別作りで、肩部に乗せて接合し、ナデ調整で仕上げる。口縁内外面にも轆轤目が残る。端部は外側につまみ出し端面を形成する。	肩部から体部の 一部を欠損する が、ほぼ完存。 建物14の地鎮 土器。
432	4区 D52 CU・CV DU・DV 検出中	灰釉陶器 碗	16.4 4.3	5Y8/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に断面方形の低い高台が付く。体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁部で外反して広がり、端部を丸くおさめる。	底部外面から体部下 半にかけて回転ヘラケズリ調整、高台を貼り付け、丁寧なナデ調整を施す。体部上半から内面にかけては回転成形・ナデ調整。口縁部は強くナデつけて外反させる。釉は灰オリーブ色を呈し、内面に厚く施釉。	底部約1/3、体 部約1/8の破 片。

433	3区 D42 IX・JX KX・LX 耕作溝	灰釉陶器 皿	14.7 2.9	7.5Y7/1灰白色。 緻密、砂をや や多く含む。	平坦な底部に、外湾した 高台が付く。体部は緩や かに外上方に広がり、端 部は丸くおさめる。	底部外面は回転ヘラケズリ後に高台を貼り付 け、回転ナデ調整。体部外面から内面にかけて は回転成形で、口縁部をやや外につまみ出して 仕上げる。内面には底部を除いて厚く自然釉が 掛かる、外面の釉は薄い。	底部完存、体部 約2/3が残る。 底部内面に重ね 焼きの痕跡が残 る。
434	6区 D43 NF・OF ・PF 溝102	緑釉陶器 皿	12.8 2.1	N7/灰白色。 緻密。	平坦な底部に、外に踏 張った断面逆台形の低い 高台が付く。高台端面内 側は沈線状に一段低くな る。体部は緩やかに外上 方に立ち上がり、口縁で 強く外反し水平となる。 端部は丸くおさめる。内 面の体部と底部の境界に1 条の沈線を巡らす。	底部は回転系キリで、高台を貼り付け回転ナデ を施す。体部から内面にかけて回転成形。釉は 灰白色を呈し、内外面全体に薄く施すが、ムラ が多く釉が剥落している箇所も多い。	底部約3/4、体 部約1/8の破 片。 近江あるいは美 濃産か。
435	2区 D42 AX・BX 耕作溝	緑釉陶器 陰刻花紋 耳皿	高台 部径 5.8 —	10Y7/1灰白 色。 密、やや軟 質。	底部内面に放射状の陰刻 花文を施す耳皿。平坦な 底部に断面方形の低い高 台が付く。体部は低く外 上方に広がり、口縁部を 折り曲げて耳皿とする。	高台は貼り付け、回転ナデ調整。体部から内面 もナデ調整。釉はオリーブ灰色を呈し、内外面 全体に淡く均質に施す。	体部から底部約 1/4の破片。 尾張産。
729	3区 D42 BT・BU CT・CU 泉1掘形	青磁 壺	— —	5Y7/1灰白 色。 緻密。	体部は内湾ぎみに立ち上 がる。	回転成形、回転ナデ調整。釉は外面に淡く施釉 し、内面は釉垂れが認められる。釉は淡い灰オ リーブ色。	体部破片。 越州窯系。

墨書土器(図版30)

440	3区 D42 HT・HU IT・IU 池1	灰釉陶器 碗	高台 部径 7.4 —	2.5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、内湾した 三日月高台が付く。体部 は浅く外上方に立ち上 がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分に回転系キリ痕跡が残る。体 部から底部内面は回転ナデ調整。釉は灰オリー ブ色を呈し、内面に底部を残して塗掛け、外面 は不明。	底部破片。重ね 焼きで、擦痕が 内面に残る。 底部外面に「斎 宮」墨書。
441	3区 D42 FR・FS 池1		高台 部径 8.2 —	7.5Y8/1灰白 色。 やや粗い。	平坦な底部に、やや内湾 した太い三日月高台が付 く。体部は浅く外上方に 立ち上がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分に回転系キリ痕跡が残る。体 部から底部内面は回転ナデ調整。内面には厚い 灰オリーブ色を呈する自然釉が掛かる。	底部破片。底部 外面に「斎宮」 墨書。
442	3区 D42 DT・DU 池1		13.8 2.9	7.5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、やや内湾 した太い三日月高台が付 く。体部は浅く外上方に 立ち上がり、口縁部でや や外反する。口縁端部は 丸くおさめる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分に回転ヘラケズリ痕跡が残 る。体部から底部内面は回転ナデ調整。釉は灰 白色を呈し、体部内外面に漬掛けする。	底部完存、口縁 部約1/3。重ね 焼きで、擦痕が 内面に残る。底 部外面に「斎雑 所」墨書。
443	3区 D42 IT・IU 池1		14.8 4.7	10Y8/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、内湾した 高い三日月高台が付く。 体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁部でや や外反する。口縁端部は 丸くおさめる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分に回転系キリ痕跡が残る。体 部から底部内面は回転ナデ調整。釉は灰オリー ブ色を呈し、体部内外面に漬掛けする。	底部完存、口縁 部約1/4。重ね 焼きで、擦痕が 内面に残る。底 部外面に「斎雑 所」墨書。
444	3区 D42 DS・DT 池1		高台 部径 6.4 —	5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、やや内湾 した太い三日月高台が付 く。体部は浅く外上方に 立ち上がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分に回転ヘラケズリ痕跡が残 る。体部から底部内面は回転ナデ調整。内面 には底部を残して厚くオリーブ黄色を呈する自然 釉が掛かる。	底部約3/4の破 片。重ね焼き で、擦痕が内 面に残る。 底部外面に「斎 舎所」墨書。
445	3区 D42 ES・ET 池1		高台 部径 6.6 —	7.5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、外に踏 張った高台が付く。体部 は浅く外上方に立ち上 がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分に回転ヘラケズリ痕跡が残 る。体部から底部内面は回転ナデ調整。	底部約3/4の破 片。底部内面に 墨擦痕あり。底 部外面に「斎舎 所」墨書。
446	3区 D42 A～D・ V～X 溝4		15.0 4.5	7.5Y8/1灰白 色。 緻密、微砂を 少量含む。	やや丸みを帯びた底部 に、やや内湾した高い三 日月高台が付く。体部は 緩やかに外上方に立ち上 がり、口縁端部で上方に 屈曲させ丸くおさめる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分から体部下半にかけて回転ヘ ラケズリ調整。体部上半から底部内面は回転ナ デ調整。口縁端部は上方につまみ上げる。釉は オリーブ灰色を呈する自然釉が薄く掛かる。	底部完存、口縁 部は若干残る。 底部外面に「僧 供廿口内」墨 書。
447	3区 D42DS 池1		高台 部径 7.5 —	7.5Y8/1灰白 色。 緻密、白色微 砂をやや多く 含む。	やや丸みを帯びた底部 に、やや内湾した高い三 日月高台が付く。体部は 浅く外上方に立ち上 がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分から体部下半にかけて回転ヘ ラケズリ調整。底部内面は回転ナデ調整。	底部から体部下 半約2/3の破 片。内面に重ね 焼きの痕跡が残 る。底部外面に 「僧供口」墨 書。
448	3区 D42 ER・ES FR・FS 池1		高台 部径 7.6 —	7.5YR7/1明 褐灰色。 緻密。	平坦な底部に、断面逆台 形の外に踏張った高台が 付く。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分は回転ヘラケズリ調整。内面 は回転ナデ調整。	底部約3/4の破 片。底部内面に 墨擦痕あり。底 部外面に「犬 子」墨書。

土器類 (図版30)

449	3区 D42ES 池1	灰釉陶器 碗	高台 部径 8.5 —	2.5Y7/1灰白 色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部 に、蛇の目高台が付く。 体部は緩やかに外上方に 立ち上がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分から体部下半にかけて回転ヘ ラケズリ調整。底部内面は回転ナデ調整。	底部約3/4の破 片。重ね焼き で、擦痕が内面 に残る。底部外 面に「清 十 口」墨書。
450	3区 D42JR 池1		高台 部径 8.4 —	10Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、やや内湾 した断面逆台形の高台が 付く。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分は回転ヘラケズリ調整。底部 内面に厚くオリーブ灰色を呈する釉を施す。	底部約1/3の破 片。底部内外面 に重ね焼きの痕 跡が残る。底部 外面に「清」墨 書。
451	3区 D42 CR~CU DR~DU 池1		16.8 5.0	7.5Y8/1灰白 色。 緻密、白色微 砂をやや含む。	平坦な底部に、蛇の目高 台が付く。体部は緩やか に外上方に立ち上がり、 口縁端部で上方に屈曲さ せ丸くおさめる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分から体部下半にかけて回転ヘ ラケズリ調整。体部上半から底部内面は回転ナ デ調整。口縁端部は上方につまみ上げる。釉は オリーブ灰色を呈する自然釉が薄くかかる。	底部約3/4、口 縁部約1/4の破 片。重ね焼きの 痕跡が内面に残 る。底部外面に 「清 十二」墨 書。
452	3区 D42 BV~DV BW~DW 溝4		高台 部径 7.8 —	7.5YR8/2灰 白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部 に、内湾した三日月高台 が付く。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分は回転ヘラケズリ調整。釉は 灰白色を呈し、まず底部内面を残して体部内外 面を塗掛けし、後に底部内面も粗く塗掛けす る。	底部完存。内外 面に重ね焼きの 痕跡が残る。底 部外面に「富」 墨書。
453	3区 D42DR 池1		高台 部径 7.0 —	5Y8/2灰白 色。 緻密、やや砂 を含む。	やや丸みを帯びた底部 に、やや内湾した太い三 日月高台が付く。体部は 緩やかに外上方に立ち上 がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分から体部下半にかけて回転ヘ ラケズリ調整。内面はナデ調整。	底部約1/2の破 片。底部外面に 「國口」墨書。
454	3区 D42 DS・ES 池1		高台 部径 7.8 —	5R7/1明赤灰 色。 緻密。	平坦な底部に、内湾した 三日月高台が付く。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分は回転ヘラケズリ調整後にナ デ調整。底部内面は回転ナデ調整。内面は底部 を残して灰オリーブ色呈する釉が付着。	底部完存。内面 に若干の擦痕が 認められる。底 部外面に「六十」 墨書。
455	3区 D42 CS・CT DS・DT 池1		16.2 4.6	N8/灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部 に、やや内湾した断面逆 台形の高い高台が付く。 体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁で外反 し、端部を丸くおさめ る。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分に回転糸キリ痕跡が残る。体 部から底部内面は回転ナデ調整。釉はオリーブ 灰色を呈し、底部内面を残し体部内面の片面に 厚くかかる。体部外面も内面に対応して片面に 薄く掛かっており、意図的な施釉ではなく自然 釉であろう。	底部完存。口縁 部約1/4が残 る。重ね焼き で、擦痕が内面 に残る。底部外 面に「六十」墨 書。
456	3区 D42DT 池1		高台 部径 7.0 —	2.5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、蛇の目高 台が付く。体部は緩やか に外上方に立ち上がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分は回転ヘラケズリ調整後にナ デ調整。内面は回転ナデ調整。	底部完存。底部 内面に若干の擦 痕が残る。底 部外面に「廿」 墨書。
457	3区 D42FR 池1		高台 部径 8.0 —	5G7/1明緑灰 色。 緻密。	平坦な底部に、蛇の目高 台が付く。体部は浅く外 上方に立ち上がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分から体部下半にかけて、回転 ヘラケズリ調整後にナデ調整。内面はナデ調 整。釉はオリーブ灰色を呈し、底部内面を残し 体部内外面の片面に対応して厚く掛かる。意図 的な施釉ではなく自然釉であろう。	底部完存。重ね 焼きで、擦痕が 内面に残る。底 部外面に「十 五」墨書。
458	3区 D42 KU・LU 池1		高台 部径 7.2 —	7.5Y8/1灰白 色。 緻密、微砂を 少量含む。	平坦な底部に、内湾した 三日月高台が付く。体部 は緩やかに外上方に立ち 上がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分から体部下半にかけて、回転 ヘラケズリ調整。内面は回転ナデ調整。内面は 底部を残し厚く灰オリーブ色を呈する釉を施釉 し、体部外面も薄く塗掛けする。	底部から体部下 半約2/3の破 片。底部内外面 に重ね焼きの痕 跡が残る。底部 外面に「下」墨 書。
459	3区 D42CT 池1		17.0 5.3	7.5Y8/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、蛇の目高 台が付く。体部は緩やか に外上方に立ち上がり、 口縁端部で上方に屈曲さ せ丸くおさめる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分から体部下半にかけて回転ヘ ラケズリ調整。体部上半から底部内面は回転ナ デ調整。口縁端部は上方につまみ上げる。釉は 自然釉が体部内面の片面に薄く掛かる。	底部から口縁約 1/3の破片。内 面に擦痕があ り、高台端部 には重ね焼きの 痕跡が残る。底 部外面に「口 (十カ)」墨書。
460	3区 D42 FT~HT FU~TU 池1		高台 部径 7.8 —	10Y8/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、蛇の目高 台が付く。体部は緩やか に外上方に立ち上がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面 のナデ残した部分は回転ヘラケズリ調整。底部 内面は回転ナデ調整。施釉はまず底部内面を残 して体部内外面を塗掛けし、後に底部内面も粗 く塗掛けする。釉色はオリーブ灰色を呈する。	底部から体部下 端約2/3の破 片。内面に重ね 焼きの痕跡が残 る。底部外面に 「卅三」墨書。

461	3区 D42HR 池1	灰釉陶器 椀	高台 部径 8.3 —	N8/灰白色。 緻密。	460に同じ。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面のナデ残した部分は回転ヘラケズリ調整。底部内面は回転ナデ調整。釉はオリーブ灰色を呈し、底部内面を残して体部内面に掛かる。	底部完存。重ね焼きで、擦痕が内面に残る。底部外面に「卅三」墨書。
462	3区 D42DS 池1		高台 部径 7.0 —	7.5Y8/1灰白色。 緻密。	平坦な底部に、内湾した三日月高台が付く。体部は浅く外上方に広がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面のナデ残した部分から体部下半にかけて回転ヘラケズリ調整。内面は回転ナデ調整。釉は灰オリーブ色を呈し、内面は底部を残して施釉。	底部約1/3の破片。内面に若干の擦痕が残る。底部外面に「口廿」墨書。
463	3区 D42CT 池1	灰釉陶器 小椀	10.0 3.2	7.5Y8/1～ 8/2灰白色。 緻密。	平坦な底部に、内湾した三日月高台が付く。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部でやや外反する。端部は丸くおさめる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面のナデ残した部分から体部下半にかけて回転ヘラケズリ調整。体部上半から底部内面は回転ナデ調整。口縁端部は外方につまみ出す。施釉は体部内外面に薄く塗掛けを施す。	ほぼ完存。底部外面に「長」墨書。
464	4区 D52BU 建物10	灰釉陶器 椀	高台 部径 6.0 —	5Y8/1灰白色。 緻密、やや砂を含む。	平坦な底部に、内湾した三日月高台が付く。体部は浅く外上方に広がる。	底部高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面のナデ残した部分から体部下半にかけて回転ヘラケズリ調整。釉は灰オリーブ色を呈し、体部内外面に厚く釉を塗掛けで施釉する。	底部完存。重ね焼きで、擦痕が内面に残る。底部外面に「三」墨書。
465	3区 D42IR 池1	緑釉陶器 椀	高台 部径 6.8 —	5Y8/1灰白色。 緻密、微砂を少量含む。	底部は中央がやや凹んだ円盤高台で、体部が緩やかに外上方に立ち上がる。	底部は円盤ケズリ出し、内面は回転ナデ調整で後にヘラミガキ調整。底部外面を除き全体に淡く灰白色を呈する緑釉を施す。	底部から体部約1/2の破片。底部外面に「井」墨書。京近郊産。
466	3区 D42ER 池1		13.0 4.7	7.5Y7/1灰白色。 緻密、微砂をやや含む。	やや丸みを帯びた底部に断面方形の輪高台で、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。体部中央で内側に屈曲して稜をなし、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。	底部は円盤ケズリ出し、体部外面の稜は上下を回転ヘラケズリすることで作り出す。口縁部から内面にかけては回転ナデ調整。体部内側の屈曲部は強い回転ナデ。底部内面および体部外面はヘラミガキ調整。底部外面を除き全体に濃く緑釉を施すが、ムラが多い。	約1/2が残る。底部外面に「侍」墨書。京近郊産。
467	3区 D42HR 池1	土師器 杯A	— —	7.5YR6/4に ぶい橙色。 緻密、やや砂を多く含む。	体部は緩やかに外上方に立ち上がり、口縁部で屈曲して外反する。端部は上方に肥厚する。	体部外面はオサエ成形、粗いナデ調整。口縁部を横方向にナデつけて成形・調整し、体部内面屈曲部を強く横ナデして仕上げる。	口縁部破片。体部外面に「葉」墨書。
468	1区 D43 BK・BL 井戸1	須恵器 鉢	— —	7.5Y7/1灰白色。 緻密。	体部が外上方に緩やかに立ち上がる。	内外面とも回転成形、回転ナデ調整。	体部破片。外面に「奉(カ)」墨書。

平安時代後期土器(図版33)

552	1区 D43MI 溝101	土師器 小皿	10.0 1.5	7.5YR8/1灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底から、口縁が屈曲して外反し、端部は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形、後に粗いナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデで成形し、端部を上方につまみ上げる。内面の底部と口縁部の境界は強くオサエで屈曲を強調し、最後に横ナデ調整して仕上げる。	約1/3の破片。
553			10.0 1.3	10YR8/2灰白色。 緻密。	552に同じ。	底部外面はオサエ成形、後に粗いナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデで成形し、端部を上方につまみ上げる。内面の底部と口縁部の境界は横ナデ調整して仕上げる。	約1/5の破片。
554	1区 D43 LC・LD MC・MD 溝101		9.8 1.6	7.5YR7/4に ぶい橙色～ 10YR 7/3に ぶい黄橙色。 緻密、粗砂を含む。	552に同じ。	552に同じ。	約2/3の破片。
555	1区 D43MI 溝101		10.0 1.5	10YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密、赤色小礫・砂を少量含む。	552に同じ。	552に同じ。	約1/3の破片。
556	1区 D43MJ 溝101		10.3 1.5	7.5YR7/1明 褐灰色。 緻密。	552に同じ。	552に同じ。	約1/5の破片。
557			10.4 1.7	10YR8/2灰白色。 緻密、砂を少量含む。	552に同じ。	552に同じ。	口縁の一部を欠損するのみでほぼ完存。
558	1区 D43 LJ・LK MJ・MK 溝101		9.2 1.4	2.5Y6/3に ぶい黄色。 緻密。	平坦な底部から、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデ調整。内面の底部と口縁部の境界は強くオサエで屈曲を強調する。	約1/5の破片。

土器類 (図版33)

559	1区 D43MJ 溝101	土師器 小皿	9.7 1.6	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底か ら、口縁部が内湾気味に 立ち上がり、端部を丸く おさめる。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。粘土継 目が残る。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部 は横ナデ調整。内面の底部と口縁部の境界は強 くナデつけて口縁部を2段の屈曲とし、ナデ上 げて仕上げる。	ほぼ完存。
560	1区 D43 LJ・LK MJ・MK 溝101		10.0 1.4	10YR8/2灰白 色。 緻密。	559に同じ。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデ調整。内 面の底部と口縁部の境界は強くナデつける。	約1/3の破片。
561	1区 D43MJ 溝101		9.4 1.7	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密、粗砂を 含む。	559に同じ。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。粘土継 目が残る。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部 は横ナデ調整。内面の底部と口縁部の境界は強 くナデつけて仕上げる。	完存。
562	1区 D43 MI・MK 溝101		9.9 1.6	10YR7/4にぶ い黄橙色。 緻密、赤色小 礫を少量含 む。	559に同じ。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデ調整。内 面の底部と口縁部の境界は強くナデつけて口縁 部を2段の屈曲とする。	約1/3の破片。
563	1区 D43 MI~MK 溝101		10.4 1.8	2.5Y8/3淡黄 色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底か ら、口縁部が緩やかに立 ち上がる。口縁端部でや や外反し、端部を丸くお さめる。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデ調整。内 面の底部と口縁部の境界は強くナデつけて口縁 部を2段の屈曲とし、口縁端部をやや外へつま み出す。	約2/3の破片。
564	1区 D43MJ 溝101		10.0 1.9	7.5Y8/3淡黄 橙色。 緻密、赤色小 礫・砂を少量 含む。	563に同じ。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデ調整。内 面の底部と口縁部の境界は強くナデつけ、口縁 端部をやや外へつまみ出す。	約1/3の破片。
565			10.2 1.7	7.5Y8/3淡黄 橙色。 緻密、砂を少 量含む。	563に同じ。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。粘土継 目が残る。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部 は横ナデ調整。内面の底部と口縁部の境界は強 くナデつけて口縁部を2段の屈曲とし、口縁端 部をやや外へつまみ出す。	完存。
566	1区 D43MI 溝101	土師器 大皿	10.2 1.9	10YR7/3にぶ い黄橙色。 緻密、粗砂を 含む。	563に同じ。	563に同じ。	完存。
567			10.4 2.2	7.5Y8/3淡黄 色。 緻密、砂を少 量含む。	563に同じ。	563に同じ。	約2/3の破片。
568	1区 D43 LJ・LK MJ・MK 溝101		13.4 2.5	7.5YR7/4浅 黄橙色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底か ら、体部が緩やかに立ち 上がる。口縁部はやや屈 曲して外反し、端部を丸 くおさめる。	底部から体部外面はオサエ成形、後にナデ調 整。底部内面はナデ調整。口縁部から体部内面 は横ナデ調整。口縁部の境界は強くナデつけて 2段の屈曲とし、口縁端部をやや外へつまみ出 す。	口縁部から底部 約1/5の破片。
569	1区 D43MJ 溝101		15.0 2.3	10YR8/1灰白 色。密、軟 質。	568に同じ。	568に同じ。	口縁部から底部 約1/6の破片。
570	1区 D43MI 溝101		14.5 1.9	10YR8/2灰白 色。緻密。	平坦な平底部から、体部 が緩やかに立ち上がる。 口縁部はやや屈曲し、端 部を丸くおさめる。	底部から体部外面はオサエ成形、後にナデ調 整。底部内面はナデ調整。口縁部から体部内面 は横ナデ調整。体部と口縁部の境界は強くオサ エするが、口縁部の屈曲は弱い。	口縁部から底部 約1/6の破片。
571	1区 D43MJ 溝101		14.6 2.5	10YR8/2灰白 色。 密、やや軟 質。	570に同じ。	570に同じ。	口縁部から底部 約1/4の破片。
572		瓦器 小皿	9.8 2.0	N4/灰色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底か ら、口縁部が緩やかに立 ち上がる。口縁部でやや 外反し、端部を丸くおさ める。	底部外面はオサエ成形、後に粗いナデ調整。底 部内面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整。仕上 げは口縁内面に丁寧なヘラミガキ、底部内面は 波状のヘラミガキを施す。	完存。
573	1区 D43MI 溝101	瓦器 碗	9.4 2.0	N3/暗灰色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底か ら、口縁部が緩やかに立 ち上がる。口縁部で外反 し、端部を丸くおさめ る。	底部外面はオサエ成形、後に粗いナデ調整。底 部内面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整で端部 をやや外につまみ出す。仕上げは口縁内外面お よび底部内面に丁寧なヘラミガキを施す。	完存。
574	1区 D43MJ 溝101		14.3 —	5P3/1暗紫灰 色~5RP7/1 明紫灰色。 密、軟質。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁部でや や内側に屈曲させる。端 部は丸くおさめる。	底部高台は貼り付け、ナデ調整。体部外面はオ サエ成形後に粗いナデ調整。口縁内外面から体 部内面に掛けてヘラミガキ調整を施す。	口縁から高台に かけて約1/6の 破片。
575	第1次 D53EL 押小路路 面	土師器 小皿	9.4 1.5	5YR6/4にぶ い橙色。 密、やや軟 質、微砂をや や多く含む。	平坦な底部から、口縁が 浅く外上方に立ち上が る。口縁端部は丸くおさ める。	底部は回転ヘラキリ後に、ナデ調整。口縁部か ら内面に掛けて回転成形・ナデ調整。底部内面 と口縁との境界は強い回転ナデで、凹みを作 る。	回転土師器。約 1/4の破片。

遺物観察表

576	5区 D43RM 井戸101	土師器 小皿	9.6 1.4	2.5Y7/1灰白色。 緻密、砂・小礫を少量含む。	平坦な底部から、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部はやや上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。底部内面はナデ調整。口縁部は横ナデ調整。	約1/5の破片。
577	6区 D43 OE・OF 溝102		11.8 2.1	7.5YR8/2灰白色。 密、砂・小礫を少量含む。 外面端部がやや赤い。	やや丸みを帯びた平底から、体部が緩やかに立ち上がる。口縁部で内側に屈曲してやや外反し、端部を丸くおさめる。	底部から体部外面はオサエ成形、後に粗いナデ調整。底部内面はナデ調整。口縁部から体部内面は横ナデ調整。口縁部の境界は強くナデつけて2段の弱い屈曲とし、口縁端部をやや外へつまみ出す。	約1/6の破片。
578		土師器 大皿	16.0 —	10YR8/2灰白色。 緻密、赤色礫を含む。	底部から体部が緩やかに立ち上がる。口縁部で内側に屈曲してやや外反し、端部を丸くおさめる。	体部外面はオサエ成形、後に粗いナデ調整。口縁部から体部内面は横ナデ調整。口縁部の境界は強くナデつけ、口縁端部をやや外へつまみ出す。	口縁から体部の破片。
579	4区 D43YF 建物102	土師器 小皿	8.8 1.4	10YR7/3にぶい黄橙色。 緻密、砂を含む。	底部から口縁部が外反して立ち上がり、端部を丸くおさめる。	底部外面はオサエ成形後にナデ調整。口縁部内外面は横ナデ調整。口縁外面は強い2段ナデで、口縁端部をやや外へつまみ出す。	口縁から体部の破片。
580	4区 D43XE 建物102		10.0 1.3	10YR8/2灰白色。 緻密。	平坦な底部から、口縁が屈曲して外反し、端部は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデで成形し、端部を上方につまみ上げる。内面の底部と口縁部の境界は強くオサエで屈曲を強調し、最後に横ナデ調整して仕上げる。	約3/4の破片。 口縁部に灯芯の痕跡が残る。
581	4区 D43XE 建物102		10.0 1.5	10YR8/3浅黄橙色。 外面7.5YR7/4にぶい橙色。 緻密、粗砂を含む。	やや丸みを帯びた平底から、口縁が屈曲して外反し、端部は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形、後に粗いナデ調整。粘土継目が残る。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデで成形し、端部を上方につまみ上げる。内面の底部と口縁部の境界は強くオサエで、最後に横ナデ調整して仕上げる。	約1/4の破片。
582	4区 D43YB 第1面		8.4 1.4	7.5YR8/4浅黄橙色。 緻密、赤色小礫を多量に含む。	平坦な底部から、口縁が浅く外上方に外反する。口縁端部は丸くおさめる。	底部は回転ヘラキリ後に、ナデ調整。口縁部から内面にかけて回転成形・ナデ調整。底部内面と口縁との境界は強い回転ナデで、屈曲を強調する。	回転成形土師器。約1/6の破片。
583	4区 D43YE 建物102		8.8 1.4	10YR7/3にぶい黄橙色。 緻密、砂を含む。	582に同じ。	底部は回転ヘラキリ後に、粗いナデ調整。口縁部から内面にかけて回転成形・ナデ調整。底部内面に成形時の轆轤目および寄りジワが明瞭に残る。底部内面と口縁との境界は強い回転ナデで、屈曲を強調する。	回転成形土師器。口縁部約1/4を欠損するがほぼ完存。
584	4区 D43YB 建物103		8.5 1.1	7.5YR6/4にぶい橙色。 緻密、赤色小礫を含む。	582に同じ。	582に同じ。	回転土師器。約3/4の破片。
585	4区 D43XE 建物102	土師器 杯	14.2 3.6	10YR8/4浅黄橙色。 緻密、赤色小礫を含む。	平坦な底部から、体部が緩やかに外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	底部は回転ヘラキリ後に、粗いナデ調整。口縁部から内面にかけて回転成形・ナデ調整。底部内面に轆轤目とともに沈線が1条巡る。	回転成形土師器。底部完存。口縁部は約1/3が残る。
586		瓦器 碗	14.8 5.8	N4/灰色。 密、やや軟質。	平坦な底部に断面逆台形の高台が付く。体部は内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。	高台は貼り付け、横ナデ調整。口縁部も横ナデ調整。体部外面はオサエ成形の後に粗いヘラミガキ調整。内面は丁寧なヘラミガキ調整か。	約1/3の破片。
587	4区 D43YB 第1面		15.0 5.5	2.5Y8/1灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に断面逆台形の高台が付く。体部は内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部でやや外反し、端部を丸くおさめる。口縁端部内側に1条の沈線が巡る。	高台は貼り付け、横ナデ調整。口縁部も横ナデ調整。体部外面はオサエ成形、内外面の調整は不明。	約1/3の破片。
588	第1次 D53FL 溝105	土師器 小皿	9.6 1.5	10YR8/1灰白色。 緻密、砂を少量含む。	平坦な底部から、口縁が屈曲して外反し、端部は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形、後に粗いナデ調整。底部内面はナデ調整。口縁部は横ナデで成形し、端部を上方につまみ上げる。内面の底部と口縁部の境界は強くオサエで屈曲を強調し、最後に横ナデ調整して仕上げる。	一部欠損するだけで、ほぼ完存。
589			10.1 1.8	10YR8/2灰白色。 緻密、微砂を少量含む。	やや丸みを帯びた平底から、口縁が屈曲して外反し、端部は上方に肥厚する。	底部外面はオサエ成形、後に粗いナデ調整。粘土継目が残る。底部内面はナデ調整。口縁部は横ナデで成形し、端部を上方につまみ上げる。内面の底部と口縁部の境界は強くオサエで屈曲を強調し、最後に横ナデ調整して仕上げる。	一部欠損するだけで、ほぼ完存。
590	第1次 D53EL 溝104		10.4 1.7	7.5YR8/2灰白色。 緻密。	588に同じ。	588に同じ。	約1/5の破片。

土器類 (図版33)

591	第1次 D53 EM・EN 野寺小路 川	土師器 小皿	9.4 1.8	5Y5/1灰色～ 5Y7/1灰白 色。 緻密、微砂を 少量含む。	588に同じ。	588に同じ。	約1/3の破片。
592			10.0 1.6	2.5Y8/1灰白 色。 緻密。	588に同じ。	588に同じ。	底部は欠損する が、口縁は約 2/3が残る。
593			10.2 1.5	7.5YR8/3浅 黄橙色。 緻密、砂を少 量含む。	589に同じ。	底部外面はオサエ成形、後に粗いナデ調整。底 部内面はナデ調整。口縁部は横ナデで成形し、 端部を上方につまみ上げる。内面の底部と口縁 部の境界は横ナデ調整して仕上げる。	約1/3の破片。
594	第1次 D53FN 野寺小路 川		9.3 1.9	10YR7/2にぶ い黄橙色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底か ら、口縁部が内湾気味に 立ち上がり、端部を丸く おさめる。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデ調整。内 面の底部と口縁部の境界は強くナデつけて仕上 げる。	約1/4の破片。
595	第1次 D53LN 野寺小路 川		9.8 2.0	10YR8/1灰白 色。 緻密、砂を少 量含む。	594に同じ。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。粘土継 目が残る。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部 は横ナデ調整。内面の底部と口縁部の境界は強 くナデつけて口縁部を2段の屈曲とする。	約1/2の破片。
596	第1次 D53 EL・EN 野寺小路 川		9.9 1.8	7.5YR8/3浅 黄橙色。 緻密、赤色小 礫・砂を少量 含む。	594に同じ。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。粘土継 目が残る。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部 は横ナデ調整。内面の底部と口縁部の境界は強 くナデつけて口縁部を弱い2段の屈曲とし、ナ デ上げて仕上げる。	完存。
597	第1次 D53AM 野寺小路 川	土師器 大皿	10.2 1.7	10YR7/1灰白 色。 緻密、砂を少 量含む。	594に同じ。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデ調整。内 面の底部と口縁部の境界は強くナデつけて口縁 部を弱い2段の屈曲とする。	約1/4の破片。
598	第1次 D53CM 野寺小路 川		10.3 1.8	10Y R7/2に ぶい黄橙色。 緻密、赤色小 礫・砂を少量 含む。	594に同じ。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。粘土継 目が残る。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部 は横ナデ調整。内面の底部と口縁部の境界は強 くナデつけて口縁部を2段の屈曲とし、ナデ上 げて仕上げる。	約1/2の破片。 口縁に灯芯の痕 跡が残る。
599			11.0 1.8	2.5Y7/1灰白 色。 緻密、赤色小 礫を少量含 む。	594に同じ。	底部外面はオサエ成形、後にナデ調整。底部内 面は丁寧なナデ調整。口縁部は横ナデ調整。内 面の底部と口縁部の境界は強くナデつけて仕上 げる。	底部は欠損する が、口縁は約 2/3が残る。
600			14.3 2.4	7.5YR7/3に ぶい橙色。 緻密、砂を少 量含む。	平坦な底部から、体部が 緩やかに立ち上がる。口 縁部はやや屈曲し、端部 を丸くおさめる。	底部から体部外面はオサエ成形、後にナデ調 整。粘土継目が残る。底部内面はナデ調整。口 縁部から体部内面は横ナデ調整。口縁部は強く ナデつけて2段の屈曲とし、口縁端部をやや外 へつまみ出す。	約1/3の破片。
601			14.4 2.8	7.5YR7/3に ぶい橙色。 緻密。	600に同じ。	600に同じ。	口縁から底部に かけて、約1/5 の破片。
602	第1次 D53BM 野寺小路 川		15.6 3.0	5Y R7/4にぶ い橙色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	600に同じ。	600に同じ。	約1/4の破片。
603	第1次 D53JN 野寺小路 川		15.4 2.8	10YR8/1灰白 色。 緻密、砂を少 量含む。	600に同じ。	底部から体部外面はオサエ成形、後にナデ調 整。粘土継目が残る。底部内面はナデ調整。口 縁部から体部内面は横ナデ調整。口縁部は強く ナデつけて2段の屈曲とし、口縁端部をやや内	底部は欠損する が、口縁部は約 1/2が残る。
604	第1次 D53CM 野寺小路 川		15.8 2.5	7.5YR7/2明 褐灰色～ 7.5YR8/2灰 白色。 緻密。	600に同じ。	600に同じ。	約1/4の破片。
605			16.4 2.5	10YR8/3浅黄 橙色。 緻密。	600に同じ。	600に同じ。	約1/6の破片。
606	第1次 D53AM 野寺小路 川	土師器 杯	14.5 3.8	10YR7/2にぶ い黄橙色。 緻密、雲母片 をやや含む。	平坦な底部から、体部が 直線的に外上方へ立ち上 がる。口縁端部を丸くお さめる。	底部外面は回転ヘラキリ後に粗いナデ調整。体 部から口縁部は回転成形。底部内面に成形時の 轆轤目と寄りジワが残る。	回転成形土師 器。約1/4の破 片。
607	第1次 D53 AM～CM 野寺小路 川	瓦器 碗	14.6 —	5GY8/1灰白 色。 外面N3/暗灰 色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に 外に踏張った断面逆台形 の高台が付く。体部は内 湾しながら外上方に立ち 上がり、口縁部でやや外 反し、端部を丸くおさめ る。口縁端部内側に1条の 沈線が巡る。	底部から体部外面はオサエ成形で、高台は貼り 付け、横ナデ調整。口縁部も横ナデ調整。口縁 部外面から体部内面は丁寧なヘラミガキ調整。 体部外面にも粗いヘラミガキ調整。底部内面の 見込みには螺旋状ヘラミガキを施す。	口縁部から体部 約1/5の破片と 底部約1/2の破 片。

608	第1次 D53HM 野寺小路 川	白磁 皿	10.6 2.0	7.5Y8/1灰白 色。 緻密、黒色微 砂を少量含 む。	底部から体部が内湾しな がら浅く立ち上がり、端 部を丸くおさめる。	底部は回転ヘラケズリ調整。体部から内面にか けて回転成形。体部内面に弱く沈線を巡らし、 底部内面の見込みにはヘラ描き草花文を施す。 釉は内面から体部上半にかけて厚く施し、貫入 が入る。釉色は灰白色を呈する。	口縁部から底部 端の破片。 Ⅶ類。
609	第1次 D53FM 野寺小路 川		高台 部径 4.4 —	N8/灰白色。 緻密、黒色微 砂を少量含 む。	底部は中央が凹み端部が 低く高台状となる。体部 は浅く内湾気味に外上方 へ広がる。	底部から体部下半は回転ヘラケズリ調整。底部 内面と体部の境界に沈線状に段を設け、内面見 込みに花文状のヘラ描きを施す。釉は内面から 体部にかけて施す。釉色は灰白色を呈する。	底部から体部の 約1/2の破片。 Ⅶ類。
610	第1次 D53IN 野寺小路 川	白磁 碗	15.6 —	2.5Y7/1灰白 色。 緻密、黒色微 砂を少量含 む。	体部は内湾しながら立ち 上がり、口縁端部は外側 に小さく肥厚する。	体部は回転成形。口縁は折り曲げて玉縁状に仕 上げる。化粧土を有し、釉は内外面に薄く施 す。貫入が認められる。釉色は灰白色を呈す る。	口縁部から体部 の破片。内面に 擦痕が残る。 Ⅱ類。
611	第1次 D53FM 野寺小路 川		16.6 —	10YR7/2にぶ い黄橙色。 緻密、細かい 空洞が目立 つ。	610に同じ。	体部は回転成形。口縁は折り曲げて玉縁状に仕 上げる。体部内面には沈線を巡らす。化粧土を 有し、釉は内外面に厚く施す。貫入が認められ る。釉色は灰白色を呈する。	口縁部から体部 の破片。 Ⅳ類。
612	第1次 D53JN 野寺小路 川		16.5 —	10YR8/1灰白 色。 緻密、黒色の 微砂を多く含 む。	610に同じ。	体部は回転成形。口縁は折り曲げて玉縁状に仕 上げる。化粧土を有し、釉は内外面に厚く施 す。内面には気泡が認められる。釉色は灰白色 を呈する。	口縁部から体部 の破片。 Ⅳ類。
613	第1次 D53KM 野寺小路 川		高台 部径 6.6 —	10YR7/1灰白 色。 緻密、黒色微 砂を多く含 む。	底部には断面逆台形の低 い高台が付き、体部は外 上方に緩やかに立ち上が る。	底部はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体 部外面下端に及ぶ。内面は回転ナデ調整。化粧 土を有し、釉は内面から体部外面まで厚く施 すが、体部下端および底部には及ばない。釉色 は明褐色を呈する。	底部から体部約 1/2の破片。 Ⅳ類。
614	第1次 D53EL溝 104		15.8 —	7.5Y8/1灰白 色。 緻密、黒色砂 をやや含む。	体部は内湾しながら立ち 上がり、口縁部で屈曲し て外反する。端部は丸く おさめる。	体部外面は粗い回転ヘラケズリ。内面は回転ナ デ調整。口縁部は強く回転ナデを施すことに よって外反させる。化粧土を有し、釉は内外面 に厚く施す。釉色は灰白色を呈する。	口縁部から体部 約1/6の破片。 Ⅴ類。
615	第1次 D53LN 野寺小路 川		17.3 —	N8/灰白色。 緻密、黒色微 砂を多く含 む。	614に同じ。	体部外面は粗い回転ヘラケズリ。内面は回転ナ デ調整。内面口縁部より下がった位置に沈線を 1条巡らす。口縁部は強く回転ナデを施すこと によって外反させる。化粧土を有し、釉は明オ リーブ灰色を呈し、内外面に厚く施す。	口縁部から体部 の破片。 Ⅴ類。
616	第1次 D53DM 野寺小路 川		高台 部径 6.2 —	10YR7/1灰白 色。 緻密、黒色微 砂を多く含 む。	底部には断面逆台形の、 高く細い高台が付く。	底部はケズリ出し成形。化粧土を有し、釉は灰 白色を呈し、内面に厚く施す。貫入が認められ る。	底部のみ。 Ⅴ類。
617	第1次 D53FM 野寺小路 川		高台 部径 6.6 —	7.5Y6/1灰白 色。 やや粗、微砂 を多く含む。	底部には断面逆台形の、 高い高台が付き、体部は外 上方に緩やかに立ち上が る。	底部はケズリ出し成形で、回転ヘラケズリは体 部外面下端に及ぶ。内面は回転ナデ調整。底部 内面と体部の境界にヘラで沈線を巡らして段を 設ける。化粧土を有し、釉は灰黄色を呈し、内 面から体部外面まで厚く施すが、体部下端には 一部掛かるだけで基本的には及ばない。	底部のみ。 Ⅴ類。

室町時代から江戸時代土器(図版34)

618	3区 D42 HS~JS 第1面	土師器 へそ皿	6.6 1.7	10YR8/2灰白 色。 緻密。	やや中央の窪む平底か ら、体部が緩やかに外上 方に立ち上がる。口縁部 は屈曲して外反し、端部 を上方へ肥厚させて丸く おさめる。	底部から体部外面はオサエ成形。口縁外面から 内面にかけて横ナデ調整。底部内面と体部の境 界を強くナデつける。口縁端部はやや上方へつ まみ出す。	約1/3の破片。
619	3区 D43FB 耕作溝		7.0 1.8	7.5YR8/3浅 黄橙色。 緻密、赤色礫 を少量含む。	中央の凹んだ底部から、 体部が緩やかに外上方に 立ち上がる。口縁端部は 丸くおさめる。	底部から体部外面はオサエ成形。口縁外面から 内面にかけて横ナデ調整。	約1/3の破片。
620	3区 D42HR 第1面		6.6 1.6	2.5Y8/1灰白 色。 緻密、赤色礫 や小石含む。	619に同じ。	底部から体部外面はオサエ成形。口縁外面から 内面にかけて横ナデ調整。底部内面と体部の境 界を強くナデつける。	口縁部約1/4を 欠損。
621	3区 D42 GU・HU 耕作溝		7.0 1.6	10YR8/2灰白 色。 緻密、茶色礫 や砂を含む。	中央の凹んだ底部から、 体部が緩やかに外上方に 立ち上がる。口縁部は屈 曲して外反し、端部を上 方へやや肥厚させて丸く おさめる。	底部から体部外面はオサエ成形。口縁外面から 内面にかけて横ナデ調整。口縁端部はやや上方 へつまみ出す。底部内面と体部の境界を強くナ デつける。	約1/4の破片。
622	3区 D42 HQ~HS 耕作溝		6.8 1.7	10YR8/2灰白 色。 緻密。	中央の凹んだ底部から、 体部が緩やかに外上方に 立ち上がる。口縁部で外 反し、端部は水平気味に 丸くおさめる。	底部から体部外面はオサエ成形。体部外面に成 形時の寄りジワが残る。口縁外面から内面にか けて横ナデ調整。口縁端部はやや外へつまみ出 す。	完存。

土器類 (図版34)

623	3区 D42 CR・CS DR・DS 第1面	土師器 へそ皿	6.4 1.7	10YR8/3浅 黄橙色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	621に同じ。	底部から体部外面はオサエ成形。体部外面に成形時の寄りジワが残る。口縁外面から内面にかけて横ナデ調整。口縁端部はやや上方へつまみ出す。底部内面と体部の境界を強くナデつける。	完存。
624	3区 D42 HS・IS 耕作溝		7.0 1.8	2.5Y8/1灰白 色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	621に同じ。	底部から体部外面はオサエ成形。口縁外面から内面にかけて横ナデ調整。底部内面と体部の境界を強くナデつける。口縁端部はやや上方へつまみ出す。	約2/3の破片。
625	3区 D42 DV～FV 耕作溝		6.2 2.0	10YR8/2灰 白色。 緻密、5mm角 の小石含む。	中央の凹んだ底部から、 体部が緩やかに外上方に 立ち上がる。口縁部は屈 曲し、端部を上方へやや 肥厚させて丸くおさめる。	624に同じ。	約2/3の破片。
626	3区 D42 HS～LS 耕作溝		6.8 1.8	10YR8/2灰 白色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	621に同じ。	623に同じ。	完存。
627	4区 D43 WE～WJ 耕作溝		6.4 1.7	10YR8/2灰 白色。 緻密、赤色礫 や粗砂を含む。	619に同じ。	底部から体部外面はオサエ成形。口縁外面から内面にかけて横ナデ調整か。	約1/2の破片。
628	4区 D43 UE・UF 耕作溝		6.8 1.9	2.5Y8/2灰白 色。 緻密。	621に同じ。	623に同じ。	完存。
629	4区 D43 VE～VJ 耕作溝		6.8 2.0	2.5Y8/1灰白 色。 緻密、粗砂を 含む。	621に同じ。	627に同じ。	約1/2の破片。
630	4区 D42 VU～VX 耕作溝		6.5 1.6	10YR8/2灰 白色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	621に同じ。	623に同じ。ナデ上げた痕跡が残る。	約1/3の破片。
631	4区 D43 VF・WF 耕作溝		6.6 1.8	2.5Y8/1灰白 色。 緻密、茶色礫 や砂を含む。	中央の凹んだ底部から、 体部が緩やかに外上方に 立ち上がる。口縁部は屈 曲して外反し、端部を丸 くおさめる。	620に同じ。	約2/3の破片。
632	4区 D43UJ 耕作溝	土師器 皿	7.2 1.7	10YR8/2灰 白色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	621に同じ。	627に同じ。	約1/3の破片。
633	4区 D52 DU・EU 第1面		7.2 2.1	7.5YR8/3浅 黄橙色。 緻密、砂を含 む。	621に同じ。	623に同じ。ナデ上げた痕跡が残る。	約1/4の破片。
634	4区 D43 VE～VJ 耕作溝		6.8 1.5	2.5Y8/1灰白 色。 緻密、砂を含 む。	中央の凹んだ底部から、 体部が緩やかに外上方に 立ち上がる。口縁端部は 上方へやや肥厚させて丸 くおさめる。	627に同じ。	口縁部約1/4の 破片。
635	4区 D42 VU～VX 耕作溝		7.8 (1.6)	7.5YR7/3に ぶい橙色。 緻密、赤色礫 や5mm角の小 石含む。	底部から体部が緩やかに 外上方に立ち上がり、端 部を丸くおさめる。	体部内外面は横ナデ調整。底部内面と体部の境界を強くナデつけ、最後にナデ上げる。	赤系土器。 口縁部約1/6の 破片。
636	3区 D42 DT～GT DU～GU 耕作溝		9.8 1.9	10YR8/2灰 白色～ 10YR7/2に ぶい黄橙色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	平坦な底部から、屈曲し ながら外上方に体部が立 ち上がり、口縁端部を丸 くおさめる。	底部から体部外面はオサエ成形後、粗いナデ調整。口縁外面から内面にかけて横ナデ調整。底部内面と体部の境界を強くナデつける。	赤系土器。 口縁部から底部 にかけて約1/6 の破片。
637	3区 D42 GH・ST 第1面		9.9 1.8	10YR8/3浅 黄橙色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	636に同じ。	底部から体部外面はオサエ成形後、粗いナデ調整。口縁外面から内面にかけて横ナデ調整。底部内面と体部の境界を強くナデつけ、最後にナデ上げる。	赤系土器。 約1/3の破片。
638	6区 D43 QE・QF 溝102 上層		12.0 1.4	5YR7/6橙 色。 密、やや軟 質、赤色礫を 含む。	平坦な底部から、口縁が 外上方に外反する。口縁 端部は丸くおさめる。	底部内外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁部は横ナデ調整。底部内面と口縁部の境界を強くナデつけ、段を設ける。	赤系土器。 約2/3の破片。

639	3区 D42 GH・ST 第1面	土師器 皿	11.2 1.9	10YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	底部から外反しながら外 上方に体部が立ち上が り、口縁端部は上方へや や肥厚させて丸くおさめ る。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁 外面から内面にかけて横ナデ調整。口縁端部は やや上方へつまみ出す。底部内面と体部の境界 を強くナデつける。	赤系土器。 口縁から体部約 1/6の破片。
640	4区 D43 VE～VJ 耕作溝	土師器 大皿	12.8 (2.2)	10YR8/2灰 白色。 緻密、粗砂を 含む。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁端部は 上方へやや肥厚させて丸 くおさめる。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁 外面から内面にかけて横ナデ調整。口縁端部は やや上方へつまみ出す。	口縁から体部約 1/6の破片。
641	6区 D43 NH～PH NI～PI 耕作溝		14.2 (2.8)	10YR8/3浅 黄橙色。 緻密。	体部は外反気味に外上方 に立ち上がり、口縁端部 は上方へやや肥厚させて 丸くおさめる。	640に同じ。	口縁から体部約 1/6の破片。
642	4区 D53 BF～BH 耕作溝		14.2 (2.2)	10YR8/2灰 白色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	体部は外反気味に外上方 に立ち上がり、口縁端部 は丸くおさめる。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁 外面から内面にかけて横ナデ調整。	口縁から体部約 1/6の破片。
643	4区 D43・53 VF～CF 耕作溝		14.2 2.1	7.5YR8/4浅 黄橙色。 緻密、赤色礫 や砂を含む。	平坦な底部から、体部は 外反気味に外上方に立ち 上がり、口縁端部は丸く おさめる。	体部外面はオサエ成形後にナデ調整。口縁外面 から内面にかけて横ナデ調整。	口縁から底部約 1/5の破片。
644	4区 D43 VF～YF 耕作溝		15.4 2.1	10YR8/3浅 黄橙色。 緻密、茶色礫 や砂を含む。	体部は外反気味に外上方 に立ち上がり、口縁端部 は丸くおさめる。	643に同じ。	口縁から体部約 1/6の破片。
645	4区 D43 VE～VI 耕作溝		15.0 —	10YR8/2灰 白色。 緻密、茶色や 砂を含む。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁部はや や外反する。端部は上方 へやや肥厚させて丸くお さめる。	640に同じ。	口縁から体部約 1/6の破片。
646	2区 D42 AQ・BQ 耕作溝		10.4 2.5	10YR8/2灰 白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部か ら、体部は緩やかに外上 方に立ち上がり、口縁部 はやや外反する。端部は 上方へやや肥厚させて丸 くおさめる。	底部から体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調 整。口縁外面から内面にかけて横ナデ調整。口 縁端部はやや上方へつまみ出す。	口縁から底部約 1/6の破片。
647	3区 D42 IU～KU 耕作溝		11.0 2.5	10YR8/2灰 白色。 緻密。	底部から体部は緩やかに 外上方に立ち上がり、口 縁部は外反する。端部は 丸くおさめる。	底部から体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調 整。口縁外面から内面にかけて横ナデ調整。底 部内面と体部の境界を強くナデつける。	口縁から底部約 1/6の破片。
648	4区 D43 WE～WF 耕作溝		11.3 (2.7)	10YR8/2灰 白色。 緻密、茶色の 礫を含む。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁部はや や外反する。端部は上方 へやや肥厚させて丸くお さめる。	640に同じ。	口縁から体部約 1/6の破片。
649	4区 D43 UE・UF 耕作溝		10.9 2.7	10YR8/2灰 白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部か ら、体部は緩やかに外上 方に立ち上がり、口縁部 はやや外反する。端部は 上方へやや肥厚させて丸 くおさめる。	646に同じ。	約1/4の破片。
650	4区 D43 YE～YI 耕作溝		12.7 (3.5)	10YR8/2灰 白色。 緻密、砂を含 む。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁端部は 丸くおさめる。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁 外面から内面にかけて横ナデ調整。口縁端部は やや上方へつまみ出す。	口縁から体部約 1/8の破片。
651	4区 D43 VE～VJ 耕作溝		12.8 (3.0)	10YR8/2灰 白色。 緻密。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁端部は 上方へやや肥厚させて丸 くおさめる。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。体部 外面に成形時の寄りジワが残る。口縁外面から 内面にかけて横ナデ調整。口縁端部はやや上方 へつまみ出す。	口縁から体部約 1/8の破片。
652	4区 D43 VI・VJ 耕作溝		14.5 (3.2)	10YR8/2灰 白色。 緻密、砂粒含 む。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁部は外 反する。端部は上方へや や肥厚させて丸くおさめ る。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁 外面から内面にかけて横ナデ調整。口縁端部は やや上方へつまみ出す。	口縁から体部約 1/8の破片。
653	7区 D42・43 QU～QA 耕作溝		16.4 —	10YR8/2灰 白色。 緻密。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁部は外 反する。端部は上方へや や肥厚させて丸くおさめ る。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁 外面から内面にかけて横ナデ調整。口縁端部は やや上方へつまみ出す。	口縁から体部約 1/6の破片。
654	3区 D42 NS・NT 第1面		16.2 (4.3)	10YR8/2灰 白色。 緻密、赤礫を 少量含む。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁部は外 反する。端部は上方へや や肥厚させて丸くおさめ る。	体部外面はオサエ成形後に粗いナデ調整。口縁 外面から内面にかけて横ナデ調整。口縁端部は やや上方へつまみ出す。	口縁から体部約 1/4の破片。

土器類 (図版34)

655	4区 西半 第1面	施釉陶器 碗	14.7 —	10YR7/2に ぶい黄橙色。 緻密。	体部は内湾して外上方に 立ち上がり、口縁端部は 丸くおさめる。	体部外面下端は回転ヘラケズリ。体部上半から 内面にかけては回転成形。内面から体部上半に かけて貫入が認められる。オリブ黄色を呈す る厚い釉を施す。	瀬戸茶碗。口縁 から体部約1/3 の破片。
656	3区 D42 GQ・GR 耕作溝	陶器 碗	高台 部径 5.7 —	5Y7/1灰白 色。緻密。	平坦な底部に断面三角形 の高台が付く。体部は緩 やかに外上方に立ち上 がる。	高台は貼り付け、回転ナデ調整。底部外面に 回転糸キリ痕跡が残る。体部外面から内面にかけ て回転成形・ナデ調整。内面にヘラでオロシ目 が施される。	底部約1/6の破 片。 美濃産。
657	3区 D42DR 第1面	施釉陶器 碗	11.4 (7.0)	5Y8/1灰白 色。緻密。	底部に断面逆台形の低い 高台が付く。体部は緩や かに外上方に立ち上 がり、口縁部で外反しな がら直立する。口縁端部は 丸くおさめる。	底部はケズリ出し高台。高台端面に回転糸キ リ痕跡が残る。体部外面から内面にかけて回転ナ デ成形。体部外面下端から底部を除いて、厚く 褐色の釉を施す。	国産天目茶碗。 底部完存破片と 口縁部から体部 の破片。
658	3区 D42 DQ・EQ 耕作溝	白磁 皿	10.0 —	N7/灰白色。 緻密。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁部でや や外反する。	回転成形。内外面に厚く灰白色の釉を施すが、 口縁端部が口禿となる。	口縁部から体部 の小破片。 Ⅹ類。
659	3区 D42LS 耕作溝		底部 径6.0 —	7.5Y8/1灰白 色。緻密。	やや中央が凹んだ平底か ら、体部が緩やかに外上 方に立ち上がる。	回転成形。底部内面と体部の境界に沈線が巡 る。釉は底部内外面に厚く施す。釉色は灰白色 を呈する。	底部約1/5の破 片。 Ⅹ類。
660	3区 東半 第1面		12.0 —	N9/白色。 緻密。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁部で外 反する。	回転成形。内外面に厚く明緑灰色の釉を施す が、口縁端部が口禿となる。	口縁部から体部 の小破片。 Ⅹ類。
661	3区 D42 IT~KT 耕作溝	青磁 碗	13.0 —	N8/~ 2.5GY8/1灰 白色。緻密。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁端部を 厚く丸くおさめる。	体部外面に簡略した連弁文を、内面に片刀の草 花文を入れる。内外面に厚く明オリブ灰色を 呈する釉を施し、口縁からの釉垂れが認められ る。	口縁から体部約 1/8の破片。
662			14.0 —	N8/灰白色。 緻密。	体部は内湾しながら外上 方に立ち上がり、口縁端 部を丸くおさめる。	口縁外面に雷文状の装飾帯を持ち、体部外面に 片刀の文様（連弁文か）を刻む。内外面に貫入 が認められるオリブ灰色を呈する厚い釉を施 す。	口縁から体部約 1/8の破片。
663	3区 D42JS 第1面		高台 部径 5.2 —	N7.5/灰白 色。緻密。	底部に断面方形で面取り した高い高台が付く。体 部は内湾しながら外上方 に立ち上がる。	底部はケズリ出し高台。体部外面から内面に かけて回転成形。体部外面に片刀で六輪花を表現 する。内面見込みは不明瞭ながら円形の草花印 文。底部外面を除いて高台までオリブ灰色を 呈する釉を厚く施す。	底部から体部約 3/4の破片。
664	3区 D42 IT・JT ・KT 耕作溝		15.0 —	N8/灰白色。 緻密。	体部は内湾しながら外上 方に立ち上がり、口縁部 で強く外反する。端部は 丸くおさめる。	回転成形。釉は明オリブ灰色を呈し、内外面 に厚く施し、口縁からの釉垂れが認められる。	口縁から体部約 1/6の破片。
665	3区 D42 KV・LV 耕作溝		高台 部径 6.0 —	7.5Y8/1~ N8/灰白色。 緻密。	底部に断面方形で面取り した高い高台が付く。	底部はケズリ出し高台。体部外面から内面に かけて回転成形。内面見込みは不明瞭ながら円形 の草花印文。釉は明緑灰色を呈し、底部外面を 除いて高台まで厚く施釉する。	底部約2/3の破 片。
666	3区 D42 HT~JT 耕作溝		14.6 —	N8/灰白色。 緻密。	体部は内湾しながら外上 方に立ち上がり、口縁部 で外反する。端部は丸く おさめる。	回転成形。内外面に灰オリブ色を呈する釉を 厚く施す。貫入がやや認められる。	口縁部の小破 片。 龍泉窯系。
667	3区 D42ES 第1面		15.0 —	N6/灰色。 緻密。	体部は内湾しながら外上 方に立ち上がり、口縁部 で強く外反する。端部は 丸くおさめる。	回転成形。内外面にオリブ灰色を呈する釉を 施す。貫入がやや認められる。	口縁部から体部 約1/8の破片。 龍泉窯系。
668	3区 D42BP 第1面		高台 部径 6.2 —	N7/灰白色。 緻密。	底部に断面方形で面取り した高台が付く。体部下 端は浅く外上方に広がる。	底部はケズリ出し高台。体部外面から内面に かけて回転成形。底部内面と体部の境界に沈線 を巡らす。内面見込みは草花印文。釉はオリブ 灰色を呈し、底部外面を除いて高台まで厚く施 す。	底部から体部約 3/4の破片。 龍泉窯系。
669	3区 D42 FT・ST 第1面		高台 部径 6.4 —	7.5Y7/1灰白 色。緻密。	底部に断面方形で面取り した高台が付く。体部は 内湾気味に外上方に立ち 上がる。	底部はケズリ出し高台。体部外面から内面に かけて回転成形。底部内面と体部の境界に回転ケ ズリで段を設ける。内面見込みは方形の印文。 釉は灰オリブ色を呈し、底部外面を除いて高 台まで厚く施釉する。	底部から体部約 3/4の破片。 龍泉窯系。
670	4区 D53 BB・BC 攪乱	青磁 鉢	20.0 —	10YR8/2灰 白色。緻密。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がり、口縁部で外 に屈曲して受け口状に端 部が上方に立ち上がる。	回転成形。体部内面に連弁文が退化した放射 状文を施す。内外面に貫入が認められる灰オリ ブ色を呈する釉を厚く施す。	口縁部から体部 の小破片。 龍泉窯系。
671	3区 D42 FQ~FS 耕作溝	施釉陶器 碗	高台 部径 4.4 —	2.5Y7/1灰白 色。緻密。	底部に低く太い高台が付 く。体部は緩やかに外上 方に立ち上がる。	底部はケズリ出し高台。回転ヘラケズリは体 部下端まで及ぶ。体部外面から内面にかけて回 転ナデ成形か。体部外面下端から底部を除いて厚 く黒色の釉を施すが、一部高台まで釉垂れして いる。	底部完存、体部 下半約1/3の破 片。 輸入天目茶碗。

平安時代中期輸入陶磁器(図43・図版76)

436	4区 D43・53 X～B・ E～I 第1面	青磁 碗	高台 部径 6.6 —	10Y6/1灰 色。 緻密。	内面見込みに花文を施す 青磁碗。底部は蛇の目高 台で、体部は外上方に直 線気味に立ち上がる。	底部はケズリ出しで成形し、体部は回転ナデ調 整。釉はオリブ灰色を呈し、内面から底部外 面まで全面に厚く施し、高台面の釉を削り取 る。	底部の破片。高 台外端部に目跡 が付く。 越州窯系。 碗Ⅰ-1類。
437	第1次 D53IN 野寺小路 川		高台 部径 7.4 —	10YR7/4に ぶい黄橙色。 緻密。	底部は蛇の目高台で、体 部は外上方に緩やかに立 ち上がる。	底部はケズリ出し成形。体部は回転成形・ナデ 調整。釉はにぶい黄色を呈し、内面から体部外 面上半部まで施される。	底部から体部約 1/2の破片。底 部内面に目跡が 付く。 越州窯系。 碗Ⅱ-2類。
438	第1次 D53 KM・LM 野寺小路 川	白磁 輪花碗	19.5 (8.0)	7.5Y7/1灰白 色。 緻密。	底部に面取りした方形の 高台が付く。体部は内湾 ぎみに外上方へ緩やかに 立ち上がり、口縁部でや や外反する。口縁端部は 丸くおさめる。切り込み を施して五輪花碗とす る。	底部はケズリ出しで成形。体部から内面は回転 ナデで仕上げる。口縁端部に切り込みを入れ、 体部にも外面から縦の稜線を入れて輪花を表現 する。釉は灰白色を呈し、内面から体部外面お よび高台側面まで厚く施される。	底部から体部下 半の破片と口縁 の破片。 邢窯・定窯系。 碗Ⅰ-2b類。
439	4区 D52 CU・CV DU・DV 井戸2他	褐釉 大型壺	15.2 —	10R6/1赤灰 色。 緻密、白砂を 含む。	大きな球状の体部を呈し 、頸部に向かって窄まる。 口縁は短く立ち上がり、 端部は外側につまみ出 して端面に凹みを作る。	回転成形で、体部内面には轆轤目が細かく残 る。釉はオリブ色を呈し、内外面全体に厚く 施しており、内面は轆轤目のため縞状の文様を 呈する。	体部および口縁 部の破片。輸入 陶器。
730	第1次 D53HM 耕作溝	青磁 合子	— —	5Y6/1灰色。 緻密。	底部から体部にかけて屈 曲し、外上方に立ち上 がる。受け口部から口縁 が直立し、端部は丸くお さめる。	屈曲部から下は回転ヘラケズリ成形後に回転ナ デ調整、体部上半から口縁にかけて回転成形・ 調整。厚い釉を内外面に施すが、受け口外面に は施釉しない。釉は灰オリブ色。	口縁部から体部 の破片。 越州窯系。
731	4区 D43YC 耕作溝	青磁 壺	— —	5Y6/1灰色。 緻密。	内湾して立ち上がる体 部。	回転成形、回転ナデ調整。釉は内外面に施す。 釉は灰オリブ色。	体部破片。 越州窯系。
740	3区 D42 JM～JR 耕作溝	褐釉 壺	— —	5Y7/1灰白 色。 緻密。	体部は緩やかに外上方に 立ち上がる。	回転成形で、内面に轆轤成形痕跡が残る。厚い 褐釉を外面に施し釉垂れするが、下端は青磁釉 を施している。釉は暗褐色で、下端部は灰オ リーブ色。	体部破片。 長沙銅官窯系。
741	第1次 D53JM 包含層		— —	5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に断面台形の 低い高台が取り付け、体 部は高台から外湾ぎみに 外上方に立ち上がる。	底部はケズリ出し成形で、高台端部を面取りす る。体部から内面は回転ナデで、内面には轆轤 成形痕跡が残る。施釉は外面下端と底部外面に 青磁釉を薄く施している。釉は下端部で濃い浅 茶色。	底部破片。 長沙銅官窯系。

転用硯(図44)

469	3区 D42CT 池1	須恵器 蓋	13.0 1.6	5PB5/1青灰 色。 緻密。	平坦な天井部から体部が 外下方に広がる。口縁部 は水平で、端部を下方に 屈曲させて力エリとす る。	天井部は回転ヘラケズリ後にナデ調整。体部か ら口縁部は回転成形・ナデ調整。	口縁から底部ま での小破片。杯 蓋を硯に転用し 、内面に激しい 擦痕が残る。
470	4区 D52 DU・DV 井戸2	須恵器 杯	底部 径.67 —	10YR6/1褐 灰色。 緻密。	平坦な底部から体部が外 上方に立ち上がる。	底部は回転ヘラケズリ後にナデ調整。体部から 口縁部は回転成形・ナデ調整。	底部から体部下 半の破片。杯身 を硯に転用し、 墨も残る。
471	1区 D43BK 井戸1	灰釉陶器 皿	高台 部径 8.0 —	2.5Y7/1灰白 色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部 に、三日月高台が付く。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台 を貼り付け、回転ナデ調整。内面は体部に厚く オリブ灰色を呈する釉が掛かり、底部も刷毛 によって粗く塗掛けする。	底部の破片。高 台を堤として底 部外面を硯に転 用する。
472	3区 D42IS 池1		13.8 2.7	10Y8/1～ N8/灰白色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部 に、短い三日月形の高 台が付く。体部は緩やかに 外上方へ立ち上がり、口 縁部で外反する。口縁端 部は丸くおさめる。	底部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付 け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調 整。釉は灰オリブ色を呈し、体部内外面に塗 掛けする。	底部1/2、口縁 部約1/4の破 片。皿を硯に転 用し、底部内面 に激しい擦痕と 墨が残る。
473	5区 D43 QL・QM RL・RM 野寺小路 川		高台 部径 8.0 —	10Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、外に踏 張った高い高台が付く。 体部は緩やかに立ち上 がる。	底部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付 け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調 整。	底部約1/4の破 片。皿を硯に転 用し、底部内面 に墨痕と共に金 粉が残る。
474	3区 D42FR 池1	灰釉陶器 碗	高台 部径 8.0 —	2.5Y7/1灰白 色。 緻密。	平坦な底部に、高い三日 月高台が付く。体部は緩 やかに立ち上がる。	底部外面は回転ヘラケズリ後に、高台を貼り付 け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ナデ調 整。釉は灰黄色を呈し、体部内外面に薄く塗掛 けする。	底部から体部約 1/2の破片。碗 を硯に転用し、 底部内面に擦痕 と墨が残る。

第5次調査池4出土土器(図46)

475	1区 D53TI	土師器 皿A	12.7 1.4	10YR7/3に ぶい黄橙色。 緻密。	やや丸みを帯びた平底に 屈曲した口縁が立ち上がる。 口縁端部の内側は上方に 肥厚する。	底部外面はオサエ成形後にナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部は横方向のナデ調整。	口縁部を若干欠損するが、ほぼ 完存。
476	2区 D53 SF~UF SG~UG		14.3 1.7	10YR8/2灰 白色。 密、やや軟 質。	やや丸みを帯びた平底に 屈曲した口縁が立ち上がる。 口縁端部の内側は肥 厚する。	底部外面はオサエ成形で、特に端部のオサエを 強調する。内面は丁寧なナデ調整。口縁部から 内面端部にかけては横方向のナデ調整。	約1/4の破片。
477	2区 D53TG		14.7 1.6	2.5YR8/2灰白 色~ 7.5YR7/6橙 色。 密、軟質。	丸みを帯びた底部に屈曲 した口縁が立ち上がる。 口縁端部の内側は肥厚す る。	底部外面はオサエ成形後にナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部から内面端部にかけては横方向のナデ調整。	約1/4の破片。
478	2区 D53TF		14.2 2.0	10YR7/2に ぶい黄橙色。 緻密。	底部は平底で、体部は緩 やかに外上方へ開く。口 縁部は屈曲し、端部内側 の肥厚はやや弱い。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口 縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部 内面の横ナデ調整を施すと共に、底部から体部 の境界を強く押さえる。	約1/4の破片。
479	1区 D53TI	土師器 杯A	14.0 2.2	7.5YR8/4浅 黄橙色。 緻密。	底部は平底で、体部は屈 曲気味に外上方へ開く。 口縁部も屈曲し、端部内 側を肥厚させる。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。体部外面に指側部の圧痕と粘土 継目が残る。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁 部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部内 面の横ナデ調整を施すと共に、底部から体部の 境界を強く押さえる。	ほぼ3/4が残 る。
480	2区 D53TF		13.9 2.2	10YR7/3に ぶい黄橙色。 密、軟質。	丸みを帯びた底部から、 体部は緩やかに外上方へ 開く。口縁部は屈曲し、 端部内側の肥厚はやや弱 い。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 粗いナデ調整。底部内面は丁寧なナデ調整。口 縁部を横方向にナデで成形・調整し、後に体部 内面の横ナデ調整を施す。	約1/3の破片。
481	2区 D53UG		13.8 2.8	10YR7/4に ぶい黄橙色。 緻密。	丸みを帯びた底部から、 体部は緩やかに外上方へ 開く。口縁部は屈曲し、 端部内側を肥厚させる。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、 ナデ調整。底部内面は板状工具による成形の 後、丁寧なナデ調整。口縁部を横方向にナデで 成形・調整し、後に体部内面の横ナデ調整を施 す。	約1/4の破片。
482	1区 D53TI		16.9 3.3	10YR8/3浅 黄橙色。 密、やや軟 質。	底部は平底で、断面台形 の低くひしゃげた高台が 付く。体部は緩やかに外 上方へ開く。口縁部は屈 曲し、端部は内側に肥厚 する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形。体部 には螺旋状の粘土継目が残る。高台は貼り付 け、横ナデ調整。底部内面は板状工具で成形後 に丁寧なナデ調整。口縁部を横にナデで成形・ 調整し、後に体部内面を横ナデ調整、体部と底 部の境界は強く押さえる。	約3/4が残る。
483			20.0 3.7	7.5YR8/3浅 黄橙色。 密、軟質。	底部はやや丸みを帯びた 平底で、低い高台がかす かに表現される。体部は 緩やかに外上方へ開く。 口縁部は屈曲し、端部は 内側に肥厚する。	底部から体部にかけて外面はオサエ成形。高台 は少量の粘土を貼り付けるだけで、ほとんど残 らない。底部内面は丁寧なナデ調整。口縁部を 横にナデで成形・調整し、後に体部内面を横ナ デ調整、体部と底部の境界は強く押さえる。	約1/3の破片。
484	2区 D53TG	灰釉陶器 皿	14.2 3.2	10Y7/1灰白 色。 緻密。	やや丸みを帯びた底部に やや内湾した三日月高台 が付く。体部は浅く緩や かに外上方へ立ち上がり、 口縁部でやや外反する。 口縁端部は丸くおさめ る。	底部から体部外面は回転ヘラケズリ後に、高台 を貼り付け、回転ナデ調整。体部は回転成形・ ナデ調整、口縁部はやや強くナデ調整する。釉 はオリブ灰色を呈し、外面は薄く釉が掛かる が、一方からの火力によって口縁からの釉垂れ が認められる。内面は底部を残して厚く釉が掛 かる。	約1/3の破片。 重ね焼きの痕跡 が内面と高台端 部に残る。
485			14.0 4.7	7.5YR8/2灰白 色。 密、やや軟 質。	底部は断面方形の輪高台 で、体部は内湾しながら 外上方に立ち上がり、口 縁部はやや外反して丸く おさめる。口縁端部外面 に1条の沈線を巡らす。	底部は回転ヘラケズリ調整後に、高台を貼り付 け、回転ナデ調整。体部外面から内面にかけて 回転成形・調整。釉は灰オリブ色を呈し、内 外面全体に淡く施すが、ムラが強く残る。	約1/3の破片。 尾張産。
486	2区 D53TF	緑釉陶器 陰刻花文 椀	高台 部径 7.8 —	10Y7/1灰白 色。 緻密。	底部内面に陰刻花文を持 つ椀。底部は断面方形の 輪高台で、体部は内湾し ながら外上方に立ち上 がる。	底部は回転ヘラケズリ調整後に、高台を貼り付 け、回転ナデ調整。釉はオリブ灰色を呈す る。	底部から体部約 1/4の破片。 尾張産。
487		緑釉陶器 短頸壺	12.2 —	2.5GY8/1灰 白色。 緻密。	耳付きの緑釉短頸壺。肩 部は緩やかに窄まり、口 縁が短く外反気味に立ち 上がる。口縁端部は丸く おさめる。	体部から口縁部は回転成形・ナデ調整。肩部に 耳を貼り付け、ケズリで外面を面取りし、穿孔 は細い棒状工具によって丸く開けられる。釉は オリブ灰色を呈し、内外面に淡く均質に施さ れる。	口縁部から肩部 の破片。 尾張産。
488		須恵器鉢	23.8 —	5YR8/1灰白 色。 密、軟質。	外上方に立ち上がってきた 体部は上位で内方に屈 曲し、玉縁状の口縁部と なる。	体部は回転成形、回転ナデ調整を施す。口縁部 は一度外反させてから、内側に折り曲げて口縁 玉縁を作り出す。	口縁部から体部 の破片。

観察表 3 その他の遺物観察表

硯(図版31)

遺物 番号	地区 遺構	器種 器形	口径 高さ (cm)	色調 胎土	形態・手法の特徴	備考
489	3区 D42ER 池1	須恵器 円面硯	12.4 —	10YR5/1褐 灰色。緻密。	陸部は平らで、回転ヘラケズリ調整。断面逆台形の高い堤部を貼り付け、回転ナデ調整によって海部を作る。体部は回転ナデ調整で、上端には断面三角形の低い突帯を巡らし、縦方向の切れ目を体部に施して透しとする。上部裏面に多量の自然釉が付着しており、上下逆にして焼成されたことがわかる。	陸部には著しい擦痕が認められる。上部約2/3の破片。
490	3区 D42 FS~FU 池1		17.8 —	N6/灰色。 緻密。	陸部は回転ヘラケズリ調整。断面逆台形のやや屈曲した高い堤部を貼り付け、回転ナデ調整によって海部を作る。体部上端には断面三角形の低い突帯と沈線を巡らし、方形透しと縦方向の刻みを装飾として体部に施す。裏面はナデ調整。	陸部は擦痕が激しく、ほとんど調整の痕跡が残らない。上部約1/6の破片。
491	3区 D42GU 池1		— —	10YR5/1褐 灰色。緻密、 白色微砂をや や多く含む。	陸部と堤部は欠損。堤部は低く細い形態だったと考えられ、回転ナデ調整で海部を形成する。体部上端には突出した突帯を貼り付け回転ナデで巡らす。四方に方形透しと、縦方向の3本線による平行刻み・交差刻みの装飾を交互に配する。裏面はナデ調整。	陸部は欠損するが、上半約1/3はほぼ残る。
492	3区 D42 OO・OP 池3		裾部 径 15.4 —	5Y5/1灰色。 緻密、白色微 砂をかなり含 む。	491の脚部破片。裾部で外側に屈曲し、端部を下方に外反させながらつまみ出す。調整は回転ナデで、縦方向の交差刻みの装飾と方形透かしの一部が残る。	脚部約1/6の破片。
493	4区 D52 CU・CV DU・DV 井戸2		— —	7.5Y6/1灰 色。 緻密、白色微 砂をやや多く 含む。	陸部は丸みを帯び、堤部は欠損するが回転ナデ調整によって仕上げ、海部を作る。体部上端には回転ナデ調整による突帯を巡らし突帯下にも凹みが巡る。体部四方に方形透しと、縦方向の3本線による平行刻み・交差刻みの装飾を交互に配する。裏面はナデ調整。	上半約1/3の破片。
494	第1次 D53LM 野寺小路 川	須恵器 猿面硯	— —	7.5YR8/2灰 白色。 緻密、微砂を やや多く含 む。	上面は緩やかに凹み、裏面は船底状を呈する。上面はナデ調整。裏面成形は横方向の縄叩きを施した後にはヘラケズリを施し、側面もヘラケズリで面取りして形を整える。	約1/3の破片。
495	3区 D42 DS・ES 池1		— —	N6/灰色～ 5/灰白色。 緻密、白色微 砂を少量含 む。	上面は緩やかに凹み、裏面は船底状を呈する。上面はナデ調整。裏面はヘラケズリ調整。上面にヘラによる波状の文様を施し擦面とする。	小破片のため形態不明。
496	3区 D42 GQ~GS 耕作溝	須恵器 風字硯	— —	N7/灰白色。 緻密、微砂を やや含む。	風字状の粘土板の縁を上方に折り曲げて堤部とする。堤部外面はヘラケズリで面取りし、上面は粗いナデ調整。横断面円形の脚を裏面に貼り付け、粗いナデ調整して仕上げる。	約1/8の小破片。
497	3区 D42 NP・NQ OP・OQ 耕作溝		— —	10Y6/1灰 色。 緻密、白色微 砂をやや含 む。	風字状の粘土板の縁を上方に低く折り曲げて堤部とする。堤部外面および端面はヘラケズリで丁寧に面取りし、上面は中央部をナデ調整した後には堤部および端部に沿って丁寧なナデ調整。断面長方形の脚を裏面に貼り付け、裏面全体をヘラケズリ調整して仕上げる。	陸部には著しい墨擦痕が認められる。約1/4の破片。
498	3区 D42JT 池1		— —	N5/灰色。 緻密、白色微 砂を少量含 む。	粘土板の縁を上方に低く折り曲げて堤部とする。堤部外面および端面はヘラケズリで丁寧に面取りし、上面は中央部を横方向にヘラケズリした後に堤部に沿って丁寧なナデ調整。断面長方形の脚を裏面に貼り付け、裏面全体をヘラケズリ調整して仕上げる。	端面と堤部の角度から形態は長方形の硯と考えられる。脚部から端面にかけての小破片。
499	3区 D42 JQ・JR 池1	灰釉陶器 風字硯	— —	N7/灰白色。 緻密。	粘土板の縁を上方に低く折り曲げて堤部とする。堤部外面および端面はヘラケズリで丁寧に面取りし、端面には2箇所の切り込みを施して装飾する。上面は縦方向に丁寧なナデ調整。脚を裏面に貼り付け、裏面全体を丁寧にナデ調整して仕上げる。上面および裏面に薄く灰釉が掛かる。	端面部の破片だが、両脚とも欠損する。
500	3区 D42 ES・ET 池1	灰釉陶器 多面硯	— —	N7/灰白色。 緻密。	上面を突帯で区切る多面硯の破片。裏面に厚く自然釉が掛かる。	上面には著しい擦痕が認められる。小破片のため形態不明。
501	3区 D42ER 池1	黒色土器 風字硯	— —	5B3/1暗青灰 色。 緻密、白色微 砂を若干含 む。	薄い粘土板の縁を上方に折り曲げて堤部とする。堤部外面はナデ調整、堤部内面は縦方向のヘラミガキ調整。堤部端面に沈線が走る。上面は横方向の、裏面は縦方向の丁寧なヘラミガキ調整して仕上げる。脚の剥離痕跡が裏面に一部認められる。	小破片だが、堤部の形状から風字硯と考えられる。
502	3区 D42CU 池1		— —	5Y7/1灰白 色。 緻密、白色微 砂を少量含 む。	堤部は裏面から緩やかに立ち上がり端部内側に沈線を巡らす。裏面はヘラケズリ成形後に丁寧な縦ヘラミガキ調整。上面も丁寧に縦ヘラミガキ調整で堤部付近では端部に沿ってヘラミガキ調整を施す。	約1/4の破片。
503	3区 D42 DR・DS 池1	緑釉陶器 風字硯	— —	5Y8/3浅黄 色。 緻密。	粘土板の縁を上方に緩やかに折り曲げて堤部とする。端面は上裏面ともに横ヘラケズリする。上面は端部側で横方向の丁寧なナデ調整、擦面から海部にかけて丁寧な縦ヘラミガキ調整。裏面は縦方向の丁寧なヘラミガキ調整して仕上げる。釉は擦面を残して全面に均質に施釉される。	端部・体部・海堤部の3片に分かれる。無釉の擦面には墨擦痕が明瞭に残る。

その他の遺物（図版31）

504	第1次 D53 AM~LM AN~LN 野寺小路 川	滑石 風字硯	— —	2.5Y6/2灰黄色。	滑石を削って風字硯の形状とする。堤部は低く、削り出した時の擦痕が内側に明瞭に残る。脚は断面長方形の高く長い脚で、根本にやはり削り出した時の擦痕が認められる。	上面中央の擦痕が激しく、磨減り凹んでいる。約1/4の破片。
505	3区 D42GR 池1	滑石 長方硯	— —	5Y5/1灰色。	滑石を削って作り出した長方硯の海部。堤部は緩やかに立ち上がり、端面は平らに仕上げる。	海部に墨痕が明瞭に残る。